高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

前田東・中村遺跡

第１分冊

１９９５.３

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　　前田東・中村遺跡　　正誤表

分冊	頁	行	誤	正
第1分冊	報告書抄録	下から２行目	堀建柱建物群，堀建柱建物群，窯跡，方形周溝墓	掘立柱建物群，窯跡，方形周溝墓
	７０	1	ハケ目状具痕	ハケ目状工具痕
	１２０	1	ＳＤ05（第128・193図）	ＳＤ05（第128・192図）
	２７６	２７	ＳＡ02（第313・314図，図版44・47）	ＳＡ02（第313・314図，図版47）
第2分冊	６６	下から９行目	30～40cm	３～４cm
	８８	9	30～60cm	３～６cm
	３７３ 第744図		第７４４図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（19）（１／２，１／４） 下方10cmのスケールは削除 0　10cm 第744図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（19）（１／２，１／４）	第７４４図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（19）（１／２） 第744図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（19）（１／２）
	３７４ 第745図		第７４５図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（20）（１／２）	第７４５図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（20）（１／２，876・877は１／４）
	３７６ 第747図		第７４７図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（22）（１／４） スケールの単位 10cm 0　10cm 第747図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（22）（１／４）	第７４７図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（22）（１／２） スケールの単位 5cm 0　5cm 第747図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（22）（１／２）
	３９６	第図キャプション	第７６４図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（36）（１／２）	第７６４図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（39）（１／２）
	４３４	5	入骨	人骨

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

前田東・中村遺跡

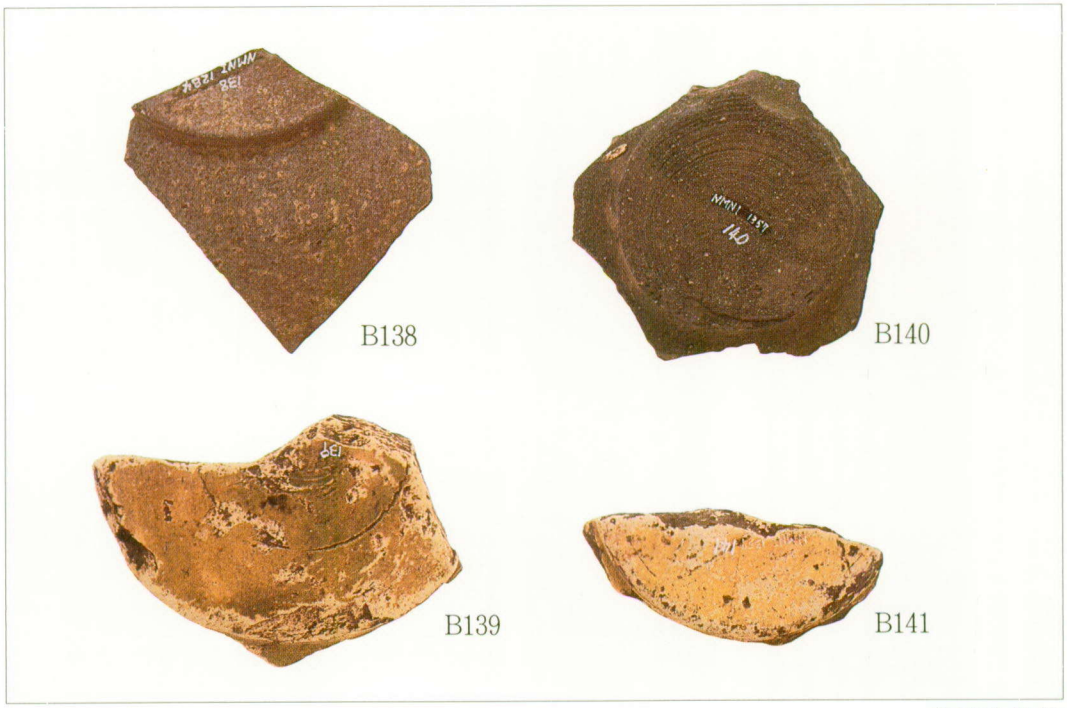
第１分冊

１９９５.３

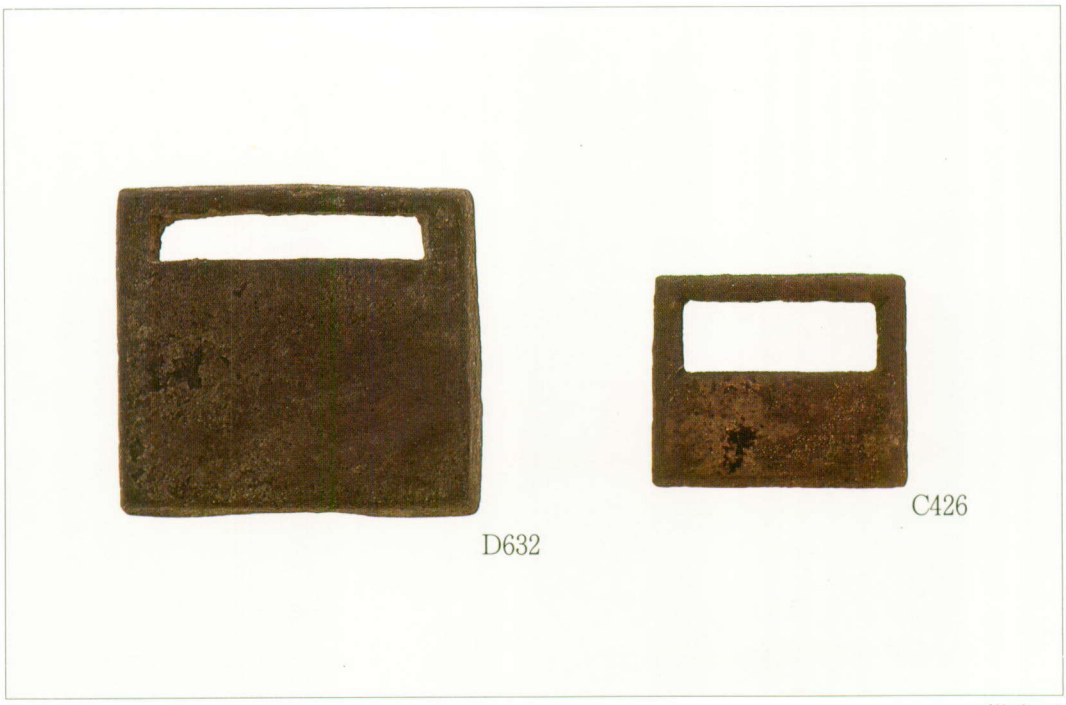
香　川　県　教　育　委　員　会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建　設　省　四　国　地　方　建　設　局

遺跡全景　東から

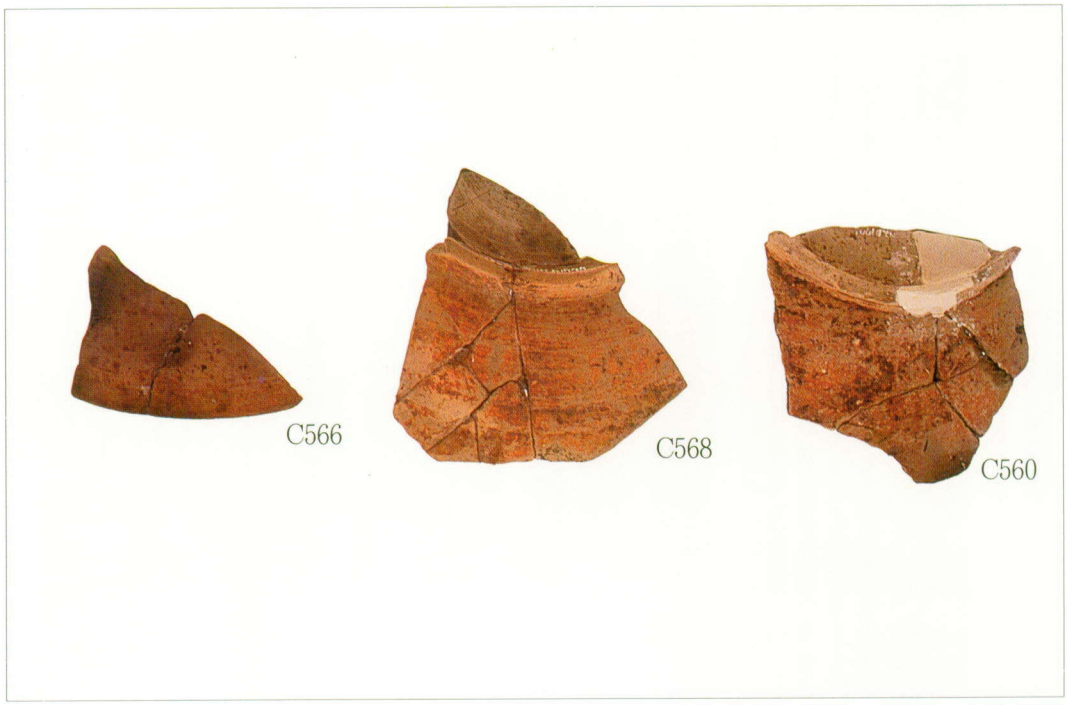
巻頭図版 2



緑釉陶器椀



帯金具



黒色土器Ａ類椀　外面に赤色顔料

木製曲物

巻頭図版 4

C 508

E 771

E 836

E 841

E 206

F 521

F 522

F 592

軒丸瓦

二又鍬

樋

緑釉陶器　椀

土師器　皿

序　　文

香川県では，瀬戸大橋や四国横断自動車道（高松～善通寺）の開通に始まり，現在は県東部の主要幹線道路の整備が進められているところであります。

このような状況のなかで，香川県教育委員会では，高松東道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土遺物の整理研究・報告書刊行の業務を，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施してまいりました。

このたび「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三冊」として刊行いたしますのは，高松平野の東部に位置します高松市前田東町の前田東・中村遺跡についてであります。前田東・中村遺跡の発掘調査は，昭和63年度～平成３年度・平成５年度と５年間にまたがって実施いたしております。これは一つの遺跡の調査といたしましては，香川県で最も長期間にわたるものとなりました。

前田東・中村遺跡では，縄文時代後期，弥生時代後期及び平安時代の土器が多量に出土いたしております。また，これに加えまして斎串や人形をはじめとする木製模造品や軒丸瓦を含む瓦類，帯金具，墨書土器などが出土いたしました。これらの出土遺物は，古代の讃岐の政治や文化を考えるうえで，貴重な資料と言えます。

本報告書が香川県の歴史を考える資料として広く活用されますとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心を深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から報告書の刊行までの間，建設省四国地方建設局及び関係諸期間並びに地元関係各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成７年３月

香川県教育委員会

教育長　田中壮一郎

例　　言

1．本報告書は，高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第３冊であり，香川県高松市前田東町に所在する前田東・中村遺跡（まえだひがし・なかむらいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が建設省四国地方建設局から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，試掘調査を香川県教育委員会事務局文化行政課が昭和63年６月29日～７月８日まで実施し，本調査を昭和63年８月６日～平成元年３月31日，平成元年４月１日～平成２年２月28日，平成２年５月１日～７月31日，平成３年５月８日～11月30日，平成５年４月１日～６月30日まで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。発掘調査の担当は，以下のとおりである。

試掘調査　香川県教育委員会文化行政課　安藤清和

本 調 査　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　鍋井一視・大久保徹也・渡邊茂智・磯崎寛・稲田美穂子・森格也・古野徳久・市村拓二・清水渉・山本健・藤川京子・日下弥生・多田政弘・稲毛裕美・今井由記子

4．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集は，森・古野が担当し，執筆は下記のとおり分担した。

第１章第１節……廣瀬

第１章第２節，第２章第２節，第３章第１節・第５節・第６節・第７節，第５章第１節・第２節・第３節・第４節・第５節……森

第２章第１節，第３章第２節・第３節・第４節……古野

5．報告書の作成にあたっては，下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

田中良之（九州大学），三辻利一（奈良教育大学），前中一晃（花園大学），安田博幸・金杉直子（武庫川女子大学），北條献示（愛知県稲沢市教育委員会），中嶋隆（愛知県小牧市教育委員会），平井美典（滋賀県文化財保護協会），松沢修（滋賀県文化財保護協会），霧生孝弘（香川医科大学），谷山穣（香川大学）

6．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第４系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。

また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝状遺構
ＳＥ　井戸	ＳＦ　窯跡	ＳＨ　竪穴住居跡
ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴	ＳＲ　自然河川
ＳＴ　埋葬遺構	ＳＸ　不明遺構	

7．本遺跡の報告にあたっては，下記の方々に鑑定，分析を依頼し，また玉稿をいただいた。（順不同，敬称略）

縄文土器の胎土分析　三辻利一（奈良教育大学），赤色顔料の分析　安田博幸・金杉直子（武庫川女子大学），人骨鑑定　霧生孝弘（香川医科大学），石材鑑定　谷山穣（香川大学）

8．本書で使用する弥生時代の時期区分は前期：Ⅰ期，中期：Ⅱ～Ⅳ期，後期：Ⅴ期と表記した。

報告書名	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊			
編集	財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター			
発行	香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局			
刊行年月日	平成７年３月31日			
遺跡名	前田東・中村遺跡		まえだひがし・なかむらいせき	
遺跡略号	ＮＭＮ			
所在地	香川県高松市前田東町		かがわけんたかまつしまえだひがしまち	
	目次等	51頁	総頁 1417頁	挿図枚数 893枚
	本文	864頁		
	観察表	636枚		写真枚数 3113枚
	図版	502(巻頭図版5)頁		

時代	遺構	遺物	その他
縄文時代後期	旧河道２　溝３ 土坑１	縄文土器 石器（斧，石棒，鏃など）	自然木
縄文時代晩期	旧河道２　土坑５	土器，石器（斧，鏃など）	
弥生時代中期	方形周溝墓１　旧河道２ 溝２　竪穴住居１　土坑２	弥生土器	自然木
弥生時代後期	旧河道７　竪穴住居１ 柵列１　掘立柱建物２ 溝２０　井戸１ 土坑４	弥生土器 石器（石包丁，斧，鏃など） 木器（鍬，鋤，梯子など）	自然木
古墳時代中期	旧河道１	土師器 木器（斧柄，弓，櫂，木桶鍓，杵，坑，鎌柄，木錘，建築部材など）	木器加工屑，木器用原木
古墳時代後期	土壙墓１　溝１	須恵器	
古代 （奈良・平安）	掘立柱建物３７ 溝４３　井戸１０ 土坑１４　土壙墓１ 旧河道１　柵列７ 窯跡２ 竪穴住居２	須恵器，土師器，緑釉陶器，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦，斎串，人形，帯金具，硯	墨書土器
中世 （鎌倉・室町）	溝１３　竪穴住居１ 旧河道１　井戸１ 掘立柱建物４ 土坑７ 柵列１	土師器，土師質土器，瓦器，亀山焼，東播系須恵質土器，陶磁器（中国産，備前焼） 石製品（塔部材）	
近世 （江戸）	掘立柱建物３ 溝状遺構５ 井戸１	土師質土器，瓦質土器 陶磁器（肥前，瀬戸・美濃）	
注目される遺構	堀立柱建物群，堀立柱建物群，窯跡，方形周溝墓		
注目される遺物	帯金具，軒丸瓦，縄文後期土器，古墳時代木器，斎串，人形，墨書土器		

凡　　例

本報告書の遺物観察表では以下のような省略を行なった。

縄文土器	縄	弥生土器	弥	土師器・土師質土器	土
黒色土器Ａ類	黒Ａ	黒色土器Ｂ類	黒Ｂ	緑釉陶器	緑
瓦器	瓦	須恵器	須	瓦質土器	瓦質
備前焼	備	亀山焼	亀	焼き締め陶器	焼
青磁	青	白磁	白	産地不明近世陶器	陶磁
小型丸底壷	小丸	製塩土器	製塩	はそう	は
高台付き杯	高台杯	高台付き皿	高台皿		

また，胎土の項では以下の基準によって分類を行なった。

微	含まれる鉱物・岩石の径が0.5㎜以下		多	鉱物・岩石を非常に多く含む	
細	〃	0.6～1.0㎜	普	〃	含む
中	〃	1.1～3.0㎜	少	〃	少量含む
粗	〃	4㎜以上			

色調の項では『新版標準土色帳』日本色研事業株式会社を基準とし，その色名を記載した。また内外面の色が異なれば内面から先に記入した。

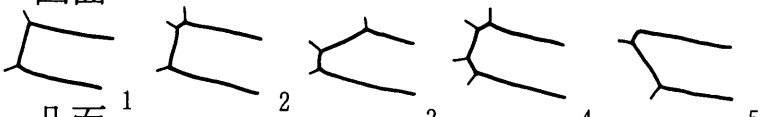
単位は㎝，ｇで統一し，異なる場合はそれぞれ単位を付記した。

瓦の側面と端面の成形は以下のように分類する。

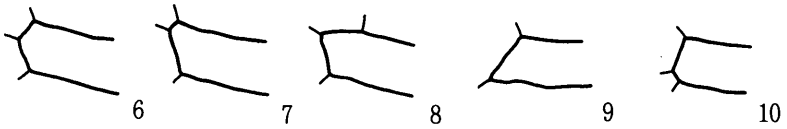
側面

平瓦

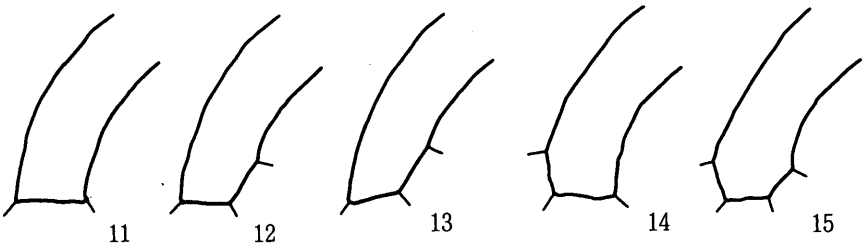
凹面



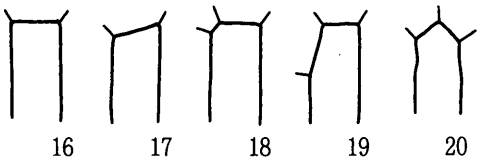
凸面



丸瓦



端面



本 文 目 次

第１分冊

巻頭図版

序文

例言

凡例

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　調査の経過……4

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境……14

第２節　歴史的環境……15

第３章　調査の成果

第１節　Ａ調査区……23

第２節　Ｂ調査区……59

第３節　Ｃ調査区……87

第４節　Ｄ調査区……233

第２分冊

第３章　調査の成果

第５節　Ｅ調査区……5

第６節　Ｆ調査区……151

第７節　Ｇ調査区……239

第４章　自然科学調査の成果

第１節　縄文土器の胎土分析……427

第２節　Ｃ，Ｄ区出土の土器にかかわる赤色顔料物質の微量化学分析……431

第３節　Ａ区ＳＴ03出土人骨の鑑定……434

第５章　まとめ

第１節　前田東・中村遺跡の遺構の変遷……443

第２節　前田東・中村遺跡の弥生時代中期から後期の土器について……457

第3節　山田郡周辺の古代寺院　―前田東・中村遺跡出土瓦と関連して―……473
第4節　前田東・中村遺跡出土の木製模造品をめぐる二，三の問題……489
―― 斎串を中心に ――
第5節　前田東・中村遺跡の平安時代の土器……504
第3分冊
写真図版

挿 図 目 次

第 1 図　高松東道路路線図
第 2 図　調査区割図
第 3 図　周辺の遺跡
第 4 図　A区小調査区割図，基本土層柱状図
第 5 図　A区遺構平面図
第 6 図　A区SD01断面図，出土遺物
第 7 図　A区SK01出土遺物
第 8 図　A区SP01・02出土遺物
第 9 図　A区ST01，SD05平・断面図
第10図　A区ST01出土遺物
第11図　A区ST02平・断面図，出土遺物
第12図　A区SB01平・断面図
第13図　A区SB01，SP03～05出土遺物
第14図　A区SB02平・断面図
第15図　A区SB02，SP06出土遺物
第16図　A区SB03平・断面図
第17図　A区SB04平・断面図
第18図　A区SB04，SP07出土遺物
第19図　A区SB05平・断面図
第20図　A区SB06平・断面図
第21図　A区SB06，SP08出土遺物
第22図　A区SB07平・断面図
第23図　A区SD06断面図，出土遺物
第24図　A区SD07出土遺物
第25図　A区SD08出土遺物
第26図　A区SD09出土遺物
第27図　A区SK02出土遺物
第28図　A区ST03平・断面図

第29図　Ａ区ＳＴ03出土遺物
第30図　Ａ区ＳＡ01平・断面図
第31図　Ａ区ＳＢ08平・断面図
第32図　Ａ区ＳＢ09平・断面図
第33図　Ａ区ＳＤ13断面図，出土遺物
第34図　Ａ区ＳＤ14出土遺物
第35図　Ａ区ＳＥ01平・断面図，遺物出土状況
第36図　Ａ区ＳＥ01出土遺物
第37図　Ａ区ＳＫ05平・断面図
第38図　Ａ区ＳＫ05出土遺物
第39図　Ａ区ＳＨ01，ＳＰ16平・断面図
第40図　Ａ区ＳＰ09～13出土遺物
第41図　Ａ区ＳＢ10平・断面図
第42図　Ａ区ＳＰ14・15出土遺物
第43図　Ａ１区包含層出土遺物
第44図　Ａ２区包含層出土遺物（１）
第45図　Ａ１・２区包含層出土遺物
第46図　Ａ４・５区包含層出土遺物
第47図　Ａ６区包含層出土遺物
第48図　Ａ７区包含層出土遺物（１）
第49図　Ａ８区包含層出土遺物
第50図　Ａ１区西半部下層包含層出土遺物
第51図　Ａ７区包含層出土遺物（２）
第52図　Ａ２区包含層出土遺物（２）
第53図　Ｂ区小調査区割図，基本土層柱状図
第54図　Ｂ区遺構平面図
第55図　Ｂ区ＳＫ01平・断面図
第56図　Ｂ区ＳＫ02平・断面図
第57図　Ｂ区ＳＫ02出土遺物
第58図　Ｂ区ＳＢ01平・断面図

第59図　Ｂ区ＳＢ02平・断面図
第60図　Ｂ区ＳＤ03断面図
第61図　Ｂ区ＳＤ03出土遺物
第62図　Ｂ区ＳＤ04出土遺物
第63図　Ｂ区ＳＤ05出土遺物
第64図　Ｂ区ＳＤ06出土遺物
第65図　Ｂ区ＳＤ07出土遺物（１）
第66図　Ｂ区ＳＤ07出土遺物（２）
第67図　Ｂ区ＳＥ01平・断面図
第68図　Ｂ区ＳＥ01出土遺物（１）
第69図　Ｂ区ＳＥ01出土遺物（２）
第70図　Ｂ区ＳＥ02平・断面図
第71図　Ｂ区ＳＥ02出土遺物
第72図　Ｂ区ＳＫ03出土遺物
第73図　Ｂ区ＳＰ出土遺物（１）
第74図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物
第75図　Ｂ区ＳＢ03平・断面図
第76図　Ｂ区ＳＤ08断面図
第77図　Ｂ区ＳＤ08出土遺物（１）
第78図　Ｂ区ＳＤ08出土遺物（２）
第79図　Ｂ区ＳＫ06平・断面図
第80図　Ｂ区ＳＫ06出土遺物
第81図　Ｂ区ＳＫ07出土遺物
第82図　Ｂ区ＳＰ出土遺物(2)
第83図　Ｂ区ＳＤ09出土遺物
第84図　Ｂ区ＳＸ02出土遺物
第85図　Ｂ区ＳＡ01平・断面図
第86図　Ｂ区包含層出土遺物（１）
第87図　Ｂ区包含層出土遺物（２）
第88図　Ｂ区包含層出土遺物（３）

第 89 図　Ｃ区小調査区割図，基本土層柱状図
第 90 図　Ｃ区遺構平面図
第 91 図　Ｃ区ＳＲ01出土遺物
第 92 図　Ｃ区ＳＲ01土層断面図
第 93 図　Ｃ区ＳＡ01平・断面図
第 94 図　Ｃ区ＳＤ01出土遺物（１）
第 95 図　Ｃ区ＳＤ01遺物出土状況
第 96 図　Ｃ区ＳＤ01出土遺物（２）
第 97 図　Ｃ区ＳＤ02・04出土遺物
第 98 図　Ｃ区ＳＤ03出土遺物
第 99 図　Ｃ区ＳＤ05出土遺物
第100図　Ｃ区ＳＤ06出土遺物（１）
第101図　Ｃ区ＳＤ06遺物出土状況
第102図　Ｃ区ＳＤ06出土遺物（２）
第103図　Ｃ区ＳＤ08出土遺物（１）
第104図　Ｃ区ＳＤ08出土遺物（２）
第105図　Ｃ区ＳＥ01平・断面図
第106図　Ｃ区ＳＥ01遺物出土状況
第107図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（１）
第108図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（２）
第109図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（３）
第110図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（４）
第111図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（５）
第112図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（６）
第113図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（７）
第114図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（８）
第115図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（９）
第116図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（10）
第117図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（11）
第118図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（12）

第119図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（13）
第120図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（14）
第121図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（15）
第122図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（16）
第123図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（17）
第124図　Ｃ区ＳＰ出土遺物（１）
第125図　Ｃ区ＳＡ02平・断面図，出土遺物
第126図　Ｃ区ＳＡ03平・断面図
第127図　Ｃ区ＳＡ04平・断面図
第128図　Ｃ区ＳＡ05（上）・ＳＡ06（下）平・断面図
第129図　Ｃ区ＳＢ01平・断面図
第130図　Ｃ区ＳＢ02平・断面図
第131図　Ｃ区ＳＢ03平・断面図
第132図　Ｃ区ＳＢ04平・断面図
第133図　Ｃ区ＳＢ04出土遺物
第134図　Ｃ区ＳＢ05平・断面図
第135図　Ｃ区ＳＢ06平・断面図
第136図　Ｃ区ＳＢ07平・断面図
第137図　Ｃ区ＳＡ06，ＳＢ06出土遺物
第138図　Ｃ区ＳＢ08平・断面図
第139図　Ｃ区ＳＢ09平・断面図
第140図　Ｃ区ＳＢ10（上）・ＳＢ13（下）平・断面図
第141図　Ｃ区ＳＤ09断面図
第142図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（１）
第143図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（２）
第144図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（３）
第145図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（４）
第146図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（５）
第147図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（６）
第148図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（７）

第149図　C区SD09出土遺物（8）
第150図　C区SD09出土遺物（9）
第151図　C区SD09出土遺物（10）
第152図　C区SD09出土遺物（11）
第153図　C区SD09出土遺物（12）
第154図　C区SD09出土遺物（13）
第155図　C区SD09出土遺物（14）
第156図　C区SD09出土遺物（15）
第157図　C区SD09出土遺物（16）
第158図　C区SD09出土遺物（17）
第159図　C区SD09出土遺物（18）
第160図　C区SD09出土遺物（19）
第161図　C区SD09出土遺物（20）
第162図　C区SD09出土遺物（21）
第163図　C区SD09出土遺物（22）
第164図　C区SD09出土遺物（23）
第165図　C区SD09出土遺物（24）
第166図　C区SD09出土遺物（25）
第167図　C区SD09出土遺物（26）
第168図　C区SD09出土遺物（27）
第169図　C区SD09出土遺物（28）
第170図　C区SD09出土遺物（29）
第171図　C区SD09出土遺物（30）
第172図　C区SD09出土遺物（31）
第173図　C区SD09出土遺物（32）
第174図　C区SD09出土遺物（33）
第175図　C区SD09出土遺物（34）
第176図　C区SD09出土遺物（35）
第177図　C区SD09出土遺物（36）
第178図　C区SD09出土遺物（37）

第179図　C区SD09出土遺物（38）
第180図　C区SD09出土遺物（39）
第181図　C区SE02・03平面図
第182図　C区SE02平・断面図
第183図　C区SE02出土遺物
第184図　C区SE03平・断面図
第185図　C区SE03出土遺物（1）
第186図　C区SE03出土遺物（2）
第187図　C区SE04平・断面図
第188図　C区SE04出土遺物（1）
第189図　C区SE04出土遺物（2）
第190図　C区SE04出土遺物（3）
第191図　C区SE04出土遺物（4）
第192図　C区SP出土遺物（2）
第193図　C区SB11出土遺物
第194図　C区SB11平・断面図
第195図　C区SB12平・断面図
第196図　C区SK01平・断面図
第197図　C区SK01出土遺物
第198図　C区SX01平・断面図
第199図　C区SX01出土遺物（1）
第200図　C区SX01出土遺物（2）
第201図　C区SX01出土遺物（3）
第202図　C区SX01出土遺物（4）
第203図　C区SR02最北部土層図
第204図　C区SR02南部土層図
第205図　C区SR02出土遺物（1）
第206図　C区SR02遺物出土状況
第207図　C区SR02出土遺物（2）
第208図　C区SR02出土遺物（3）

第209図　C区SR02出土遺物（4）
第210図　C区SR02出土遺物（5）
第211図　C区SR02出土遺物（6）
第212図　C区SR02出土遺物（7）
第213図　C区SR02出土遺物（8）
第214図　C区SR02出土遺物（9）
第215図　C区SR02出土遺物（10）
第216図　C区SR02出土遺物（11）
第217図　C区SR02出土遺物（12）
第218図　C区SR02出土遺物（13）
第219図　C区SR02出土遺物（14）
第220図　C区SR02出土遺物（15）
第221図　C区SR02出土遺物（16）
第222図　C区SR02出土遺物（17）
第223図　C区SR02出土遺物（18）
第224図　C区SR02出土遺物（19）
第225図　C区SR02出土遺物（20）
第226図　C区SR02出土遺物（21）
第227図　C区SR02出土遺物（22）
第228図　C区SR02出土遺物（23）
第229図　C1区包含層出土遺物（1）
第230図　C1区包含層出土遺物（2）
第231図　C1・2区包含層出土遺物
第232図　C2区包含層出土遺物（1）
第233図　C2区包含層出土遺物（2）
第234図　C2区包含層出土遺物（3）
第235図　C3区包含層出土遺物（1）
第236図　C3区包含層出土遺物（2）
第237図　C4区包含層出土遺物
第238図　C5区包含層出土遺物（1）

第239図　Ｃ５区包含層出土遺物（２）
第240図　Ｃ５区包含層出土遺物（３）
第241図　Ｃ５区包含層出土遺物（４）
第242図　Ｃ５区包含層出土遺物（５）
第243図　Ｃ５区包含層出土遺物（６）
第244図　Ｃ区包含層出土遺物（１）
第245図　Ｃ区包含層出土遺物（２）
第246図　Ｄ区小調査区割図，基本土層柱状図
第247－１図　Ｄ区第１・２面遺構平面図
第247－２図　Ｄ区第３面遺構平面図
第248図　Ｄ区ＳＤ01出土遺物（１）
第249図　Ｄ区ＳＤ01断面図，遺物出土状況
第250図　Ｄ区ＳＤ01出土遺物（２）
第251図　Ｄ区ＳＤ01出土遺物（３）
第252図　Ｄ区ＳＤ01出土遺物（４）
第253図　Ｄ区ＳＤ02断面図
第254図　Ｄ区ＳＤ02遺物出土状況
第255図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（１）
第256図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（２）
第257図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（３）
第258図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（４）
第259図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（５）
第260図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（６）
第261図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（７）
第262図　Ｄ区ＳＤ03断面図
第263図　Ｄ区ＳＤ03出土遺物（１）
第264図　Ｄ区ＳＤ03出土遺物（２）
第265図　Ｄ区ＳＤ04出土遺物
第266図　Ｄ区ＳＤ06・07出土遺物
第267図　Ｄ区ＳＫ01平・断面図

第268図　Ｄ区ＳＡ01平・断面図
第269図　Ｄ区ＳＡ01出土遺物
第270図　Ｄ区ＳＢ01出土遺物
第271図　Ｄ区ＳＢ01平・断面図
第272図　Ｄ区ＳＢ02平・断面図
第273図　Ｄ区ＳＢ03出土遺物
第274図　Ｄ区ＳＢ03平・断面図
第275図　Ｄ区ＳＢ04平・断面図
第276図　Ｄ区ＳＢ05平・断面図
第277図　Ｄ区ＳＢ05出土遺物
第278図　Ｄ区ＳＢ06出土遺物
第279図　Ｄ区ＳＢ06平・断面図
第280図　Ｄ区ＳＤ08断面図
第281図　Ｄ区ＳＤ09断面図
第282図　Ｄ区ＳＤ09出土遺物
第283図　Ｄ区ＳＤ10断面図
第284図　Ｄ区ＳＤ11断面図，出土遺物
第285図　Ｄ区ＳＤ12出土遺物
第286図　Ｄ区ＳＤ13断面図，出土遺物
第287図　Ｄ区ＳＫ02断面図
第288図　Ｄ区ＳＫ03断面図
第289図　Ｄ区ＳＫ04出土遺物
第290図　Ｄ区ＳＫ05断面図
第291図　Ｄ区ＳＫ05出土遺物
第292図　Ｄ区ＳＫ06断面図
第293図　Ｄ区ＳＰ出土遺物
第294図　Ｄ区ＳＢ07平・断面図
第295図　Ｄ区ＳＢ07出土遺物
第296図　Ｄ区ＳＤ14出土遺物（１）
第297図　Ｄ区ＳＤ14出土遺物（２）

第298図　Ｄ区ＳＤ15出土遺物
第299図　Ｄ区ＳＤ16断面図
第300図　Ｄ区ＳＤ16出土遺物（１）
第301図　Ｄ区ＳＤ16出土遺物（２）
第302図　Ｄ区ＳＤ17断面図，出土遺物
第303図　Ｄ区ＳＤ18出土遺物（１）
第304図　Ｄ区ＳＤ18石塔部材出土状況
第305図　Ｄ区ＳＤ18出土遺物（２）
第306図　Ｄ区ＳＤ18出土遺物（３）
第307図　Ｄ区ＳＤ19石組み遺構検出状況，断面図
第308図　Ｄ区ＳＤ19出土遺物
第309図　Ｄ区ＳＤ20出土遺物
第310図　Ｄ区ＳＤ21出土遺物
第311図　Ｄ区ＳＫ07出土遺物（１）
第312図　Ｄ区ＳＫ07出土遺物（２）
第313図　Ｄ区ＳＡ02平・断面図
第314図　Ｄ区ＳＡ02出土遺物
第315図　Ｄ区ＳＫ08平・断面図
第316図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物
第317図　Ｄ区ＳＲ01断面図
第318図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（１）
第319図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（２）
第320図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（３）
第321図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（４）
第322図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（５）
第323図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（６）
第324図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（７）
第325図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（８）
第326図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（９）
第327図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（10）

第328図　D区SR01出土遺物（11）
第329図　D区SR01出土遺物（12）
第330図　D区SR01出土遺物（13）
第331図　D区SR01出土遺物（14）
第332図　D区SR01出土遺物（15）
第333図　D区SR01出土遺物（16）
第334図　D区SR01出土遺物（17）
第335図　D区SR01出土遺物（18）
第336図　D区SR01出土遺物（19）
第337図　D区SR01出土遺物（20）
第338図　D区SR01出土遺物（21）
第339図　D区SR01出土遺物（22）
第340図　D区SR01出土遺物（23）
第341図　D区SR01出土遺物（24）
第342図　D区SR01出土遺物（25）
第343図　D区SR02断面図
第344図　D区SR02出土遺物（1）
第345図　D区SR02出土遺物（2）
第346図　D区SR02出土遺物（3）
第347図　D区SR02出土遺物（4）
第348図　D区SR02出土遺物（5）
第349図　D区SR02出土遺物（6）
第350図　D区SR02出土遺物（7）
第351図　D区SR02出土遺物（8）
第352図　D区SR02出土遺物（9）
第353図　D区SR02出土遺物（10）
第354図　D区SR02出土遺物（11）
第355図　D区SR02出土遺物（12）
第356図　D区SR02出土遺物（13）
第357図　D区SR02出土遺物（14）

第358図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（15）
第359図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（16）
第360図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（17）
第361図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（18）
第362図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（19）
第363図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（20）
第364図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（21）
第365図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（22）
第366図　Ｄ区ＳＲ02出土遺物（23）
第367図　Ｄ１区包含層出土遺物（１）
第368図　Ｄ１区包含層出土遺物（２）
第369図　Ｄ１区包含層出土遺物（３）
第370図　Ｄ１区包含層出土遺物（４）
第371図　Ｄ１区包含層出土遺物（５）
第372図　Ｄ１区包含層出土遺物（６）
第373図　Ｄ１区包含層出土遺物（７）
第374図　Ｄ２区包含層出土遺物（１）
第375図　Ｄ２区包含層出土遺物（２）
第376図　Ｄ２区包含層出土遺物（３）
第377図　Ｄ２区包含層出土遺物（４）
第378図　Ｄ２区包含層出土遺物（５）
第379図　Ｄ２区包含層出土遺物（６）
第380図　Ｄ２区包含層出土遺物（７）
第381図　Ｄ２区包含層出土遺物（８）
第382図　Ｄ２区包含層出土遺物（９）
第383図　Ｄ２区包含層出土遺物（10）
第384図　Ｄ２区包含層出土遺物（11）
第385図　Ｄ２区包含層出土遺物（12）
第386図　Ｄ２区包含層出土遺物（13）
第387図　Ｄ２区包含層出土遺物（14）

第388図　Ｄ２区包含層出土遺物（15）
第389図　Ｄ２区包含層出土遺物（16）
第390図　Ｄ２区包含層出土遺物（17）
第391図　Ｄ３区包含層出土遺物（１）
第392図　Ｄ３区包含層出土遺物（２）
第393図　Ｄ３区包含層出土遺物（３）
第394図　Ｄ５区包含層出土遺物（１）
第395図　Ｄ３・５区包含層出土遺物
第396図　Ｄ５区包含層出土遺物（２）
第397図　Ｄ区包含層出土遺物
第398図　Ｅ区小調査区割図，基本土層柱状図
第399図　Ｅ区遺構平面図
第400図　Ｅ区ＳＢ01平・断面図
第401図　Ｅ区ＳＢ02平・断面図，ＳＰ01出土遺物
第402図　Ｅ区ＳＤ01断面図
第403図　Ｅ区ＳＤ01下層出土遺物（１）
第404図　Ｅ区ＳＤ01下層出土遺物（２）
第405図　Ｅ区ＳＤ01上層出土遺物
第406図　Ｅ区ＳＤ02断面図
第407図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（１）
第408図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（２）
第409図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（３）
第410図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（４）
第411図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（５）
第412図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（６）
第413図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（７）
第414図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（８）
第415図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（９）
第416図　Ｅ区ＳＤ03断面図
第417図　Ｅ区ＳＤ03出土遺物

第418図　E区SD04出土遺物
第419図　E区SD05・06断面図
第420図　E区SH01出土遺物
第421図　E区SH01平・断面図
第422図　E区SK01平・断面図，出土遺物
第423図　E区SX01断面図
第424図　E区SX01出土遺物
第425図　E区SD07出土遺物
第426図　E区SD07平・断面図
第427図　E区SB03平・断面図
第428図　E区SB03，SP02出土遺物
第429図　E区SB04平・断面図，SP03出土遺物
第430図　E区SB05平・断面図
第431図　E区SB06平・断面図
第432図　E区SB07平・断面図，SP04出土遺物
第433図　E区SA01，SB08平・断面図
第434図　E区SB09平・断面図
第435図　E区SB10平・断面図，SP05出土遺物
第436図　E区SB11平・断面図，SP06出土遺物
第437図　E区SB12平・断面図
第438図　E区SB13平・断面図，SP07出土遺物
第439図　E区SB14平・断面図，SP08出土遺物
第440図　E区SD08出土遺物
第441図　E区SD09断面図，出土遺物
第442図　E区SD10出土遺物
第443図　E区SD11出土遺物
第444図　E区SD13断面図
第445図　E区SD13出土遺物
第446図　E区SD14出土遺物
第447図　E区SD15断面図

第448図　Ｅ区ＳＤ16断面図
第449図　Ｅ区ＳＤ16出土遺物（１）
第450図　Ｅ区ＳＤ16出土遺物（２）
第451図　Ｅ区ＳＤ17・18出土遺物
第452図　Ｅ区ＳＤ19断面図
第453図　Ｅ区ＳＤ19遺物出土状況
第454図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（１）
第455図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（２）
第456図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（３）
第457図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（４）
第458図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（５）
第459図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（６）
第460図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（７）
第461図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（８）
第462図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（９）
第463図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（10）
第464図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（11）
第465図　Ｅ区ＳＤ19出土遺物（12）
第466図　Ｅ区ＳＤ19，ＳＥ03・04交点部分出土遺物
第467図　Ｅ区ＳＤ20出土遺物
第468図　Ｅ区ＳＥ01平・断面図，井戸枠立面図
第469図　Ｅ区ＳＥ01出土遺物（１）
第470図　Ｅ区ＳＥ01出土遺物（２）
第471図　Ｅ区ＳＥ01出土遺物（３）
第472図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠模式図
第473図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠（１）
第474図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠（２）
第475図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠（３）
第476図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠（４）
第477図　Ｅ区ＳＥ01井戸枠（５）

第478図　E区SE01井戸枠（6）
第479図　E区SE02平・断面図，出土遺物（1）
第480図　E区SE02出土遺物（2）
第481図　E区SE03平・断面図，井戸枠・
石組立面図，南側板裏側立面図
第482図　E区SE03井戸枠内出土遺物（1）
第483図　E区SE03井戸枠内出土遺物（2）
第484図　E区SE03井戸枠模式図
第485図　E区SE03井戸枠（1）
第486図　E区SE03井戸枠（2）
第487図　E区SE03井戸枠（3）
第488図　E区SE03井戸枠（4）
第489図　E区SE03出土遺物（1）
第490図　E区SE03出土遺物（2）
第491図　E区SE03出土遺物（3）
第492図　E区SE03出土遺物（4）
第493図　E区SE03出土遺物（5）
第494図　E区SE03・04平・断面図
第495図　E区SE04出土遺物（1）
第496図　E区SE04出土遺物（2）
第497図　E区SE04出土遺物（3）
第498図　E区SF01平・断面図
第499図　E区SH02・03平・断面図
第500図　E区SH02出土遺物
第501図　E区SH03出土遺物
第502図　E区SK02平・断面図
第503図　E区SK02出土遺物
第504図　E区SK03平・断面図，出土遺物
第505図　E区SK04平・断面図，遺物出土状況
第506図　E区SK04出土遺物（1）

第507図　Ｅ区ＳＫ04出土遺物（２）
第508図　Ｅ区ＳＫ05平・断面図，遺物出土状況，出土遺物
第509図　Ｅ区ＳＸ02平・断面図
第510図　Ｅ区ＳＸ02出土遺物
第511図　Ｅ区ＳＸ03出土遺物
第512図　Ｅ区ＳＤ21断面図，出土遺物
第513図　Ｅ区ＳＤ23断面図，出土遺物
第514図　Ｅ区ＳＤ24出土遺物
第515図　Ｅ区ＳＤ25出土遺物
第516図　Ｅ区ＳＸ04平・断面図
第517図　Ｅ区ＳＸ04出土遺物
第518図　Ｅ区ＳＢ15平・断面図
第519図　Ｅ区ＳＢ16平・断面図
第520図　Ｅ２区包含層出土遺物（１）
第521図　Ｅ２区包含層出土遺物（２）
第522図　Ｅ２区包含層出土遺物（３）
第523図　Ｅ２区包含層出土遺物（４）
第524図　Ｅ５区包含層出土遺物（１）
第525図　Ｅ５区包含層出土遺物（２）
第526図　Ｅ５区包含層出土遺物（３）
第527図　Ｅ６区包含層出土遺物
第528図　Ｅ７区包含層出土遺物（１）
第529図　Ｅ７区包含層出土遺物（２）
第530図　Ｅ７区包含層出土遺物（３）
第531図　Ｅ８区包含層出土遺物（１）
第532図　Ｅ８区包含層出土遺物（２）
第533図　Ｅ８区包含層出土遺物（３）
第534図　Ｅ８区包含層出土遺物（４）
第535図　Ｅ８区包含層出土遺物（５）
第536図　Ｅ８区包含層出土遺物（６）

第537図　Ｅ８区包含層出土遺物（７）
第538図　Ｅ８区包含層出土遺物（８）
第539図　Ｅ８区包含層出土遺物（９）
第540図　Ｅ８区包含層出土遺物（10）
第541図　Ｅ８区包含層瓦溜り位置図，遺物出土状況・断面図
第542図　Ｅ８区包含層出土遺物（11）
第543図　Ｆ区小調査区割図，基本土層柱状図
第544図　Ｆ区遺構平面図
第545図　Ｆ区ＳＫ01平・断面図，出土遺物
第546図　Ｆ区ＳＫ02平・断面図，出土遺物
第547図　Ｆ区ＳＫ03平・断面図，出土遺物
第548図　Ｆ区ＳＰ01・02出土遺物
第549図　Ｆ区ＳＨ01平・断面図
第550図　Ｆ区ＳＨ01出土遺物
第551図　Ｆ区ＳＫ06平・断面図，出土遺物
第552図　Ｆ区ＳＫ07平・断面図，遺物出土状況
第553図　Ｆ区ＳＫ07出土遺物（１）
第554図　Ｆ区ＳＫ07出土遺物（２）
第555図　Ｆ区ＳＰ03・04出土遺物
第556図　Ｆ区ＳＲ01遺物平面分布図，垂直分布図
第557図　Ｆ区ＳＲ01断面図
第558図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（１）
第559図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（２）
第560図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（３）
第561図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（４）
第562図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（５）
第563図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（６）
第564図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（７）
第565図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（８）
第566図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（９）

第567図　F区SR01出土遺物（10）
第568図　F区SR01出土遺物（11）
第569図　F区SR01出土遺物（12）
第570図　F区SR01出土遺物（13）
第571図　F区SR01出土遺物（14）
第572図　F区SR01出土遺物（15）
第573図　F区SR01出土遺物（16）
第574図　F区SR01出土遺物（17）
第575図　F区SR01出土遺物（18）
第576図　F区SR01出土遺物（19）
第577図　F区SR01出土遺物（20）
第578図　F区SR01出土遺物（21）
第579図　F区SR01出土遺物（22）
第580図　F区SR01出土遺物（23）
第581図　F区SR01出土遺物（24）
第582図　F区SR01出土遺物（25）
第583図　F区SR01出土遺物（26）
第584図　F区SR01出土遺物（27）
第585図　F区SR01出土遺物（28）
第586図　F区SR01出土遺物（29）
第587図　F区SR01出土遺物（30）
第588図　F区SR01出土遺物（31）
第589図　F区SR01出土遺物（32）
第590図　F区SR01出土遺物（33）
第591図　F区SR01出土遺物（34）
第592図　F区SR01出土遺物（35）
第593図　F区SR01出土遺物（36）
第594図　F区SR01出土遺物（37）
第595図　F区SR01出土遺物（38）
第596図　F区SR01出土遺物（39）

第597図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（40）
第598図　Ｆ区ＳＲ01出土遺物（41）
第599図　Ｆ区ＳＢ01平・断面図
第600図　Ｆ区ＳＤ02出土遺物
第601図　Ｆ区ＳＤ03平面図，出土遺物
第602図　Ｆ区ＳＤ04断面図，出土遺物
第603図　Ｆ区ＳＤ05断面図
第604図　Ｆ区ＳＤ05出土遺物
第605図　Ｆ区ＳＤ06断面図，出土遺物
第606図　Ｆ区ＳＤ07出土遺物
第607図　Ｆ区ＳＤ08出土遺物
第608図　Ｆ区ＳＥ01平・断面図，遺物出土状況，出土遺物
第609図　Ｆ区ＳＦ01平・断面図
第610図　Ｆ区ＳＦ01出土遺物
第611図　Ｆ区ＳＫ08平・断面図
第612図　Ｆ区ＳＸ01平・断面図
第613図　Ｆ区ＳＸ01出土遺物
第614図　Ｆ区ＳＸ02平・断面図
第615図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（１）
第616図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（２）
第617図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（３）
第618図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（４）
第619図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（５）
第620図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（６）
第621図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（７）
第622図　Ｆ区ＳＸ02出土遺物（８）
第623図　Ｆ区ＳＢ02平・断面図，ＳＰ05出土遺物
第624図　Ｆ区ＳＤ09出土遺物
第625図　Ｆ区ＳＸ03出土遺物
第626図　Ｆ１・２区包含層出土遺物

第627図　Ｆ３区包含層出土遺物（１）
第628図　Ｆ３区包含層出土遺物（２）
第629図　Ｆ３区包含層出土遺物（３）
第630図　Ｆ３区包含層出土遺物（４）
第631図　Ｆ３・４区包含層出土遺物
第632図　Ｇ区小調査区割図，基本土層柱状図
第633図　Ｇ区遺構平面図
第634図　Ｇ区南壁断面図
第635図　Ｇ区ＳＲ01断面図
第636図　Ｇ区ＳＲ01出土遺物
第637図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（１）
第638図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（２）
第639図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（３）
第640図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（４）
第641図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（５）
第642図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（６）
第643図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（７）
第644図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（８）
第645図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（９）
第646図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（10）
第647図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（11）
第648図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（12）
第649図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（13）
第650図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（14）
第651図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（15）
第652図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（16）
第653図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（17）
第654図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（18）
第655図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（19）
第656図　Ｇ区ＳＲ02出土遺物（20）

第657図　G区SR02出土遺物（21）
第658図　G区SR02出土遺物（22）
第659図　G区SR02出土遺物（23）
第660図　G区SR02出土遺物（24）
第661図　G区SR02出土遺物（25）
第662図　G区SR02出土遺物（26）
第663図　G区SR02出土遺物（27）
第664図　G区SR02出土遺物（28）
第665図　G区SR02出土遺物（29）
第666図　G区SR02出土遺物（30）
第667図　G区SR02出土遺物（31）
第668図　G区SR02出土遺物（32）
第669図　G区SR02出土遺物（33）
第670図　G区SR02出土遺物（34）
第671図　G区SR02出土遺物（35）
第672図　G区SR02出土遺物（36）
第673図　G区SR02出土遺物（37）
第674図　G区SR02出土遺物（38）
第675図　G区SR02出土遺物（39）
第676図　G区SR02出土遺物（40）
第677図　G区SR02出土遺物（41）
第678図　G区SR02出土遺物（42）
第679図　G区SR02出土遺物（43）
第680図　G区SR02出土遺物（44）
第681図　G区SR02出土遺物（45）
第682図　G区SR02出土遺物（46）
第683図　G区SR02出土遺物（47）
第684図　G区SR02出土遺物（48）
第685図　G区SR02出土遺物（49）
第686図　G区SR02出土遺物（50）

第687図　G区SR02出土遺物（51）
第688図　G区SR02出土遺物（52）
第689図　G区SR02出土遺物（53）
第690図　G区SR02出土遺物（54）
第691図　G区SR02出土遺物（55）
第692図　G区SR02出土遺物（56）
第693図　G区SR02出土遺物（57）
第694図　G区SR02出土遺物（58）
第695図　G区SR02出土遺物（59）
第696図　G区SR02出土遺物（60）
第697図　G区SR02出土遺物（61）
第698図　G区SR02出土遺物（62）
第699図　G区SR02出土遺物（63）
第700図　G区SR02出土遺物（64）
第701図　G区SR02出土遺物（65）
第702図　G区SR02出土遺物（66）
第703図　G区SR02出土遺物（67）
第704図　G区SR02出土遺物（68）
第705図　G区SR02出土遺物（69）
第706図　G区SR02出土遺物（70）
第707図　G区SR02出土遺物（71）
第708図　G区SR02出土遺物（72）
第709図　G区SR02出土遺物（73）
第710図　G区SR02出土遺物（74）
第711図　G区SR02出土遺物（75）
第712図　G区SR02出土遺物（76）
第713図　G区SR02出土遺物（77）
第714図　G区SR02出土遺物（78）
第715図　G区SR02・03断面図
第716図　G区SR03出土遺物（1）

第717図　G区SR03出土遺物（2）
第718図　G区SR03出土遺物（3）
第719図　G区SR03出土遺物（4）
第720図　G区SR03出土遺物（5）
第721図　G区SR03出土遺物（6）
第722図　G区SR04断面図（1）
第723図　G区SR04断面図（2）
第724図　G区SR04北半部斎串・人形出土位置図
第725図　G区SR04斎串垂直分布図
第726図　G区SR04出土遺物（1）
第727図　G区SR04出土遺物（2）
第728図　G区SR04出土遺物（3）
第729図　G区SR04出土遺物（4）
第730図　G区SR04出土遺物（5）
第731図　G区SR04出土遺物（6）
第732図　G区SR04出土遺物（7）
第733図　G区SR04出土遺物（8）
第734図　G区SR04出土遺物（9）
第735図　G区SR04出土遺物（10）
第736図　G区SR04出土遺物（11）
第737図　G区SR04出土遺物（12）
第738図　G区SR04出土遺物（13）
第739図　G区SR04出土遺物（14）
第740図　G区SR04出土遺物（15）
第741図　G区SR04出土遺物（16）
第742図　G区SR04出土遺物（17）
第743図　G区SR04出土遺物（18）
第744図　G区SR04出土遺物（19）
第745図　G区SR04出土遺物（20）
第746図　G区SR04出土遺物（21）

第747図　G区SR04出土遺物（22）
第748図　G区SR04出土遺物（23）
第749図　G区SR04出土遺物（24）
第750図　G区SR04出土遺物（25）
第751図　G区SR04出土遺物（26）
第752図　G区SR04出土遺物（27）
第753図　G区SR04出土遺物（28）
第754図　G区SR04出土遺物（29）
第755図　G区SR04出土遺物（30）
第756図　G区SR04出土遺物（31）
第757図　G区SR04出土遺物（32）
第758図　G区SR04出土遺物（33）
第759図　G区SR04出土遺物（34）
第760図　G区SR04出土遺物（35）
第761図　G区SR04出土遺物（36）
第762図　G区SR04出土遺物（37）
第763図　G区SR04出土遺物（38）
第764図　G区SR04出土遺物（39）
第765図　G区SR04出土遺物（40）
第766図　G区SR04出土遺物（41）
第767図　G区SR04出土遺物（42）
第768図　G区SR04出土遺物（43）
第769図　G区SR04出土遺物（44）
第770図　G区SR04出土遺物（45）
第771図　G区SR04出土遺物（46）
第772図　G区SR04出土遺物（47）
第773図　G区SR04出土遺物（48）
第774図　G区SR04出土遺物（49）
第775図　G区SR04出土遺物（50）
第776図　G区SR04出土遺物（51）

第777図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（52）
第778図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（53）
第779図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（54）
第780図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（55）
第781図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（56）
第782図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（57）
第783図　Ｇ区ＳＲ04出土遺物（58）
第784図　Ｇ区ＳＲ05断面図
第785図　Ｇ区ＳＲ04～05出土遺物（１）
第786図　Ｇ区ＳＲ04～05出土遺物（２）
第787図　Ｇ区ＳＲ05出土遺物
第788図　Ｇ区ＳＲ04～05・05出土遺物
第789図　Ｇ１区包含層出土遺物
第790図　Ｇ２区包含層出土遺物（１）
第791図　Ｇ２区包含層出土遺物（２）
第792図　Ｇ２区包含層出土遺物（３）
第793図　前田東・中村遺跡出土縄文土器のＲｂ－Ｓｒ分布図
第794図　前田東・中村遺跡出土縄文土器のクラスター分析
（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子使用）
第795図　遺構変遷図（１）
第796図　遺構変遷図（２）
第797図　遺構変遷図（３）
第798図　遺構変遷図（４）
第799図　遺構変遷図（５）
第800図　矢ノ塚遺跡ＳＤ85031出土遺物
第801図　末則古墳墳裾南西部ピット出土遺物
第802図　久米池南遺跡第３号竪穴住居出土遺物
第803図　久米池南遺跡第２号テラス状遺構出土遺物（１）
第804図　久米池南遺跡第２号テラス状遺構出土遺物（２）
第805図　末則古墳中世墳墓北端ピット出土遺物

第806図　一の谷遺跡大型土坑出土遺物（1）
第807図　一の谷遺跡大型土坑出土遺物（2）
第808図　前田東・中村遺跡出土軒丸瓦
第809図　前田東・中村遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦
第810図　前田東・中村遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦出土位置図
第811図　香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦（1）
第812図　各地出土軒丸瓦
第813図　香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦（2）
第814図　香川県内出土軒丸瓦
第815図　前田東・中村遺跡周辺の古代寺院分布図
第816図　宝寿寺の推定寺域
第817図　前田東・中村遺跡出土斎串形態分類図
第818図　香川県内木製模造品出土遺跡分布図
第819図　香川県内出土斎串
第820図　杉垣内遺跡出土斎串
第821図　神明原・元宮川遺跡出土斎串

表目次

第1表　高松東道路（上天神～前田東間）調査遺跡一覧
第2表　平成4年度前田東・中村遺跡整理作業工程表
第3表　平成5年度前田東・中村遺跡整理作業工程表
第4表　前田東・中村遺跡出土縄文土器の分析値
第5表　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調
第6表　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調判定
第7表　各頭蓋縫合内板の癒合状態
第8表　掘立柱建物一覧　(1)
第9表　掘立柱建物一覧　(2)
第10表　前田東・中村遺跡弥生時代Ⅳ・Ⅴ期土器の変遷
第11表　香川県内木製模造品出土一覧

付　図　目　次

付図 1　高松市前田東・中村遺跡 A 調査区遺構平面図
付図 2　高松市前田東・中村遺跡 B 調査区遺構平面図
付図 3　高松市前田東・中村遺跡 C 調査区遺構平面図
付図 4　高松市前田東・中村遺跡 D 調査区第 1 ・ 2 面遺構平面図
付図 5　高松市前田東・中村遺跡 D 調査区第 3 面遺構平面図
付図 6　高松市前田東・中村遺跡 E 調査区遺構平面図　(1)
付図 7　高松市前田東・中村遺跡 E 調査区遺構平面図　(2)
付図 8　高松市前田東・中村遺跡 F 調査区遺構平面図（第 1 遺構面）
付図 9　高松市前田東・中村遺跡 F 調査区遺構平面図（第 2 遺構面）
付図10　高松市前田東・中村遺跡 G 調査区遺構平面図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

高松平野を東西に貫く高松東道路（一般国道11号高松東バイパス）の建設は，昭和53年に都市計画決定された。このことにともなって，香川県教育委員会と建設省四国地方建設局との間で建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて，協議が行われた。また，香川県教育委員会では，建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の範囲を確定する目的で，国庫補助事業（埋蔵文化財緊急調査事業）の一環として，遺跡詳細分布調査を計画し，昭和61年度からは当該地の確認調査を用地買収の進捗にあわせて順次実施してきた。確認調査を実施したのは，高松市上天神町から同市前田東町にいたる予定路線のうち，太田第２土地区画整理事業予定地をのぞく東西の総延長約 6.2kmについてである。

第１次調査は，昭和61年10月29日と12月17日から同月25日までの期間で，分布調査とトレンチによる確認調査を高松市上天神町と同市三条町において実施し，上天神遺跡の範囲を確定した。

第２次調査は，昭和62年10月５日から31日の期間で，トレンチによる確認調査を中心として高松市林町と同市六条町において実施し，林・坊城遺跡と六条・上所遺跡の範囲を確定した。

これらの確認調査結果を受け，香川県教育委員会事務局文化行政課では建設省四国地方建設局と昭和63年度に実施予定の国道バイパス埋蔵文化財発掘調査事業に係る調査計画及び予算について協議を重ねる一方，高松東道路や四国横断自動車道（高松～善通寺）などの大規模開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の円滑化を図ることなどを目的として，昭和62年11月１日付けで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設立するとともに，調査担当職員などの増員を行い，昭和63年度からの調査体制の整備を行った。

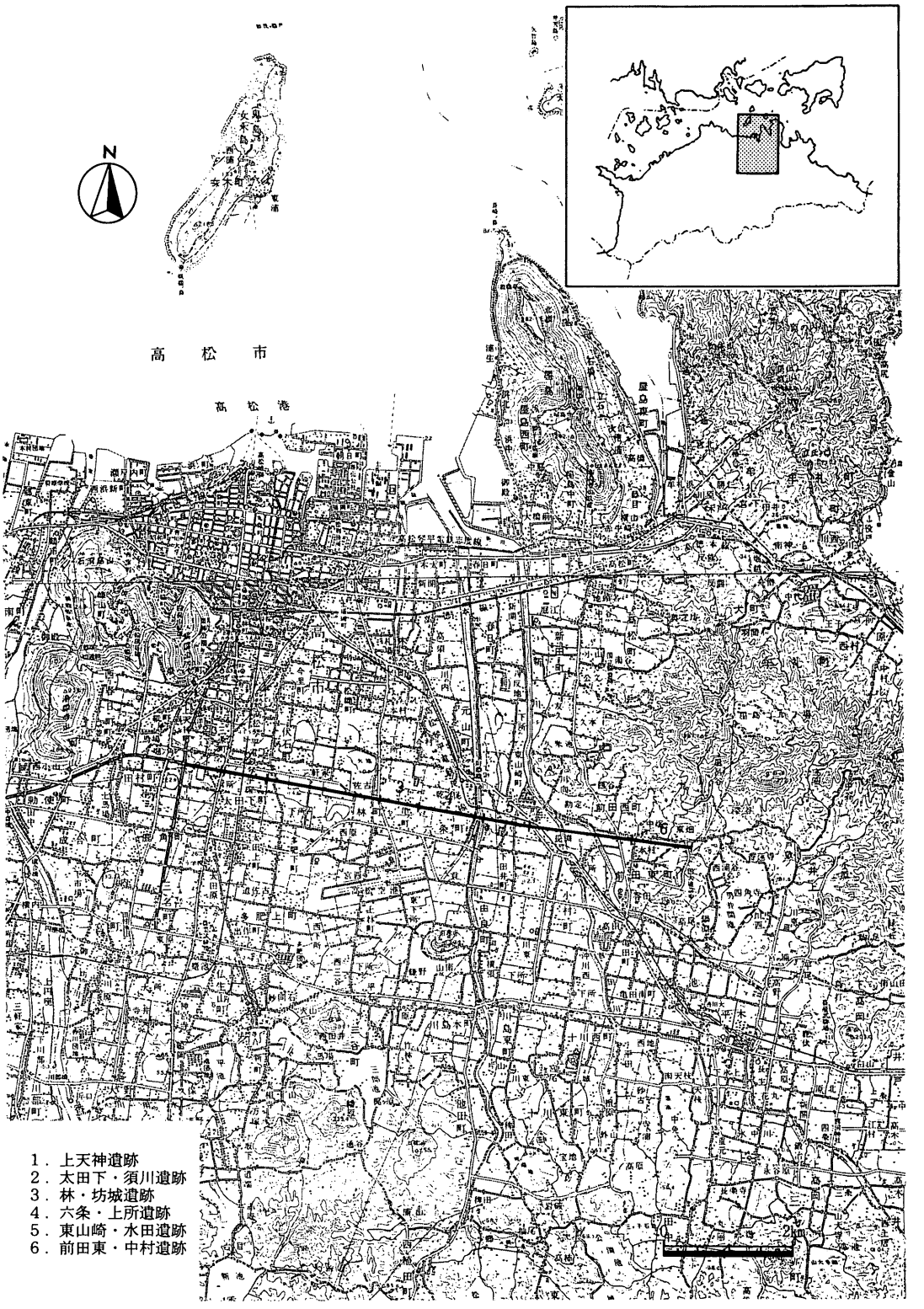
昭和63年度から始まった高松東道路の本調査は，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施している。

今回報告する前田東・中村遺跡は，昭和63年６月20日から同年７月20日および平成元年１月19日から同年１月31日の期間で実施した第３次確認調査で調査対象面積を確定した遺跡である。この遺跡の本調査は，５次に分けて行っている。昭和63年度の調査は，香川県

教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが昭和63年６月30日付けで締結した「埋蔵文化財調査委託契約書の一部を変更する契約」により，また平成元年度～３年度および平成５年度の調査は，それぞれ４月１日付けで締結した「埋蔵文化財調査委託契約書」に基づき実施している。

遺跡名	調査対象面積（㎡）	年度別調査面積						
		昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成２年度	平成３年度	平成４年度	平成５年度
上天神	24,800	5,000	12,600	0	0	1,900	5,300	0
太田下・須川	25,000	0	0	24,170	830	0	0	0
林・坊城	29,200	0	29,200	0	0	0	0	0
六条・上所	31,180	0	30,310	0	0	870	0	0
東山崎・水田	25,400	0	25,400	0	0	0	0	0
前田東・中村	34,300	0	16,170	9,320	2,485	4,705	0	1,620
合計（㎡）	169,880	5,000	113,680	33,490	3,315	7,475	5,300	1,620

第１表　高松東道路（上天神～前田東間）調査遺跡一覧



第１図　高松東道路路線図（1／100,000）

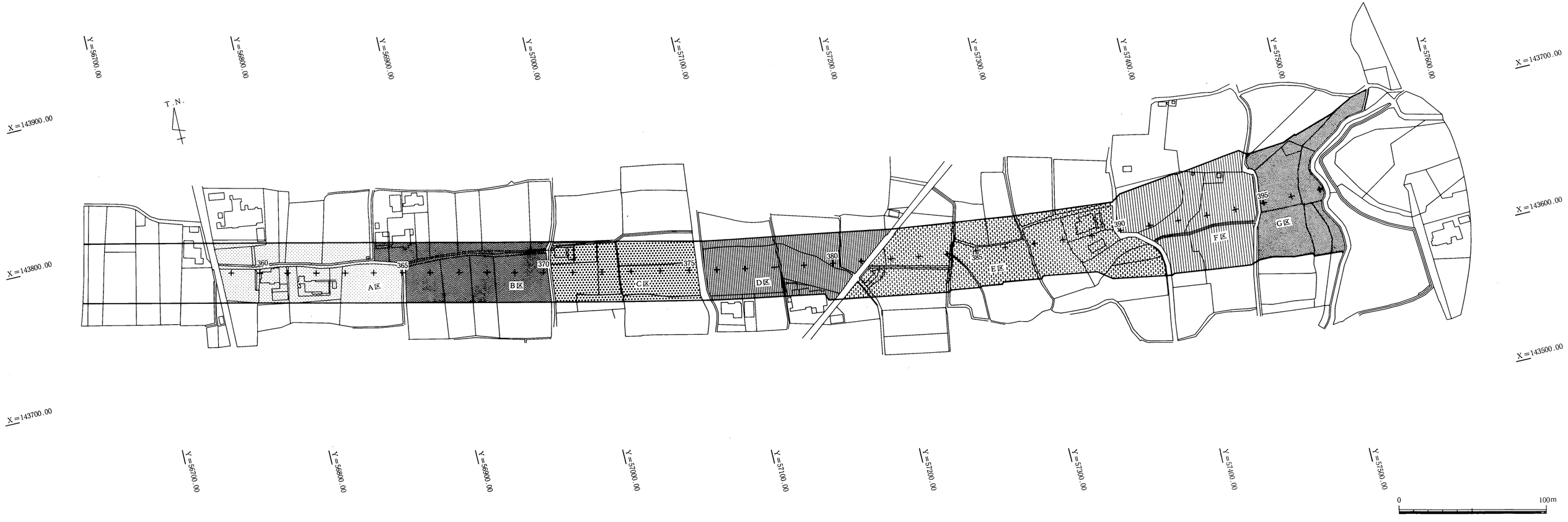
第２節　調査の経過

(1)　発掘調査の経過

昭和63年６月29日～７月８日にかけての香川県教育委員会文化行政課による試掘調査の結果をうけて，昭和63年８月６日から発掘調査を開始した。発掘調査面積は34,300㎡で，東西方向の国道建設予定地の785m分に及び，広大な調査面積と多くの遺構・遺物が検出されたため，発掘調査は昭和63年度～平成３年度，平成５年度の５年間を要した。これは単一の遺跡の調査では香川県でもっとも長期にわたるものとなった。遺跡全体を主に現有道路によってＡ区～Ｇ区の７つの大きな調査区に分け，さらにその中を現有地割りや調査面積等を考慮して小調査区に分けて調査を行った（第２・４・53・89・246・398・543・632図)。国道建設予定地のセンターライン上に20m間隔の杭を打設し調査の基準杭とした。なお調査には航空測量を導入し図化の迅速化を計り，併せて国土座標と対応させた。

昭和63年度は２班体制で，工事請負方式と香川県埋蔵文化財調査センターの直営方式の２通りの方法で調査を行なった。発掘調査は昭和63年８月６日から，まず工事請負方式で開始し，Ａ１～５区，Ｂ１～７区，Ｃ１・２・４区の調査を行った。調査が年度途中からの開始ということで，それまで高松市林・坊城遺跡の調査に従事していた調査員の渡邊・古野が前田東・中村遺跡の担当となり，また途中から善通寺市京免遺跡の調査に従事していた調査員の山本が調査に加った。さらに12月１日からは直営方式による調査を開始し，Ｆ１区，Ｇ１・２区の調査を行った。直営方式の調査も年度終盤からの開始ということで調査員の配置に苦労した。高松市上天神遺跡の調査を終了させた調査員の森と善通寺市京免遺跡の調査を終了させた調査員の磯崎，さらに高松市林・坊城遺跡の調査を終了させた調査員の藤川・日下の合計４名が担当した。昭和63年度の調査ではＣ区のＳＲ02から古墳時代中期の木製品がまとまって出土したため新聞発表をした。この他にＧ区から弥生時代後期の多量の土器と古代の斎串・人形などの木製模造品が出土し，Ｆ区から白鳳時代の軒丸瓦が出土し注目された。

平成元年度は１班体制で直営方式により調査を行った。調査は平成元年４月１日から開始し，Ｄ１区，Ｅ１～５区，Ｆ２～４区，Ｇ２区の調査を行い，平成２年２月28日に終了した。12月からは調査員の鍋井が作業員16名とともに継続中の高松市太田下・須川遺跡の調査に従事することになり，以後は調査員の森・西中の２名と残りの作業員で調査を行った。平成元年度の調査でＥ区の一部の未買収地を除いて，前田東・中村遺跡の東半分の調



第２図　調査区割図（1／2000）

査が終了した。平成元年度の調査ではＥ区の古代の集落とそれにともなう多量の土器，Ｆ区の窯跡が注目された。

平成２年度は１班体制で直営方式により調査を行った。昭和63年度に工事請負方式による調査部分のうち，未退去家屋のため調査が出来なかったＡ６～８区，Ｂ８区，Ｃ３区の調査を行った。調査期間は５月１日～７月31日であった。平成２年度の調査では調査面積が少ないにもかかわらず，Ａ区から弥生時代の方形周溝墓や古代の大型の掘立柱建物群が検出されたため７月に現地説明会を開催したところ，地元をはじめとする大勢の人々が訪れた。

平成３年度は１班体制で直営方式により調査を行った。調査はそれまで未買収地で調査が出来なかったＣ５区，Ｄ２・３・５区，Ｅ６・７区の調査を行った。調査は５月８日から調査を開始したが，当初平成元年度に調査したＤ１区に遺構面が２面認められたため，Ｄ２・３・５区も２面の遺構面を予想して調査にかかった。結果的に多い調査区では３面の遺構面が認められたが，撹乱を受けていた面もあり調査予定が早まり，11月30日に調査が終了した。このため12月から大川郡志度町末３号窯跡の調査にかかった。平成３年度の調査ではＤ区から縄文時代後期の土器が多量に出土したのが注目される。

平成５年度は１班体制で直営方式により調査を行った。最後まで未買収地として残っていたＥ･８区の調査を行った。調査期間は４月１日から６月30日までで，この調査をもって前田東・中村遺跡の全発掘調査は終了した。前田東・中村遺跡の整理作業は平成４年度から進められており，平成５年度の調査の成果も同じ報告書に記載するのが望ましいと判断したため，整理担当者が適宜現地を訪れ整理作業との統一を計った。平成５年度では調査区の大部分が後世の削平を受けていたが，古代の窯跡・掘立柱建物・井戸などが検出された。

各調査年度ごとの発掘調査の調査体制は以下のとおりである。

昭和63年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	廣瀬和孝
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	野網朝二郎（6.1～）
総務	係長	宮谷昌之　（～5.31）

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	田丸秀明
	次長	小原克己
総務	主査（事務）	加藤正司
	主査（土木）	山地　修（6.1～）

	主事	横田秀幸　(6.1～)
	主事	水本久美子
埋蔵文化財係長		大山真充
	主任技師	安藤清和

	主任主事	近藤紀文
調査	参事	前田輝夫
	係長	廣瀬常雄
	技師	渡邊茂智
	技師	磯崎　寛
	技師	森　格也
	技師	古野徳久
	調査技術員	山本　健
	調査技術員	藤川京子
	調査技術員	日下弥生
	事務員	高橋三千代
	整理作業員	堀家早代
	整理作業員	森澤千尋

平成元年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	太田彰一
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	野網朝二郎
総務	係長	宮内憲生
	主事	横田秀幸
	主事	水本久美子
埋蔵文化財係長		大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	十川　泉
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	加藤正司
	主査（土木）	山地　修
	主任主事	近藤紀文（～5.31）
	主任主事	黒田晃郎（6.1～）
調査	参事	前田輝夫
	係長	廣瀬常雄
	主任技師	鍋井一視
	技師	森　格也
	調査技術員	西中一伸
	事務員	高橋三千代
	整理作業員	森澤千尋

平成２年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	太田彰一
	課長補佐	菅原良弘
	副主幹	野網朝二郎
総務	係長	宮内憲生
	主任主事	横田秀幸
	主事	水本久美子（～5.31）
	主事	石川恵三子（6.1～）
埋蔵文化財係長		大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	十川　泉
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	加藤正司
	主査（土木）	山地　修
	主任主事	黒田晃郎
調査	参事	前田輝夫
	係長	廣瀬常雄
	技師	森　格也
	技師	稲田美穂子
	調査技術員	多田政弘
	事務員	高橋三千代
	整理作業員	森澤千尋

平成３年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克己
総務	係長	宮内憲生
	主任主事	横田秀幸（～5.31）
	主事	櫻木新士（6.1～）
	主事	石川恵三子
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	加藤正司（～5.31）
	係長（事務）	土井茂樹（6.1～）
	係長（土木）	今田　修（6.1～）
	主査（土木）	山地　修（～5.31）
	主任主事	黒田晃郎
調査	参事	篠丸　博
	係長	大山真充
	技師	市村拓二
	技師	古野徳久
	調査技術員	稲毛裕美（～1.31）
	調査補助員	田村久雄
	事務員	大嶋見芳子

整理作業員　森澤千尋

平成５年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	主幹	小原克己
総務	係長	源田和幸
	主任主事	櫻木新士
	主事	石川恵三子（～5.31）
	主事	古市和子　（6.1～）
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	真鍋隆幸
総務	係長（事務）	土井茂樹
	係長（土木）	今田　修（～5.31）
	係長（土木）	上林和明（6.1～）
	主査	大西健司
調査	参事	糸目末夫
	文化財専門員	西村尋文
	主任技師	大久保徹也
	技師	清水　渉
	調査技術員	今井由記子
	事務員	大嶋見芳子
	整理作業員	飯間高子

前田東・中村遺跡発掘調査従事者

茜　昌代	石川悦子	石浜喜一	植松美知子	太巻房子	大森正智
乙武孝男	乙武文江	柏原　巧	亀井正博	鎌野キクエ	川田サワミ
川田ミチ子	川田ミツ子	櫛田英子	楠原ひとみ	久保キミ子	久保重男
黒川　巌	黒川ヤス子	鍬島美智子	小西富美子	小坂秀夫	小松定一
篠原密夫	砂井マサ子	十河恵子	十河英徳	谷　繁男	谷本イシノ
高橋キヨ子	高橋昭二	高橋豊子	高橋光子	田中キヨ	田村都孟子
筒井フサ	戸田千代子	戸田夏江	冨川政信	中村サダ子	中村芳子
中山祐弘	西尾　馨	西谷政江	日笠芳延	樋口ヤス子	七宮松雄
平田圭子	藤井サヨ子	細谷祐義	本田貞子	本田昌男	米谷昭子
松上初子	松原清信	松本照雄	松本文男	丸川正則	溝渕フミヨ
湊トシミ	宮武　勝	村井サダ子	村尾文栄	村川照美	山内ウメ子
山田君子	山田芳之	脇千代枝	神保美智子	田中愛理	本川由美
松本ひさ子	洲崎奈都子	東条貴美	藤田洋子		

(2) 整理作業の経過

整理作業は平成４・５年度に行った。整理作業は調査員の森・古野の２名が２年間担当した。整理はそれぞれの調査員が発掘作業を行った小調査区を担当し，その後Ａ・Ｅ・Ｆ・Ｇ区を森が，Ｂ・Ｃ・Ｄ区を古野がそれぞれ執筆・編集を行い，全体編集を森・古野で行った。また平成５年度の発掘調査分については，別に整理・報告書刊行するよりも１冊にまとめたほうが良いとして，工程的に困難であったが発掘調査終了後に直ちに平成４年度からの整理作業に取り入れ，平成５年度に実施した。整理作業は以下の工程のように実施し，報告書刊行業務は平成６年度に行った。

平成４年度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
基礎整理（遺物注記等）												
遺物接合・復元												
遺物実測												
遺構・遺物レイアウト												
遺構・遺物トレース												
遺物写真撮影												
遺物観察表												
原稿執筆												
編集												

第２表　平成４年度前田東・中村遺跡整理作業工程表

平成5年度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
基礎整理（遺物注記等）												
遺物接合・復元												
遺物実測												
遺構・遺物レイアウト												
遺構・遺物トレース												
遺物写真撮影												
遺物観察表												
原稿執筆												
編集												

第3表　平成5年度前田東・中村遺跡整理作業工程表

各調査年度ごとの整理作業の調査体制は以下のとおりである。

平成4年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克己
総務	係長	宮内憲生（～5．31）
	係長	源田和幸（6．1～）

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	市原敏則
総務	係長	土井茂樹
	主任主事	黒田晃郎（～5．31）
	主任主事	大西健司（6．1～）

	主事	櫻木新士	整理	係長	廣瀬常雄
	主事	石川恵三子		技師	森　格也
埋蔵文化財係長		藤好史郎		技師	古野徳久
				整理補助員	戸川昌代　山下登志子
					塩崎訓子　西山佳代子
				整理作業員	佐藤明美　三谷和子
					中野優美　冨家孝子
					市川孝子　荒木美千子
					長坂智香　小林里美
					真鍋裕子　岡野雅子
					原　雅代　山崎佐千代
					三谷由紀代

平成５年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	主幹	小原克己
総務	係長	源田和幸
	主任主事	櫻木新士
	主事	石川恵三子（～５.31）
	主事	古市和子　（６．１～）
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤	
	次長	真鍋隆幸	
総務	係長	土井茂樹	
	主査	大西健司	
整理	係長	廣瀬常雄	
	主任技師	森　格也	
	主任技師	古野徳久	
	整理員	戸川昌代	
	整理補助員	山下登志子	西山佳代子
		香川明美	中野優美
	整理作業員	冨家孝子	市川孝子
		小林里美	真鍋裕子
		岡野雅子	大三島由紀代
		山地由紀	大西沙和美
		太田潤子	三島真紀

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

前田東・中村遺跡は高松市前田東町に所在する。前田東町は高松市の東部，屋島からやや内陸に入ったところに位置し，東は三木町と接する。視野を広げてみると前田東町・西町でひとつの小地域をなすと考えられる。北は標高272.5mの立石山から西にのびた尾根[注]によって屋島方面からさえぎられ，東は同じ立石山の末端となる標高60m前後の低丘陵が三木町北部にぬける峠になっている。また南は東側の低丘陵がそのまま西へと向きをかえ芳岡山（標高102.7m）へと高まりをみせている。わずかに西のみ平地となって開け新川が南から北へと流れているが，これを要するに「コ」字形に山にはさまれた土地が前田の地であるということができよう。当然地形は東から西へとゆるい傾斜をなして低くなっており，このような状況から扇状地であることが想定される。

さて，国道11号線東バイパスはこの前田東町の中央を東西に横切る。前田東・中村遺跡はこの建設にともなって調査・発見された遺跡であり，ほぼ全域に遺構が分布している。その詳細な内容は以下の章で述べていくことになろうが，調査の際に遺構面の有無を確認するために数ヵ所で地盤にトレンチ掘削を行なった。その結果東から西へ向けて深いところでは数mに達するであろう無遺物の砂礫・砂・シルトなどの堆積を認めることができた。また，縄文時代後期から古代にかけての川も各所でみつかっている。そして現在でも遺跡の東端の谷に小さいながらも川が存在する。人々がこの地に住みつく以前から始まった沖積作用はこのように時代ごとに大きく流路をかえながら多くの土砂をこの地にもたらしながら現在にまでつづいている。遺跡内で発見されたかつての井戸は扇端部に近いためか多くが浅く掘りこまれており，伏流水の地下水面も浅い。土地利用も標高の高いところでは果樹栽培が盛んで，低いところには水田が開けている。これらは扇状地の地形をよく現わしているといえるだろう。地盤下へのトレンチでは土砂の堆積のほか固くしまった黄色の基盤層が南北へ島状にのぞいている地形もみられた。これらは埋没尾根の可能性があり，旧地形がかなり複雑に入り組んでいたことも考えられる。

次にもう少し視野を広げてみると前田東町は県道高松長尾大内線のとおる低地部が高松平野につながる部分にあたる。このような地点は交通の要衝ともいえる。つまり人が集ま

りやすく人の動きを制しやすいことになり，多くの重要な遺跡を包蔵しうる地域ということができる。この地域の遺跡にはこのような観点も加えた評価を与える必要があろう。

注　地元では前田山と呼ばれている。

参考文献　前田郷土誌編集協議会『前田郷土誌』1989

第2節　歴史的環境

本遺跡は高松平野の東端部にあり，北側と東側から派生する緩斜面に位置している。本遺跡を取り巻く新川以東の平野部や丘陵部には，多くの遺跡が確認されている。行政区画上は高松市に属しているが，木田郡三木町とも接していることから三木町側の遺跡も含めて周辺の遺跡を時代順に紹介してゆくことにする。

旧石器時代のものとしては，本格的な遺跡は発見されていないが，久米池南遺跡から表面採集品であるがナイフ形石器が出土している。本遺跡からも船底形石器や横長剥片が確認されていることからも，旧石器時代から人々がこの地の周辺で生活を営んでいたのは確実である。

縄文時代では，本遺跡で後期と晩期の遺物が出土した他は確認されていないが，本遺跡である程度まとまって出土したので，周辺でも遺跡の確認が期待される。

弥生時代になると前期では，三木町の香川大学農学部で前期末の土器が出土している。諏訪神社遺跡では，環濠状の前期の溝が検出されている。

中期では，久米山の周辺に遺跡が多い。久米山の東側の丘陵上には中期後半を中心とする久米池南遺跡がある。この遺跡では，中期後半の竪穴住居跡，掘立柱建物，テラス状遺構，土壙墓，土坑が検出された。これらとともに土器，石鏃や石庖丁などの石器，鉄製工具などが出土している。先の諏訪神社遺跡でも中期の溝が検出されているし，久米山の山頂から北へ派生する丘陵上に久米山遺跡群の墓地地区がある。ここでは中期後半の壷棺，甕棺，箱式石棺墓，木棺墓が検出された。

後期になると，本遺跡の北側の前田山を挟んで反対側に位置する大空遺跡がある。この遺跡は後期前半の土器の指標となっている遺跡で，製塩土器も出土している。大空遺跡の西方約500mのところにも多量の土器が出土した南谷遺跡がある。また久米山の諏訪神社

1．大空遺跡
2．南谷古墳
3．南谷遺跡
4．長尾古墳群
5．小山・南谷遺跡
6．小山古墳
7．山下古墳
8．山下廃寺
9．岡山小古墳群
10．岡山古墳群
11．久本古墳
12．北山古墳
13．滝本神社古墳
14．諏訪神社古墳
15．久米山遺跡群・久米山墓地地区
16．久米池南遺跡
17．西茶臼山2号墳
18．西茶臼山1号墳
19．高松茶臼山西古墳
20．高松茶臼山古墳
21．高松茶臼山東古墳
22．高松茶臼山南古墳
23．東山崎・水田遺跡
24．前田城址
25．金石山古墳群
26．平尾古墳群
27．平尾小古墳群
28．宝寿寺跡
29．根子堂遺跡
30．前田東・中村遺跡
31．権八原古墳群
32．高尾権現社古墳
33．池戸八幡社裏古墳
34．池戸八幡社古墳群
35．四角寺古墳群
36．始覚寺廃寺
37．香川大学農学部遺跡
38．六条・上所遺跡

第3図　周辺の遺跡（1／50,000）

遺跡では３つの竪穴式石室をもつ後期終末～古墳時代初頭の墳丘墓が確認されている。また本遺跡のすぐ東側の三木町内の丘陵上の現在香川医科大学のある位置に，権八原古墳群がある。その中のＣ地区から弥生時代終末～古墳時代初頭の時期の，尾根を溝によって切断して作り出した箱式石棺を主体とする墳丘墓が１基あるのが注目される。

また本遺跡のほぼ中央には，弥生土器の散布地として根子堂遺跡が知られていた。

古墳時代になると，明確な集落跡は確認されていないが古墳は多数知られている。前期古墳としては著名な高松茶臼山古墳がある。全長約75ｍの前方後円墳で後円部に東西に主軸をもつ竪穴式石室が２つある。１号石室は全長5.45ｍの板石積みの石室で，画文帯神獣鏡１，碧玉製鍬形石２のほかに玉類，鉄製武器類が出土した。２号石室は全長5.90ｍの塊石を用いた石室で，鉄剣や鉄鏃などの鉄製品が出土している。この茶臼山には他に高松茶臼山東古墳，高松茶臼山南古墳，高松茶臼山西古墳，西茶臼山１号墳，西茶臼山２号墳がある。前田山の西麓には現在は消滅しているが北山古墳がある。この古墳は直径約20ｍの円墳で，粘土槨の主体部が２つある。

古墳時代中期のものとしては，先に述べた権八原古墳群がある。10～15ｍの円墳が15基あり，５世紀後半のものと考えられている。

古墳時代後期になると前田山山麓に多数古墳が造営される。前田山の西側には久本古墳，小山古墳，山下古墳がある。久本古墳は直径20ｍ以上の円墳と推定され，全長10.8ｍの両袖の横穴式石室をもつ。奥壁には県下に唯一の作り付けの石棚がある。さらに注目する遺物として，土師質の亀甲形陶棺や承台付銅椀がある。小山古墳は現在消滅しているが，複室構造の横穴式石室をもつものである。山下古墳は，全長９ｍの両袖の横穴式石室をもつ。出土遺物は不明である。この３基の古墳はいずれも大型の横穴式石室をもち，この地の首長墓と考えられる。これらの古墳の山寄りには長尾古墳群（１～３号），岡山古墳群（１～３号），岡山小古墳群（１～15号）がある。前田山の西の北山古墳の東側には滝本神社古墳がある。この古墳は平面形がＴ字形をする特異な横穴式石室をもっている。前田山の南側に目を移すと，金石山古墳群（１～２号），平尾古墳群（１～４号），平尾小古墳群（１～11号）がある。このうち平尾３号墳は横谷池の北西に接するようにあり，径12～15ｍの円墳で，全長約5.4ｍの横穴式石室をもつ。一方，三木町では先述した権八原古墳群の南側に，池辺神社古墳群，池辺神社裏古墳群，高尾権現社古墳が知られているが詳細は不明である。また男井間池の東側には四角寺古墳群がある。

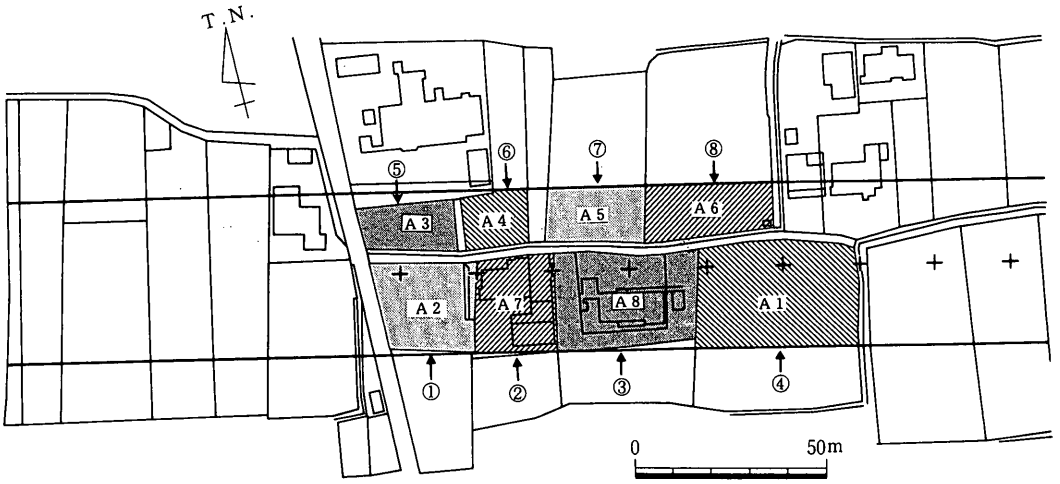
古代になると本遺跡の周辺には寺院が造営される。山下古墳のすぐ南側には山下廃寺が

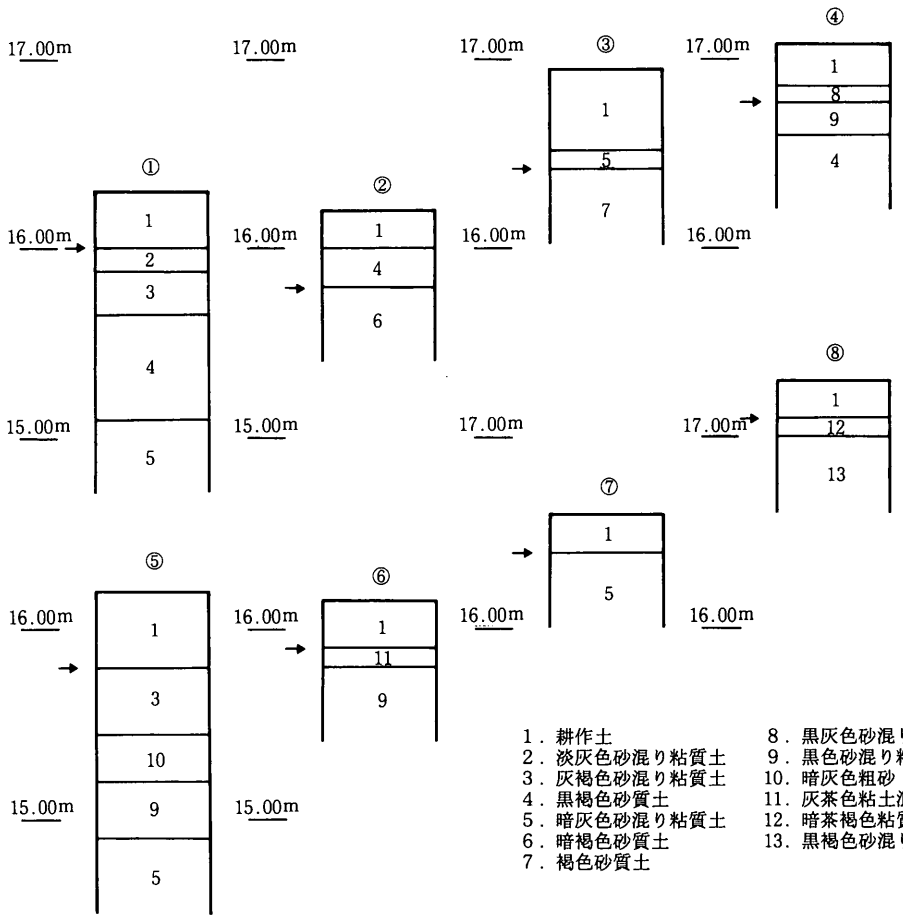
ある。遺構は不明であるが，出土した古瓦から７世紀中葉頃の創建と考えられている。仏教的色彩の強い承台付銅椀が出土した久本古墳や山下古墳，小山古墳を造営した豪族に関係する寺院と考えられる。また本遺跡の北側約250ｍのところに宝寿寺廃寺が知られている。５ｍ×７ｍの土壇に礎石が６個残っている。百済系の単弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦が出土しており，白鳳時代のものと考えられている。本遺跡でも宝寿寺廃寺出土古瓦と同文のものが出土しており，その関係が重要となってくる。宝寿寺廃寺の背後には平尾古墳群があり，その造営集団とも考えられる。三木町には本遺跡の東約1.6㎞の男井間池の東側に始覚寺廃寺がある。現在塔の心礎が残っているのみである。国分尼寺跡出土のものと同文の細弁16葉蓮華文軒丸瓦や，石井廃寺跡出土のものと同文の偏向唐草文軒平瓦が出土しており，古瓦の年代から７世紀末～８世紀中葉にかけて造営されたと考えられている。

本遺跡の一帯は，「和名抄」に記されている山田郡内11郷の１つの宮処郷にあたる。そして讃岐國に置かれた東大寺の封戸150戸のうちの50戸がこの宮処郷に置かれたのである。このことは，天平勝宝４年（752年）10月25日の造東大寺司牒に香川郡中間郷50戸，鵜足郡川津郷50戸とともに記されているものである。また，本遺跡の南方約800ｍの芳岡山の山頂が山田郡と三木郡の境となっており，さらにその南側に官道の南海道が通っていた。

中世になると，弘安８（1285）年８月日の東大寺注進状案に「讃岐國・・・山田郡宮処郷」と記されている。そして15世紀後半の文明年間に，前田頼母助宗存が築造した前田城が本遺跡の北西500ｍのところにある。

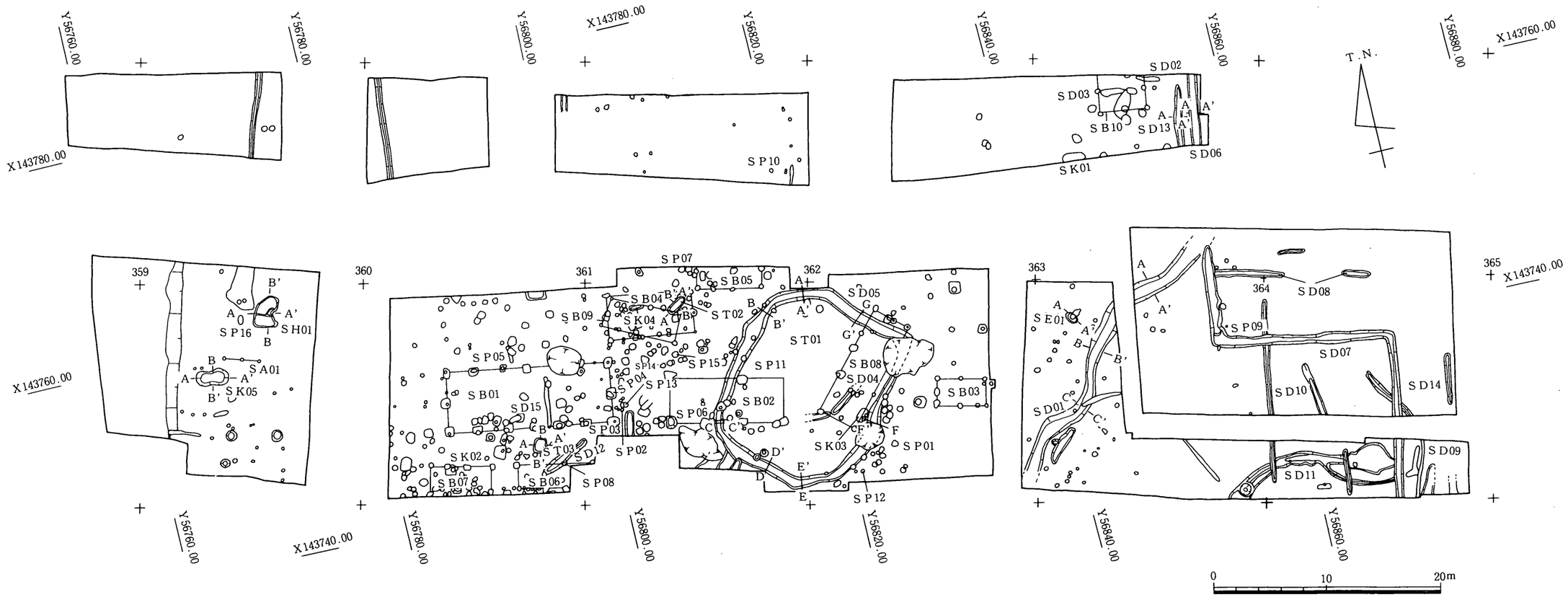
以上のように，本遺跡のある高松平野東部から三木町にかけては特に弥生時代以降に遺跡の数も増加し，前田山周辺には古墳が多数造営されている。しかし多数の遺跡が所在するにもかかわらず，発掘調査の実施されたものは少なく，特に集落の実態はまだ不明なものが多いのが現状である。





→ ： 遺構面

第４図　Ａ区小調査区割図（１／2,000），基本土層柱状図（１／40）



第５図　Ａ区遺構平面図（1／400）

第３章　調査の成果

第１節　Ａ調査区

１．調査区の概要（第４・５図）

南北幅40m，東西長125mの範囲を占めるＡ調査区は８小調査区に分けて調査を行なった。標高はおおよそ15.1～16.8mで，東と西では1.7mの標高差があり，緩やかに西に下っている。調査前には田畑は宅地に利用されており，中央には用水路および小道が走っており，調査は不可能であった。

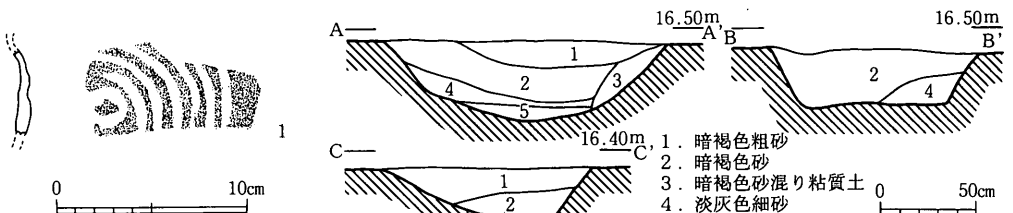
Ａ調査区では遺構面は１面であり，縄文時代から近世までの遺構・遺物を検出した。調査区の北半分は，南半分に比べて遺構・遺物ともに少なく，また北側のほうが高くなっていることから，北側は後世に削平を受けているようである。遺構面は概ね現地表面から50cmほど下で検出される。遺構面は黒色に近い粘性のある砂質土で構成されている。基本的に扇状地形による堆積作用による土層となっている。

２．調査の成果

(1)　縄文時代の遺構・遺物

ＳＤ01（第６図）

Ａ１区を北東－南西方向に，調査区をほぼ対角線に緩く蛇行する溝である。幅0.8～1.8m，深さ30～42cm，断面形はＵ字形に近い。埋土は主に砂質土となっている。１は深鉢で外面に渦巻状の文様を施す。縄文時代後期前半である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	鉢・深鉢				中・普	良好	褐	ナデ	ナデ		

第６図　Ａ区ＳＤ01断面図（１／40），出土遺物（１／４）

ＳＤ02

Ａ６区の北東部で検出した溝である。長さ2.1m，幅30～40cm，深さ10cm程度の小規模のものである。断面はＵ字形で，埋土は暗灰褐色粘土の単一層である。埋土中から縄文時代後期と考えられる土器の細片が少量出土した。

ＳＤ03

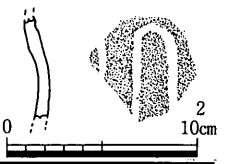
Ａ６区のＳＤ02の南西部に隣接して検出した溝である。東側を古代の土坑に切られており全長は不明であるが，2.5m前後であろう。幅は50cm前後，深さは10cm前後でＳＤ02とほぼ同規模である。断面はＵ字形で，埋土は暗灰褐色粘土の単一層である。埋土中から縄文時代後期と考えられる土器の細片が少量出土した。

ＳＤ04

Ａ８区の中央やや東寄りで検出した溝である。溝の北東端は撹乱を受けており，溝の全長は不明である。幅50cm，深さ15cm前後である。詳しい時期は不明だが，縄文土器の細片が出土した。

ＳＫ01（第７図）

Ａ６区中央南壁沿いで検出した土坑である。平面形は長楕円形で，長軸2.0mであるが短軸は土坑が調査区外に延びるため不明である。深さは20cm前後で，埋土は茶褐色粘土の単一層である。２は縄文時代後期前半の深鉢の体部くびれ部の破片である。逆Ｕ字形の文様が施されている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
2	縄・深鉢				中・多	良好	灰黄	不明	不明		

第７図　Ａ区ＳＫ01出土遺物（１／４）

ＳＰ01・02出土土器（第８図）

３は縄文時代後期の深鉢の口縁部である。４は縄文時代晩期の深鉢で，口縁部のやや下に三角形の突帯を貼り付ける。

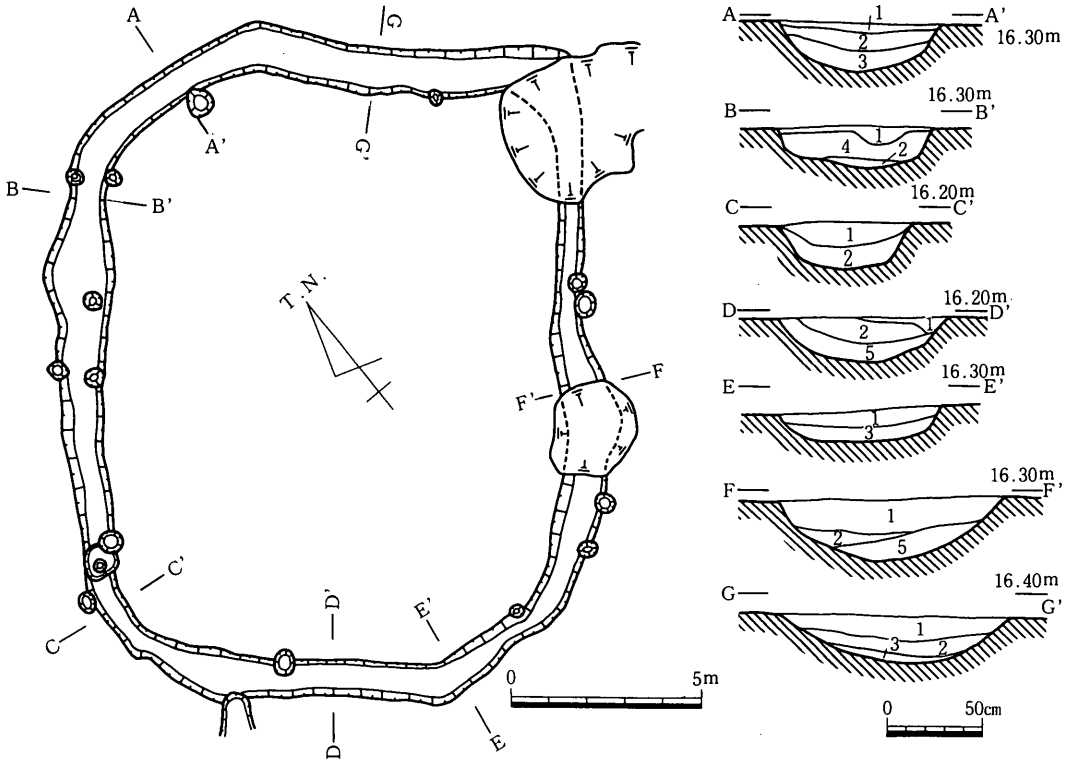
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
3	縄・深鉢				中・普	良好	橙	不明	不明		
4	縄・深鉢				細・普	良好	明褐	不明	不明	口縁部凸帯貼り付け	

第８図　Ａ区ＳＰ01・02出土遺物（１／４）

(2)　弥生時代の遺構・遺物

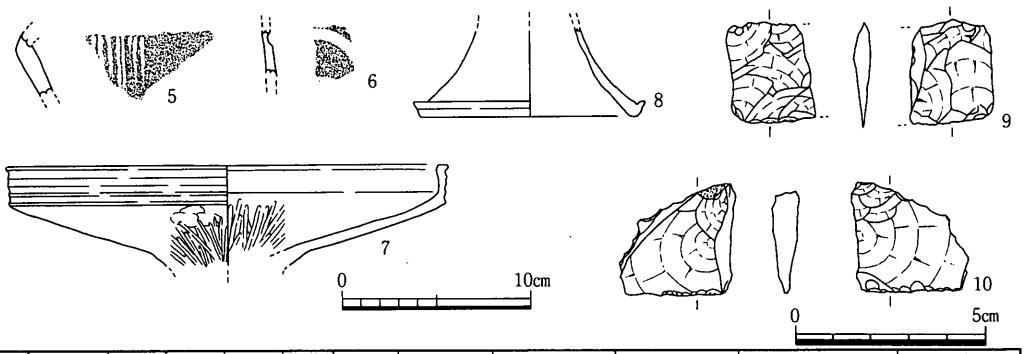
ＳＴ01，ＳＤ05（第９・10図，図版12）

Ａ８区中央で検出した方形周溝墓及びその周溝（ＳＤ05）で，平面形は長方形である。墳丘部と主体部は後世の撹乱などによりすべて削平されており，検出したのは周溝のみである。規模は周溝まで含めたもので，長辺16.9m，短辺13.6～14.2mである。墳丘部は長辺14.7m，短辺12.0m前後である。周溝墓の主軸は北東－南西方向である。周溝は，後世の撹乱によって途切れている部分があるが，本来は完結するものである。周溝の幅は0.6



1．茶褐色粘質土(固くしまる)
2．暗茶褐色粘質土
3．褐色砂質土
4．暗黄褐色粘質土
5．暗灰色粗砂

第９図　Ａ区ＳＴ01，ＳＤ05平・断面図（１／40，１／200）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
5	縄・深鉢				中・普	良好	褐	不明	不明		
6	縄・深鉢				細・多	良好	にぶい黄褐	不明	ナデ	沈線の下に縄文残る	
7	弥・高杯	23.6			細・普	良好	浅黄	ナデ	ミガキ	口縁外面凹線４条	金雲母含む
8	弥・高杯			11.4	細・多	良好	にぶい黄褐	ナデ	不明		金雲母含む

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
9	二次加工のある剥片	2.2	2.7	0.7	5.1	サヌカイト		
10	二次加工のある剥片	2.9	2.9	0.7	5.8	サヌカイト		

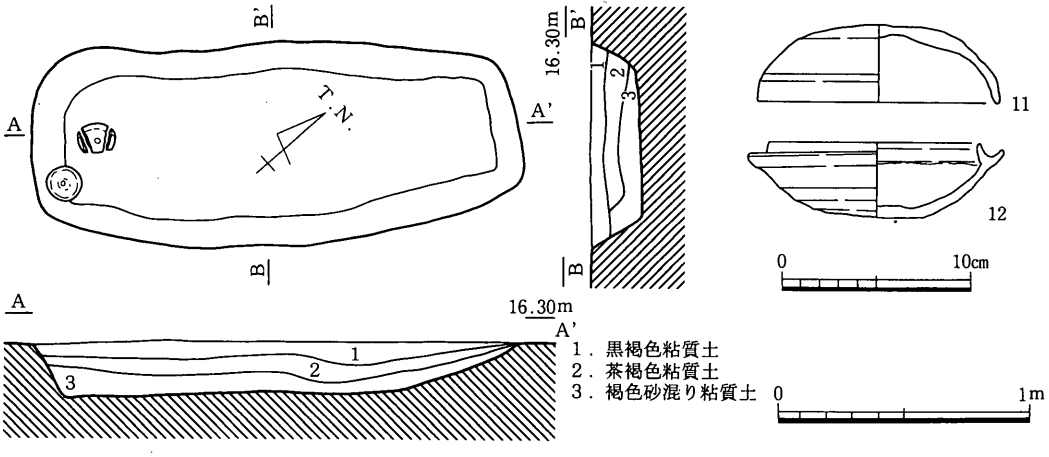
第10図　Ａ区ＳＴ01出土遺物（１／２，１／４）

～1.8m，深さ17～32cmで，断面はU字形となっている。周溝はコーナー部分で丸味をもって曲がり，幅が狭くなっている。周溝の底もコーナー部分が他の場所に比べて浅くなっている。5・6は縄文土器で混入したものである。7は周溝の西コーナー部分で出土した高杯である。口縁部は直立し外面に凹線文が巡る。内・外面に丁寧にヘラミガキを施す。8は南西の周溝から出土した高杯の脚部である。7・8が方形周溝墓に伴うもので，弥生時代Ⅳ期のものである。9・10はともにサヌカイト製の二次加工のある剥片で混入したものと考えられる。以上，出土遺物からこの方形周溝墓は弥生時代Ⅳ期のものと考えられる。

(3) 古墳時代の遺構・遺物

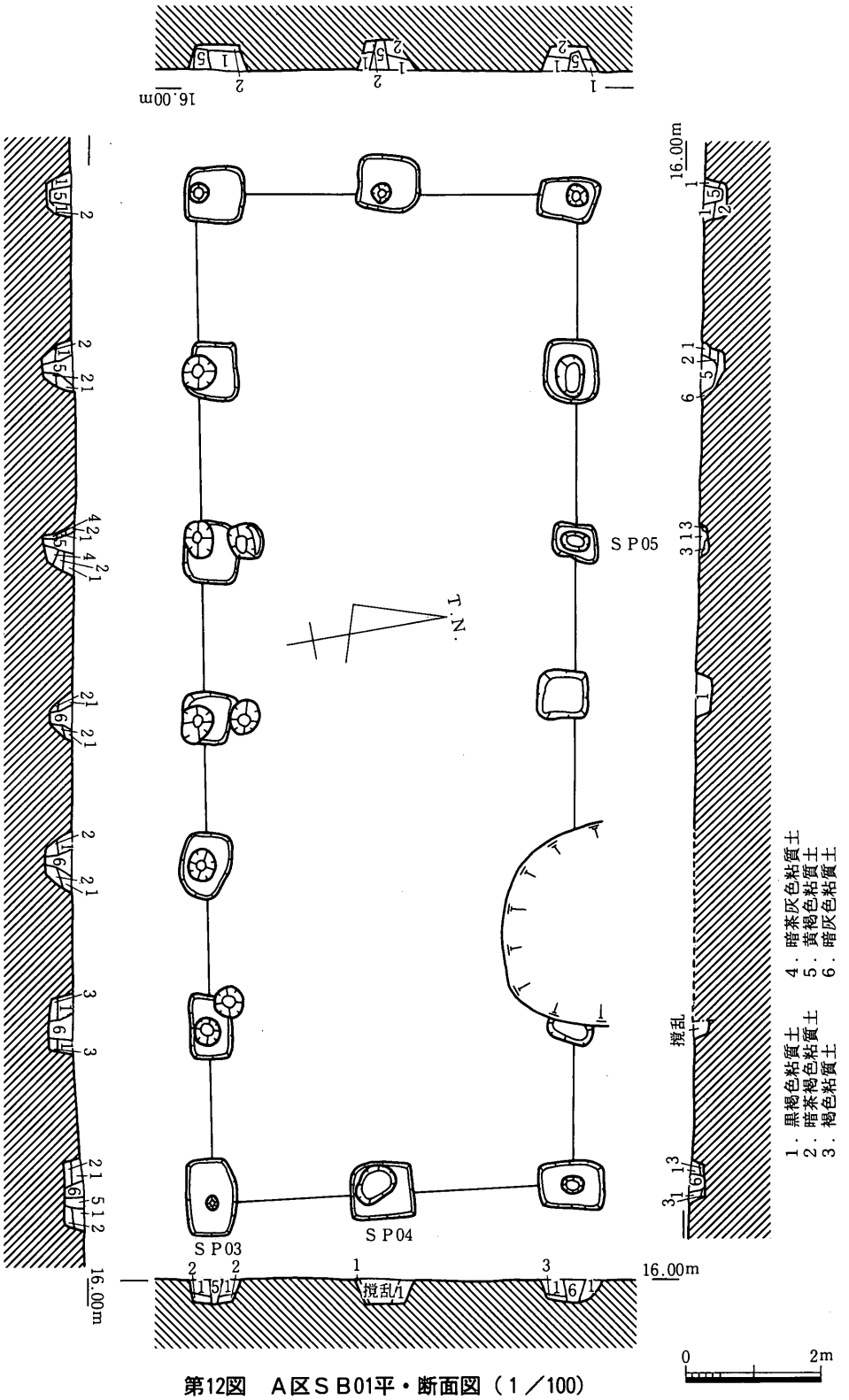
ＳＴ02（第11図，図版13）

Ａ８区の北西部で検出したもので，平面形は長方形である。長辺1.94m，短辺0.6～0.8m，深さ20cm前後である。南西側の短辺のほうが北西側に比べてやや大きくなっている。また南西側の短辺部分の掘形の傾斜部付近で須恵器の杯身と杯蓋が出土した。これを供献土器と考え，また遺構の規模と木棺の痕跡がなかったことから，この遺構を土壙墓と考えたい。南西部分が広くなっていることと，供献土器から南西部が頭部方向と思われる。11の天井部は丸く，稜線や沈線もないことから６世紀終末頃のものと考えられる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
11	須・杯蓋	12.8	4.1		細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	外面ﾛｸﾛ右回転のｹｽﾞﾘ	
12	須・杯身	11.0	4.0		細・中	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	ロクロ右回転のｹｽﾞﾘ	

第11図　Ａ区ＳＴ02平・断面図（１／30），出土遺物（１／４）

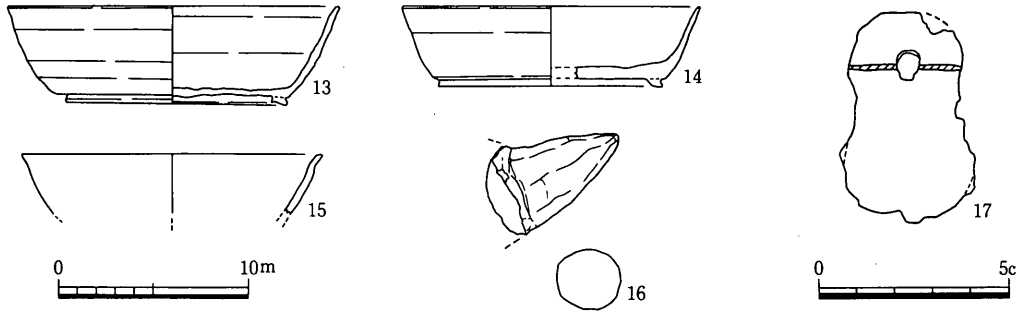


第12図　A区SB01平・断面図（1／100）

(4) 古代の遺構・遺物

ＳＢ01（第12・13図，図版６～８）

Ａ７区の中央で検出した梁行２間×桁行６間の大型の掘立柱建物で，建物の平面形は長方形である。梁行は２間で5.6m，桁行は６間で14.8m，建物面積は82.9㎡≒25.1坪となっている。北側桁行列の柱穴の一つが撹乱のため検出出来なかった。柱穴の掘形はほぼ一辺80cm前後の正方形もしくはそれに近い長方形である。柱穴の深さは30～50cm程度で，ほとんどの柱穴で柱痕を検出した。柱痕は直径20～30cmの円形で，丸太材を使用していたことが分かる。根石や礎板等は検出されなかった。柱穴の柱を支える埋土は概ね２層となっており，簡単な版築を行なっている。建物の主軸方位はＮ－80°－Ｗでほぼ東西棟である。東側梁行列の最も南側の柱穴ＳＰ03の柱痕内から出土した須恵器の年代観から，この建物の廃絶時期は８世紀後半と考えられる。13～15はＳＰ03出土の須恵器杯で８世紀後半のものである。16はＳＰ04出土の甕の把手と考えられる。剥離面に板状圧痕があり，先端部を鋭利に尖らせている。17はＳＰ05出土の鉄器で，瓢形で円形の穴が１ケ所ある。用途・器種は不明である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
13	須・杯	17.4	5.2	11.5	微・普	良好	暗青灰	ナデ	ナデ	貼付高台　底ヘラ切り	
14	須・杯	15.6	4.2	11.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	貼付高台　底ヘラ切り	
15	須・杯	15.8			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
16	須・不明				細・普	良好	暗青灰	ナデ	不明	接合剥離面板状圧痕有	把手部

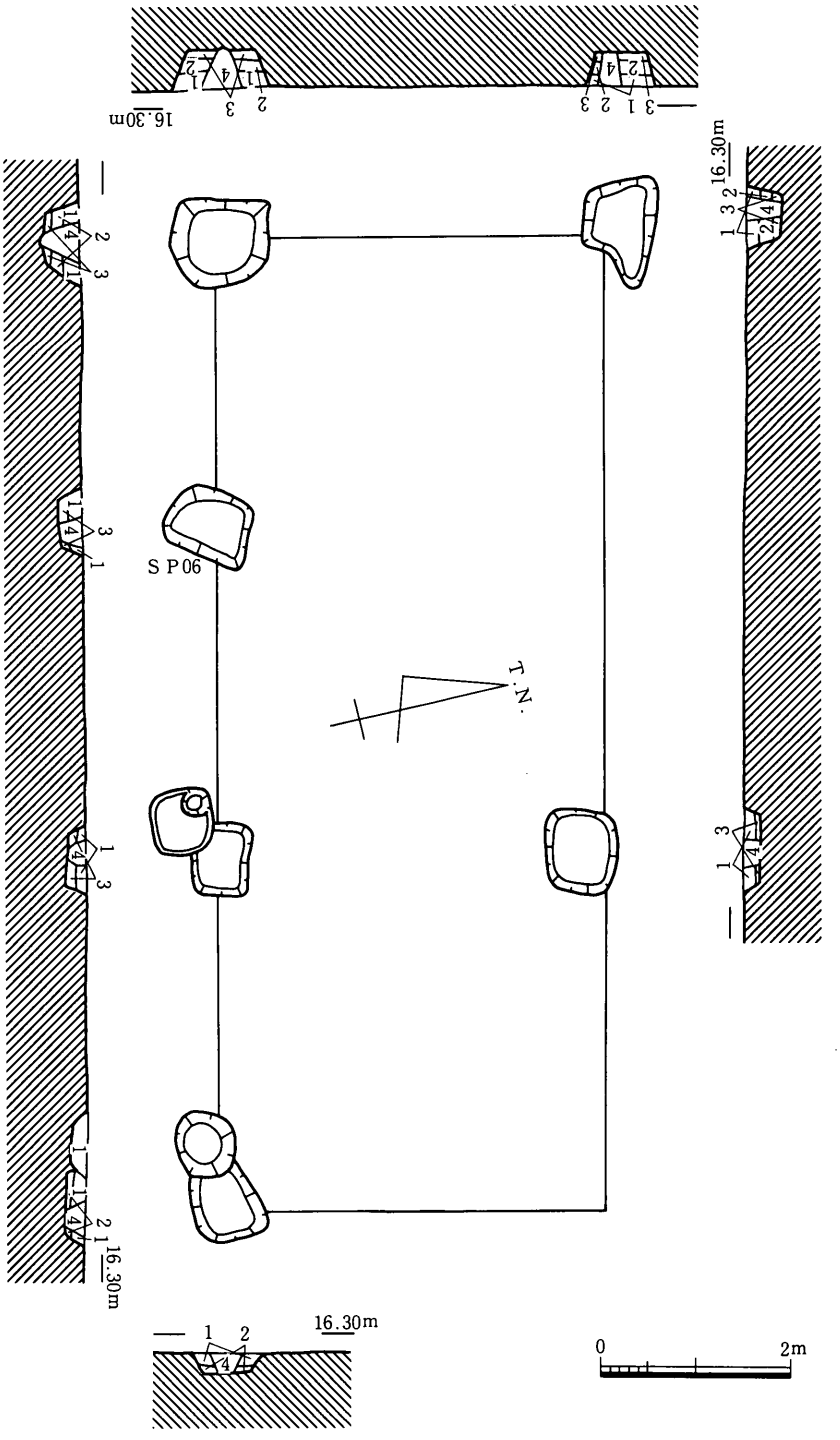
遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
17	鉄	用途不明	5.5	3.6	0.2	11.5		

第13図　Ａ区ＳＢ01，ＳＰ03～05出土遺物（１／２，１／４）

ＳＢ02（第14・15図，図版７・８）

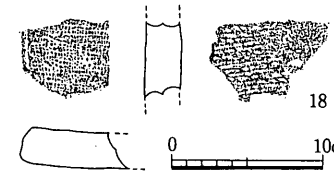
Ａ８区の西側で，ＳＢ01の東約４ｍの所に位置する梁行１間×桁行３間の掘立柱建物で，建物の平面形は長方形である。現代の撹乱のため，検出出来なかった柱穴がある。梁行は１間で4.1m，桁行は３間で10.2m，建物面積は41.8㎡≒12.7坪である。柱穴の掘形は一辺80cm前後のほぼ正方形である。深さは40cm前後と余り残りは良くない。全柱穴で柱痕が確

認され，柱痕は直径20～30㎝の円形で，柱は丸太材である。柱穴の埋土は残りの良いもので3層の版築となっている。また南側桁行列の西から2番目の柱穴には根石が施されていた。建物の主軸方位はN－78°－Wの東西棟で，ＳＢ01とほぼ同じである。柱穴内より土師器杯や土釜の細片が出土したが図化は出来なかった。8～9世紀のものと考えられ，ＳＢ01よりやや後出するものであるが，南側の桁行列をＳＢ01に揃えており，ＳＢ01を意識して建てられている。ある時期に併存していた可能性もある。18はＳＰ06から出土した平瓦である。



第14図　Ａ区ＳＢ02平・断面図（1／80）

凸面に縄目叩きを施し，凹面は布目圧痕を一部ナデ消している。反りはほとんどなく扁平で一枚作りによるものと思われる。

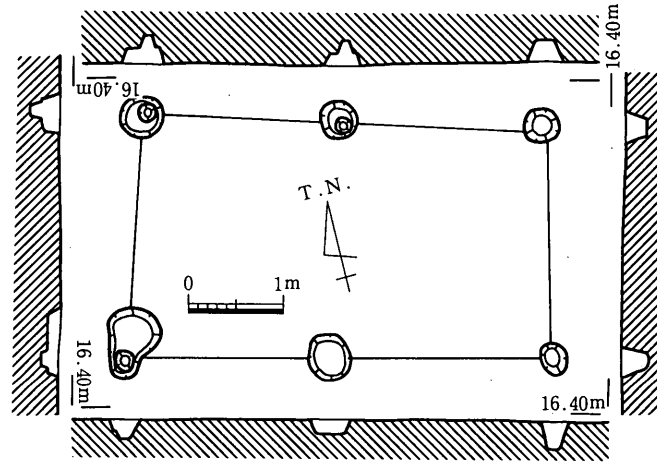


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
18	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	4		粗・多	暗灰黄	良好		5.1

第15図　A区SB02，SP06出土遺物（1／5）

SB03（第16図，図版8）

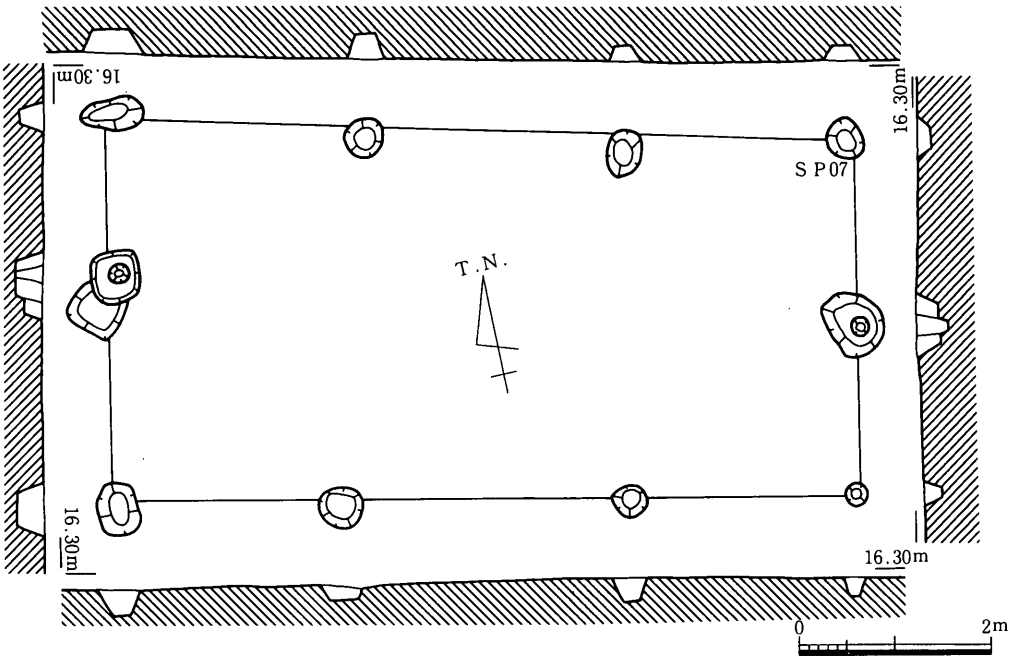
A8区の東端で検出した梁行1間×桁行2間の掘立柱建物で，建物の平面形は長方形である。梁行は1間で2.5m，桁行は2間で4.3m，建物面積は10.8㎡≒3.3坪と小型である。建物の主軸方位はN－77°－Wの東西棟で，SB01・02とほぼ同じである。柱穴の掘形の平面形は円形に近い。柱穴の深さは20～40㎝で，柱穴の底を少し掘り窪めて柱を据えている。柱穴の埋土はすべて暗灰色粘質土の単一層である。西側梁行列の中央に梁行のラインに乗るピットがあるが，柱穴の埋土が他と異なることと，東側の梁行列に対応するピットがないことから除外した。柱穴より8世紀後半の土器が少量出土した。



第16図　A区SB03平・断面図（1／80）

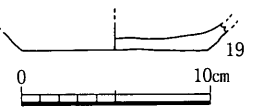
SB04（第17・18図，図版9）

A8区の北西コーナー部分で検出した梁行2間×桁行3間の掘立柱建物で，建物の平面形は長方形である。梁行は2間で3.8m，桁行は3間で7.9m，建物面積は30.0㎡≒9.1坪である。建物の主軸方位はN－79°－Wの東西棟である。柱穴の掘形の平面形は円形に近い方形で，柱穴の深さは20～30㎝で，柱痕の確認出来たものもある。柱は直径18㎝ほどの丸太材である。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。また建物の西側の梁行列はSB01の東側の梁行列とほぼ揃っており，SB01より後出するにもかかわらず，建物配置を意識していたものと思われる。19は東側梁行列の最も北側の柱穴SP07から出土した須恵



第17図　A区ＳＢ04平・断面図（１／80）

器杯で，焼成は悪いものである。その他の柱穴からも土器の細片が出土したが，図化出来なかった。概ね８世紀末～９世紀初頭の時期のものである。

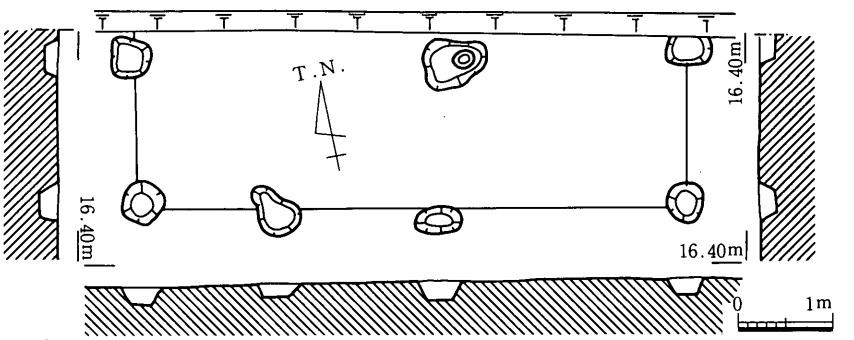


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
19	須・杯			9.7	中・普	不良	灰黄褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	金雲母含む

第18図　A区ＳＢ04，ＳＰ07出土遺物（１／４）

ＳＢ05（第19図）

Ａ８区の北端で，ＳＢ04の北東に隣接して検出した掘立柱建物である。調査区外に続くため全体の規模は不明で，梁行と桁行の区別はつきにくいが南側の３間分を梁行と考えると，調査区北壁際の柱間は２間となり１間分少ない。しかし少々間隔が広いが東側の１間分を廂と考えると梁行２間と廂１間の建物と考えられる。

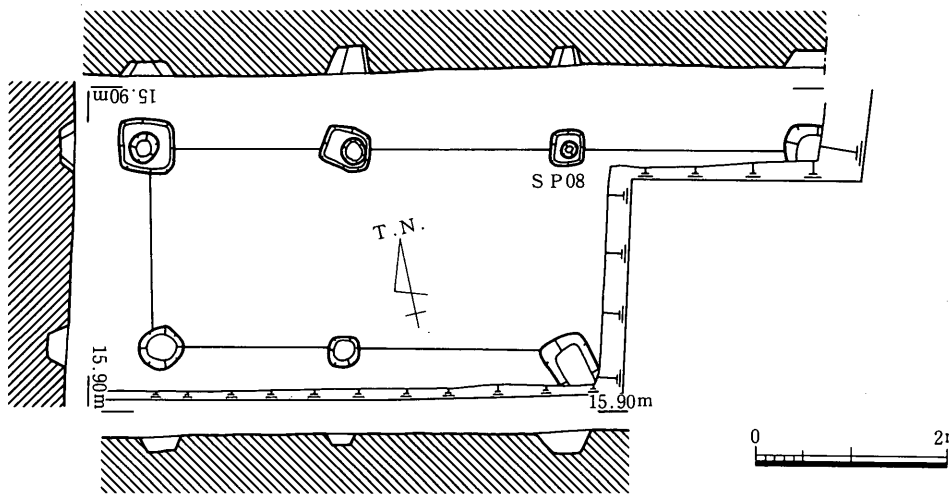


第19図　A区ＳＢ05平・断面図（１／80）

桁行は調査区内で１間で1.6m，梁行は２間で3.2m，廂１間で2.6m，梁行筋で合計5.8mとなっている。建物の主軸方位はＮ－12°－Ｅの南北棟と考えたい。柱穴は方形と円形のものがあり，深さは10～20cmと残りは悪い。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。柱穴より８世紀末～９世紀初頭の土器が出土した。

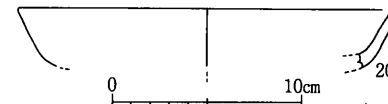
ＳＢ06（第20・21図，図版９）

Ａ７区の南東コーナーで検出した掘立柱建物で，建物の東側は現有の井戸があったため調査出来なかったので，建物の正確な規模は不明である。さらに調査区の南側に続く建物とも考えられる。しかし調査区南壁際に北側の柱穴に対応する柱穴があるため，一応調査区内で完結する梁行１間で，桁行が調査区内で３間の東西方向の掘立柱建物と考えておきたい。梁行は１間で2.1m，桁行は調査区内の３間で7.1mである。北側の桁行列の延長はＡ８区で検出されなかったので，調査区の突出部の中で納まるものである。柱穴の平面形は一辺30～50cmのほぼ正方形で，深さは20～30cmと残りは悪い。柱痕は確認出来たもので直径20cm前後の丸太材である。柱穴の埋土は北側桁行列はすべて茶褐色粘質土の単一層で南側の桁行列の埋土はそれよりやや暗い色調となっている。また北側桁行列の西側２つの



第20図　Ａ区ＳＢ06平・断面図（１／80）

柱穴には礎石状の石が底に置かれていた。建物の主軸方位はＮ－79°－Ｗの東西棟である。東西に細長い建物で，倉庫か納屋のようなものと考えられる。20はＳＰ



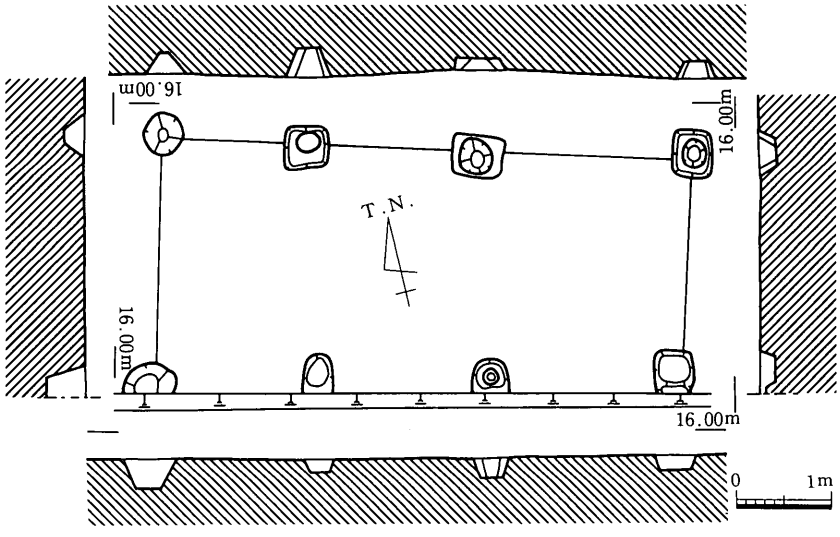
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
20	須・杯	20.0			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	内面回転ナデ→指ナデ	

第21図　Ａ区ＳＢ06，ＳＰ08出土遺物（１／４）

08出土の須恵器杯で内面は回転ナデの後に指ナデを施している。8世紀末～9世紀初頭の時期と考えられる。

ＳＢ07（第22図，図版９）

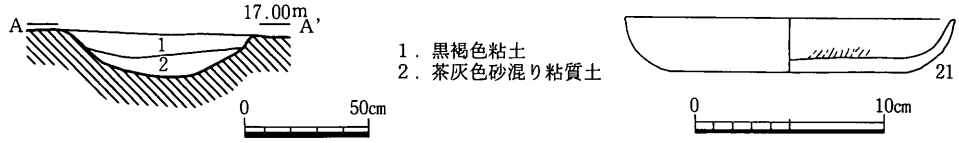
Ａ７区の南壁際でＳＢ06の西1.7ｍの所に隣接する掘立柱建物である。柱穴は南側の調査区外に続くものと思われ，建物の正確な規模は不明である。北側の３間分の東西列の柱間の距離が，南北方向の柱間の距離より短いことから，東西方向の柱列を梁行，南北方向の柱列を桁行とする南北棟と考えたい。また北側梁行列の最も東側の柱間が他の２間のものより広くなっていることから，この部分は廂と考えられる。このことからこの建物は梁行２間で3.3ｍ，廂１間で2.3ｍ，梁行列全体で5.6ｍとなっている。桁行は１間分で2.4ｍとなっている。柱穴の平面形は40～50㎝の方形で，深さは20～30㎝程度で残りは悪い。柱痕は確認出来たもので20～30㎝の丸太材で，北側梁行列の西から２番目の柱穴では柱そのものが残っていた。柱穴の埋土は北側梁行列が茶褐色粘質土の単一層で，南壁際の梁行列がそれよりやや暗い色調の粘質土の単一層である。建物の主軸方位はＮ－13°－Ｅの南北棟でＳＢ06と直交する。遺物は柱穴より土器の細片が少量出土したのみで詳しい時期は分からないが，ＳＢ06と北側の柱列を揃えており，建物主軸も直交するなど関連性が認められることから，ＳＢ06と同じ８世紀末～９世紀初頭の時期を考えておきたい。



第22図　Ａ区ＳＢ07平・断面図（１／80）

ＳＤ06（第23図）

Ａ６区の東端で検出したほぼ南北に直線的に延びる溝である。幅70㎝前後，深さ15㎝程度の浅いもので，断面はＵ字形である。埋土の上層には粘性の強い黒褐色粘土が堆積していた。21は土師器杯で，外面は剥離しているが内面には暗文がわずかに残る。８世紀中葉頃のものである。その他，図化出来なかったが須恵器甕・杯蓋・杯身と土師器甕が出土し



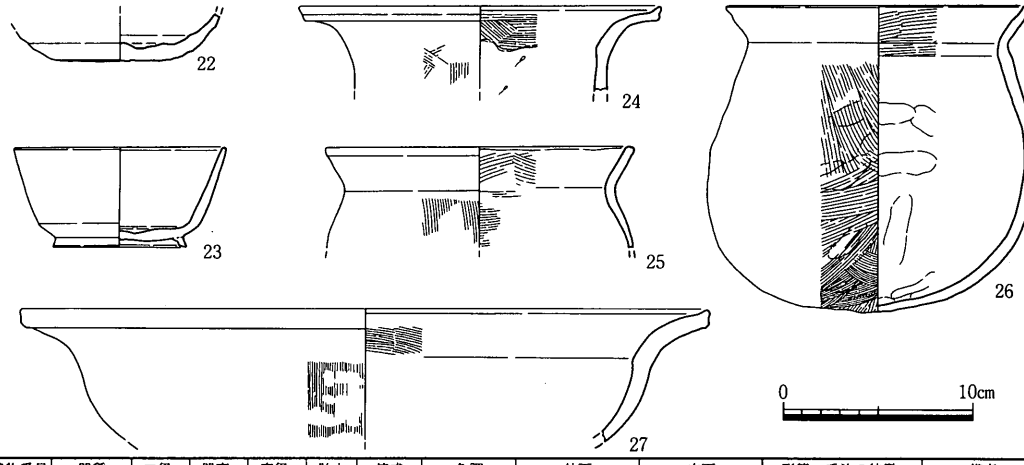
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
21	土・杯	17.4	2.8	12.4	精緻	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	放射状暗文	

第23図　A区ＳＤ06断面図（1／30），出土遺物（1／4）

ている。須恵器には6世紀末のものも含まれるが混入したもので，溝の埋没は8世紀中葉である。

ＳＤ07（第24図）

Ａ1区中央部で検出した。溝底の高さからみて北から南に流れ，東に直角に折れ，再び南に折れ調査区外に流れていく。幅は0.8～1ｍ，深さは0.2ｍであり，この時期の遺構群の区画溝と考えられる。埋土は黒色の粗砂混じりの粘質土で，溝内からの土器の出土は少なかった。22は他の土器よりやや古めの高台のつかない杯の身である。23は胴部が直線的になっている。25は胴の張らない長胴甕であろう。27の鍋は浅い。以上の土器からＳＤ07は7世紀第3四半期のものと考えられる。

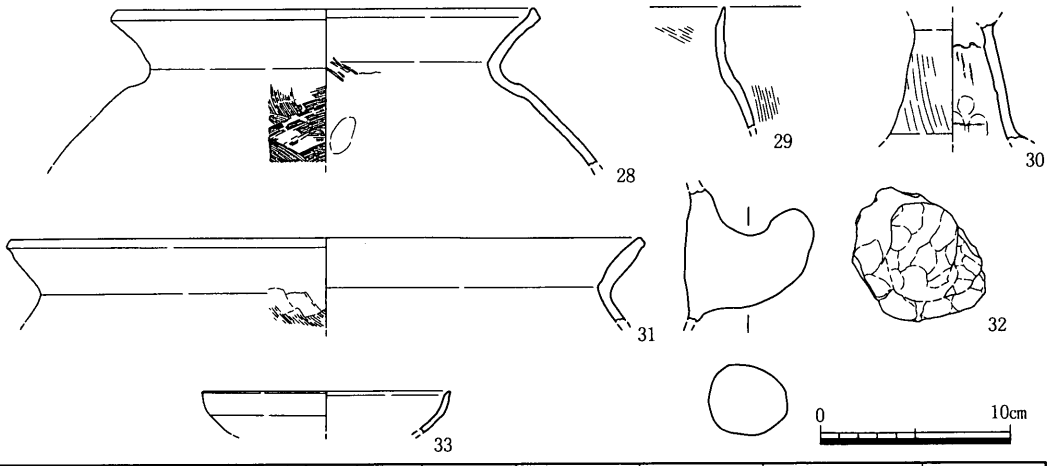


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
22	須・杯			6.1	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
23	須・高台杯	11.1	5.3	7.0	粗・普	良好	ｵﾘｰﾌﾞ灰	ナデ	ナデ		
24	弥・壷	19.0			中・普	良好	赤褐・赤黒	ハケ目→ナデ	ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ		
25	土・甕	16.0			中・普	良好	鈍赤褐・灰褐	ナデ・ハケ目	ハケ目		
26	土・甕	16.0	16.2		粗・普	良好	灰黄～鈍い黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	一部赤色顔料	
27	土・土鍋	36.0			中・普	良好	浅橙・灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		

第24図　A区ＳＤ07出土遺物（1／4）

ＳＤ08（第25図）

Ａ1区北東部で検出した。西側がＳＤ07につながる。幅約0.6ｍ，深さ0.1ｍであるため上部が削平されたと考えられる。埋土は黒褐色の粗砂混じりの粘質土で，土器を少量出土



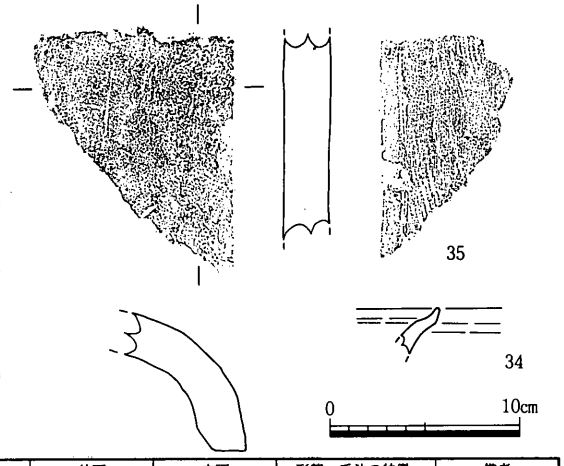
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
28	土・甕	22.0			中・普	良好	浅黄	ハケ目→ナデ	ナデ		
29	土・壷				中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
30	土・高杯				粗・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
31	土・甕	33.4			粗・普	良好	明赤褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
32	土・把手				粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
33	須・杯	13.0			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第25図　A区ＳＤ08出土遺物（１／４）

した。29は口縁の直立する壷である。30は高杯の脚筒部である。33は杯身としたが，蓋となる可能性もある。年代的にはＳＤ07出土土器と同じ頃のものであろう。

ＳＤ09（第26図）

Ａ１区南東部で検出した。東に向けて緩い弧状を描き，南は調査区外に続いてゆく。幅20～40cm，深さ３～15cmしかないため，上部が削平されたと考えられる。埋土は暗灰色の砂混じり粘質土で，土器や瓦を少量出土した。34はこね鉢の口縁部で，屈曲がやや甘くなっている。11世紀後半～12世紀後半のものである。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
34	須・鉢				細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
35	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕・ケズリ	１２		中・普	暗灰	良好	胎土は灰白	12.4

第26図　A区ＳＤ09出土遺物（１／４）

ＳＤ10

Ａ１区中央部で検出した幅40cm，深さ15cmの細い溝である。ＳＤ07と直角に交わるが埋土もほぼ同じで切り合い関係もないようであり，ＳＤ07と同じ時期のものと考えられる。

ＳＤ11

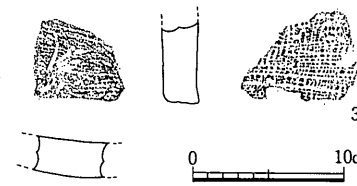
Ａ１区南部で検出した幅１ｍの溝で，北に向かって緩い弧状を描く。平均の深さは20cmで東端はやや浅い円形の落ち込みとなって途切れている。また，調査区外に延びてゆく手前部分には深さ60cmの特に深い円形の落ち込みがある。土器細片を少量出土したが，図示するには至らなかった。埋土の色からＳＤ11の時期は古代以前と考えておきたい。

ＳＤ12

Ａ７区南東コーナーで検出した溝である。幅50～90cm，長さ4.7m，深さ25cm程度の小規模なものである。土師器甕の細片が出土したが明確な時期は不明であるが，８世紀末～９世紀初頭と考えたＳＢ06の柱穴に切られていることから，それ以前のものである。おそらく８世紀代のものであろう。

ＳＫ02（第27図）

Ａ７区のＳＢ01とＳＢ07の間で検出した土坑である。平面形は正方形に近い台形である。一辺１ｍ前後，深さ30cm前後で底部東寄りに楕円形のピット状の落ち込みがある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。８世紀後半と考えられる須恵器の杯蓋・杯・壷，10世紀末と考えられる土師器杯や土釜・長胴甕とその他瓦がが出土したが，細片のため図化出来なかった。36は唯一図化出来た平瓦である。両面に糸切り痕があり，凸面は縄目叩きを施している。

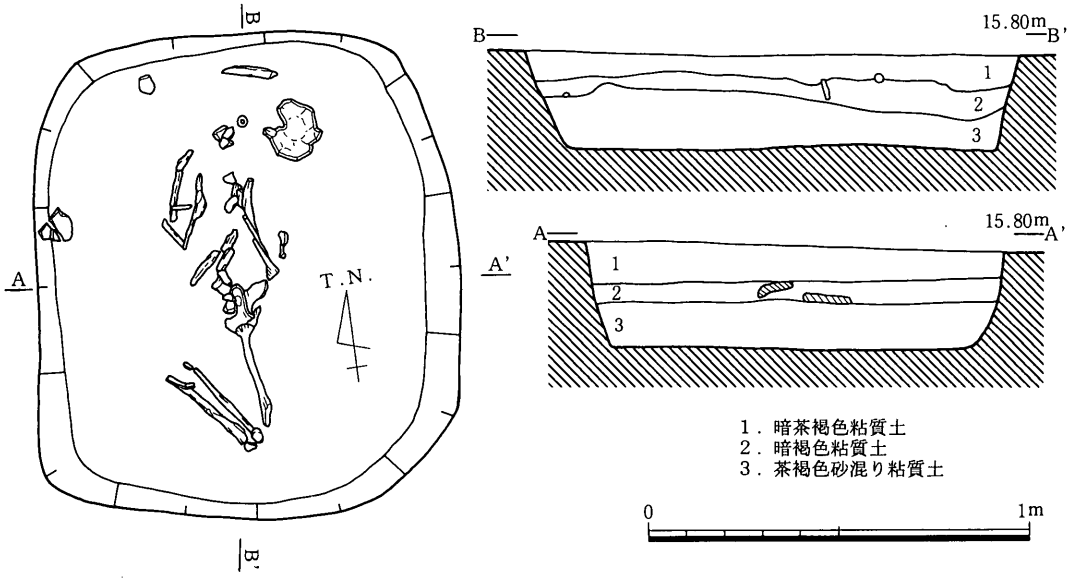


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
36	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕		１６	中・普	にぶい黄橙	良好	端面沈線１条	5.5

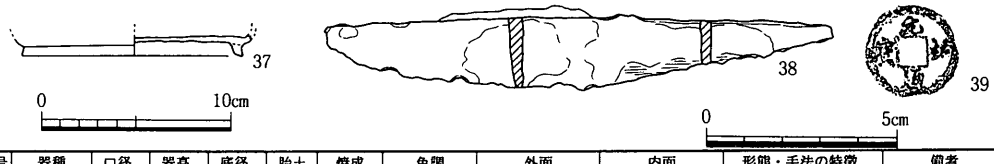
第27図　Ａ区ＳＫ02出土遺物（１／５）

ＳＴ03（第28・29図，図版13）

Ａ７区のＳＢ01とＳＢ06の間で検出した土壙墓である。平面形は1.12ｍ×1.28ｍの方形で，深さは28cmである。この土壙から脆弱であったが人骨が１人分出土した。頭部を北側に向けて足を２つに折り曲げて，東側に横向けている状態で葬むられていた。木棺の痕跡や焼いた痕跡もないことから，土葬と考えられる。人骨は鑑定の結果20才代から30才代前半の男性の可能性が高く，身長は145～150cm前後である。37は須恵器杯で土壙の上部で出土したもので，土壙墓に本来伴うものではない。その他頭部の横と，骨盤の上で12世紀の黒色土器椀と十瓶山産瓦質土器椀が出土した。これは埋葬時に副葬したものである。その他副葬品として頭部の上に鉄製刀子と，頭部横に銅銭があった。39は元祐通宝で北宋時代に製作されたものである。以上のことから，この土壙墓は古代末の12世紀のものである。



第28図　A区ＳＴ03平・断面図（1／20）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
37	須・杯			11.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	貼付高台　底ヘラ切り	

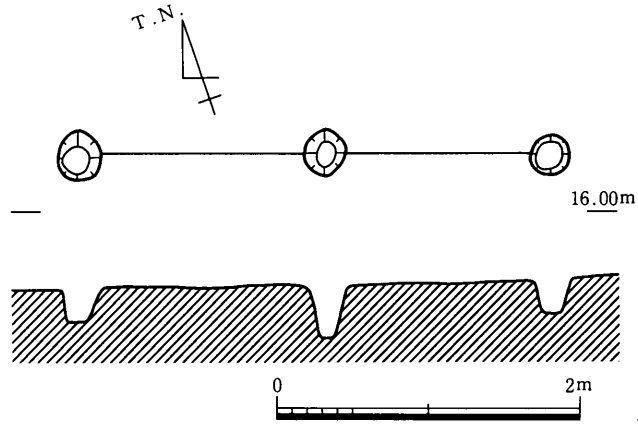
遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
38	鉄	刀子	13.3	2.1	0.4	19.8		
39	銅	古銭(元祐通宝)	2.5	2.5	0.1	2.1	1086年初鋳	

第29図　A区ＳＴ03出土遺物（1／2，1／4）

(5)　中世の遺構・遺物

ＳＡ01（第30図）

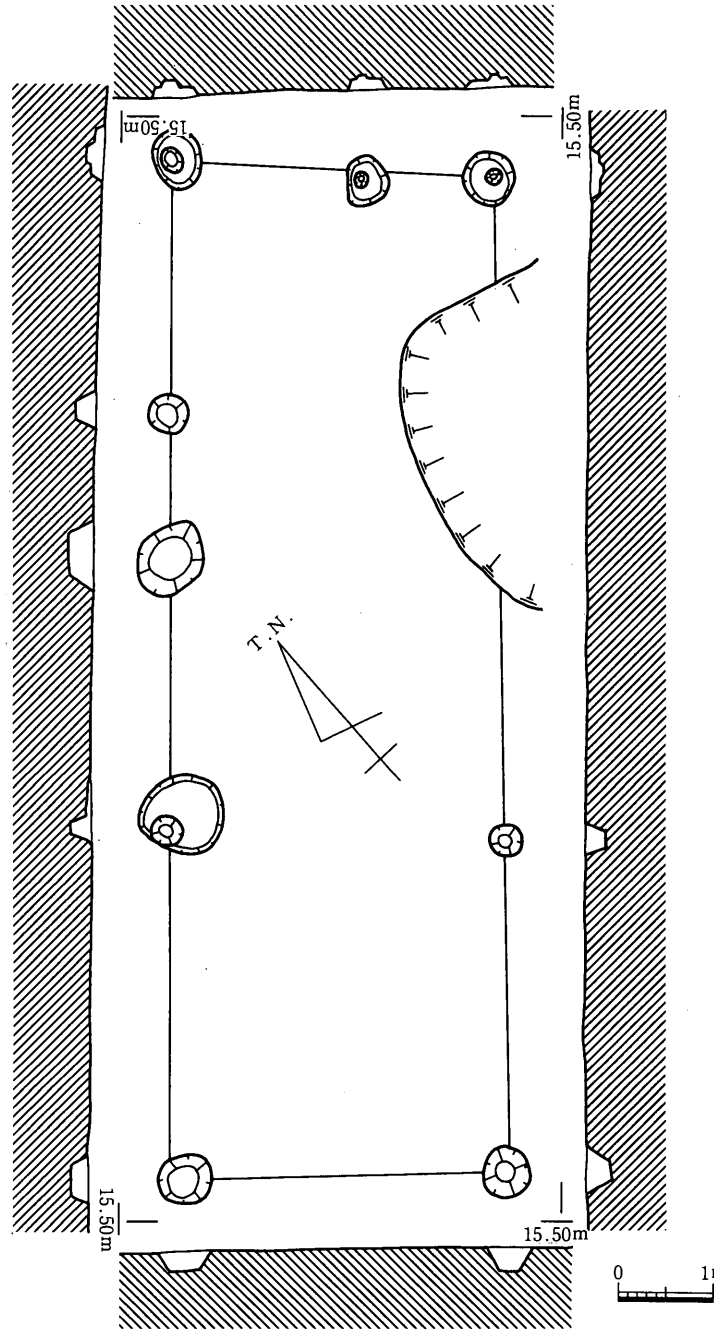
Ａ２区中央部で検出した。埋土は灰色砂質シルトの単一層で，遺物は出土しなかった。埋土の色や位置からＳＫ04やＳＫ05との関連が考えられる。



第30図　A区ＳＡ01平・断面図（1／50）

ＳＢ08（第31図）

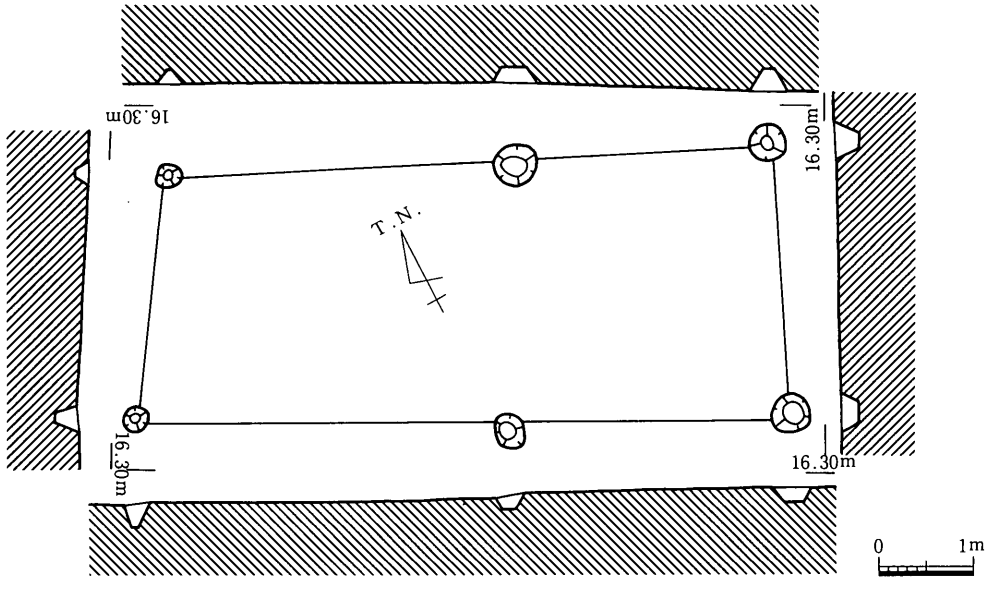
Ａ８区の東端で検出した梁行２間×桁行４間の掘立柱建物である。南側の梁行の中央の柱穴は検出出来なかった。また東側の桁行列の北側から２番目と３番目の柱穴は撹乱のため検出出来なかった。梁行は２間で3.5ｍ，桁行は４間で10.5ｍ，建物の面積は36.8㎡≒11.1坪である。平面形は細長い長方形となっている。柱穴の平面形は直径30～80㎝ほどの円形で，深さは20㎝前後と残りは悪い。柱痕は確認出来たもので，直径10～20㎝の丸太材である。柱穴の埋土は茶褐色粘質土の単一層ないし暗茶褐色粘質土の単一層となっている。建物の主軸方位はＮ－41°－Ｅで当該地の条里地割りの方向には一致しないものである。柱穴から土器の細片が出土したが図化出来なかった。出土土器からこの建物の時期は13世紀中葉～後半にかけてのものと思われる。またこの建物は弥生時代中期の方形周溝墓（ＳＴ01）の上に建てられていることから，ＳＢ08を建てるときには方形周溝墓の墳丘がもし残っていれば，削平して整地したものと考えられる。



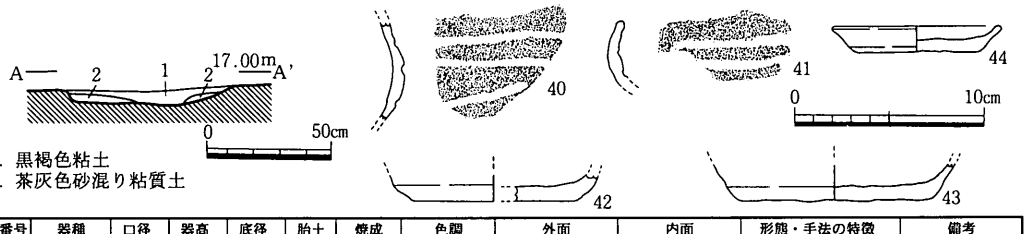
第31図　Ａ区ＳＢ08平・断面図（１／80）

ＳＢ09（第32図，図版９）

Ａ８区の北西コーナーでＳＢ04と重複して検出した，梁行１間×桁行２間の掘立柱建物である。梁行１間で西側が2.6m，東側が2.9m，桁行が２間で北側が6.4m，南側6.8mで少々歪んだ建物である。建物面積は中間値で18.2㎡≒5.5坪である。柱穴の平面形は直径20～40㎝の円形で，深さは20㎝前後と残りは悪く柱痕は確認出来なかった。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。建物の主軸方位はＮ－64°－Ｗである。柱穴から出土した土器よりこの建物は概ね13世紀中葉～後半の時期で，ＳＢ08と同時期である。



第32図　Ａ区ＳＢ09平・断面図（１／80）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
40	縄・深鉢				細・多	良好	灰黄褐・橙	ナデ	不明	磨消縄文	
41	縄・深鉢				粗・普	不良	褐	ケズリ	不明	磨消縄文	雲母
42	土・杯			8.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	金雲母
43	土・杯			10.4	細・普	良好	黒褐・明褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	金雲母
44	土・小皿	8.9	1.4	6.3	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	

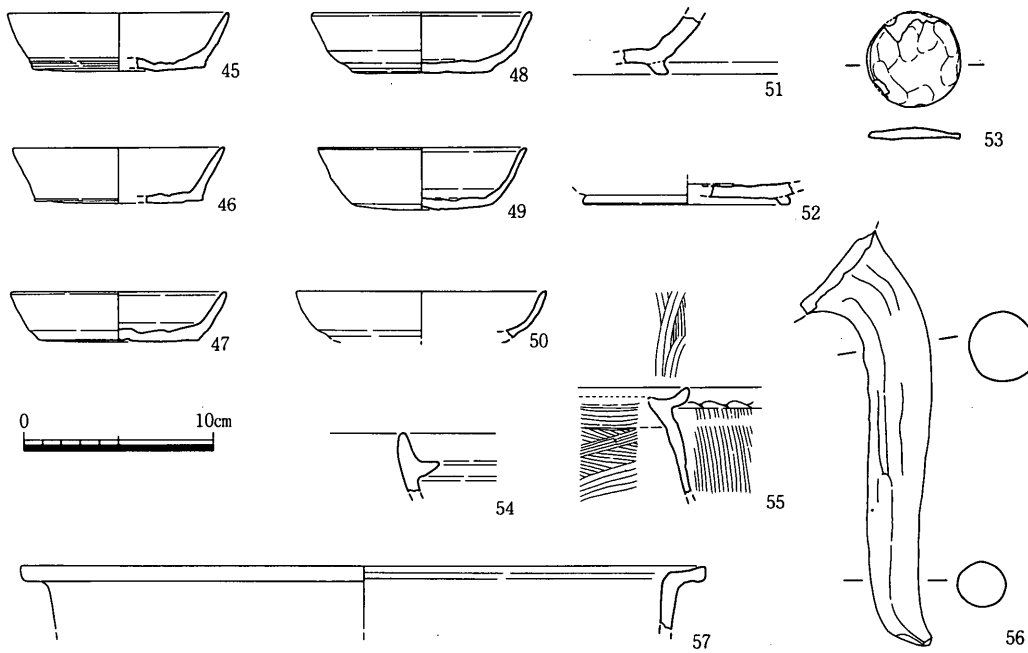
第33図　Ａ区ＳＤ13断面図（１／30），出土遺物（１／４）

ＳＤ13（第33図）

Ａ６区の東端のＳＤ06の西0.8ｍで検出した溝である。調査区の北壁から南へ１ｍの地点から始まり，ＳＤ06と並走しながら調査区外南側へと抜ける。幅30～70cm，深さ10～15cmで埋土は黒褐色粘土が主体となっている。溝より縄文時代～中世の土器が出土している。40・41は縄文時代後期前半の深鉢である。40は沈線の間は磨消している。41は沈線の間に縄文が残る。44は底部ヘラ切りの後に板状圧痕を施している。その他図化出来なかったが古代の土師器の削出し高台の椀などが出土している。この溝の埋没年代は最も新しい44の年代観から13世紀中葉～後半と考えられる。

ＳＤ14（第34図）

Ａ１区東部で検出した溝で，深さ10cm，幅35cm，長さ4.5ｍである。埋土は黒褐色粗砂



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
45	土・杯	11.6	3.0	9.0	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ起こし	
46	土・杯	11.0	2.8	8.8	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
47	土・杯	11.3	2.6	8.4	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
48	土・杯	11.6	3.1	7.4	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	ヘラ起こし	金雲母
49	土・杯	11.0	3.2	7.3	中・普	良好	灰黄・鈍い橙	ナデ	ナデ		
50	土・杯	13.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
51	須・壺				細・普	良好	青灰	ナデ	ナデ		
52	須・高台杯			10.8	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
53	土・不明				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・板ナデ	ナデ		
54	土・土釜				細・普	良好	にぶい橙・黒	ナデ	ナデ		
55	土・土鍋				中・普	良好	黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		
56	土・土釜				粗・普	良好	橙～灰褐	ナデ	ナデ		脚部
57	土・土鍋	36.0			粗・普	良好	鈍黄・灰黄褐	ナデ	ナデ		煤付着

第34図　Ａ区ＳＤ14出土遺物（１／４）

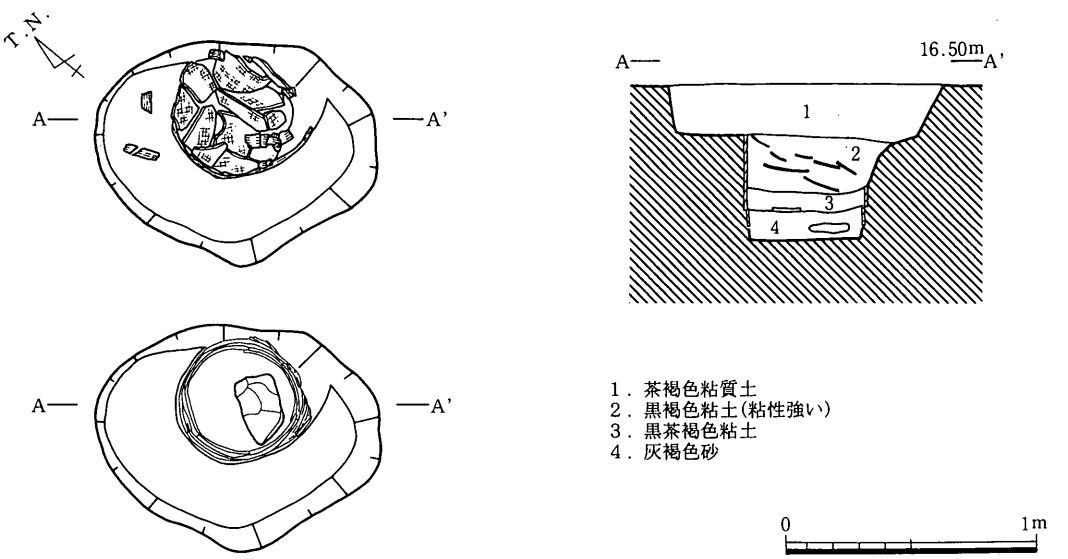
質土の単一層で，主に13～15世紀の土器が出土した。45～50は胴部の湾曲にバラエティーがあるものの，いずれも口径11～12cm，器高３cm前後の杯である。51は須恵器壷の底部で，外方に踏張る高台を持つ。53は円盤状の土製品で全体を作ったのちに焼いている。55は全面にきれいにハケ目を施している。

ＳＤ15

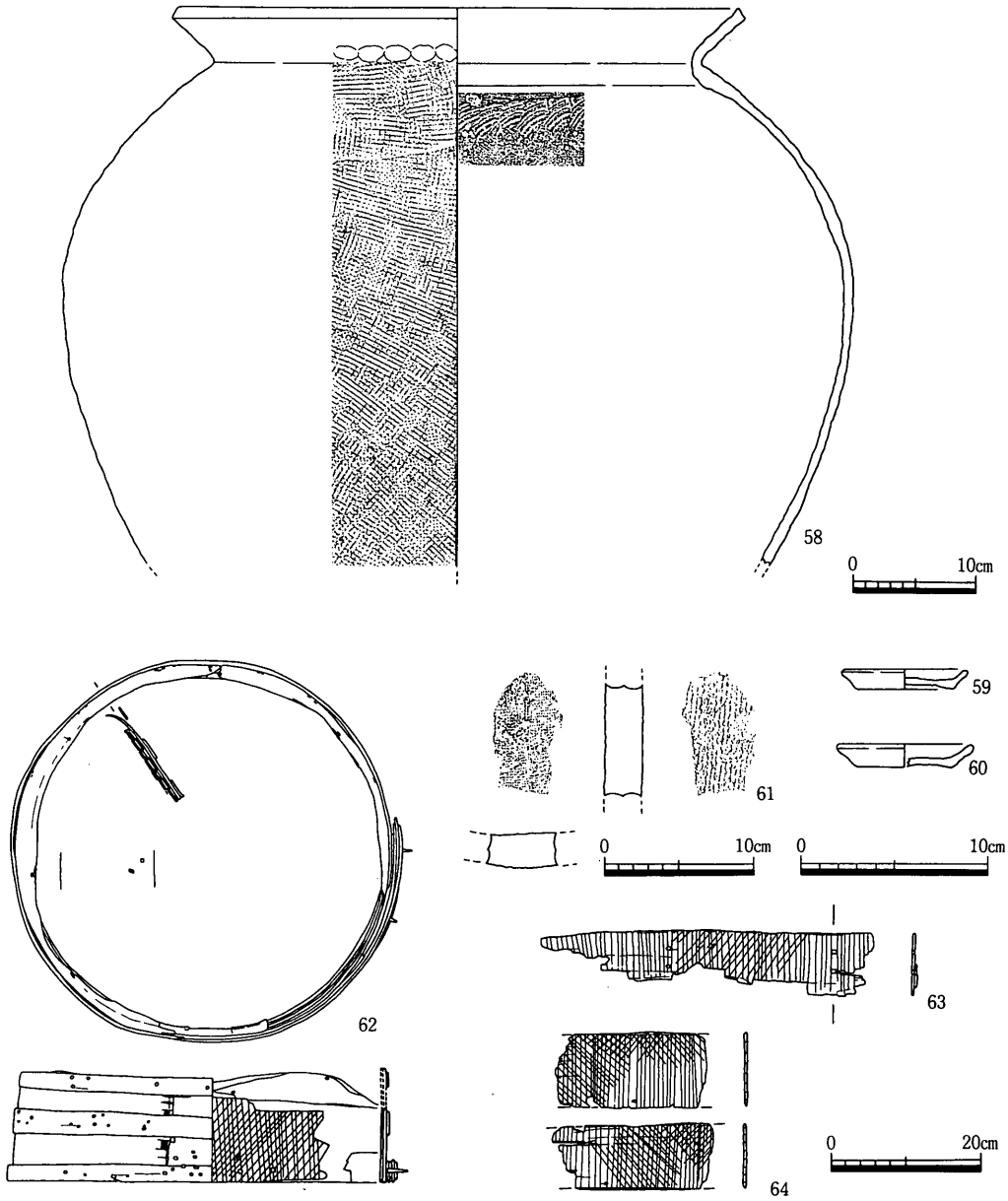
Ａ７区の中央やや東寄りで検出した溝である。幅30cm前後，深さ12cm前後，長さ4.6mと小規模なものである。中世と思われる土器の細片が少量出土したのみである。

ＳＥ01（第35・36図，図版10・11）

Ａ１区の西寄りで検出した井戸である。掘形の平面形は楕円形で長径1.13m，短径8.8m，深さ0.62mである。検出面から20cmで段掘りとなり底に至る。下半には曲物が据えてあり，曲物の幅だけ掘り込み裏込めは形成していない。また曲物は２段組んでいたが上段のものは崩れていた。曲物内の上半分の埋土は黒褐色粘土で粘性が極めて強いものであった。そして亀山焼甕が１個体分つぶれた状態で出土した。井戸を廃棄する時に水甕として使用していたものを，投げ捨てたものと考えられる。井戸の底は灰褐色砂層で30cm程の平石があった。曲物内は２層に分層出来たが特に大きな差ではなく，基本的には一度に埋まったものである。58は亀山焼の甕で外面には正格子の叩きを施し，内面は胴部上部に叩きの当て具痕が残る他はナデ消している。61は平瓦で外面に縄目叩きを施している。62は円形の曲物である。直径52cm程で現存高は14.8cmである。曲物の本体は樺革で綴じており，１列の外



第35図　Ａ区ＳＥ01平・断面図，遺物出土状況（１／30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
58	甕・甕	44.6			細・少	良好	灰白・暗灰	格子目叩き	叩き→ナデ	内面当て具痕→ナデ	
59	土・小皿	6.6	1.1	5.0	細・普	良好	褐灰・黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
60	土・小皿	7.1	1.2	5.1	細・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
61	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕			中・普	灰白	良好		7.6

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
62	曲物	49.7	14.8	0.5	柾目		
63	曲物	44.0	8.2				
64	曲物				柾目		

第36図　A区ＳＥ01出土遺物（1／4，1／5，1／6，1／10）

綴じとなっている。また外周に3段のたがを巻いて補強しており，たがと曲物は木釘で接合している。たがには多数の釘穴があいており，数回補強したものと思われる。63・64は曲物の側板の一部である。井戸の廃絶時期は亀山焼甕の年代観から，13世紀中葉と思われる。

ＳＫ03

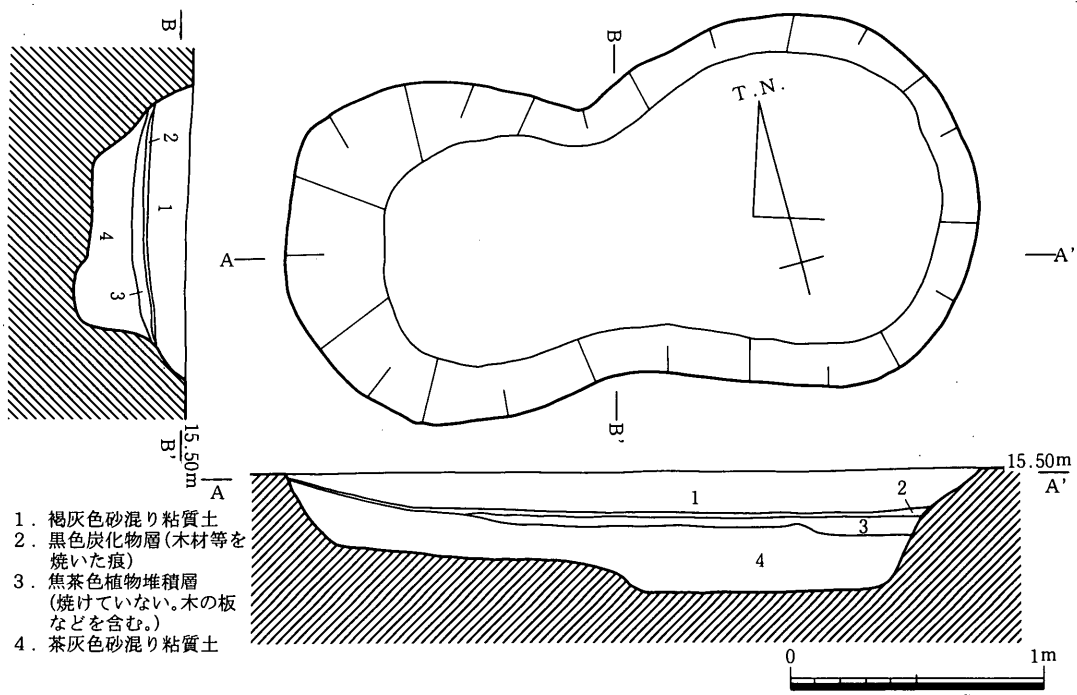
Ａ８区の東寄りで，ＳＢ08と重複して検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形である。長辺1.3m，短辺0.7m，深さ20cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。埋土中から十瓶山産瓦質土器の細片が出土した。12～13世紀のものと思われる。

ＳＫ04

Ａ８区の北西コーナー部で，ＳＢ09と重複して検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形である。長辺1.3m，短辺0.45～0.5m，深さ20～30cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。埋土中から十瓶山産瓦質土器と土師器椀の細片が少量出土した。12～13世紀ぐらいのものと思われる。この土坑はＳＢ09の桁行列の内側に位置することからＳＢ09に伴う土坑の可能性もある。

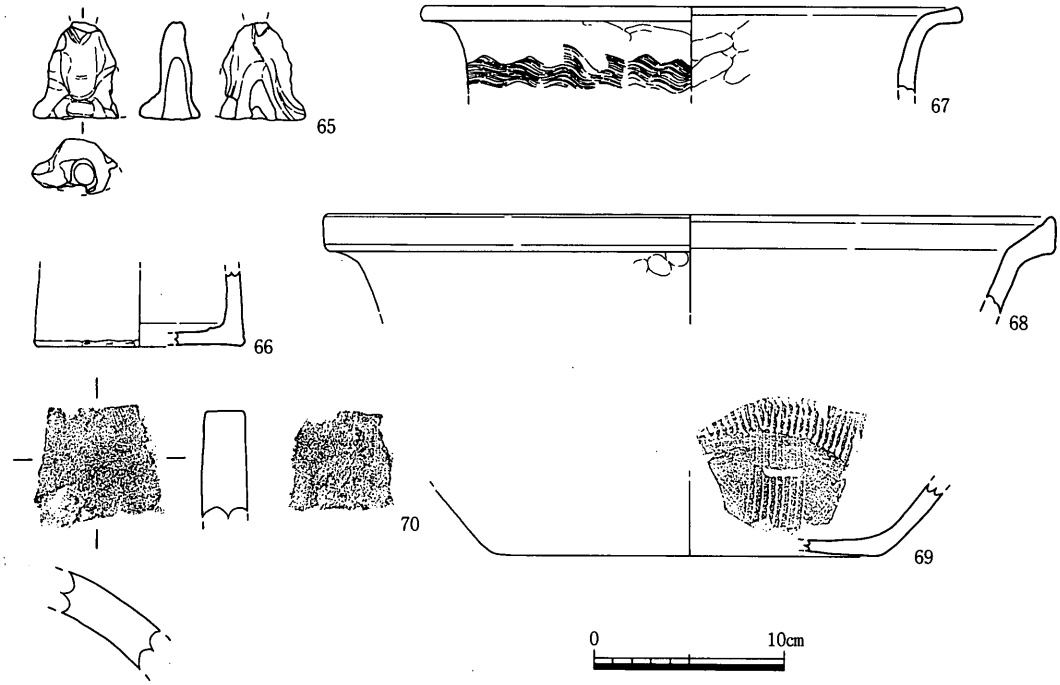
ＳＫ05（第37・38図）

Ａ２区中央で検出した。平面形は楕円形の中ほどを少しくびらせた形をしている。幅は



第37図　Ａ区ＳＫ05平・断面図（１／30）

2.75m×1.45m，深さは0.35～0.45mで西側がやや浅い。埋土は3層にわかれ，上下の灰色砂質シルトに木炭層が薄くはさまれた状態になっている。木炭層は細かくみると更に2層にわかれ，下の層は藁を連想させる植物が堆積し，中には焦げていない板も含まれていた。このような状況から，穴にある程度土が埋まった時点でこの中で植物などを焼いたが，上面だけ焼け下の方は焼けきれずにおわったことが読み取れる。土器は第3層から出土した。65は土人形である。首はなく正座し両手を前にそろえている。胴には棒状工具をつきさして空気抜き穴をあけている。66は備前焼の壷である。69は焼き締め陶器のすり鉢である。内面には単位の異なるおろし目が2段施されている。67は土師質の鉢で外面に櫛描き波状文を施している。68は土師質の鉢で，口縁部は短く鋭く屈曲し，端部を上方へ少しつまみ上げている。70は丸瓦で端部は平坦に仕上げている。出土土器からＳＫ05は中世以降に作られたと考えられる。



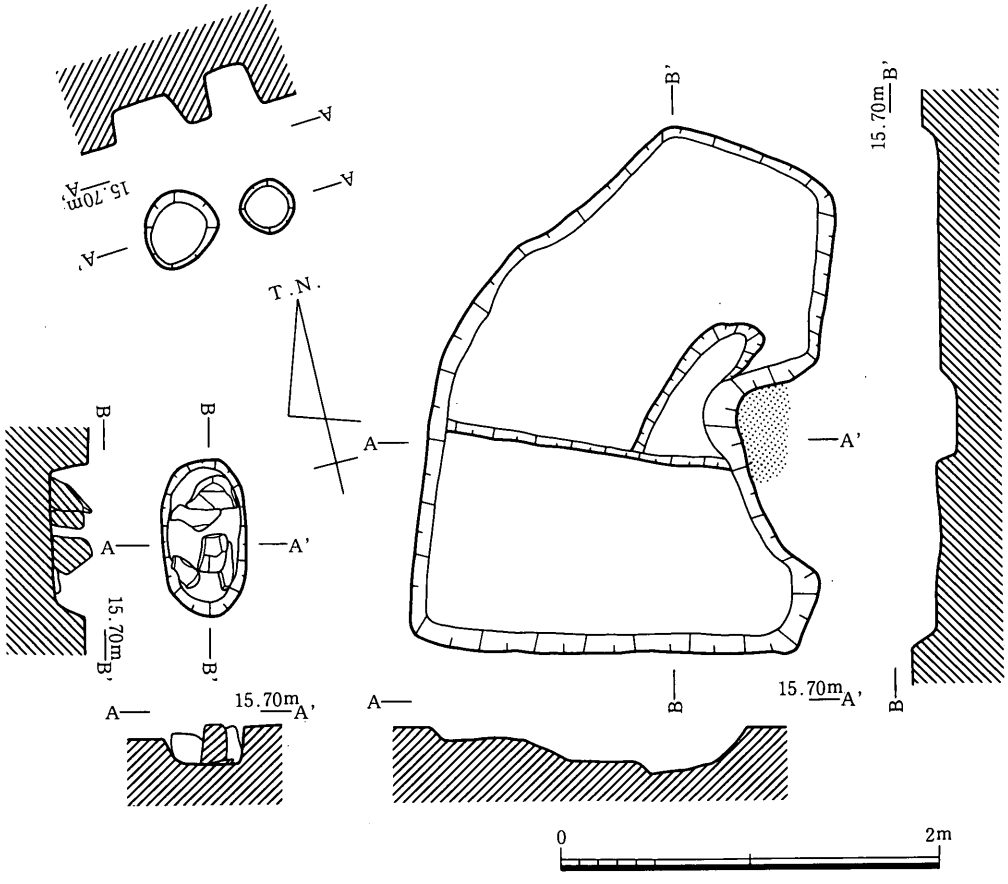
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
65	土・土人形				細・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
66	備・壷			11.0	中・普	良好	明赤褐・赤褐	ケズリ→ナデ	ナデ		
67	土・鉢	28.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	波状文	
68	土・鉢	38.0			粗・普	良好	灰黄・灰白	ナデ	ナデ		
69	焼・すり鉢			20.0	細・普	良好	赤褐・明赤褐	ナデ	ナデ	金具の櫛による条溝	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
70	丸瓦	2.6	ナデ	布目圧痕→ナデ		16	中・普	暗灰～灰白	良好		6.2

第38図　Ａ区ＳＫ05出土遺物（1／4）

ＳＨ01，ＳＰ16（第39図，図版11・12）

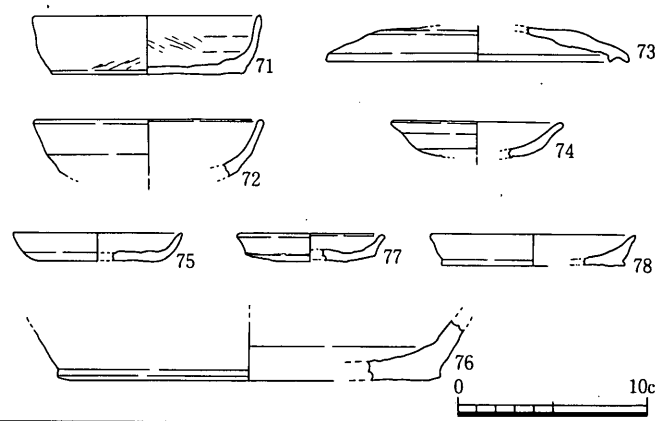
Ａ２区北東部で検出した。縦横５ｍの範囲に不定形の10～20cmの浅い落ち込みが２つあり，南東部に赤く焼けた地面が存在したためこの周辺を竈跡とし，これらの落ち込みを浅い竪穴状の平地住居跡と考えた。焼土面の前はやや深めに掘り込まれている。落ち込みの南西にはＳＰ16があり，楕円形の穴のなかに数個の石を立てている。用途は不明だが住居内に作られていたものであろう。他にピットが幾つかあるが積極的に柱穴とすべき根拠はない。遺物は出土しなかったが周辺の状況や包含層出土土器から中世以降と考えられる。



第39図　Ａ区ＳＨ01，ＳＰ16平・断面図（１／40）

ＳＰ09～13（第40図）

71～73はＳＰ09，74はＳＰ10，75はＳＰ11，76はＳＰ12，77・78はＳＰ13から出土した。74の瓦器小皿は内外面ともヘラミガキは認められない。76は須恵器壷の底部である。ＳＰ09は71から13世紀，ＳＰ10は14世紀頃，ＳＰ11・13は13世紀後半と考えられる。



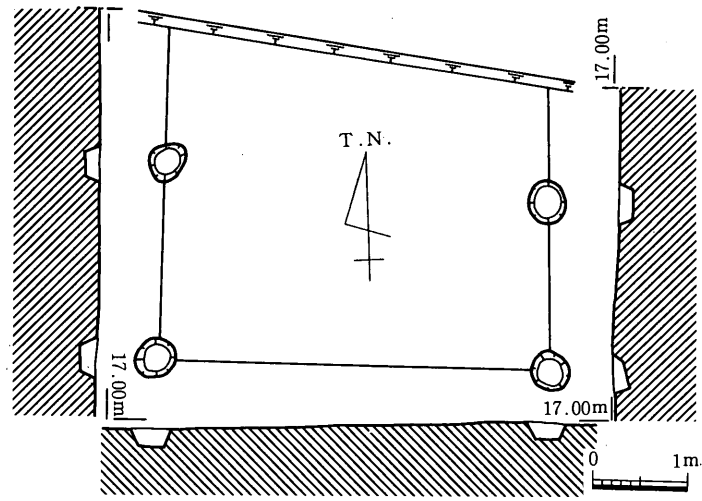
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
71	土・杯	12.0	3.0	10.0	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
72	土・杯	12.1			細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
73	須・杯蓋	15.5			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
74	瓦・小皿	9.0			中・普	良好	暗灰・黒	ナデ	ナデ・板ナデ	ヘラ切り	和泉産？
75	土・小皿	9.0	1.4	6.6	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底回転糸切り	金雲母
76	須・壺			18.8	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
77	土・小皿	7.5	1.4	6.8	細・普	良好	橙　一部黄灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	金雲母
78	土・小皿	10.8	1.6	10.5	中・普	良好	黒褐・黄橙	ナデ	ナデ	底糸切り	灯明皿？金雲母

第40図　Ａ区ＳＰ09～13出土遺物（１／４）

(6)　時期不明遺構

ＳＢ10（第41図，図版10）

Ａ６区東側で検出した梁行２間×桁行２間以上の掘立柱建物である。桁行は調査区外へと続くので詳細は不明である。梁行は２間で4.1ｍ，桁行は調査区内で3.6ｍである。柱穴の平面形は円形で，直径40cm，深さは20cm程度で残りは悪い。柱痕はすべての柱穴で確認出来なかった。建物の主軸方位はＮ－３°－Ｅで南北棟となっている。柱穴内より遺物が全く出土しなかった

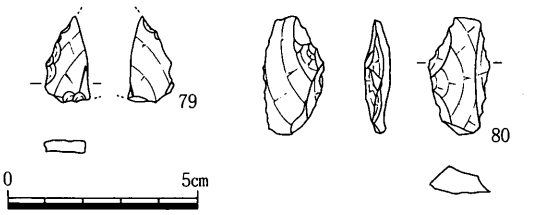


第41図　Ａ区ＳＢ10平・断面図（１／80）

のと，柱穴の埋土も他の建物のものと異なっているため，建物の時期は不明である。しかし建物の主軸方位が古代の建物群に類似していることと，ＳＢ10のすぐ東側の古代の溝（ＳＤ06）が，この建物とほぼ平行に走ることなど他の遺構との関連性から推測すると，この建物は古代の建物の可能性が高い。

ＳＰ14・15（第42図）

79は二次加工のある剥片で途中で折れているが２辺にやや大きめの剥離を施している。80は横長剥片で，側縁部に背面と腹面からそれぞれ交互に施した剥離痕がある。両者ともサヌカイト製である。縄文時代～弥生時代の幅が考えられるが，周辺で縄文土器がある程度出土していることから，縄文時代の可能性が高い。



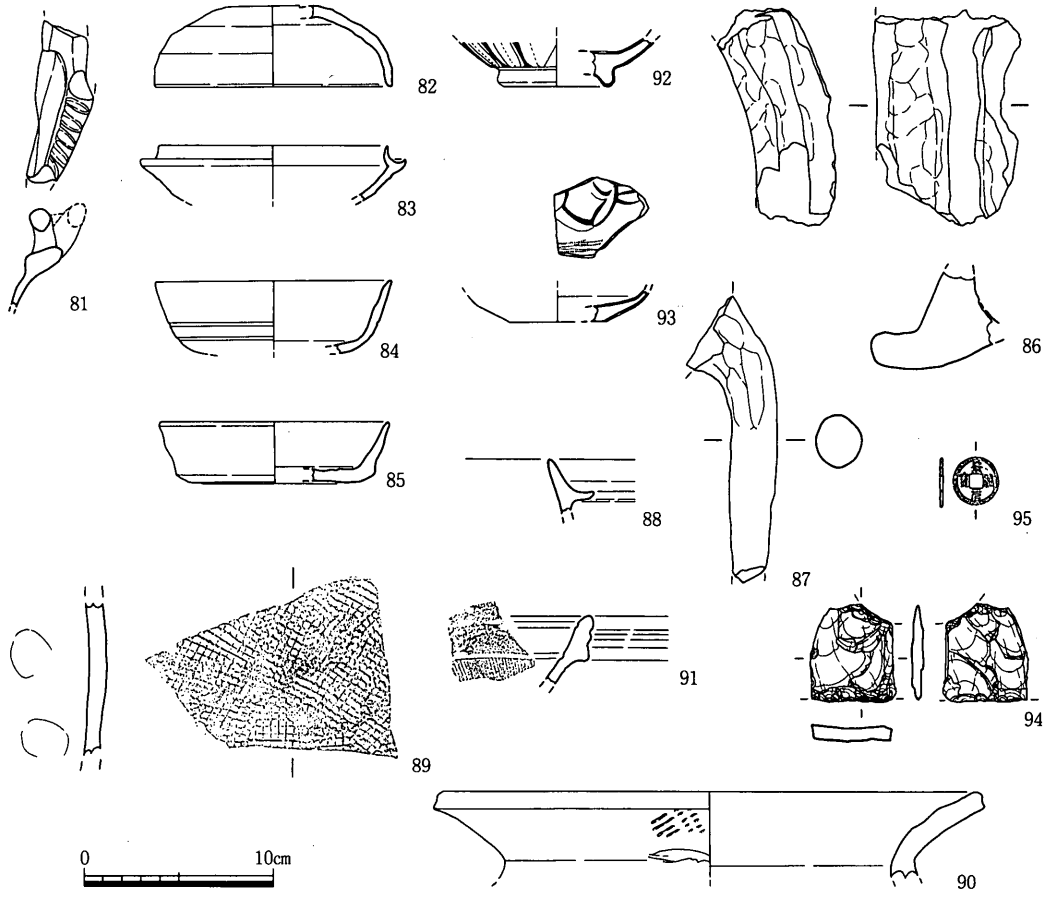
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
79	二次加工のある剥片	2.3	1.1	0.3	0.9	サヌカイト		
80	横長剥片	3.1	1.6	0.7	2.8	サヌカイト	側面にネガ側とポジ側からの剥離	

第42図　Ａ区ＳＰ14・15出土遺物（１／２）

(7)　包含層出土遺物（第43～52図）

81～98はＡ１区包含層出土遺物である。81は縄文時代後期の波状口縁の深鉢の波頂部で，２本の粘土紐を隆起させて透し穴を作っている。外側の粘土紐には刻み目状の沈線を入れている。82・83は７世紀前半の須恵器杯である。85は11～12世紀の土師器杯である。86は竈の焚き口部である。89は胎土が灰色でやや軟質のもので，外面が黒色で格子目の叩きを施すといった特徴から亀山焼の甕と考えた。90は外面口縁部直下に平行叩きを残す。91は焼き締め陶器のすり鉢である。口縁部を上下に拡張し外側に２本の凹線を入れている。92は外面に蓮弁の文様を描く。93は内底見込みに草花文を描く。ともに13世紀ごろのものであろう。95は景祐元宝である。96～98はＡ１区包含層出土瓦である。96は平瓦で凸面に斜位の縄目叩きを施している。

99～107はＡ２区包含層出土遺物である。100は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部端部とその直下の突帯上に刻み目を入れている。さらに刻み目の下には縦方向のヘラ描き沈線が施される。101は11～12世紀の土師器である。102は両面にカーボンを付着させた黒色土器Ｂ類の椀である。103はいわゆる鉄鉢形の須恵器で，８世紀前半頃のものである。105は土師質の土釜で胴部上半はナデており，下半には格子目叩きが残る。106は土師質のすり



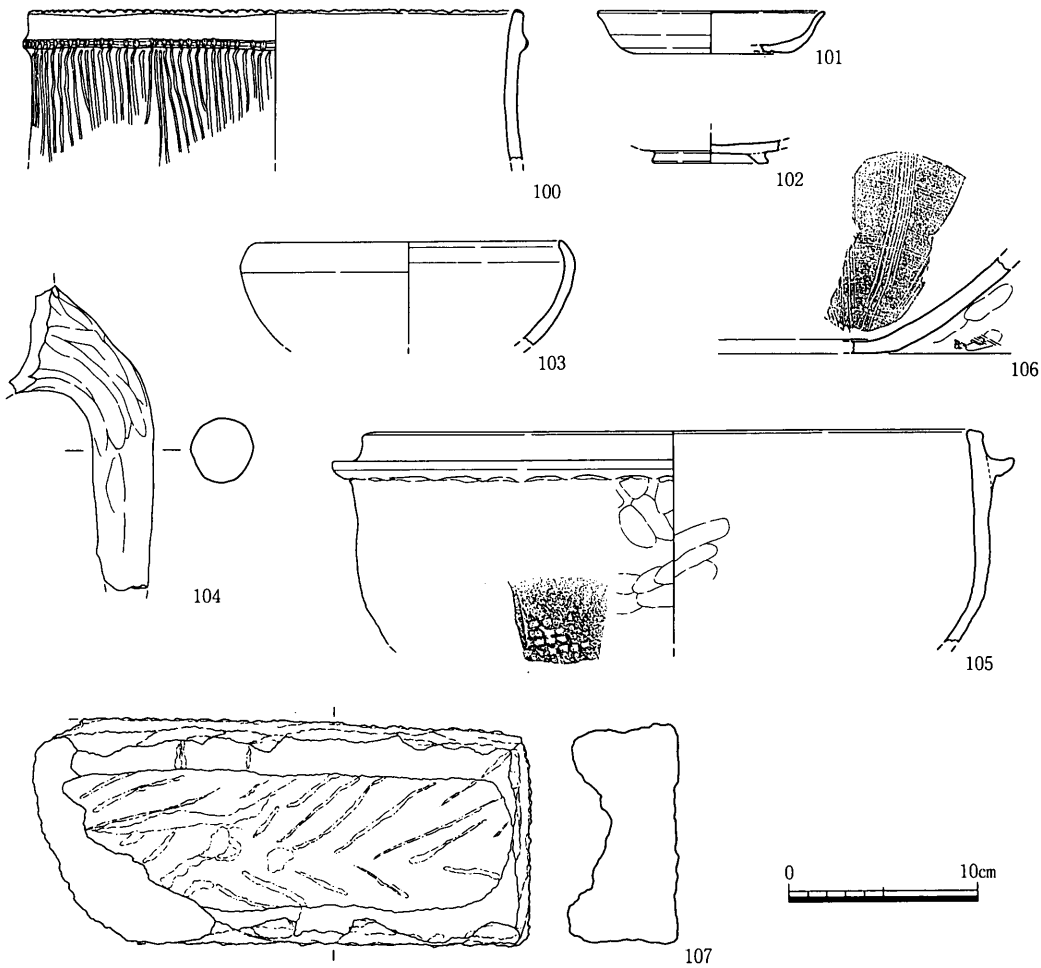
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
81	鉢・深鉢				中・普	良好	鈍黄橙・褐灰	ナデ	ナデ		
82	須・杯蓋	12.6			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
83	須・杯身	12.0			中・普	良好	青灰	ナデ	ナデ		
84	須・高杯	12.4			細・普	良好	青灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
85	土・杯	12.0	3.1	9.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
86	土・竈				粗・多	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
87	土・土釜				中・普	良好	橙	ナデ	不明		脚部
88	土・土釜				粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
89	亀・甕				粗・普	良好	黒・灰白	叩き	ナデ		
90	須・甕	28.0			粗・普	良好	灰	叩き・ナデ	ナデ		胎土は白
91	焼・すり鉢				細・普	良好	黒褐	ナデ	ナデ	金具の櫛による条溝	
92	青・碗			6.2	精緻	良好	オリーブ黄	ナデ	ナデ		
93	青・平底皿			5.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
94	打製石庖丁	4.4	4.9	0.8	23	サヌカイト		

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
95	銅	古銭（景祐元宝）	2.5	2.5	0.1	3.3	1034年初鋳	

第43図　Ａ１区包含層出土遺物（１／４）

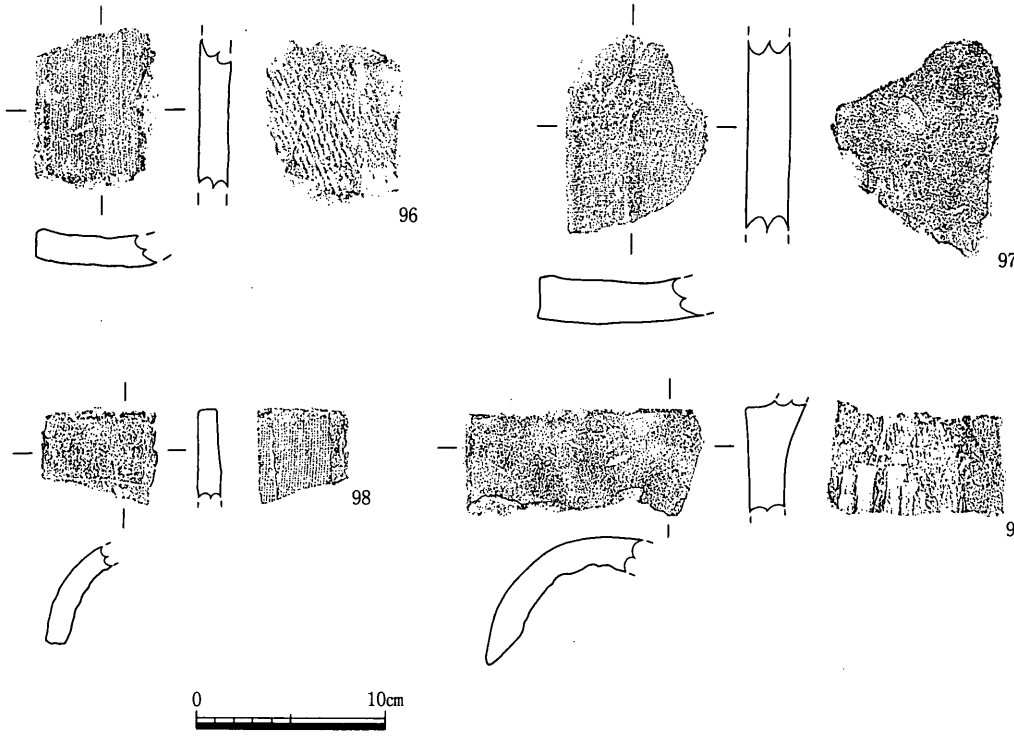
鉢である。107は石製品で片方の面の中央部が窪んでいる。窪みの中には綾杉状の線が掘り込んである。途中で折れているため全体の形は不明であるが，鋳型の可能性がある。99は丸瓦で凹面には模骨痕が残っている。凸面はナデており，側縁部は斜めに仕上げている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
100	鍋・深鉢	26.2			粗・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ	刻み目・櫛描沈線文	
101	土・皿	12.0	2.2	8.1	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
102	黒B・椀			6.2	中・普	良好	黒褐	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
103	須・鉢	16.2			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
104	土・土釜				粗・普	良好	橙～灰褐	ナデ	不明		脚部
105	土・土釜	32.8			中・普	良好	浅黄橙～灰褐	ナデ・叩き	ナデ		
106	土・すり鉢				微・普	良好	灰～浅黄・灰	ナデ→ハケ目	ナデ	4本1単位の条溝	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
107	用途不明品	26.3	11.9	5.7	2191	凝灰質レキ岩		

第44図　A２区包含層出土遺物（１）（１／４）

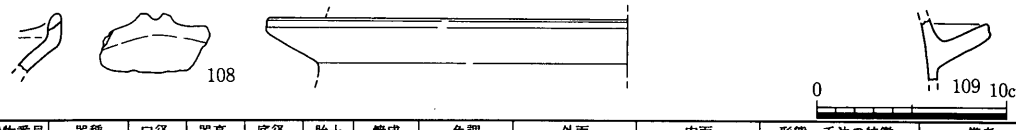


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
96	平瓦	1.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2		中・普	浅黄橙	良好		8.1
97	平瓦	2.3	板ナデ・ナデ	布目圧痕	1		粗・普	灰白	良好		11.3
98	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	12	16	中・普	灰白	良好		5.1
99	丸瓦	1.8	ナデ	ナデ・板ナデ	13		粗・普	灰～暗灰	良好		5.5

第45図　A１・２区包含層出土遺物（１／４）

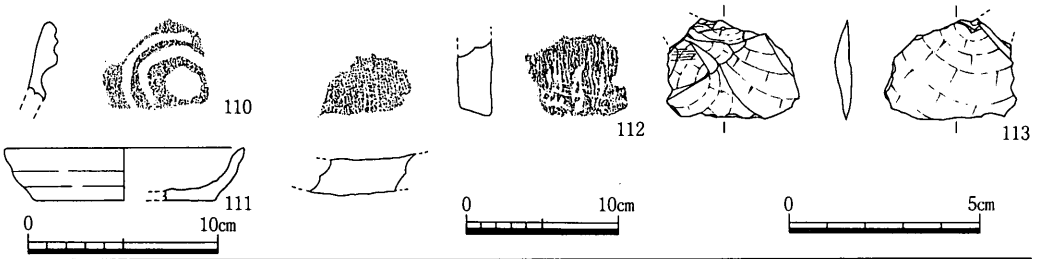
108はＡ４区の包含層から出土した縄文時代後期の波状口縁の深鉢の波頂部で，小さな２つの突起が直立する。

109はＡ５区の包含層から出土した土師質の土釜である。鍔状突帯は斜め上方に直線的に立ち上がる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
108	縄・深鉢				中・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		
109	土・土釜	38.0			中・普	良好	暗灰・灰	ナデ	ナデ		

第46図　A４・５区包含層出土遺物（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
110	縄・深鉢				中・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	波状口縁	
111	土・杯	12.6	2.7	9.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
112	平瓦	2.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ		1 6	細・普	灰黄	良好		5.0

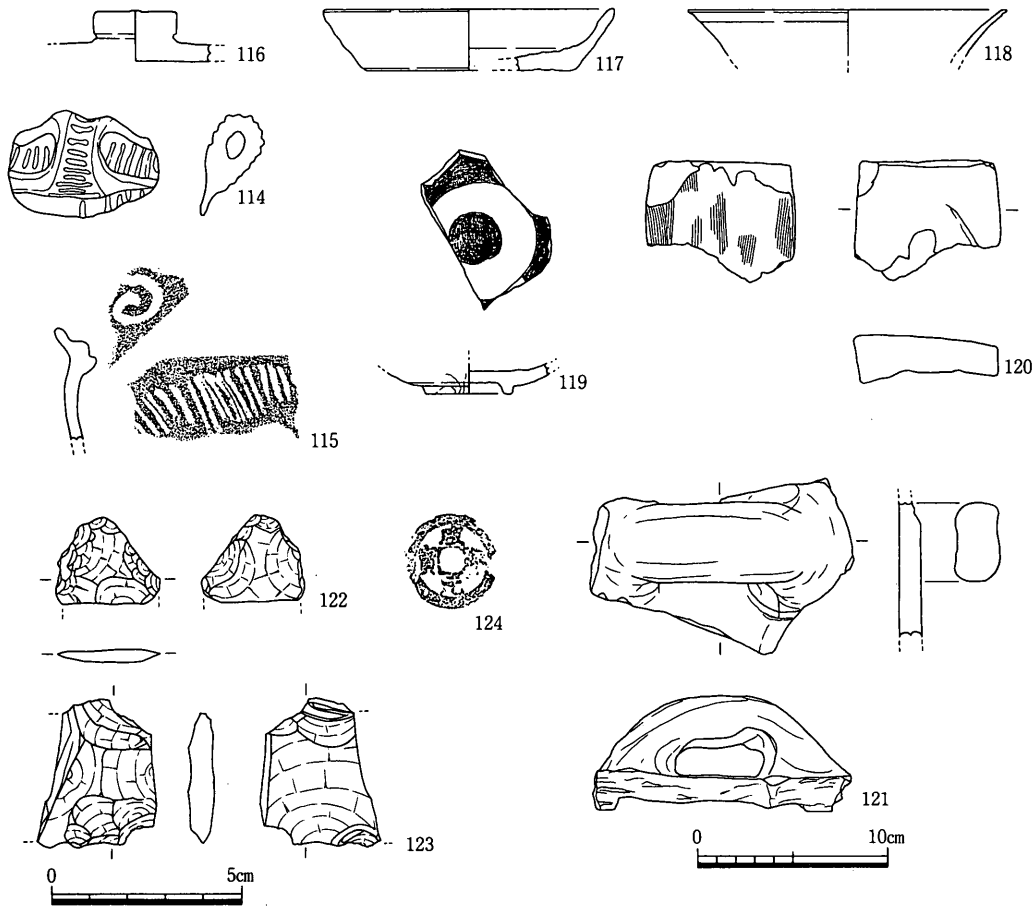
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
113	剥片	3.5	3.5	0.4	3.5	サヌカイト	1部に擦痕あり	

第47図　A 6 区包含層出土遺物（1／2，1／4，1／5）

110～113はＡ６区包含層出土の遺物である。110は縄文時代後期中葉の深鉢である。111は土師器杯で，底部はヘラ切りとなっている。112は平瓦，113は剥片であるが一部に擦痕がある。

114～124はＡ７区包含層出土遺物である。114は縄文時代中期末葉の深鉢の口縁部である。横位の橋状把手の部分でおそらく山形口縁になるものと思われる。115は縄文時代後期中葉の深鉢の口縁部である。口縁部端部は内傾し，端面に渦巻状の文様を施している。116は焼成不良の須恵器杯の宝珠つまみで内面に煤が付着している。117は土師器杯で，底部ヘラ切りとなっている。118は青磁碗で，口縁部はやや反り気味に立ち上がり，端部を横へつまみ出している。内面に重ね焼きの痕がある。龍泉窯系のものである。120は用途不明の土製品である。周囲は丁寧に面取りされており，窪んでいる面にはハケ目が施されている。反対側の面には端部から3.5cmほど下に，斜めに指先大の穴が見られるが貫通はしていない。道具瓦の可能性がある。121は全体の器形はよく分からないが，把手の部分である。内面は段をもち一段低くなっており，その部分には赤色顔料が付着している。焼成は瓦質となっている。122は側縁に二次加工のある剥片，123はやや厚手の剥片である。124は咸平元宝で998年初鋳の北宋銭である。

125～138はＡ８区包含層出土遺物である。125～132は縄文時代後期土器である。129は口縁部を肥厚させ内側に拡張している。口縁部外面に沈線を１条施し，沈線の下部に縄文を施している。130は波状口縁で口縁部を肥厚させ，外面に文様を施す。131は深鉢の胴部屈曲部下部の破片である。外面に逆Ｕ字形の文様を施している。北白川上層式に見られる文様である。132は直線的な胴部をもつ深鉢である。口縁部は肥厚しないで外面に沈線を



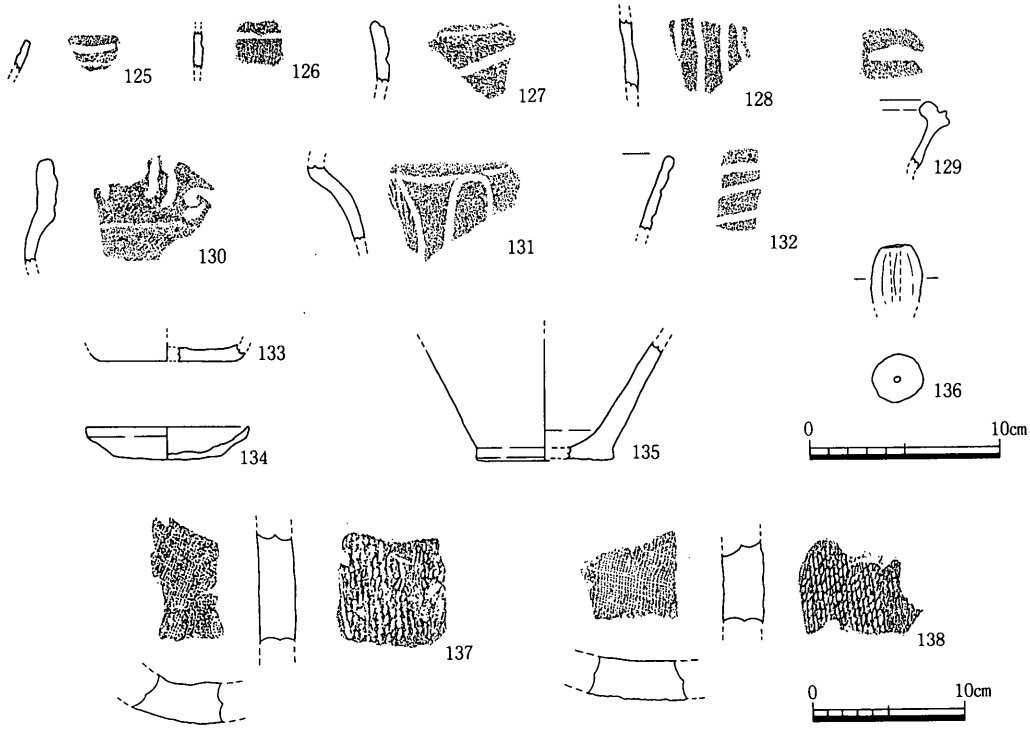
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
114	縄・深鉢				中・普	良好	にぶい黄橙	不明	ナデ		
115	縄・深鉢				中・多	良好	褐	不明	ナデ	波状口縁	
116	須・杯蓋				細・普	不良	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	内面に煤　宝珠つまみ	金製母
117	土・杯	15.2	3.1	10.8	細・普	良好	褐灰・黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
118	青・碗	17.8			精緻	良好	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ	気泡多数あり	
119	磁・碗			4.6	精緻	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ	削出ｼ高台　釉灰ｵﾘｰﾌﾞ	
120	土・不明				細・普	良好	黄灰	ハケ目	ナデ	側面面取り　未貫通穴	金製母
121	瓦質・蓋				細・普	良好	暗灰	ナデ	ナデ	底に赤色顔料付着	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
122	二次加工のある剥片	2.2	2.7	0.3	3.1	サヌカイト		
123	剥片	3.0	3.9	0.7	10.4	サヌカイト		

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
124	銅	古銭(咸平元宝)	2.5	2.5	0.1	1.7	998年初鋳	

第48図　Ａ７区包含層出土遺物（１）（１／２，１／４）

施している。134は土師器小皿で口縁部端部を強くナデて外側に面を作り出している。136は土錘で中央部に細い穴をあけている。137・138は平瓦で両者とも凸面に縄目叩きを施しているが138のものはやや斜めになっている。また137の凹面には布の綴じ合わせ痕が見られる。

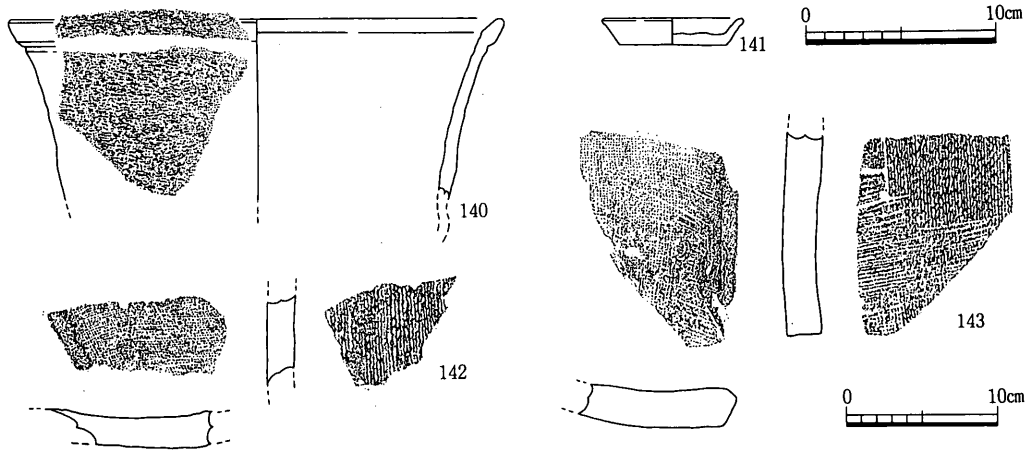


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
125	縄・深鉢				精緻	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁内面に沈線	
126	縄・深鉢				細・多	良好	橙	ナデ	不明		
127	縄・深鉢				細・普	不良	褐灰・灰黄褐	ナデ	ナデ		
128	縄・深鉢				中・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ		金雲母
129	縄・深鉢				細・少	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	口縁外に縄文	金雲母
130	縄・深鉢				中・普	良好	赤褐～暗赤褐	ナデ	ナデ	波状口縁	
131	縄・深鉢				細・多	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		金雲母
132	縄・深鉢				細・多	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
133	土・杯？			7.2	細・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	金雲母
134	土・小皿	8.6	1.7	5.6	細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板ナデ	
135	弥・甕			7.2	中・多	良好	黄褐・明赤褐	不明	ナデ		
136	土錘	短軸2.7	長軸3.0		中・多	良好	にぶい黄褐	ナデ	不明		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
137	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕			中・普	灰白	良好	布のとじ合わせ痕あり	7.4
138	平瓦	2.7	縄目叩き・ナデ	布目圧痕			精緻	青灰	良好		5.5

第49図　Ａ８区包含層出土遺物（１／４，１／５）

140～143はＡ１区西半部下層包含層出土の遺物である。140は縄文時代後期の深鉢である。口縁部は肥厚し，やや外反する。また端部下部と胴部の境には明瞭な段をもっている。内・外面ともに文様はなく，ナデている。142・143は平瓦である。142は凹面に布の綴じ合せ痕があり，凸面には縄目叩きを施す。143は両面に粘土の糸切り痕が残っている。

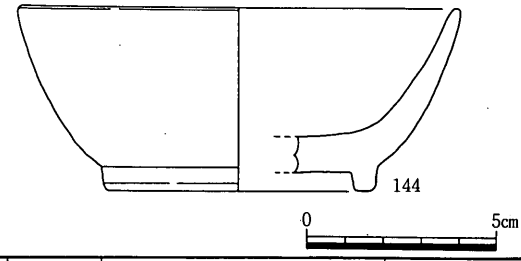


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
140	縄・深鉢	25.5			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母
141	土・小皿	7.4	1.4	5.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
142	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕			中・多	灰白	良好	布のとじ合わせ痕あり	5.3
143	平瓦	2.4	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	6	16	粗・普	灰白	良好		13.0

第50図　A１区西半部下層包含層出土遺物（１／４，１／５）

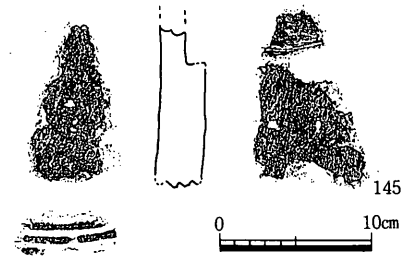
144はＡ７区包含層出土の木製の椀である。全体に黒色の漆を塗っている。体部と高台は刳り貫きにより作っており、高台は断面方形でしっかりと接地している。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
144	椀（刳り物）	11.6	4.8	7.0	芯持		

第51図　A７区包含層出土遺物（２）（１／２）

145はＡ２区包含層出土の軒平瓦である。瓦当の中央部分が残存している。瓦当部の文様は四重弧文で，顎部は幅広の段となっている。現存部で凹・凸面ともにナデており，瓦当部の厚さは3.0cmとなっている。平瓦部と顎部の段差は1.3cmある。



遺物番号	器種	瓦当厚	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	瓦当文様	顎部	形態・手法の特徴	残存長
145	軒平瓦	3.0	ナデ	ナデ			粗・普	暗赤灰	良好	四重弧文	段	幅広の顎部	10.6

第52図　A２区包含層出土遺物（２）（１／５）

3．小結

Ａ調査区では縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した。

縄文時代では主に包含層からではあるが，後期の縁帯文土器が出土した。１・２・110・115・129～131はいわゆる津雲Ａ式で，永井Ⅰ式の少し前に位置する土器群である。遺構としてはＳＤ01があり，Ｄ調査区で出土した彦崎Ｋ１式（＝永井Ⅱ・Ⅲ式）の前段階にＡ調査区を中心に人々が生活を営んでいたと考えられる。

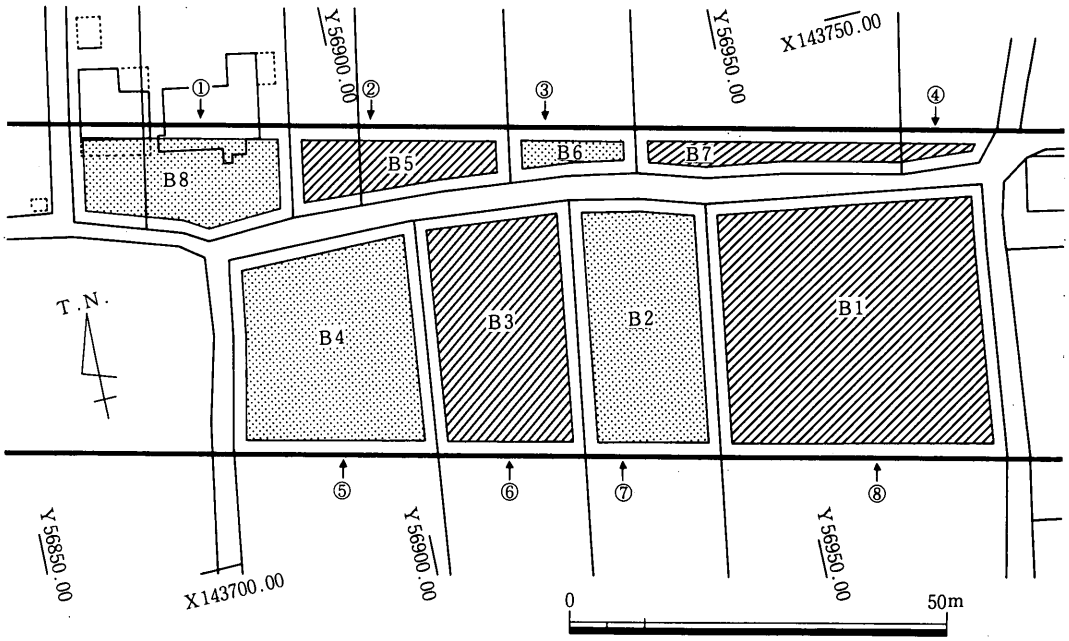
弥生時代ではⅣ期の方形周溝墓が注目される。香川県内でもまだ類例は少なく貴重な資料である。検出したのは１基のみであり，この墓が首長墓的なものか周囲に群集するうちの１基かは不明である。Ⅳ期の住居は検出していないが，溝や土坑などはＤ～Ｇ調査区で検出している。しかし距離的にやや離れすぎているため同一集団のものとは考えにくい。

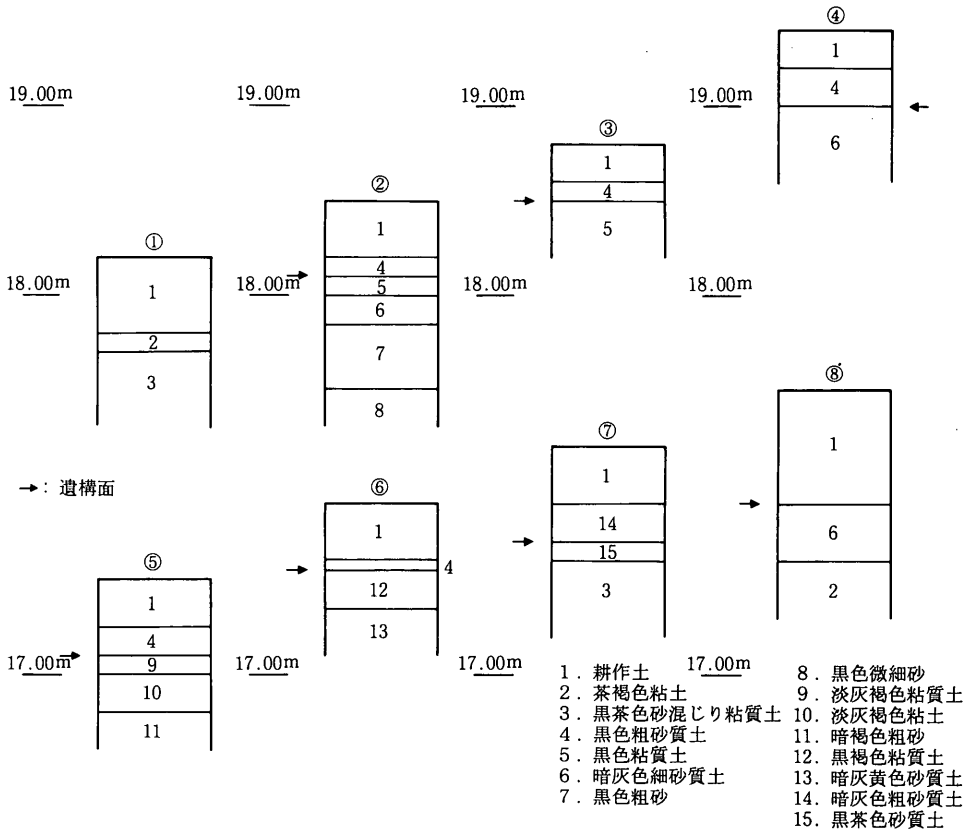
古墳時代では土壙墓を１基検出したのみである。調査区内で他に遺構・遺物を確認していないが，本遺跡の周囲には後期古墳が多くあり，調査区の周辺に古墳を造営するには至らなかった人々が土壙墓を築いた可能性は高い。

古代ではＡ７区とＡ８区を中心とした掘立柱建物群がある。特にＳＢ01は群を抜く大型の建物である。これらの建物群は８世紀後半～９世紀初頭ごろで２時期に分かれる。建物はほぼ東西方向で，柱列を合わせるなど規則的な配置となっている。またＳＤ06とＳＤ07はこれらの建物群の東側を画する溝の可能性がある。また古代末の12世紀ではあるが，土壙墓（ＳＴ03）を検出したことは当時の葬制を考える資料となる。

中世では掘立柱建物，土坑，溝，井戸が散在する程度であり，集落としてはまとまりを欠くものである。

以上のようにＡ区では，縄文時代後期の土器群，弥生時代の方形周溝墓，古代の掘立柱建物群が注目される資料である。





第53図　B区小調査区割図（1／1000），基本土層柱状図（1／40）

第54図　B区遺構平面図（1／400）

第２節　Ｂ調査区

１．調査区の概要（第53・54図）

南北幅40m，東西長120mの範囲を占めるＢ調査区は８つの小区に分けて調査を行なった。標高はおおよそ17～19mである。東と西では１mの標高差があり，緩やかに西に下っている。調査前には田畑や宅地に利用されており，中央には東西に用水路および小道が走っていた。この道を境に南と北でも１m近い段差が存在し，もっとも低いＢ４区ともっとも高いＢ７区では２mの標高差ができている。

Ｂ調査区では遺構面が１面確認されている。この遺構面は場所によって土色・土層に多少の変化があり，遺構検出に手間取ったが，主として黒色に近い粘性のある砂質土で構成されていた。遺構面の有無を確認するためにさらに下にトレンチ掘削を試みた結果，砂やシルトの水平堆積が厚さ２m以上にわたってみられた。扇状地形による堆積作用によるものと考えられるが，ここからは遺物はまったく出土しなかった。

２．調査の成果

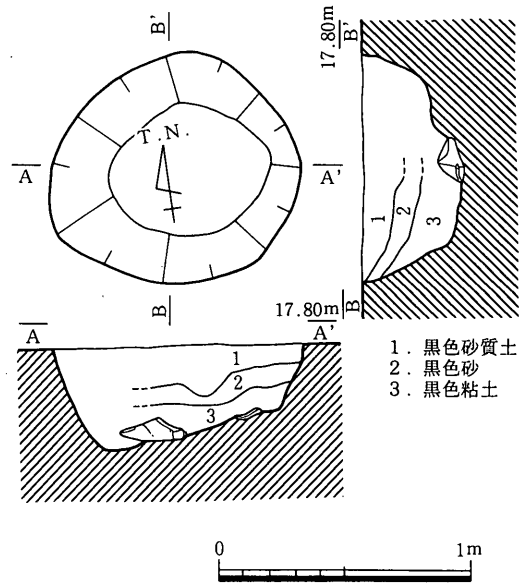
(1)弥生時代の遺構・遺物

ＳＫ01（第55図）

Ｂ２区西部で検出した。平面形は円形で，径約１m・深さ0.4mである。埋土は３層に分かれるが，明瞭な差はない。弥生時代の土器の細片が少量出土し，埋土の色からも弥生時代の遺構と考える。

ＳＫ02（第56・57図）

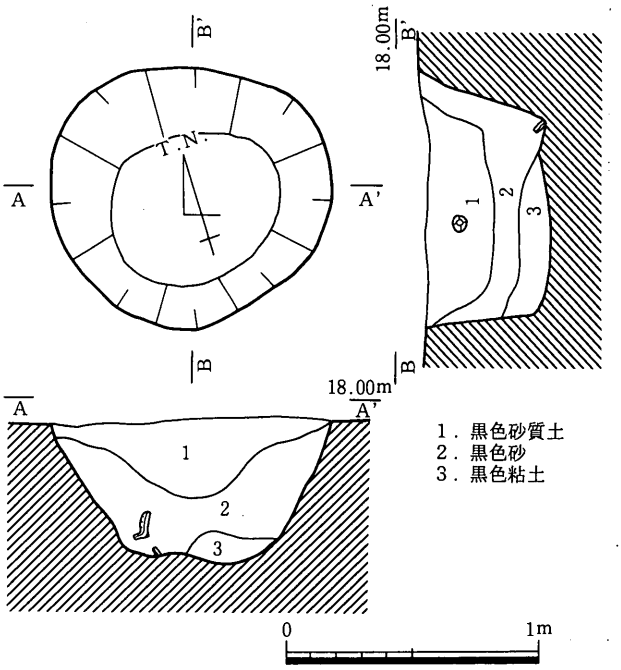
Ｂ２区西部で検出した。平面形は円形で，径約１m・深さ0.5mである。埋土は３層に分かれる。弥生時代Ⅴ期前半の土器片が数点出土した。１～３は１層，４・５は２層からであり，層による時期差はないと考えられる。１・４は甕の口縁部である。口縁部は厚く端面は広く角ばっている。４の内面は胴最大径部より上までヘラケズリが



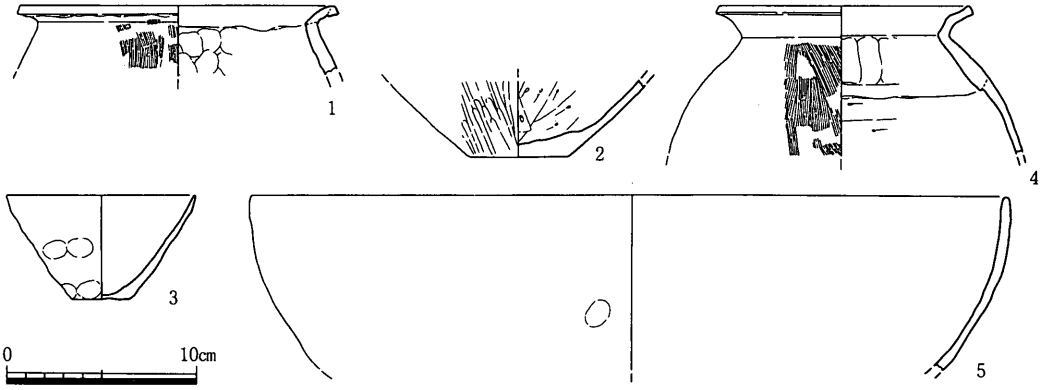
第55図　Ｂ区ＳＫ01平・断面図（1／30）

施されている。2は壷の底部である。しっかりした平底をなす。3は小形の鉢で，端部は丸く仕上げられる。5は径にやや不安が残るが大型の鉢である。口縁端部には小さな平坦面を作っている。

ＳＫ01とＳＫ02は隣接しており，平面形や深さ・埋土から同じ時期に同じ用途のために作られたと考えられるが，その内容については不明である。

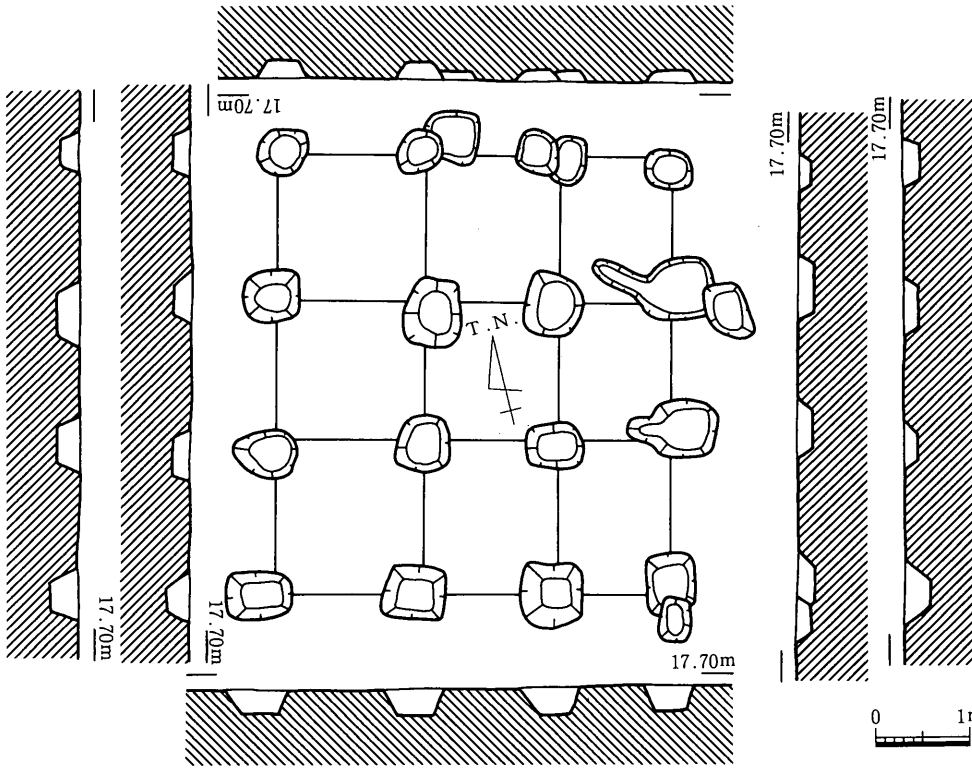


第56図　Ｂ区ＳＫ02平・断面図（1／30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	弥・甕	16.8			中・普	良好	灰白	ハケ目	ナデ		
2	弥・壺			5.0	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ケズリ		
3	弥・鉢	10.0	5.5	3.0	粗・普	不良	赤褐	不明	不明		
4	弥・甕	13.8			粗・普	良好	浅黄	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		
5	弥・鉢	39.8			粗・普	不良	鈍い黄褐，黒	不明	ナデ		

第57図　Ｂ区ＳＫ02出土遺物（1／4）



第58図　B区ＳＢ01平・断面図（1／80）

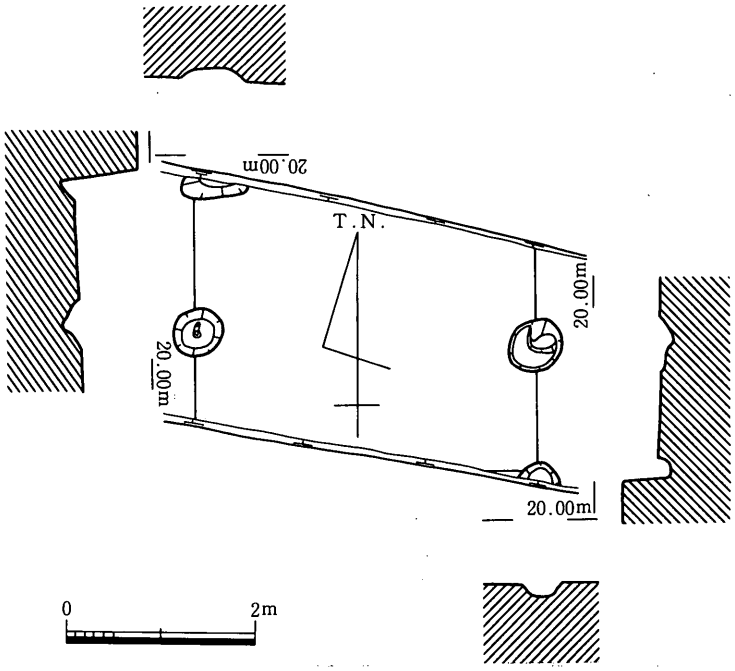
(2)古代の遺構・遺物

ＳＢ01（第58図，図版17）

Ｂ８区の西端に位置する梁行３間×桁行３間の総柱の掘立柱建物である。梁行の総長は4.25m，桁行の総長は4.65m，建物面積は19.76㎡である。建物の平面形はほぼ正方形をしており，主軸方位はＮ－13°－Ｅとなっている。柱穴の平面形は一辺約60cmの概ね正方形で，しっかりとしたものである。深さは15～30cmで全体に残りは悪い。柱痕や根石は確認されなかった。埋土は暗灰褐色粘土の単一層となっている。桁行東第１列の柱穴のうちの２つに柱の抜き跡が認められるものがあり，どちらの柱も西側から抜き取られている。柱穴の埋土から土師器と須恵器の細片が出土したが図化するには至らなかった。建物の廃絶時期は出土遺物から８世紀後半代と考えられる。この建物は総柱となっており，中央部の柱の規模も周囲の柱の規模と変わらないことからも倉庫的な機能をもった建物と考えられる。

ＳＢ02（第59図）

Ｂ６区中央部で検出した。主軸方位はＮ－４°－Ｅであり，北は調査区外になり南は削平を受けているため，全容は不明である。柱間は梁行で3.6m，桁行で1.5mであり，梁行は幅が広いため２間となる可能性もある。柱穴は径30cm弱の小形の円形で，深さは40cmくらいである。柱穴の埋土は黒色砂質土の単一層で，北西の柱穴では少し西から柱を抜いたあとに黄色の土を埋めたような状況がみられた。柱穴の中からは遺物は出土しなかったが，方位や埋土の色などから古代の建物跡と考えておきたい。



第59図　Ｂ区ＳＢ02平・断面図（1／80）

ＳＤ01

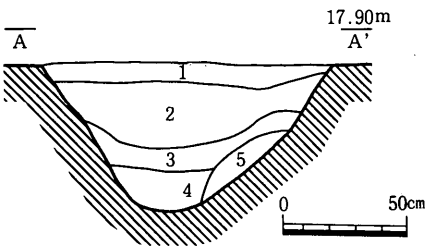
Ｂ８区の東側に位置し，南北両側で撹乱を受けている。幅40cm，深さ10cmの浅い溝である。断面はＵ字形で，埋土は明褐色砂質土の単一層となっている。古代の土器が少量出土した。

ＳＤ02（図版18）

Ｂ８区で検出した。緩く弧を描き東側でＳＤ01に切られる溝で，南側は撹乱を受けている。幅40cm，深さ８cmの浅い溝である。断面はＵ字形で，埋土は明褐色砂質土の単一層となっている。古代の土器が少量出土した。

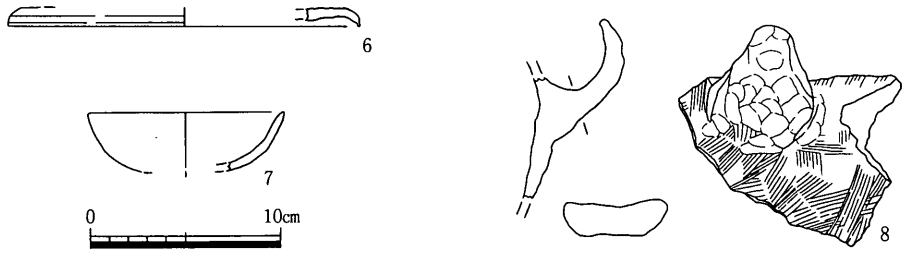
ＳＤ03（第60・61図）

Ｂ８区のほぼ中央，ＳＢ01の東約６ｍの所に位置する南北方向の溝である。幅1.15m，深さ0.58mで，断面はＵ字形で



1．茶褐色粘土
2．暗茶褐色粘土(白色細礫含む)
3．黒褐色粘土
4．黒褐色砂混じり粘質土
5．茶灰色砂混じり粘質土

第60図　Ｂ区ＳＤ03断面図（1／30）



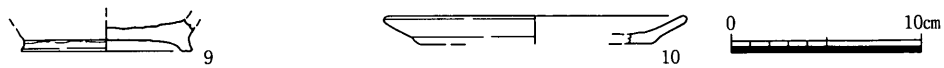
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
6	須・杯蓋	18.4			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
7	土・杯	10.4			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
8	土・甕				中・普	良好	浅黄，灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		

第61図　B区ＳＤ03出土遺物（1／4）

ある。Ｂ８区の南調査区外に延びており，ＳＢ01と平行し出土遺物の時期も同時期であることから，ＳＢ01の東側を区画する溝と考えられる。出土土器は，土師器・須恵器ともにあるが，細片が多く図化出来たのは，３点のみである。６は須恵器の杯蓋，７は土師器杯，８は把手付きの甕で外面に丁寧にハケ目を施している。８世紀中葉前後のものである。

ＳＤ04（第62図）

Ｂ８区の中央から西側へ延びる長さ16mの溝である。幅0.4～1.1m，深さ約0.1mで，ＳＤ03に壊されている。埋土は暗灰褐色粘土の単一層であった。ＳＢ01付近でやや北向きに振りＳＢ01を壊さないようにしていることからＳＢ01と関係のある溝の可能性もある。出土遺物は細片が多く，図化出来たものは２点であった。８世紀後半のものと考えられる。

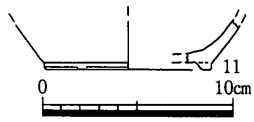


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
9	須・壺			9.0	細・少	良好	青灰	ナデ	ナデ	貼付高台	
10	須・皿	16.0	1.5	12.4	粗・少	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第62図　B区ＳＤ04出土遺物（1／4）

ＳＤ05（第63図）

ＳＢ01の南側約40cmの所に位置し，東側に延びたあと北側に屈曲して終わる溝である。幅40cm前後，深さ10cm程の浅いもので，暗褐色粘質土の単一層である。８世紀後半代の遺物が少量



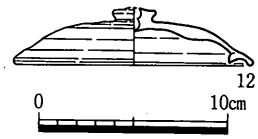
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
11	須・高台杯			8.6	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	貼付高台	

第63図　B区ＳＤ05出土遺物（1／4）

出土した。ＳＢ01の雨落ち溝と考えられる。

ＳＤ06（第64図）

Ｂ７区北西部で検出した。幅90cm深さ30cmで埋土は黒色砂質土の単一層であった。Ｂ１区内の延長線上では検出されなかった。土器片が少量出土した。12は天井部が高い。７世紀前半のものである。

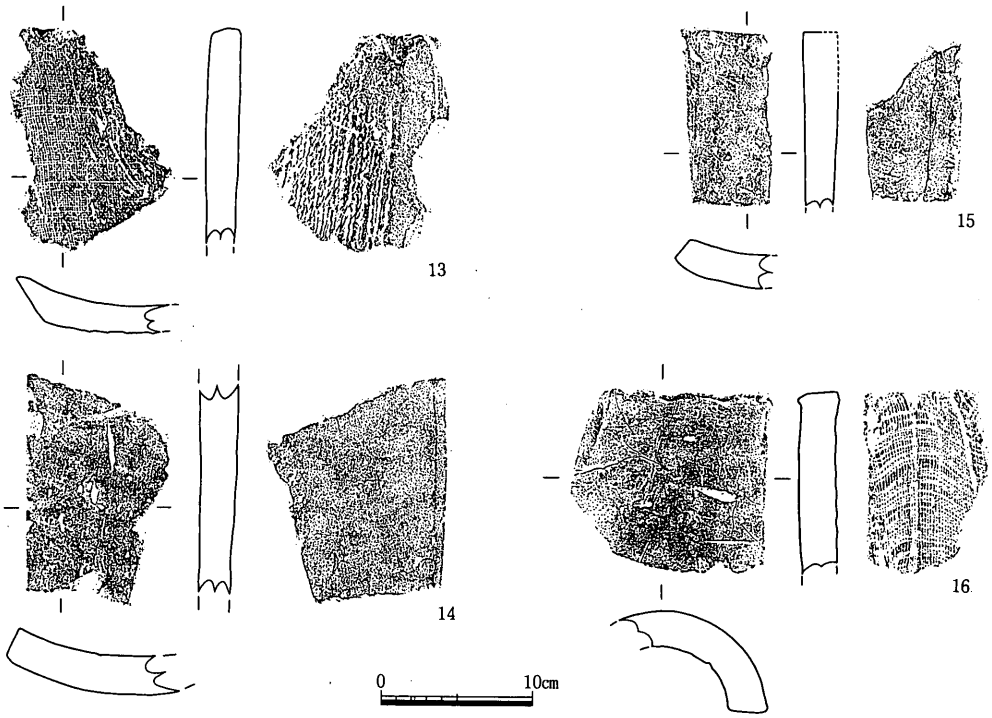


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
12	須・杯蓋	12.6	2.9		微・多	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		

第64図　Ｂ区ＳＤ06出土遺物（1／4）

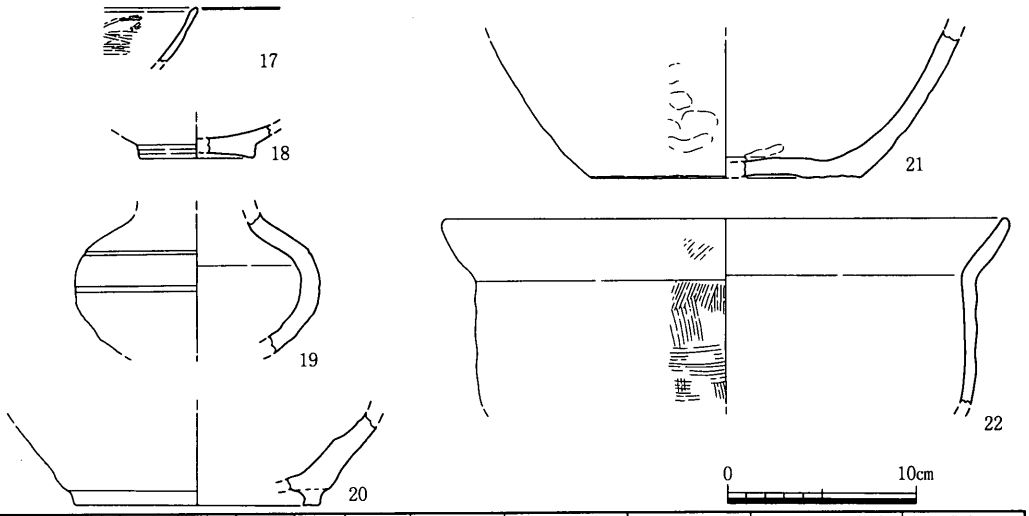
ＳＤ07（第65・66図）

Ｂ１区北西部で検出したが，７ｍ確認したのみでＢ２区では検出されなかった。幅80cm深さ30cmで埋土は灰黒色砂質土の単一層で，溝内からは20～30点の土器が出土した。21は十瓶山産であろう。また，18は緑釉陶器で輪高台に削りだしている。胎土は淡橙色だが，硬質である。釉は全面にかけられており，淡黄緑色を呈する。他に須恵器の杯や甕・高杯



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
13	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕	5	9	粗・普	灰白	良好		14.9
14	平瓦	2.5	板ナデ	ケズリ	10	-	中・普	灰	良好		14.4
15	平瓦	2.2	ナデ・ケズリ	ナデ	10	16	粗・普	暗灰～灰白，灰	良好		11.5
16	丸瓦	2.6	板ナデ	布目圧痕	11	16	粗・普	灰黄	不良		12.1

第65図　Ｂ区ＳＤ07出土遺物（1）（1／5）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
17	瓦・椀				精緻	良好	灰	ナデ	ケズリ		
18	緑・椀			6.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	明黄褐の釉	
19	須・壺				中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
20	須・壺			13.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
21	須・こね鉢			14.2	粗・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
22	土・土鍋	30.0			粗・普	良好	オリーブ黒	ナデ・ハケ目	ナデ		

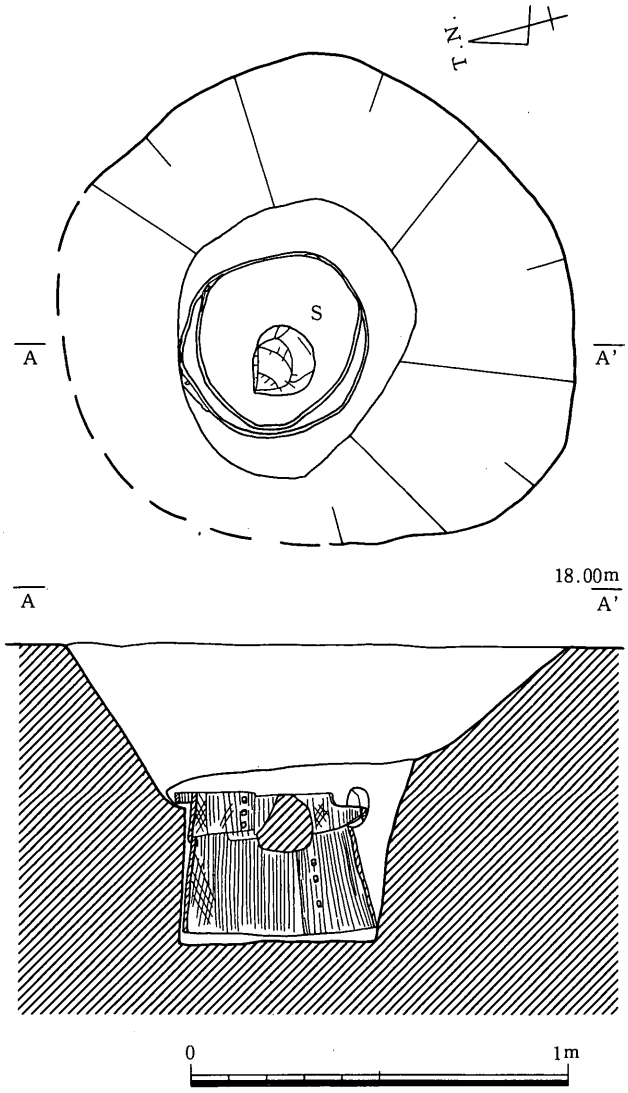
第66図　B区ＳＤ07出土遺物（2）（1／4）

なども出土している。17は外面にはヘラミガキも指頭痕も見えなかった。ＳＤ07の年代は土器に多少時期幅があるものの瓦器椀の存在から12世紀と考える。

ＳＥ01（第67～69図，図版14）

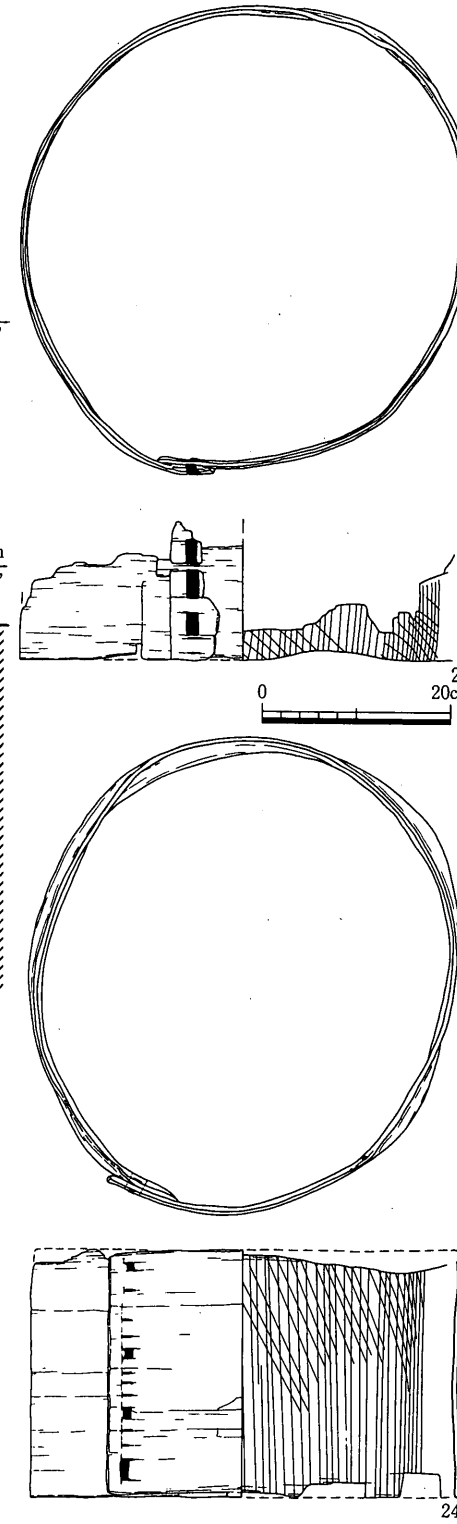
Ｂ２区の西北部で検出した。掘り方上面は径1.2～1.4ｍの円形で，その断面は筒口の大きな漏斗状を呈し，筒口の部分に曲物をはめこんでいる。上面から井戸底までの深さは約0.8ｍと比較的浅いが，遺物のまじっていない狭い旧河道が井戸の北すぐ横に存在しており，井戸の一部はそれを掘りぬいていることから，地下水を得るという目的は達している。曲物内には底から上に17㎝の厚さで暗灰色の砂と黒色のシルトが水平に堆積し，その上にはまだ青くみずみずしい木の葉が一面に積もっていた。さらに木の葉の上には径15㎝のものなど石が数個存在し，掘り方上面まで黒色シルトが埋まっていた。このような状況からみて，この井戸は木の葉から下の砂がたまる程度の期間使われた後，意図的に石を投げ込んで放棄されたと考えられる。

さて，井戸内の曲物は２段重ねで据えられていた。23は上段の曲物である。側板の重ねあわせは樺皮と思われるものを用いて綴じている。側板の下側の一部がこげていた。目釘穴らしきものはない。出土時にはほぼ原形を保っており，高さは約15㎝であった。24は下段の曲げ物である。23同様の綴じ方で重ねあわせている。目釘穴はなかった。

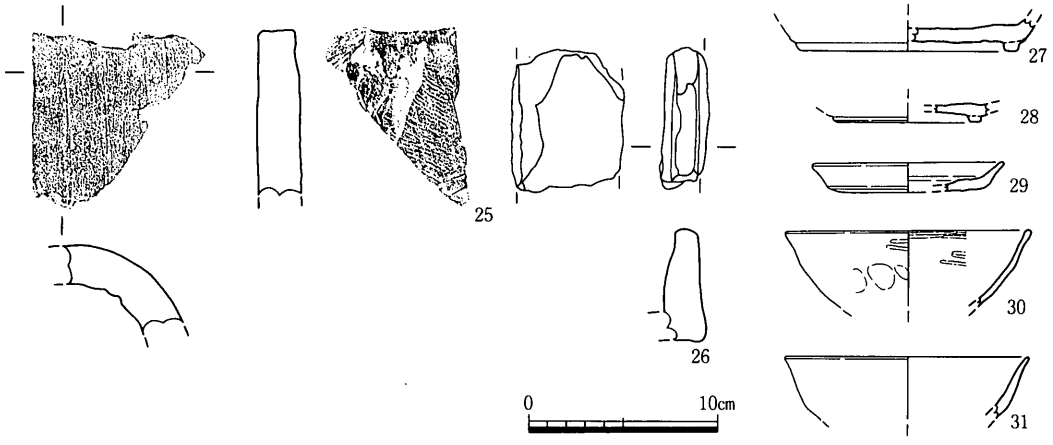


第67図　B区ＳＥ01平・断面図（1／20）

次に出土した土器であるが，25～30は上層（木の葉より上）からの出土である。26は竈の焚き口部の破片である。27・28の高台は低く外よりにつく。30は和泉型瓦器と考えられる瓦器椀で傾き具合からみて12世紀であろう。この他上層からは，十瓶山産須恵器こね鉢などの土器片・獣骨も出土した。31は下層（木の葉より下）から出土した。現存部下1／3で屈曲し，そこから上に直線的に開きながら端部付近でゆるく外湾す



第68図Ｂ区ＳＥ01出土遺物（1）（1／8）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
23	曲物	14.1		0.5			
24	曲物	26.0		0.5	板目		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
25	丸瓦	2.3	板ナデ	布目圧痕・板ナデ	-	18	中・普	灰黄	良好		9.3

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
26	土・竈				粗・普	良好	褐，にぶい褐	ナデ	ナデ		
27	須・高台杯			11.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
28	須・高台杯			7.9	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
29	土・小皿	10.0	1.5	8.0	中・少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
30	瓦・椀	13.0			精緻	良好	黒，灰白	ナデ	ナデ		和泉産？
31	土・椀	13.0			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第69図　B区ＳＥ01出土遺物（2）（1／4）

る。下層からの出土は図示した１点のみであり，他に出土はみられなかった。椀の胴部の形や傾きからみて土器の年代は12世紀と考えられ，この井戸の作られた時期もそれ以前であろう。

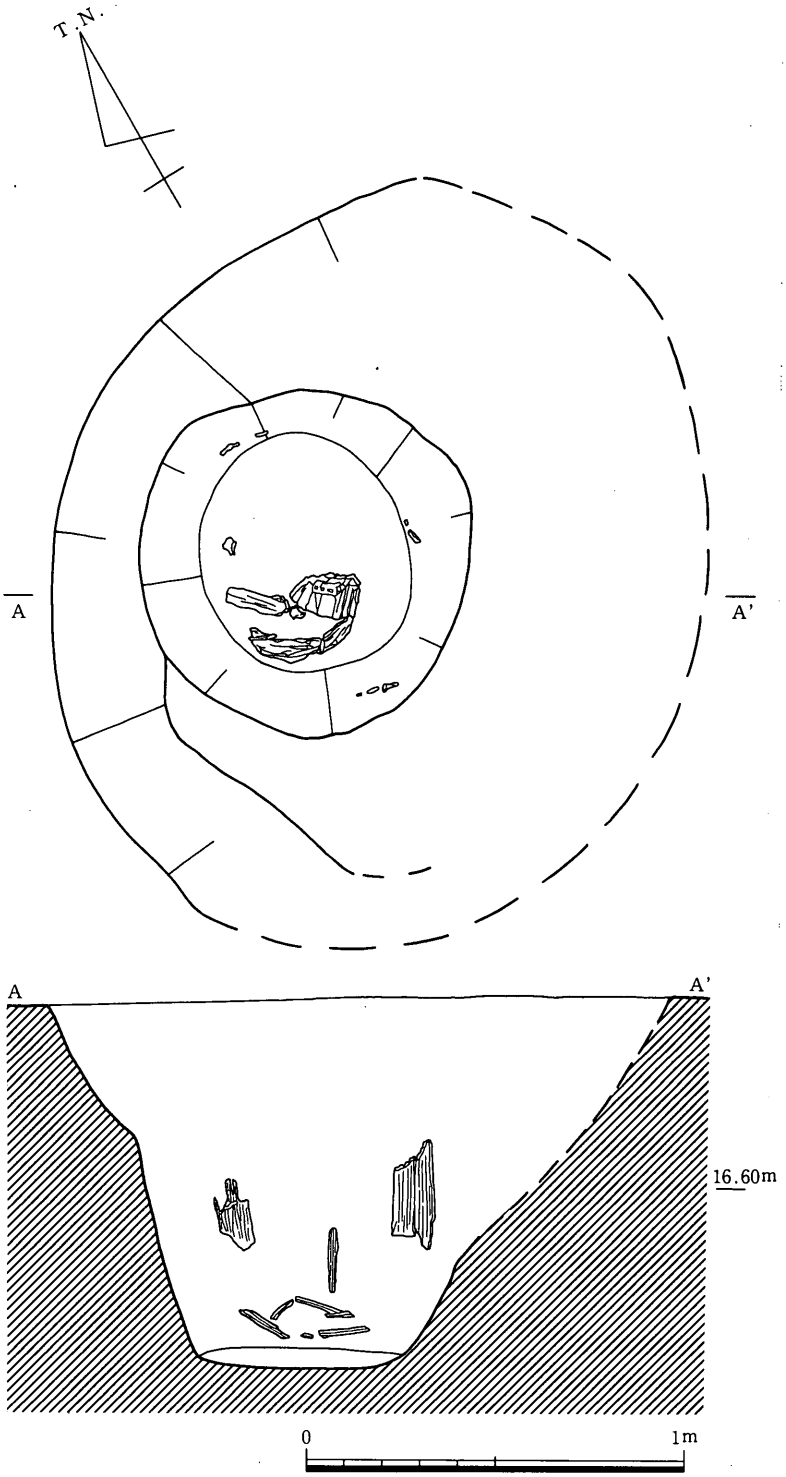
ＳＥ02（第70・71図，図版15）

Ｂ４区の西北部で検出した。掘り方上面は径約２ｍの円形である。断面は逆台形であるが，上面からの深さ40cm程のところでわずかにくびれる。曲物の遺存状態よりこれより下に曲物がおかれていたと考えられる。井戸底までの深さは約１ｍとここでも浅い。ＳＥ01同様遺物のまじっていない狭い旧河道を半分掘りぬいているためであり，地下水は得られたものと思われる。埋土は分層可能かどうか確認しえなかったが，黒色砂質土で埋まっていた。

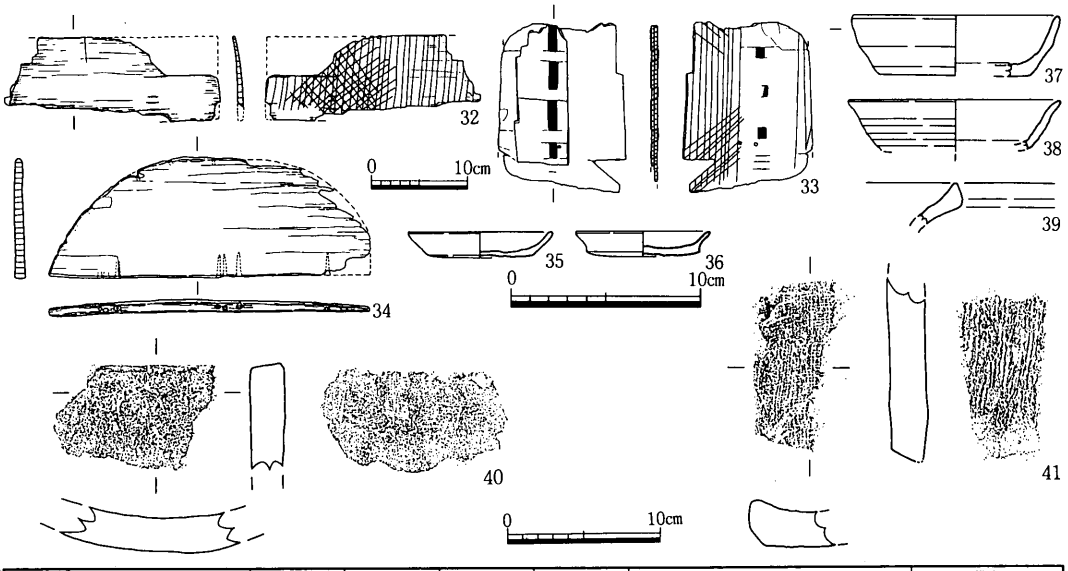
曲物は土圧でつぶれその後腐ったのか残り具合が悪くばらばらで出土した。その内３点を図示した。32・33は側板の重ねあわせの部分である。上下方向・同一個体かどうかもわからない。33の方は樺皮らしい紐が１列残っていた。34は曲物の底板である。弦や弧の部分に目釘穴が開いている。この井戸にともなう曲物の底とするには少し小さい気もする。

遺構断面図のくびれ部分を曲物上端と想定したがそうすると曲物の高さは60cmとなる。このため，曲物は2段重ね以上の可能性も考えておきたい。

土器・瓦は7点図示した。35・36・40はくびれ部より上からの出土である。35・36は口径・器高ともよく似る。37～39・41は曲物と同時に出土した。39は十瓶山産である。41は側縁が厚く，凸面は直線的である。ＳＥ02は12世紀後半以前に掘られたと考えられる。39の口縁部の屈曲がほとんどなくなっていることから判断したが，他の土器もこの時期から大きくずれるものではないで



第70図　Ｂ区ＳＥ02平・断面図（1／20）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
32	曲物	7.5	22.4	0.6			
33	曲物				柾目		
34	曲物の底	32.5	12.4	1.0	柾目		

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
35	土・小皿	7.6	1.3	5.6	細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
36	土・小皿	7.1	1.2	6.0	粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
37	土・杯	11.0	3.1	8.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
38	土・杯	11.2			微・普	良好	にぶい黄，黄	ナデ	ナデ		
39	須・こね鉢				微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

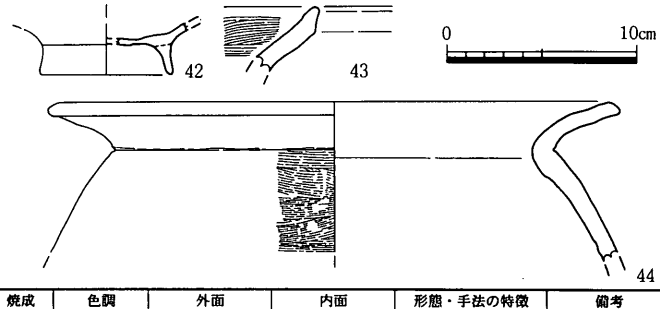
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
40	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	-	17	中・普	灰白	良好		6.3
41	平瓦	2.2	叩き→ナデ	布目圧痕	10	17	粗・普	灰黄	不良		10.7

第71図　B区ＳＥ02出土遺物（1／4，1／5，1／8）

あろう。

ＳＫ03（第72図）

Ｂ１区西端で検出した。排水用の溝を掘っていたため平面形は不明だが，調査区画の壁に残された断面では幅約80cm・深さ約20cmである。出土遺物は少量で，うち３点を図示した。42は高台の高い椀で



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
42	土・椀			7.0	中・普	良好	橙，にぶい橙	ナデ	ナデ		
43	土・土鍋				粗・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ・ハケ目		
44	須・甕	30.1			中・普	良好	灰	ナデ・ハケ目	ナデ		

第72図　B区ＳＫ03出土遺物（1／4）

ある。43は口縁部と胴部の境内面に稜をもつと考えられる。44は胴外面にハケ目状具痕がつく。以上の土器は11世紀ごろのものであろう。

ＳＫ04

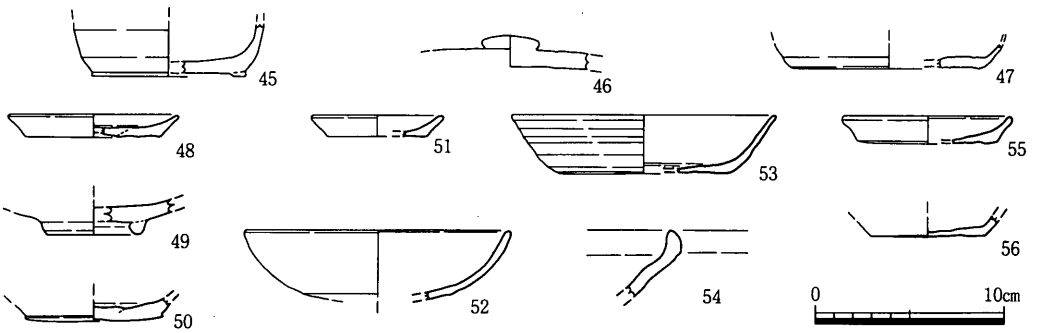
Ｂ８区で検出した。ＳＤ03の東側に隣接する土坑である。長径1.65ｍ，短径0.65ｍ，深さ0.1ｍで平面形は不整形の楕円形である。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。古代の土器の細片が少量出土した。

ＳＫ05

Ｂ８区の北東コーナーで検出した土坑である。Ｂ８区外に広がるため全体の形や規模は不明であるが，確認した範囲では方形のものである。中世の溝ＳＤ08によって上部が削平されており，深さ10cmほどが残存していた。古代の土器の細片が少量出土した。

ＳＰ01～09（第73図）

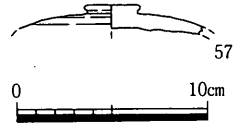
いずれも復元できた建物とは関係なく単独のピットである。ピットの埋土はＳＰ01・03は暗茶褐色粘土，ＳＰ02は暗灰褐色粘土の単一層である。それぞれから土器が少量出土した。45はＳＰ01出土の須恵器の壷で，底部はヘラ切りである。46はＳＰ02出土の須恵器で46の杯蓋の宝珠つまみは丸みを帯びている。47はＳＰ03出土のもので，底部は平底でヘラ切り後ナデている。また，48・49はＳＰ04，50はＳＰ05，51・52はＳＰ06，53・54はＳＰ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
45	須・壺			8.2	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	貼付高台　ヘラ切り	
46	須・杯蓋				細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ		
47	須・杯			10.0	細・少	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
48	土・小皿	9.1	1.2	7.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
49	瓦質・鉢			5.0	精緻	良好	灰・灰白，灰	ナデ	ナデ		
50	土・杯			7.2	粗・少	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	円盤状高台　ヘラ切り	
51	土・小皿	7.0	1.1	5.2	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
52	瓦・鉢	14.1			微・普	良好	褐灰，灰黄褐	ナデ	ナデ		重ね焼きの痕有り
53	瓦質・杯	14.0	3.0	9.3	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
54	須・こね鉢				精緻	良好	灰・明ｵﾘｰﾌﾞ灰	ナデ	ナデ		重ね焼きの痕有り
55	土・小皿	9.0	1.5	7.4	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	赤色顔料　ヘラ切り	
56	須・杯			6.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	

第73図　Ｂ区ＳＰ出土遺物（1）（1／4）

07，55はＳＰ08，56はＳＰ09からの出土である。48・55は口径９㎝ほどの土師器小皿である。50はそれらに底径は似ているが底断面が厚いことから杯とした。49は瓦質土器である。胎土は白いが表面は幅１㎜近く暗灰色にカーボンを吸着している。高台は断面円形の粘土紐を貼りつけている。53も瓦質土器である。口縁部には黒い重ね焼きの痕が残る。ヘラミガキ痕は認められなかった。いずれも十瓶山産であろう。時期は12世紀後半と考えられる。54も12世紀後半の十瓶山産と考えられるこね鉢である。

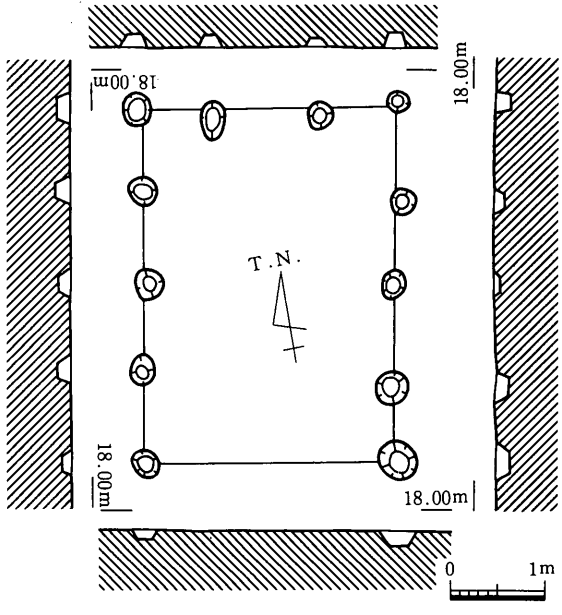


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
57	須・杯蓋				中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		

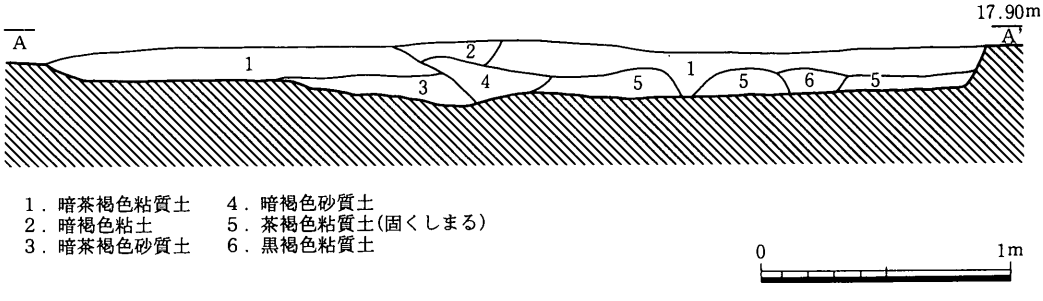
第74図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物（1／4）

ＳＸ01（第74図）

Ｂ８区の西北部に位置する浅い落ち込み状のものである。北側はＢ８区外に広がり，全体の形は不明で，深さは0.1～0.3ｍである。遺構の性格は不明である。内面に暗文を施している土師器杯や須恵器の皿など８世紀後半の土器の細片が出土しているが，図化できたものは１点のみであった。

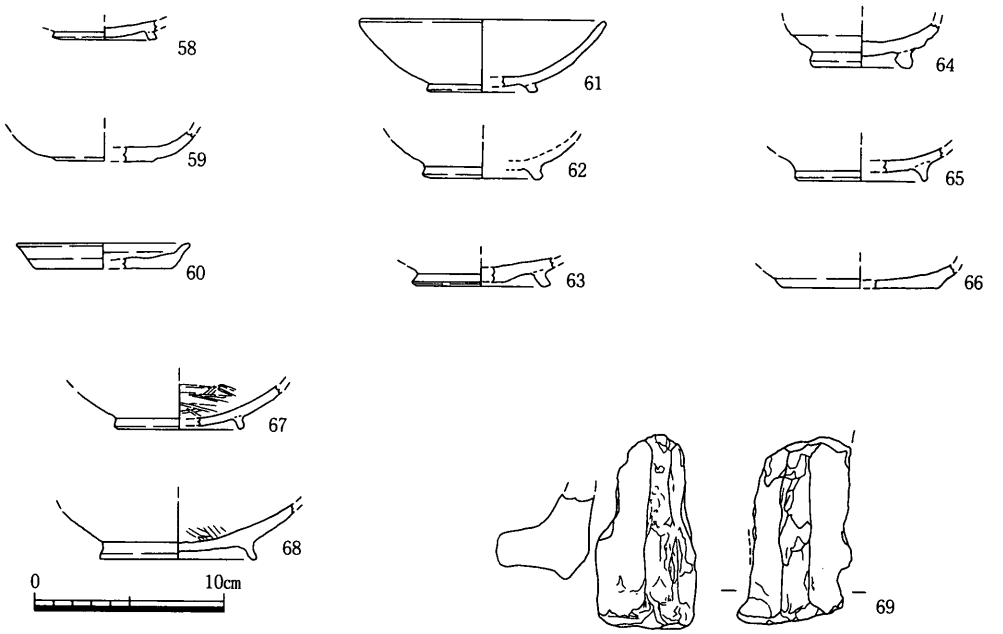


第75図　Ｂ区ＳＢ03平・断面図（1／80）



1．暗茶褐色粘質土　　4．暗褐色砂質土
2．暗褐色粘土　　5．茶褐色粘質土(固くしまる)
3．暗茶褐色砂質土　　6．黒褐色粘質土

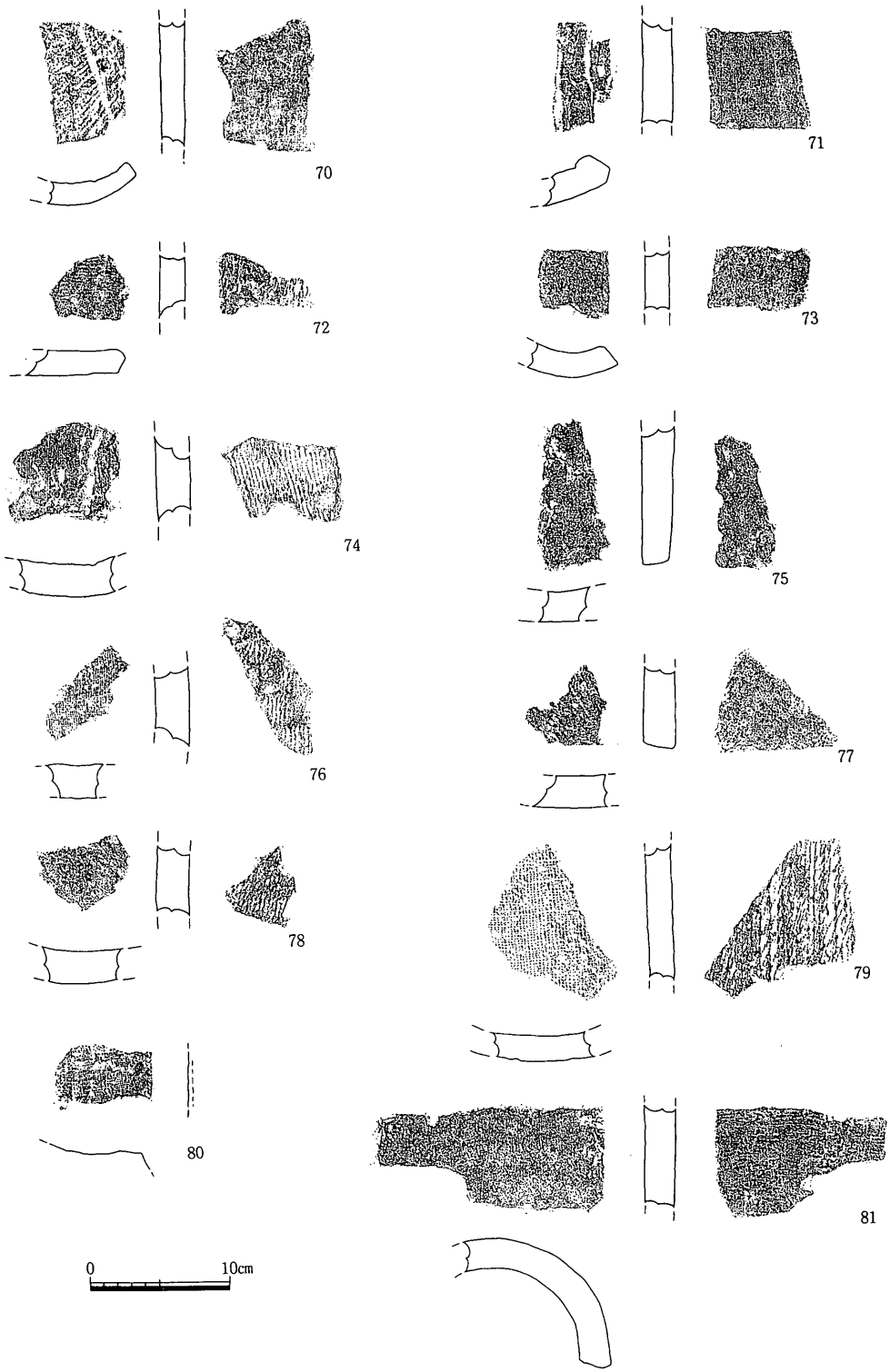
第76図　Ｂ区ＳＤ08断面図（1／30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
58	瓦・椀			5.6	粗・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	貼付高台	西村産？
59	灰釉・椀			5.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	削り出し高台　ヘラ切り	
60	土・小皿	9.2	1.4	7.2	細・普	良好	暗茶褐	ナデ	ナデ	底部に板状圧痕	
61	土・椀	13.0	3.8	5.6	微・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	内・外面に顔料が残る	
62	土・椀			5.8	細・普	良好	黄灰	ナデ	不明		
63	土・椀			6.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	貼付高台　ヘラ切り	
64	土・椀			5.2	中・普	良好	灰白，鈍黄橙	ナデ	ナデ	貼付高台　ヘラ切り	
65	土・椀			6.6	中・普	良好	浅黄橙，灰白	ナデ	ナデ	貼付高台	
66	土・杯			8.2	中・少	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	底部高台状　ヘラ切り	
67	黒A・椀			6.5	細・普	良好	黒褐，黒	ナデ	ミガキ		
68	黒A・椀			8.2	中・普	良好	鈍い黄褐，黒	ナデ	ミガキ	ヘラ切り	
69	土・竈				中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	底部に板状圧痕が残る	

第77図　B区ＳＤ08出土遺物（1）（1／4）

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
70	平瓦	1.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→叩き	1		中・普	にぶい黄褐	良好	凹面に粘土板接合痕有り	8.7
71	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	3		中・普	褐灰，黄灰	不良	凹面に桶のつなぎ目が残る	7.3
72	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	6		細・普	にぶい黄褐	良好		4.5
73	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	2		中・普	赤褐	不良		4.3
74	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕			中・普	褐灰，灰	良好		6.2
75	平瓦	2.2	不明	不明		16	微・普	暗青灰，灰白	良好		9.8
76	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕			中・普	灰白	良好		5.9
77	平瓦	2.3	縄目叩き→ケズリ	布目圧痕→ケズリ		16	中・普	灰白	良好	端部凹凸面ヘラケズリ	7.0
78	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕→ナデ			中・普	暗灰，灰白	良好		4.8
79	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕			粗・普	にぶい黄橙	良好		10.4
80	平瓦		不明	布目圧痕			微・普	灰白	良好		4.1
81	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	14		中・普	灰～橙	良好	凸面に釘穴一ヶ所	9.2

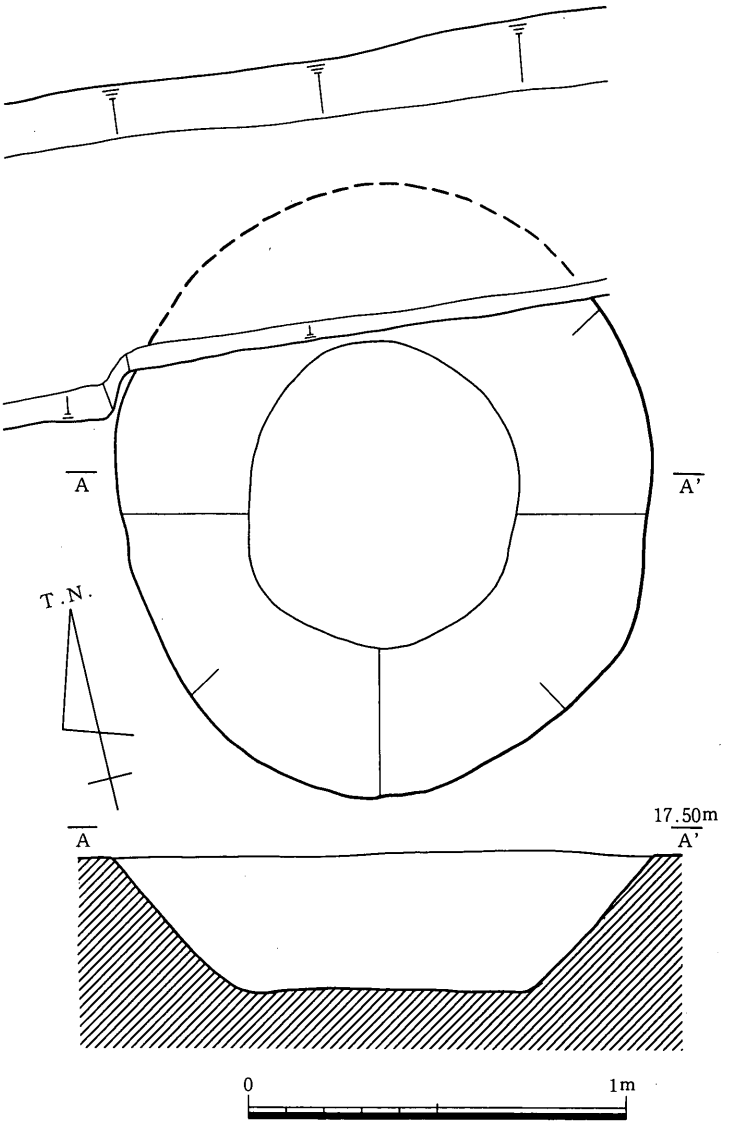


第78図　B区ＳＤ08出土遺物（2）（1／5）

(3)中世の遺構・遺物

ＳＢ03（第75，図版18）

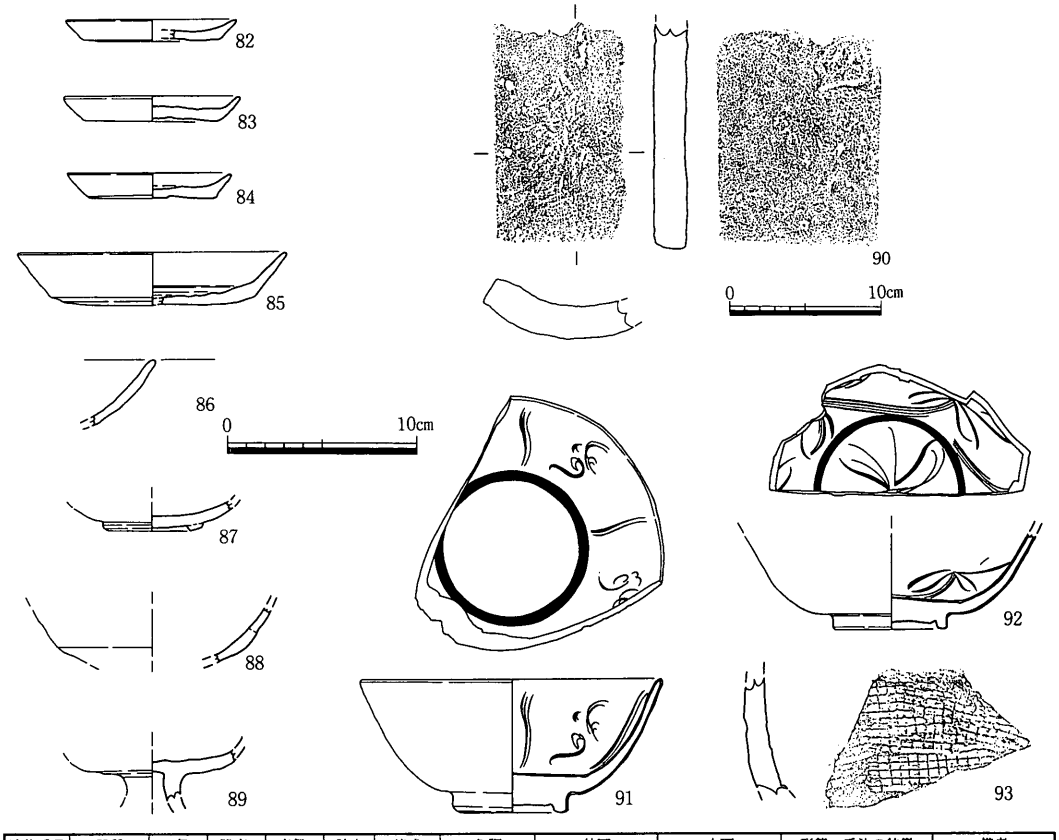
Ｂ８区の東側に位置する梁行３間×桁行４間の掘立柱建物である。梁行の総長は2.65m，桁行の総長は3.7m，建物面積は9.81㎡である。建物の平面形は長方形で，主軸方位はＮ－11°－Ｅとなっている。南側の梁行の中央の２つの柱穴は検出できなかった。柱穴の平面形は円形で，深さは10㎝ほどで残りは悪い。埋土は淡褐色砂混じり粘質土の単一層である。柱穴から中世の土師器皿や青磁碗の細片が出土した。13～14世紀ごろと思われるが，後述する近世の溝ＳＤ09がこの建物を取り巻くようにあるので建物の年代は近世まで下る可能性もある。



第79図　Ｂ区ＳＫ06平・断面図（1／20）

ＳＤ08（第76～78図）

Ｂ８区の東端で検出された溝である。溝の西肩は検出されたが東側はＢ８区外に広がるため溝幅は不明である。幅はＢ８区内で3.2～3.6m，深さ0.2m前後である。須恵器，土師器，黒色土器，瓦などが出土した。古代の土器が多いが中世の土器もある程度含む。59は灰釉陶器の椀である。底部は低い削り出し高台でヘラ切りである。60は土師器小皿で底部に板状圧痕が残る。61～65は土師器椀で，底部はヘラ切り後ナデている。61は内・外面赤



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
82	土・小皿	9.0	1.2	2.2	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	
83	土・小皿	9.3	1.3	7.0	中・普	良好	橙～浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
84	土・小皿	8.5	1.3	6.6	中・普	良好	灰白・橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	
85	土・杯	14.5	2.8	9.5	中・普	良好	灰黄褐，灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
86	土・椀				中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
87	須・椀			5.3	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
88	須・高杯				微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
89	須・高杯				微・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
91	青・碗	16.0	7.0	6.2	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	
92	青・碗			6.0	精緻	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	灰オリーブの釉	
93	亀・不明				細・普	良好	暗灰	叩き	ナデ		

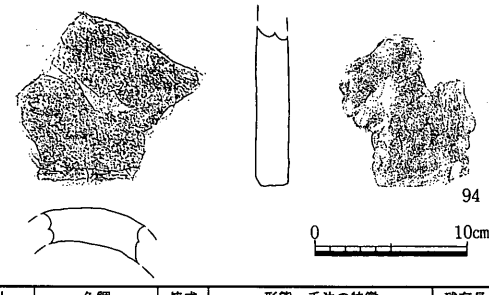
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
90	平瓦	2.3	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	粗・普	灰白～黒褐	良好		14.3

第80図　Ｂ区ＳＫ06出土遺物（1／4，1／5）

色顔料が付着している。64の高台は厚く丸みを帯びている。66は土師器杯で，底部は平底でヘラ切りである。67・68は黒色土器A類の椀である。両者とも内面にヘラミガキを施している。69は竈の底部前面の破片である。70～80は平瓦，81は丸瓦である。74・76・78・79は凸面に縄目叩き痕が残る。70・72は凸面に縄目叩きの後ナデ，77は凸面に縄目叩きの後に端部にヘラケズリを施して縄目を消している。81は凸面を全体にナデており，釘穴が1箇所認められる。

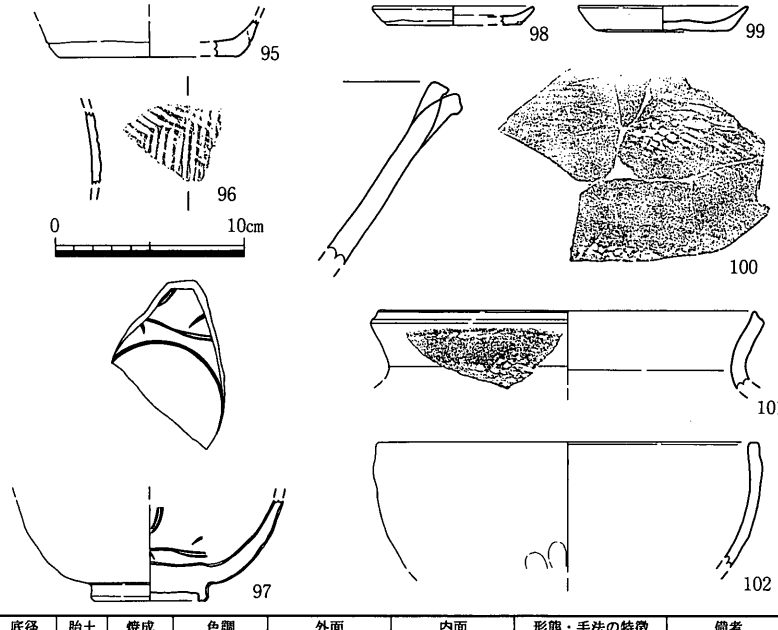
ＳＫ06（第79・80図）

Ｂ３区北西部で検出したかなだらい状の形をした土坑である。87は胴内外面ともヘラミガキ痕は認められず，高台は完全に退化している。91・92は青磁碗である。91は縦方向の沈線と飛雲文を交互に配している。92は草花文を胴部内面と内底見込みに描いている。ともに龍泉窯系と考えられる。93は表面は



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
94	丸瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→板ナデ		18	細・普	灰白	良好		10.4

第81図　Ｂ区ＳＫ07出土遺物（1／5）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
95	土・杯			9.4	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
96	土・不明				中・普	良好	暗褐	叩き	ナデ		
97	青・碗			6.2	精緻	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	灰オリーブの釉	貫入
98	土・小皿	8.5	1.0	7.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
99	土・小皿	9.0	1.3	7.0	粗・普	良好	灰白・橙，橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
100	備・こね鉢				中・普	良好	にぶい赤橙	ナデ・叩き	ナデ		
101	須・甕	20.7			中・普	良好	灰白	叩き→ナデ	ナデ		
102	須・鉢	20.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第82図　Ｂ区ＳＰ出土遺物(2)（1／4）

くすんでいるが，胎土は白く軟質である。外面は格子目叩きで内面はナデている。亀山焼の甕と考えられる。ＳＫ06の時期は須恵器椀の形態から13世紀としておきたい。

ＳＫ07（第81図）

Ｂ８区の中央北辺部に位置する土坑である。平面形は不整形で隅丸方形に近い。規模は長径1.2m，短径0.9m程で深さは約0.3mで，埋土は黒褐色粘質土の単一層である。古代の土器細片と14世紀前後の土師器小皿と青磁碗の細片が少量出土した他に，94の丸瓦が出土した。凸面は全体にナデている。

ＳＰ10・11（第82図）

95・96はＳＰ10，97～102はＳＰ11からそれぞれ出土した。96は外面に平行叩きをもつ土師質の土器である。土鍋等の底とも考えられる。97は青磁碗である。体部内面には草花文を描く。龍泉窯産であろう。100は外面に格子目の叩き痕を残す鉢である。胎土・表面とも赤橙色で硬質のため，備前焼と考えた。13世紀後半頃のものであろう。101は外面の口縁部直下まで格子目の叩きが施されている。102は深椀形の鉢で口縁部端部に平たい面をもつ。

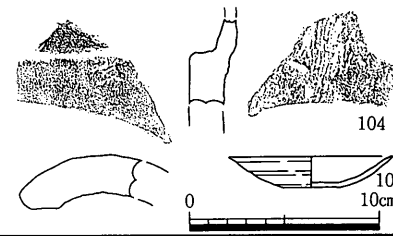
(4)近世の遺構・遺物

ＳＤ09（第83図）

Ｂ８区の東側，ＳＢ03とＳＤ08の間に位置する溝で，途中クランク状に屈曲してからほぼ直角に曲がる。幅15～50cm，深さ10cm程度の浅いもので，埋土は明褐色砂質土の単一層である。103は内面全体と口縁部外面に釉がかかっている。口縁部に黒色のアスファルト状のものが付着している。灯明皿と考えられる。104は玉縁式の丸瓦である。凹面の側面寄りに叩き痕がある。

ＳＸ02（第84図）

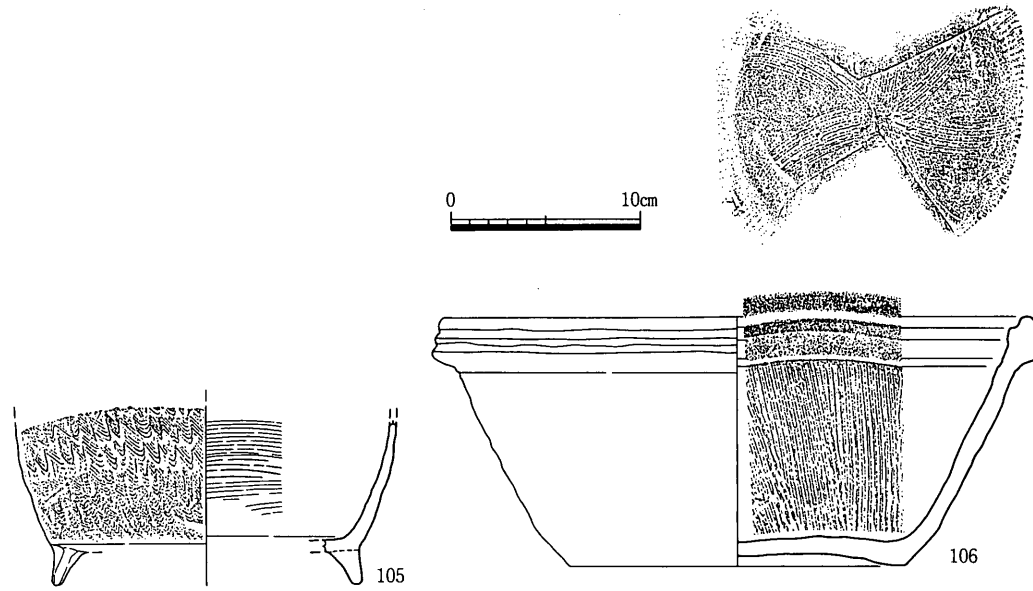
Ｂ４区中央部で検出した不定形の浅い落ち込みである。土器片が数点出土した。105は大きさからいって香炉とも考えられるが，脚の数はわからない。瓦質の胎土をしている。106は焼き締め陶器のすり鉢である。全体に赤褐色をしている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
103	碗・皿	8.8	1.7	3.0	精緻	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ	内面と口縁端外面に釉	内面にトチン痕

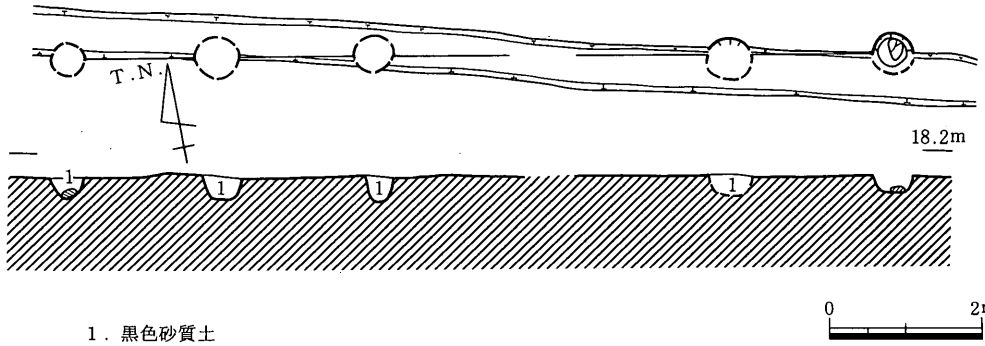
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
104	丸瓦	2.0	ナデ	縄目叩き，板ナデ	12	－	中・普	にぶい黄橙～褐灰	良好	凹面側面付近に叩き痕	4.5

第83図　Ｂ区ＳＤ09出土遺物(1／4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
105	瓦・火鉢			16.4	精緻	良好	にぶい橙～灰	ナデ	ナデ	波状文	
106	焼・すり鉢	31.9	12.4	17.6	粗・普	良好	暗赤褐	板ナデ	ナデ	金具による条溝	

第84図　B区ＳＸ02出土遺物（1／4）



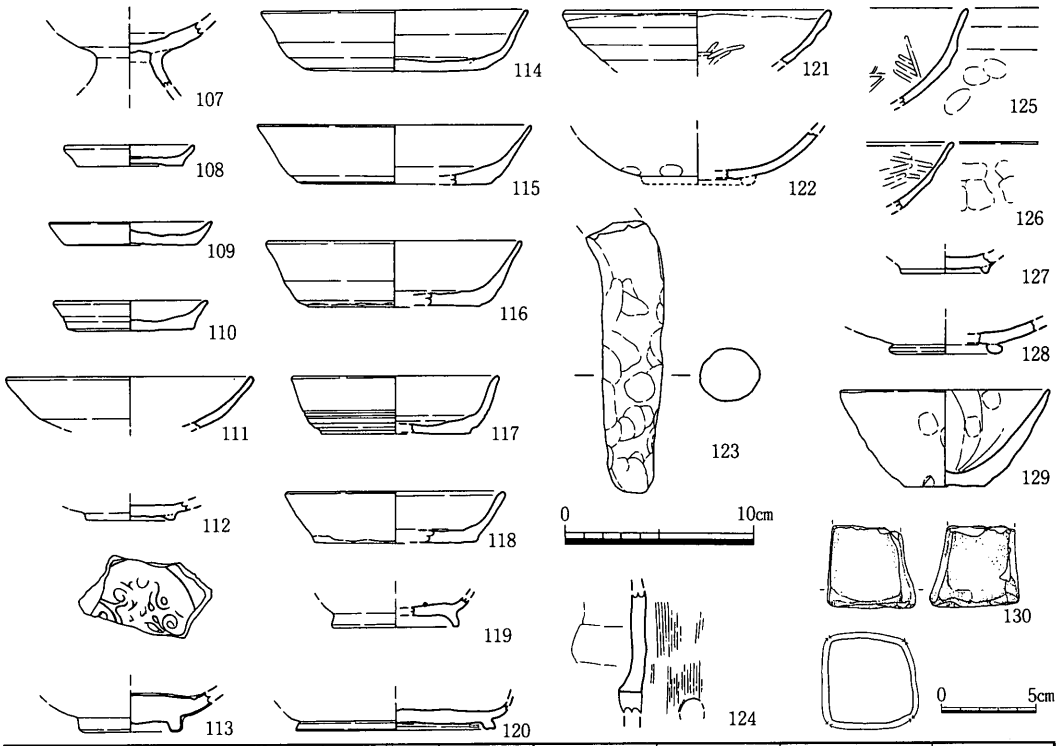
1．黒色砂質土

第85図　B区ＳＡ01平・断面図（1／100）

(5)時期不明の遺構

ＳＡ01（第85図）

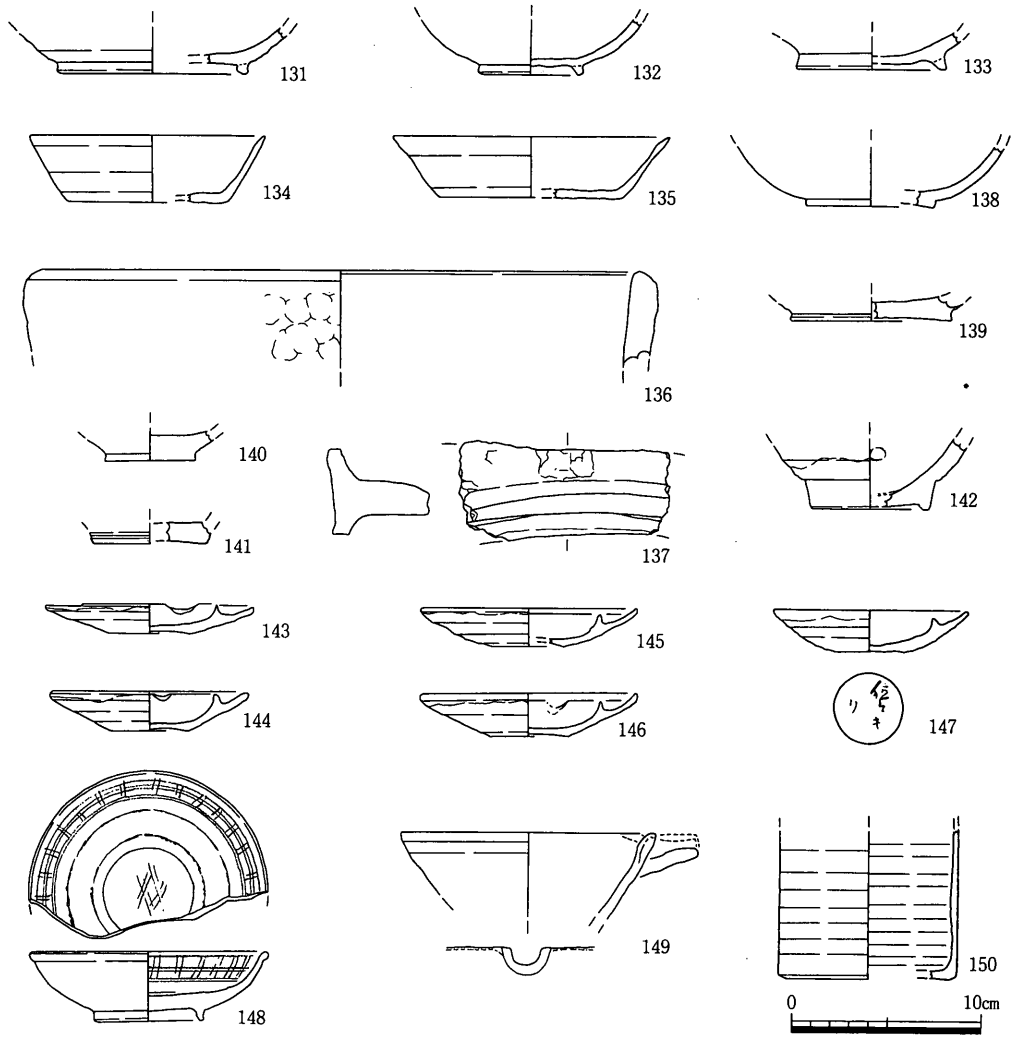
Ｂ１区南東部で検出した。６個のピットからなると考えられ，西の３個は調査区内の側溝の壁断面図にて確認した。柱間の距離は2.2ｍで，方位はＮ－79°－Ｗをとる。柱穴は径40～50㎝の円形で，30㎝の深さである。両端の柱穴内には根石が据えられているが，そのほかに土器片などは出土しなかった。埋土は黒色砂質土の単層である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
107	須・高杯				中・普	不良	明オリーブ灰	ナデ	ナデ		胎土は橙
108	土・小皿	6.9	1.1	5.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	金雲母を含む
109	土・小皿	8.6	1.2	7.0	中・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
110	土・小皿	8.1	1.6	6.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
111	土・椀	13.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
112	土・椀			4.7	細・普	良好	浅黄橙，褐灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
113	青・碗			6.4	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
114	土・杯	14.1	3.2	9.7	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
115	土・杯	14.5	3.1	10.3	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
116	土・杯	13.6	3.4	9.2	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
117	土・杯	11.0	3.0	8.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
118	土・杯	11.6	2.7	8.6	粗・普	良好	灰黄	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母を含む
119	須・高台杯			6.6	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
120	須・高台杯			10.6	中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
121	瓦質・椀	14.2			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ・ミガキ		重ね焼きの痕有り
122	瓦・椀				中・普	良好	灰	ナデ	不明		
123	土・土釜				粗・普	良好	橙～褐灰	ナデ	不明		
124	土・不明				中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	板ナデ		
125	瓦・椀				細・普	良好	暗灰	ナデ	ミガキ		和泉産？
126	瓦・椀				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ・ミガキ		和泉産？
127	須・椀			4.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
128	須・椀			6.0	微・普	良好	橙～灰，灰白	ナデ	ナデ		
129	弥・鉢	11.0	5.0	4.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ		

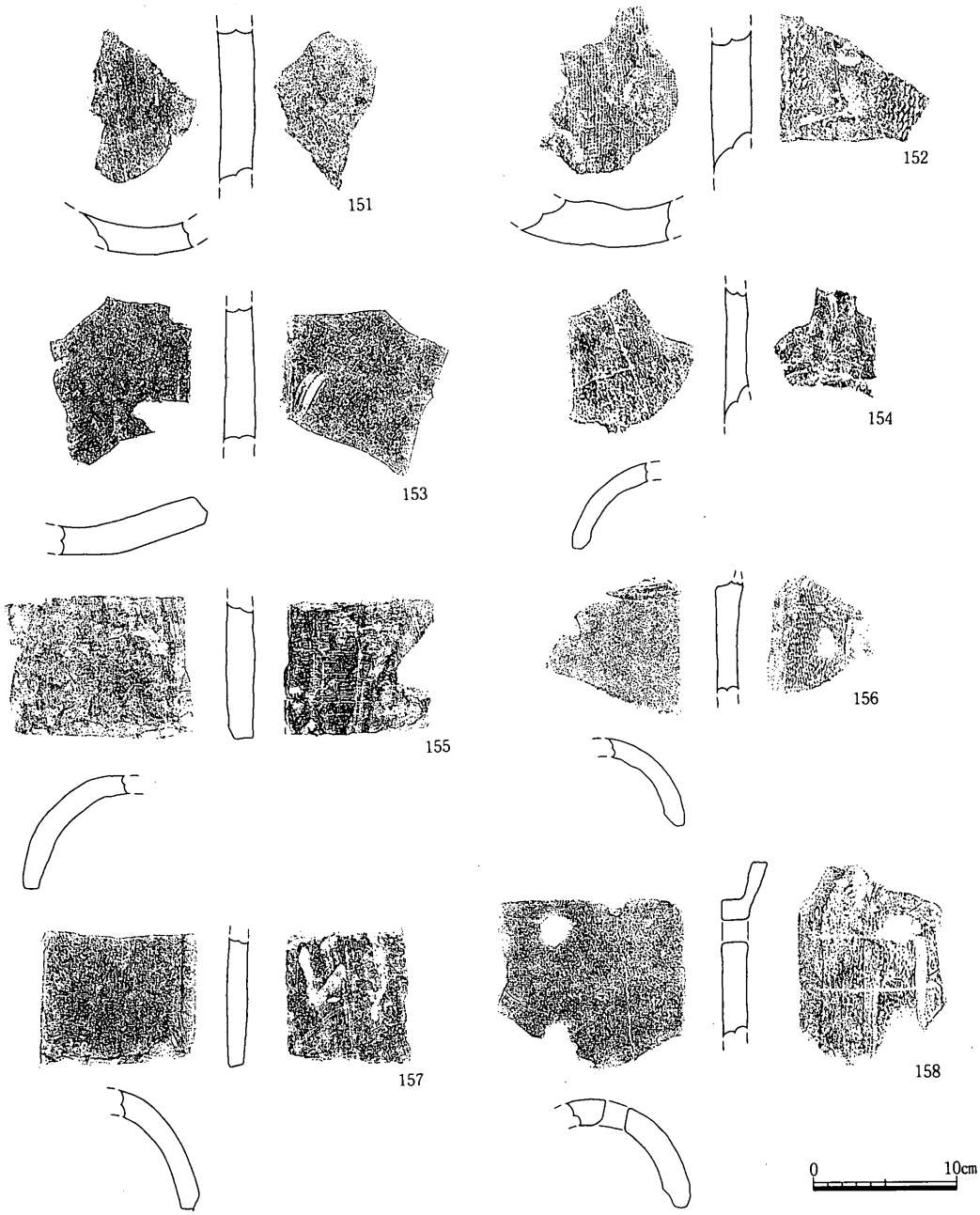
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
130	砥石	4.6	4.3	4.8	143	砂岩		

第86図　B区包含層出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
131	土・椀			9.6	微・普	良好	赤	ナデ	ナデ	貼付高台　内外面顔料	
132	黒A・椀			5.6	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	貼付高台	
133	土・椀			7.8	微・普	良好	橙	ナデ	ナデ	貼付高台	
134	須・杯	13.0	3.5	7.6	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
135	須・杯	14.6	3.2	9.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
136	土・土釜	31.4			中・普	良好	明赤褐，黄灰	ナデ・指頭圧痕	ナデ		
137	土・甕				粗・少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
138	緑・椀			6.8	微・普	良好	灰，灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ	削り出し高台	
139	緑・椀			8.4	細・普	良好	灰白	不明	ナデ	削り出し高台　ﾍﾗ切り	オリーブ黄色の釉
140	緑・椀			4.8	細・普	良好	オリーブ灰	ナデ	ナデ	削り出し高台　糸切り	
141	緑・椀			6.0	微・普	良好	浅黄，灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ	削り出し高台　ﾍﾗ切り	
142	磁・碗			6.2	精緻	良好	明黄褐	ケズリ	ナデ	黄褐色釉　削出し高台	内面にトチン痕
143	磁・灯明皿	11.0	1.5	4.2	精緻	良好	明オリーブ灰	ケズリ	ナデ	内面桟の一部が切れる	ヘラ切り
144	磁・灯明皿	10.4	2.0	4.0	微・普	良好	灰白	ケズリ	ナデ	内面桟の一部が切れる	
145	磁・灯明皿	11.1	2.0	3.7	精緻	良好	浅黄橙	ケズリ	ナデ	明オリーブ灰色の釉	
146	磁・灯明皿	11.2	2.2	4.1	精緻	良好	灰白	ケズリ	ナデ	明オリーブ灰色の釉	
147	磁・灯明皿	10.3	2.2	3.6	微・普	良好	灰白，淡黄	ケズリ	ナデ	内面と口縁部外面に釉	底部に釉
148	磁・碗	12.2	3.7	5.5	精緻	良好	白灰	不明	不明	明緑灰色の釉	内面見込に釉はぎ
149	磁・片口鉢	13.4			精緻	良好	浅黄	不明	不明	内外面に釉がかかる	
150	磁・徳利			8.6	微・普	良好	灰黄	ナデ	ケズリ	外面に釉がかかる	

第87図　B区包含層出土遺物（2）（1／4）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
151	平瓦	2.4	叩き→ナデ	布目圧痕→板ナデ	-	-	中・普	灰白	良好	凹凸面を丁寧にナデる	10.6
152	平瓦	2.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	-	-	粗・普	にぶい褐，黄灰	良好		9.2
153	平瓦	2.0	指頭圧痕，板ナデ	布目圧痕→板ナデ	10	-	精緻	にぶい黄，鈍い褐	良好		9.2
154	軒丸瓦	1.4	ナデ	ナデ	6	-	中・普	灰，灰黄	良好	凹面に瓦当の剝離痕有り	9.5
155	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→板ナデ	1	18	粗・普	灰白	良好		9.5
156	丸瓦	1.4	ナデ	縄目叩き，板ナデ	12	-	中・普	灰，赤褐	良好		7.9
157	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ケズリ	14	16	中・普	灰白	良好	凹面に布のとじ合わせ痕有り	9.1
158	丸瓦	2.6	ナデ	布目圧痕→ナデ	15	16	中・普	灰黄褐	良好	凹凸面に粘土紐痕　穿孔２ヶ所	12.4

第88図　Ｂ区包含層出土遺物（3）（1／5）

(6)包含層出土遺物（第86～88図）

現耕作土・床土の下に遺構面が存在したため，これらを包含層として土器が出土した。125と126は同一個体の可能性がある。ともに体部外面下半に指頭痕が残る。和泉型である。113は青磁碗である。内面見込みに飛雲文を描いている。龍泉窯系であろう。124は土師質の土器で円形の透し穴が認められる。近世のものであろう。130の砥石は，側面４面をすべて磨ぎ面として用いている。また，折れ口でないほうの端面には敲打の痕ともとれる欠損がある。131は土師器椀，132は黒色土器Ａ類椀であるが，内面のカーボンは剥落している。134，135は須恵器杯で底部は両者ともヘラ切り後にナデている。136は土釜，137は竈の正面天井部の鍔である。138～141は緑釉陶器である。いずれも削り出し高台であり，140は底部糸切りとなっている。京都産と考えられる。142は磁器碗で，削り出し高台である。143～147は瀬戸美濃の磁器で，灯明皿である。いずれも内面に桟を持ち，その一ヶ所が切れている。147は底部外面に「□□リキ」の墨書がある。148は染付碗で見込み部に釉剥ぎがある。149は片口鉢で注ぎ部が長い。150は徳利で，149・150とも瀬戸美濃である。151～153は平瓦で，152は凸面に縄目叩きを施した後に一部ナデている。154～158は丸瓦で157・158は玉縁の部分である。154は凹面に瓦当部の剥離痕がある。156の凹面には布の綴じ合わせ痕が残る。157は凹面側に縄目叩きがある。158は筒部に2箇所穿孔がある。

３．小結

Ｂ調査区では遺構面が１面だけ存在する。この面のうえに弥生から近世の遺構が掘りこまれている。遺構は一般に浅くある程度の削平が想定されるが，現地形が旧地形を反映しているものとすれば，予想される旧地形は東から西に向けて低くなる緩斜面であろう。しかし，東西長が南北の３倍もあるＢ調査区では，東西の標高差に匹敵する段差が南のＢ１～４区と北のＢ５～８区の間に存在する。もちろんこのような急な段差が自然地形をそのまま反映しているとは考えにくく，南側は当然その分余計に削平されているとみなしがちだが，ＳＥ01やＳＫ01あるいはＳＤ07の遺存状況からみてもその削平はせいぜいが20～30cm程度だったであろう。とすれば差し引き50cm以上が段差かもしくは急な傾斜部として当時としても存在していたことになる。これが何を意味するか不明だが，この段差と関係するような遺構配置も認められず，両隣のＡ・Ｃ調査区ではこのような大きな段差は存在しない。現時点ではここだけの特異な自然地形と考えておきたい。

さてＢ調査区では遺構が全体に少ない。弥生時代もそうであるが，古代においても掘立

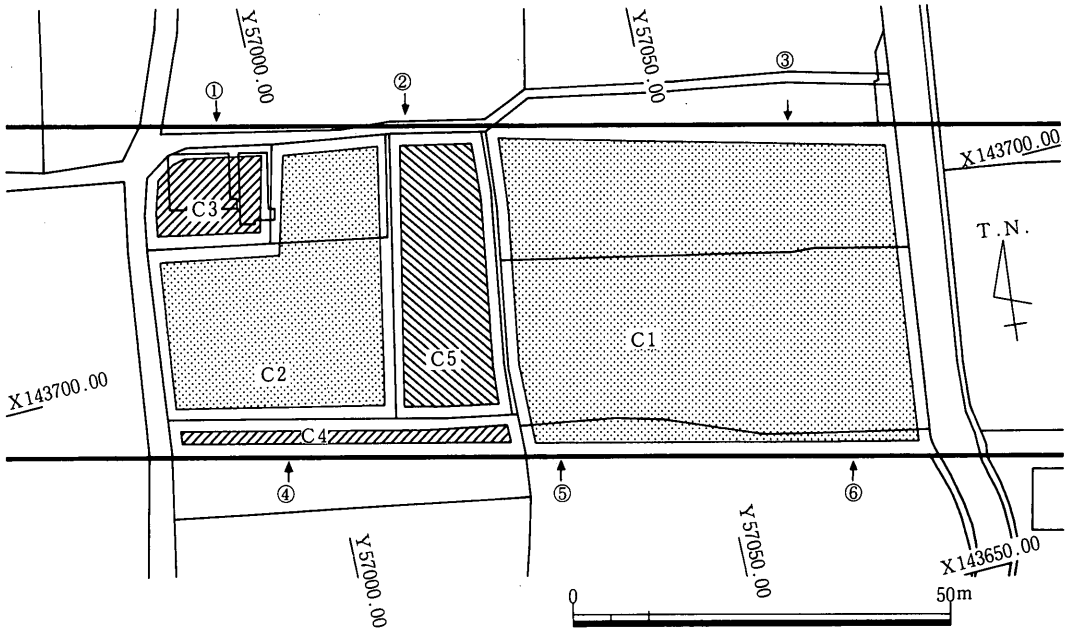
柱建物や井戸・溝が点在して認められるだけである。多少密度が濃いＢ８区をＡ調査区からの続きとしてとらえるなら，Ｂ調査区は密度の濃いＣ５区とＡ区の間に挟まれた居住用以外の空間として使われていたということができるかもしれない。ただし，水田等の遺構は検出されてない。

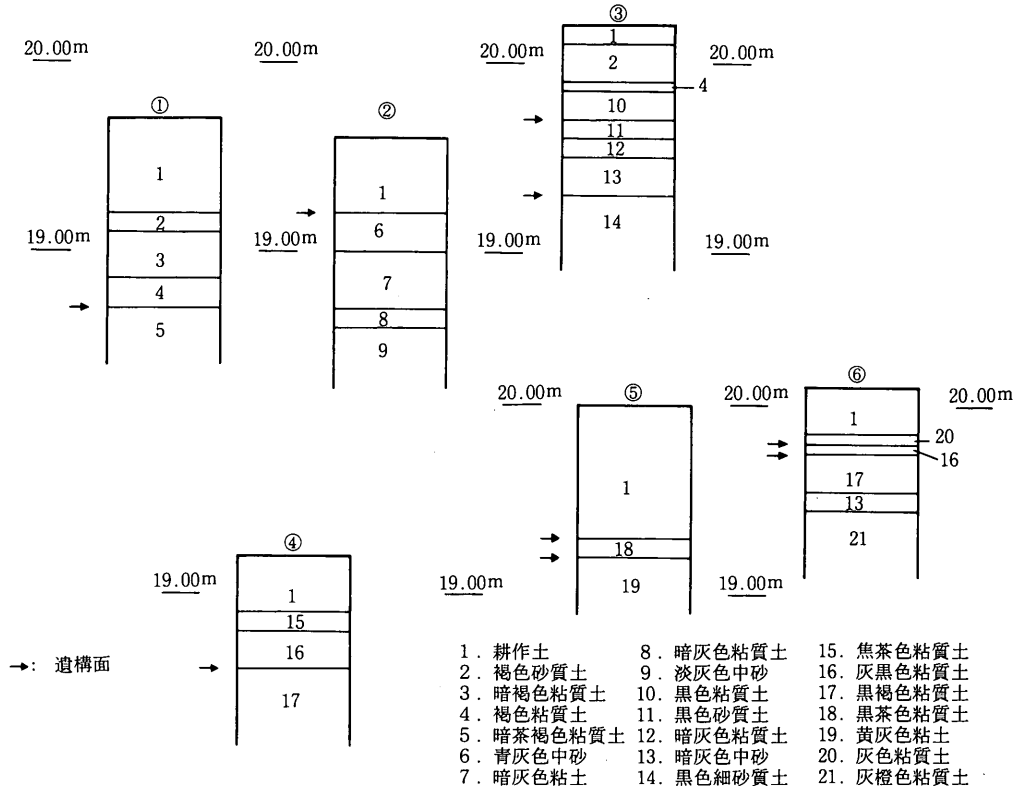
奈良時代の遺構はＢ８区西部に集中する。ＳＢ01を中心として東南北に溝が掘られている。東のＳＤ03はここから東に同時期の遺構が認められないことからこの時期の集落の東限の溝と考えられるが，南側は現在用水路があり調査できなかったため，この溝がどのように続いてゆくかは不明である。

平安時代の遺構のうち，ＳＤ07は向きや時期からいってＣ区ＳＤ09－(ｂ)につながる可能性がある。

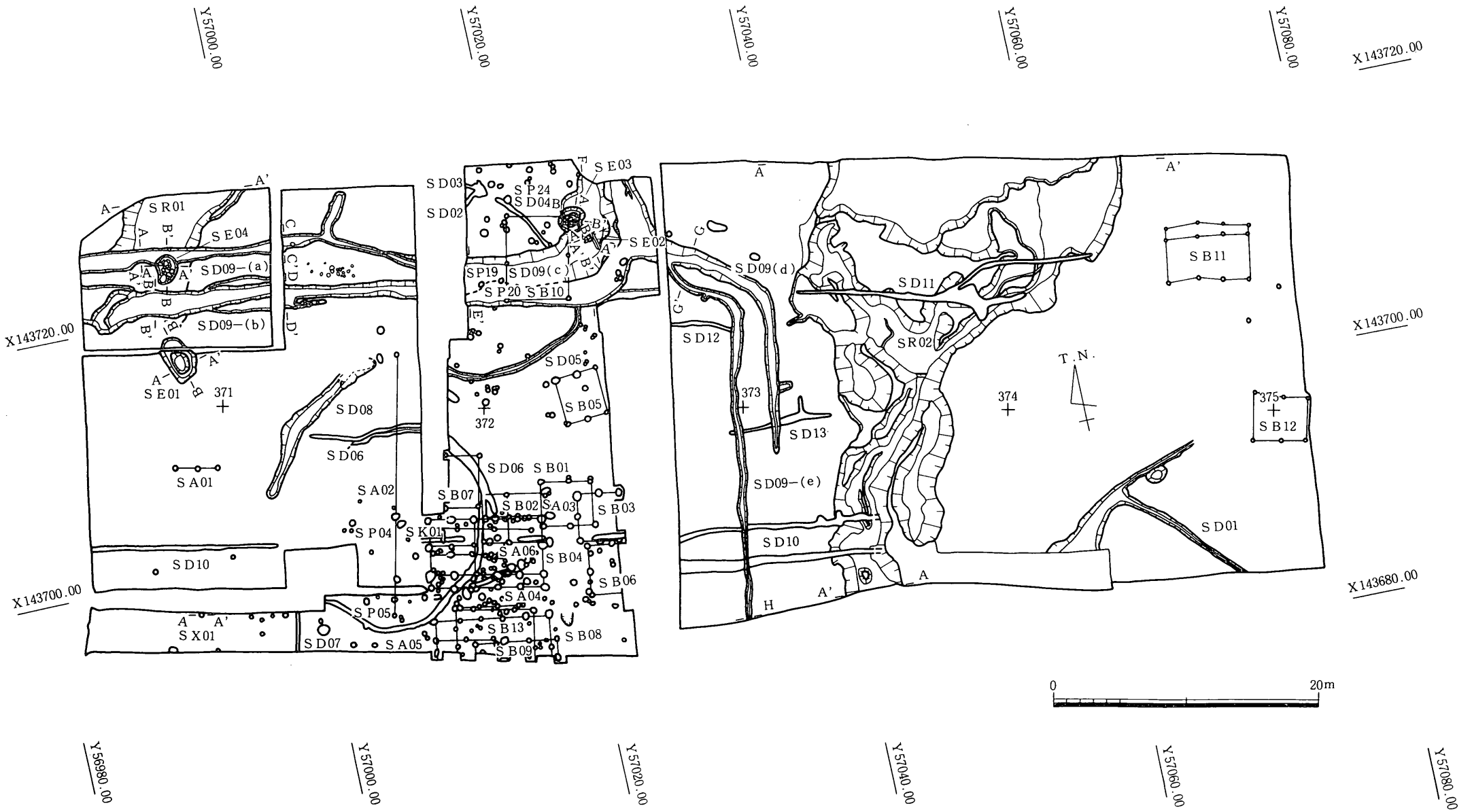
Ｂ８区東部では近世と考えられる掘立柱建物と溝の組合せが存在する。この土地は調査前も宅地であった区域である。

このほか，遺物が出土しなかったため遺構番号を付与しなかったが，調査区内を数本の旧河道が流れている。いずれも基本的には北東から南西に向いて流れている。ただし最も東の旧河道は図示しなかった部分もあるが，Ｂ１区東調査区外を南に向かったあとＢ１区南部を西に向かいＢ２区南部で南の調査区外に流れてゆく。この旧河道はＣ３区で検出されたＳＲ01とつながる可能性もあり，そうだとすると縄文時代後期の旧河道ということにもなろう。





第89図　C区小調査区割図（1／1000），基本土層柱状図（1／40）



第90図　C区遺構平面図（1／400）

第３節　Ｃ調査区

１．調査区の概要（第89・90図）

南北幅40m，東西長100mの範囲を占めるＣ調査区では５つの小区に分けて調査を行なった。標高はおおよそ19～20mで，東と西では１mの標高差があり，緩やかに西南に下っている。調査前には田畑や宅地に利用されていた。

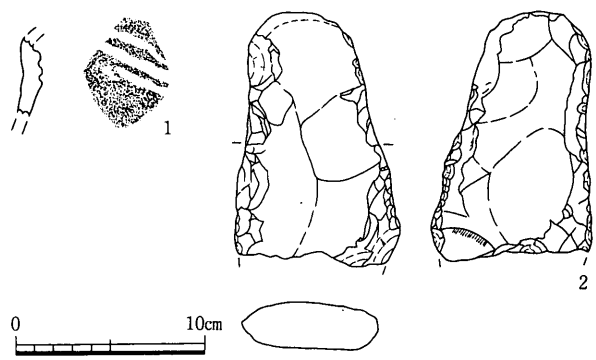
Ｃ調査区では遺構面が１ないし２面確認されている。Ｃ１区では第１面に古代以降の遺構が，第２面に弥生から古墳時代の遺構が掘りこまれていた。この遺構面は場所によって土色・土層に多少の変化があり，遺構検出に手間取ったが，主として黒色に近い粘性のある砂質土および黄色粘土で構成されていた。遺構面の有無を確認するため，さらに下にトレンチ掘削を試みた結果，砂やシルトの水平堆積が厚さ２m以上にわたってみられた。扇状地形による堆積作用によるものと考えられ，黄色粘土は埋没谷の尾根筋にあたる可能性がある。これらの堆積層からは遺物はまったく出土しなかった。

２．調査の成果

(1)縄文時代の遺構・遺物

ＳＲ01（第91・92図）

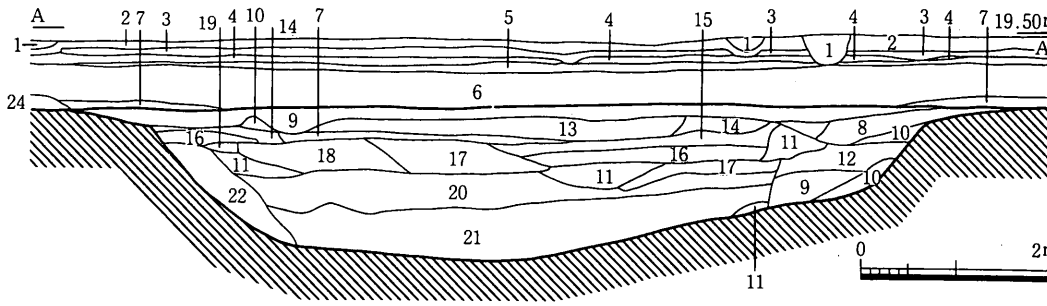
Ｃ３区を北から南西方向に流れる旧河道である。幅は調査区内で６m前後である。検出面から1.6mほど掘削したところで，灰色砂層に達し部分的に掘削したところこの砂層が続くため，砂層の上面で旧河道の底と判断した。埋土は粗砂と粘土のラミナ状の互層となっている。遺物は



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	縄・深鉢				中・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
2	打製石斧	12.9	8.7	2.5	388	安山岩	中央部は磨いている	

第91図　Ｃ区ＳＲ01出土遺物（1／4）



1．撹乱
2．耕作土
3．床土
4．褐色砂質土
5．淡灰色砂質土
6．茶褐色砂混じり粘質土
7．褐色砂混じり粘質土
8．茶灰色粗砂
9．茶褐色粗砂
10．褐色粗砂
11．褐色粘土混じり細砂
12．暗茶褐色粗砂
13．茶灰色粗砂（淡灰色粘土塊混じり）
14．灰色弱粘質土
15．灰色細砂混じり粘質土
16．黒灰色粘土
17．暗灰色粗砂
18．灰褐色粗砂
19．暗灰色粘質土
20．暗灰色粘土と茶褐色粗砂の互層
21．黒褐色粘土と褐色細砂の互層
22．黒色粘土

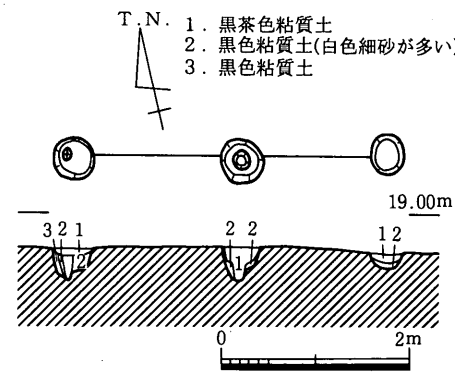
第92図　C区ＳＲ01土層断面図（1／80）

ごく少量出土したのみである。1は縄文時代後期の深鉢で3条の沈線をもつ。表面の摩滅が著しい。2は打製石斧で刃部は欠損している。側縁部に調整を施し，刃部付近に擦痕がある。中央部は磨いている。

(2)弥生時代の遺構・遺物

ＳＡ01（第93図）

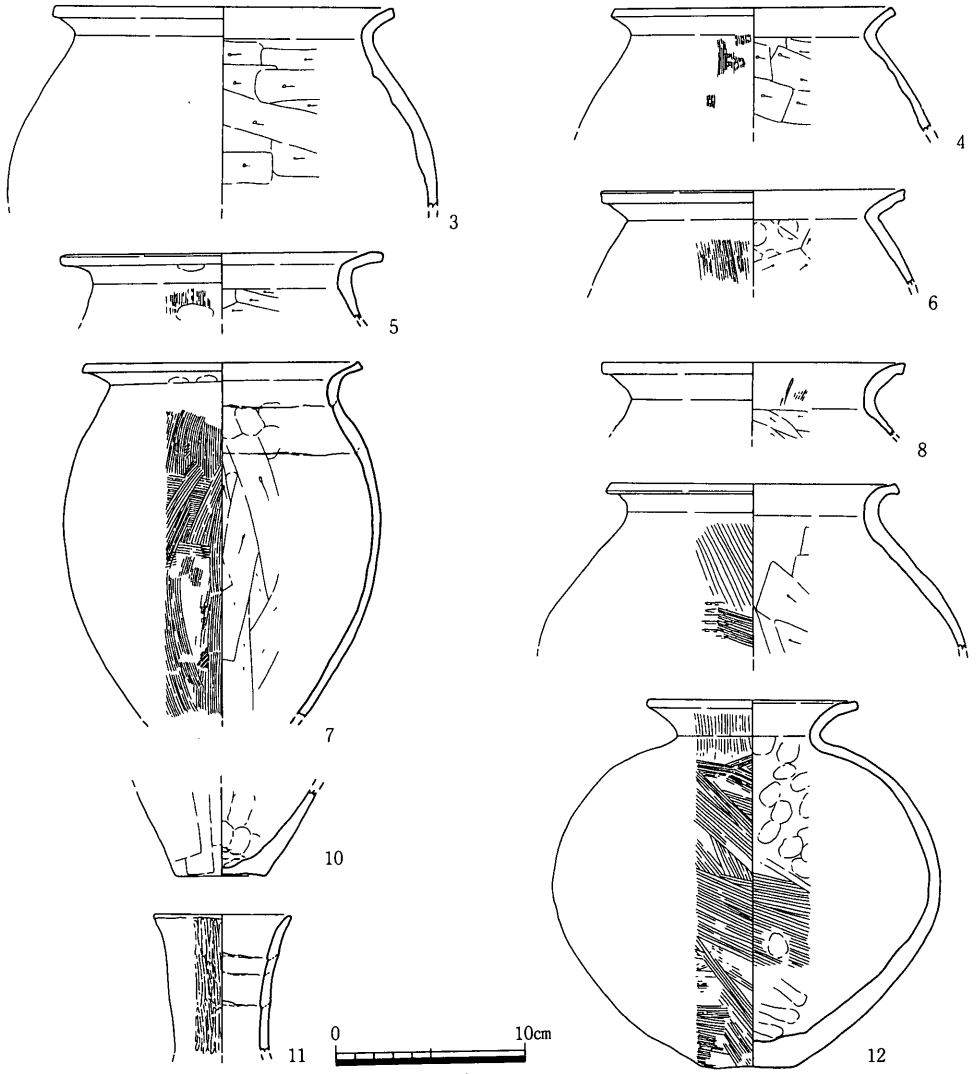
Ｃ2区西部で検出した。径約40cm，深さ約35cmのピットが1.7mの間隔で3つ並び，うち2つは2段掘りになっている。埋土は周囲の土と同じ黒色粘土系である。ピット内から遺物は出土しなかった。埋土の色や周囲の遺構の時期から弥生時代のものと考える。



第93図　C区ＳＡ01平・断面図（1／80）

ＳＤ01（第94～96図，図版19）

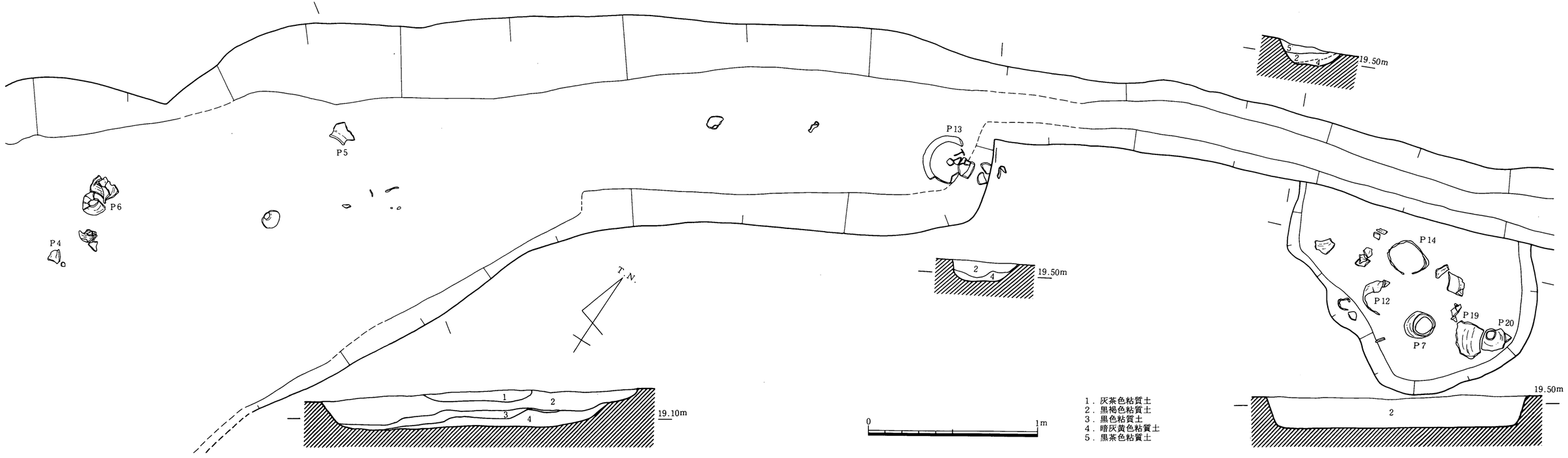
Ｃ1区東南部で検出した。北東部からの流れと南東部からの流れが合流して，幅が広くなって南に流れてゆく形にみえる。溝底の標高差からみても水はこの方向に流れるようになっている。北東支流では合流部寄りの南側に溝とつながった状態で円形の土坑が掘られており，中からは集中的に土器が出土した。破片ばかりであり，捨てられたものであろう。3～10は甕である。口縁端部に平坦面を持ち，胴部の肩は張らない。胴外面はナデかハケ目調整である。内面は6以外は口縁部直下までヘラケズリを行なう。11・12は壷である。11は外面に丁寧なヘラミガキを施す。12は外面ハケ目調整のみ，内面もハケ目と指押さえナデで仕上げている。13の高杯は中位で弱く屈曲する。14は胎土に金雲母・角閃石を少量



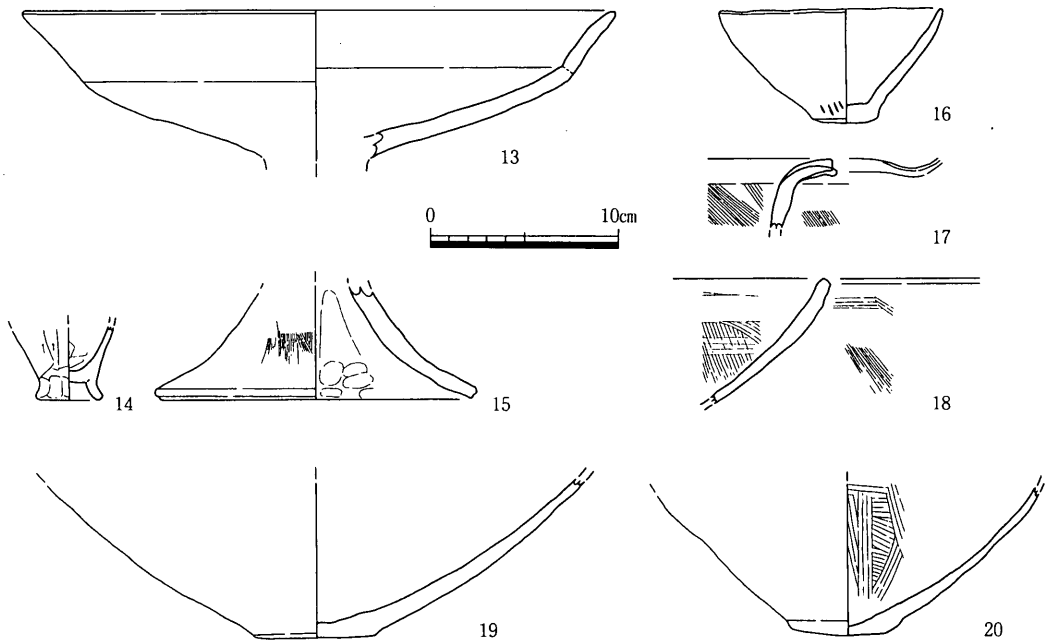
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
3	弥・甕	17.0			粗・普	良好	明褐・橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
4	弥・甕	14.9			中・普	良好	浅黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		
5	弥・甕	17.0			中・普	良好	黒，黄灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
6	弥・甕	16.0			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
7	弥・甕	14.7			中・普	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
8	弥・甕				中・普	良好	浅黄～黒褐	ナデ	ナデ・ケズリ		
9	弥・甕	15.4			中・普	良好	淡黄	ﾊｹ目・叩き→ｹｽﾞﾘ	ナデ・ケズリ		
10	弥・甕			4.8	中・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	ナデ		
11	弥・壺	7.2			中・普	良好	灰黄	ミガキ	ナデ		
12	弥・壺	11.1	19.2	4.8	粗・普	良好	鈍い黄橙・黒	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		

第94図　C区ＳＤ01出土遺物（1）（1／4）

含む。17は大形の鉢の片口の部分である。19・20は内面にヘラケズリが認められず20には18のようなハケ目の存在するものもあることから鉢としたが，壷の底の可能性も残る。以上の土器は，11のような細頸壷があることや甕内面のヘラケズリが口縁部直下まで及ぶこ



第95図　C区ＳＤ01遺物出土状況（1／20）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
13	弥・高杯	31.1			粗・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	ナデ		
14	弥・製塩			3.5	微・普	良好	鈍黄橙，褐灰	ケズリ・ナデ	板ナデ		金雲母，角閃石
15	弥・高杯			17.0	粗・普	良好	鈍い黄・黄灰	ハケ目→ナデ	ナデ		
16	弥・鉢	11.8	6.0	3.5	粗・普	良好	にぶい褐	ナデ・叩き	板ナデ		金雲母を含む
17	弥・鉢				粗・普	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
18	弥・鉢				粗・普	良好	黄灰	ハケ目・ナデ	板ナデ・ハケ目		
19	弥・鉢			6.4	粗・普	良好	黒・にぶい橙	ナデ	板ナデ		
20	弥・鉢			6.1	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ハケ目		

第96図　C区ＳＤ01出土遺物（2）（1／4）

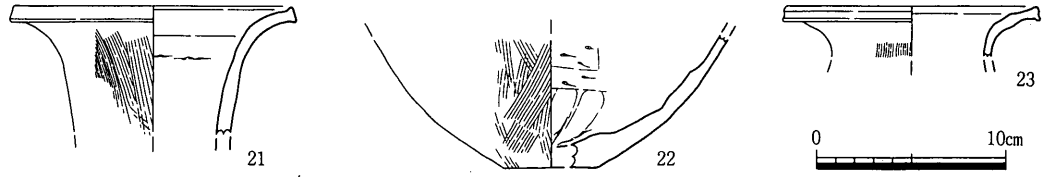
とからＶ期前半のものであろう。

ＳＤ02（第97図）

Ｃ５区北西部で検出した。北に向けて弧状をなす。深さ10～20cmで東と西にどのようにのびてゆくのかは確認できなかった。黒色の粗砂混じり弱粘土の埋土中からＶ期前半のものと思われる土器片が数点出土した。21は広口の長頸壷で口縁端部が上下に広がる。22も壷の底であろう。きれいな平底である。

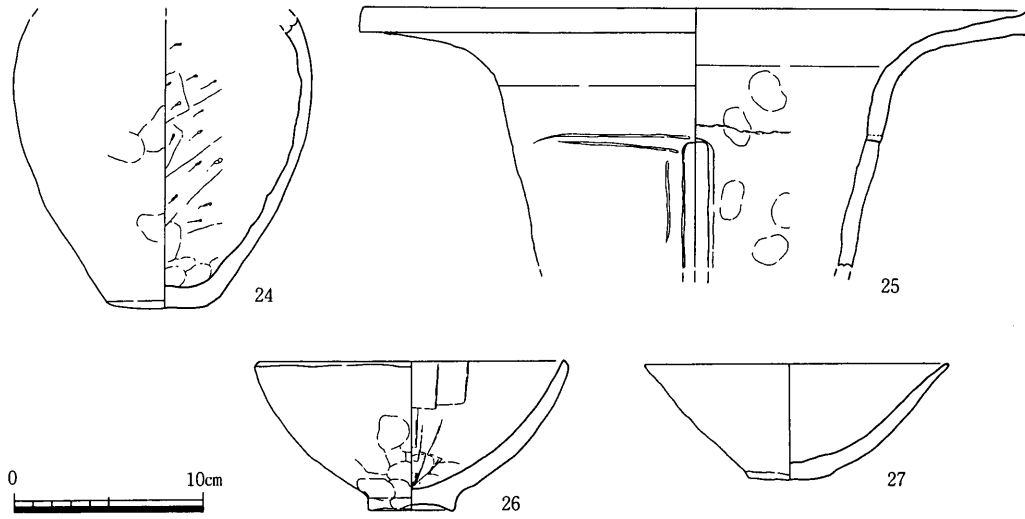
ＳＤ03（第98図）

Ｃ５区北西部からＳＤ02に合流する形になっている溝である。深さ約20cmで，黒色粗砂混じり弱粘土で埋まっていた。ＳＤ02との切り合い関係は確認できなかった。途切れてはいるが方向からいってＳＤ04につながる可能性が高い。土器が少量出土した。24は甕である。外面ナデ，内面ヘラケズリである。肩が張り，底は少し丸みを帯びている。25は口縁部が水平に近く開き，端部の上下方向への拡張もないことから壷とも考えたが，透しが入



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
21	弥・壺	14.6			細・普	良好	浅黄橙	ハケ目	ナデ		
22	弥・壺			5.0	粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ナデ→ハケ目	ナデ→ケズリ		
23	弥・壺	13.4			中・多	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

第97図　C区ＳＤ02・04出土遺物（1／4）



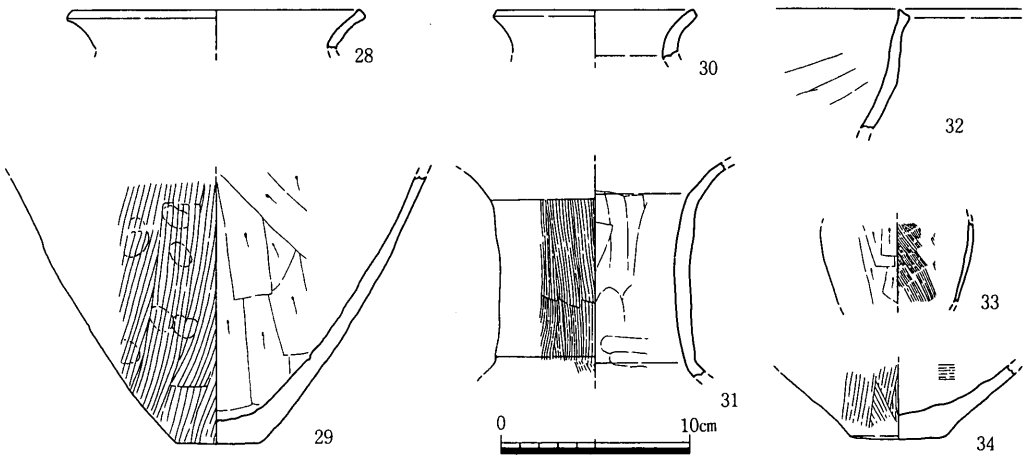
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
24	弥・甕			5.8	粗・普	良好	橙～黄橙	ナデ	ケズリ		
25	弥・器台	35.6			粗・多	良好	淡黄	ミガキ	ナデ	透かし部分が一部残る	
26	弥・鉢	16.6	7.8	4.6	中・普	良好	黒，明黄褐	ナデ	板ナデ		
27	弥・鉢	16.0	6.1	4.3	粗・普	良好	浅黄，灰ｵﾘﾌﾞ	ナデ	ナデ		

第98図　C区ＳＤ03出土遺物（1／4）

るため器台とした。その透しは隅丸で縦長の長方形となるが，破片のため幅・長さともにわからない。透しの横にはさらに縦方向に１本，横方向に２本のヘラ描きの沈線が入る。すべて両端が途切れているためこの部分にだけ描かれているのか，一周するのか判断できない。26・27は小形の鉢である。26は口縁端部に平坦面を持つ。26は上げ底，27は平底になっている。甕の底がやや丸みを帯びているが，器台が存在することからＶ期前半の土器と考えておきたい。

ＳＤ04（第97図）

Ｃ５区北部で検出した。西は上述のように浅くなって途切れ，また東は古代の溝のため途切れている。これも深さ約20cmで，黒色粗砂混じり弱粘土の埋土中からＶ期前半のもの



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
28	弥・甕	15.7			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
29	弥・甕			4.2	粗・普	良好	鈍黄褐，明褐	ハケ目・ナデ	ケズリ		
30	弥・甕	11.7			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
31	弥・壺				中・普	良好	暗褐	ハケ目・ナデ	ナデ		
32	弥・鉢				粗・普	良好	鈍黄橙，赤褐	ナデ・板ナデ	板ナデ		
33	弥・製塩				中・普	良好	にぶい橙，褐	ケズリ	ハケ目		
34	弥・鉢			5.2	粗・普	良好	鈍黄橙，灰白	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目		

第99図　C区ＳＤ05出土遺物（1／4）

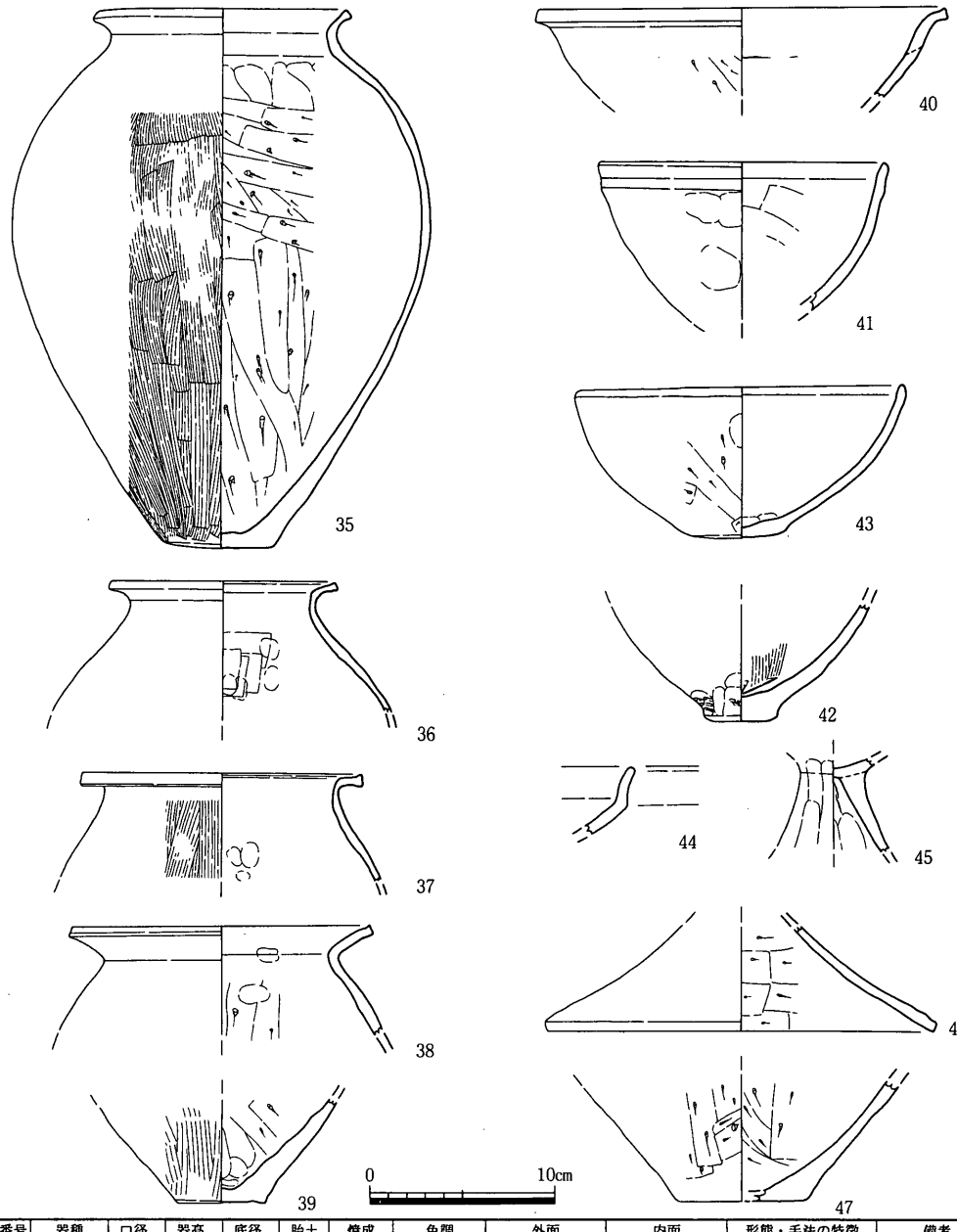
と思われる土器片が少し出土した。23は壷である。口縁端部が上下に少し広がり，ナデ調整のため凹線状に凹む。

ＳＤ05（第99図，図版34）

Ｃ５区中央部で検出した南に弧を描く溝である。東は古代の溝のため途切れ，西は調査区外にのびてゆくようであるが，Ｃ２区では遺構面の土が埋土と似ていたため検出しえなかった。古代の溝をはさんで北側のＳＤ02かＳＤ04とつながると考えられるが，どちらの溝とつながるかは明らかでない。溝の深さは10～20cmで，黒色粗砂混じり弱粘土の埋土中からはＶ期前半の弥生土器片が出土した。28・30は甕で口縁端部に平坦面を持つ。31は長頸広口壷の頸部である。32は大形の鉢である。傾きは不確定。

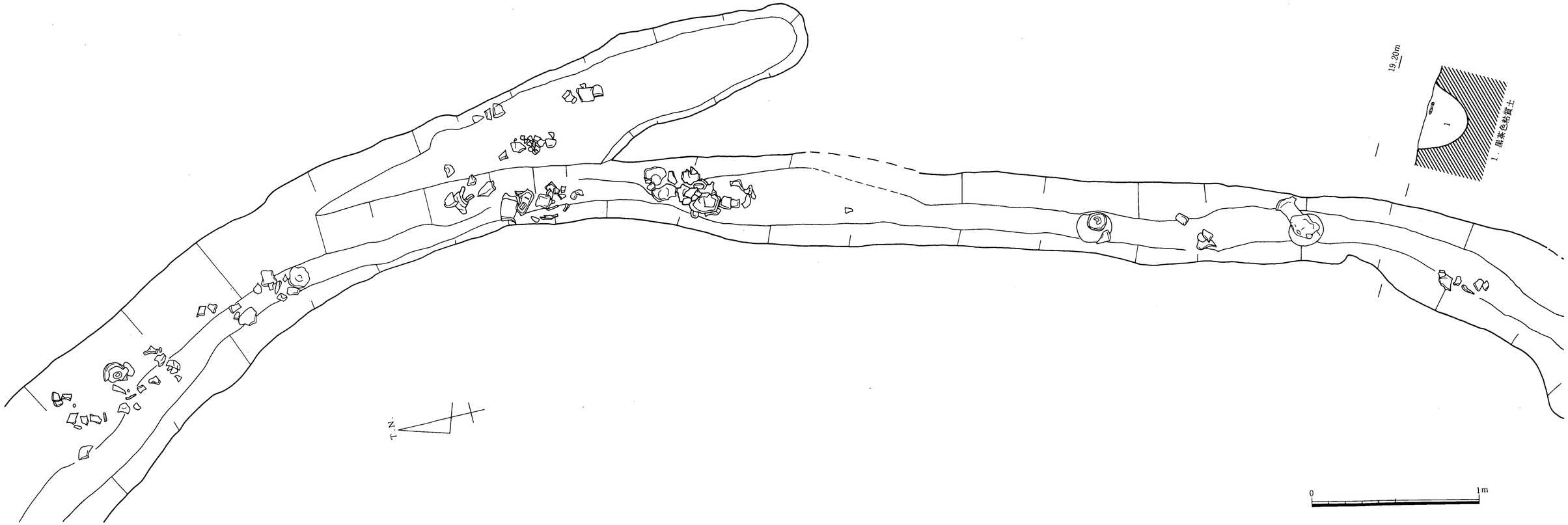
ＳＤ06（第100～102図，図版33・34）

Ｃ２・４・５区にまたがって検出した直径約14ｍの環状の溝である。東の一部で小さな支流を派生する。また，西側の部分は遺構面の土が埋土と似ていたため検出しえなかった。溝の深さは20～30cmで，埋土は黒色粘質土の単一層であった。土器はＣ５区部分からのみ出土した。35～39・47は甕である。口縁端部に平坦面を持ち，35のように胴部の肩が張るものや37のように張らないものがある。また，胴内面のヘラケズリは35のように口縁部直下近くまで及ぶものから36・37のように上半には行なわないものまである。40～43は鉢で

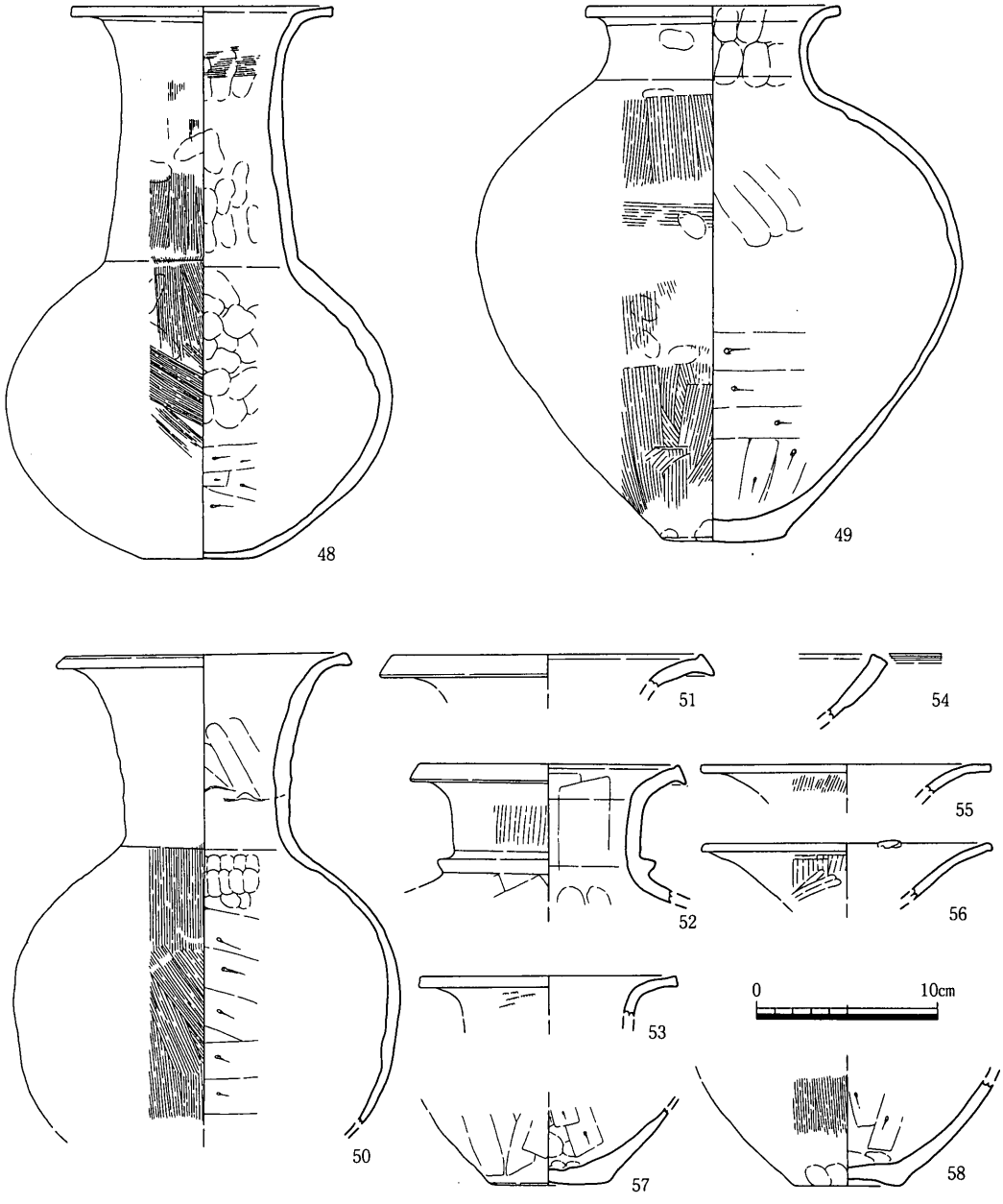


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
35	弥・甕	14.0	28.1	6.0	粗・普	良好	灰白	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
36	弥・甕	12.4			粗・普	不良	明赤褐～灰	ナデ	ナデ		
37	弥・甕	15.0			粗・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
38	弥・甕	16.4			中・普	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ナデ・ケズリ		
39	弥・甕			4.7	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ケズリ→ナデ		
40	弥・鉢	22.2			中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
41	弥・鉢	15.6			粗・普	良好	橙～黒	ナデ	ナデ		
42	弥・鉢			4.0	中・普	良好	にぶい橙，黒	叩き・ナデ	ハケ目		
43	弥・鉢	17.5	7.8	4.9	中・普	良好	黄橙～黒褐	ケズリ→ナデ	ナデ		
44	弥・高杯				細・普	良好	明褐	ナデ	ナデ		金雲母を含む
45	弥・高杯				粗・普	良好	明黄褐	ナデ	ナデ		
46	弥・高杯			31.1	細・普	良好	橙	ナデ	ケズリ		
47	弥・甕			6.8	粗・多	良好	橙～明赤褐	ナデ→ケズリ	ナデ→ケズリ		

第100図　C区ＳＤ06出土遺物（1）（1／4）

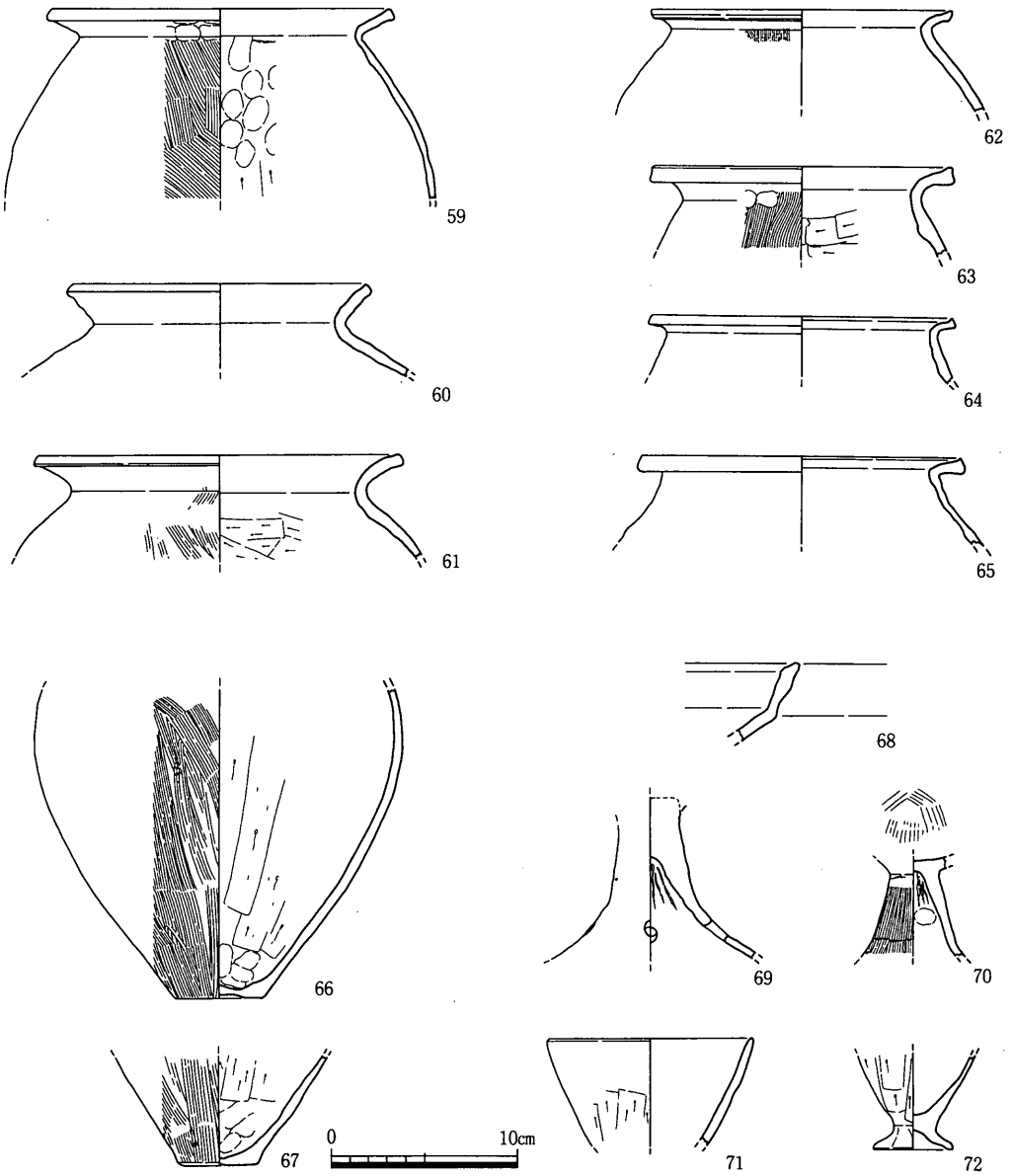


第101図　C区ＳＤ06遺物出土状況（1／20）



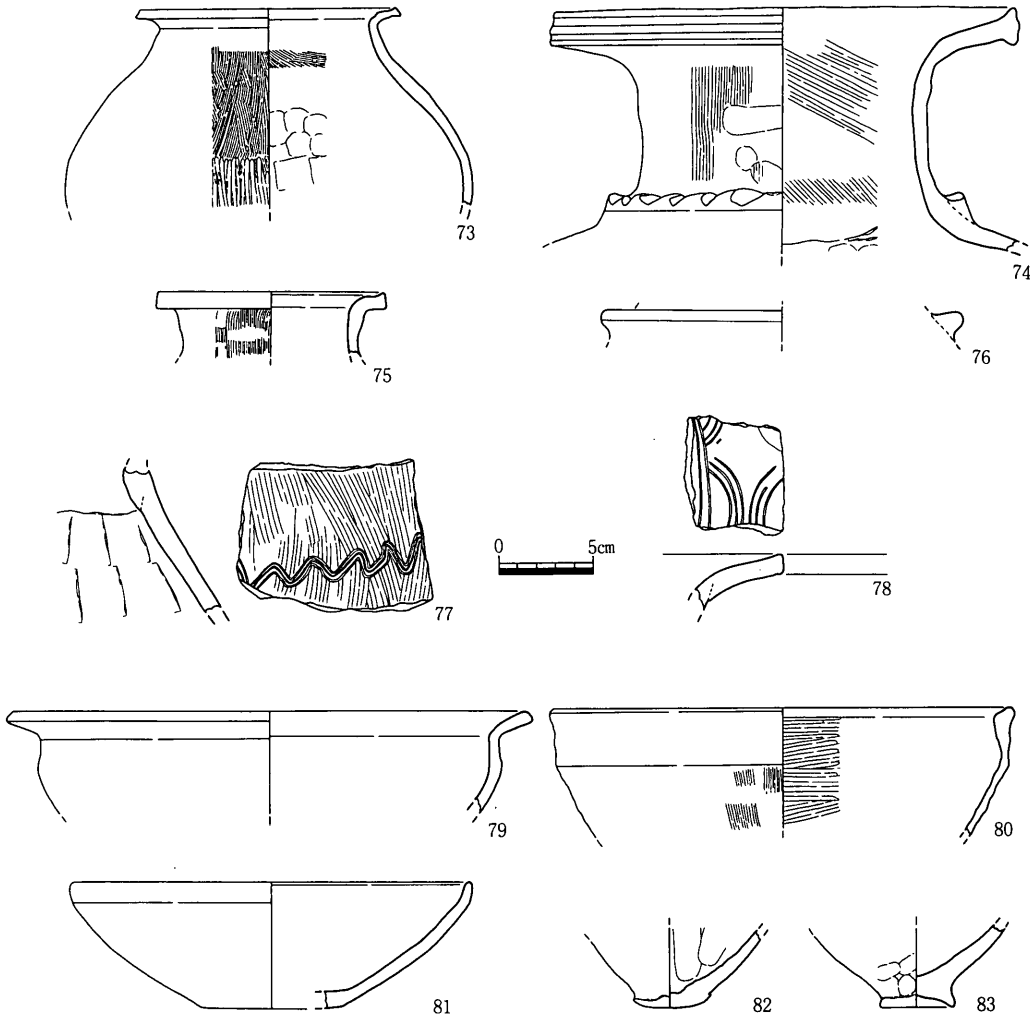
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
48	弥・壺	14.3	30.0	6.1	粗・普	良好	橙～褐	ハケ目・ナデ	ナデ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ		
49	弥・壺	14.0	29.3	6.6	粗・普	良好	黒・にぶい橙	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
50	弥・壺	16.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
51	弥・壺	18.4			中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
52	弥・壺	15.2			粗・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
53	弥・壺	14.2			中・普	良好	浅黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
54	弥・壺				粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	ナデ		
55	弥・壺	16.0			粗・普	良好	黄橙～明赤褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
56	弥・壺	16.0			中・普	良好	にぶい黄～黄	ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ・ナデ	ナデ		
57	弥・壺			6.5	粗・普	良好	橙，にぶい黄	ナデ	ケズリ		
58	弥・壺			5.8	粗・普	良好	明褐	ハケ目	ケズリ		

第102図　C区ＳＤ06出土遺物（2）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
59	弥・甕	18.4			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
60	弥・甕	16.3			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
61	弥・甕	19.3			粗・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
62	弥・甕	16.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
63	弥・甕	16.2			粗・多	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
64	弥・甕	16.4			中・普	良好	灰白～黒褐	ナデ	ナデ		
65	弥・甕	17.4			中・普	良好	明褐，黄灰	ナデ	ナデ		
66	弥・甕			4.6	粗・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
67	弥・甕			4.3	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ→ケズリ		
68	弥・高杯				微・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		
69	弥・高杯				粗・普	良好	浅黄橙～黒褐	ナデ	ナデ	2穴確認	
70	弥・高杯				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
71	弥・製塩	11.0			粗・普	良好	浅黄橙～暗褐	ナデ→ケズリ	ナデ		
72	弥・製塩			4.2	中・普	良好	灰黄・黄褐	ケズリ	ナデ		

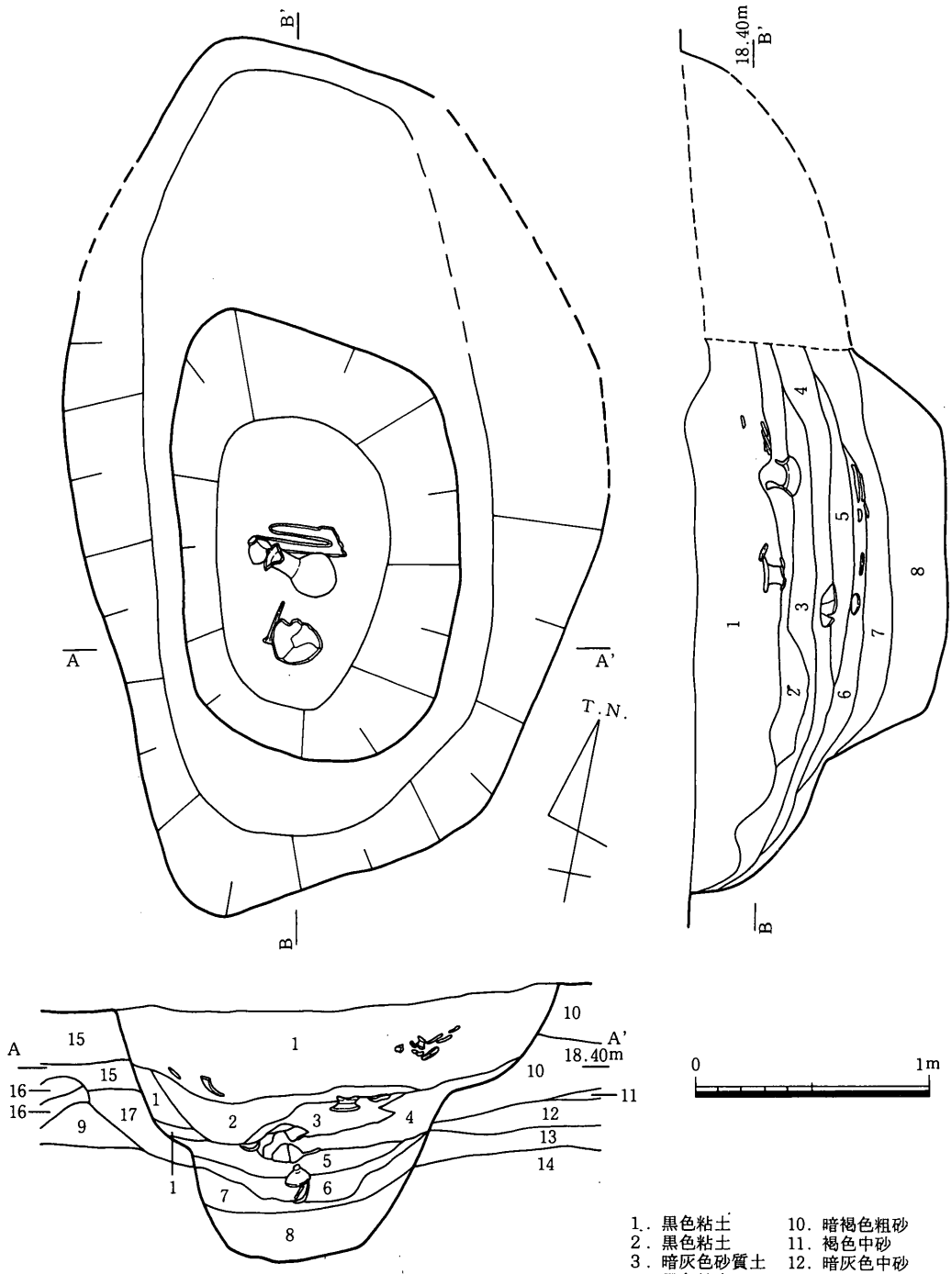
第103図　C区SD08出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
73	弥・壺	13.9			微・普	良好	褐	ナデ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ナデ		金雲母を含む
74	弥・壺	24.7			粗・普	良好	灰白～明黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	沈線，貼り付け突帯	
75	弥・壺	12.0			中・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
76	弥・壺				中・普	良好	灰黄	ナデ	不明		
77	弥・壺				粗・普	良好	淡黄	ハケ目	ナデ	ヘラ描き波状文	
78	弥・壺				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目→ナデ	ヘラ描き文	
79	弥・鉢	27.2			粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
80	弥・鉢	24.4			中・普	良好	褐灰，鈍黄褐	ハケ目→ナデ	ミガキ		
81	弥・鉢	21.2	6.7	7.4	粗・普	良好	鈍黄橙～橙	ナデ	ナデ		
82	弥・鉢			4.0	粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ナデ	ナデ		
83	弥・鉢			3.9	粗・普	良好	橙～褐灰	ナデ	ナデ		

第104図　C区ＳＤ08出土遺物（2）（1／4）

ある。口縁を外に折り曲げるもの(40)や口縁部外面に凹線状の凹みをめぐらせるもの(41)，そのまますっとのびてゆくもの(42)がある。また，40は外面下半部をヘラケズリしている。44～46は高杯である。49は球形に近い胴部を持つ短頸壷である。48・50～56は長頸の広口



1．黒色粘土
2．黒色粘土
3．暗灰色砂質土
4．黒色粘土
5．暗灰色砂質土
6．黒色弱粘土
7．暗灰色砂質土
8．黒色粘土
9．褐色粗砂
10．暗褐色粗砂
11．褐色中砂
12．暗灰色中砂
13．黒色粗砂
14．黒色微細砂質土
15．黒色細砂質土
16．灰黒色微細砂質土
17．暗灰色粗砂

第105図　C区ＳＥ01平・断面図（1／30）

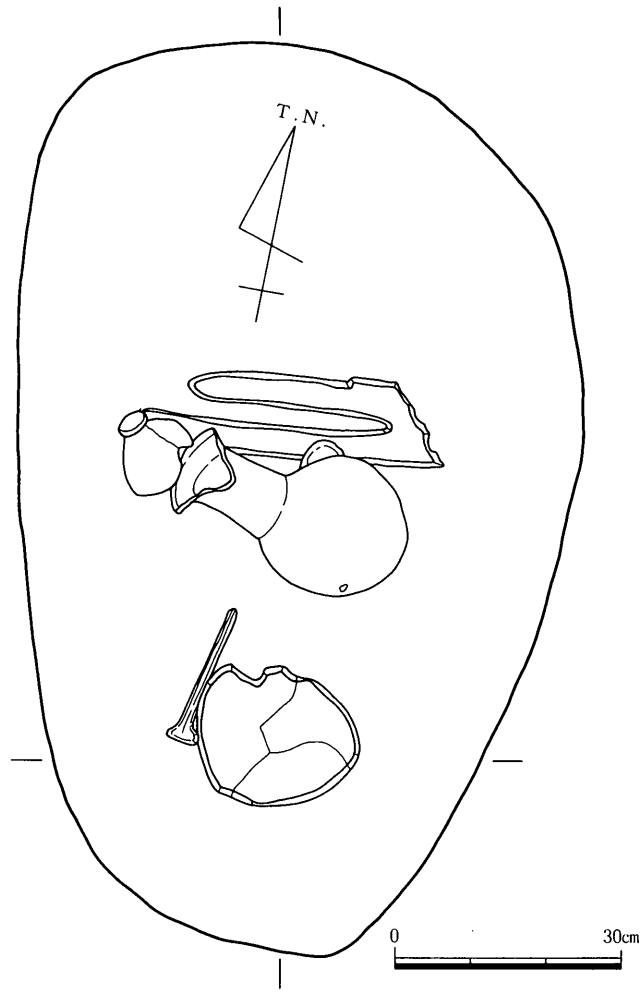
壷である。口縁部の開き方・頸部の形にバラエティーがある。すべてV期前半に属すると考えられる。

ＳＤ07

Ｃ４区中央部で検出した南北方向の溝である。深さが５㎝前後と浅く遺物も出土しなかったが，埋土が黒色粘質土であったため弥生時代のものと判断した。

ＳＤ08（第103・104図）

Ｃ２区東部で検出した幅0.7～1.6ｍ，深さ0.2～0.3ｍの溝である。南西－北東方向に掘られていたが，埋土が遺構面を構成する土と同じ質・色をしていたため全容を明らかにするに至らなかった。埋土は黒色砂混じり粘質土の単一層であった。V期前半と考えられる土器を出土した。59～67は甕である。口縁端部に平坦面を作り胴外面はハケ，内面はヘラケズリが径最大部より少し上まで及ぶというのが共通の形態だが，肩は張るものと張らないものが存在する。68は外面が強いナデのため２段に凹線状に凹む。口縁端部は水平ではなくなっているが平坦面を持ちⅣ期の様相を残している。傾きは不確定。69は杯部と脚部の接合面ではずれている。70は接合方法は不明である。73は甕にも近いが胴下半をヘラミガキしている。内面にヘラケズリ痕は認められない。76は壷の肩部の突



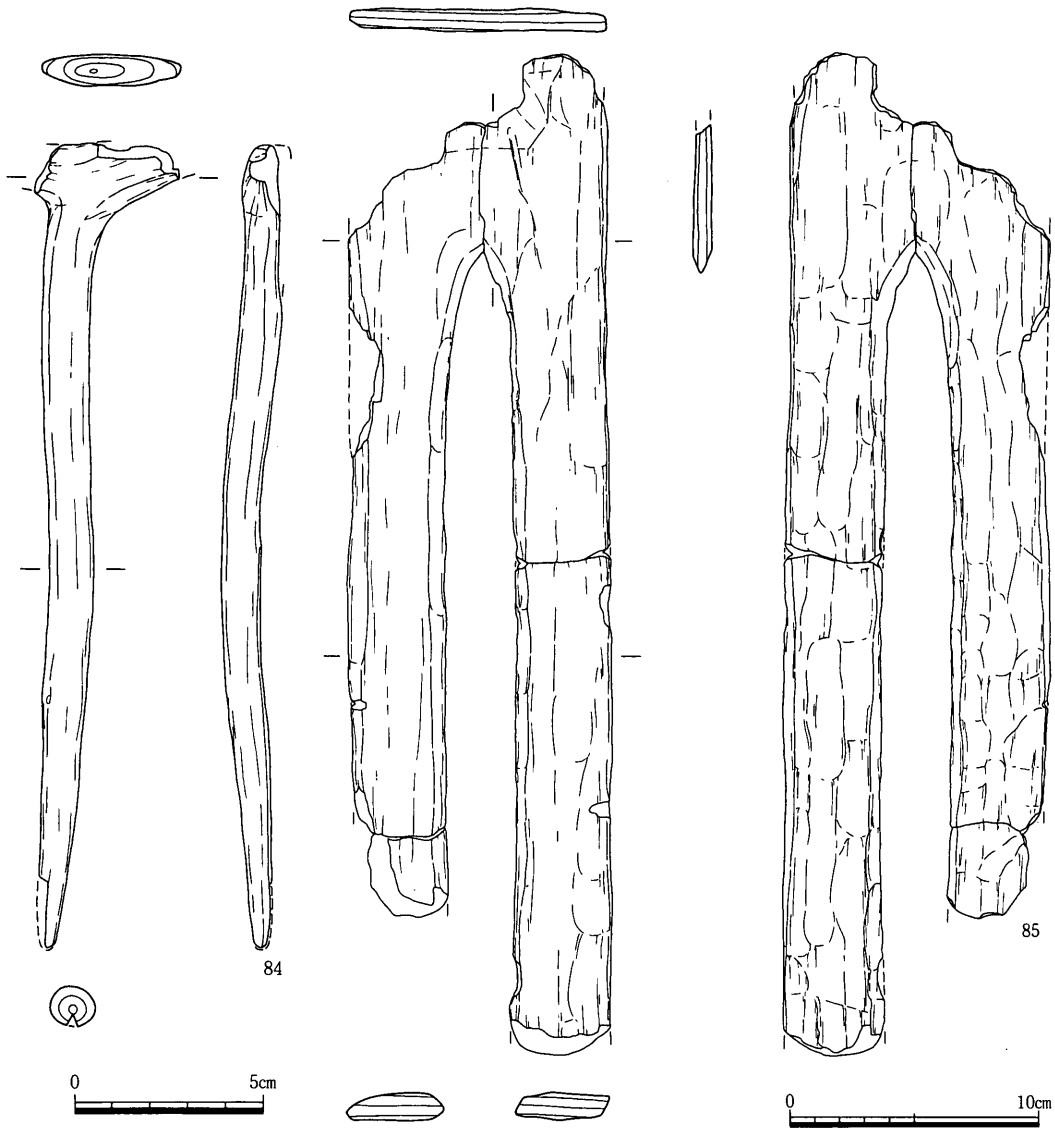
第106図　Ｃ区ＳＥ01遺物出土状況（1／10）

帯である。77は壷の肩部にぎこちない櫛描き波状文を描く。傾きは不確定。78はむかい合った二重の半円文の頸部側に更に2本の沈線をめぐらせている。80は鉢にしたものの，内面を丁寧に磨いており杯の深い高杯の可能性もある。口縁部の形状は68に似る。81は平坦面の大きい平底の鉢である。

ＳＥ01（第105～123図，図版27）

Ｃ２区西部で検出した。掘り方上面は2.4×3.6mの南北に長い楕円形をしている。断面は中程に段をもつ逆台形で深さは1.1mである。中程の段は明瞭な平坦面をなしていない。底面の大きさは0.7×1.2mである。この部分は硬い暗灰色砂質の岩盤に当っているが，その上には扇状地形により粗砂～シルトが葉理状に堆積しているため，水は得られたものと考えられる。ただし，調査時にはそれほど水は湧かなかったことから，日々の生活水をまかないえたかどうかは判断しがたい。

井戸底では木製の二又鋤鍬や棒状木製品が弥生土器とともに見つかっている。84は用途不明の木製品である。他に木の枝などの出土もなかったことや全体の観察から加工品と判断した。枝分かれの部分を利用したようで上部は二又にわかれている。ただし両方とも欠けて全体像は掴めない。85は二又の鍬あるいは鋤である。着柄部分が欠けているためどちらか判断できない。身の両面ともきれいな平坦面に作り上げ，さらに縁の部分はすべて断面六角形になるように両面から面取りして尖らせている。見た目は薄く実用に堪えないように思われるが，完形で出土しなかったことから実際に使われたものと考えられる。これらの木製品とともに壷や小形の甕が出土している。これまでの研究によると，埋め井戸あるいは井戸使用時に井戸傍で祭祀を行なった例のしばしばあることが明らかにされている。[注] その祭祀にもちいられその後井戸内に沈められたものとして，井戸内から時折小鐸や木製品・壷・鳥形木製品などが出土する。小鐸は覆屋から吊られ，木製品は井戸の掘削にもちいられたもの，壷は祭りの捧げものを入れていたものとみられている。ＳＥ01で出土した二又の耕具も壷もおそらく同様のもちいられ方をしたのであろう。また実用品とは考えにくい小形甕の出土も祭祀の可能性を強めている。ところで祭祀の行なわれた時期であるが，水が湧くことに伴って溜まってゆく砂が木製品などと井戸底との間にみられないことから，砂が溜まる前にそれらが投げ込まれたと推測される。また折れた耕具も掘削直後をうかがわせる。以上から井戸を使うにあたって祭祀がおこなわれたと考えておきたい。井戸内には砂をあまり含まない粘土や砂質土が層状に堆積していた。ブロック状の土がないことから，人為的な埋め戻しはなかったものと思われる。しかし，多量の土器片が出土

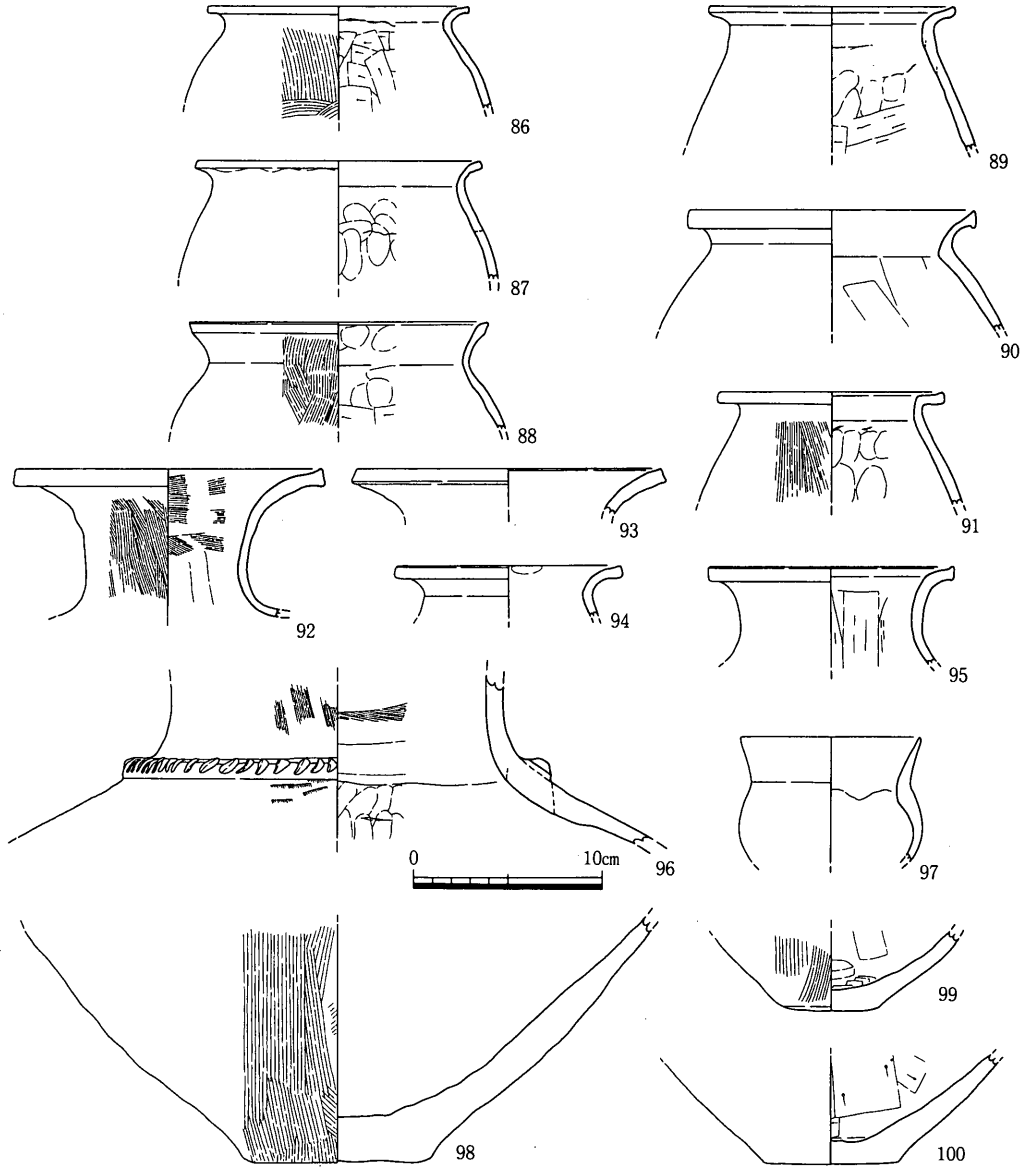


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
84	用途不明品	21.0		1.1	芯持		
85	二又鍬・鋤	39.6	10.3	1.2	板目		

第107図　C区ＳＥ01出土遺物（1）（1／2，1／3）

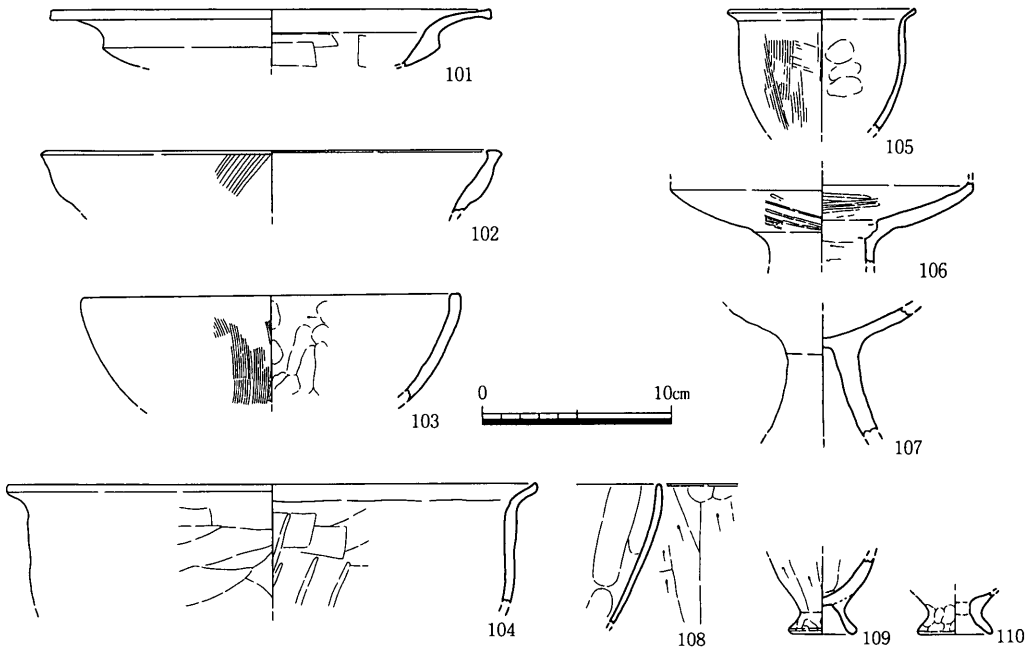
しており，自然埋没の過程で窪みが土器の廃棄場所として用いられたことをうかがわせる。

次に土器の簡単な説明を行なってゆく。86～110は第１層からの出土である。甕は口縁端部に平坦面を持つが，88は丸く尖っている。91はいわゆる下川津Ｂ類土器の形をしてい



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
86	弥・甕	13.8			細・普	良好	灰白～黒褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
87	弥・甕	15.2			粗・普	良好	浅黄～黒褐	ナデ	ナデ		
88	弥・甕	15.8			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
89	弥・甕	13.0			粗・普	良好	鈍黄橙～褐灰	ナデ	ナデ→ケズリ		
90	弥・甕	15.2			中・普	良好	灰黄	板ナデ	板ナデ		
91	弥・甕	12.0			中・普	良好	鈍褐，鈍黄褐	ハケ目	ナデ		
92	弥・壺	16.5			粗・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
93	弥・壺	16.0			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
94	弥・甕	12.0			中・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
95	弥・壺	13.0			粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	板ナデ		
96	弥・壺				粗・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ナデ	ハケ目・ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
97	弥・小丸壺	9.5			中・普	良好	淡黄～灰黄	ナデ	ナデ		
98	弥・壺			10.0	粗・普	良好	灰白・黒	ナデ→ハケ目	板ナデ		
99	弥・壺			5.1	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	板ナデ		
100	弥・壺			7.1	中・普	良好	浅黄，黒	ナデ	ケズリ		

第108図　C区ＳＥ01出土遺物（2）（1／4）

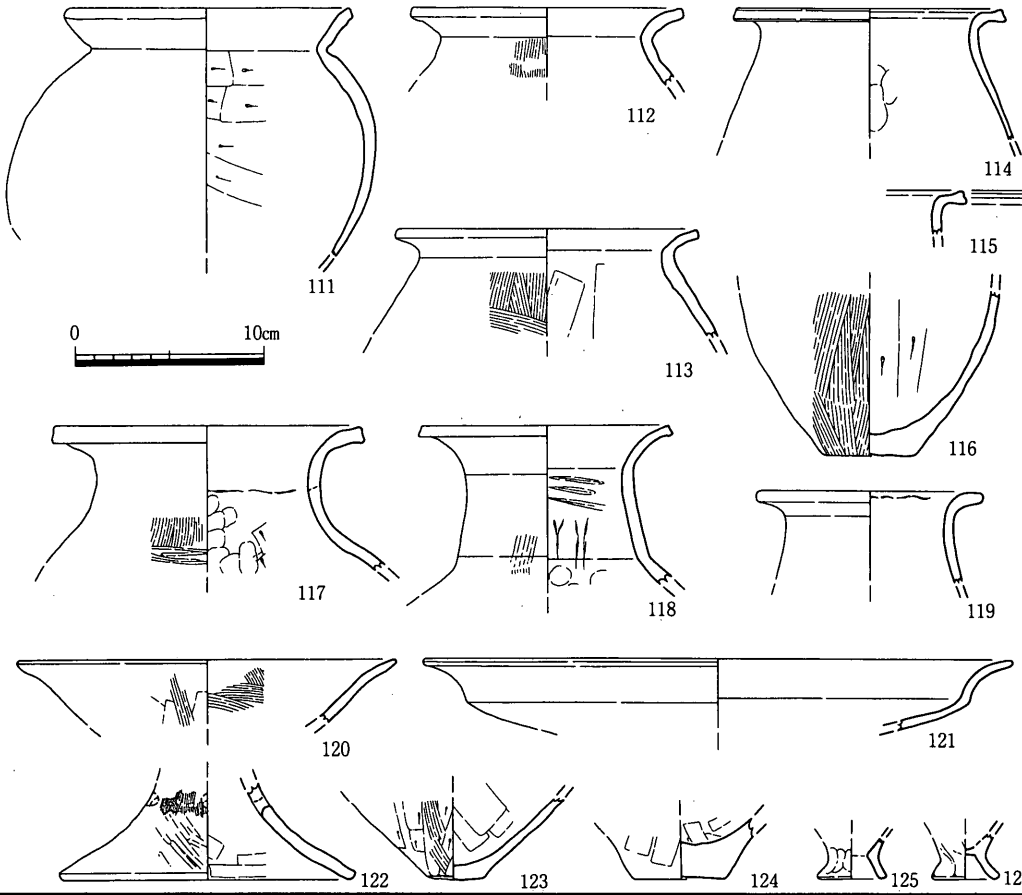


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
101	弥・高杯	23.2			中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		
102	弥・高杯	24.2			中・普	良好	浅黄	ハケ目	ナデ		
103	弥・鉢	20.1			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ケズリ→ナデ		
104	弥・鉢	28.0			中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
105	弥・鉢	10.0			中・普	良好	灰黄～灰	ナデ・ハケ目	ナデ		胎土は灰
106	弥・高杯	16.0			粗・普	良好	黒褐，橙	ミガキ	ナデ・ﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ		胎土は黒褐
107	弥・高杯				粗・多	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
108	弥・製塩				中・普	良好	にぶい黄	ケズリ	ナデ		
109	弥・製塩			3.6	中・普	良好	鈍い黄，黒褐	ケズリ・ナデ	ナデ		
110	弥・製塩			4.0	中・普	良好	浅黄橙～鈍橙	ナデ	ナデ		

第109図　C区ＳＥ01出土遺物（3）（1／4）

る。外面調整はハケ目もしくはナデで，内面はヘラケズリが口縁部直下まで及ぶものから下半にとどまりそうなものまである。97はこの時期にはあまりみられない形の小形丸底壷である。102は鉢の可能性もあるがすぼまり具合から高杯と考えた。104は胴が直立しており大きな平底になる可能性がある。106は杯部および脚部外面にやや粗いヘラミガキが施されている。杯部底は円盤充填で穴をふさいでいる。110は109のような貼り付けの脚部がとれたものであろう。

111～126は第２層からの出土である。111は外面は黒く板ナデで磨き上げている。内面は口縁への屈曲部までヘラケズリを施している。114はいわゆる下川津Ｂ類土器で胎土に金雲母・角閃石を含む。115も同じであろう。117は胴部外面を横方向に磨いている。120は121のような明瞭な屈曲部を持たない高杯であろう。122は５～６個の透し穴が開くと考えられる。外面脚裾部のみ磨いている。123は外面にヘラケズリが施されているため鉢と



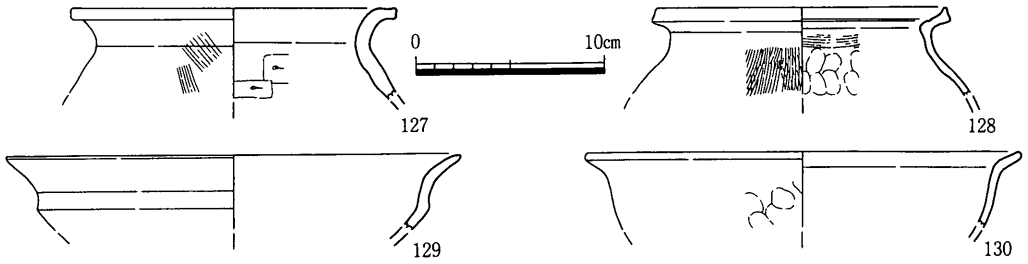
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
111	弥・甕	15.2			粗・多	良好	黒，灰黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ		
112	弥・甕	14.4			粗・普	良好	淡黄～暗灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
113	弥・甕	16.0			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	板ナデ		
114	弥・甕	14.1			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母，角閃石
115	弥・甕				細・普	良好	鈍黄橙・黒褐	ナデ	ナデ		
116	弥・甕			5.0	粗・普	良好	浅黄・黒	ハケ目	ケズリ		
117	弥・壺	16.5			細・普	良好	浅黄	ナデ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ケズリ→ナデ		
118	弥・壺	13.2			粗・普	良好	灰黄・暗赤褐	ハケ目→ナデ	ナデ		
119	弥・壺	12.0			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	不明		
120	弥・高杯	20.1			中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
121	弥・高杯	31.1			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
122	弥・高杯			15.7	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ミガキ	ナデ	穿孔の数は５～６個？	
123	弥・鉢			3.1	中・普	良好	灰黄	ｹｽﾞﾘ→ﾊｹ目・ナデ	板ナデ		
124	弥・甕			4.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	板ナデ		
125	弥・製塩			3.7	中・普	良好	黒褐～暗褐	ナデ	ナデ		
126	弥・製塩			3.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		

第110図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（4）（1／4）

した。125・126とも製塩土器の貼り付けの脚部がとれたものであろう。

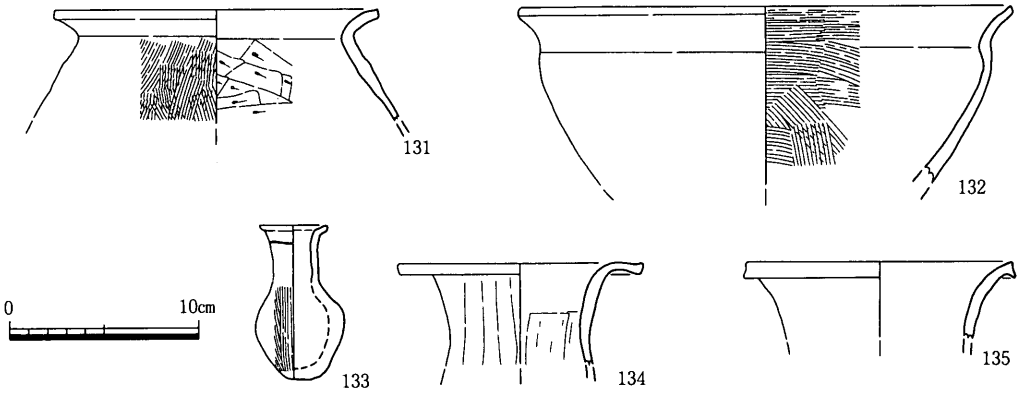
127～130は第３層からの出土である。128は胎土に角閃石を含む。

131～135は第４層からの出土である。132は外全面に煤が付く。煮炊きにももちいられたのであろう。133は小形の壷である。口縁下外面に沈線を１本入れる。大きさから実用品とは考えにくい。完形であることから，この井戸と深い結びつきがあるとすればこの時



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
127	弥・甕	17.2			中・普	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
128	弥・甕	15.7			細・普	良好	暗灰黄	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		角閃石を含む
129	弥・高杯	24.0			粗・普	良好	褐灰，浅黄橙	不明	不明		
130	弥・鉢	23.0			中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		

第111図　C区ＳＥ01出土遺物（5）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
131	弥・甕	17.2			粗・普	良好	灰黄～黒褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
132	弥・鉢	26.1			粗・普	良好	黒，褐	ナデ	ハケ目		
133	弥・ミニ	3.6	8.1		微・普	良好	灰白・黒	ハケ目→ナデ	ナデ	沈線	
134	弥・壺	13.0			粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
135	弥・壺	14.4			中・普	良好	橙，褐灰	ナデ	ナデ		

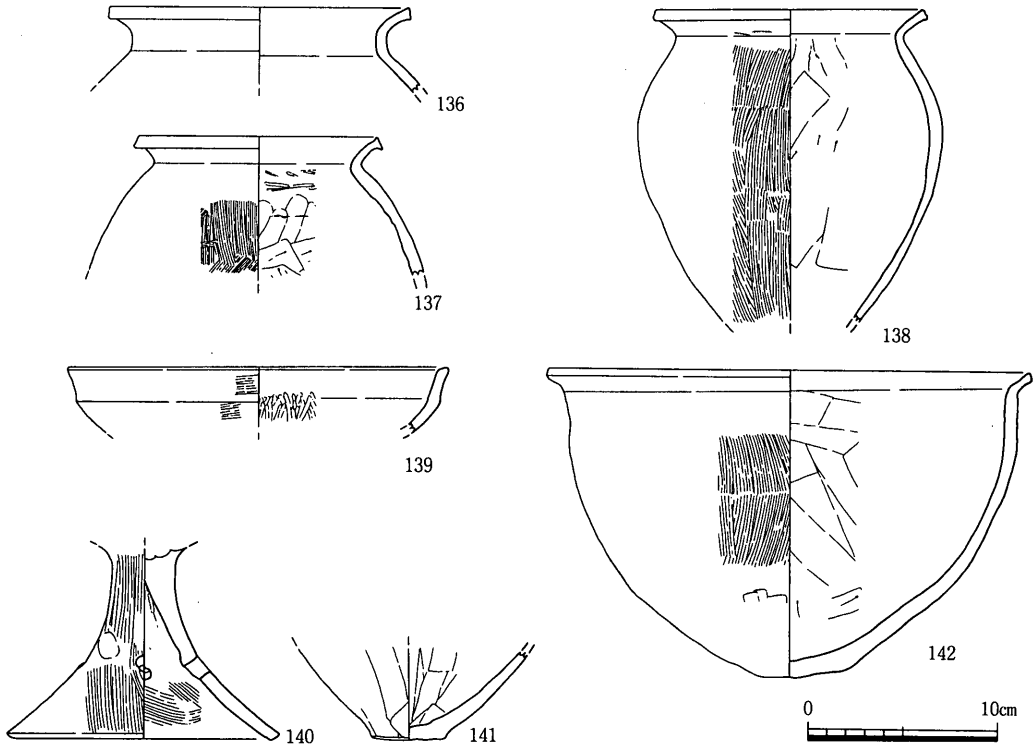
第112図　C区ＳＥ01出土遺物（6）（1／4）

点でも祭祀が行なわれたとも考えられる。

136～142は第５層からの出土である。137は外面に煤が付く。また内面にはヘラ痕が残る。138も外面に煤が付く。胴内面は中位のみヘラケズリが施され，下半は板できれいに磨き上げている。139は内面下半のみ磨いている。140は杯部と脚部を別に作り合体させるタイプのものである。142は内面底付近に少しヘラケズリを施している。

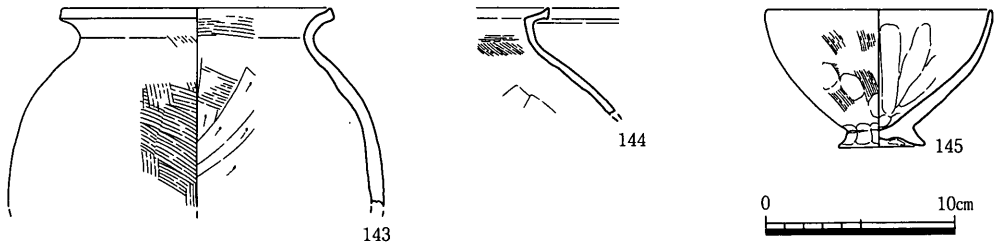
143は６層，144・145は７層からの出土である。143は胴外面に煤が付着している。144はいわゆる下川津Ｂ類の形態の甕である。

146～152は８層からの出土である。148は頸部内面に強い指押さえの痕が縦横に並ぶ。胴中位に穴が１つあいているが，意図的なものかはわからない。150～152は小形の鉢・甕



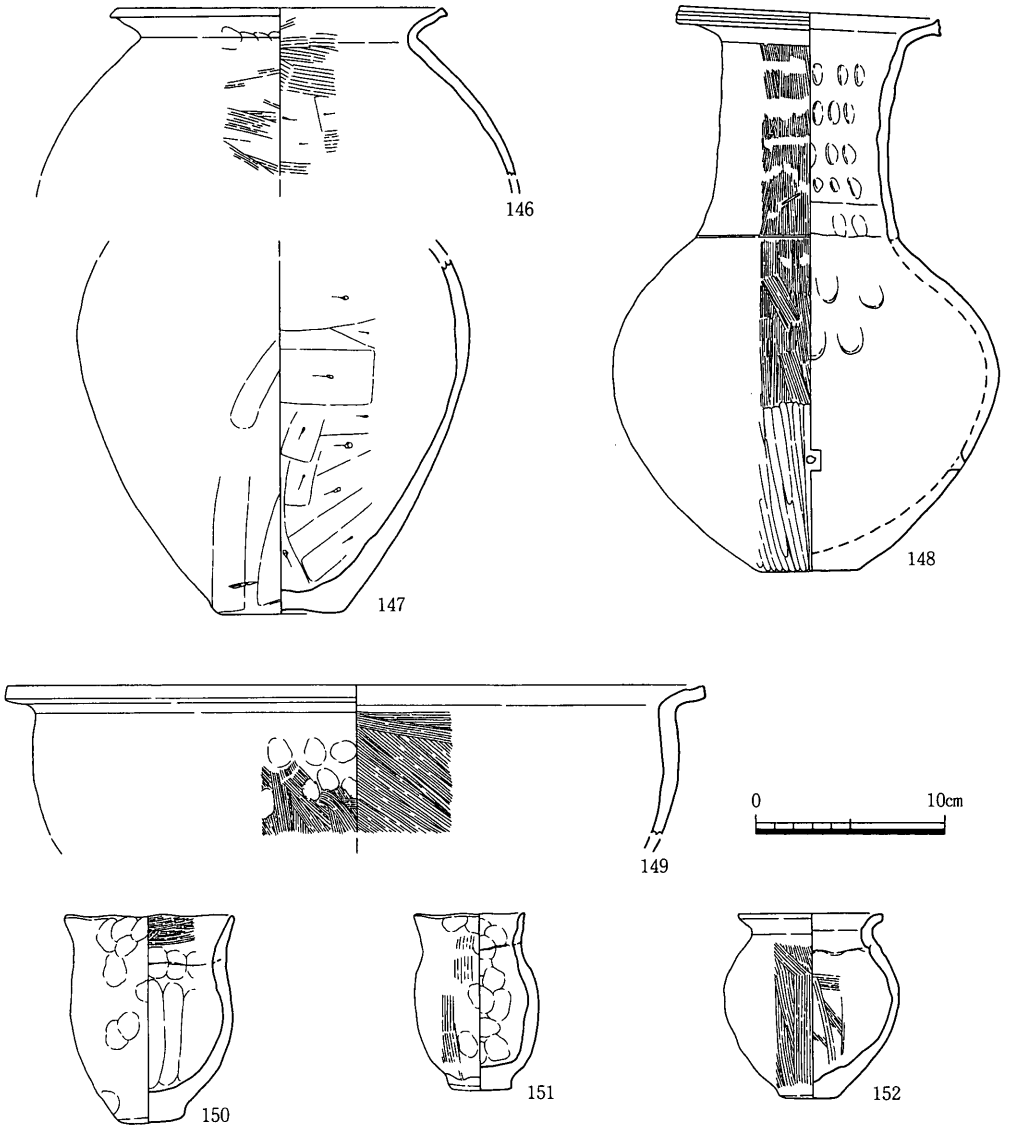
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
136	弥・甕	15.9			微・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		
137	弥・甕	13.1			粗・普	良好	灰黄，黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		胴に煤付着
138	弥・甕	14.4			中・普	良好	黄灰～黒	ハケ目→ナデ	ケズリ→板ナデ		
139	弥・高杯	20.1			細・普	良好	灰白	ハケ目→ナデ	ナデ・ミガキ		
140	弥・高杯			14.4	粗・普	良好	灰黄，鈍い橙	ハケ目・ナデ	ハケ目		
141	弥・鉢			3.8	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	板ナデ		
142	弥・鉢	25.2	15.6	4.3	粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ケズリ→ナデ		

第113図　C区ＳＥ01出土遺物（7）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
143	弥・甕	15.5			中・普	良好	灰黄～橙	ナデ・ハケ目	ﾊｹ目→ナデ・ｹｽﾞﾘ		胴に煤付着
144	弥・甕				中・普	良好	黄橙～灰黄褐	ナデ	ナデ・ハケ目		
145	弥・鉢	12.0	7.2	4.6	粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		

第114図　C区ＳＥ01出土遺物（8）（1／4）

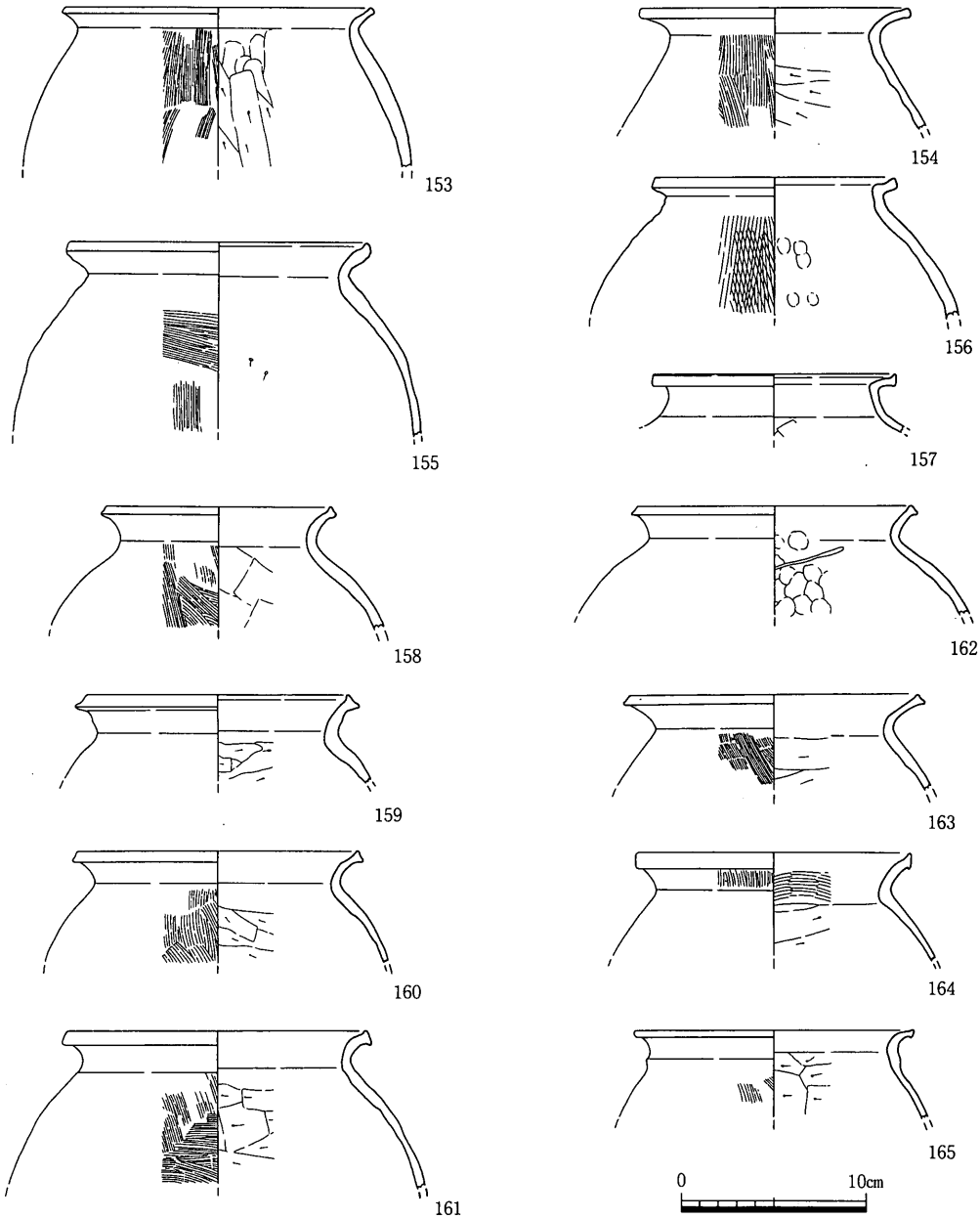


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
146	弥・甕	17.7			粗・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ケズリ→ハケ目		
147	弥・甕			6.6	粗・普	良好	灰	ナデ・板ナデ	ケズリ		
148	弥・壺	14.0	29.1	5.1	中・普	良好	灰白～黒	ﾐｶﾞｷ・ﾊｹ目→ナデ	ナデ	凹線	
149	弥・鉢	37.0			粗・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
150	弥・鉢	9.0	10.9	3.5	細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ・ハケ目		
151	弥・鉢	5.8	9.4	3.3	中・普	良好	灰黄～黄灰	ナデ・ハケ目	ナデ		
152	弥・甕	7.6	9.8	2.8	粗・普	良好	灰黄・黒	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		

第115図　C区ＳＥ01出土遺物（9）（1／4）

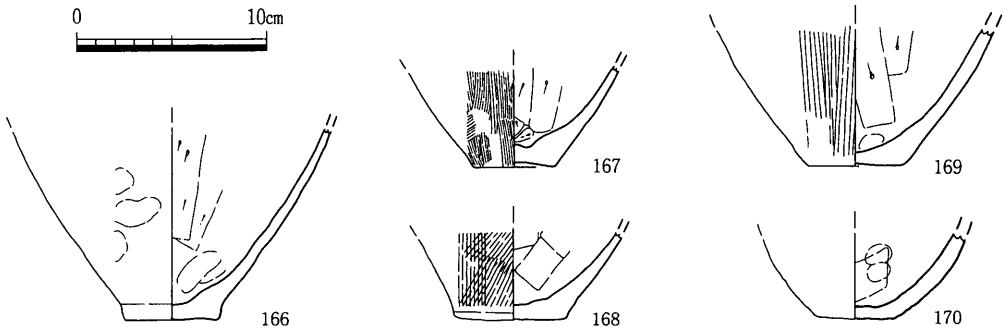
である。ほぼ完形であり，133同様実用品とは考えがたい。

153～213は土層毎には取り上げえなかったものである。153～170は甕で「く」字形口縁で端部に平坦面をもつもの（153～155），口縁が水平に近く開くもの（156・157），「く」



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
153	弥・甕	16.8			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
154	弥・甕	14.6			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
155	弥・甕	16.4			粗・普	良好	灰黄褐・黒	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		
156	弥・甕	12.9			微・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
157	弥・甕	13.1			精緻	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		
158	弥・甕	12.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
159	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
160	弥・甕	15.6			粗・普	良好	黒褐，鈍黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
161	弥・甕	16.6			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
162	弥・甕	15.3			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
163	弥・甕	16.2			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
164	弥・甕	14.8			中・普	良好	灰黄	ハケ目→ナデ	ナデ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ		
165	弥・甕	15.0			中・普	良好	浅黄	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		

第116図　C区ＳＥ01出土遺物（10）（1／4）

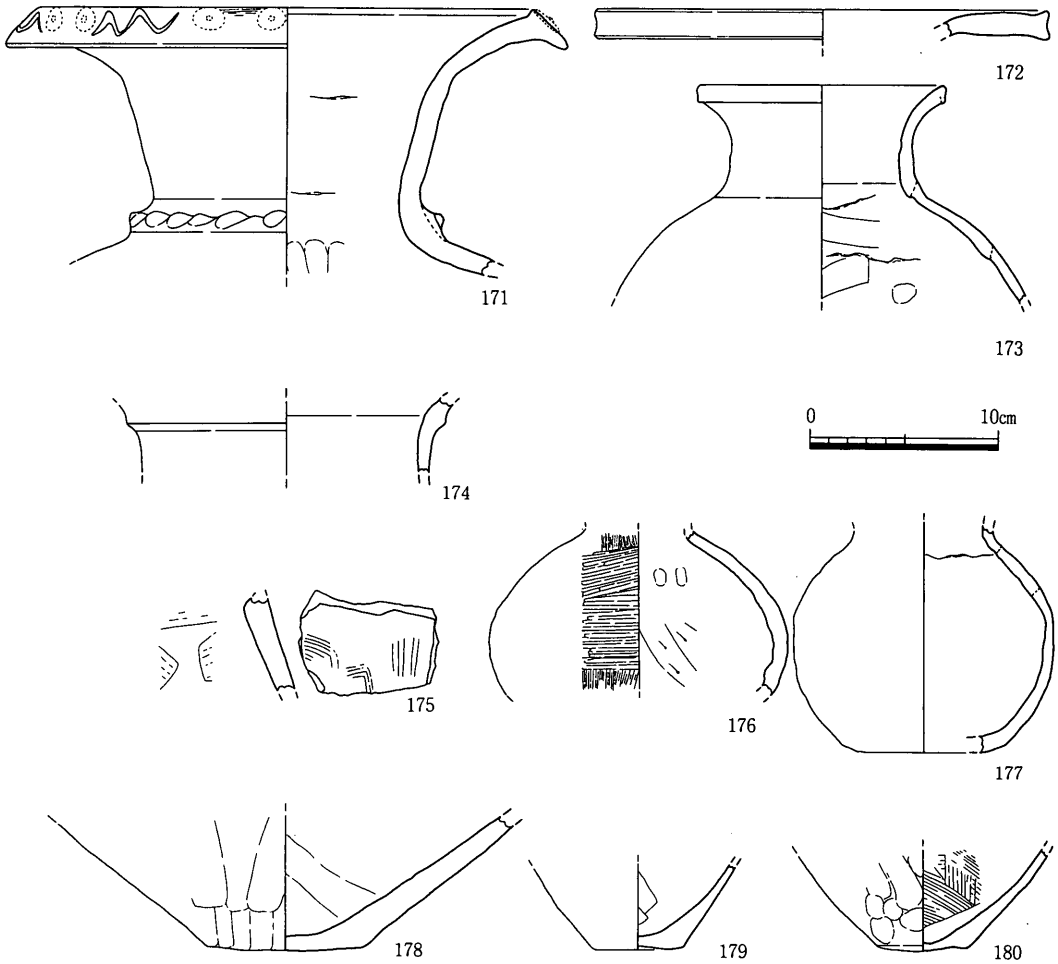


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
166	弥・甕			5.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
167	弥・甕			4.2	粗・普	良好	灰黄	ハケ目・ナデ	ケズリ		
168	弥・甕			6.0	粗・普	良好	灰黄褐～黒褐	ハケ目・板ナデ	板ナデ		
169	弥・甕			5.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ケズリ		
170	弥・甕			4.1	粗・普	良好	灰白～ｵﾘｰﾌﾞ黒	板ナデ	板ナデ		

第117図　C区ＳＥ01出土遺物（11）（1／4）

字形口縁で端部が少し上下に広がるもの（158～165）に大きく分けられる。２つめの種類は他の２種に比べて胴内面のヘラケズリが上半に及ばず胎土に粗砂を含まないといった傾向がある。171～180は壷である。171は口縁部に円形貼り付け文と櫛描き文を交互にめぐらしている。174は上下を強くナデて突帯を作り出している。175は外面に櫛描き文を描いている。壷の肩と思われる。傾きは不確定。176は胴外面上半を横方向に磨いている。181～191は高杯である。181～183・185は中位で外に屈曲する口縁で，185は強く水平に開いている。また，183は口縁端部が尖る。181は全面ヘラミガキ，185は外面下半にヘラケズリを施している。184はＶ期初頭にみられる形態である。186は裾部が急に開く。187・188は杯内外面に丁寧な横方向分割ヘラミガキを施す。190もヘラミガキの可能性がある。195は器種不明である。方形の皿のような形態が想定される。197～204は鉢である。200は内面をハケ目で，外面をヘラケズリでそれぞれきれいに仕上げている。202は小さな脚状のものを底に付けている。205～212は製塩土器である。ほとんどのものが外面ヘラケズリ，内面指ナデであるが，209のみ外面に小さな筋状の凹みが残る。叩きか板の木口痕か判断がつかない。213は打製石斧である。柄部と，身部の半分を失っている。自然の石にあまり手を加えずに利用している。片面には使用による摩擦痕が刃部とほぼ直角の向きに残る。

ＳＥ01出土の土器は器台や180のような若干古い形態のものも含むが，全体に甕は平底で叩き目を残さなく壷に細頸形が含まれないことから，１層から７層まで時期差のほとんどないＶ期前半でも中ごろのものと考えられる。したがってＳＥ01は比較的短期間で埋まってしまったことが想定される。

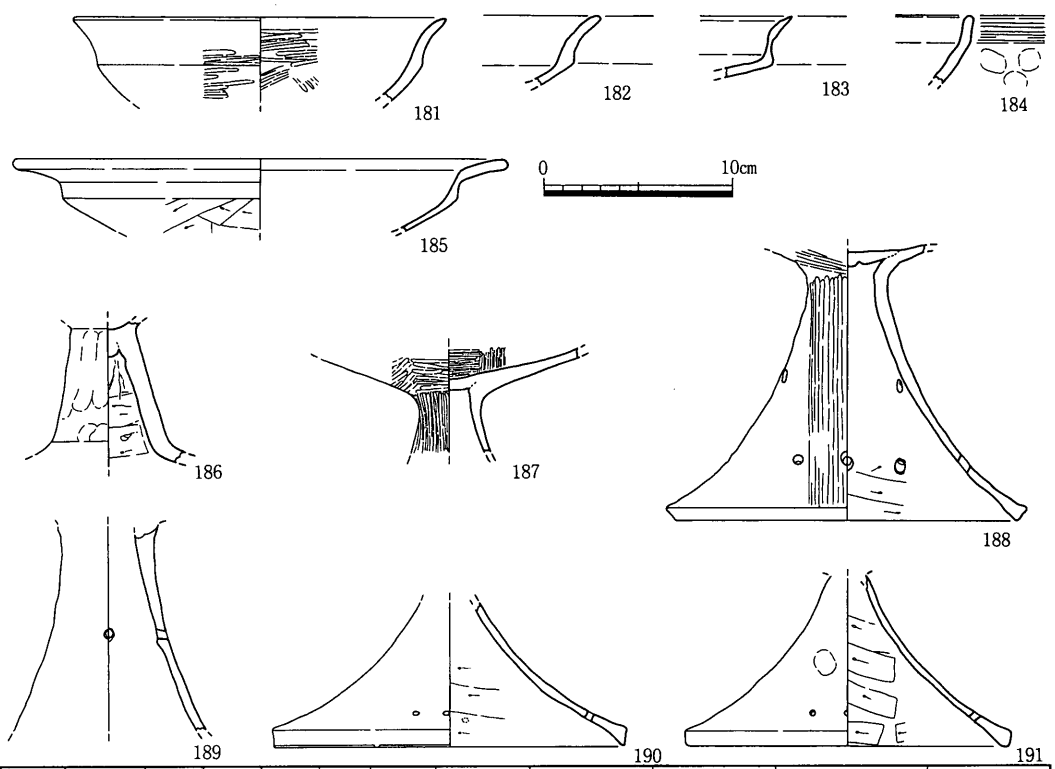


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
171	弥・壺	29.6			粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	ヘラ描き文，貼り付文	
172	弥・壺	23.9			粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
173	弥・壺	13.0			粗・普	良好	淡黄・橙，橙	ナデ	板ナデ		
174	弥・壺				中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	作りだしの突帯	
175	弥・壺				粗・普	良好	灰白	ハケ目	板ナデ	波状の櫛描文様がある	
176	弥・壺				中・普	良好	にぶい黄	ハケ目→ミガキ	ケズリ		
177	弥・壺			6.9	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		
178	弥・壺			8.0	中・普	良好	灰黄	板ナデ	板ナデ		
179	弥・壺			4.2	粗・普	良好	灰褐	ナデ	ナデ		
180	弥・壺			5.0	粗・普	良好	黒・浅黄	ナデ	ハケ目・板ナデ		

第118図　C区ＳＥ01出土遺物（12）（1／4）

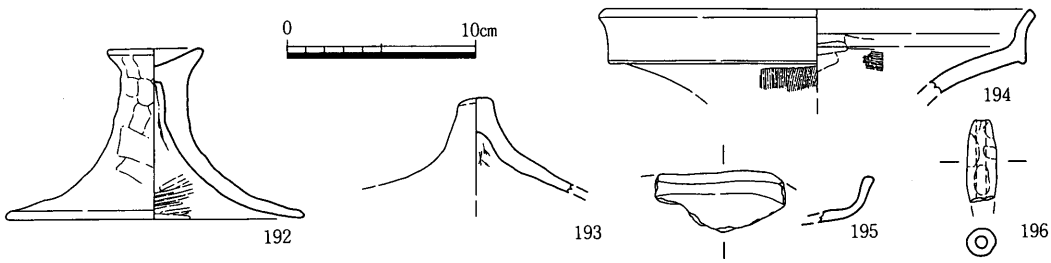
ＳＰ01～04（第124図）

214はＳＰ01，215はＳＰ02，216はＳＰ03，217はＳＰ04からの出土である。いずれもＶ期前半ごろのものと考えられる。



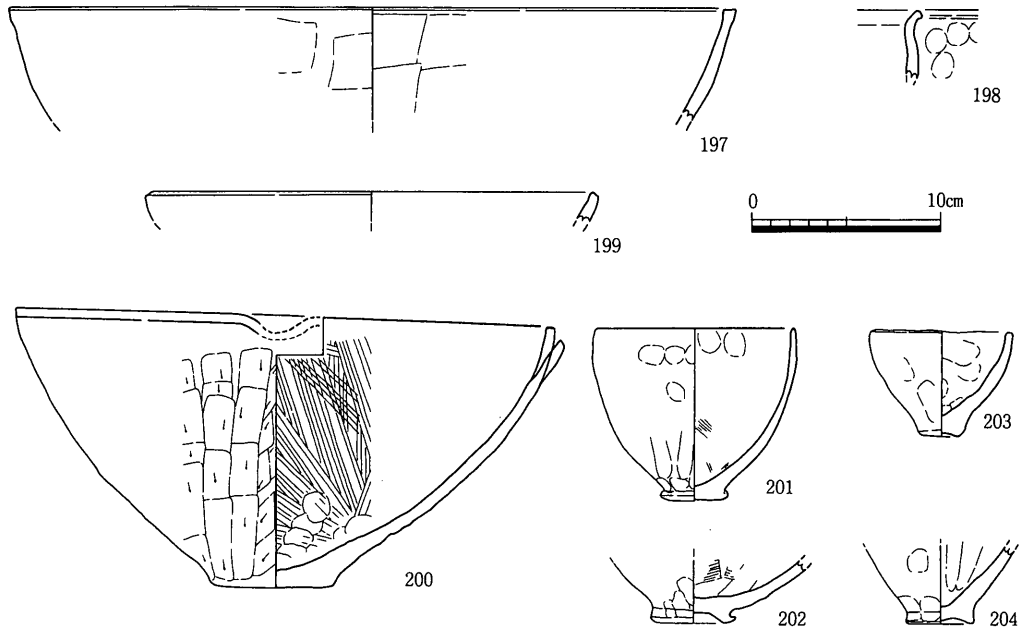
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
181	弥・高杯	19.5			中・普	良好	灰黄	ナデ・ミガキ	ミガキ		
182	弥・高杯				中・普	良好	鈍黄橙・灰白	ナデ	ナデ		
183	弥・高杯				微・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
184	弥・高杯				中・普	良好	黄灰・灰黄	ハケ目・ナデ	板ナデ		
185	弥・高杯	26.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ		
186	弥・高杯				粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ→ケズリ		
187	弥・高杯				微・普	良好	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ・板ナデ		金雲母を含む
188	弥・高杯			19.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		
189	弥・高杯				中・普	良好	暗灰黄	板ナデ	ナデ	外から内へ４つ穿孔	
190	弥・高杯			18.6	中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ミガキ	ケズリ		
191	弥・高杯			17.2	中・普	良好	橙	ナデ	ケズリ		

第119図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（13）（1／4）



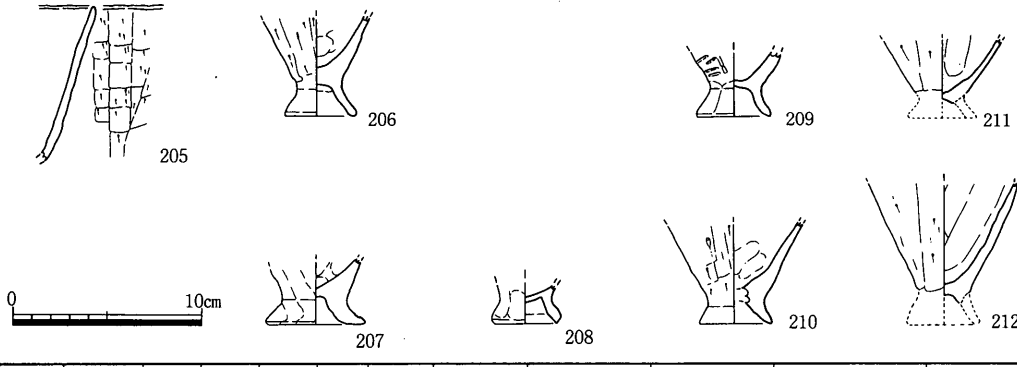
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
192	弥・壺	5.1	8.9	15.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ？		
193	弥・壺				中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		
194	弥・器台	23.0			中・普	良好	灰白	ハケ目・ナデ	ハケ目・板ナデ		
195	弥・不明				中・普	良好	浅黄～黄灰	板ナデ	板ナデ		
196	弥・土錘	短軸4.4			精緻	良好	鈍赤褐・黒褐	ナデ	ナデ		重量9.2g

第120図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（14）（1／4）



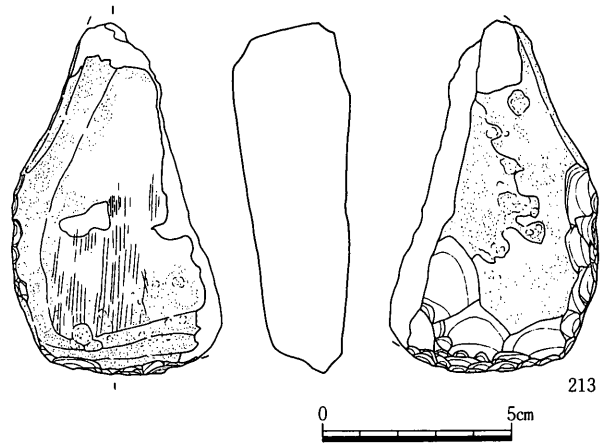
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
197	弥・鉢	38.4			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
198	弥・鉢				細・普	良好	鈍黄橙，浅黄	ナデ	ナデ		
199	弥・鉢	24.0			微・普	良好	浅黄	ナデ	板ナデ		
200	弥・鉢	28.4	13.9	6.6	粗・普	不良	灰白～黒褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		
201	弥・鉢	10.6	9.9	3.6	粗・普	良好	灰黄	ナデ	ハケ目・ナデ		
202	弥・鉢			4.5	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ→ハケ目		
203	弥・鉢	7.5	5.5	2.2	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
204	弥・鉢			3.6	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		

第121図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（15）（1／4）



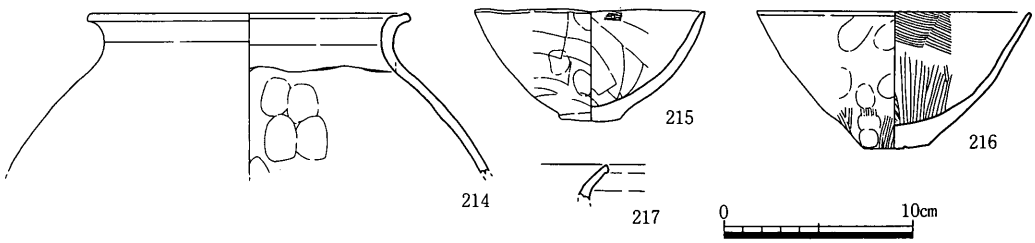
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
205	弥・製塩				中・普	良好	橙～黒褐	ケズリ	ナデ		
206	弥・製塩			3.9	中・普	良好	明赤褐	ケズリ・ナデ	ナデ		胎土は褐灰
207	弥・製塩			7.2	中・普	良好	褐，暗灰黄	ケズリ・ナデ	ナデ		黒雲母，角閃石
208	弥・製塩			3.7	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
209	弥・製塩			4.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
210	弥・製塩			3.8	粗・普	良好	暗褐	ケズリ・ナデ	ナデ		
211	弥・製塩				粗・普	良好	にぶい黄	ケズリ	板ナデ		
212	弥・製塩				中・普	良好	にぶい橙	ケズリ	ナデ		

第122図　Ｃ区ＳＥ01出土遺物（16）（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
213	打製石斧	8.9	5.3	3.2	147	砂岩		

第123図　C区ＳＥ01出土遺物（17）（1／2）



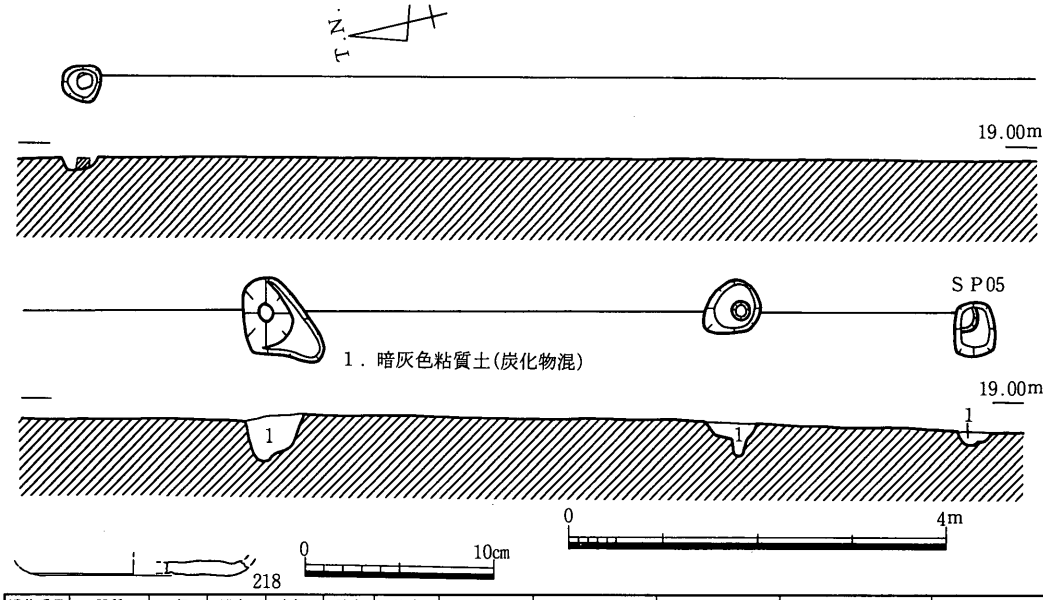
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
214	弥・甕	17.0			粗・普	良好	赤，鈍い黄橙	不明	不明		
215	弥・鉢	12.1	5.8	3.2	中・普	良好	灰黄	ナデ	ハケ目・板ナデ		
216	弥・鉢	14.3	7.2	3.3	中・普	良好	鈍黄～明黄褐	ナデ・ハケ目	ハケ目		
217	弥・甕				中・普	良好	淡黄，鈍黄橙	ナデ	ナデ		

第124図　C区ＳＰ出土遺物（1）（1／4）

(3)古代の遺構・遺物

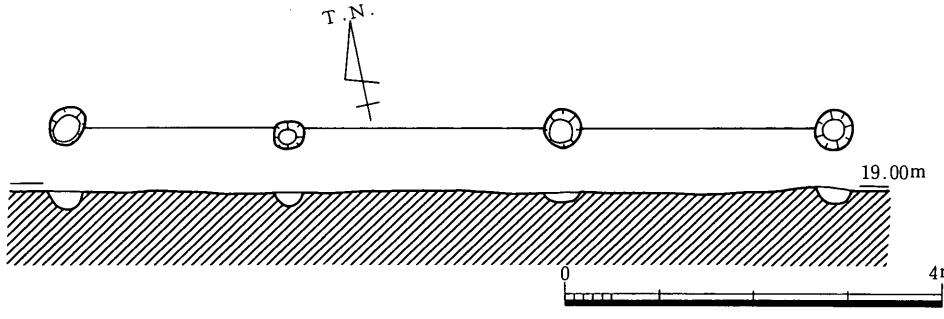
ＳＡ02（第125図）

Ｃ２区からＣ４区にかけて検出した全長約20mの柵列である。４本のピットをつなげたのみであるが，いずれも埋土が暗灰色粘質土であることと柱を差し込む部分をさらに掘り下げていること，方位がＮ－13°－Ｅで後に述べる掘立柱建物群と近い値を示すことから柵列と判断した。柱穴は径40～60cmの円形で，深さは15～35cmある。一番北の柱穴からは太さ15cmの柱根が出土し，２番目の柱穴の埋土には炭化物がおおく含まれていた。ＳＰ05から須恵器皿の底の破片(218)が１点出土している。細かな時期は決めがたいが，奈良か



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
218	須・皿			11.0	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	

第125図　C区ＳＡ02平・断面図（1／80），出土遺物（1／4）



第126図　C区ＳＡ03平・断面図（1／80）

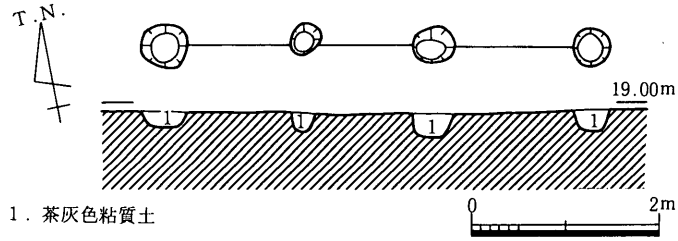
ら平安時代にかけてのものであろう。よってＳＡ02もその時期のものと考えたい。

ＳＡ03（第126図）

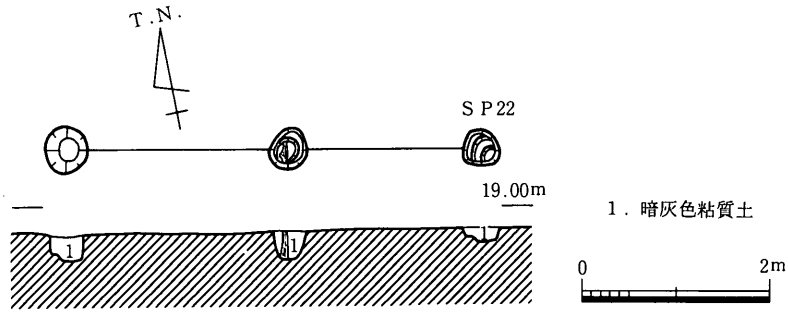
Ｃ５区南部で検出した。４個のピットからなる。柱間の距離は中央と東で2.9m，西のみやや狭く2.4mで，方位はＮ－78°－Ｗをとる。柱穴は径15cmでやや小さめである。東端の穴には径10cmの，その隣の穴には径14cmの柱が埋められていた痕跡が丸い平面形となって残っていた。埋土中からの遺物の出土はなかったが土色・方位から古代の柵列と考える。

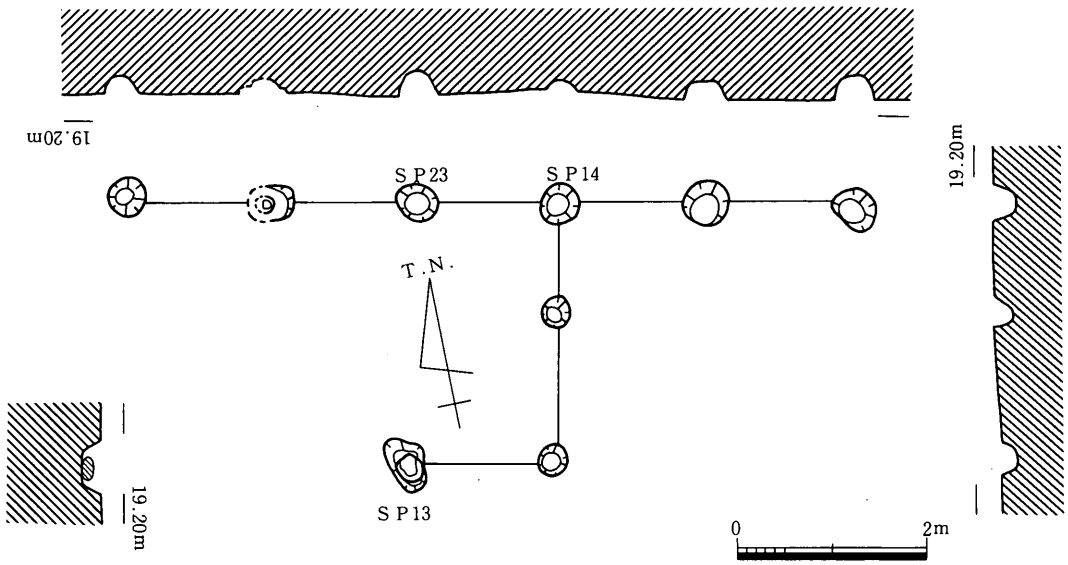
ＳＡ04（第127図）

Ｃ５区南部で検出した。４個のピットからなる。柱間の距離は1.5ｍで，方位はＮ－79°－Ｗをとる。柱穴は径30～50㎝の円形で，深さは5～25㎝である。柱穴の１つから土師器の細片が出土している。細かな時期決定はできないが，土色・方位からも古代の柵列と考える。



第127図　Ｃ区ＳＡ04平・断面図（1／80）





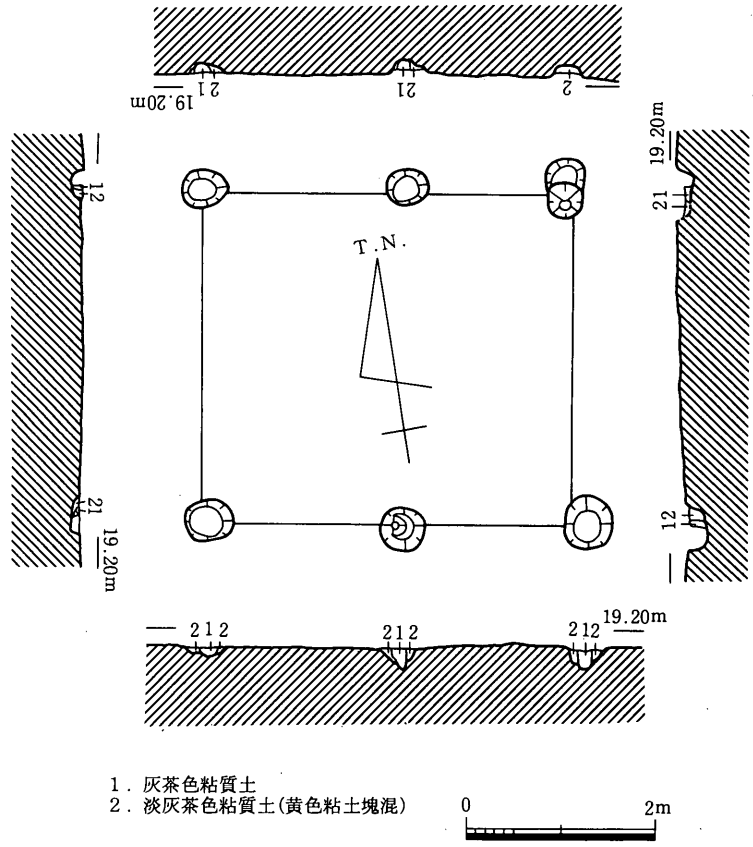
第128図　Ｃ区ＳＡ05（上）・ＳＡ06（下）平・断面図（1／80）

ＳＡ05（第128・193図）

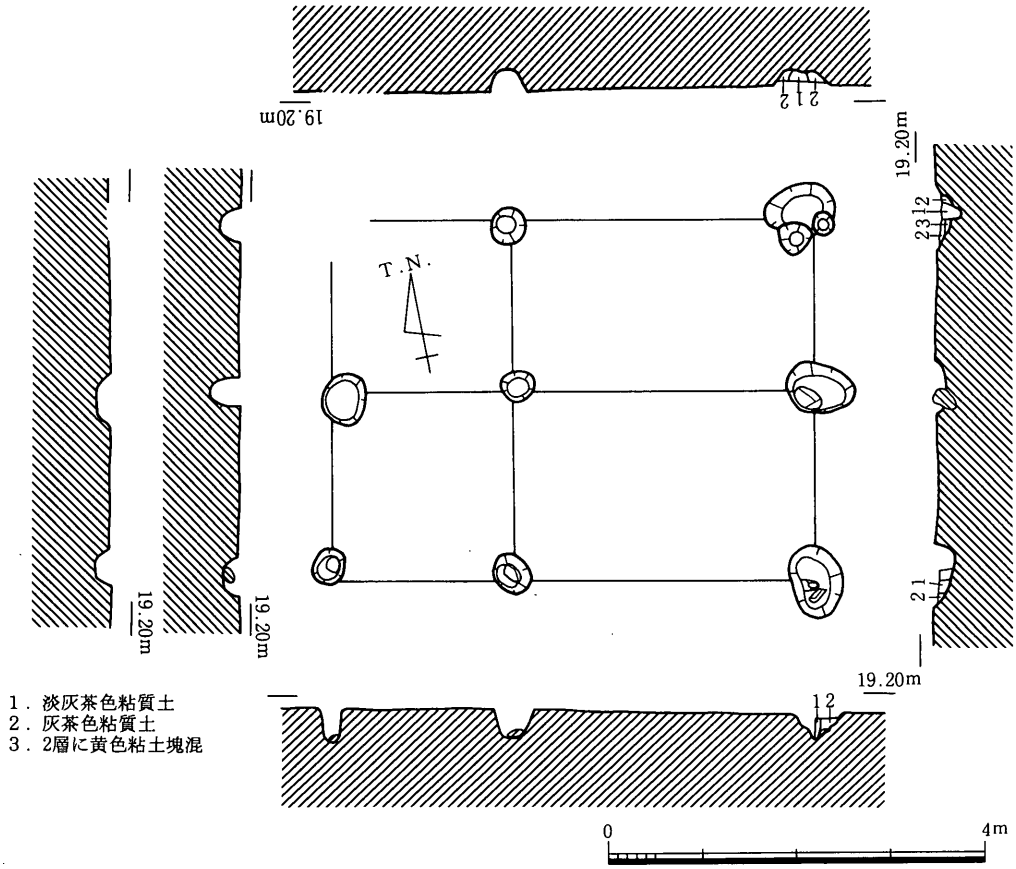
Ｃ４区で検出した。３個のピットからなる。柱間の距離は2.2ｍで，方位はＮ－79°－Ｗをとる。柱穴は径40㎝の円形で，深さは20～30㎝ある。中央の柱穴には太さ15㎝の柱が残っていた。674はＳＰ22より出土した。674の存在からＳＡ05は古代の建物と考えておきたい。

ＳＡ06（第128・137・192図）

Ｃ５区南部で検出した。東西に６個のピットが連なり，さらに東より３個目のピットから南に逆Ｌ字状に等間隔でピットが並んでいる。東西の並びと後述するＳＢ08の方位・ピットの間隔が等しいことから両者は同時期のものと考えるが，ＳＡ06の南北のならびの延長線上にＳＢ08のピットのひとつが存在し，かつそこに至るまでのピットの間隔が等しいことから，ＳＡ06がこのような形になるものと想定した。ＳＡ06の柱間の距離は東西が1.55ｍで，方位はＮ－79°－Ｗをとる。柱穴は径40～80㎝の円形で，深さは20～30㎝ある。埋土は柱穴部分が灰茶色粘質土でそのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。柱穴の１つには石が据えられていた。いくつかの柱穴内からは須恵器や土師器の細片が出土している。そのうち３点が図化できた。227はＳＰ13，228はＳＰ14，675はＳＰ23からの出土である。228は用途不明の土製品である。破片のため全体像はつかめないが，細い２重の切り込みが突出部をめぐる。出土遺物から10～12世紀に属すると考える。



第129図　Ｃ区ＳＢ01平・断面図（1／80）



第130図　C区ＳＢ02平・断面図（1／80）

ＳＢ01（第129図）

Ｃ５区南部で検出した梁行１間×桁行２間の建物である。柱間の距離はそれぞれ3.4m，1.7～2.1mで，Ｎ－80°－Ｗの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径40～60cmの円形をしている。深さは10～20cmと浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は柱穴部分が灰茶色粘質土でそのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。図示しなかったが柱穴の中から弥生土器や土師器の細片が出土した。方位や柱穴の埋土からも古代の建物と考える。

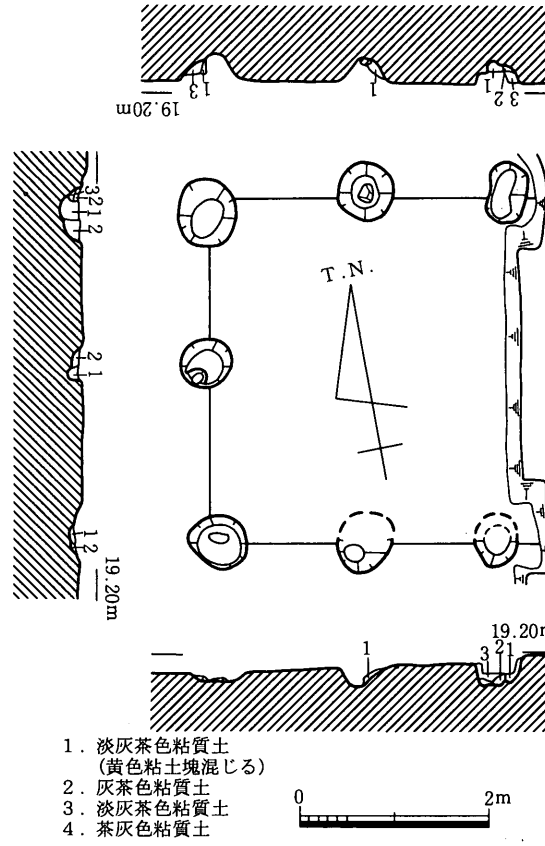
ＳＢ02（第130図）

Ｃ５区南部で検出した梁行２間×桁行２間の建物である。柱間の距離は梁行が1.9m，桁行が西側で1.9m・東側で3.2mとなっている。中央の柱列が西に少し寄っているが，とりあえず総柱の建物ととらえておきたい。建物の主軸はＮ－79°－Ｗを向いている。柱穴は径40～70cmの円形をしている。深さは10～20cmと浅いため，上面が削平された可能性が

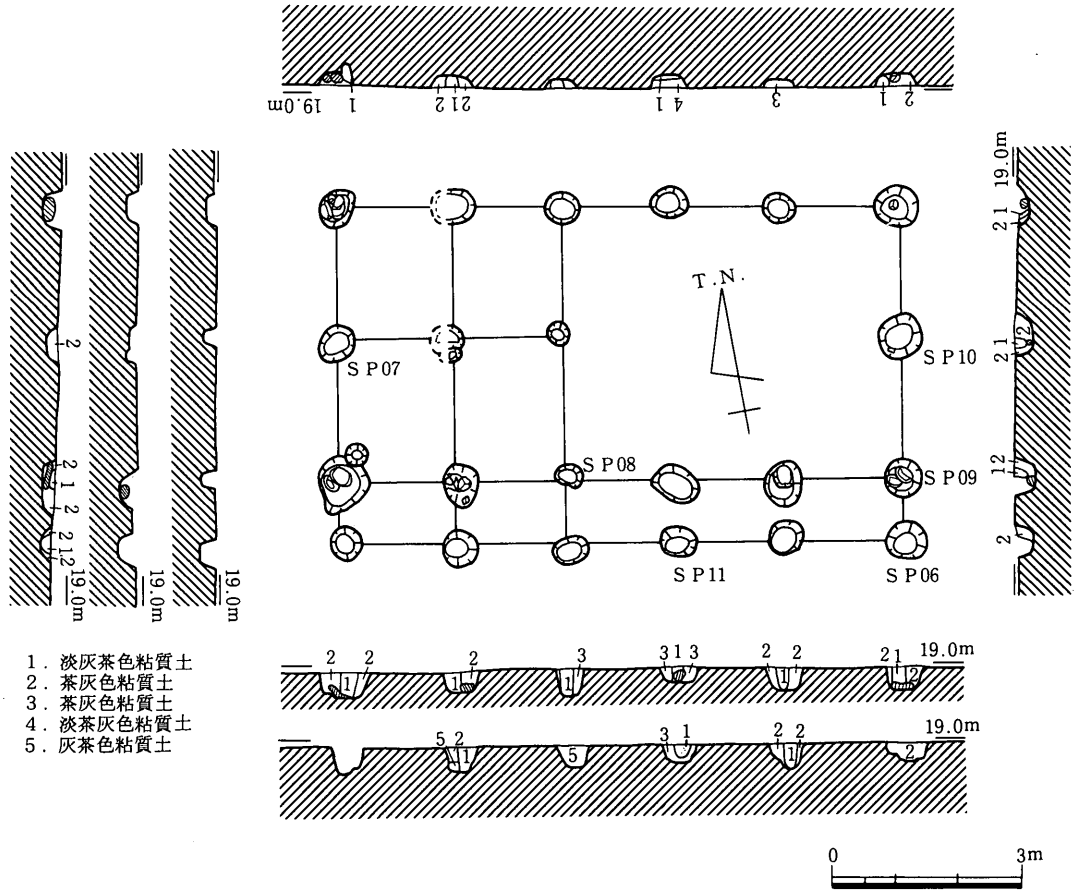
ある。埋土は柱穴部分が灰茶色粘質土でそのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。柱穴のうち南の３個と東中央の１個では柱と穴の隙間を埋める根固めの石が据えられていた。ＳＢ02は向きも同じＳＤ10に南側の柱穴列がきれいに切られている。また図示しなかったが，各柱穴の中から土師器や須恵器の細片が出土している。そのうちの１つはかえりのつかない須恵器の杯蓋であった。後述するようにＳＤ10の時期は12世紀ごろと考えられる。したがって，ＳＢ02の時期は８世紀から12世紀の間におくことができる。

ＳＢ03（第131図）

Ｃ５区南部で検出した梁行２間×桁行２間以上の建物である。柱間の距離は梁行が1.9m，桁行が1.5mとなっている。すぐ西には東西方向に棟を合わせるようにＳＢ02が柱穴を並べている。またＳＢ03もＳＤ10に南の柱穴列を切られている。細片のため図示しえなかったがＳＢ03の柱穴からも土師器や須恵器が出土しており，時期を同じくしてＳＢ02とＳＢ03が建ち並んでいた可能性は高い。むしろＳＢ02とＳＢ03が同一の建物である可能性も考慮しておく必要がある。さてＳＢ03の柱穴は径40～60cmの円形をしている。深さは10～25cmと浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は柱穴部分が灰茶色粘質土でそのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。柱穴のうち２個には根石状に石が据えられていた。



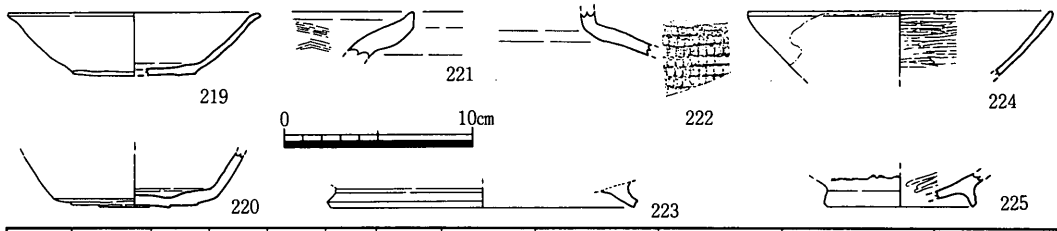
第131図　Ｃ区ＳＢ03平・断面図（1／80）



第132図　C区ＳＢ04平・断面図（1／120）

ＳＢ04（第132・133図）

Ｃ５区南部で検出した梁行２間×桁行５間の建物で，南に廂がつく。柱間の距離は梁行が2.1m，桁行が1.8m前後である。建物の主軸はＮ－79°－Ｗを向いている。西側は建物内に２本の柱が立てられ，半総柱状になっている。ＳＢ04の柱穴は径30～80cmの円形をしている。深さは15～30cmと浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は柱穴部が暗灰茶色粘質土でそのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。数個所の柱穴には柱根の部分が残存していたほか，２段掘りのもの・根石をつめたものなどもみられた。更にほとんどの柱穴内から須恵器や土師器の細片が出土している。そのうち図化できるもの数点を掲載した。219・220はＳＰ06，221は07，222は08，223は09，224は10，225は11からそれぞれ出土している。222は外面の色からは備前焼ともとれる。224は外面に赤色顔料を薄く塗っている。219や224の杯体部が内湾せずに直線的に口を開いているこ



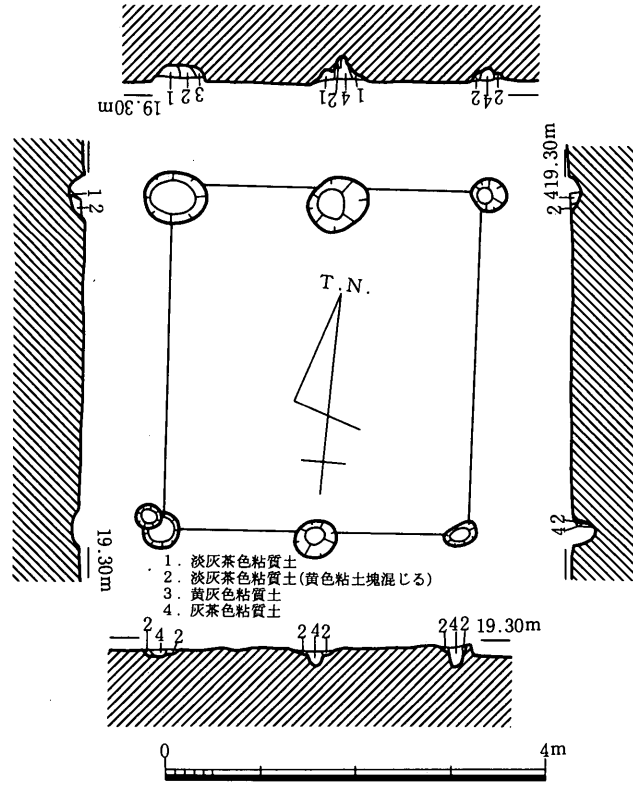
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
219	土・杯	13.3	3.2	6.5	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
220	土・杯			8.4	微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	金雲母を含む
221	土・土鍋				微・普	良好	暗褐	ナデ	ハケ目→ナデ		
222	須・甕				細・普	良好	暗灰～灰赤	ナデ・叩き	ナデ		備前焼？
223	土・高台皿			16.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	胎土は橙
224	黒A・椀	16.0			微・普	良好	橙～黒，黒	ナデ	ミガキ	外面に赤色顔料	
225	黒A・椀			8.0	中・普	良好	鈍い黄橙，黒	ミガキ	ナデ		

第133図　C区ＳＢ04出土遺物（1／4）

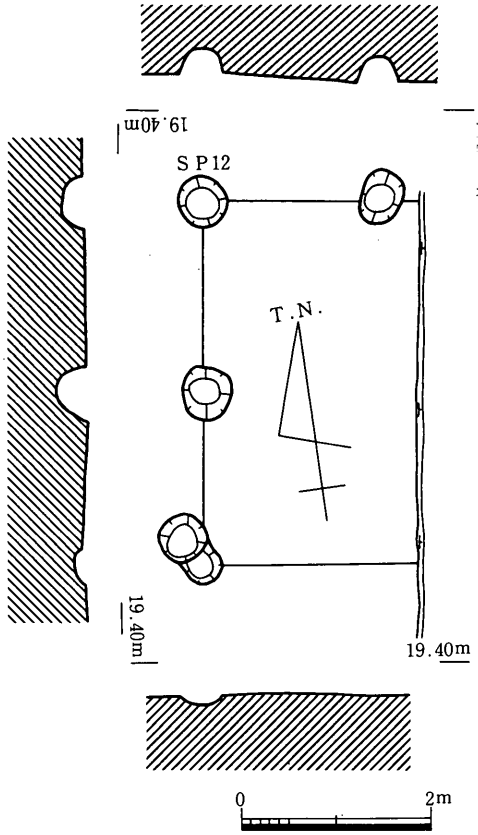
と，225の底径が大きめであることなどからＳＢ04は10世紀後半から11世紀前半の建物と考えられる。

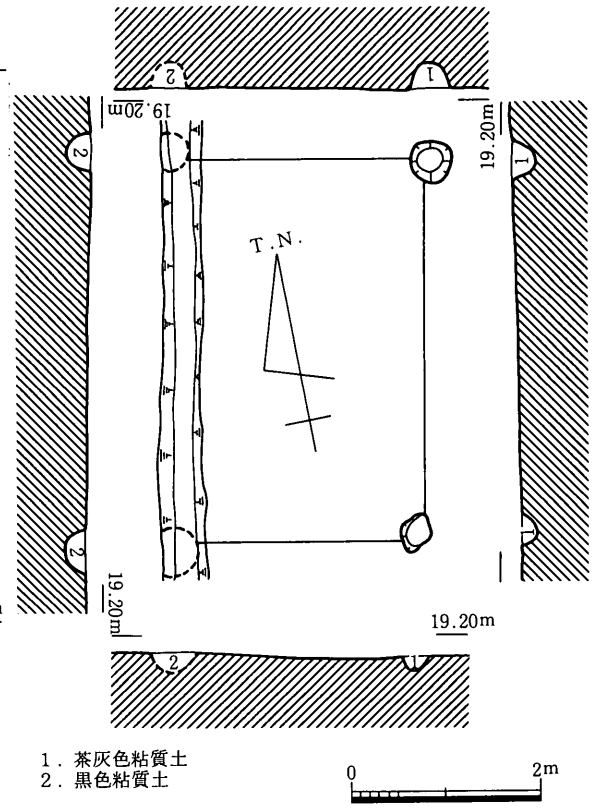
ＳＢ05（第134図）

Ｃ５区中央部で検出した梁行２間×桁行１間の建物である。柱間の距離は梁行が1.6ｍ，桁行が3.6ｍとなっている。建物の主軸をＮ－5°－Ｗに向けて建てられている。一辺の長さの短いほうを梁行としたが，こちらの方が間数が多く桁行とすべきかもしれない。柱穴は径40～70㎝の円形をしている。深さは10～20㎝と浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は柱穴部分が灰茶色粘質土で，そのまわりに遺構面を形成する黄色粘土混じりの土を埋めていた。柱穴の中からは弥生土器の細片しか出土しなかったが，土色・方位から古代の建物ど考られる。



第134図　C区ＳＢ05平・断面図（1／80）





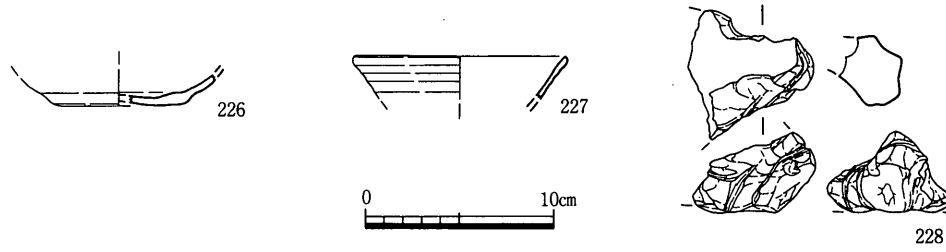
第135図　C区ＳＢ06平・断面図（1／80）　　第136図　C区ＳＢ07平・断面図（１／80）

ＳＢ06（第135・137図）

Ｃ５区南部で検出した２間×１間以上の建物である。東側は調査できなかったが，Ｃ１区まではひろがらない。柱間の距離はともに2.4ｍで，Ｎ－82°－Ｗの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径50㎝の円形をしている。深さは10～30㎝と浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は灰茶色粘質土であった。226はＳＰ12から出土した土師器である。細かな時期決定はできないが，奈良時代以降のものと推測される。柱穴の埋土や方位からも古代の建物と考えられる。

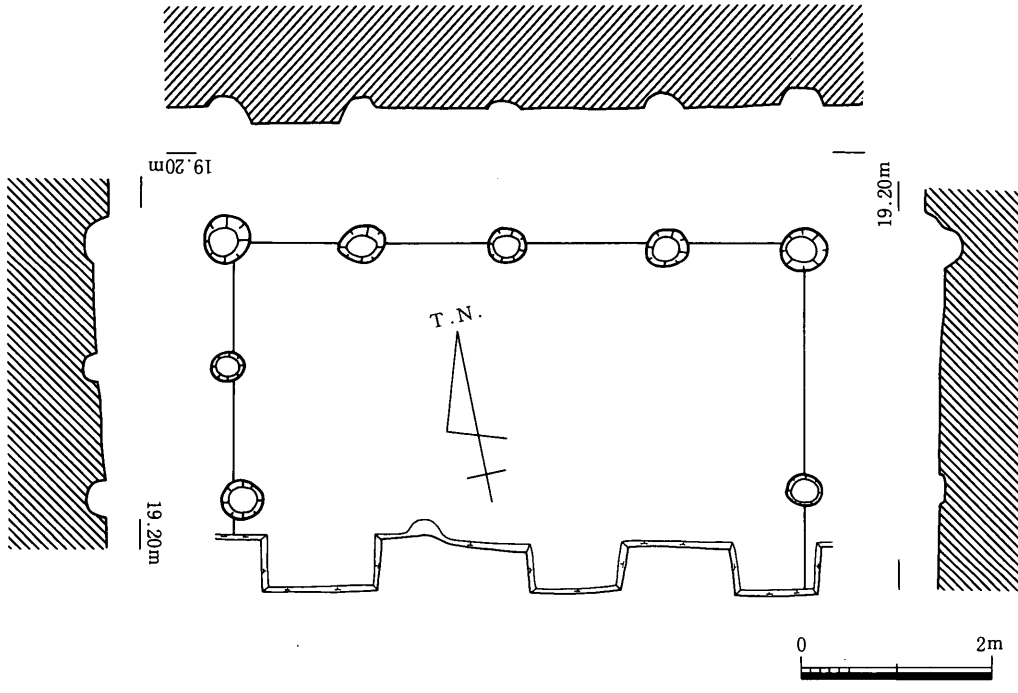
ＳＢ07（第136図）

Ｃ５区南部で検出した１間×１間以上の建物である。柱間の距離は3.9ｍ，2.6ｍで，Ｎ－79°－Ｗの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径40㎝の円形をしている。埋土は灰茶色粘質土であった。柱穴内から遺物は出土しなかったが，柱穴の埋土や方位から古代の建物と考える。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
226	土・杯			7.0	精緻	良好	灰白～橙	ナデ	ナデ		
227	土・杯	11.4			微・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
228	土・不明				細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		

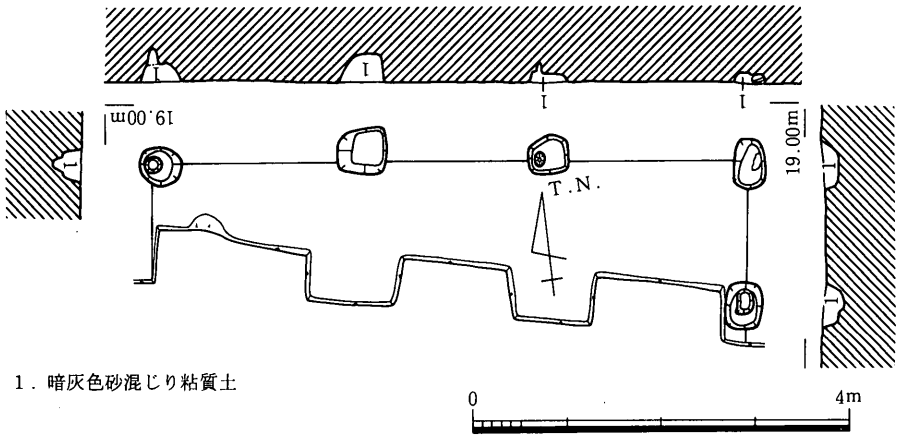
第137図　C区ＳＡ06，ＳＢ06出土遺物（1／4）



第138図　C区ＳＢ08平・断面図（1／80）

ＳＢ08（第138図）

Ｃ５区南部からＣ４区東部にかけて検出した梁行２間以上×桁行４間の建物である。柱間の距離は梁行が1.35m，桁行が1.55mとなっている。建物の主軸はＮ－79°－Ｗを向いている。梁行は東側で柱穴を１本欠く。ＳＢ08の柱穴は径約50cmの円形をしている。深さは40cm以下である。柱穴内からの遺物の出土はなかったが，前述のＳＡ06との関係からそれと同時期のものと考える。



第139図　C区ＳＢ09平・断面図（1／80）

ＳＢ09（第139図）

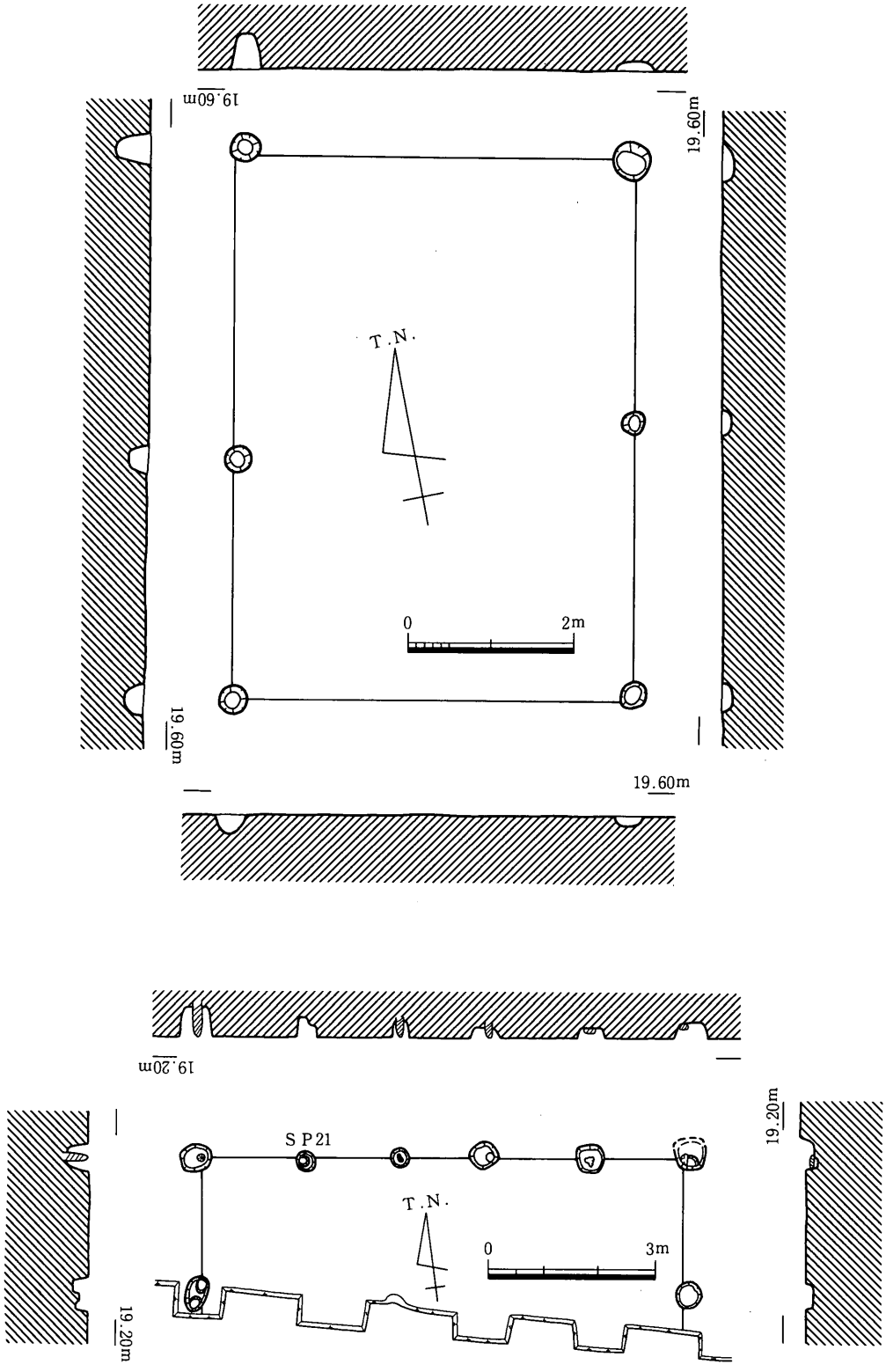
Ｃ４区東部で検出した１間以上×３間の建物である。柱間の距離は梁行が1.9m，桁行が西から2.2m，1.9m，2.2mでＮ－83°－Ｗの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は一辺50cmの方形をしており，底は柱の部分だけさらに掘り下げていた。深さは10～30cmと浅いため，上面が削平された可能性がある。埋土は灰黒色粘質土であった。柱穴内からの遺物の出土はなかったが，柱穴の埋土や方位からも古代の建物と考えられる。

ＳＢ10（第140図）

Ｃ５区北部で検出した梁行１間×桁行２間の建物である。柱間の距離は梁行が5.0m，桁行が2.8m，3.2mで，Ｎ－11°－Ｅの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径30cmの円形をしている。深さは30cm前後である。埋土は淡灰色粘質土であった。図示しえなかったが２つの柱穴から須恵器や土師器の甕の破片が出土している。柱穴の埋土や方位からも古代の建物と考えてよいであろう。

ＳＢ13（第140・192図）

Ｃ４区で検出した梁行１間以上×桁行５間の建物である。柱間の距離は梁行が2.25m，桁行が1.8mで建物の主軸はＮ－83°－Ｗを向いている。ＳＢ13の柱穴は径40～60cmの円形をしている。深さは60cm以上に及ぶものもある。ＳＰ21から671が出土している。皿と考えられ，口縁の内面に沈線がめぐる。671の存在から奈良時代の建物と考えておきたい。



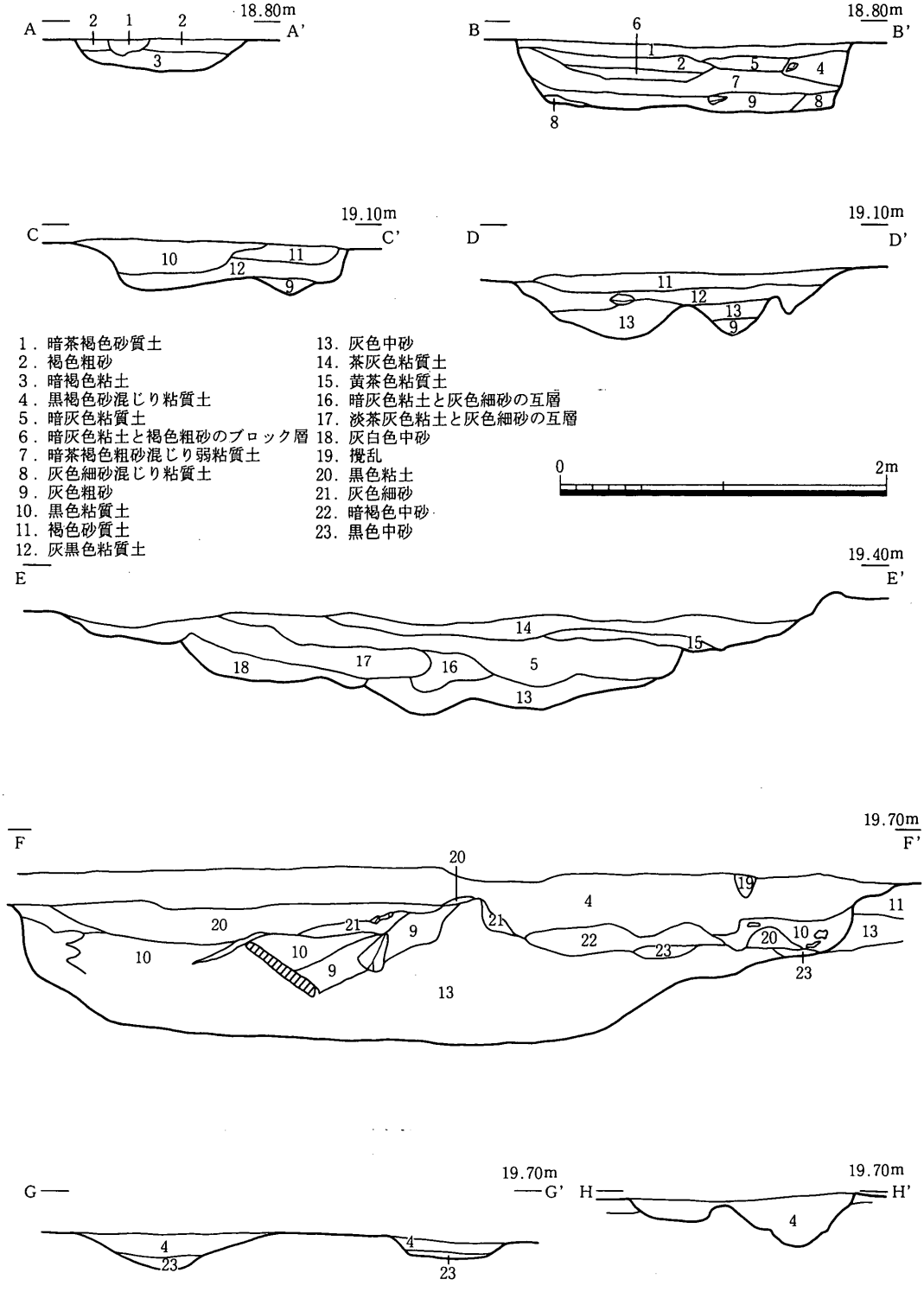
第140図　C区SB10（上）・SB13（下）平・断面図（1／80，1／120）

ＳＤ09（第141～180図，図版34・35）

大きくみればひとつの溝だが，いくつもの流れが錯綜しているため，便宜的にＣ２・Ｃ３区部分の北側の流れを支流(a)・南側の流れを支流(b)，Ｃ５区の北からきて西に折れてゆく溝を支流(c)，Ｃ１区の北東側の流れを支流(d)・南西側の流れを支流(e)とする。溝底の標高差を考慮しながら平面的にみた場合，(c)がＣ５区北の調査区外に始まり，Ｃ５区内で西に折れ，Ｃ２区で(a)と(b)に分かれＣ３区外に消えてゆく。(d)と(e)は合流して更に(c)に注ぎこむというように見える。溝の方位は南北に流れる部分でＮ－9°－Ｅ，東西に流れる部分でＮ－78～82°－Ｗである。(a)～(e)に切り合い関係は認められなかった。このことから５本の支流は同時に埋没したと考えられる。ただしＣ２区とＣ５区の境の部分だけをみる時(a)は本流(b)－(c)に対する支流と見え，断面図Ｅでも(b)がある程度使用されたのち(a)が掘られたとも判断しうる点は，ＳＤ09が機能した全期間を通じて５本の支流が同時に存在していたわけではなかったことを示唆している可能性がある。また，(c)の幅が特に広い点については直角に折れ曲がる地点にあたるうえ，地面自体が砂質土からなり滞水したり水が激しく流れたりした場合溝の縁が壊れやすかったりすることなどが考えられる。

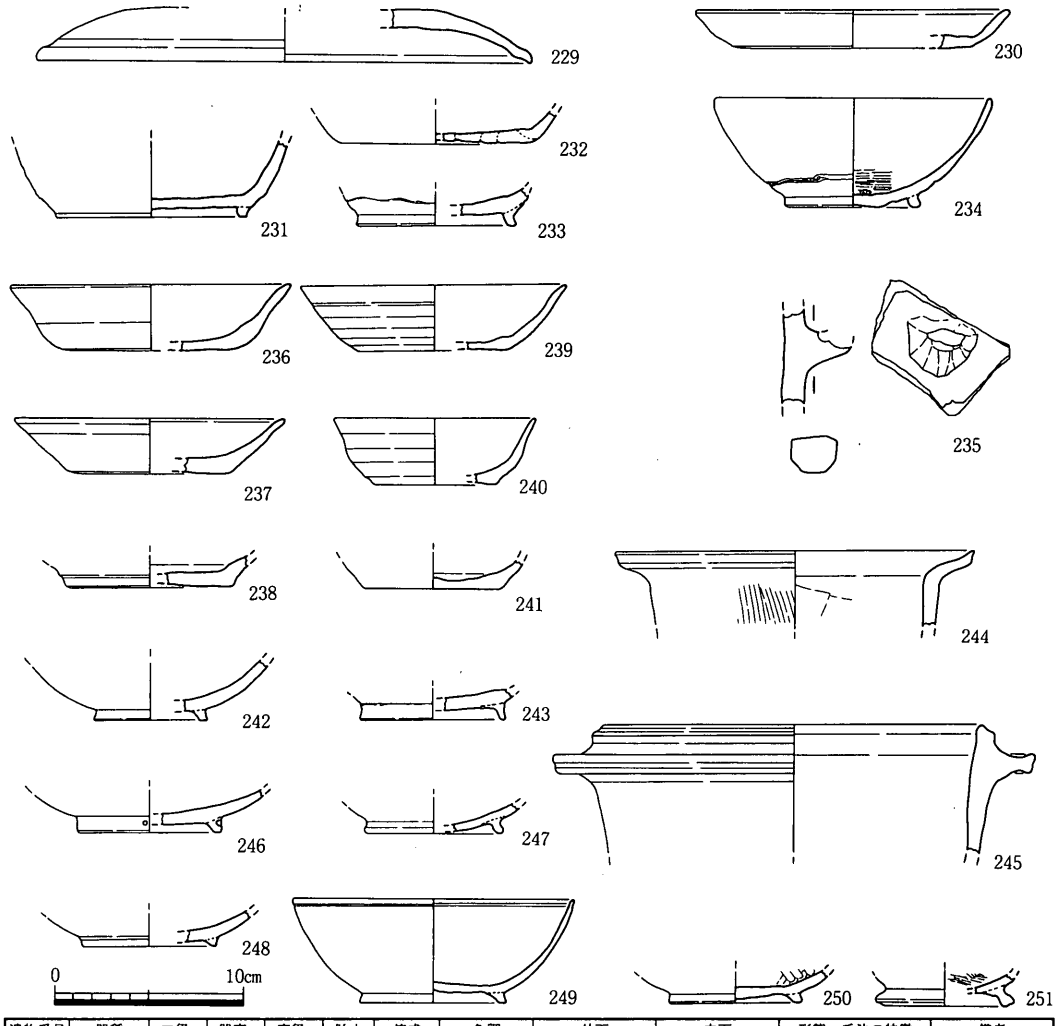
次にＳＤ09出土遺物を支流ごとにみてゆく。

229～261は支流(a)出土である。232は粘土紐をまいて杯底を成形した痕跡が断面に明瞭にあらわれている。233は椀の可能性もある。高台のつなぎ目痕が外面に残る。234は内面下半部に横方向のハケ目が施されているほかはすべてナデている。内面下半部のハケ目はミガキの効果も狙っているようである。底外面にはヘラおこしの痕が残り，杯外面下半部にはヘラで落書きしたような沈線が入る。238は底内外面の立ち上がり部をつよくナデたためそれぞれ稜線が入っている。240も底外面の立ち上がり部をつよくナデている。243は椀であるが内外面に赤色顔料を塗っている。244は長胴になると思われる小型の鍋である。246は高台外面に貫通しない穴が１つ付けられている。249は口縁部に沈線がめぐることから楠葉型と考えられる。250は内面に放射状のヘラミガキがなされている。252・255は横断面が平たく１枚作りの結果をよく表している。255では成形台の端部が強い圧痕となって残っている。253は凸面に正格子の叩き目が残る。256は凸面にハケ目状の工具痕が残る。260は凹面に糸切りによる粘土板切り取りの痕跡と思われるものが残る。261は凹面の布目は合わせ目のためか乱れている 。支流(a)出土遺物はほとんどの須恵器のように９世紀にさかのぼるものや249のように11世紀前半以前になるものも含まれるが，234の須恵器や土師器の年代観から12世紀頃まで使われていたと考えられる。



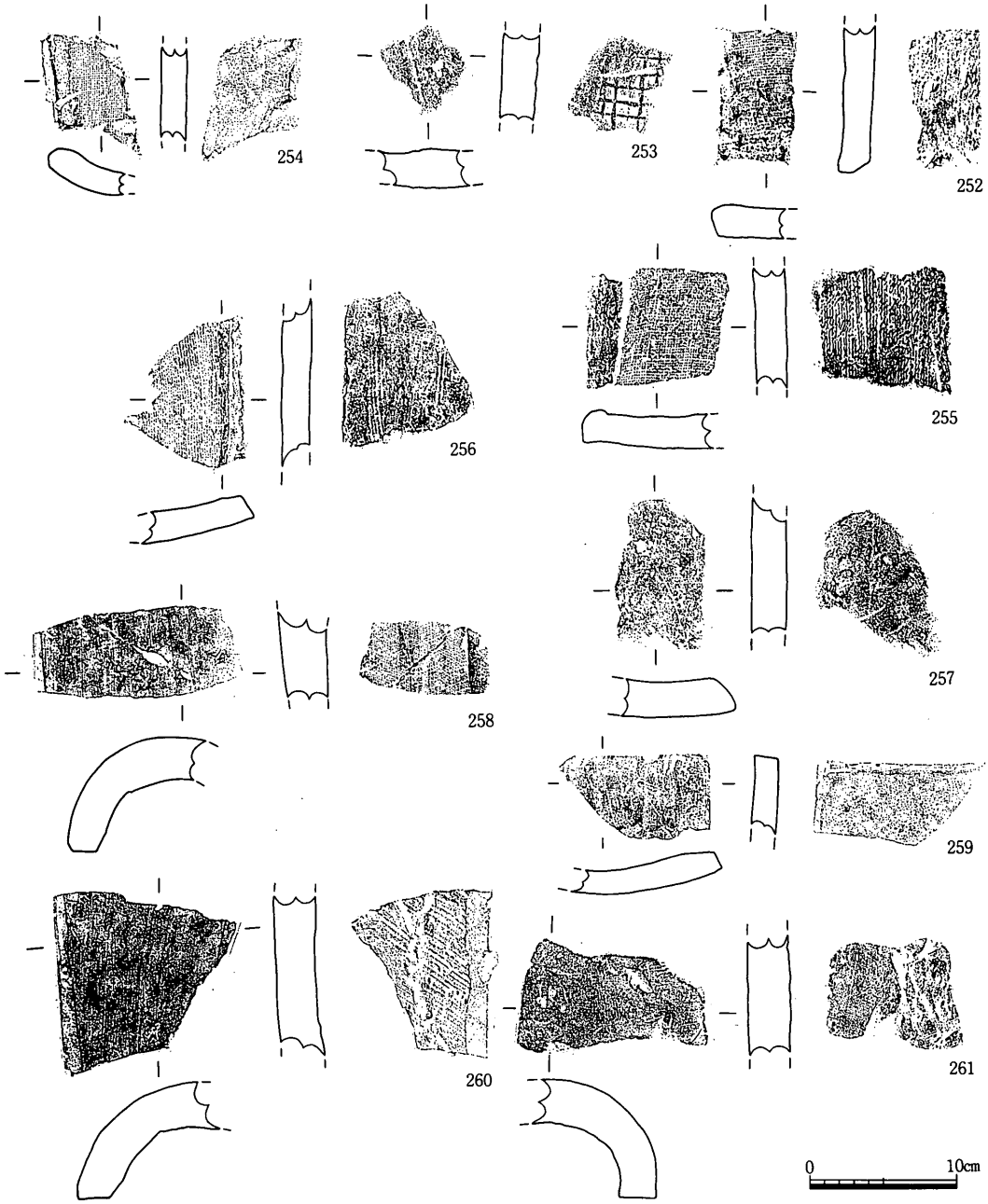
1．暗茶褐色砂質土
2．褐色粗砂
3．暗褐色粘土
4．黒褐色砂混じり粘質土
5．暗灰色粘質土
6．暗灰色粘土と褐色粗砂のブロック層
7．暗茶褐色粗砂混じり弱粘質土
8．灰色細砂混じり粘質土
9．灰色粗砂
10．黒色粘質土
11．褐色砂質土
12．灰黒色粘質土
13．灰色中砂
14．茶灰色粘質土
15．黄茶色粘質土
16．暗灰色粘土と灰色細砂の互層
17．淡茶灰色粘土と灰色細砂の互層
18．灰白色中砂
19．攪乱
20．黒色粘土
21．灰色細砂
22．暗褐色中砂
23．黒色中砂

第141図　C区ＳＤ09断面図（1／40）



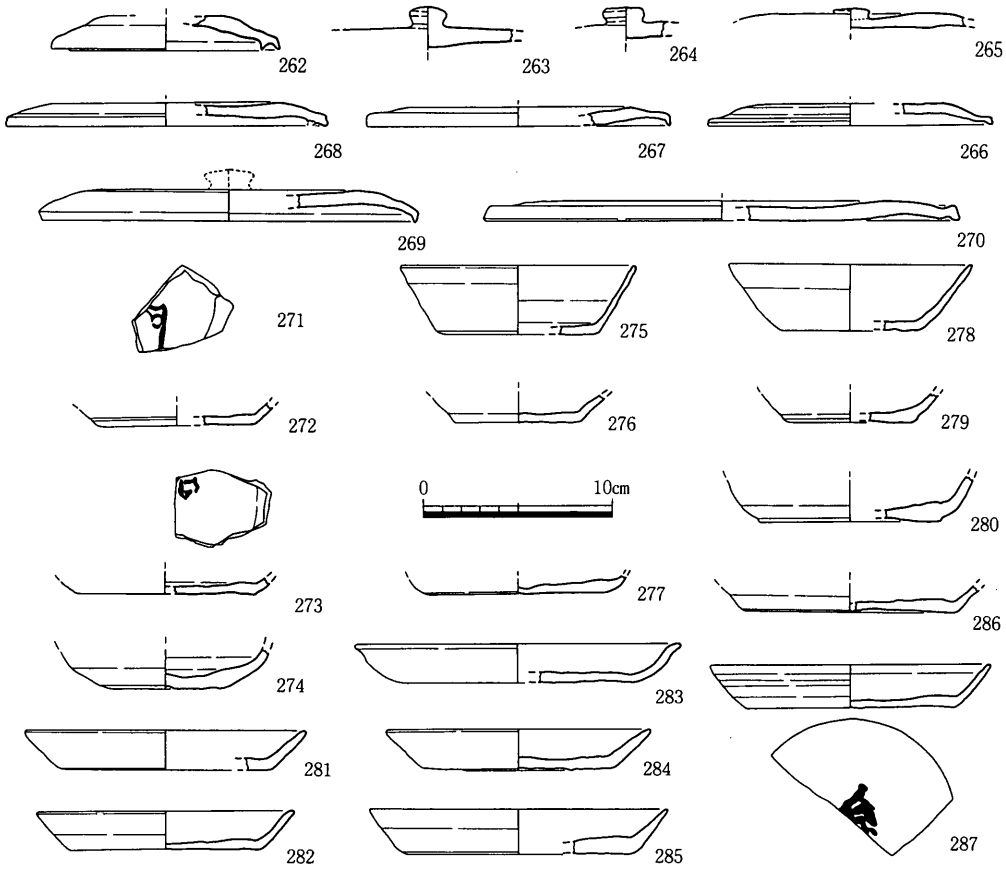
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
229	須・杯蓋	26.1			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土は暗赤灰
230	須・皿	16.6	2.0	12.7	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
231	須・高台杯			10.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
232	須・杯			10.0	細・普	良好	灰白	不明	ナデ		
233	須・高台杯			8.5	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
234	須・椀	14.5	5.7	7.2	微・普	良好	灰白	ナデ	ハケ目・ナデ	ハケ目にミガキの効果	落窪き状の沈線
235	須・甕				微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
236	土・杯	14.8	3.5	7.8	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		金雲母を含む
237	土・杯	14.2	2.9	7.4	中・多	良好	灰白	ナデ	ナデ		
238	土・杯			8.4	細・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
239	土・杯	14.0	3.4	8.0	微・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	回転台成形	金雲母を含む
240	土・杯	10.6	3.5	6.4	中・普	良好	ﾆﾌﾞｲ橙・灰黄	ナデ	ナデ		
241	土・杯			7.2	中・普	良好	明褐灰	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り	金雲母を含む
242	土・椀			6.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	貼付高台	金雲母を含む
243	土・椀			7.5	中・普	良好	明赤褐	不明	不明	朱塗り　（胎）浅黄橙	
244	土・土鍋	18.9			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
245	土・羽釜	21.2			細・多	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		金雲母を含む
246	黒A・椀			7.6	微・普	良好	黒褐・鈍黄褐	ナデ	不明	高台外面に穿孔１ヶ所	金雲母を含む
247	黒A・椀			6.9	細・普	良好	褐灰・浅黄橙	ナデ	ナデ	貼付高台	
248	黒A・椀			7.0	精緻	良好	灰黄褐，黒	ナデ	ミガキ		
249	黒B・椀	14.8	5.5	7.6	中・普	良好	黒	不明	不明		楠葉
250	黒B・椀			7.0	中・普	良好	黒	ナデ	ミガキ	内面放射線状ミガキ	
251	黒B・椀			6.2	中・普	良好	黒	不明	ミガキ		

第142図　C区ＳＤ09出土遺物（1）（1／4）



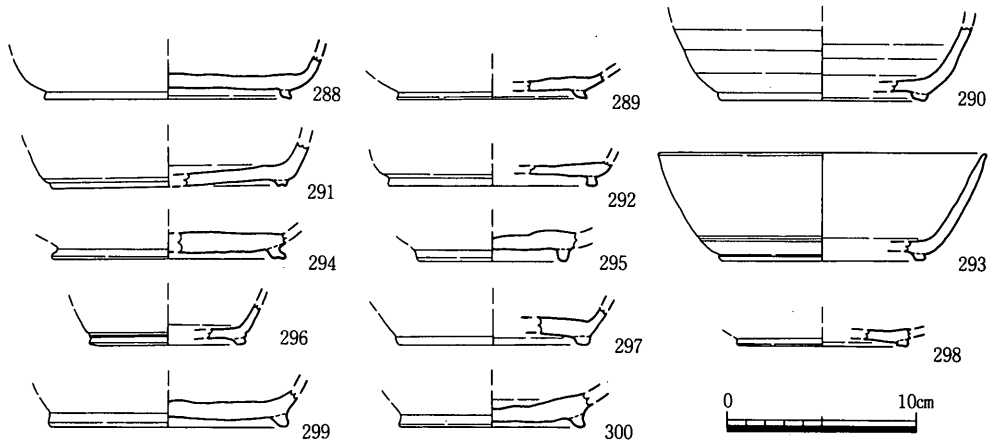
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
252	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕	1	18	中・普	灰白	良好		9.5
253	平瓦	2.5	格子目叩き	布目圧痕	-	-	中・普	灰黄	不良	正格子	6.0
254	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕・ナデ	4	-	中・普	灰	良好		7.5
255	平瓦	2.1	縄目叩き	布目圧痕	3	-	粗・普	灰白	良好		9.0
256	平瓦	1.9	板ナデ	布目圧痕	1	-	精緻	灰白	良好		10.0
257	平瓦	2.4	ナデ	ナデ	9	-	中・普	灰白	不良		9.3
258	丸瓦	3.1	板ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	灰白	良好		6.1
259	平瓦	2.0	板ナデ	ｹｽﾞﾘ・布目→板ﾅﾃﾞ	4	17	中・普	灰白	良好		5.9
260	丸瓦	3.1	板ナデ	布目圧痕→ハケ目	15	-	中・普	淡黄	良好		11.6
261	丸瓦	2.8	板ナデ	布目圧痕	11	-	微・普	灰黄	良好		13.3

第143図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（2）（1／5）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
262	須・杯蓋	12.0			中・普	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
263	須・杯蓋				細・普	良好	暗青灰	ナデ	ナデ		
264	須・杯蓋				細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
265	須・杯蓋				中・普	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ		
266	須・杯蓋	15.0			細・普	不良	にぶい橙・灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
267	須・杯蓋	16.0			微・多	良好	灰	ナデ	ナデ		
268	須・杯蓋				細・普	良好	灰	ケズリ	ナデ	かえり付き	
269	須・杯蓋	24.9			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
270	須・杯蓋	20.0			微・少	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ		
271	須・高台杯				細・普	良好	灰	不明	ナデ		墨書
272	須・杯			8.2	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白
273	須・杯			9.4	精緻	良好	青灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	墨書
274	須・杯身	7.0			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
275	須・杯	12.3	3.7	8.7	細・少	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ		
276	須・杯			6.6	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
277	須・杯			9.6	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
278	須・杯	12.8	3.5	7.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
279	須・杯			6.5	細・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ		
280	須・杯			9.6	中・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
281	須・皿	14.8	2.1	5.6	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
282	須・皿	13.6	2.0	10.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
283	須・皿	17.1			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
284	須・皿	14.0	2.2	10.0	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
285	須・皿	15.8	2.4	11.6	微・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
286	須・皿			11.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	墨書の可能性あり
287	須・皿	14.8	2.3	11.0	細・少	良好	青灰	ナデ	ナデ		墨書

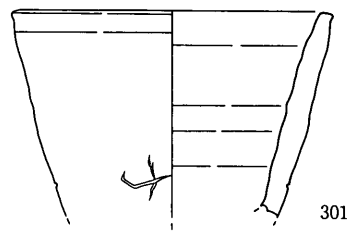
第144図　C区ＳＤ09出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
288	須・高台杯			13.1	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
289	須・高台杯			10.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
290	須・高台杯			10.8	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
291	須・高台杯			12.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
292	須・高台杯			11.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
293	須・高台杯	17.3	5.5	10.8	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
294	須・高台杯			12.4	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り，貼付	
295	須・高台杯			7.8	細・普	不良	橙・淡赤橙	不明	不明	底ヘラ切り	
296	須・高台杯			8.2	細・普	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ		
297	須・高台杯			10.3	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
298	須・高台杯			9.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
299	須・高台杯			12.4	細・普	不良	灰黄・灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
300	須・瓶			9.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

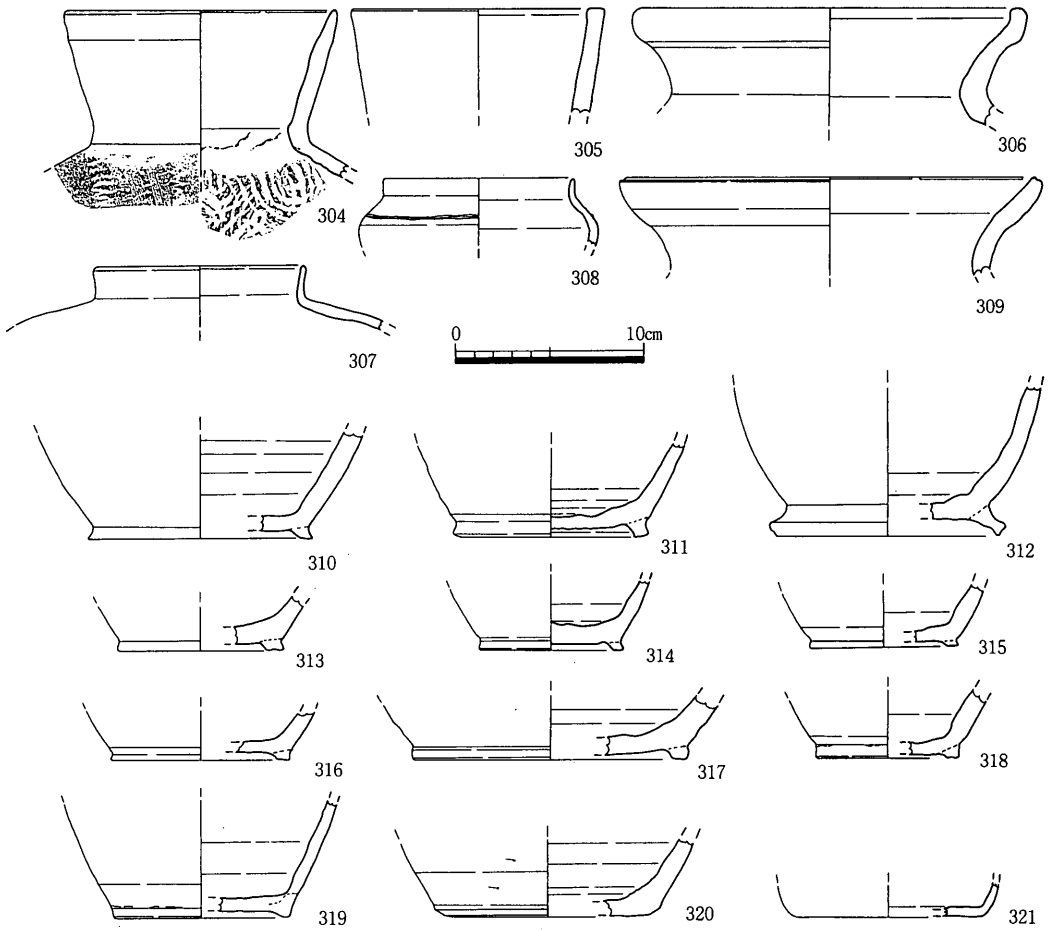
第145図　C区ＳＤ09出土遺物（4）（1／4）

262～431は支流(b)出土遺物である。262～321は須恵器である。262と266はかえりのつく杯蓋である。263～270はほぼ同じ時期のものである。271は高台付杯の破片である。内面に「門」という字の右半分と考えられる墨書がかかれていた。273も杯底内面に墨書の可能性のある墨痕が残っている。274は古墳時代の杯身の形態につなが



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
301	須・コネ鉢	16.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		ヘラ記号、瓦質
302	須・鉢				微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		胎土は白灰
303	須・鉢OR鍋	38.8			精緻	良好	黄灰	ナデ	ナデ		

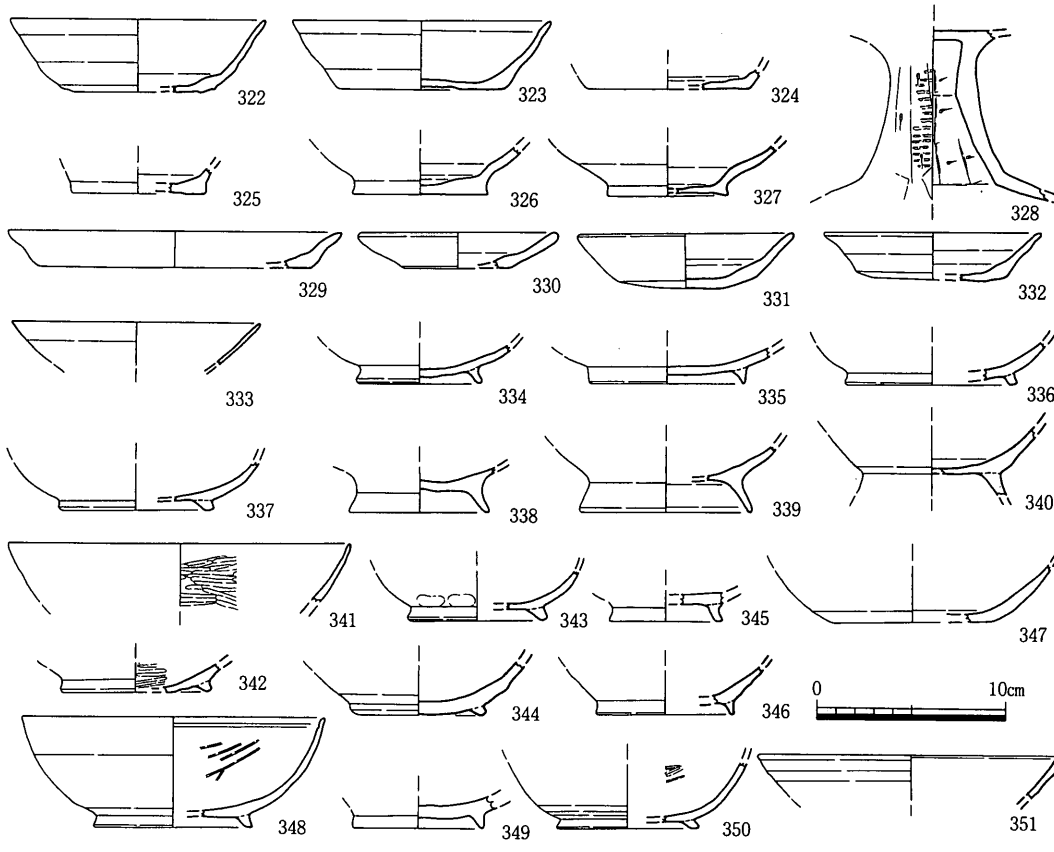
第146図　C区ＳＤ09出土遺物（5）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
304	須・壺	14.5			細・多	良好	灰白	ナデ・叩き→ハケ目	ナデ	青海波	
305	須・壺	13.4			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
306	須・蓋	20.8			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
307	須・壺	11.-3			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
308	須・壺	10.1			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
309	須・蓋	21.4			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	口縁端部に凹線	
310	須・蓋			11.8	微・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		
311	須・壺			10.3	微・多	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
312	須・蓋			11.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	外面に釉付着	
313	須・蓋			8.8	微・普	良好	青灰	ケズリ	ナデ		
314	須・蓋			7.5	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
315	須・蓋			7.8	精緻	良好	青灰	ナデ	ナデ		
316	須・蓋			9.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
317	須・蓋			14.3	微・少	良好	暗青灰	ナデ	ナデ		
318	須・蓋			7.4	細・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		
319	須・蓋			9.1	中・普	良好	暗青灰	ナデ	ナデ		
320	須・壺			13.8	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	ヘラ切り	
321	須・壺			10.0	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

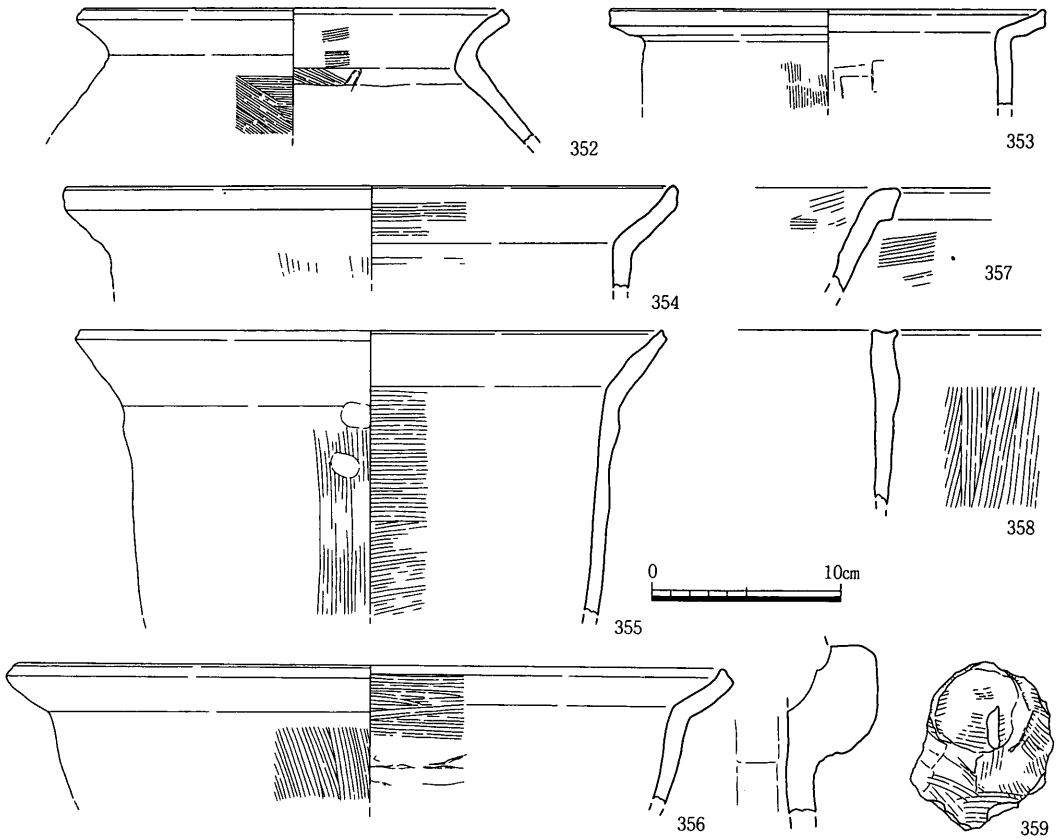
第147図　C区ＳＤ09出土遺物（6）（1／4）

るもので，262と同じ時期に属する。底部外面はヘラ切りである。280は底部外面に「丶」形のヘラ記号がかかれている。281～287は口径14～18cmの皿である。283は口縁部が水平



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
322	土・杯	13.4	3.7	6.6	細・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
323	土・杯	13.6	3.5	8.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り・板状圧痕	
324	土・杯			8.3	細・普	良好	黄灰・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
325	土・椀			7.0	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底部高台状	
326	土・椀			7.2	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
327	土・椀			6.4	精緻	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底糸切り	
328	土・高杯				中・普	良好	灰白	ナデ・叩き→ｹｽﾞﾘ	ナデ・ケズリ	外面赤色顔料，面取り	
329	土・皿	17.6	1.9	14.4	細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
330	土・小皿	10.6	1.8	6.0	微・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
331	土・杯	11.4	2.8		中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り・板状圧痕	
332	土・杯	11.4	2.4	8.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り・ナデ強い	
333	土・椀	13.0			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
334	土・椀			6.3	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	不明		
335	土・椀			8.0	精緻	良好	明褐灰・橙	ナデ	不明	底ヘラ切り	
336	土・椀			9.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	不明		
337	土・椀			8.2	細・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		
338	土・椀			7.4	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
339	土・椀			9.1	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
340	土・椀				細・普	良好	橙・浅黄橙	不明	不明		
341	黒A・椀	18.1			精緻	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
342	黒A・椀			7.9	精緻	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ	外面に赤色顔料	
343	黒A・椀			7.4	中・普	良好	橙，褐灰	ナデ	不明		
344	黒A・椀			6.6	精緻	良好	ﾆﾌﾞｲ黄橙	ナデ	不明	底ヘラ切り	
345	黒A・椀			6.0	精緻	良好	黒・浅黄橙	不明	不明		
346	黒A・椀			7.2	微・普	良好	鈍い橙，黒褐	ナデ	ナデ		
347	黒A・椀			8.0	細・普	良好	黒・明褐灰	ミガキ	不明		
348	黒B・椀	16.0	5.8	8.4	中・普	良好	黒灰	不明	ミガキ	口縁部内面に沈線１条	楠葉型
349	黒B・椀			7.0	中・普	良好	黒	ナデ	不明	底ヘラ切り	
350	黒B・椀			7.5	細・普	良好	黒	不明	ミガキ		
351	瓦・椀	16.0			微・普	良好	暗灰～灰白	ナデ	ナデ		胎土は灰白，和泉

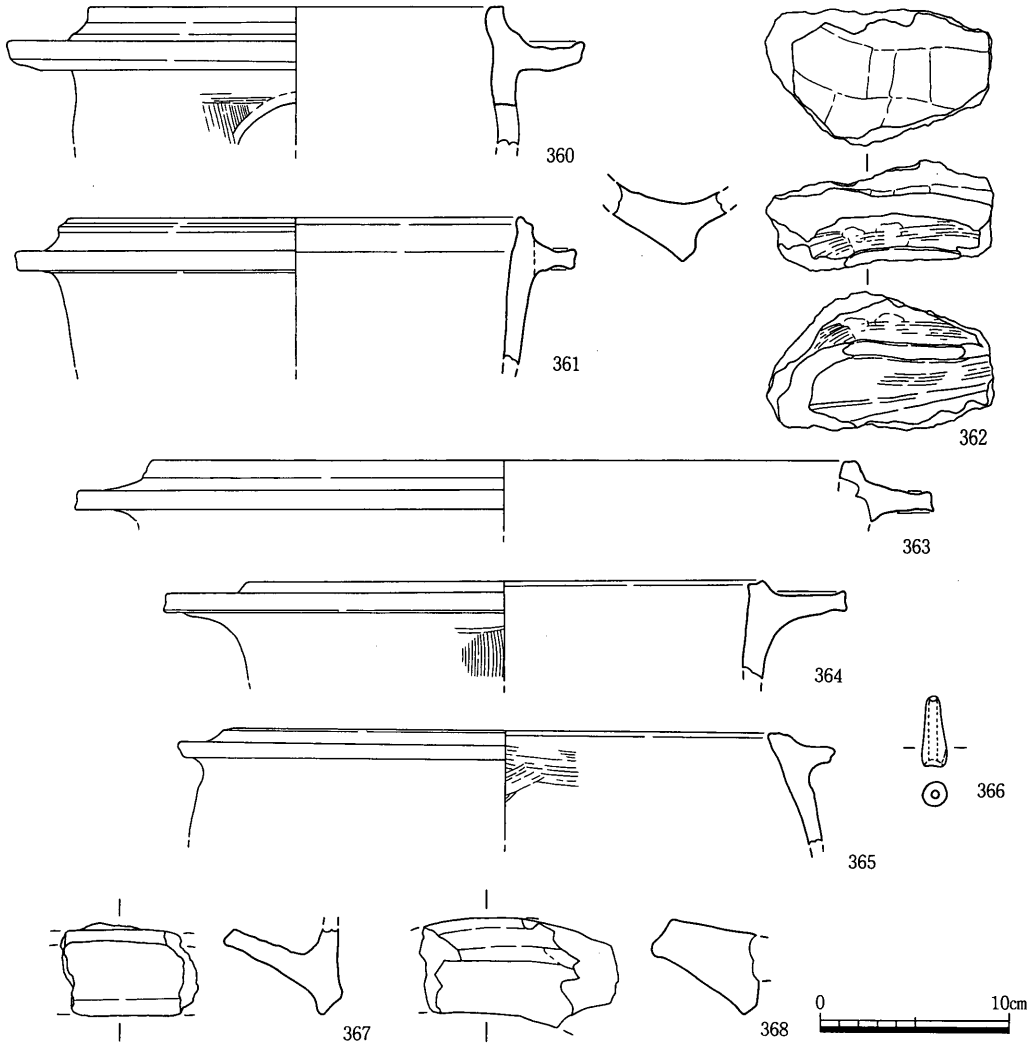
第148図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（7）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
352	土・甕	22.8			中・普	良好	灰黄	ハケ目・ナデ	ハケ目・板ナデ		
353	土・土鍋	23.0			粗・普	良好	灰褐～橙	ハケ目→ナデ	ナデ・板ナデ		
354	土・土鍋	32.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		
355	土・土鍋	38.3			中・普	良好	黄褐・黒褐	ハケ目	ナデ・ハケ目		
356	土・土鍋	30.8			粗・多	良好	橙・浅黄橙	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		
357	土・甑				中・普	良好	淡黄，鈍赤橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
358	土・甑				中・普	良好	浅黄，灰褐	ハケ目・ナデ	ナデ		
359	土・甑				粗・普	良好	明赤褐	ﾊｹ目・ナデ・ｹｽﾞﾘ	板ナデ		

第149図　C区ＳＤ09出土遺物（８）（1／4）

方向へと屈曲するが，他は直線的にのびる。287は底外面に字体不明の墨書が残っている。288～290・298は高台内側が宙に浮くものである。291・294は高台接地面中央がくぼむ。295・297・300は高台断面が丸い。299は焼きが甘くやや土師質になっている。301は焼きの甘いこね鉢である。数はあまり多くないが８世紀代まで使われ続けるようである。外面にヘラ記号がかかれている。302は器壁が厚いため鉢にしたが，傾きからいえば椀の可能性もある。303もあまり類例をみない口縁形態のものである。径は不確かである。304～306・309はやや大型の壷である。304の外面は叩きの後ハケ目状のもので縦方向にナデている。308は焼成時にかぶせていた蓋の痕跡が盛り上がった筋となって残っている。309は口縁部

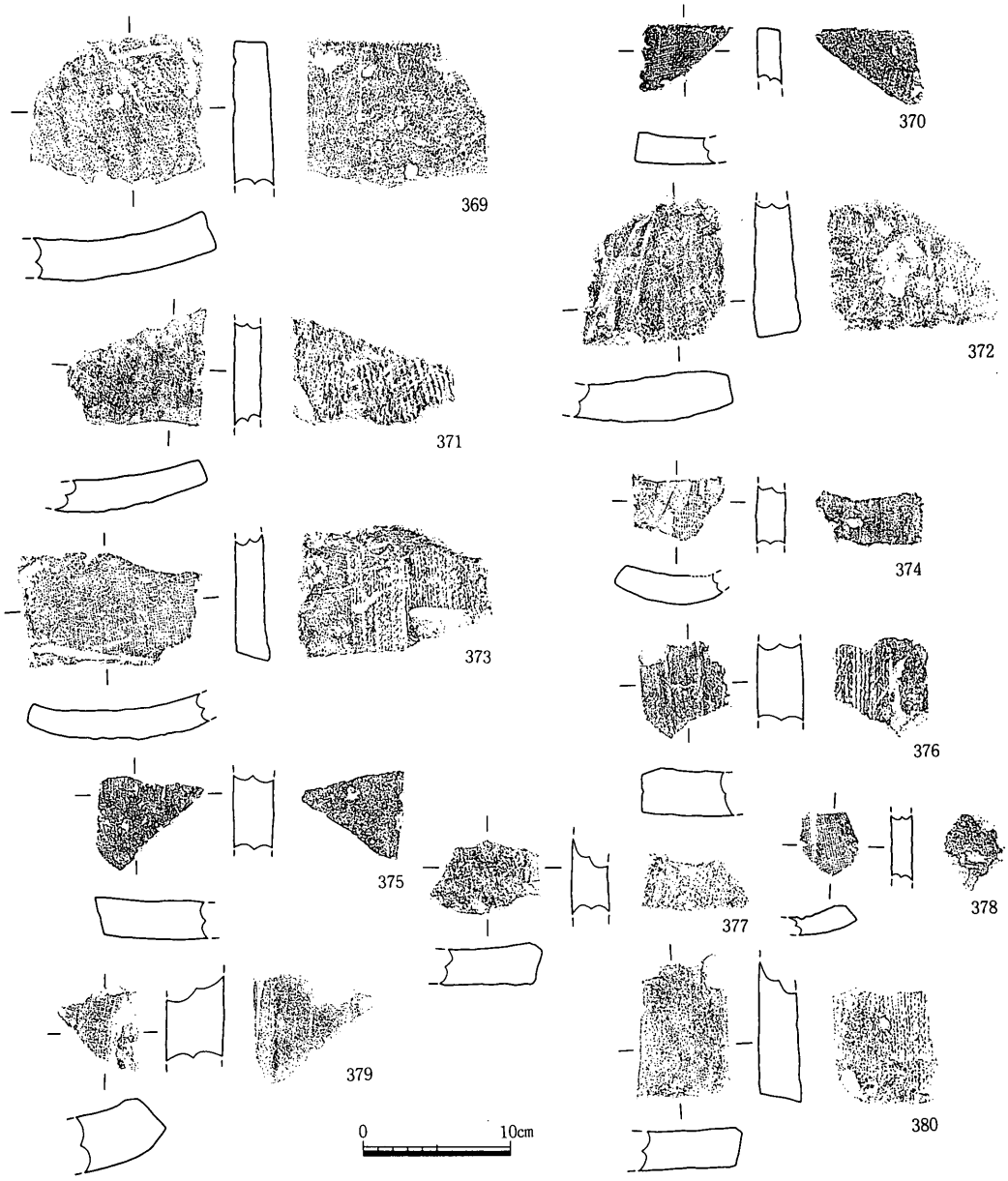


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
360	土・土釜	22.0			中・多	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ	ナデ	円形透し	
361	土・土釜	23.7			細・多	良好	鈍黄橙・褐灰	ナデ	ナデ		
362	土・竈				粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	板ナデ		
363	土・土釜	37.0			粗・普	良好	白灰，浅黄	ナデ	ナデ		煤付着
364	土・土釜	27.2			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ	ナデ		
365	土・土釜	27.6			中・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ・ハケ		
366	土・土錘	短軸1.4	長軸3.7		細・多	良好	橙・浅黄橙	ナデ			重量6.0g
367	土・竈				粗・普	良好	橙～褐灰	ナデ	ナデ		
368	土・竈				粗・普	良好	鈍い黄・黄灰	ナデ	ナデ		

第150図　C区ＳＤ09出土遺物（9）（1／4）

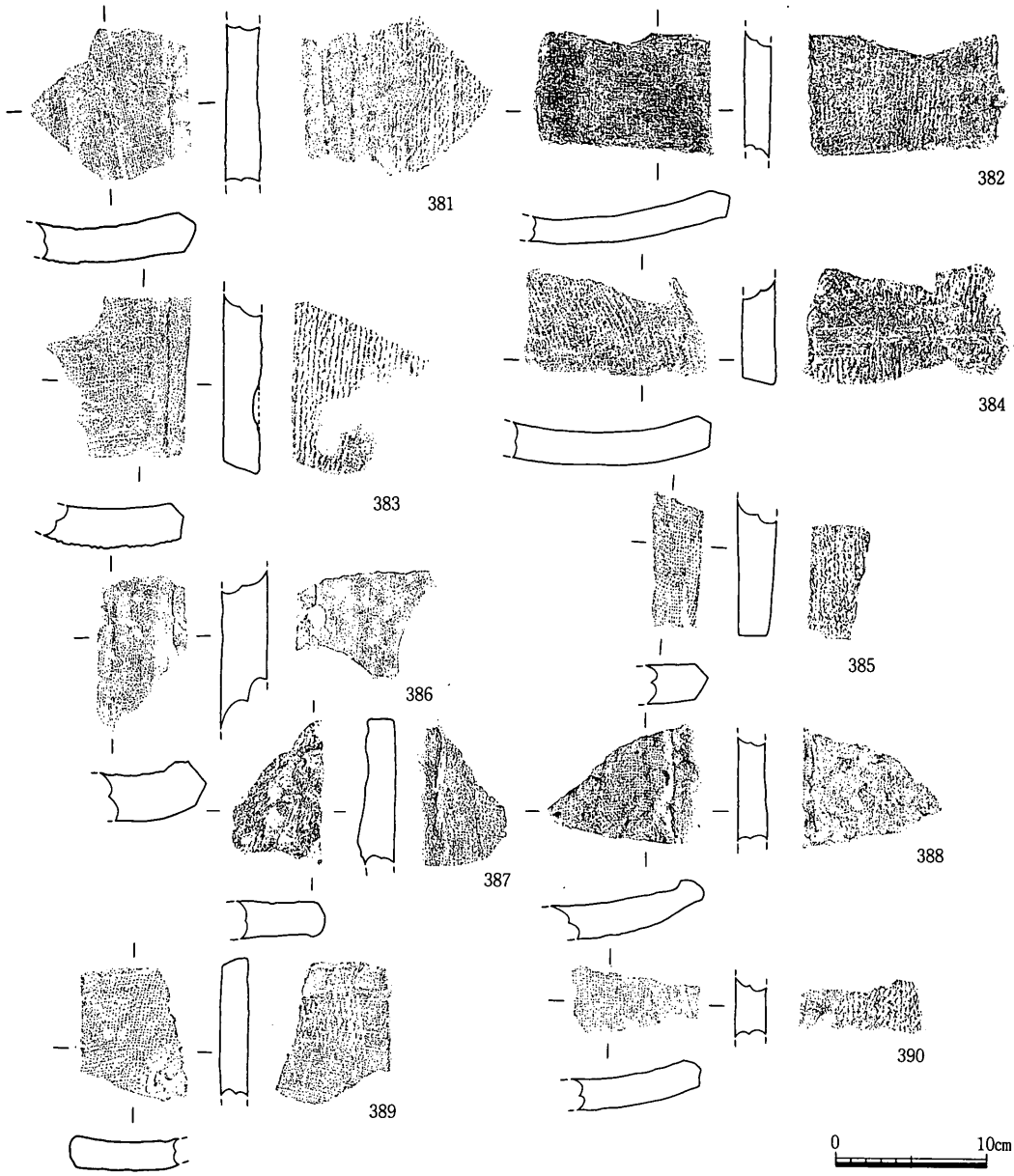
端面にナデによる凹線が入っている。312は大きく外に張り出した高台をもつ。320は高台がつかない。外面にはヘラケズリの痕が残る。321は小型の短頸壷か細頸壷の底と考えられる。

322～350・352～368は土師器である。323は底部外面に板状圧痕が残る。325は杯部下端



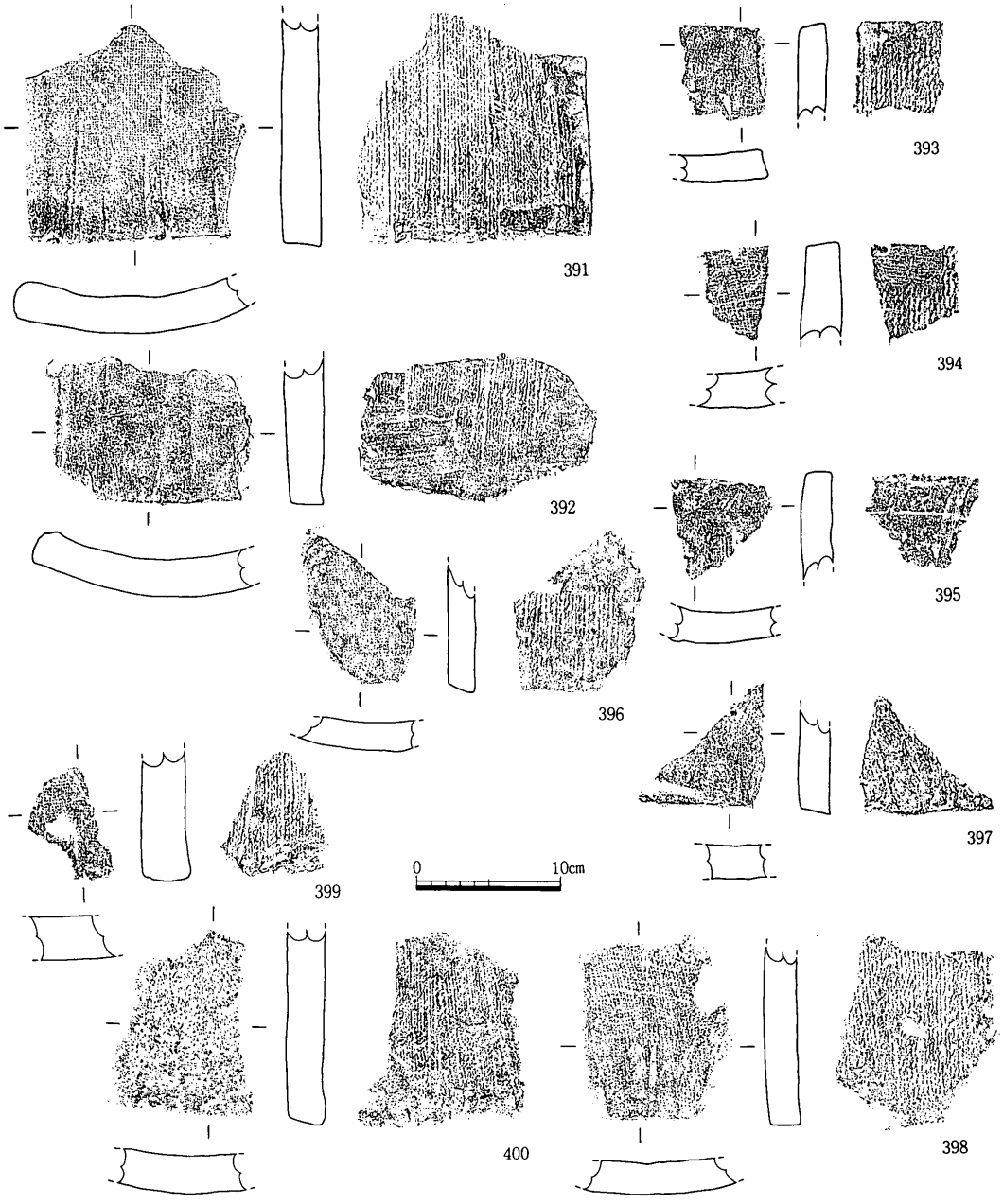
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
369	平瓦	2.4	板ナデ	布目圧痕→ナデ	1	10	粗・多	灰白・黄灰	良好	一枚作り・布端痕あり	9.5
370	平瓦	1.2	板ナデ	布目圧痕	1	16	微・普	灰白	良好		5.2
371	平瓦	1.8	縄目叩き→一部板ナデ	布目圧痕→ナデ	1	-	中・普	ニブイ黄橙・灰黄	良好	一枚作り	6.9
372	平瓦	2.8	縄目叩き	布目圧痕	1	16	粗・普	灰白	良好	一枚作り	8.5
373	平瓦	2.0	叩き→板ナデ	布目圧痕	1	17	中・普	灰黄褐	良好		12.8
374	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	-	粗・普	灰	良好		4.1
375	平瓦	2.5	ケズリ	ケズリ	1	-	粗・普	灰	良好		7.5
376	平瓦	3.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	2	-	粗・普	灰	良好		5.7
377	平瓦	2.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	2	-	中・普	暗灰・灰白	良好	一枚作り・側面に布目圧痕あり	5.3
378	平瓦	1.4	叩き→ナデ	布目圧痕	2	-	中・普	灰白	良好	凹面に分割突帯の痕	4.5
379	平瓦	3.9	ナデ	布目圧痕	6	-	中・普	浅黄橙	良好		5.6
380	平瓦	2.6	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	2	19	中・普	灰白	良好		8.9

第151図　C区ＳＤ09出土遺物（10）（1／5）



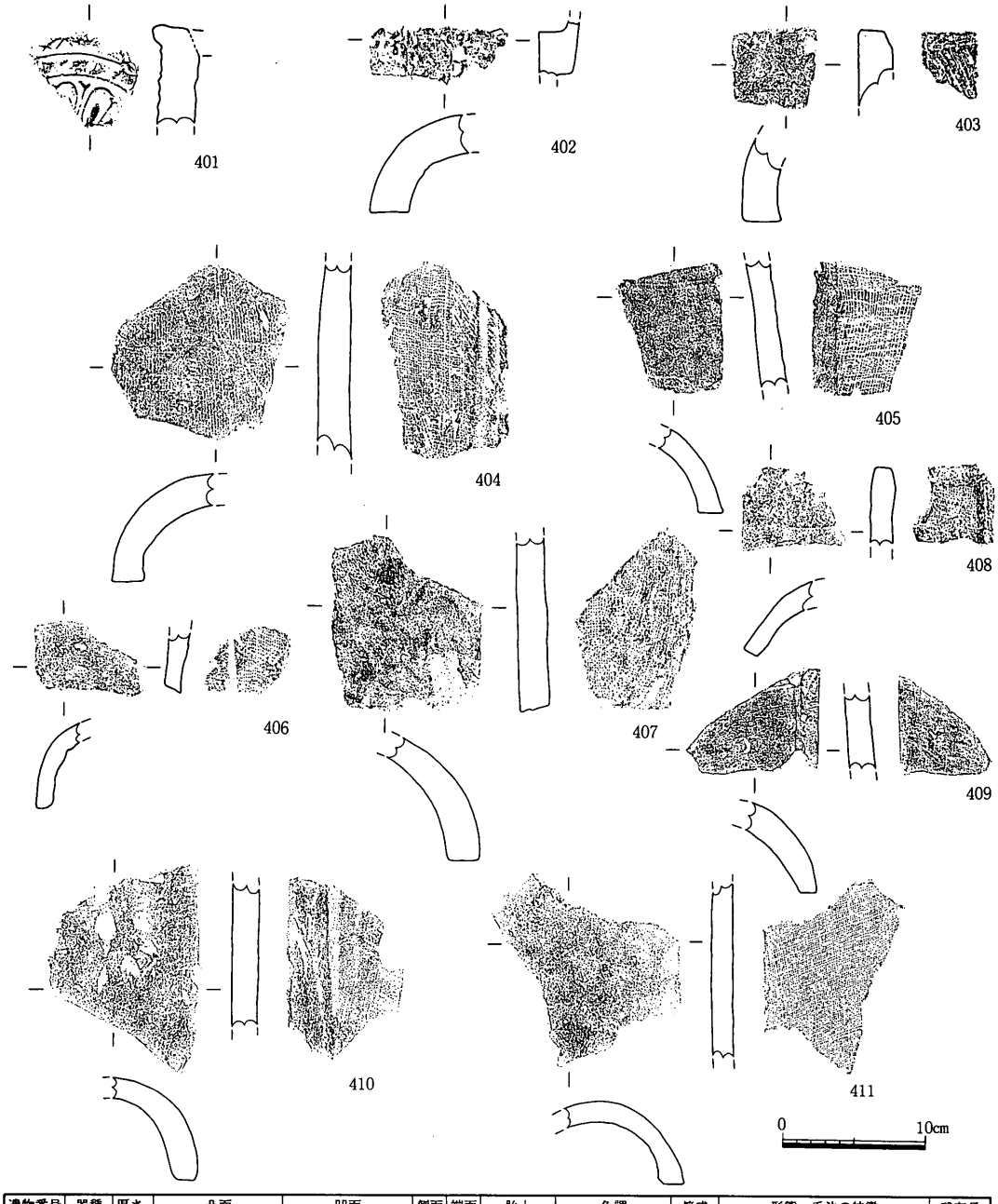
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
381	平瓦	2.7	縄目叩き	布目圧痕	6	-	中・多	浅黄・にぶい橙	不良	砕断面にヘラ削り	9.9
382	平瓦	1.7	縄目叩き→一部ナデ	布目圧痕	6	16	中・普	灰白	良好		7.4
383	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕→板ナデ	6	16	中・多	浅橙・橙	不良		10.2
384	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→板ナデ	6	16	中・普	灰黄	良好	凹面の布がきれいに巻かれてない	6.3
385	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕	6	16	中・多	灰白	良好	砕断面ヘラ削り	8.8
386	平瓦	3.0	板ナデ	布目圧痕	2	-	中・普	白灰	良好		8.8
387	平瓦	2.3	布目圧痕	縄目叩き→指頭圧痕	6	16	粗・普	灰～灰黄	良好	胎土は灰白	9.7
388	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	-	-	中・普	黒・灰黄褐	良好	一枚作り	6.8
389	平瓦	1.8	叩き→ハケ目	布目圧痕	4	17	粗・普	灰白	良好		9.6
390	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	6	-	粗・普	黒	良好	一枚作り？	3.8

第152図　C区ＳＤ09出土遺物（11）（1／5）



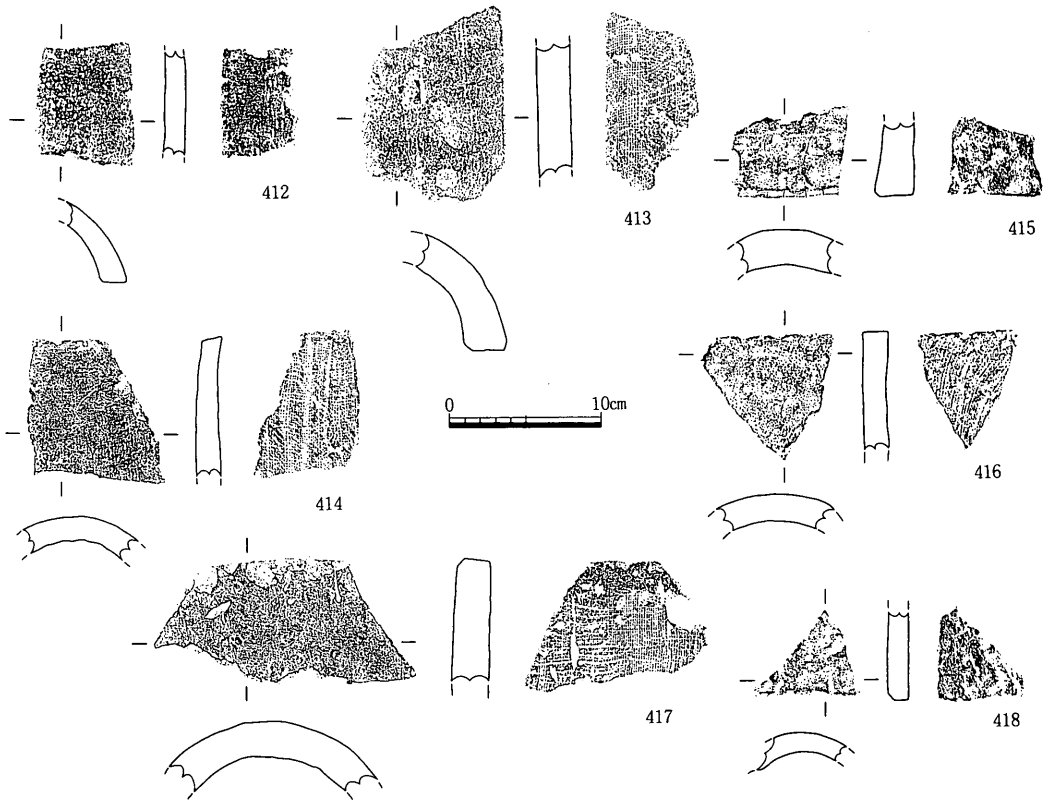
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
391	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	1	16	粗・普	灰白	良好	一枚作り・凸面付近に指ｵｻｴ	14.9
392	平瓦	2.5	縄目叩き・板ナデ	布目圧痕	4	16	粗・普	灰白	良好	一枚作り・端面凸面側に板ナデ痕	9.9
393	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	-	17	粗・普	浅黄橙～橙	良好		6.3
394	平瓦	2.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	1	17	中・普	灰白～灰	良好		6.2
395	平瓦	2.3	ナデ→ケズリ	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ・布目	-	16	中・普	灰	良好		7.1
396	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕	-	16	中・普	にぶい黄橙	不良		8.3
397	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	-	16	粗・普	灰白	良好		6.9
398	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕	-	16	中・普	浅黄	良好		12.3
399	平瓦	3.3	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	-	16	中・普	浅黄橙・灰白	良好		8.7
400	平瓦	2.6	縄目叩き→ナデ	不明	-	16	中・普	灰白	良好		13.4

第153図　C区ＳＤ09出土遺物（12）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
402	丸瓦	2.6	ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	黒褐	良好		3.0
403	丸瓦	2.6	ナデ	板ナデ	11	18	粗・普	灰白	良好		5.7
404	丸瓦	2.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	灰白～灰	良好		13.6
405	丸瓦	1.6	布目圧痕	ナデ	-	-	中・普	灰白・黒褐	良好		8.5
406	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	11	16	中・普	灰白	良好		4.1
407	丸瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→板ナデ	11	16	中・普	灰白	良好		10.4
408	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	1	16	中・普	灰白	良好		5.2
409	丸瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→板ナデ	11	-	中・普	灰	良好		5.1
410	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	11	-	中・普	黒・灰白	良好	凹面側面付近をナデる	9.5
411	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰白	良好		14.0

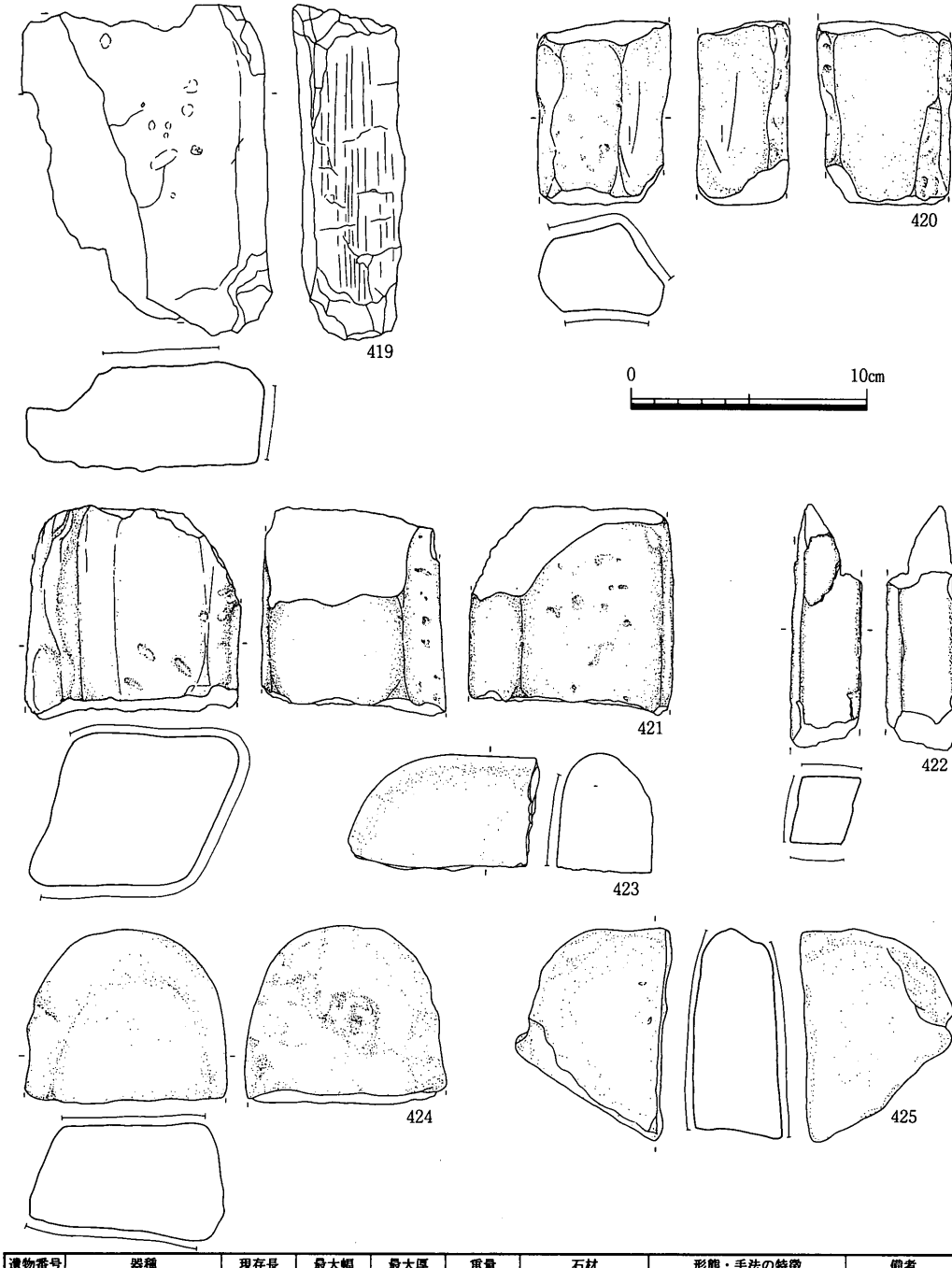
第154図　C区ＳＤ09出土遺物（13）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
412	丸瓦	1.8	板ナデ	布目圧痕→ナデ	12	-	中・普	灰白	良好		8.3
413	丸瓦	2.3	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	黄灰	良好		12.5
414	丸瓦	1.5	板ナデ	布目圧痕	-	17	中・普	灰白	良好		9.0
415	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕	-	18	中・普	黒	良好		4.5
416	丸瓦	1.8	ナデ		-	16	中・普	灰白	良好		7.6
417	丸瓦	2.4	板ナデ	布目圧痕	-	18	粗・普	灰	良好		17.0
418	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	11	-	中・普	暗灰	良好		5.6

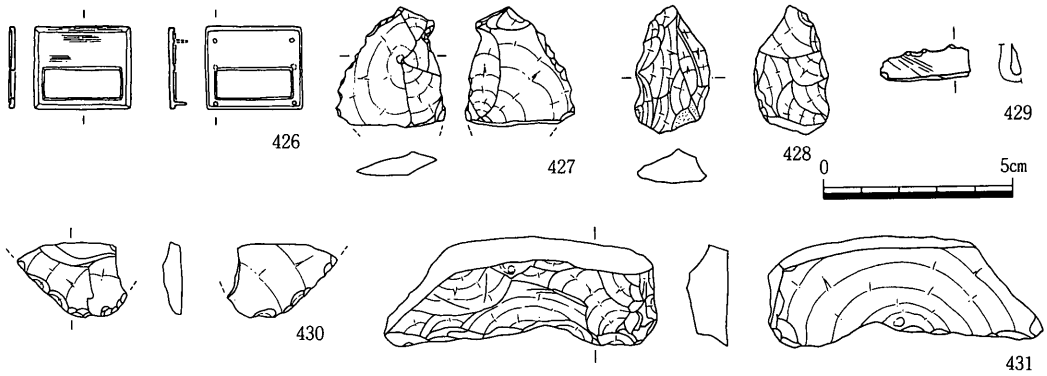
第155図　C区ＳＤ09出土遺物（14）（1／5）

をつよくナデて高台状に見せている。326・327は同じ部分を更につよくナデている。328の外面は叩き締めの後，面取り状にヘラケズリを行なっている。内面もヘラケズリしている。331は底部外面に板状圧痕が残る。338～340は高台の高い椀である。杯部はあまり丸みをもたないと思われる。347はおそらく高台がとれたものであろう。348は口縁内面に沈線が１本めぐる。351は瓦器椀である。353～355は長胴形になるものと思われる。356は浅い。357は甑としたが，あまり類例のない口縁形態をもつ。358は内外面とも粗い調整がなされている。359は真横に突き出た円柱状の竈か甑の把手であろう。本体との継目部分には一部ヘラケズリの痕が残る。360は鍔から上をみれば土釜であるが，横腹に１ヵ所大きな穴が開いているため竈の可能性も考えておきたい。362は竈の焚き口のうえの鍔の部分



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
419	砥石	13.6	10.3	4.3	773	流紋岩		
420	砥石	7.6	5.5	3.9	253	砂岩		
421	砥石	7.7	7.5	6.7	784	砂岩		
422	砥石	10.1	2.9	2.9	121	安山岩		
423	石皿	7.6	4.9	4.0	264	砂岩		
424	石皿	7.2	8.5	5.0	467	砂岩		
425	石皿	6.3	8.9	3.6	3355	砂岩		

第156図　C区ＳＤ09出土遺物（15）（1／3）



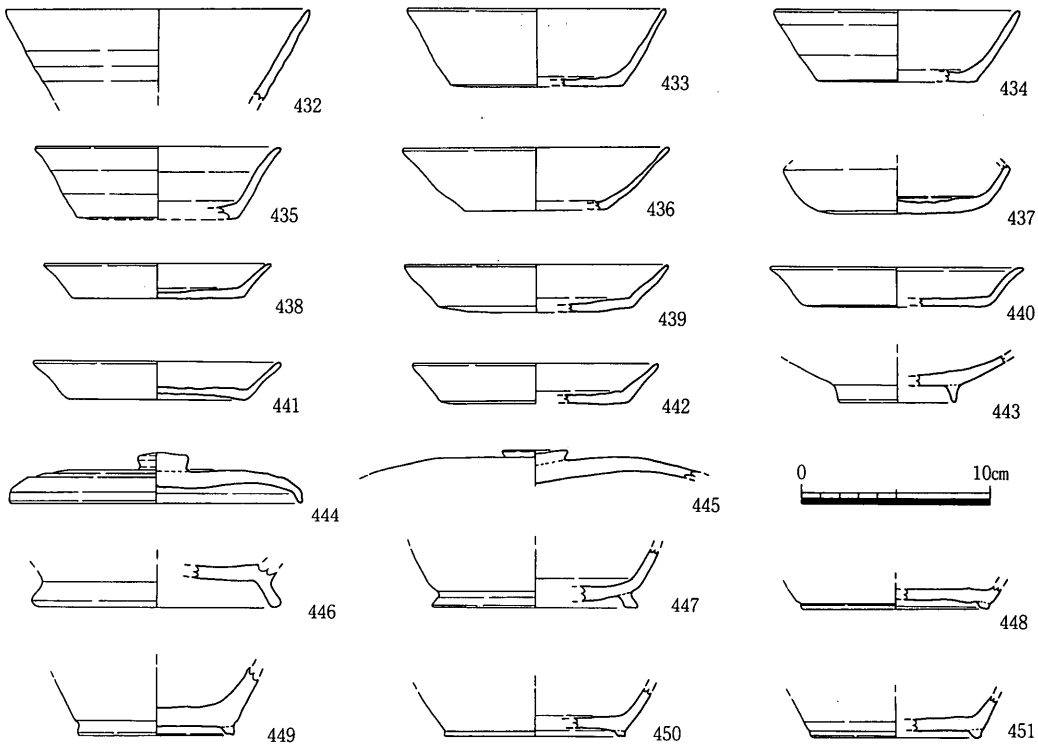
遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
426	銅	帯金具（巡方）	2.1	2.6	0.2	4.8		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
427	二次加工のある剥片	3.0	2.9	0.6	5.2	サヌカイト		
428	二次加工のある剥片	3.2	2.0	0.9	6.1	サヌカイト		
429	磨製石器（石包丁？）	0.9	2.4	0.3	0.7	サヌカイト	擦痕あり	
430	スクレイパー	2.6	1.9	0.5	2.8	サヌカイト		
431	二次加工のある剥片	7.2	2.7	1.1	29	サヌカイト		

第157図　C区ＳＤ09出土遺物（16）（1／2）

である。363～365は鍔がやや上につく土釜である。365は胴が内傾している。366は小型の土錘である。367・368も竈の焚き口のうえの鍔の部分である。

369～418は瓦である。半数以上の平瓦の凸面に叩き目が残る。369～375は側面をまっすぐに整えているものである。凹面にはほとんど布目が残り，凸面は縄目叩きが残るかナデられている。375は側面の凸面側より凹面側が張り出している。１枚作りによる結果と考えられる。376～380は側面の凹面側を少し斜めに削っている。平たいものと丸みをもつものがある。369は凹面に布端痕が残る。377は側面に布目の痕が残る。378は凹面に縦方向のくぼんだ筋が入る。381～386は側面が山形に尖っている。381・383は山の凹面側に切断のための切り込み痕が残り，凸面側は切断後に削ったと考えられる。384は凹面に糸切りによる粘土板切り取りの痕跡と思われるものが残る。387～393は側面が丸みをもっている。387は凹面側に叩き目が，凸面側に布目が残る。凹んだ成形台を用いたためと考えられる。さらに凸面の布目は目の粗いものと細かいものの２種ある。388は凹面側に成形台端部の線が残る。391は凸面の側面寄りに指押さえの痕が残る。401は複弁蓮華文軒丸瓦である。葉数は８と思われる。外区内縁は珠文，外区外縁は鋸歯文をめぐらせる。瓦当と丸瓦の接合にはとくに深い溝は設けていない。402は玉縁の部分である。厚さの薄い右側が玉縁部であろう。403～409は側面が真っすぐになっているものである。408は左下断面図の割れ口にも布目が残る。理由はわからない。410～412は側面の凹面側を面取りしている。413

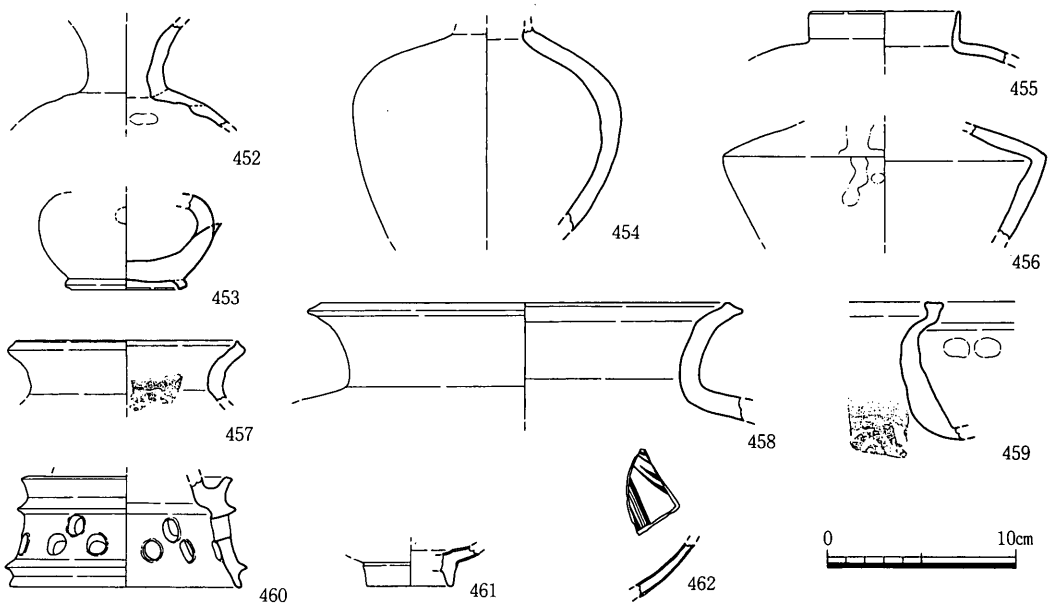


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
432	須・杯	16.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
433	須・杯	13.6	4.0	9.2	稍粗	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
434	須・杯	13.0	3.7	8.4	微・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
435	須・杯	13.0		8.5	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
436	須・杯	14.1	3.2	7.5	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
437	須・杯	12.0		8.2	細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
438	須・皿	12.0	1.8	9.1	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
439	須・皿	14.0	2.4	10.3	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
440	須・皿	13.4	2.0	9.8	細・普	良好	灰白～暗青灰	ナデ	ナデ		
441	須・皿	13.0	1.9	9.6	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
442	須・皿	13.0	2.0	10.1	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
443	須・椀			6.1	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
444	須・杯蓋	15.5	2.6		中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
445	須・杯蓋				粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
446	須・高台杯			13.2	粗・多	良好	灰	不明	不明		
447	須・高台杯			10.7	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
448	須・高台杯			10.0	微・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
449	須・壺			8.2	微・普	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ	ヘラ切り	
450	須・高台杯			9.5	細・多	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
451	須・壺			9.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第158図　C区ＳＤ09出土遺物（17）（1／4）

は凹凸両面を面取りしている。側面には成形時にできたと思われる沈線が１本真っすぐにはいる。

419～425・427～431は石器である。419は２面を研ぎ面として使用している。420は五角柱形をしている。３面を研ぎ面として使用している。421は平行四辺形をしている。３面を研ぎ面として使用している。422は細い方柱状の砥石である。３面を研ぎ面として使用



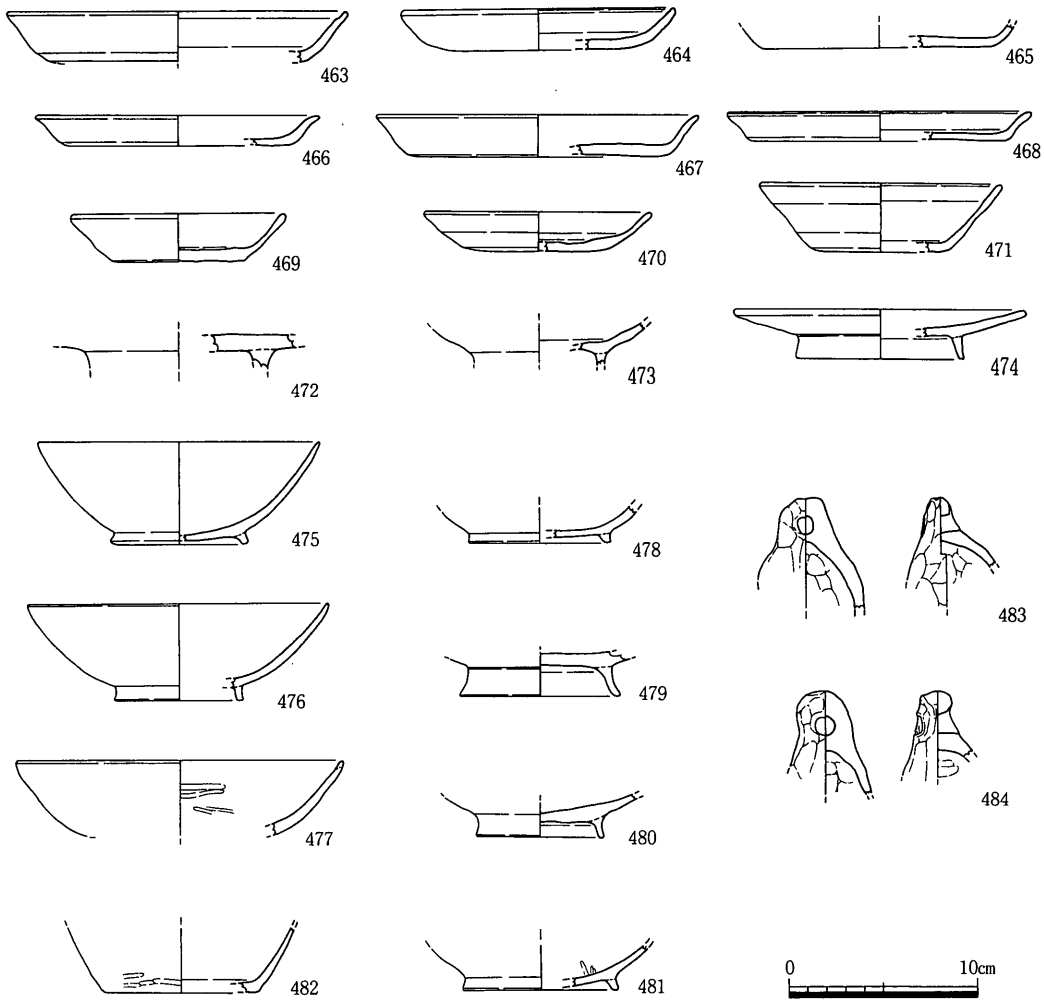
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
452	須・壺				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
453	須・水注			6.5	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
454	須・壺				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
455	須・壺	8.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土は赤褐
456	須・壺				中・普	良好	灰・灰白，灰	ナデ	ナデ		
457	須・壺	12.6			微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ・あて具痕		
458	須・甕	23.0			中・普	良好	黒，青灰	ナデ	ナデ・板ナデ		胎土は灰紫
459	須・甕				細・普	良好	オリーブ灰	ナデ	ナデ		
460	須・硯			12.2	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	透し穴は6ヶ所あく	
461	青・碗			4.6	精緻	良好	淡黄～明緑灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白
462	青・碗				精緻	良好	緑灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白

第159図　C区SD09出土遺物（18）（1／4）

している。423～425は石皿である。423は片面に，424・425は両面に摩滅面をもつ。431は二次加工のある剥片である。長辺の一辺に両面調整を施し刃部としている。

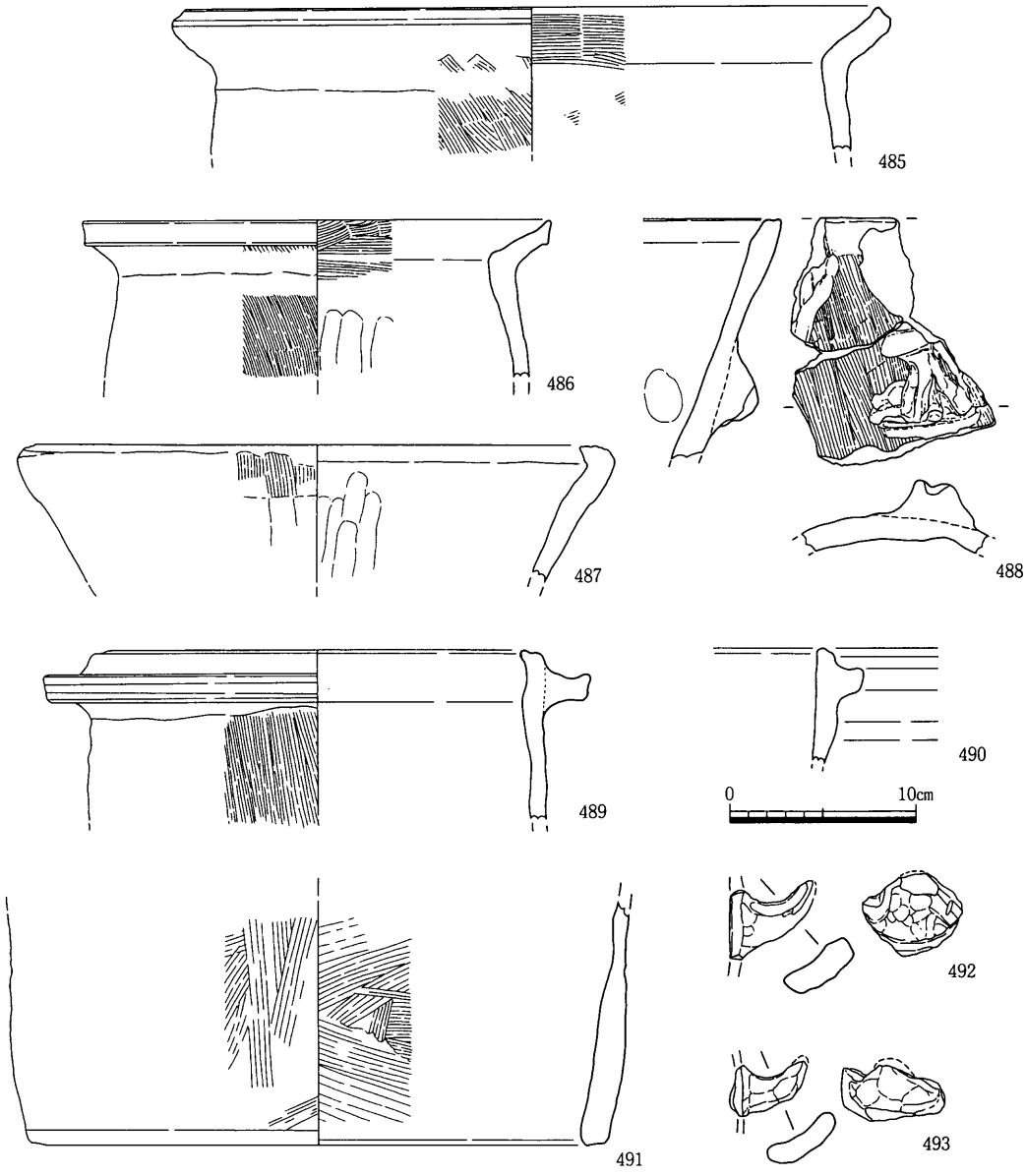
426は銅製帯金具である。裏面には4個もしくは6個の突起がついており，四隅のものは長くつき出している。

支流(b)出土の土器は，時期的には須恵器が9世紀代を中心として7世紀から10世紀までしめられるのに対し，土師器は10～12世紀代のものがほとんどである。このような時期差は先学の研究によって明らかなように古代の食膳具が須恵器中心から土師器へと変化することを反映していると考えられる。さらにこの期間をとおして土器が一定量出土しているということは，溝が長期間機能していたことを示している。また支流(b)からは溝自体の大きさも反映しているのであろうが支流(a)よりも多くの遺物が出土している。以上土器からみた場合，(b)は(a)よりも先に掘られ，かつ2本が同時に機能していたときでも(b)が主体



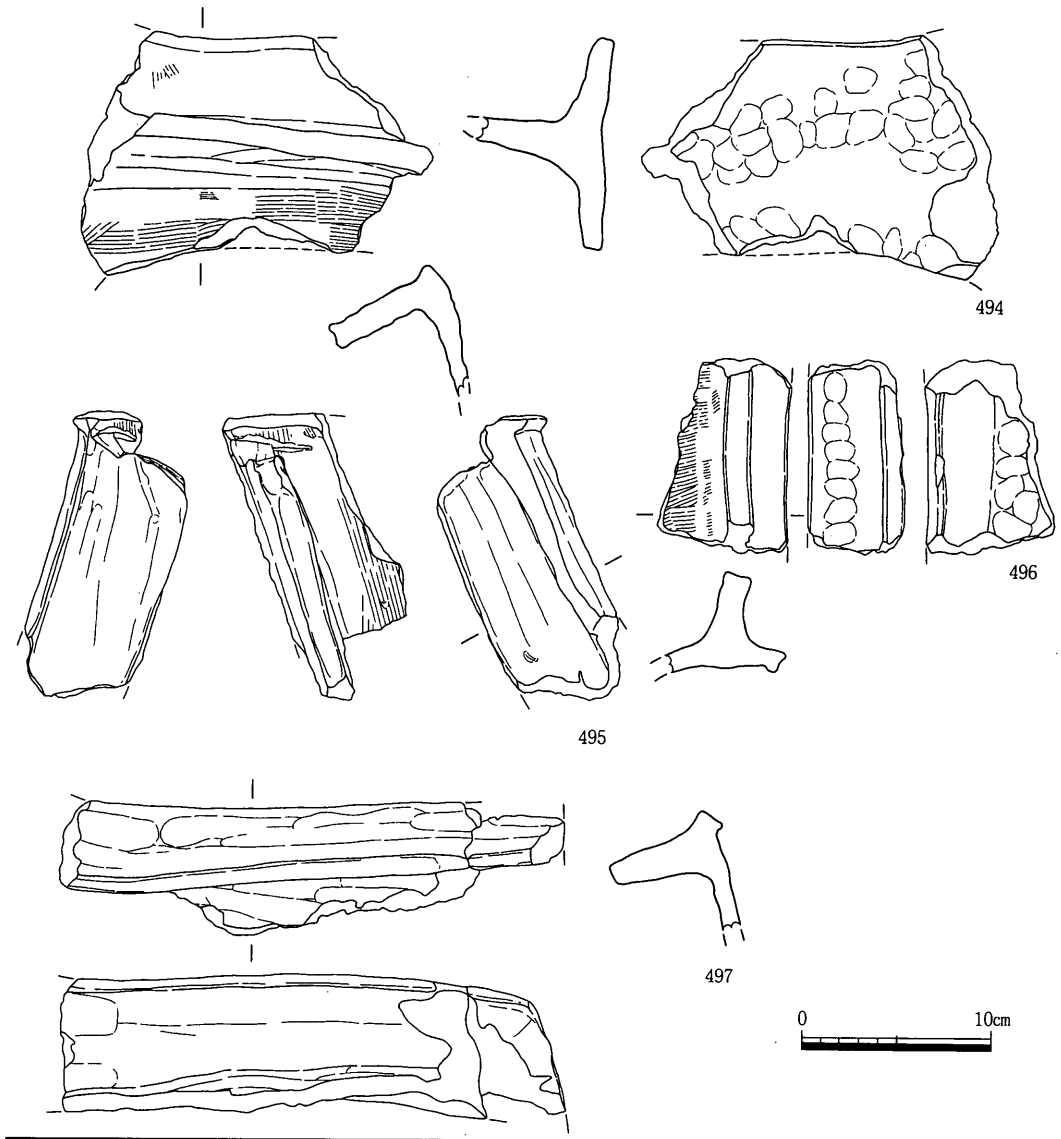
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
463	土・皿	18.0		13.7	細・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		
464	土・皿	14.6	2.1	9.5	中・普	良好	橙～浅黄橙	ナデ	ナデ	内外面朱塗り	
465	土・皿			12.1	細・普	良好	浅橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
466	土・皿	15.0	1.6	12.0	精緻	良好	灰白・赤褐	ナデ	ナデ	内外の表面に赤色顔料	
467	土・皿	17.0	2.1	13.7	中・多	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
468	土・皿	15.7	1.5	13.2	細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	内面に赤色顔料？	
469	土・杯	11.3	2.4	7.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	金雲母を含む
470	土・小皿	12.0	2.0	7.9	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
471	土・杯	12.8	3.5	7.4	細・普	良好	淡橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
472	土・高台皿			9.4	微・普	良好	橙	ナデ	不明		金雲母を含む
473	土・椀				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
474	土・椀	15.4	2.5	8.8	微・普	良好	灰白・鈍い橙	ナデ	ナデ		
475	土・椀	14.8	5.2	7.2	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
476	黒A・椀	15.7	5.0	6.7	細・普	良好	淡橙	ナデ	ミガキ		
477	黒A・椀	17.2			細・普	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
478	土・椀			7.5	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
479	黒A・椀			8.4	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	不明（ミガキ？）		
480	黒A・椀			6.7	微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	不明		
481	黒A・椀			8.2	中・普	良好	鈍黄橙，褐灰	ナデ	ミガキ		
482	黒B・杯			8.4	精緻	良好	黒	ナデ・ミガキ	ナデ		
483	土・蛸壺				細・普	良好	浅黄，鈍黄橙	ナデ	ナデ		金雲母，角閃石
484	土・蛸壺				中・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		金雲母を含む

第160図　C区ＳＤ09出土遺物（19）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
485	土・土鍋	38.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ハケ目→ナデ		
486	土・土鍋	25.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ハケ目・ナデ		金雲母を含む
487	土・甑	31.8			中・普	良好	灰黄褐	ハケ目・板ナデ	ナデ		
488	土・甑				中・普	良好	明褐	ハケ目・ナデ	板ナデ		
489	土・土釜	29.2			中・普	良好	灰黄・黄灰	ハケ目・ナデ	ナデ		
490	土・土釜				微・普	良好	オリーブ黒	ナデ	ナデ		
491	土・甑			30.8	中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目		
492	土・甕				粗・普	良好	浅黄橙・黒	ナデ	ナデ		
493	土・甕				中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		

第161図　C区ＳＤ09出土遺物（20）（1／4）



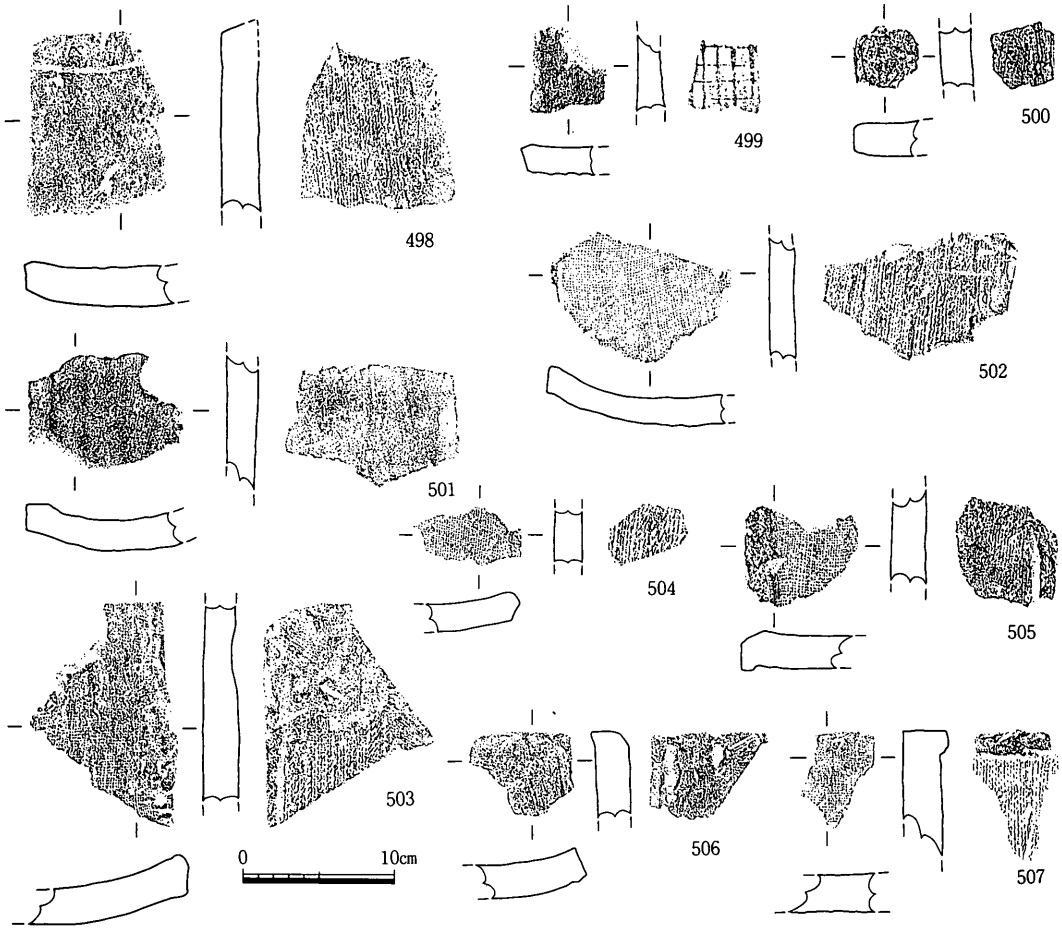
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
494	土・竈				粗・普	良好	にぶい褐～橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
495	土・竈				中・普	良好	鈍い黄褐・黒	ナデ	ハケ目・ナデ		
496	土・竈				粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
497	土・竈				粗・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ		

第162図　C区ＳＤ09出土遺物（21）（1／4）

であったということが考えられる。

432～615は支流(c)出土遺物である。上・中・下の３層に分けて取りあげた。上層は茶色系の粘質土，中層は灰色系の粘土と細砂の互層，下層は灰色系の中砂である。

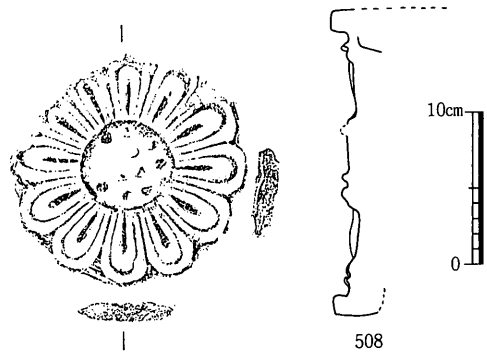
432～516は上層出土遺物である。432～460は須恵器である。432は深めの杯である。437は杯に含めたが胴が現存部最上端で直角に内傾する。胴の浅い壷になる可能性もある。



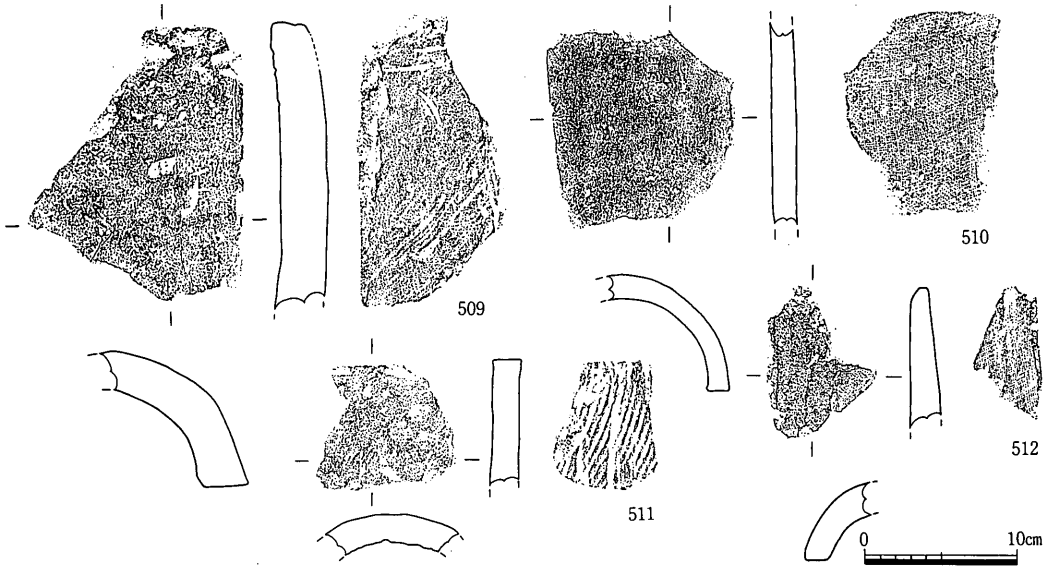
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
498	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	7	17	粗・普	灰黄	不良	布がはずれないように紐を巻く	12.0
499	平瓦	2.0	格子目叩き	布目圧痕	7	-	中・普	灰白～褐灰白	良好	正格子	5.5
500	平瓦	2.3	ケズリ	ケズリ	7	-	中・普	灰白	良好		3.6
501	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕→ナデ	6	-	粗・普	浅黄	良好		14.0
502	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕	7	-	中・普	灰白	良好		7.7
503	平瓦	2.6	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	7	-	中・普	浅黄橙	良好		15.0
504	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕	5	-	中・普	明褐	良好	凹面の布目が側面にまで及ぶ	6.3
505	平瓦	2.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	3	-	粗・普	灰	良好	叩きが強く縄目が深くくい込む	7.6
506	平瓦	2.3	布目圧痕→ナデ	板ナデ	1	18	中・普	灰	良好		5.6
507	平瓦	2.9	縄目叩き	布目圧痕	-	16	粗・普	灰白	良好	叩きが強く縄目が深くくい込む	8.8

第163図　C区ＳＤ09出土遺物（22）（1／5）

440は口縁部のみ黒くくすむ。重ね焼きの痕跡と考えられる。443は内外面ともナデ仕上げである。内面には自然釉がかかっている。453は斜め上にむいた穿孔が１ヵ所ついた瓶形の水注である。 注ぎ口下半は少し突出する。454は細く長い頸がつくと

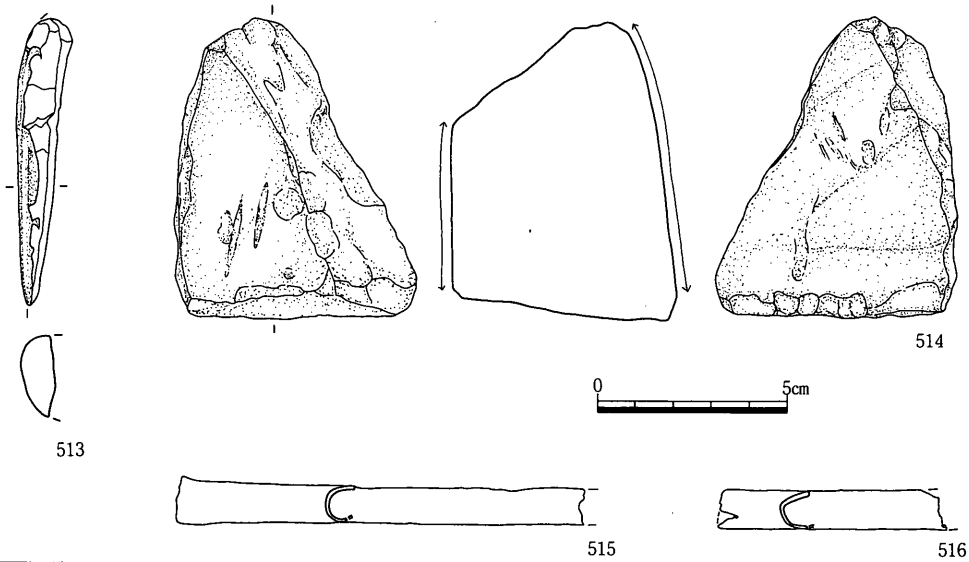


第164図　C区ＳＤ09出土遺物（23）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
509	丸瓦	3.1	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕	12	16	粗・普	灰白	良好	凹面に糸切り痕	18.3
510	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	11	-	中・普	灰黄	良好	凹面に糸切り痕	13.0
511	丸瓦	1.9	叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	-	16	中・普	浅黄橙	良好		8.0
512	丸瓦	2.1	ナデ・ケズリ	布目圧痕・ケズリ	15	16	中・普	灰	良好		9.3

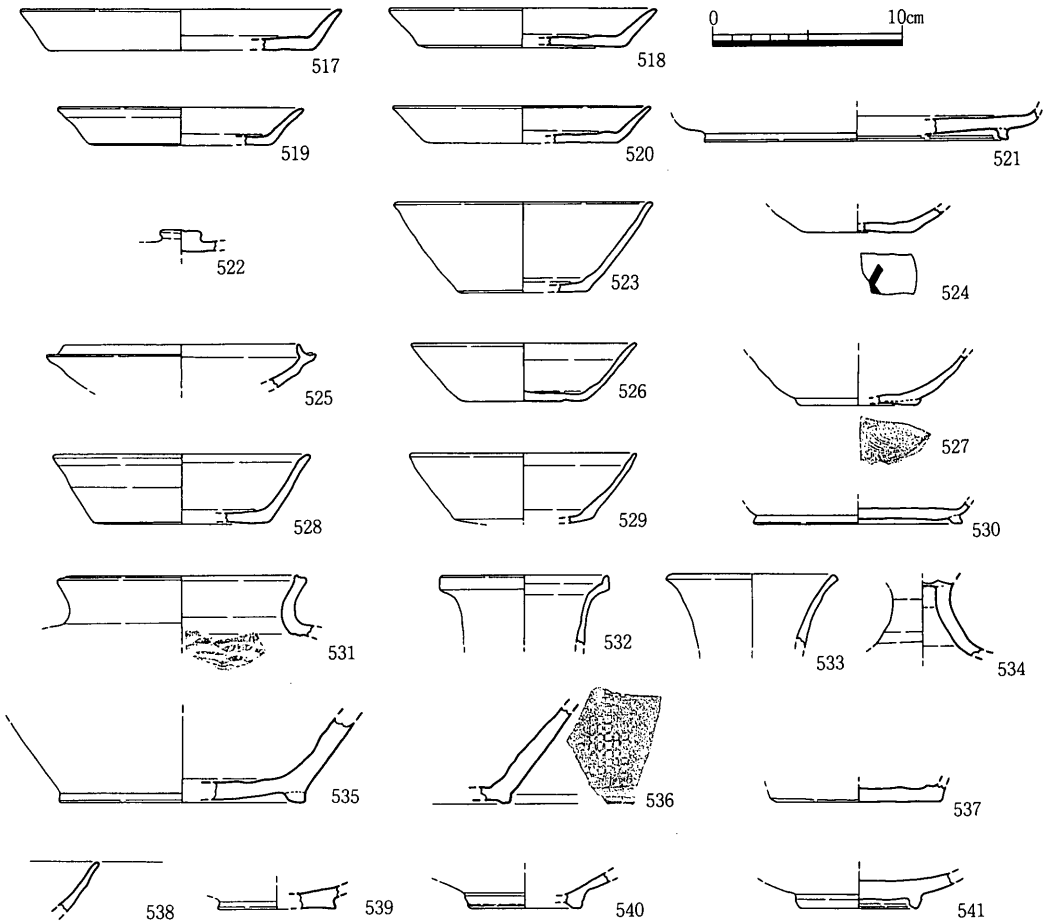
第165図　C区ＳＤ09出土遺物（24）（1／5）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
513	太型蛤刃磨製石斧	7.6	1.2	2.1	26	結晶片岩		
514	砥石	7.9	6.3	5.9	355	砂岩		

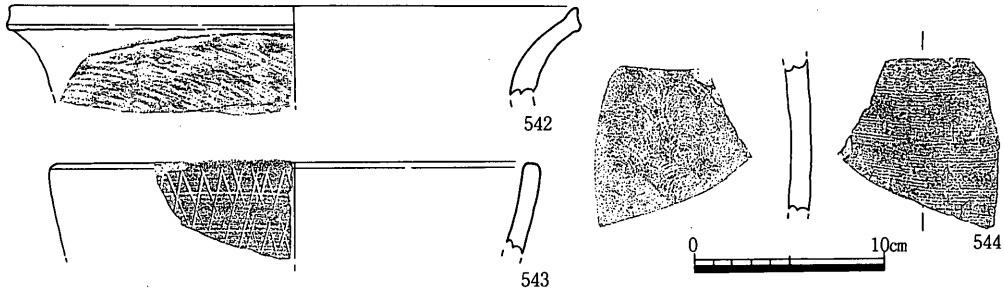
遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
515	鉄	管状鉄製品	10.7	1.2	0.1	7.5	板の長短各一辺は原形をとどめている	
516	鉄	管状鉄製品	6.0	1.0	0.1	4.2	1と同一個体	

第166図　C区ＳＤ09出土遺物（25）（1／2）



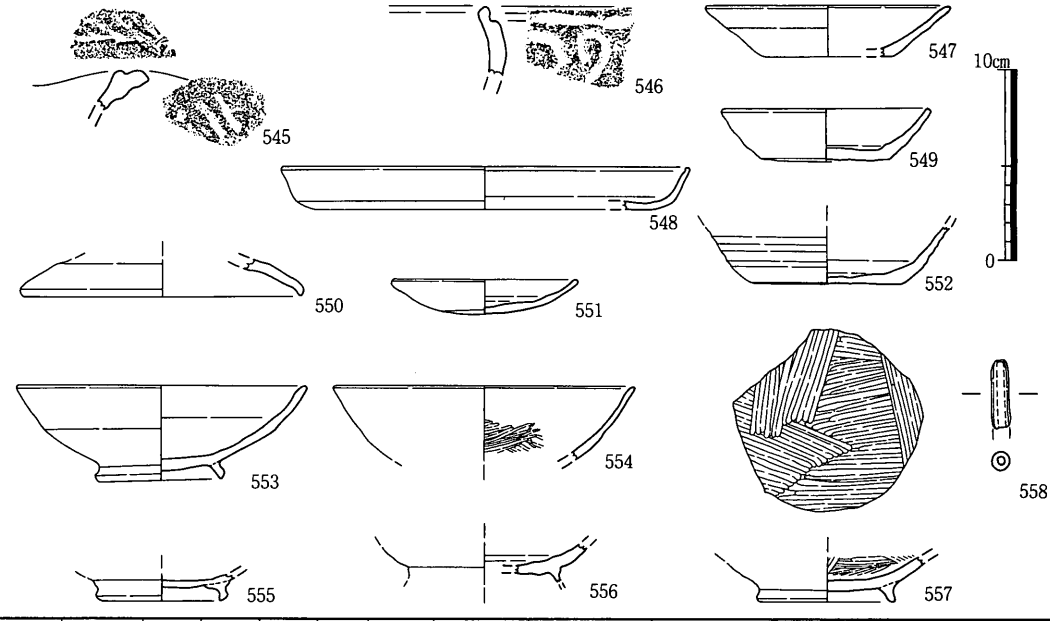
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
517	須・皿	17.0	2.1	14.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
518	須・皿	14.2	2.0	11.0	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
519	須・皿	13.0	1.9	9.7	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
520	須・皿	13.6	1.8	10.2	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
521	須・高台皿			16.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
522	須・杯蓋				中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
523	須・杯	13.7	4.7	6.5	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
524	須・杯			8.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書（字は不明）
525	須・杯身	14.2			微・普	不良	灰，鈍い赤褐	ナデ	ナデ		
526	須・杯	11.9	3.1	6.8	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
527	須・杯			6.0	精緻	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ	糸切り	東播系？
528	須・杯	13.6	3.7	9.2	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
529	須・杯	12.0		7.3	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
530	須・高台杯			11.0	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
531	須・壺	13.2			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ・同心円文	同心円の叩き	
532	須・壺	8.8			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
533	須・壺	9.0			微・普	良好	黒，灰	ナデ	ナデ		
534	須・高杯				細・普	不良	黄灰	ナデ	ナデ		胎土は淡黄
535	須・壺			13.0	細・普	良好	オリーブ黒	ナデ	ナデ	内面に灰かぶり	
536	須・甕				微・普	良好	灰	ナデ・叩き	ナデ		
537	須・壺			8.7	細・普	良好	灰	ケズリ	ナデ		胎土は赤褐
538	緑・椀				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	緑釉	須恵質
539	緑・椀			6.2	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	緑釉	
540	緑・椀			6.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	内外面に緑釉	軟質，京都産
541	緑・椀			6.3	微・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	ケズリ出し高台，緑釉	須恵質

第167図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（26）（1／4）



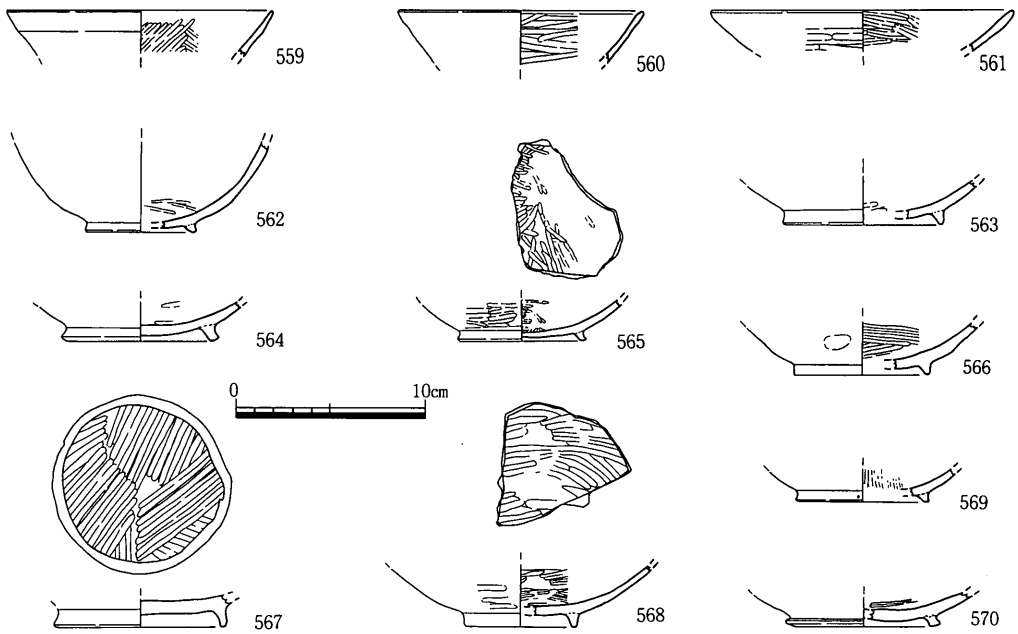
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
542	須・甕	30.2			細・普	良好	灰	叩き→ナデ	ナデ		
543	須・鉢	26.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		ヘラ記号
544	須・甕				微・普	良好	灰白	叩き	同心円文		

第168図　C区ＳＤ09出土遺物（27）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
545	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐，鈍黄橙	不明	不明		
546	縄・浅鉢				粗・多	良好	浅黄橙	縄文	ナデ		
547	土・杯	12.9	2.6	6.8	中・普	良好	鈍黄橙～褐灰	ナデ	ナデ		金雲母を含む
548	土・皿	21.6	2.3	18.0	中・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ	内外に赤色顔料	
549	土・杯	11.0	2.7	6.8	微・普	良好	浅黄・鈍い橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	
550	土・杯蓋	15.0			中・普	良好	褐灰・鈍黄褐	ナデ	ナデ		焼きの甘イ須恵器？
551	土・小皿	9.8	1.8	4.8	粗・少	良好	灰黄	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
552	土・杯			8.0	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	胎土暗灰，金雲母
553	土・椀	15.3	5.0	6.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
554	土・椀	15.9			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ・ミガキ		
555	土・椀			7.0	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
556	土・椀				微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	内外面に薄い赤色顔料	
557	土・椀			7.2	微・普	良好	浅黄・黒	ナデ	ミガキ		
558	土・土錘	短軸3.6	長軸1.0		細・普	良好	灰褐	ナデ	不明		重量4.0g

第169図　C区ＳＤ09出土遺物（28）（1／4）



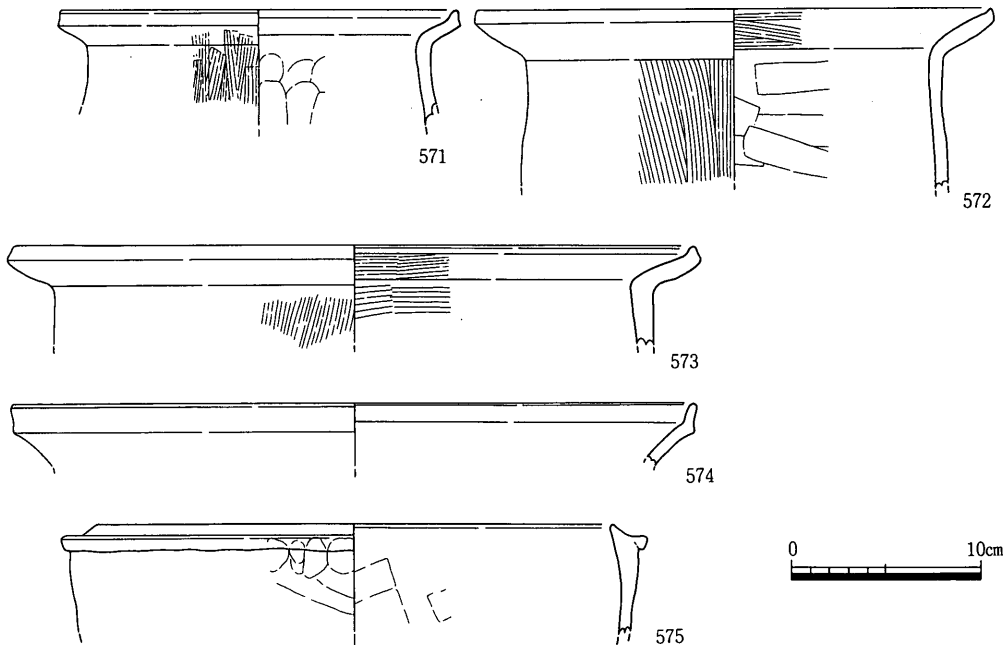
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
559	黒A・椀	14.0			微・普	良好	灰黄～黒，黒	ナデ	ミガキ		
560	黒A・椀	13.0			中・普	良好	赤褐，黒褐	ナデ	ミガキ	外面に薄い赤色顔料	
561	黒A・椀	16.0			細・普	良好	浅黄橙，黒	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	外面に薄い赤色顔料	金雲母を含む
562	黒A・椀			5.8	微・普	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
563	黒A・椀			8.4	精緻	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ミガキ		
564	黒A・椀			8.3	中・普	良好	褐灰，黒	ナデ	ミガキ		
565	黒A・椀			6.8	精緻	良好	灰黄，黒	ミガキ	ナデ	ヘラ切り	
566	黒A・椀			7.0	中・普	良好	明赤褐，黒	ナデ	ミガキ	外面に赤色顔料	
567	黒A・椀			9.0	中・普	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
568	黒A・椀			6.0	微・普	良好	赤褐，黒	ナデ・ミガキ	ミガキ	外面に赤色顔料	
569	黒A・椀			7.0	細・普	良好	にぶい橙，黒	ナデ	ミガキ	外面に赤色顔料	
570	黒B・椀			8.1	微・普	良好	黒	ナデ	ミガキ		

第170図　C区SD09出土遺物（29）（1／4）

思われる。456の外面は自然釉がたれている。457は内面に同心円の叩き目が残る。459も内面に同心円の叩き目が残る。小片のため傾きは不確定である。460の硯は脚部の6ヵ所に3個ずつの円形の穴があけられている。

461・462は青磁である。461は底部の器肉が厚く内面には文様はない。462は内面に草花文らしきものを描いている。

463～497は土師器である。463は口縁内面を強く横ナデする。464は口縁部内面に沈線がめぐる。464～466・468は内外面とも赤色顔料をぬっている。471は底部から杯部への立ち上がりが角ばっており，同時期の須恵器杯の影響を受けていると思われる。472は全体に厚く，小さな高台のついた大きな皿と考えた。473は杯部の浅い椀であろう。482は内外面ともナデ仕上げだが，外面底近くにヘラミガキ痕らしきものが見える。483・484は片面はなだらかにふくらむがもう片面は紐通しの穴の下から一気に横にふくらむ点が共通してい

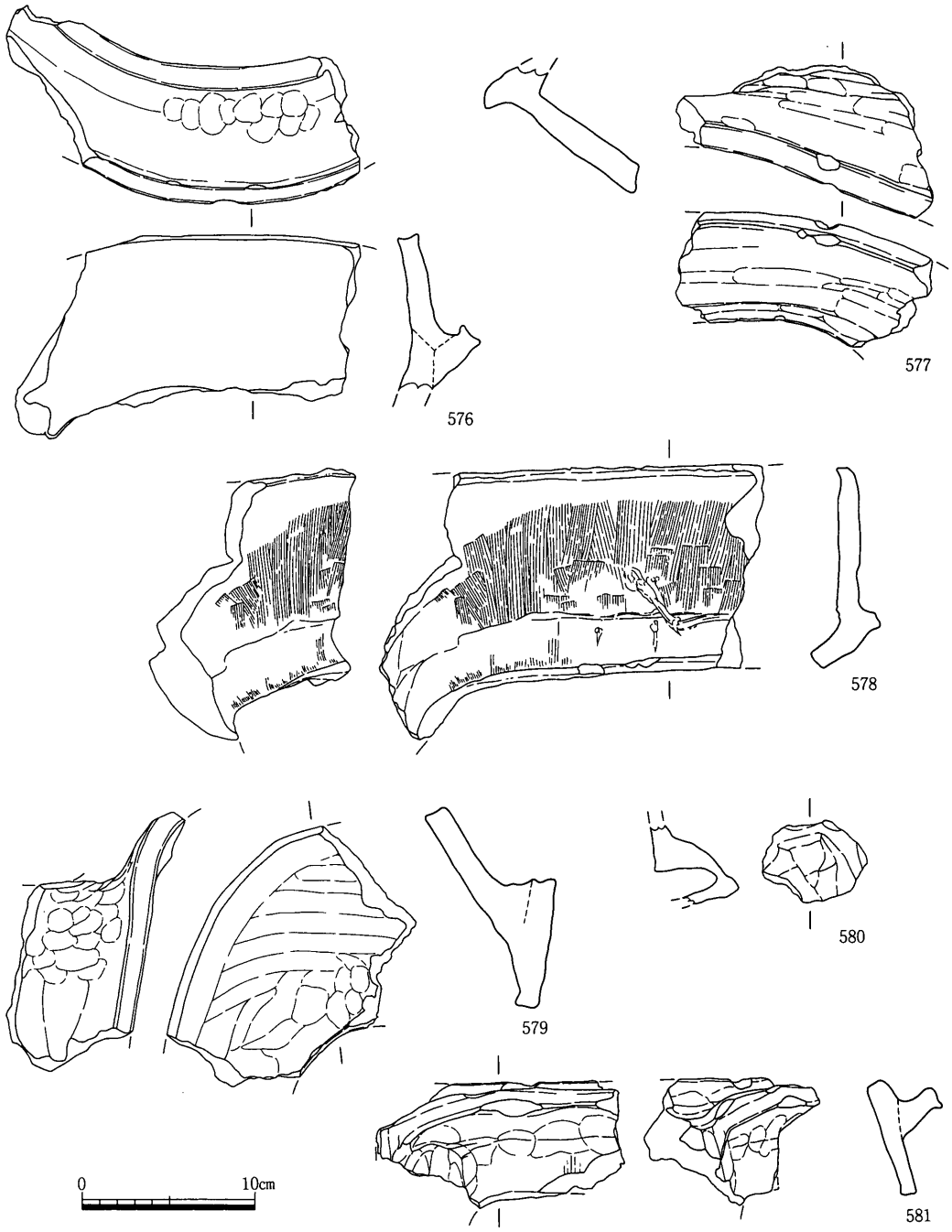


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
571	土・土鍋	21.0			細・普	良好	赤橙，黒褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
572	土・土鍋	27.3			粗・普	良好	赤褐，鈍い黄	ナデ・ハケ目	ハケ目・板ナデ		
573	土・土鍋	35.7			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		
574	土・土鍋	36.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
575	土・土釜	31.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		

第171図　C区ＳＤ09出土遺物（30）（1／4）

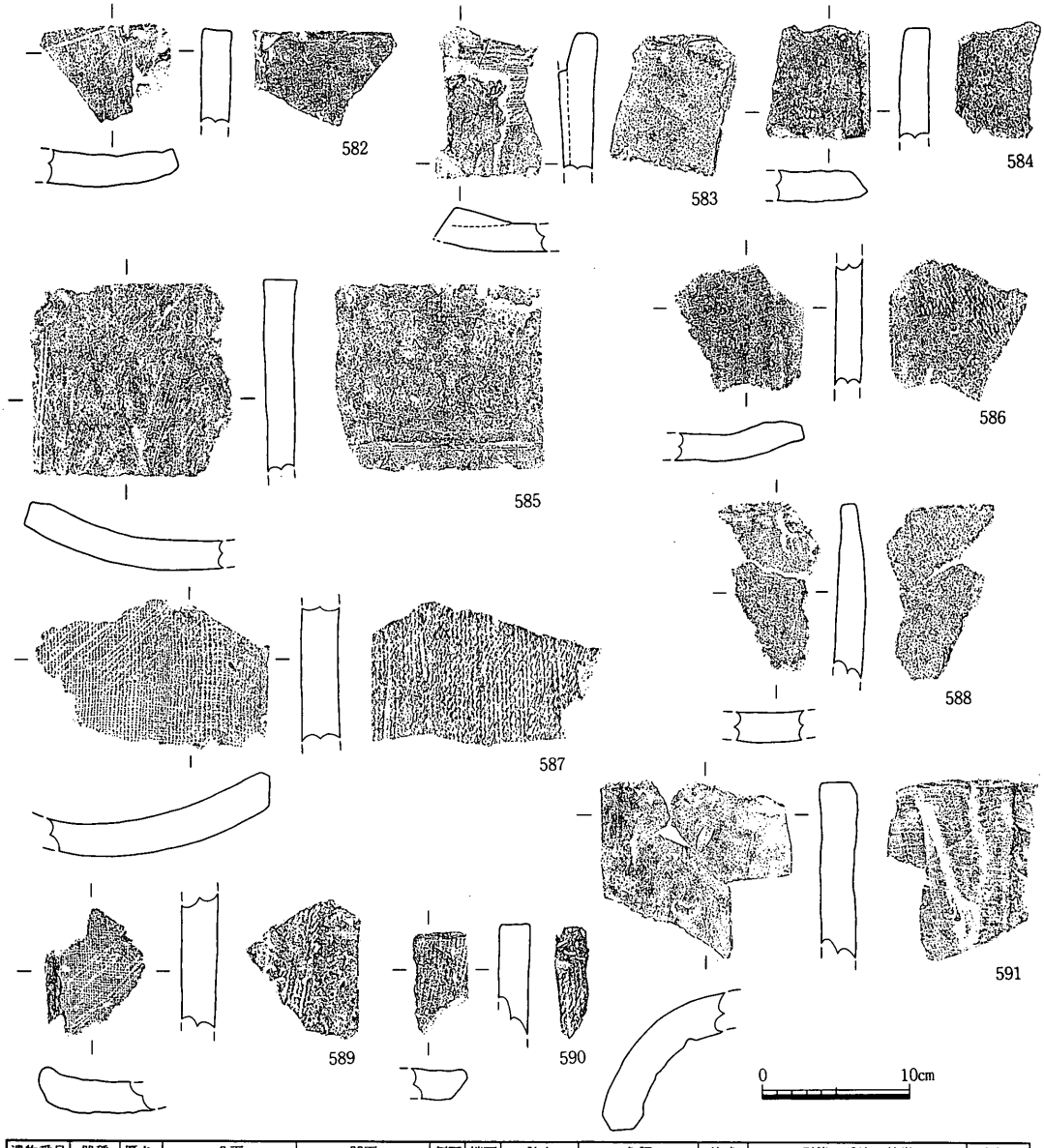
る。485・486は長胴形の鍋である。487・488は甑であろう。487は口縁部が鋭く内側に突出する。調整は粗い。488は三角形の両側から指を差し込んでつまめる把手がついている。調整は粗い。489は口縁内面を強く横ナデする。490は鍔の下を強く横ナデしている。491は甑の底の部分であろう。492・493は甕か甑の把手であろう。494～497は竈の焚き口の上あるいは横の鍔の部分である。

498～512は瓦である。半数以上の平瓦の凸面に叩き目が残る。叩き目は面に平行につけられる。498～502は側面の凹面側を削って面取りしている。498の凹面には紐の痕が残る。499は凸面に正格子の叩き目痕が残る。503・504は側面が丸みをもつ。504は布目が側面にまで及んでいる。505・507は凸面に叩き板の上端や横端が明瞭に残るほど強く叩かれている。508は単弁蓮華文軒丸瓦である。葉数は12，中房には４＋８の蓮子を置く。外縁は素文の直立縁である。丸瓦との接合には裏面上端に溝をつけそこに丸瓦をはめこんでいる。接合部の周辺には接着用の粘土はあまりつけられていない。509～512は丸瓦である。凸面はすべてナデられている。509・510は凹面に粘土板を切り出す際についた糸切り痕がついている。また509・511は凸面の縄目叩きの痕がナデ消されずに残る。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
576	土・甕				中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
577	土・甕				粗・普	良好	橙～褐灰	ナデ	ナデ		
578	土・甕	30.0			粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目		
579	土・甕				粗・普	良好	褐	ナデ	ナデ		
580	土・甕				粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
581	土・甕	21.4			中・普	良好	橙～にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

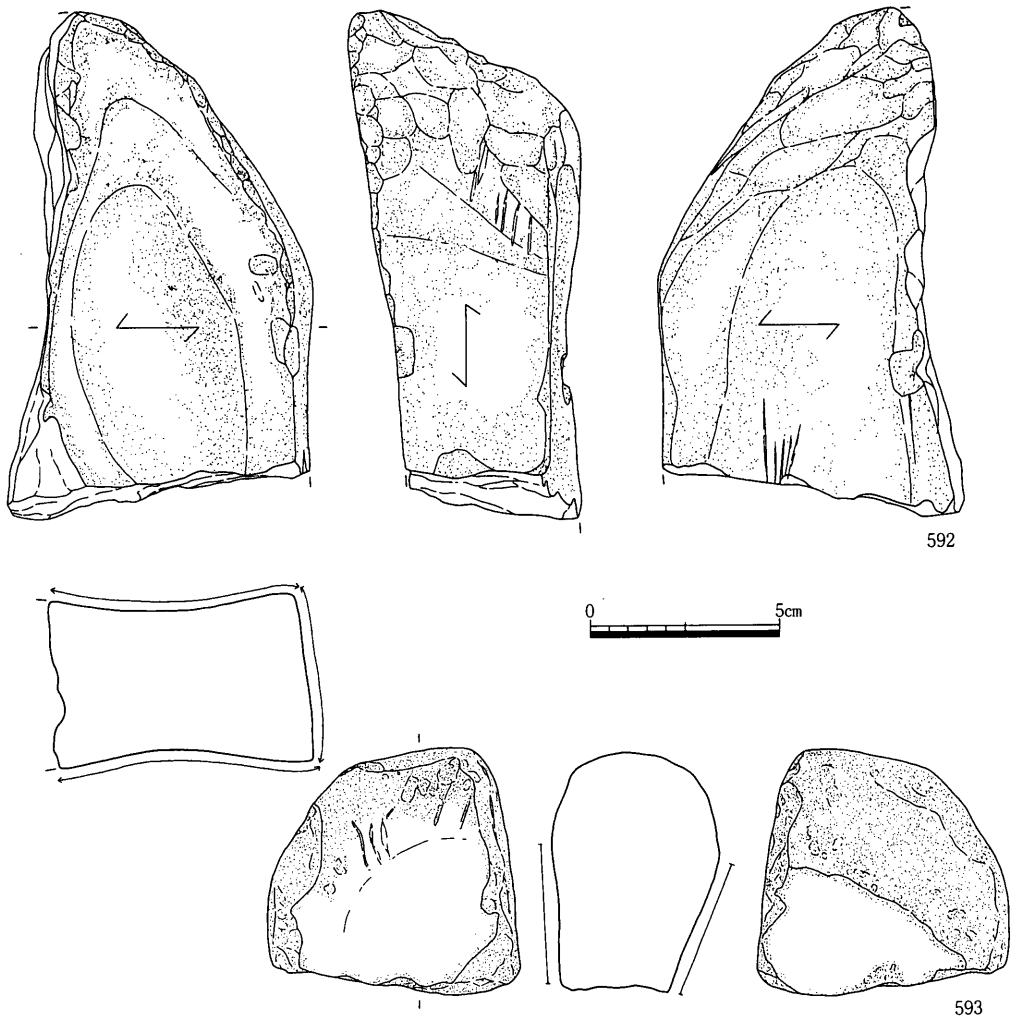
第172図　C区ＳＤ09出土遺物（31）（1／4）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
582	平瓦	2.3	板ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	中・普	灰白	良好		6.4
583	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕→ケズリ	1	16	中・普	暗青灰	良好	粘土のつなぎ目	9.0
584	平瓦	2.0	板ナデ	板ナデ	6	16	粗・普	灰	良好		7.2
585	平瓦	2.3	ナデ・板ナデ	布目圧痕→板ナデ	8	16	中・普	灰白	良好		13.4
586	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	8	-	中・普	灰白	良好	一枚作りが断面から顕著	8.5
587	平瓦	2.6	縄目叩き	布目圧痕，板ナデ	7	-	細・普	灰白	良好	凹面に糸切り痕	15.5
588	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	-	16	粗・普	灰白	良好		11.7
589	平瓦	2.4	板ﾅﾃﾞ・縄目叩→ナデ	布目圧痕→ミガキ	5	-	中・普	灰白～灰	良好	一枚作りが断面から顕著	9.3
590	平瓦	2.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	5	16	粗・普	暗灰	良好	胎土は灰白でいぶしている	8.0
591	丸瓦	2.5	板ナデ	布目圧痕・ナデ	15	16	粗・普	灰	良好	胎土は橙	11.8

第173図　C区ＳＤ09出土遺物（32）（1／5）

513・514は石器である。513は太型蛤刃石斧の身部の一部と考えられる。514は２面を研ぎ面として使用している。

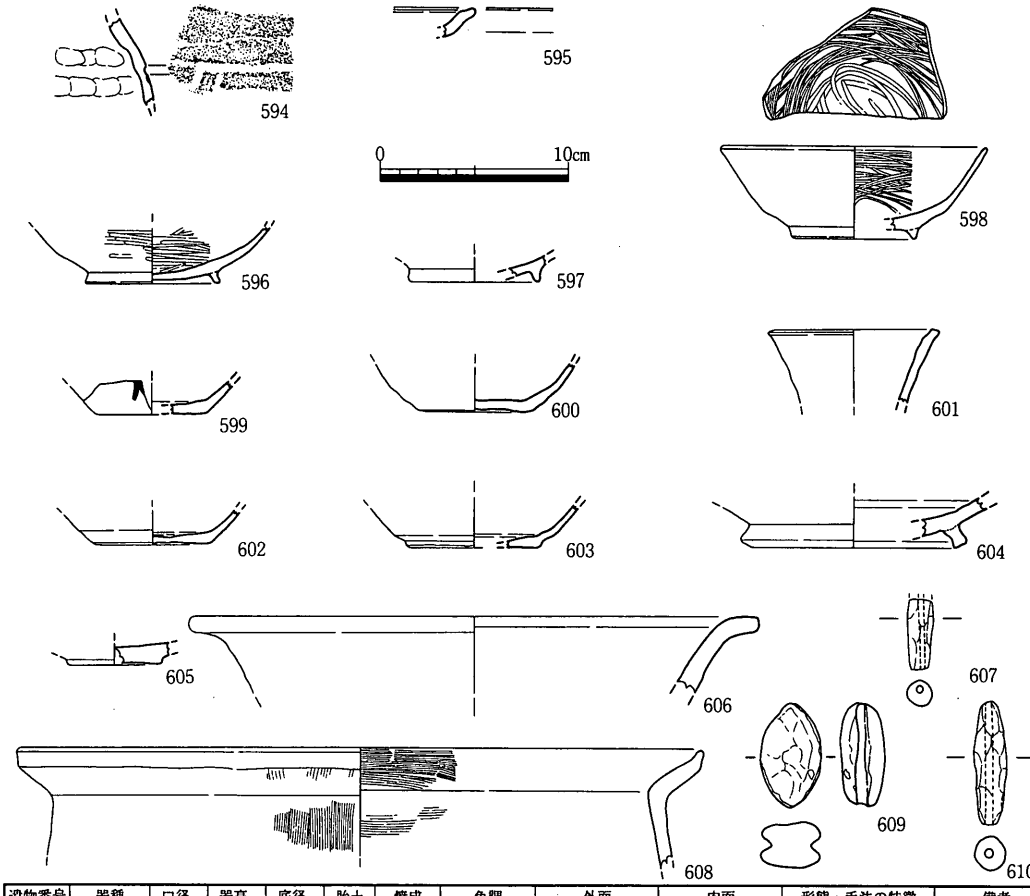


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
592	砥石	12.9	7.9	4.4	596	砂岩		
593	石皿	6.5	6.6	4.4	273	砂岩		

第174図　C区ＳＤ09出土遺物（33）（1／2）

515・516は鉄器である。515と516は薄い鉄板を丸く折り曲げている。木製品等の縁をはさむものとも考えられるが，折り曲げた片方は欠けているため，本来は筒状をしていた可能性もある。

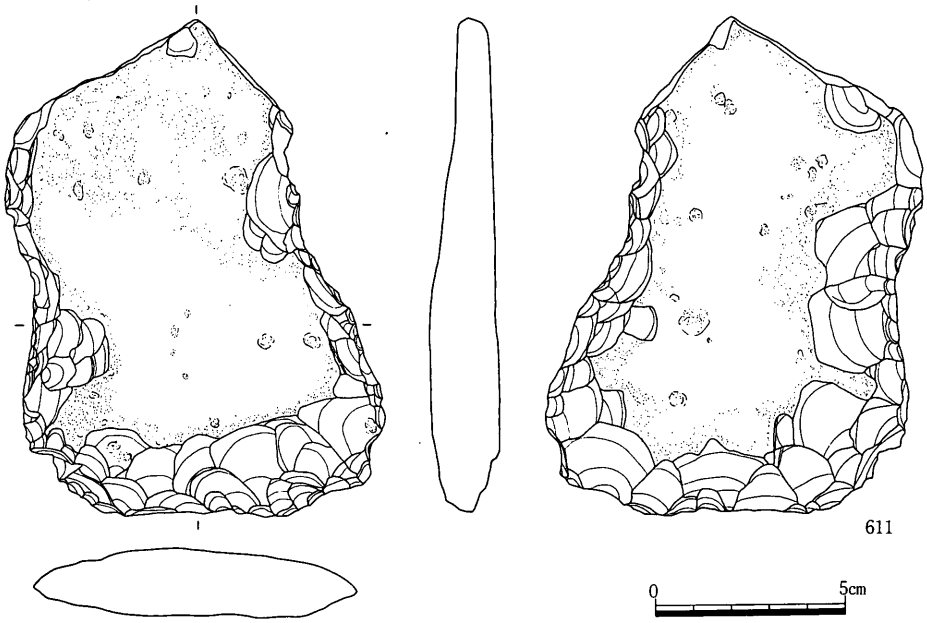
517～593は中層出土遺物である。517～537・542～544は須恵器である。517～519は体部がやや外に湾曲し，520は直線的に外反している。521は径が大きいため，大形の皿になると思われる。522は杯蓋のつまみである。525は６世紀末から７世紀前半頃の杯身である。523・524・526～529は杯で，527のみ底部糸切り，他はヘラ切りである。524底部外面には



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
594	縄・浅鉢				中・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ	沈線	
595	土・皿				粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
596	黒A・椀			7.2	微・普	良好	灰黄，黒	ミガキ・ナデ	ミガキ		
597	黒A・椀			7.0	精緻	良好	灰白，黒	ナデ	不明		
598	黒A・椀	13.9	4.6	6.4	粗・普	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
599	須・杯			5.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書
600	須・杯			6.1	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
601	須・壺	9.0			微・普	良好	灰，灰褐	ナデ	ナデ		
602	須・杯			6.0	微・普	良好	灰～暗灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
603	須・杯			6.8	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
604	須・壺			11.9	微・普	良好	灰	ナデ	板ナデ		
605	緑・椀			5.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	緑灰の釉	硬質
606	須・甕	30.1			精緻	良好	灰～灰白	ナデ	ナデ		胎土はにぶい赤褐
607	土・土錘	短軸1.4			微・普	良好	灰白～浅黄橙	ナデ	ナデ		重量6.6g
608	土・土鍋	36.2			中・普	良好	灰黄褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		
609	土・土錘	短軸1.8	長軸6.5		中・普	良好	灰～黒	ナデ	不明		重量39.3g
610	土・土錘	短軸6.5	長軸1.8		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	不明		重量20.6g

第175図　C区SD09出土遺物（34）（1／4）

墨書が残る。535は底部内面の中心より半径4.5cmの範囲まで灰をかぶり自然釉がついている。壷のくびれ部の半径を表しているものと考えられる。536は外面に叩きが残るため甕にした。542は口縁直下まで外面に平行叩きの痕が残る。543は外面に斜格子と横方向の沈線の文様を描く。湾曲の方向から鉢としたが，器台の可能性も残る。544は外面に平行叩



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
611	石斧	12.8	9.4	1.8	267	斜方輝石安山岩		

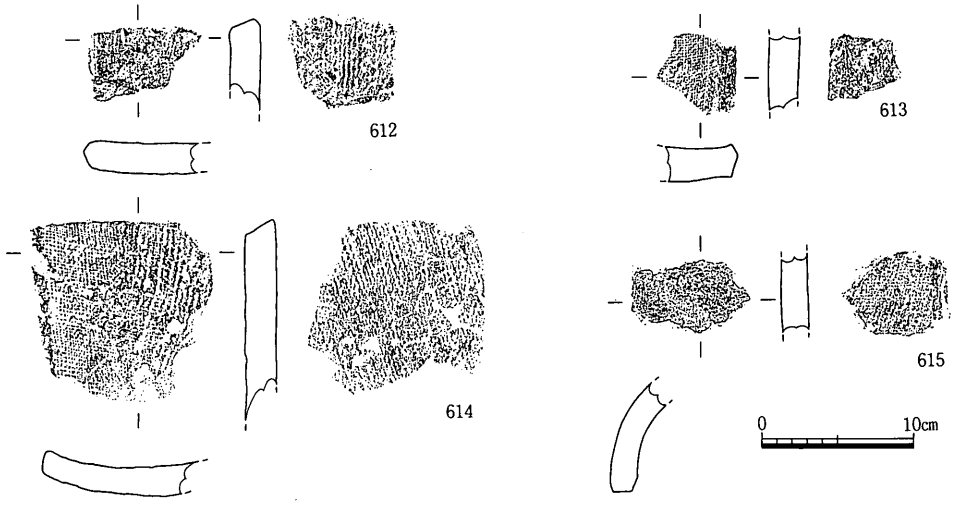
第176図　C区ＳＤ09出土遺物（35）（1／2）

き，内面に車輪文の叩き痕が残る。

538～541は緑釉陶器である。539～541はいずれも削りだし高台であるが，高台の内面の削り方はさまざまである。また，３点とも底部外面を含めた全面に釉をぬっている。

545・546は縄文時代後期の土器である。545は口縁部が外側に肥厚し，上面が水平になり沈線が１本はいる。外面にも斜めの沈線文が描かれている。546は外面口縁直下に沈線がめぐり，さらにその下に連続の渦巻き文が描かれる。

547～581は土師器である。550は小形の杯蓋である。焼きの甘い須恵器の可能性もある。551は全面に赤色顔料を塗っている。553～557は椀である。内面にはヘラミガキをかけるものとなでだけですませるものがある。556は杯部内外面に薄い赤色顔料を塗っている。559～570の黒色土器の場合，すべて内面はヘラミガキをかけ，その半数近くが外面にも同様の調整を行なう。559・560は体部が直線的に上に伸びる。561は浅椀形である。560・561・565～567・569は杯部外面に薄い赤色顔料を塗っている。571～573は長胴形である。574は鉢の可能性がある。 575は15世紀ごろまで下る土釜である。 溝上面の包含層からの混ざりこみであろう。576～579・581は竈の焚き口の上面である。580は内面から突出部に向け



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
612	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	6	17	中・普	灰白	良好		6.0
613	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	6	-	中・普	灰白	良好		4.7
614	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕	1	17	中・普	灰黄褐	良好	凹面に糸切痕，側面に布目圧痕	13.0
615	丸瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰	良好		7.5

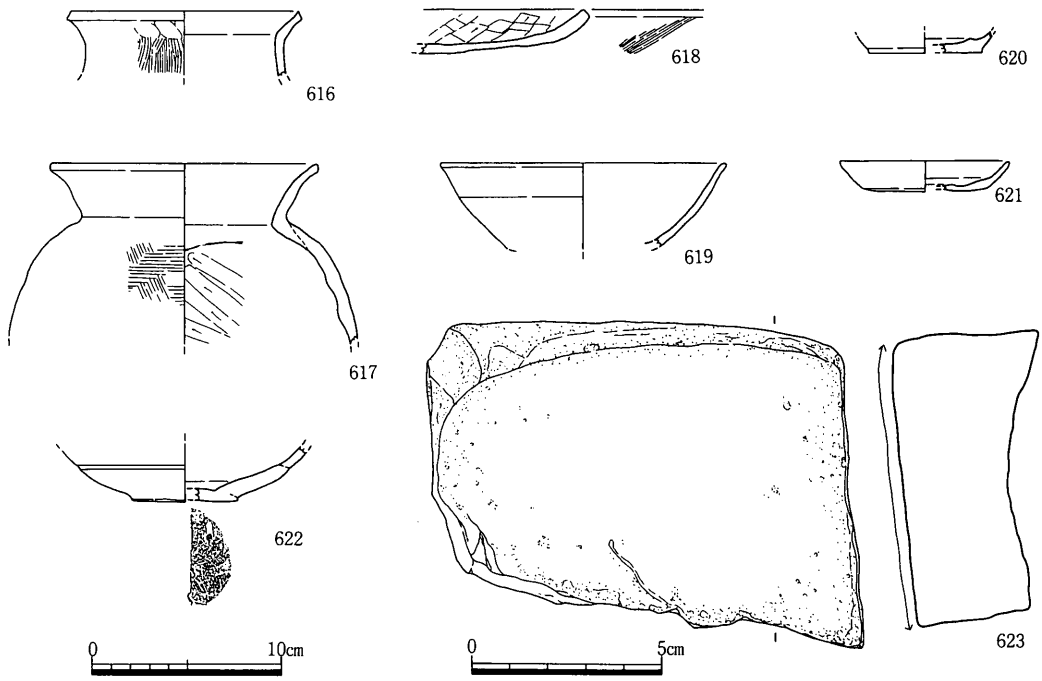
第177図　C区ＳＤ09出土遺物（36）（1／5）

て中空となっているため，竈の把手であろうと判断した。

582～591は瓦である。582・583は側面を直角に整えている。583は粘土板を切り取るときに糸があらぬ方向にいったのか粘土が少なくて足したのか凹面に粘土塊がついている。584～587は側面の凹面側あるいは凸面側を削って面取りしている。586の湾曲具合は１枚作りにしかありえないものである。589・590は凹面と側面の接する部分が凹面側に膨らんでいる。成形台からはみ出しかけた部分であろう。さらに590は布目が側面までついている。591は粘土を丸めたためにできたしぼり痕のようなものが凹面にできている。

592・593は石器である。592は３面を研ぎ面として使用している。593は両面を磨り面として使用している。592・593とも使用面はかなりくぼんでおり，使い込んだものであることをうかがわせる。

594～615は下層出土遺物である。594は縄文時代後期の浅鉢の胴上半部である。破片上端から屈曲して斜め上に口縁が広がると考えられる。外面には左端でクランク状に１段下がる沈線と「Ｌ」の横棒がのびる沈線の組合わさった区画文が描かれる。「Ｌ」の横棒はそこでちょうど割れているため拓本では表されていない。彦先ＫＩ式期に相当すると思われる。595は内外面に赤色顔料を塗っている。596は外面に赤色顔料を塗っている。599は体部外面に墨書が残る。605は輪高台に削りだしている。高台を含めた全面に釉をかけて



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
616	弥・壺	12.4			粗・普	良好	淡黄	ハケ目	ナデ		
617	土・壺	14.0			粗・普	良好	鈍い黄橙・黒	板ナデ・ハケ目	ケズリ→ナデ		
618	土・高杯				粗・普	良好	明黄褐～黒褐	ナデ・ハケ目	ケズリ→板ナデ		
619	黒A・椀	15.0			微・普	良好	にぶい橙，黒	板ナデ	ナデ		
620	土・杯			6.0	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
621	土・小皿	9.0	1.6	6.7	微・普	良好	淡橙～淡赤橙	不明	不明		
622	須・椀			5.7	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	円盤状高台	

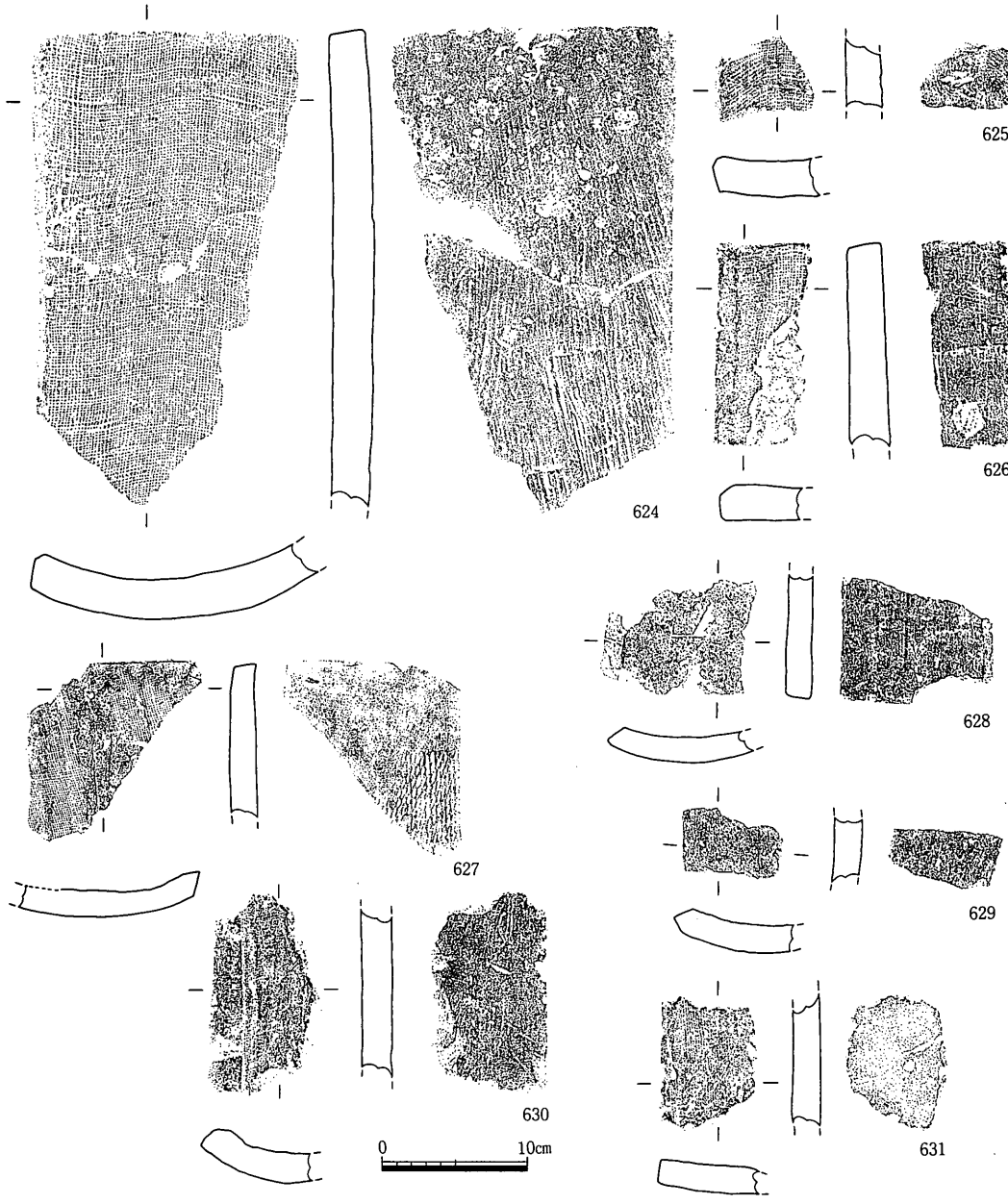
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
623	砥石	11.0	7.9	3.8	605	砂岩		

第178図　C区ＳＤ09出土遺物（37）（1／2，1／4）

いる。611は自然の平たい石の三方を両面から加工することによって石斧をつくりだしている。614は側面まで布目が及んでいる。

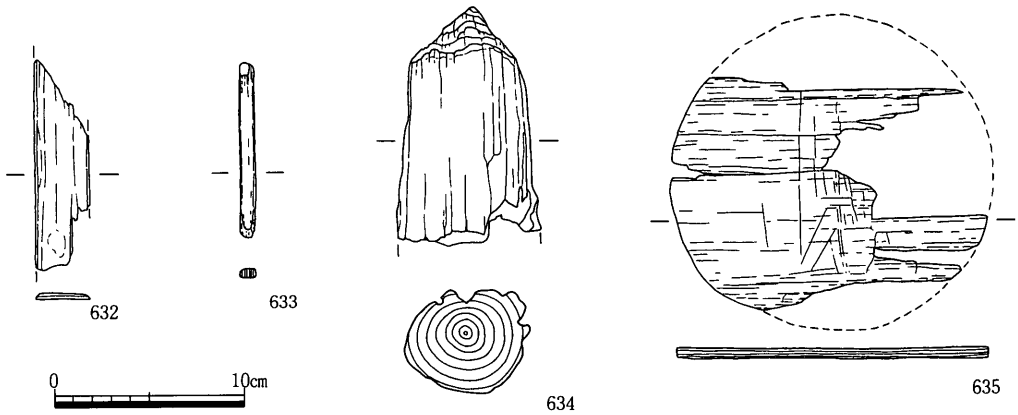
支流(c)の埋土は中層まで砂質であり，これを速い流れによる堆積のためと考えれば，溝の埋没自体に大きな時期幅を考えることはできない。3層に分けて取り上げた遺物がかならずしも時期差を反映したものとはならなかったのもこうしたことに起因する可能性はある。しかし，出土した遺物は10～12世紀という時期幅をもつ。また量的には少ないものの7・8世紀代にまでさかのぼるものも含まれる。これを溝が使われていた期間とするならば，その間は溝をさらえることもあり，最後に時期幅のある土器を混ぜながらＳＤ09は急速に埋没したと考えておきたい。

616～631は支流(d)・(e)出土遺物である。616は頸部が下に向かって広くなっている。617は古墳時代の壷であろう。618は土師器としたが内面はヘラケズリで暗文等はみられない。



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
624	平瓦	2.9	ハケ目	布目圧痕	2	17	粗・多	浅黄橙～暗褐	良好		33.1
625	平瓦	2.4	叩き→ケズリ→ナデ	布目圧痕→ナデ	7	-	粗・普	灰	良好		5.6
626	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	2	17	粗・普	灰白	良好		13.8
627	平瓦	1.8	叩き→板ナデ	布目圧痕→板ナデ	8	17	粗・普	灰白	良好		12.4
628	平瓦	1.8	ナデ	ナデ	6	17	粗・普	灰	良好		8.4
629	平瓦	1.9	ケズリ	板ナデ	6	-	粗・普	灰	良好		4.5
630	平瓦	2.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	2	-	粗・普	灰	良好		13.8
631	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	1	-	粗・多	灰白	良好		9.5

第179図　Ｃ区ＳＤ09出土遺物（38）（1／5）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
632	板材	11.0	2.8	0.3	板目		
633	用途不明品	9.0	0.8	0.5	柾目		
634	柱材or杭？	12.3	7.5	5.5	芯持		
635	曲物の底	16.3	11.8	0.5	板目		

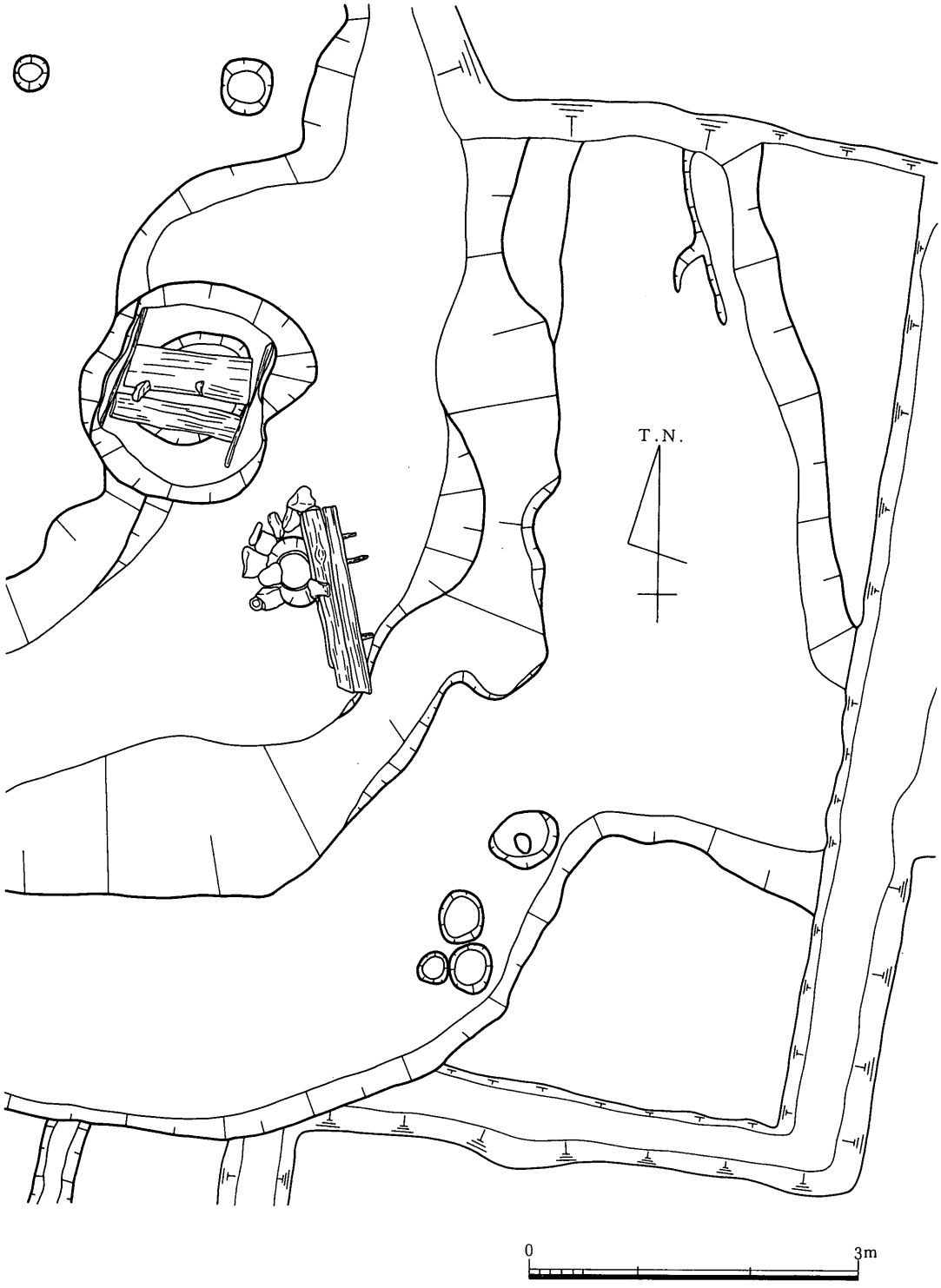
第180図　C区SD09出土遺物（39）（1／4）

620は外面最下部を強く横ナデしている。622は平高台の椀である。底部は糸切りされており他地域からの搬入品の可能性が高い。623は1面のみ研ぎ面として使用されている。裏面は割れている。

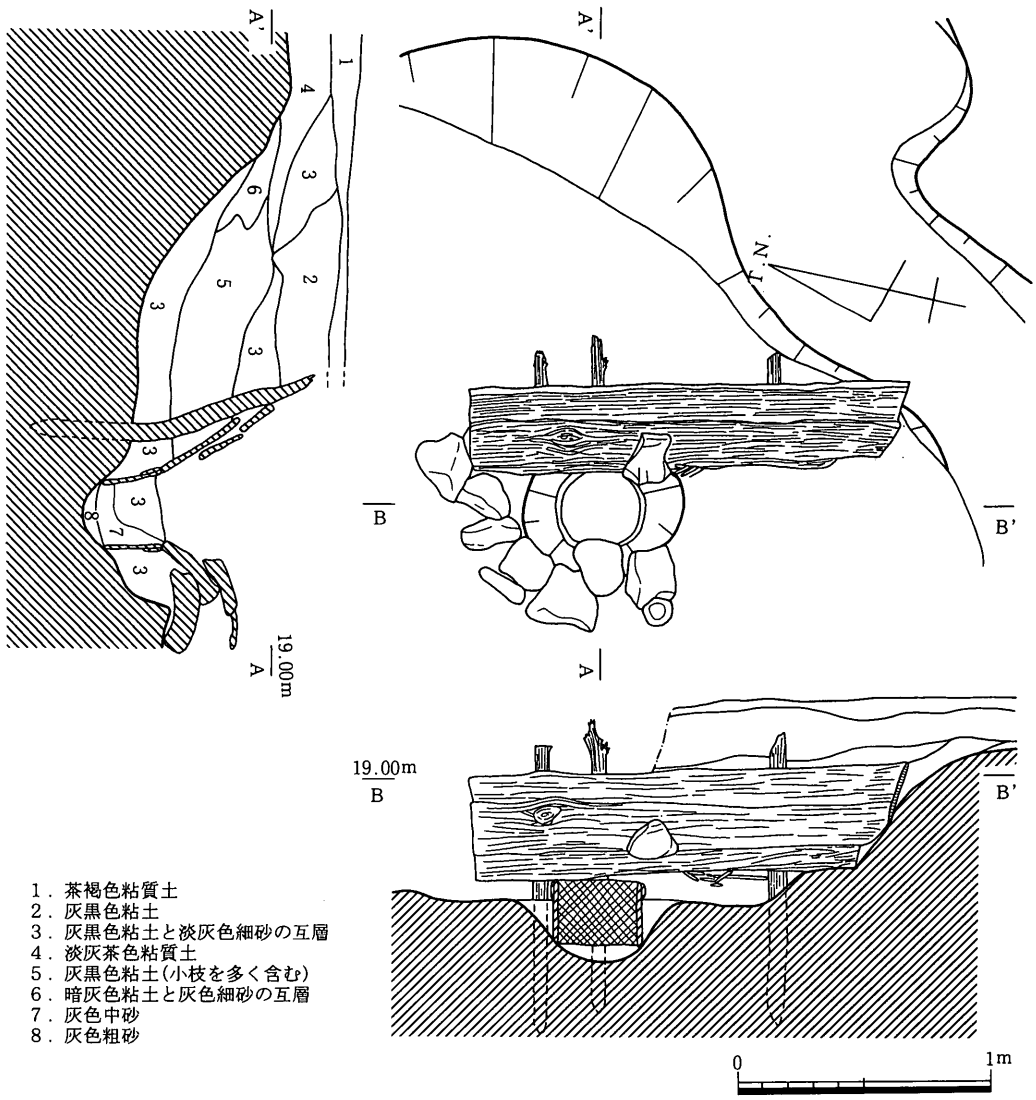
632～635は中・下層出土の木器である。632は両端が折れている。633は両端が焦げている。634は柱根の下端が腐らずに残ったものに似ている。635は円形の薄い板である。曲物の底などの部品であろう。

SD09はやや複雑な形を描くためいくつかの支流よりなるものとしてとらえた。それらは土層関係からは同時期に機能していたと考えた。

次に土層をみてみると幅や深さに差はあるものの支流(a)～(c)は基本的に上部に粘質土・下部に砂質土の堆積という点が共通している。ところが支流(d)・(e)は粘質土のみの堆積である。埋土は最終的な溝の埋没状態しか示さないものであるが，(d)・(e)が(a)～(c)に比して水の流れがあまりなかった可能性は高い。また溝底の深さに関しても(a)～(c)は深く(d)・(e)は浅い。両者の合流点では大きな段差ができている。つまり(a)～(c)と(d)・(e)は同じSD09という溝を構成しながらも違った意味合いをおびてくる。(a)～(c)は本当の意味での本流であり，北からC5区に流れこんできた溝はC5区内で直角に西に折れ，C2・C3区をぬけて掘られていた。一方(d)・(e)は支流であったがために(c)への合流地点がかならずしも(c)の屈曲点にそろえられなかったのであり，SE02の井筒の上におかれた横板で合流点がさ



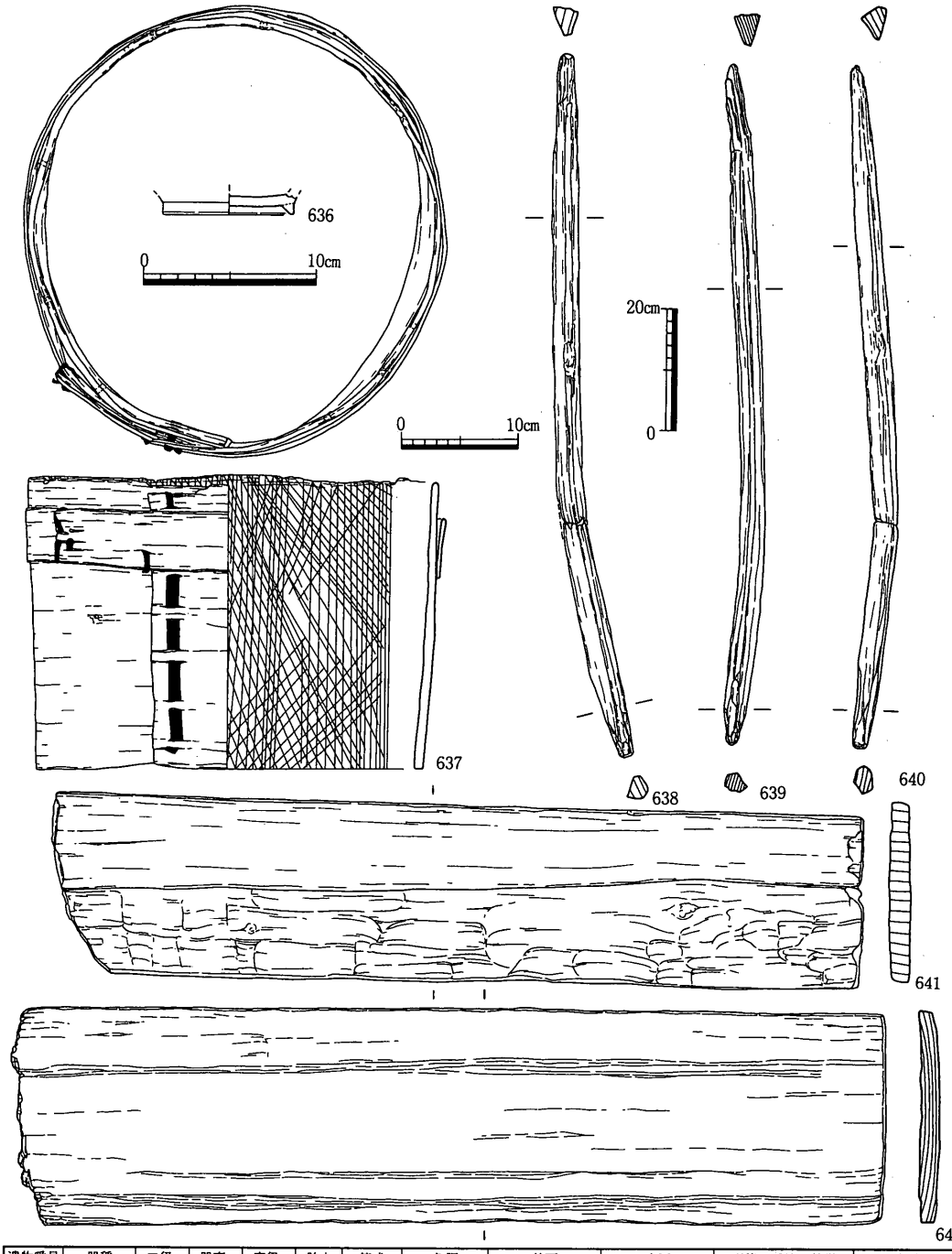
第181図　C区ＳＥ02・03平面図（1／60）



第182図　C区ＳＥ02平・断面図（1／30）

えぎられていたと考えられる。(d)・(e)は黄色粘質土の地面に浅く掘りこまれていることから湧水の可能性はなく，横板は雨水等をせきとめるためのものと考えておきたい。

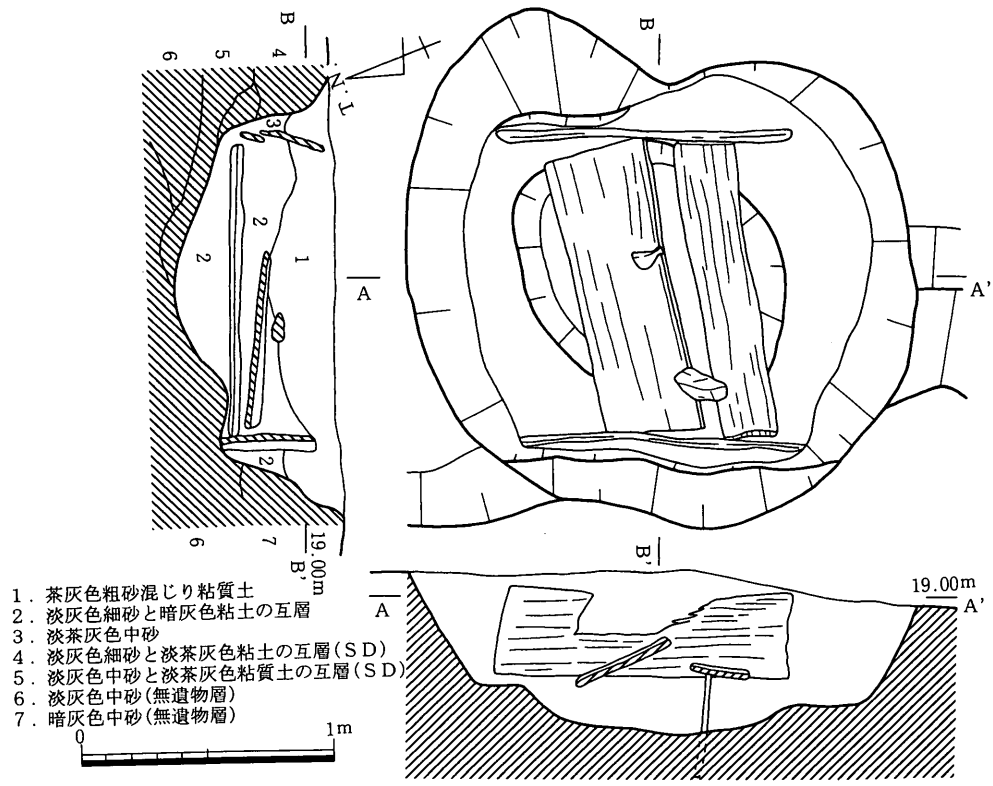
さらに出土遺物をみると縄文時代後期から15世紀ごろまでの時期幅がある。混入によるものをのぞくと量的には９～12世紀のものがおおいことからこの時期に機能していたと考えられるが，７・８世紀代のものもある程度含まれておりこの時期までさかのぼる可能性も残される。出土した遺物はほとんど支流(a)～(c)からのものであり，支流(d)・(e)からは少量しか出土していないことも前述の(a)～(c)と(d)・(e)の機能差を反映しているのであろう。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
636	須・高台杯			7.5	細・普	良好	暗青灰	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
637	曲物	24.8	径37.3	0.8			
638	杭	118.7	4.9	5.1	柾目		
639	杭	113.8	4.3	5.5	柾目		
640	杭	115.3	4.6	5.6	柾目		
641	井戸枠	150.2	36.5	3.3	板目		
642	井戸枠	176.5	43.9	4.3	柾目		

第183図　C区ＳＥ02出土遺物（1／4，1／6，1／12）



第184図　Ｃ区ＳＥ03平・断面図（1／30）

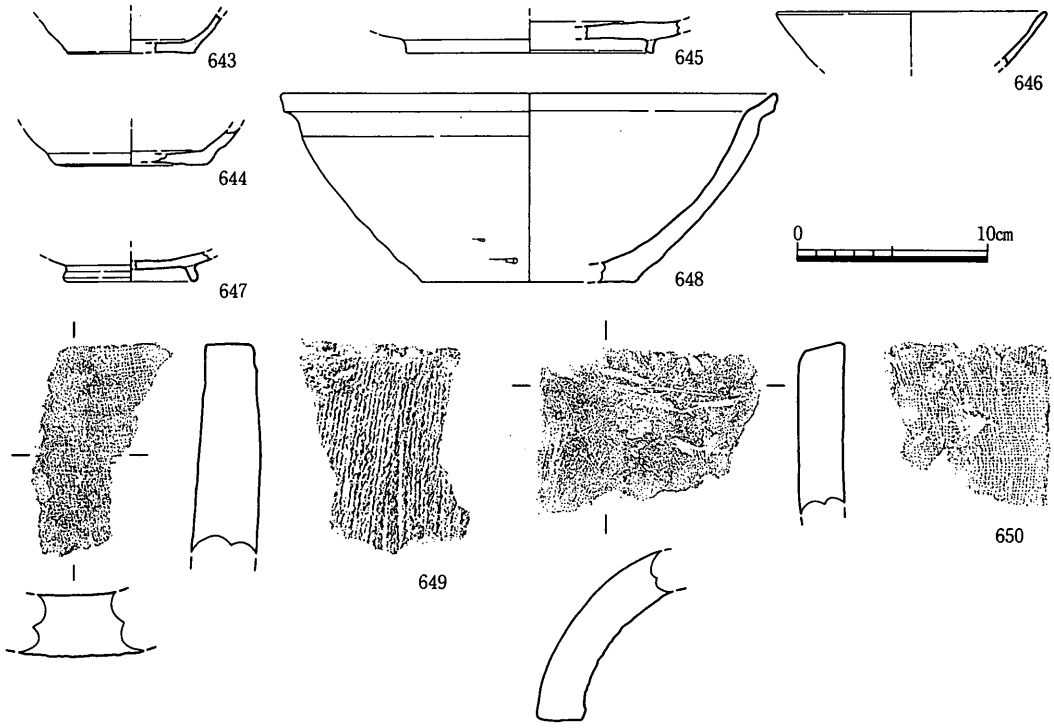
ＳＤ10

Ｃ１区南西部からＣ２区にむけてＮ－79°－Ｗの方向に掘られている幅40cm，深さ25cmの細い溝である。埋土は灰色中砂で，溝内からは少量の須恵器や土師器の細片が出土した。溝底の深さから水は東から西に流れる。Ｃ１区内でＳＤ09を，またＣ５区でＳＢ02・03の南柱列を切り，ＳＫ01に切られる。出土土器は細片のため図示しえなかったものの，これらのことからＳＤ10は12世紀以降に掘削され，中世以前に埋没したと考えられる。

ＳＥ02（第181～183図，図版35～37）

Ｃ５区のＳＤ09内で検出した。当初はＳＤ09埋没後に掘りこんだ可能性も考えたが，掘り方が認められず，前述のように位置的にＳＤ09の支流(d)・(e)の合流点にあたることや南西－北東方向のＳＥ02断面図において溝であったためにできたと考えられる水平堆積が横板手前まで認められることから同時併存であると結論づけた。

ＳＤ09が北からきて西に曲がる手前に作られたＳＥ02は径30cm程の底のない曲物とその上におかれた長さ約70cmの横板から構成される。曲物は深さ90cm程の溝底にさらに径40～

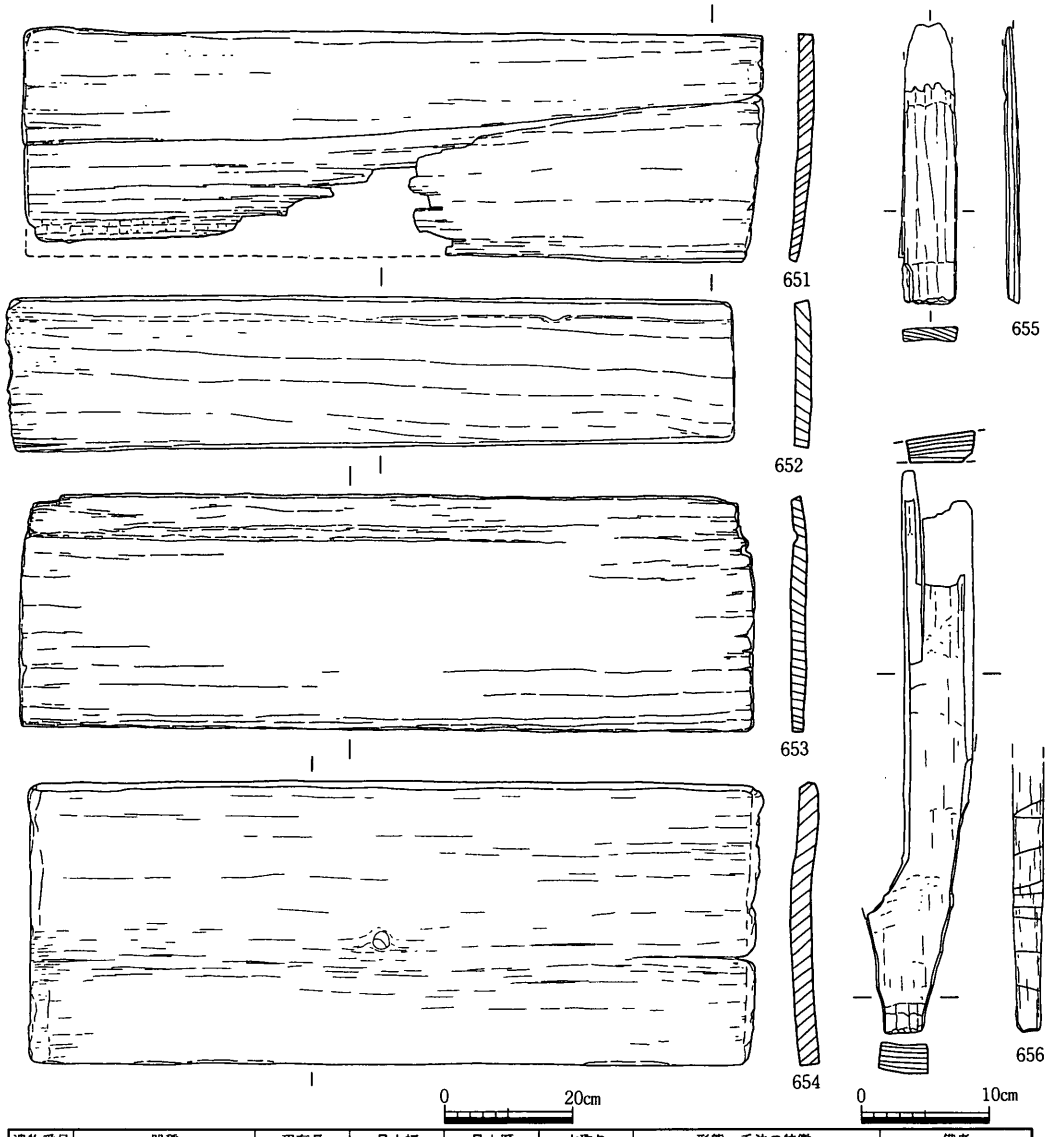


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
643	須・杯			6.2	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
644	須・杯			8.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
645	須・高台皿			13.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
646	須・椀	14.0			中・普	良好	灰白，灰	ナデ	ナデ		内面に黒漆か墨？
647	黒A・椀			7.1	細・普	良好	浅黄，黒	ナデ	ミガキ		
648	須・こね鉢	27.1	9.7	11.2	粗・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
649	平瓦	3.1	縄目叩き	布目圧痕	-	16	中・普	灰黄褐	良好		10.6
650	丸瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	12	17	粗・普	灰白	良好		8.7

第185図　C区ＳＥ03出土遺物（1）（1／4）

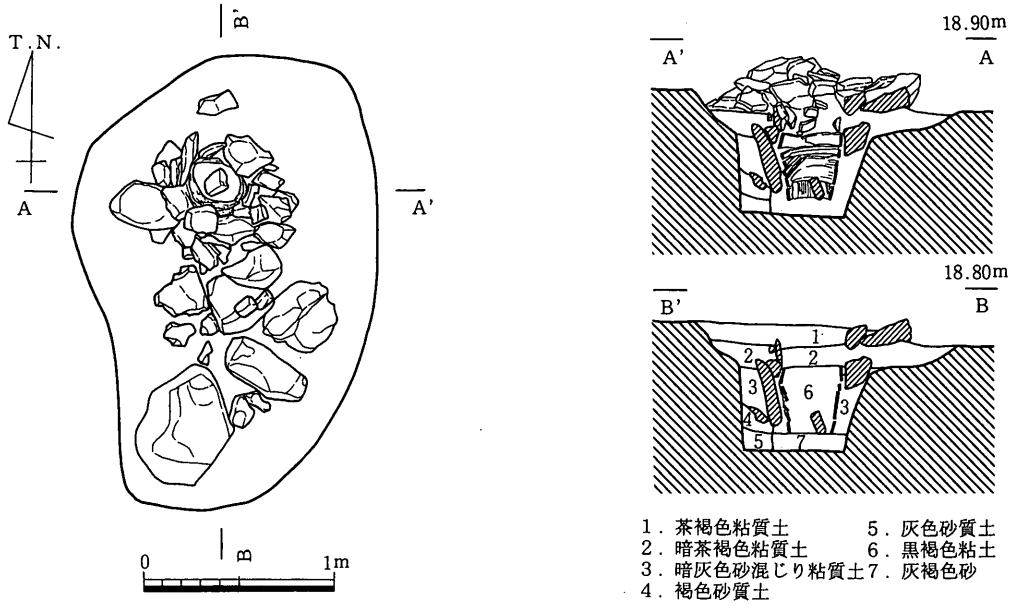
60cm，深さ25cmの穴を掘り，その中に据えられる。横板は２段からなり，上板は出土時には上下２枚に割れていた。下板の北端は曲物の上端ぎりぎりのところに置かれ，南端は溝の南岸を少し掘りくぼめ，板が水平に置かれるように工夫している。さらに曲物から15cmはなれたところに杭を垂直に３本打ちこみ横板を斜めに立てかけているが，溝埋没後の土圧のためか杭は３本とも北東にまがっている。上板は検出時は下板のうえにずり落ちていたが，本来は下板のうえに乗せられていたものであろう。復元すれば横板の高さは70cm程になると考えられる。上板の南側下端は溝に隙間なくはめこむためか斜めに削られている。このような構造物を作ったあと，最後に曲物の北西側を囲むように板石が１～２段並べられていた。検出時にはこの板石群や曲物の上にさらに板石が散乱しており，曲物のまわりにもっと積みあげていたものが壊れたか井戸廃棄時に投げこんだ可能性がある。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
651	井戸枠	115.8	34.7	2.4	柾目		
652	井戸枠	104.0	24.2	2.5	柾目		
653	井戸枠	115.6	36.7	2.4	柾目		
654	井戸枠	115.6		3.1	柾目		
655	板材	21.5	4.4	1.2	板目		
656	用途不明品	43.7	6.4	2.5	板目	左を何かに差し込んでいた？	

第186図　C区ＳＥ03出土遺物（2）（1／6，1／12）

曲物内には灰色中砂や灰黒色のシルトがラミナ状に堆積し，中からは須恵器や土師器や瓦の細片がごく少量出土した。また，曲物直上付近まで砂とシルトの堆積はつづくが，その上からはシルトのみが堆積する。その境には葦や木の小枝が多く含まれていた。したがって，ここまで常時水がたまり小枝などが浮いていたということになるであろう。



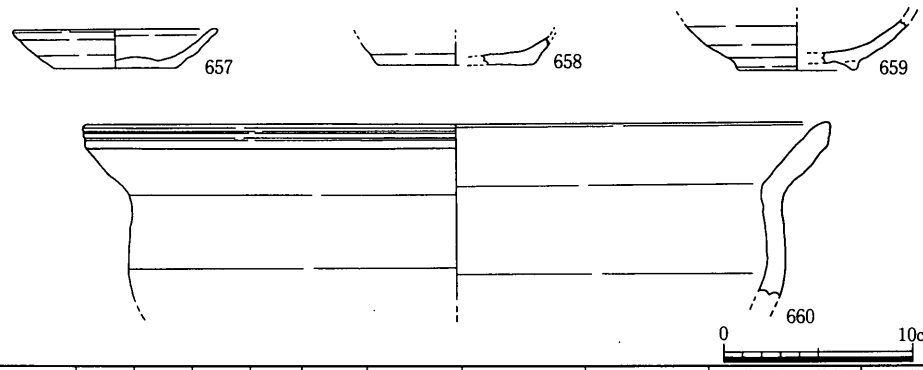
第187図　C区ＳＥ04平・断面図（1／40）

ＳＤ09の項でのべたようにＳＥ02の横板がＳＤ09の支流(d)・(e)からの排水が直接曲物に流れこまないようにするためのものであることは以上の状況や観察からより明らかになった。さらに水は曲物の上まで常時あふれていたのであり，その水を汲みに溝の中に敷いた石におりてきていたものであろう。石が北側にしか敷かれてないことは石組みが北上流からの汚水の流れ込みを防ぐ役目ももっていた可能性を強く示している。何故に溝のなかに井戸が掘られたかについては掘る面倒が省けたということが考えられるが，横板をささえる３本の杭が上流側に打たれ，水圧に対して不安定な状態にある原因については調査者も判断がつかない。

636は曲物内から出土した須恵器の高台付杯片で，図示しえた１点である。637は高さ25㎝の曲物の外に幅５㎝の枠を巻いている。外枠は２ヵ所で綴じられるが曲物本体とは綴じ合わされてない。曲物本体には10ヵ所に横方向に任意の間隔で穴が開けられている。638～640はいずれも断面三角形に成形された杭である。杭先はあまり強くは尖らせていない。638はほぼ原形を保つが，他の２点は杭の天辺がささくれている。641は横板の下段である。642は上段で片側の平坦面に手斧ではつったあとが大きく残る。右側縁は斜めに削られている。

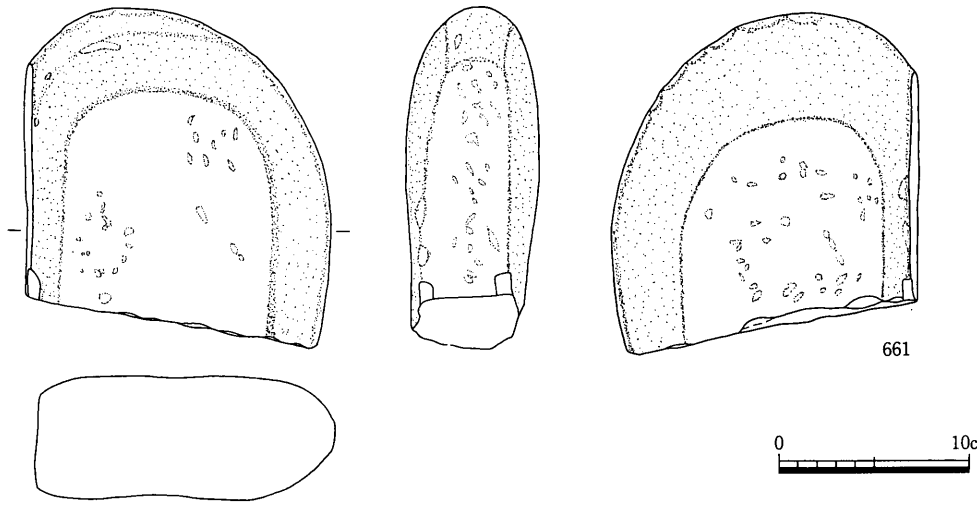
ＳＥ03（第181・184～186図，図版38）

ＳＥ02のすぐ西側で検出した。径1.5～２ｍの円形の範囲を70㎝程掘り下げたのち，４



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
657	土・杯	10.8	2.0	6.4	細・少	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
658	土・杯			8.2	中・普	良好	黄灰・鈍赤褐	ナデ	ナデ	底部外面上部強いナデ	
659	土・椀			6.4	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
660	土・土鍋	39.2			粗・普	良好	暗灰黄・黒褐	ナデ	ナデ	口縁部凹線２条，外煤	

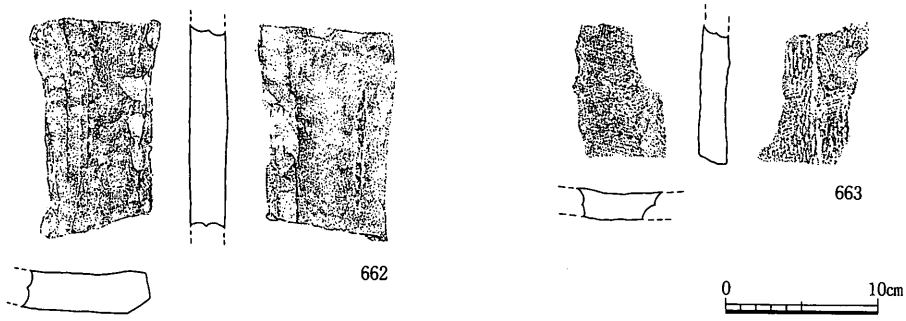
第188図　Ｃ区ＳＥ04出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
661	砥石	16.0	16.1	7.0	3070	砂岩		

第189図　Ｃ区ＳＥ04出土遺物（2）（1／4）

枚の横板を方形に組んでたてていたらしいが，検出時には内側にたてられていた南北の板が倒れていた。方形の区画内の中央は楕円形にさらに20cm窪んでいたが曲物は据えられてなかった。かわりに656が頭をやや南に向けて打ち込まれていた。裏込め土や木枠内から少量の土器や瓦片や木片が出土した。643・646・650は最深部から，645は裏込め土内から，他の土器・瓦と655は倒れた横板より上の土層から出土した。645は皿である。646は口縁の開きから椀としたが杯の可能性も残る。648は口縁部の摘まみあげは顕著ではないが口



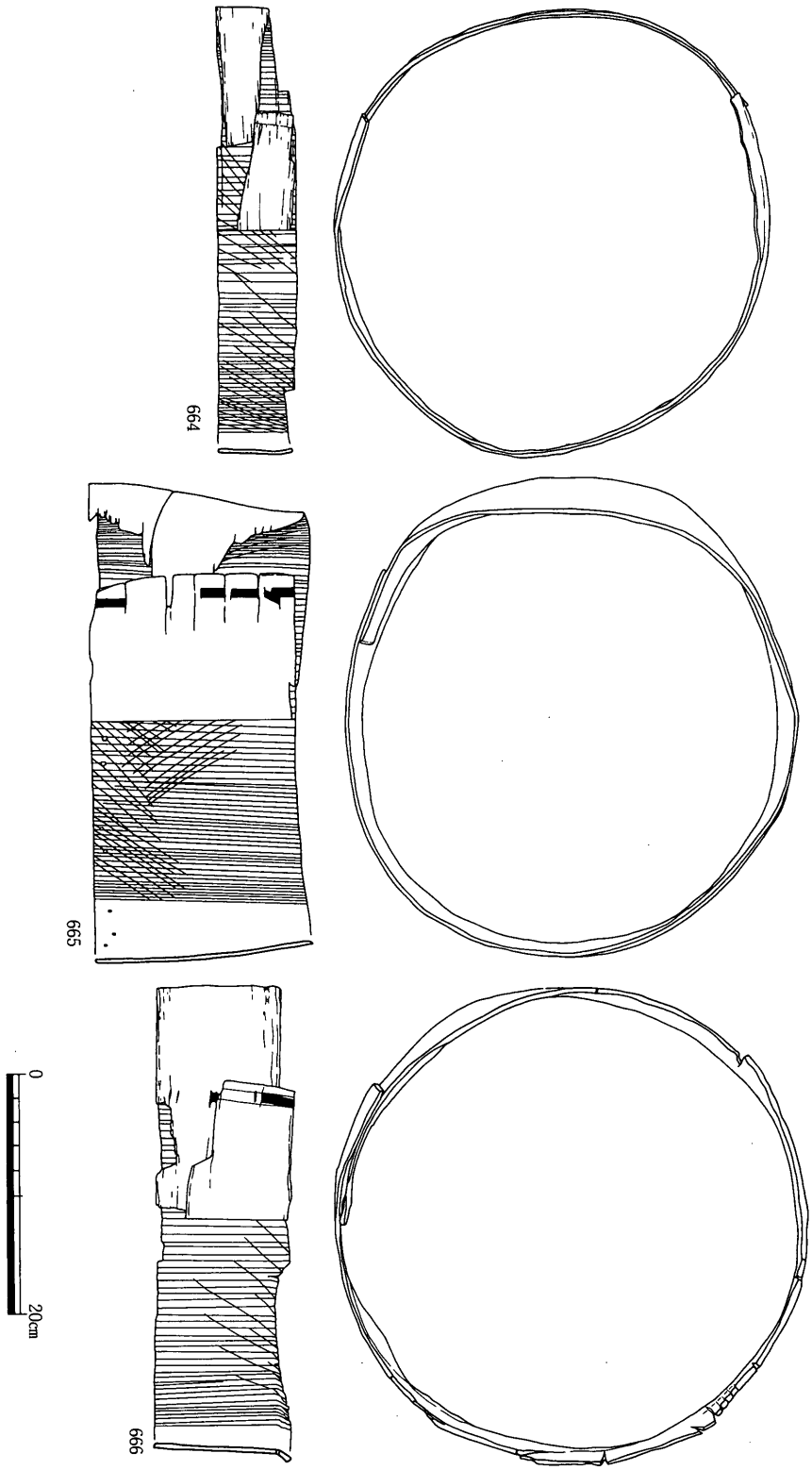
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
662	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕・板ナデ	6	-	中・普	灰白	良好	砕断面ヘラ削り	12.8
663	平瓦	1.7	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕→板ナデ	-	16	粗・普	黄灰	良好		8.2

第190図　C区ＳＥ04出土遺物（3）（1／5）

縁直下外面を強く横ナデしている。底部付近にはヘラケズリのあとが残る。656は打ち込まれていた先はきれいに加工されている。さらに何かを外れにくくするためか先から２㎝付近がわずかにえぐるように削られている。本来は打ち込むためでなく他の用途にもちいられていたものであろう。ＳＥ03はＳＤ09を切っている。また遺物には11世紀後半から12世紀の年代が与えられる。このことからＳＥ03はＳＤ09が埋没して間もない頃に掘られたと考えられる。

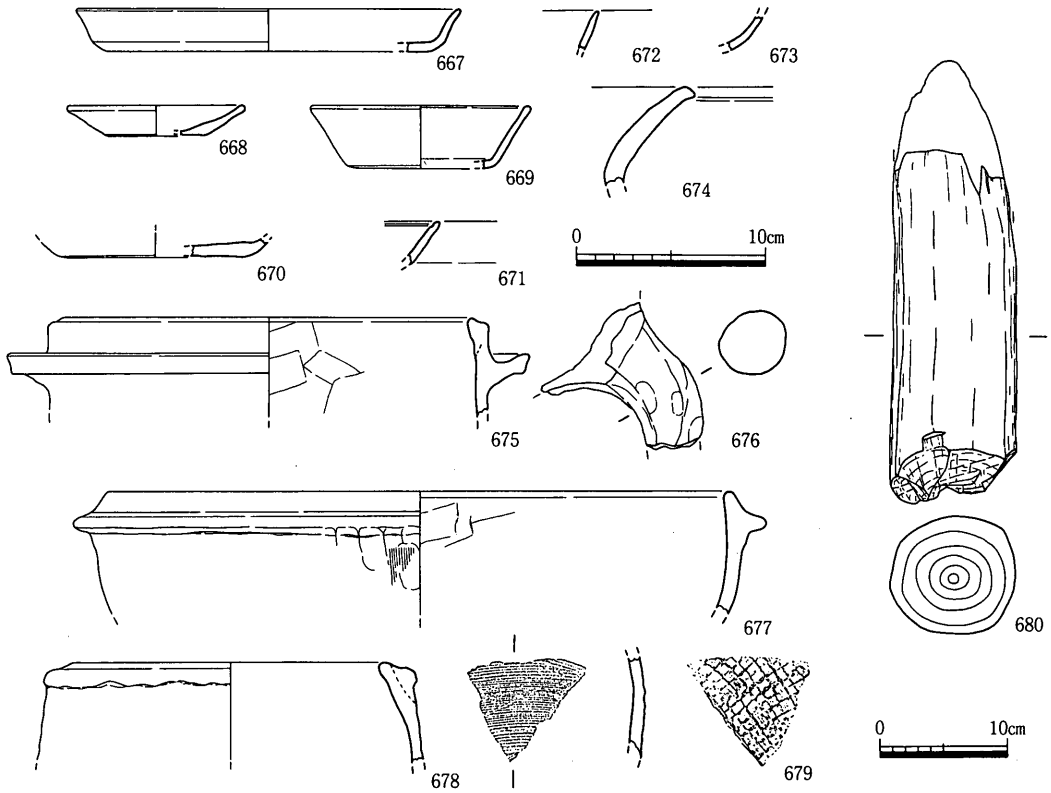
ＳＥ04（第187～191図，図版28・29）

Ｃ３区のほぼ中央に位置しＳＤ09の支流(a)を切っている。掘り方の平面形は西洋梨形で，長径2.3m，短径1.3m程である。上面に20㎝前後の塊石を深さ53㎝ほど組んでおり，その下に曲物を３段重ねている。深さは82㎝で検出面から40㎝ほどで曲物にいたる。曲物を据えた部分の掘り方の幅は曲物上端部で74㎝，下端部で52㎝となっている。検出状態では上段の石が曲物の裏側に落ち込んで曲物を壊していた。曲物の埋土は粘性の強い黒褐色粘土で，一度に埋まったと考えられる。また曲物の裏込めは砂質土である。井戸を掘りこんだ地盤が砂質土であったため，上層の石組みが崩れて陥没したと考えられる。遺物は曲物の上部と曲物内から出土した。曲物の上部の遺物は660の土鍋以外は細片のため図化できなかった。657～659は曲物内で出土した。その他に図化できなかったが黒色土器Ｂ類椀や土師器杯，土釜などが出土している。661は曲物内に転落していた砥石で３面をかなり使用している。662・663は平瓦で，663は凹凸面に糸切り痕が残り，凸面に縄目叩きを施している。664～666は井戸の曲物である。664が上段，665が中段，666が下段で664の直径は37



第191図　Ｃ区ＳＥ04出土遺物（4）（1／6）

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
664	曲物	6.7	径36.8	0.4			
665	曲物	18.3	径37.7	0.4			
666	曲物	11.4	径39.5	0.4			



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
667	土・皿	20.4	2.2	17.0	中・普	良好	暗灰黄,黒褐灰	ナデ	ナデ		胎土は橙
668	土・小皿	9.3	1.6	5.0	微・普	良好	淡黄橙,鈍橙	ナデ	ナデ		
669	土・杯	11.4	3.2	7.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
670	須・杯			10.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
671	須・皿				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	沈線	
672	緑・椀				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	硬質
673	緑・椀				微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	硬質
674	須・甕				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
675	土・土釜	23.2			中・普	良好	橙,灰褐	ナデ	板ナデ		
676	土・土釜				粗・普	良好	にぶい橙～灰	ナデ	ナデ		
677	土・土釜	33.1			粗・普	良好	鈍い黄橙～橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
678	土・土釜	19.7			中・普	良好	灰黄褐～黒褐	不明	不明		
679	土・土釜				微・普	良好	明褐	叩き	ハケ目		

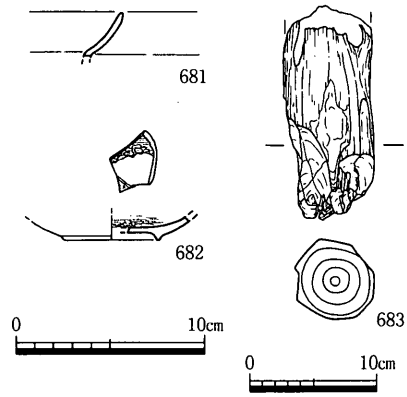
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
680	柱根	32.9	9.8	9.1	芯持		

第192図　C区ＳＰ出土遺物（2）（1／4，1／6）

cm，665・666は40cmである。665・666は桜の皮で綴じており，同一個体の可能性もある。出土遺物には11世紀前後の年代が与えられるが，12世紀に埋没したと考えられるＳＤ09を切っていることから，それ以後の間もない時期にＳＥ04が掘られたと考えておきたい。

ＳＰ15～24（第192図）

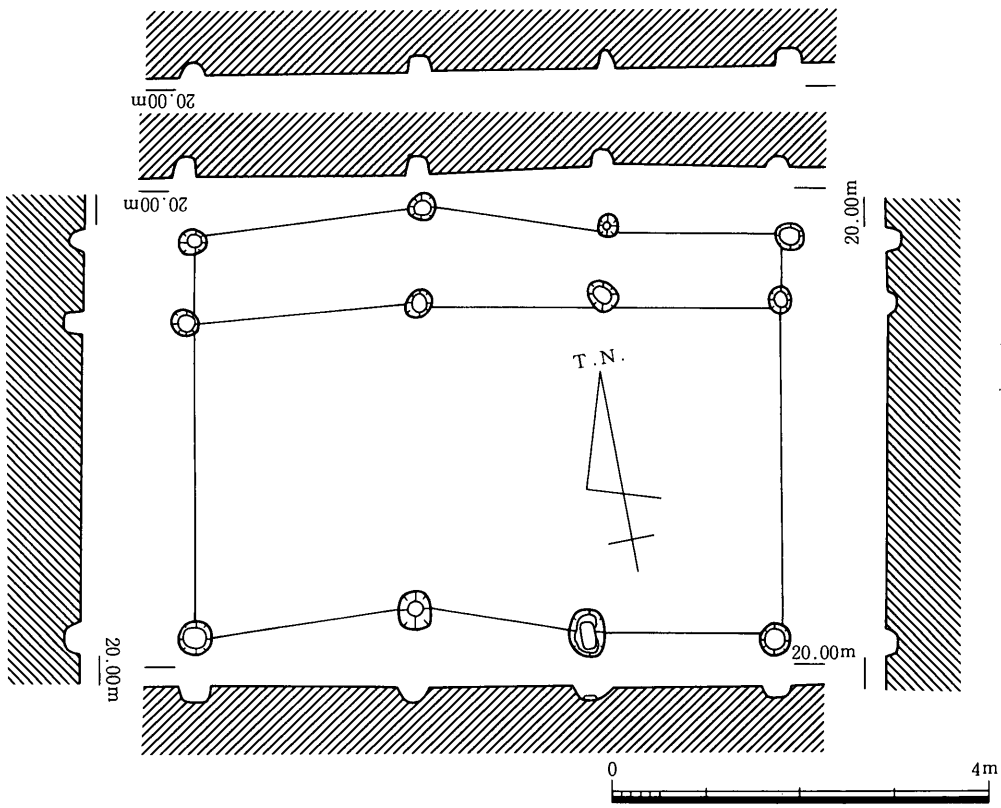
669・676～678はＳＰ15，667・670はＳＰ16，679はＳＰ17，668はＳＰ18，672はＳＰ19，673はＳＰ20，671はＳＰ21（ＳＢ13），674はＳＰ22（ＳＡ05），675はＳＰ23（ＳＡ06），680はＳＰ24からの出土である。669は須恵器杯に形が似る。672・673は硬質の緑釉陶器椀で，内外面に釉をかける。675・677・678は口縁上面と鍔が段々退化している。676は土釜の脚である。679は土鍋か土



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
681	陶・椀				精緻	良好	黒褐・鈍い黄	ナデ	ナデ	内外面に釉	
682	陶・椀			5.0	精緻	良好	白	ナデ	ナデ	灰白の釉，黒の具須	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
683	柱材	16.6	6.8	6.1	芯持	主に２方向から斧をいれる	

第193図　Ｃ区ＳＢ11出土遺物（1／4，1／6）



第194図　Ｃ区ＳＢ11平・断面図（1／80）

釜の胴下半部である。

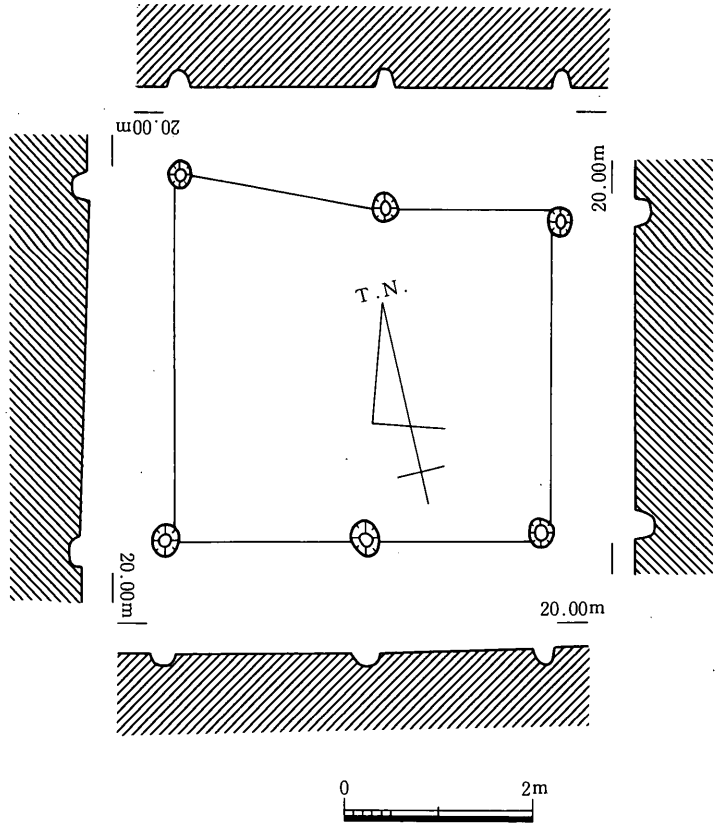
(4)中世以降の遺構・遺物

ＳＢ11（第193・194図）

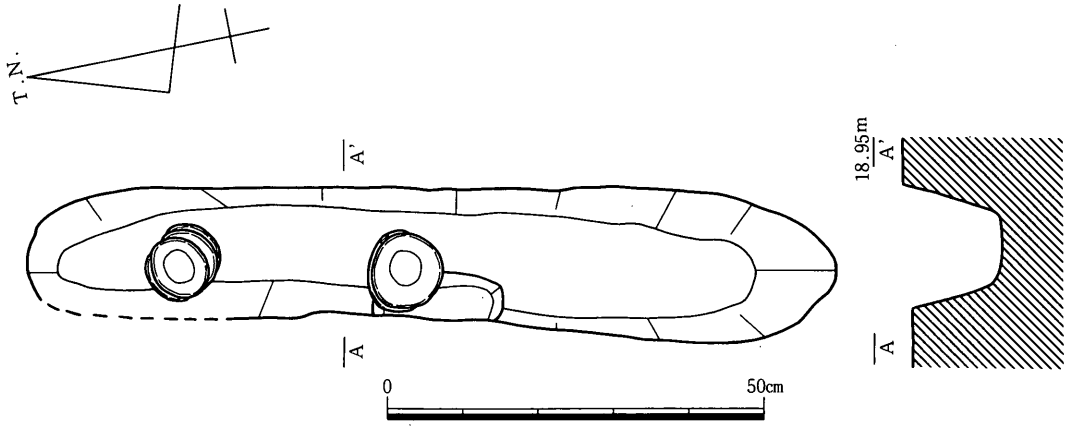
Ｃ１区東部で検出した。梁行１間×桁行３間の建物で，北に廂がつく。柱間の距離は2.1mで主軸方位はＮ－79°－Ｗである。柱穴は20～40cmの円形で，根石の置かれたものが１つあった。埋土は灰色シルトで，その中から近世以降の陶器が２点と柱根が出土した。

ＳＢ12（第195図）

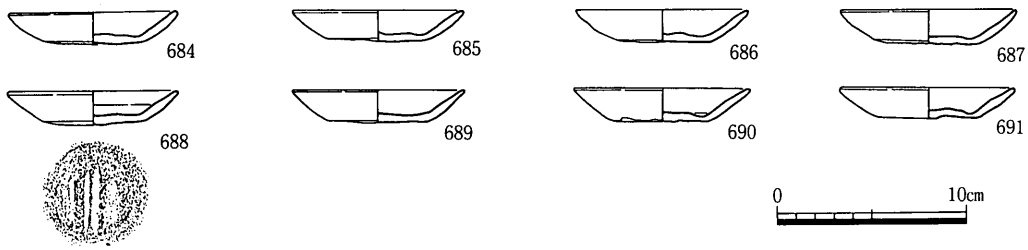
ＳＢ11の南側で検出した。梁行１間×桁行２間だが，桁行が東にのびる可能性がある。柱間の距離は2.2，1.9mで，主軸方位はＮ－77°－Ｗである。柱穴は20～40cmの円形で



第195図　Ｃ区ＳＢ12平・断面図（1／80）



第196図　Ｃ区ＳＫ01平・断面図（1／10）



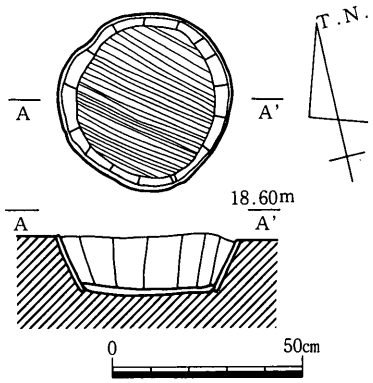
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
684	土・小皿	8.9	1.6	5.2	細・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	外面底にハケ目状痕	
685	土・小皿	9.0	1.6	5.5	微・普	良好	橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
686	土・小皿	9.1	1.6	4.3	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	外面底にハケ目状痕	
687	土・小皿	9.3	1.8	5.6	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
688	土・小皿	9.0	1.7	5.5	微・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	外面底にハケ目状痕	
689	土・小皿	9.1	1.5	5.3	細・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	
690	土・小皿	9.3	1.6	4.7	粗・普	良好	灰白～浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り→ヘラ起こし	
691	土・小皿	9.2	1.5	5.4	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		

第197図　C区ＳＫ01出土遺物（1／4）

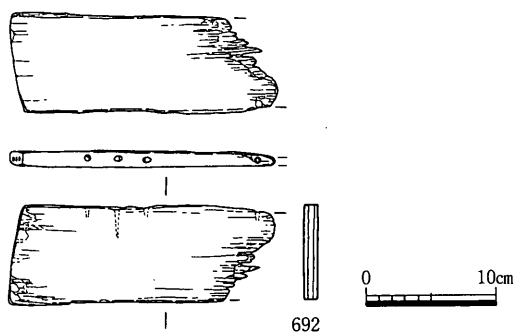
柱根や根石は検出されなかった。埋土は灰色シルトであった。柱穴の埋土が同じであることから，ＳＢ11と同じ時期のものと考えられる。

ＳＫ01（第196・197図，図版38）

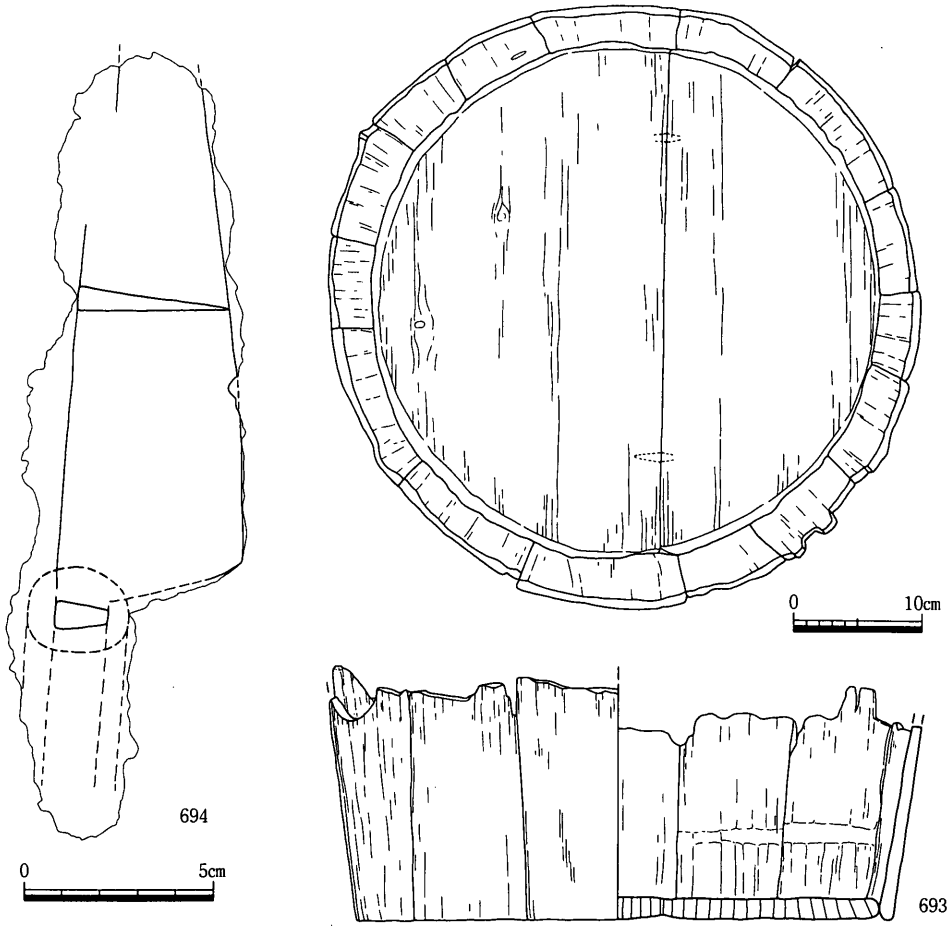
Ｃ５区西部で検出した。110×20×20cmの長楕円形の穴に４枚ずつかさねた土師器小皿２組を置いていた。埋土は灰黄色粘質土で，遺構面を形成する黄色粘土の小塊が含まれることから意図的にうめられたものと考えられる。ＳＫ01の方位や位置からＳＢ04と関連する可能性もあるが，小皿の中からは何も検出できなかった。684～691は口径・高さがほぼ同一で，内面見込みに糸切り痕・外面底にヘラ切り痕がつく。ヘラ切り後は筋状の工具痕を残す強いヘラおこしを行なったため上げ底状になっている。円筒状の粘土から糸切りにより粘土塊を切り出したのち各個体をろくろ等の上で成形しヘラ切りによって切り離した



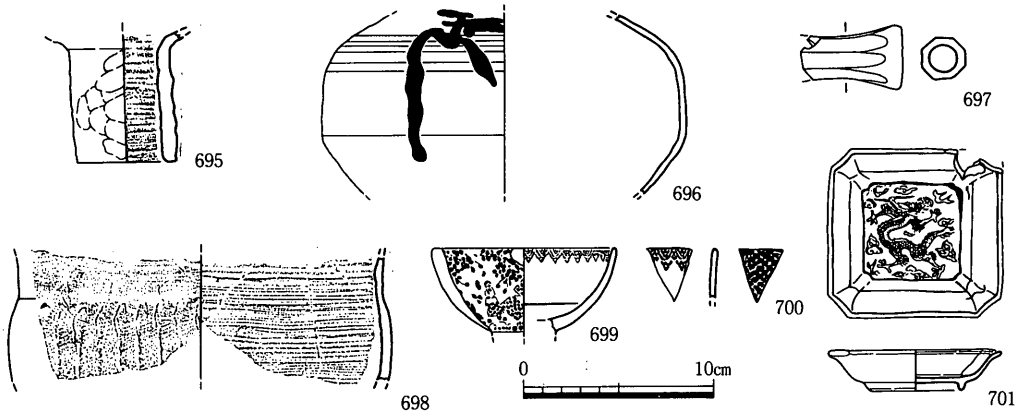
第198図Ｃ区ＳＸ01平・断面図(1／20)



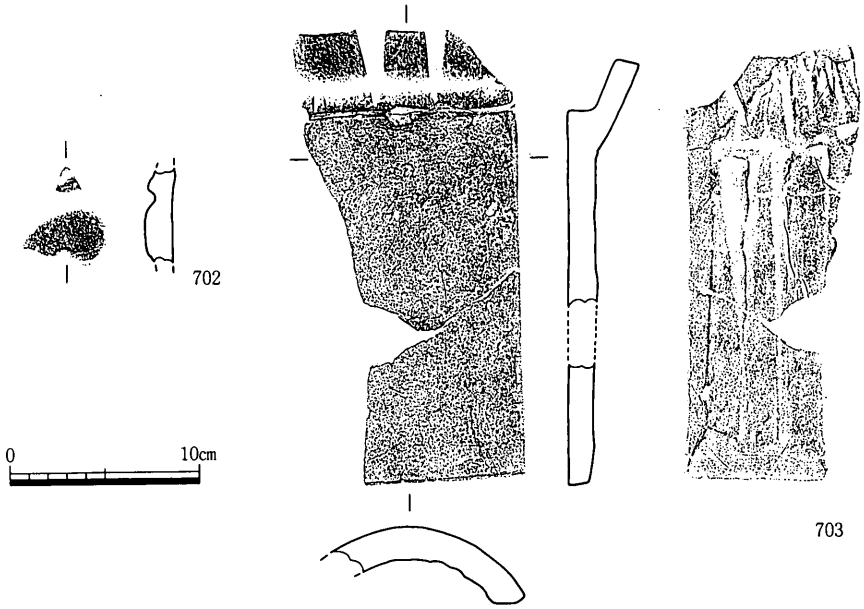
第199図　Ｃ区ＳＸ01出土遺物（1）（1／6）



第200図　C区ＳＸ01出土遺物（2）（1／2，1／6）



第201図　C区ＳＸ01出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
692	桶の底	20.0	7.5	1.1	板目		
693	埋め桶	19.7	径42.0	1.9		復元図	

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
694	鉄	包丁	20.2	4.8	0.7	213	刃先が折れる	

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
695	土・火鉢	5.1			中・普	良好	浅黄～暗灰黄	ナデ	ナデ・ハケ目		
696	土・土瓶				微・普	良好	黄橙，淡黄	ナデ	ナデ	釉をたらし模様にする	煤付着
697	土・土瓶	3.5			精緻	良好	浅黄	ナデ・ケズリ	ナデ	外面の一部に釉	
698	土・火鉢				微・普	良好	淡黄，鈍い褐	板ナデ	ハケ目		
699	磁・碗	9.7			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	ガラス質釉，群青具須	
700	磁・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	ガラス質釉，群青具須	
701	磁・皿	9.1	2.2	4.7	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	明黄褐の釉	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
703	丸瓦	1.8	ナデ	板ナデ	12	-	中・普	暗灰～灰	良好	胎土は灰	22.5

第202図　C区ＳＸ01出土遺物（4）（1／4）

ものと考えられる。この８枚はおそらく同一人物の手になるものであろう。土師器小皿は形態変化に乏しくなかなか時期を決めがたいが，口径に比べ底径が著しく小さくなっていることから15～16世紀ごろのものと考えられる。

ＳＸ01（第198～202図，図版30）

Ｃ４区で検出した。桶状の木器が15cm程地面に埋まっていた。遺存状況から上面を削平されていると考えられる。中からは板や鉄器や近世の土器・瓦片が出土した。破片ばかりであり，明らかに廃棄物である。埋め桶は井戸や便所などに使用されることが多いが，井戸とするには黒茶色粘質土の中に埋まっているため水は湧きにくい。また立地的に便所でもなく，肥え桶とするには少し容積が小さいようである。周囲は田畑であるため農作業な

どの時に何かの入れ物に使用された桶が，使われなくなって最後にゴミが捨てられたと想像したい。692は桶の底板である。数枚が組み合わさって底部を構成する。長辺と弧を描く部分に釘穴が3つずつあけられている。693とは組み合わさらない。693は桶である。枠板15枚，底板2枚からなる。底板は2ヵ所で木釘を用いてあわせている。枠板には綴じあわせるための仕組みは見当らない。これでは底板が抜け落ちてしまうため，本来底付近を縄などで巻いていたのが腐ってなくなってしまった可能性がある。ただしその痕跡も残ってない。694は包丁である。厚い錆びに覆われている。背側には段がつくのか復元線がつながらない。木の柄は腐り鉄分と石に置き換わっていた。695は火鉢の風量を調節するための内部施設である。698はその火鉢本体と考えられる。696・697は土瓶である。本体はろくろ目がつき，上2／3に釉がかかり，その下には煤が付着している。699・700は有田焼の磁器である。型紙摺りで文様を印刷している。701は角皿である。見込みには恍惚として踊る竜の姿が描かれている。産地は不明である。702は軒丸瓦の三つ巴文の破片である。これらの遺物は699・700の文様から明治時代以降と考えられる。

(5)時期不明の遺構

ＳＤ11

Ｃ１区北部で検出した東西方向の溝である。東側は2つに枝分かれしている。幅は広いところで1.8m，狭いところで0.3m，深さは約10cmである。暗茶色粘質土の単層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ12

Ｃ１区北西部で検出した東西方向の溝である。ＳＤ09に東側を切られる。幅30cm，深さ10cmである。黒茶色粘質土の単層である。遺物は出土しなかった。

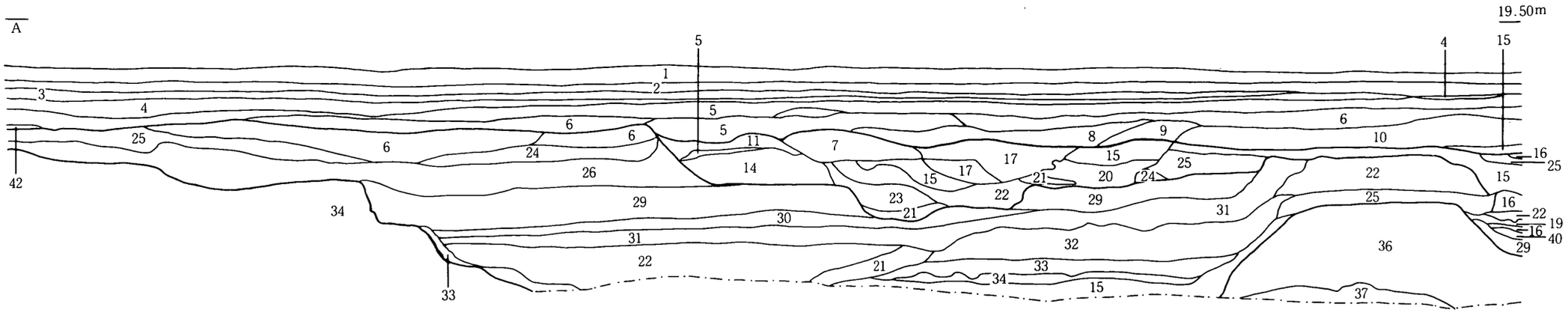
ＳＤ13

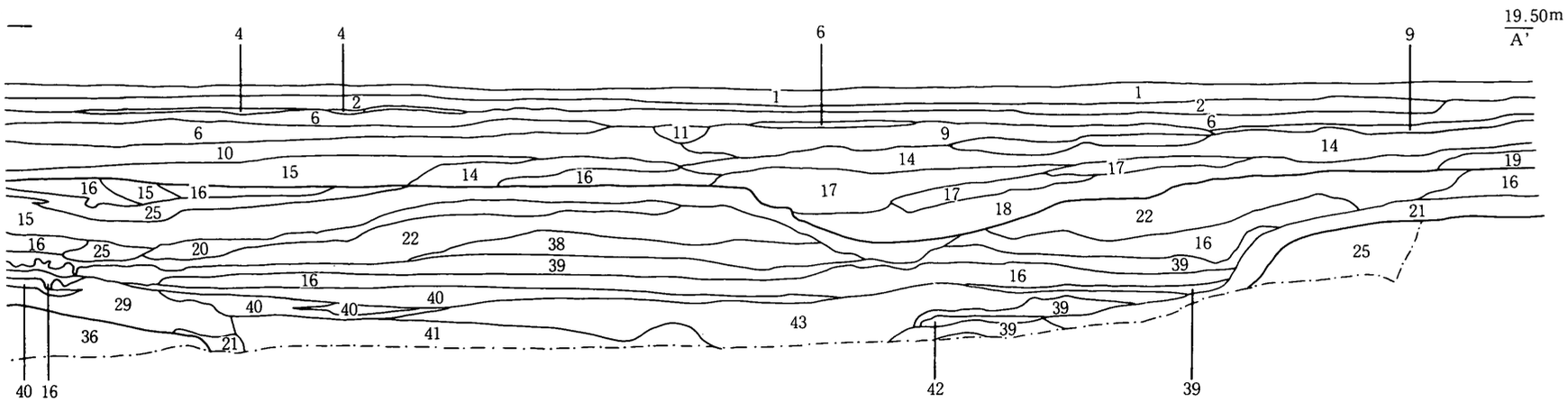
Ｃ１区西部で検出した東西方向の溝である。ＳＤ09・10に切られる。幅20～50cm，深さ15cmである。茶色粘質土の単層である。遺物は出土しなかった。

(6)旧河道

ＳＲ02（第203～228図，図版20～24）

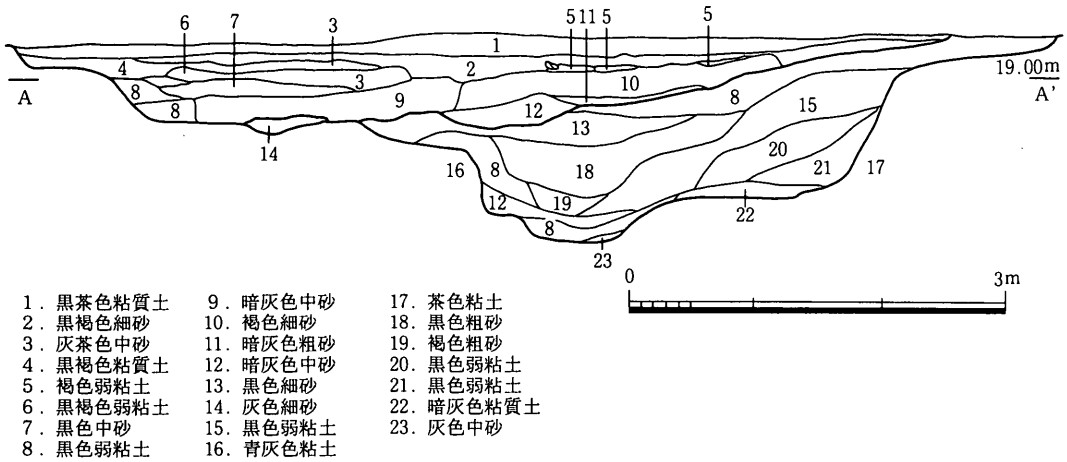
Ｃ１区を北東から南西に流れる幅7～22m，深さ1.6～1.8mの川である。川の中からは縄文時代晩期から7世紀までの土器や石器や木器が出土した。調査区北端とそこから南に





1．耕作土
2．床土
3．床土
4．床土
5．暗褐色粘質土
6．茶褐色粘質土
7．褐色砂質土
8．褐色粘質土
9．黒茶色粘質土
10．黒褐色粘質土
11．灰黒色粘質土
12．黒色粘質土
13．灰色細砂
14．灰色中砂
15．黒色弱粘土
16．黒色砂質土
17．暗灰色粘質土
18．暗灰色粗砂
19．黒色細砂質土
20．灰色粗砂
21．灰色粗砂と黒色弱粘土の互層
22．黒色微細砂質土
23．黒色粗砂質土
24．灰褐色粘質土
25．暗灰茶色粘質土
26．灰色粘質土
27．黒色粘土
28．灰色粗砂と黒色弱粘土の互層
29．黒色微細砂質土と灰色粗砂の互層
30．灰色細砂と灰色微細砂の互層
31．灰色微細砂
32．灰色微細砂質土
33．黒色微細砂質土と灰色細砂質土の互層
34．暗灰色粗砂質土
35．青灰色粗砂質土と黒色微細砂質土の互層
36．灰色粗砂と中砂の互層
37．青灰色砂質土
38．暗青灰色微細砂質土
39．暗青灰色微細砂質土と灰色中砂の互層
40．暗灰色細砂
41．灰色粗砂と黒色細砂質土の互層
42．灰茶色粘質土

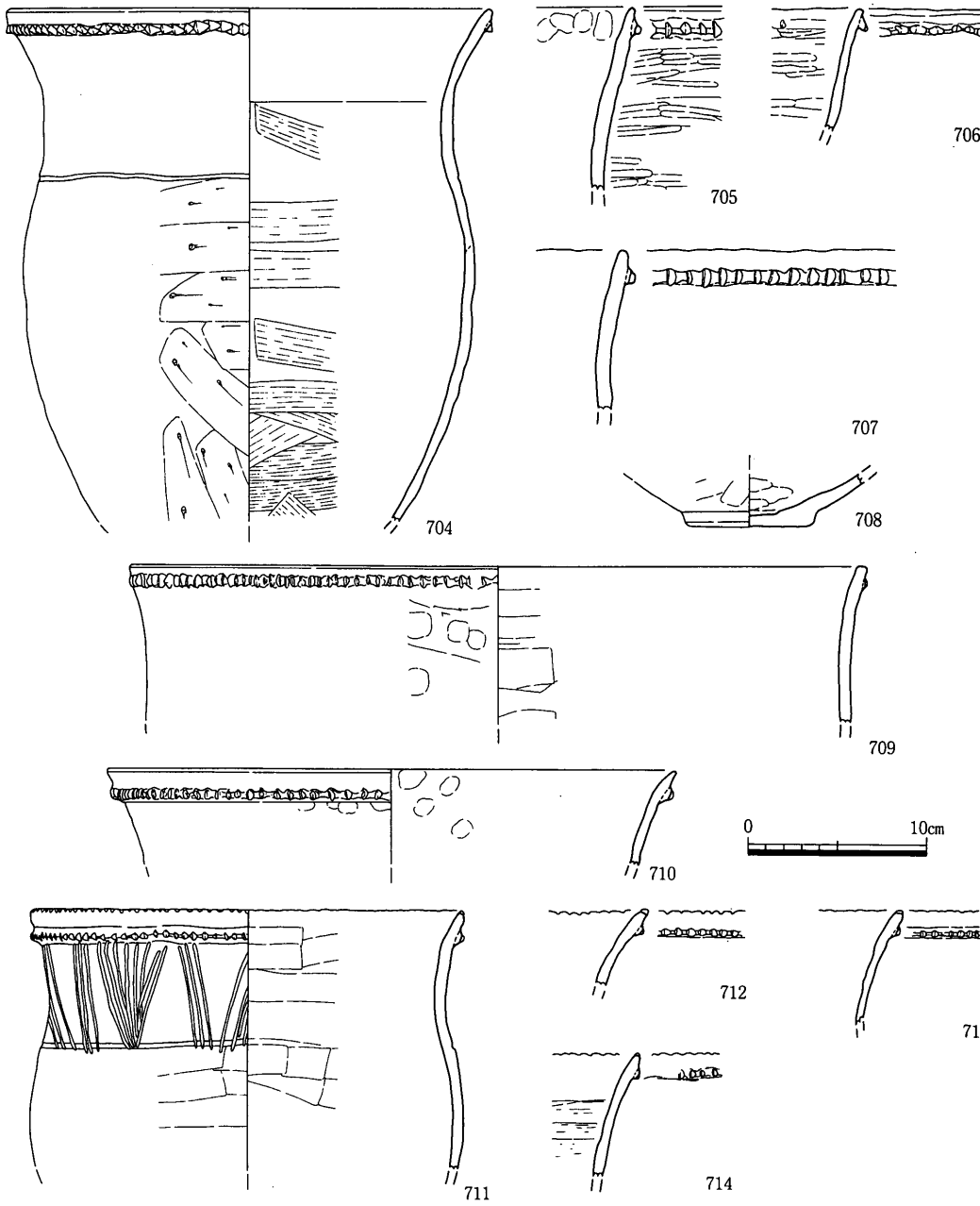
第203図　Ｃ区ＳＲ02最北部土層図（1／60）



第204図　C区ＳＲ02南部土層図（1／60）

30mの地点の２ヵ所で埋土の土層図を作成した。南側の土層図で見ると川は上下２層に分かれる。ともに流路の中央に中～粗砂，両側に粘質土やシルトという形で土砂が堆積し，さらに級化層理が認められる。下層のうち20～22層は縄文時代晩期のみの土層である。また15層からは木製品や古墳時代の土器が多く出土し，中には完形品も含まれていた。それ以外の土層では上記の土器が混在して出土したが，須恵器はごく少量の出土であり，ほとんどは弥生土器と古墳時代の土師器であった。調査区北壁の土層図をみると中央の高まりを境に大きく２つの流れに分かれる。両者とも埋土のほとんどが砂からなるがその割合は東の流れで著しく，西では上部に29層の粘土が厚く堆積し，その後幅の狭い15・20～25層の流れとなっている。

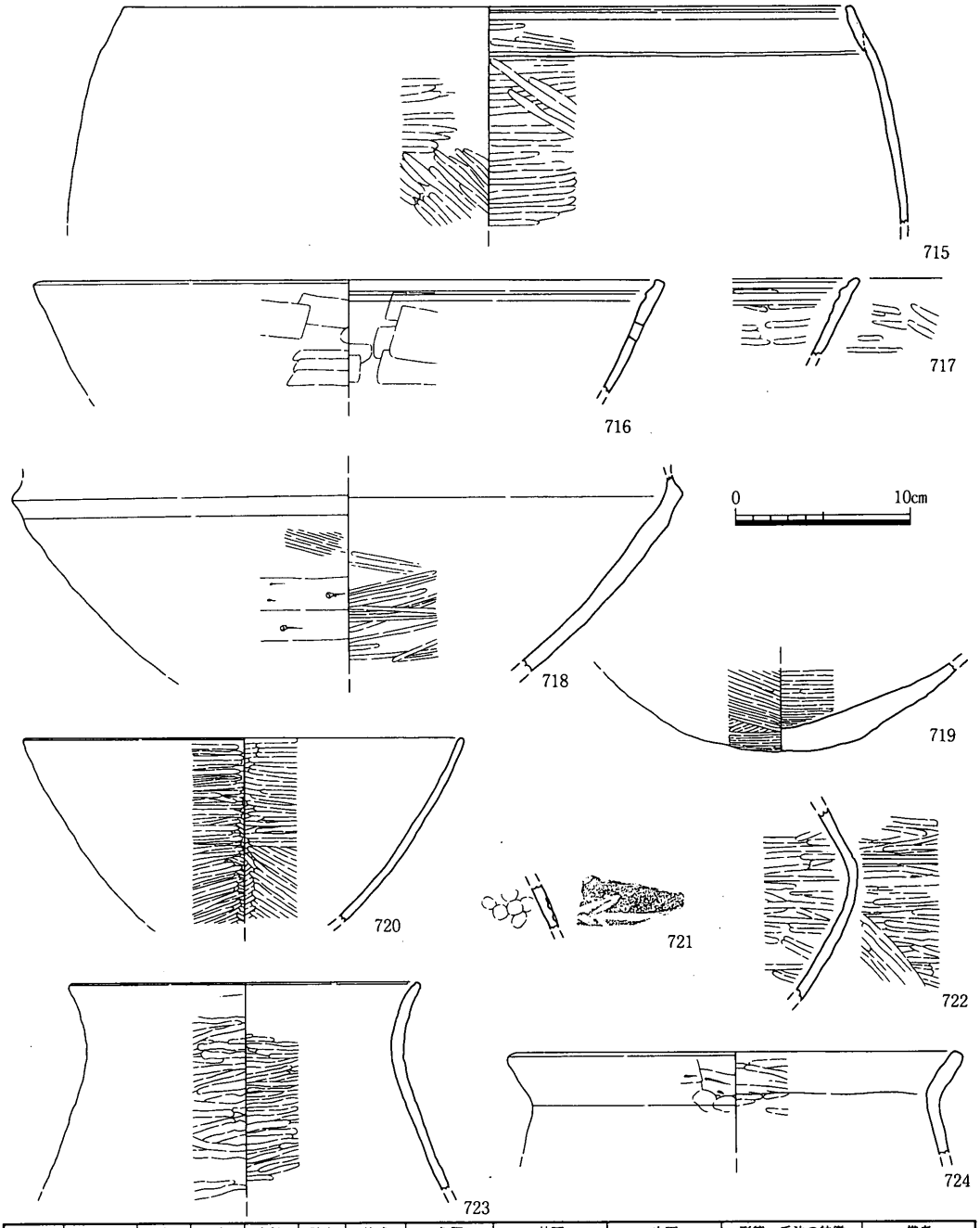
平面的に見るとＳＲ02は調査区の中央で幅が狭まる。その南で流れは２つに分かれる。東の流れは断面図を作成した個所の手前で急速に浅くなっており，南の断面図の上層に対応してゆくものと考えられる。遺物のほとんどはＳＲ02の南西部から出土している。特に木器はこの付近からしか出土しておらず，平面的にみた出土状況からも流れが北東からきてわずかに南に曲がるこの部分を利用し，溜まって流れないような状況のなかで木器を貯めていたと考えられる。つまりこの部分から出土した木器は同時期のものである可能性が高い。木器と重なりあうようにして古墳時代の土師器の完形品も出土しており木器の時期を示している。また同時に，切りだしてきて皮もむかずにおかれた原木や木っ端や削りかすが多量に出土しており，ここで貯木から加工までが行なわれていたのであろう。ただし，



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
704	縄・深鉢	27.1			中・普	良好	黒，鈍い黄橙	ナデ・ケズリ	板ナデ	沈線，刻み目	
705	縄・深鉢				粗・多	良好	褐灰	ミガキ	ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
706	縄・深鉢				粗・普	良好	黒，暗褐	ナデ	ナデ→ミガキ	突帯文	外面に煤付着
707	縄・深鉢				粗・普	良好	にぶい黄褐	板ナデ	板ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
708	縄・深鉢			7.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
709	縄・深鉢	41.0			細・普	良好	灰黄・黒	ナデ	ナデ	貼り付け突帯	外面に煤付着
710	縄・深鉢	32.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
711	縄・深鉢	24.2			粗・普	良好	黒褐	ナデ	板ナデ	刻み目突帯，ヘラ描文	
712	縄・深鉢				粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
713	縄・深鉢				中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	刻み目，貼り付け突帯	
714	縄・深鉢				中・普	良好	明褐・黒	ナデ	板ナデ	刻み目	

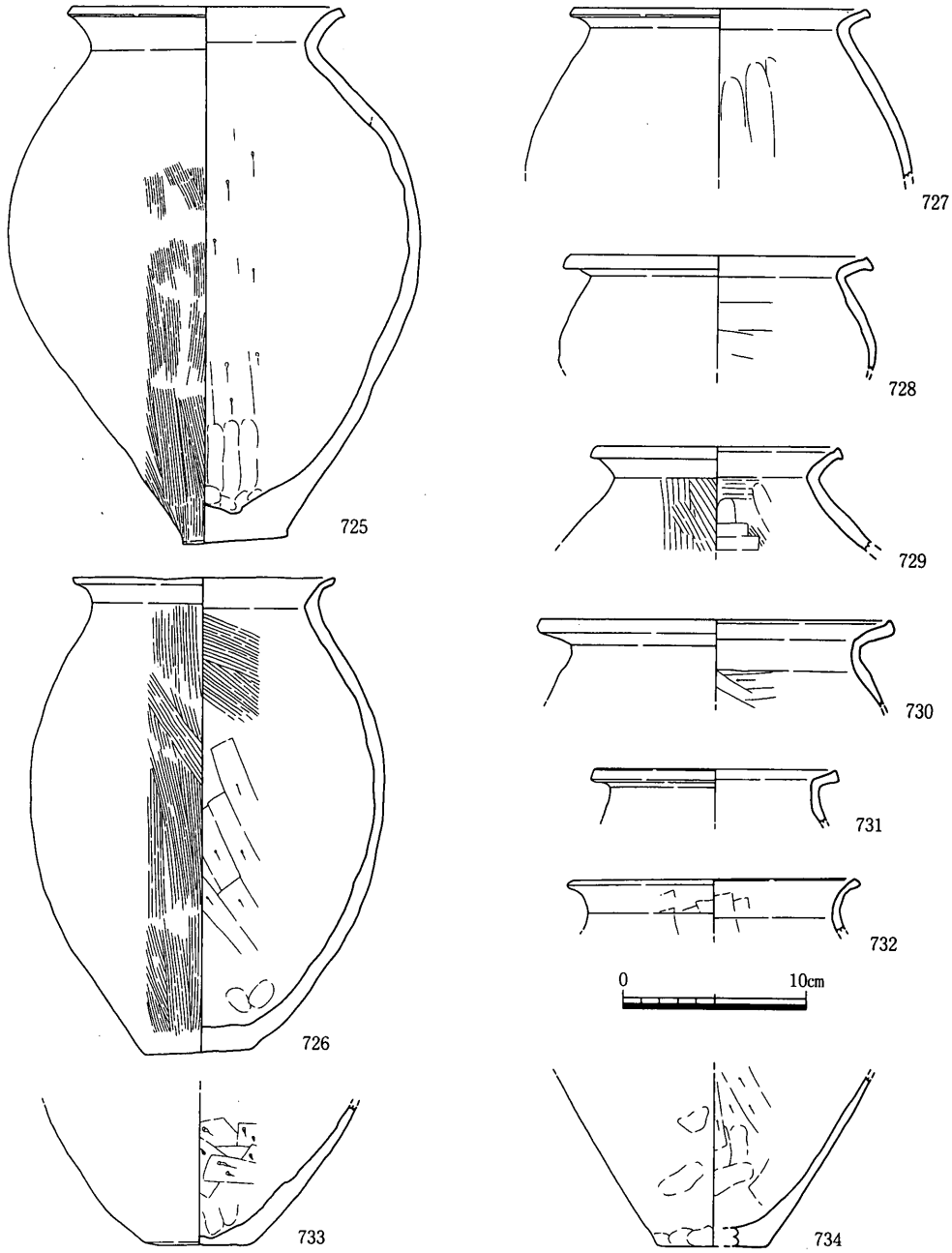
第205図　C区ＳＲ02出土遺物（1）（1／4）

第206図　Ｃ区ＳＲ02遺物出土状況（1／40）



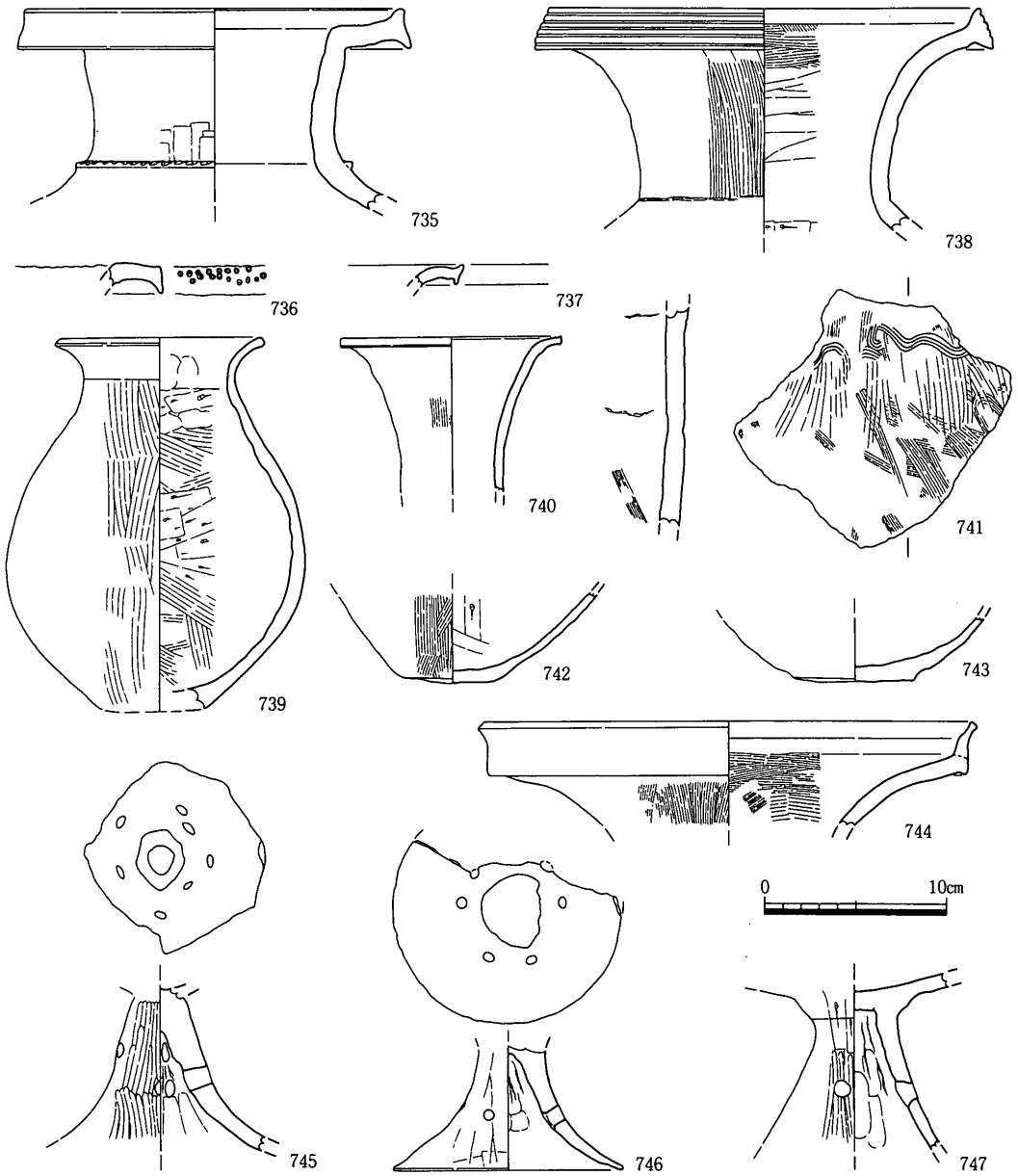
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
715	鉢・浅鉢	41.2			中・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ		外面に一部煤付着
716	鉢・浅鉢	36.0			粗・普	良好	灰黄	板ナデ	板ナデ		
717	鉢・浅鉢				中・普	良好	灰黄褐	ミガキ	ミガキ		
718	鉢・浅鉢				粗・普	良好	灰オリーブ	ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ→ナデ	ナデ・ミガキ		
719	鉢・浅鉢				粗・普	良好	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ		
720	鉢・浅鉢	25.0			中・普	良好	鈍い黄橙・黒	ミガキ	ミガキ		
721	鉢・壺				細・普	良好	黒	ミガキ	ナデ	沈線文内に赤色顔料	
722	鉢・壺				中・普	良好	黒褐・黒，黒	ミガキ	ミガキ		黒色磨研土器
723	鉢・壺	20.0			粗・普	不良	暗灰黄～黒褐	ミガキ	ミガキ		
724	鉢・壺	25.9			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ・ﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ	ナデ→ミガキ		

第207図　C区ＳＲ02出土遺物（2）（1／4）



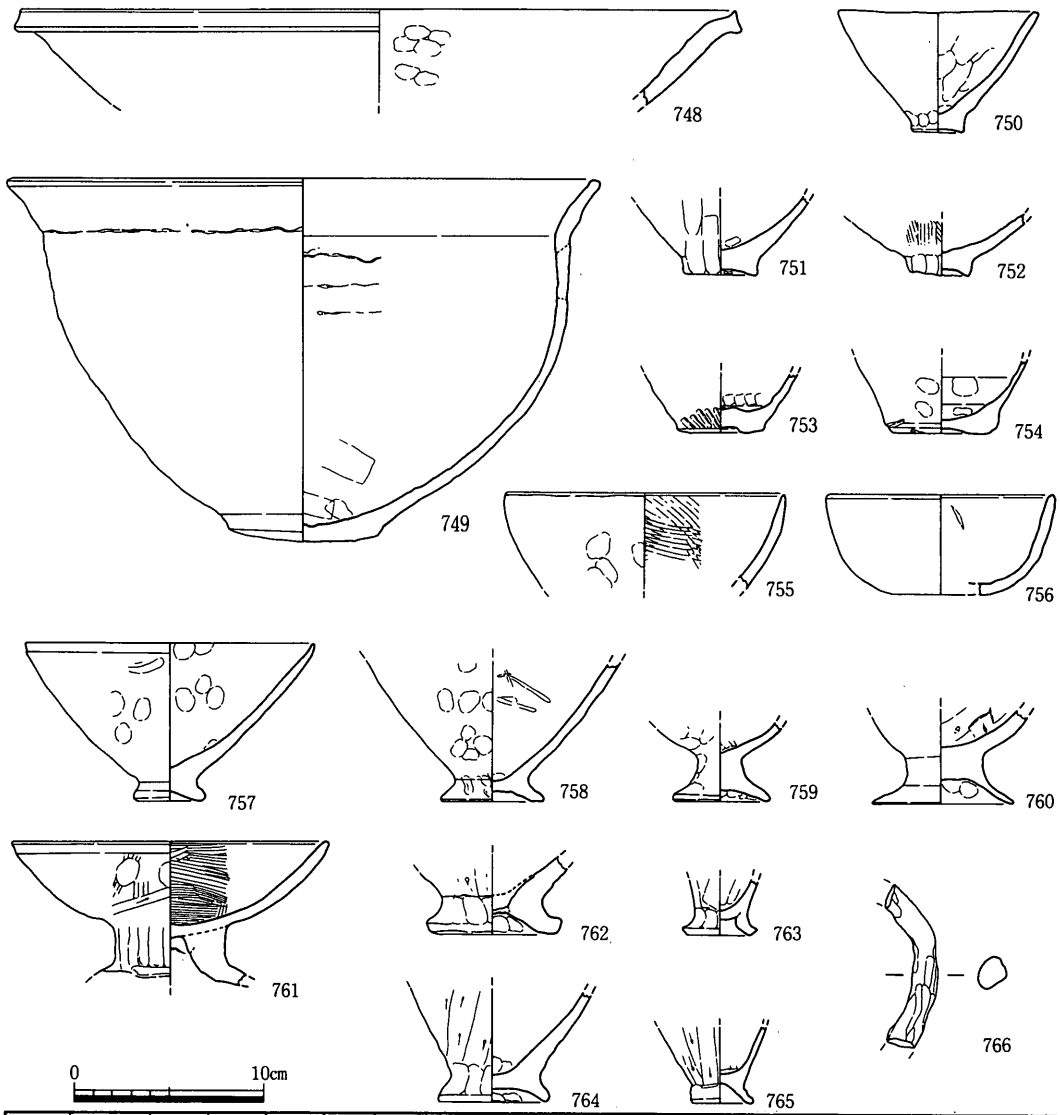
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
725	弥・甕	15.1	28.1	5.8	粗・多	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
726	弥・甕	14.3	25.4	5.9	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目・ケズリ		
727	弥・甕	16.2			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
728	弥・甕	16.8			粗・普	良好	灰白	ナデ	板ナデ		
729	弥・甕	13.7			細・普	良好	橙,灰黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
730	弥・甕	19.1			粗・普	良好	にぶい黄褐	板ナデ・ハケ目	ケズリ		
731	弥・甕	13.3			粗・普	良好	灰白, 灰	ナデ	ナデ		
732	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
733	弥・甕			7.1	粗・普	良好	浅黄橙～黒	ナデ	ケズリ→ナデ		
734	弥・甕			6.0	粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ→ケズリ		

第208図　C区ＳＲ02出土遺物（3）（1／4）



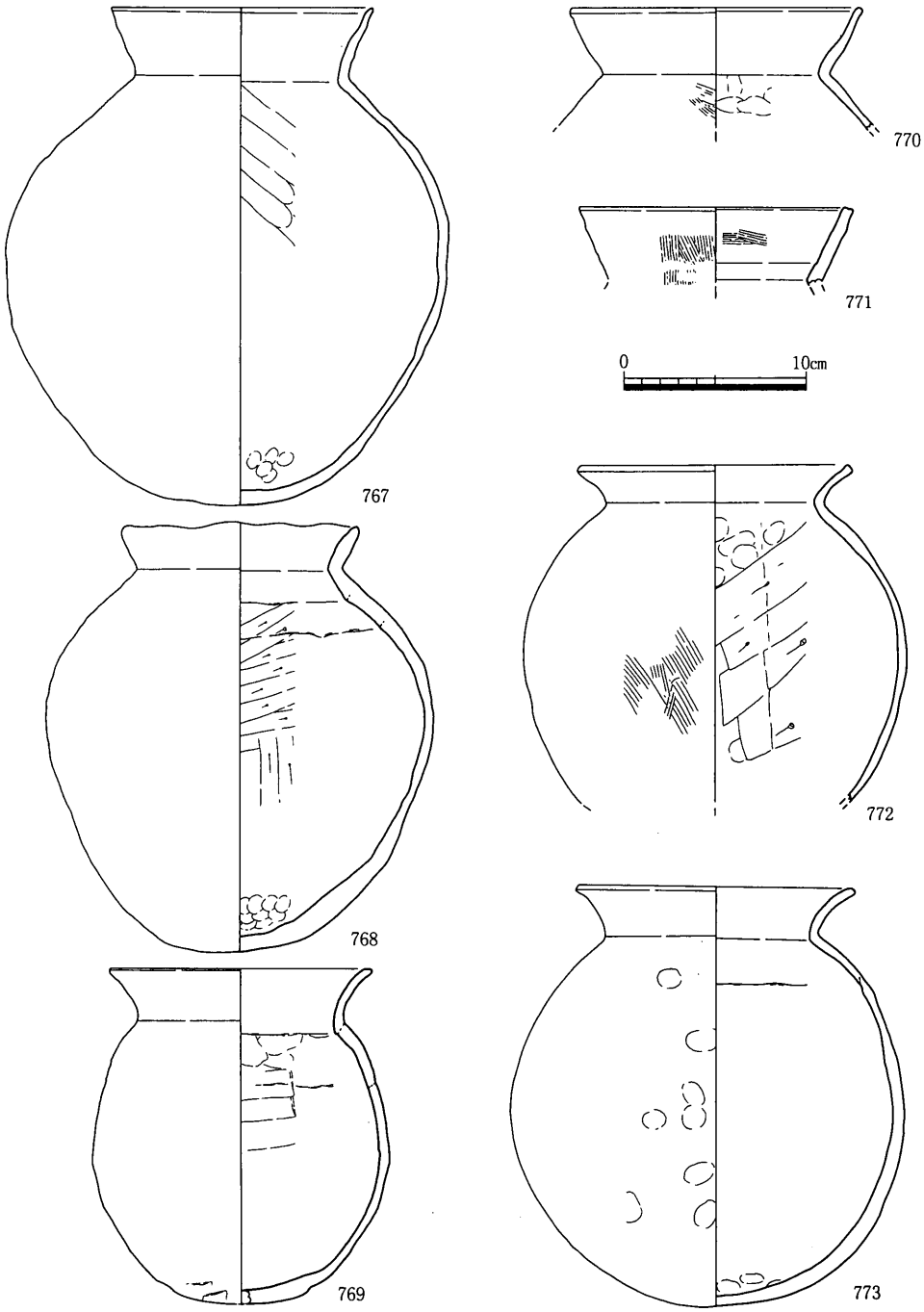
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
735	弥・壺	20.9			粗・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		
736	弥・壺				粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	竹管文	
737	弥・壺				中・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ		
738	弥・壺	25.0			粗・普	良好	浅黄・黒褐	ハケ目	ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ・ナデ	沈線	
739	弥・壺	11.5			粗・多	良好	橙,黒褐	ナデ→ハケ目	ナデ・ﾊｹ目→ｹｽﾞﾘ		
740	弥・壺	12.0			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
741	弥・壺				粗・普	良好	灰白～黄灰	板ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	櫛描文	
742	弥・壺			4.9	粗・普	良好	にぶい黄・黒	ハケ目・ナデ	ケズリ→板ナデ		
743	弥・壺			6.6	粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
744	弥・器台	27.2			粗・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
745	弥・高杯				粗・普	良好	浅黄	ミガキ	板ナデ		
746	弥・高杯			12.6	粗・普	良好	灰黄	板ナデ	ナデ		
747	弥・高杯				粗・多	良好	浅黄橙～褐灰	ナデ・ｹｽﾞﾘ・ﾐｶﾞｷ	ナデ		

第209図　C区ＳＲ02出土遺物（4）（1／4）



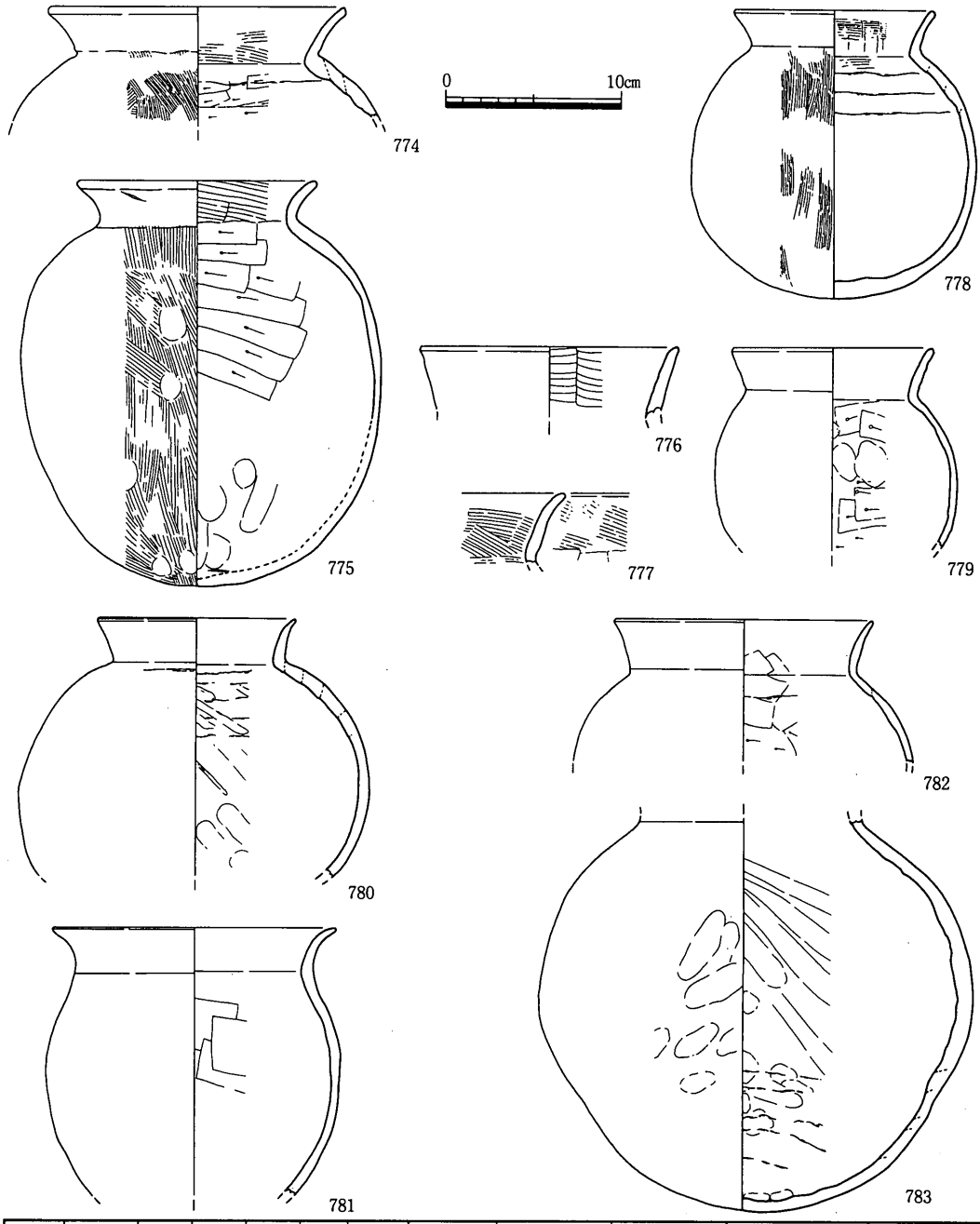
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
748	弥・鉢	37.6			粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
749	弥・鉢	31.3	18.4	7.9	粗・普	良好	赤橙～褐灰	ナデ	板ナデ		
750	弥・鉢	10.5	6.2	2.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
751	弥・鉢			3.9	中・普	良好	鈍い黄橙，黒	板ナデ	ナデ		
752	弥・鉢			3.1	粗・普	良好	黒褐・鈍黄橙	ハケ目・ナデ	板ナデ		
753	弥・鉢			4.6	粗・普	良好	黒褐，鈍黄橙	ナデ	ナデ		
754	弥・鉢			5.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
755	弥・鉢	14.8			粗・普	良好	灰黄	ナデ	ハケ目		
756	弥・鉢	12.0			粗・普	良好	鈍い黄橙→橙	ナデ	板ナデ		
757	弥・鉢	15.2	8.2	3.7	粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
758	弥・鉢			5.4	粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
759	弥・鉢			5.2	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		金雲母を含む
760	弥・鉢			7.5	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ケズリ→ナデ		
761	弥・鉢	16.6			粗・普	良好	浅黄	ナデ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ	ナデ・ハケ目		
762	弥・製塩			7.3	粗・普	良好	鈍い橙，褐灰	ケズリ	ナデ		
763	弥・製塩			4.0	中・普	良好	褐灰	板ナデ	板ナデ		
764	弥・製塩			5.9	中・多	良好	灰白	ケズリ	ナデ		
765	弥・製塩			3.3	微・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ・ナデ	ナデ		金雲母を含む
766	弥・把手				中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		

第210図　C区ＳＲ02出土遺物（5）（1／4）



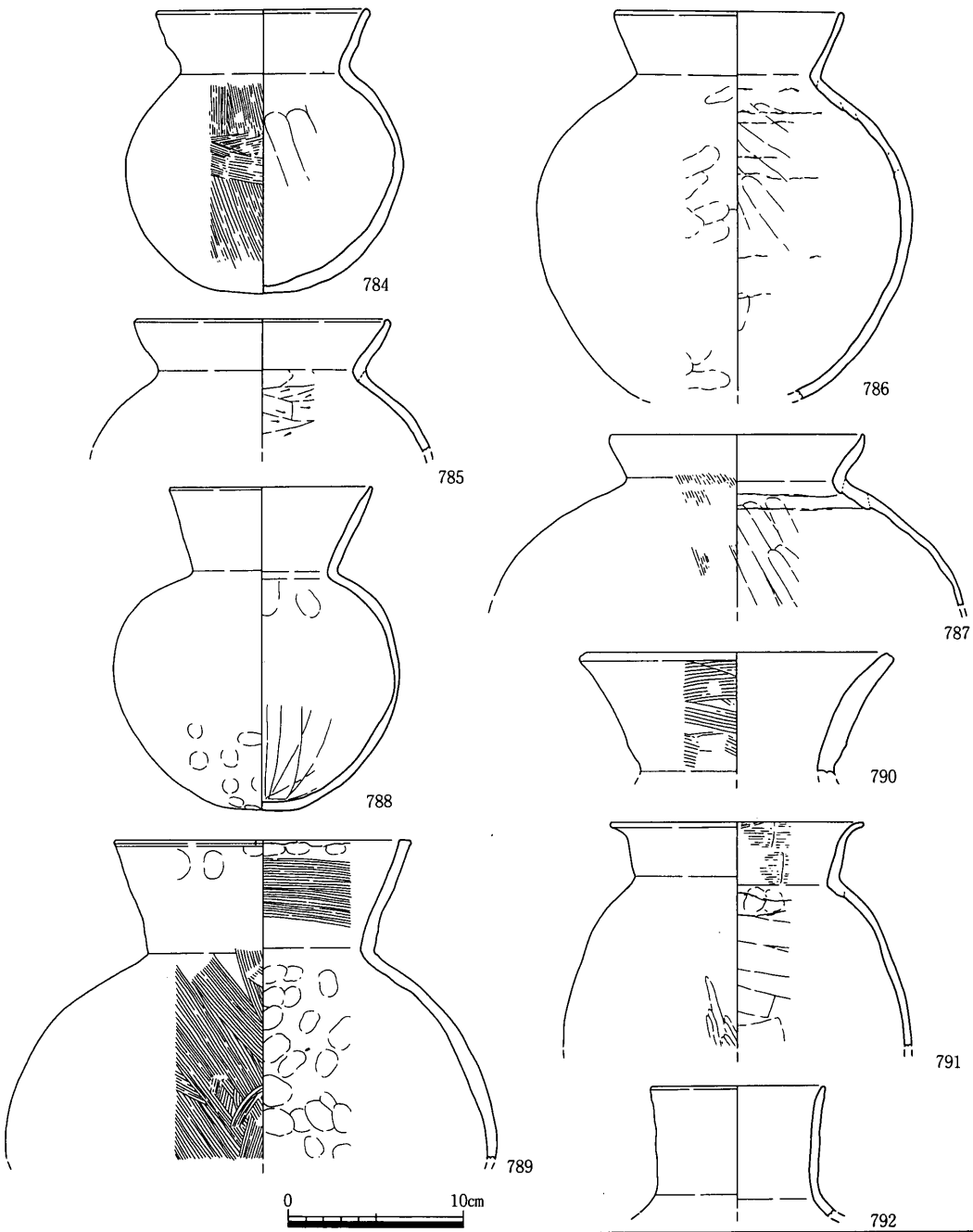
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
767	土・甕	14.4	26.8		粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		外面に煤付着
768	土・甕	12.9	23.5		粗・普	良好	浅黄,橙・黒	ナデ	ナデ		
769	土・甕	14.4	18.3		粗・普	良好	灰褐・黒褐	ナデ	ナデ		外面に煤付着
770	土・甕	16.0			中・普	良好	赤褐・鈍黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母を含む
771	土・甕	14.9			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		
772	土・甕	15.0			中・普	良好	黒・オリーブ	ナデ・ハケ目	ケズリ		外面に煤付着
773	土・甕	15.3	22.9		粗・普	良好	明赤褐・黒	ナデ	ナデ		

第211図　C区ＳＲ02出土遺物（6）（1／4）



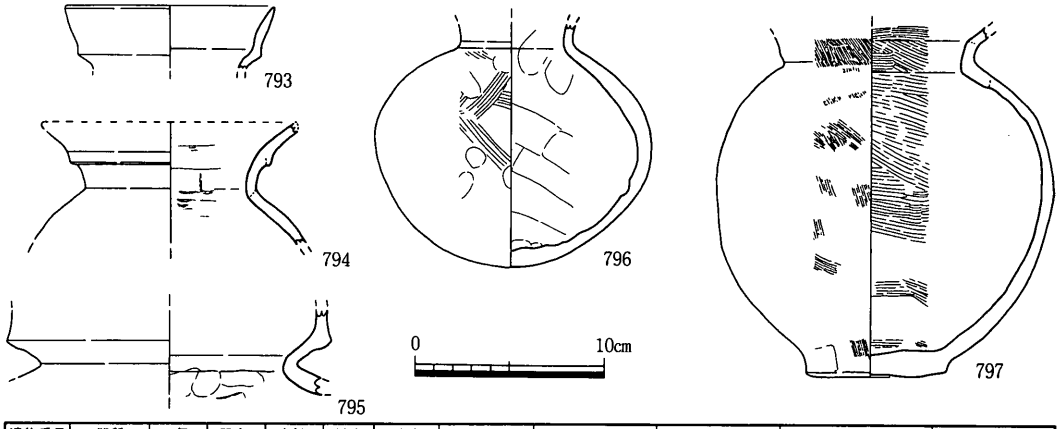
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
774	土・甕	16.8			粗・普	良好	灰黄	ハケ目→ナデ	ﾊｹ目→ナデ・ｹｽﾞﾘ		
775	土・甕	13.6	22.3		中・普	良好	淡灰茶～灰茶	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ		
776	土・甕	14.5			粗・普	良好	オリーブ黄	ナデ	ハケ目		
777	土・甕				中・普	良好	褐灰，鈍い橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目		
778	土・甕	13.3	15.9		粗・普	良好	明褐灰～橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
779	土・甕	11.4			粗・普	良好	橙～黒褐	ナデ	ナデ・ケズリ		
780	土・甕	11.2			粗・普	良好	黒褐・暗灰黄	ナデ	ナデ		
781	土・甕	16.0			粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		外面に煤付着
782	土・甕	14.6			細・普	良好	褐灰	ナデ	板ナデ・ケズリ		
783	土・甕				中・普	良好	鈍い橙～黒褐	ナデ	ナデ		

第212図　C区ＳＲ02出土遺物（7）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
784	土・壺	12.0	15.7		粗・普	良好	浅黄・橙	ハケ目・板ナデ	ナデ	胴中央が少し凹む	
785	土・壺	14.6			粗・多	良好	褐灰，鈍い橙	ナデ	板ナデ・ケズリ		外面に煤付着？
786	土・壺	13.1			粗・普	良好	暗褐	ナデ	ナデ		
787	土・壺	14.5			粗・多	良好	黄灰	ハケ目→ナデ	ナデ		
788	土・壺	11.6	18.4		微・普	良好	淡黄土～淡黒	ミガキ・ナデ	ナデ	タール状の物が付着	
789	土・壺	16.8			粗・普	良好	鈍い橙・褐灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
790	土・壺				粗・普	良好	黒・黄褐	ナデ	ナデ・ハケ目		
791	土・壺	14.5			中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ		
792	土・壺	10.0			中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		

第213図　C区ＳＲ02出土遺物（8）（1／4）



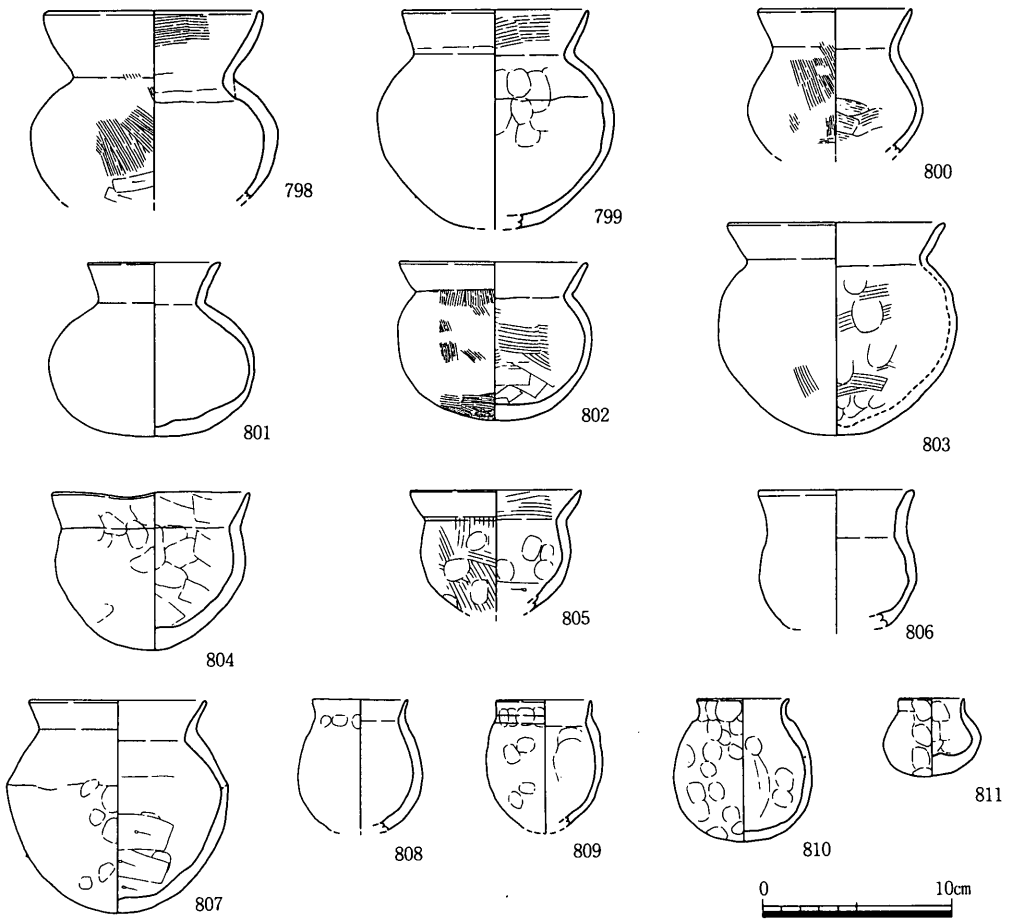
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
793	土・壺	11.0			微・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
794	土・壺				粗・普	良好	橙・浅黄橙	ナデ	板ナデ		
795	土・壺				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
796	土・壺				粗・普	良好	にぶい黄・黒	ハケ目→ナデ	ナデ		
797	土・壺			7.5	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		

第214図　C区SR02出土遺物（9）（1／4）

原木は直径10cm以下のものばかりであり，出土した木器のすべてがここで加工されたとは考えにくい。

704～724は縄文時代晩期の土器である。深鉢はすべて口縁部のやや下外面に刻み目突帯を張りつけるが，さらに口縁部上面に刻み目を入れるものと入れないものに細分される。また刻み目は右方向から入れられる。704は頸部と胴部の境に沈線をめぐらせる。711も同様に沈線をめぐらせたうえに縦方向の沈線で文様を描く。715～720は鉢・浅鉢である。内外面とも磨くものが多いが，外面の一部にケズリ痕の残るものもある。715～717は口縁内面に２条の沈線をめぐらせる。718は欠けているがおそらく口縁部が屈曲して開くものである。721～724は壷である。721は摩滅しているが黒色の壷の胴部である。矢印状の沈線文様が描かれ中には赤色顔料の痕跡がかすかに残る。722は内外面とも光沢豊かに磨きこまれた黒色磨研壷である。胴部最大径の少しうえの部分に沈線が１本めぐる。

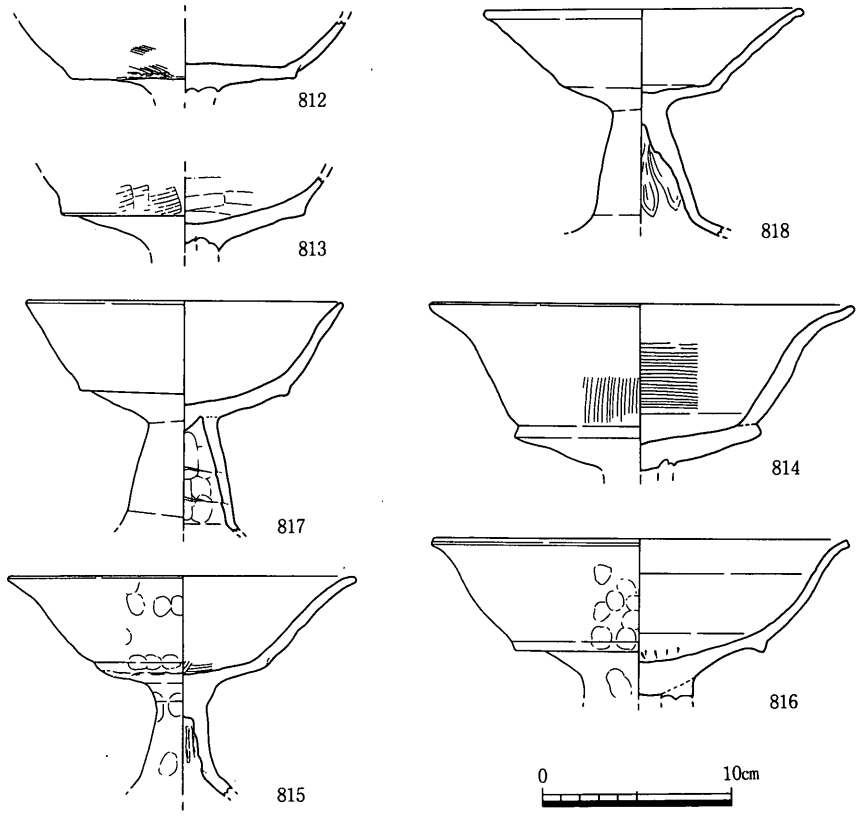
725～766は弥生時代の土器である。725～734は甕である。口縁部は厚さがほぼ一定で，端部は平坦面をなし凹線などははいらない。外面はハケ目もしくはナデ，内面はヘラケズリの他にナデやハケ目がある。底部は平底である。735～743は壷である。735は頸部と胴部の境に刻みを入れた突帯を張りつける。738は口縁部に５本の沈線をめぐらせる。736は葦の類で刺突文を付ける。739は胴下半の張る壷で内外面ともハケ目でその後内面の一部をヘラケズリする。ハケ目・胎土とも粗く全体に粗雑な印象をうける。740は小さめの細



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
798	土・小丸壺	11.6			中・普	良好	褐灰	ナデ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ	ハケ目・ナデ		
799	土・小丸壺	9.9			細・普	良好	灰黄褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金雲母を含む
800	土・小丸壺	8.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
801	土・小丸壺	7.0	9.1		粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		
802	土・小丸壺	10.0	8.3		中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目		
803	土・小丸壺	11.5	11.6		中・多	良好	淡黄灰～灰茶	ナデ	ナデ		胴に煤付着
804	土・小丸壺	10.4	8.3		粗・多	良好	黒褐～鈍黄褐	ナデ	板ナデ		
805	土・小丸壺	9.0			粗・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ﾊｹ目・ナデ・ｹｽﾞﾘ		
806	土・小丸壺	8.2			粗・普	良好	灰	板ナデ	板ナデ・ケズリ		
807	土・小丸壺	9.4	11.2		粗・普	不良	黄橙，橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
808	土・壺	5.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		
809	土・壺	5.0			粗・普	良好	褐	ナデ	ナデ		
810	土・壺	4.9	8.5		粗・普	良好	黒褐，赤褐	ナデ	ナデ		
811	土・壺	3.5	4.1		中・多	良好	橙	ナデ	ナデ		

第215図　C区ＳＲ02出土遺物（10）（1／4）

頸壷である。741は外面にヘラでぎこちない文様を描く。745～747は高杯の脚部で，いずれも透し穴があけられる。745は４つずつ２重にあけるつもりが上段には３つしかあけられていない。747は外面の杯と脚の境をヘラケズリしている。748～761は鉢である。748・749は大形品である。750～752は底部面積が小さくやや脚状となる。753・754は平底であ

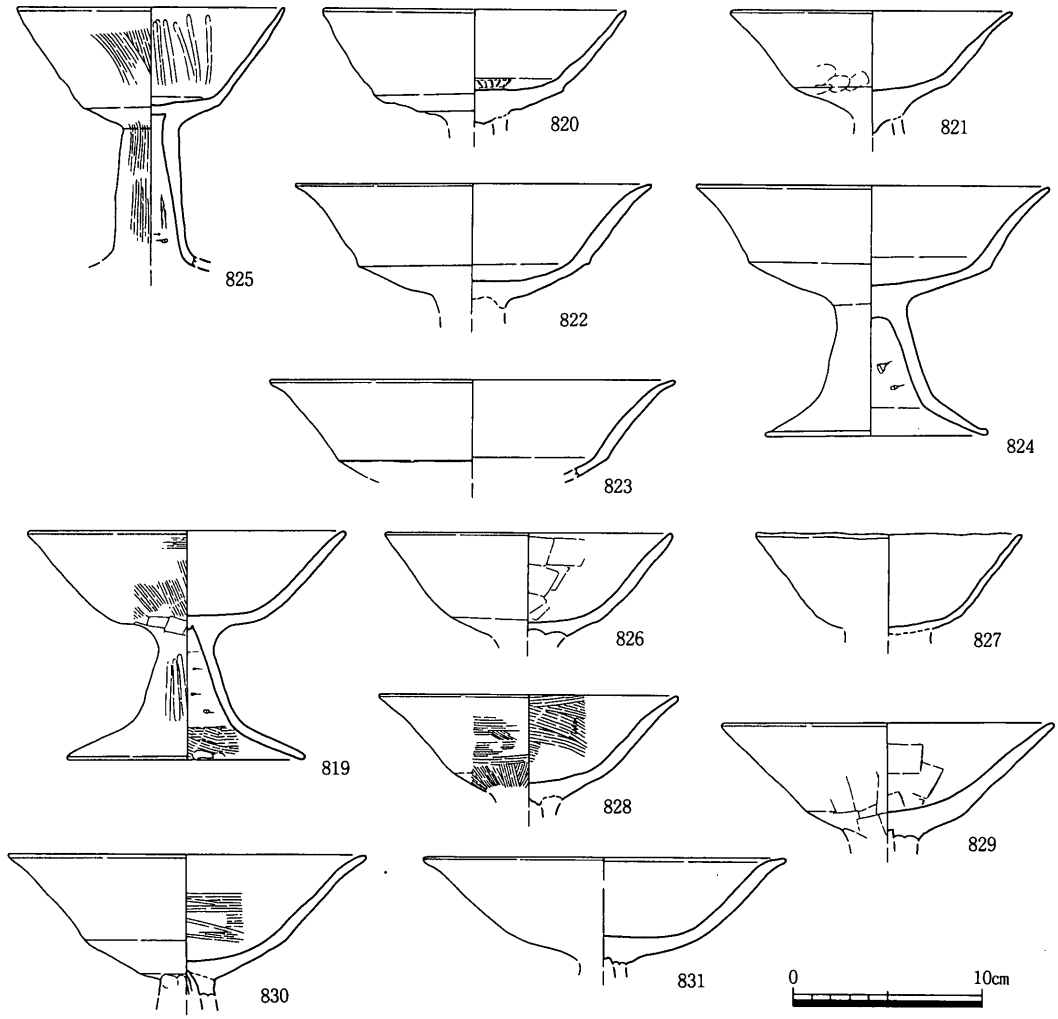


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
812	弥・高杯				粗・普	良好	明赤褐，橙	ナデ→ハケ目	ナデ		
813	土・高杯				細・普	良好	暗褐	ナデ	板ナデ	下川津B類	金雲母を含む
814	土・高杯	22.4			粗・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
815	土・高杯	18.4			粗・普	良好	黒褐・褐灰	ナデ	ナデ・ハケ目		
816	土・高杯	22.0			粗・普	不良	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
817	土・高杯	16.7			中・多	良好	橙	ナデ	ナデ		
818	土・高杯	16.8			粗・普	良好	鈍い橙～黄灰	ナデ	ナデ		

第216図　C区ＳＲ02出土遺物（11）（1／4）

る。755・756は椀形である。757・758は安定した脚が付き，上げ底となる。759・760は鉢と脚のあいだが間延びしている。760は内面にヘラケズリの痕が残る。761は低脚杯ともいえる。内面一面に粗いハケ目をつけ，外面にはヘラケズリも残り，全体に粗雑な印象を受ける。762～765は製塩土器である。外面ヘラケズリ・内面ナデ調整を施している。大形品（762・764）は小形品（763・765）より時期的には古いと考えられている。766は弧を描く棒状をしていることから何かにつく把手と考えられる。両端とも欠けている。以上の土器は弥生時代Ｖ期前半のものと考えられる。

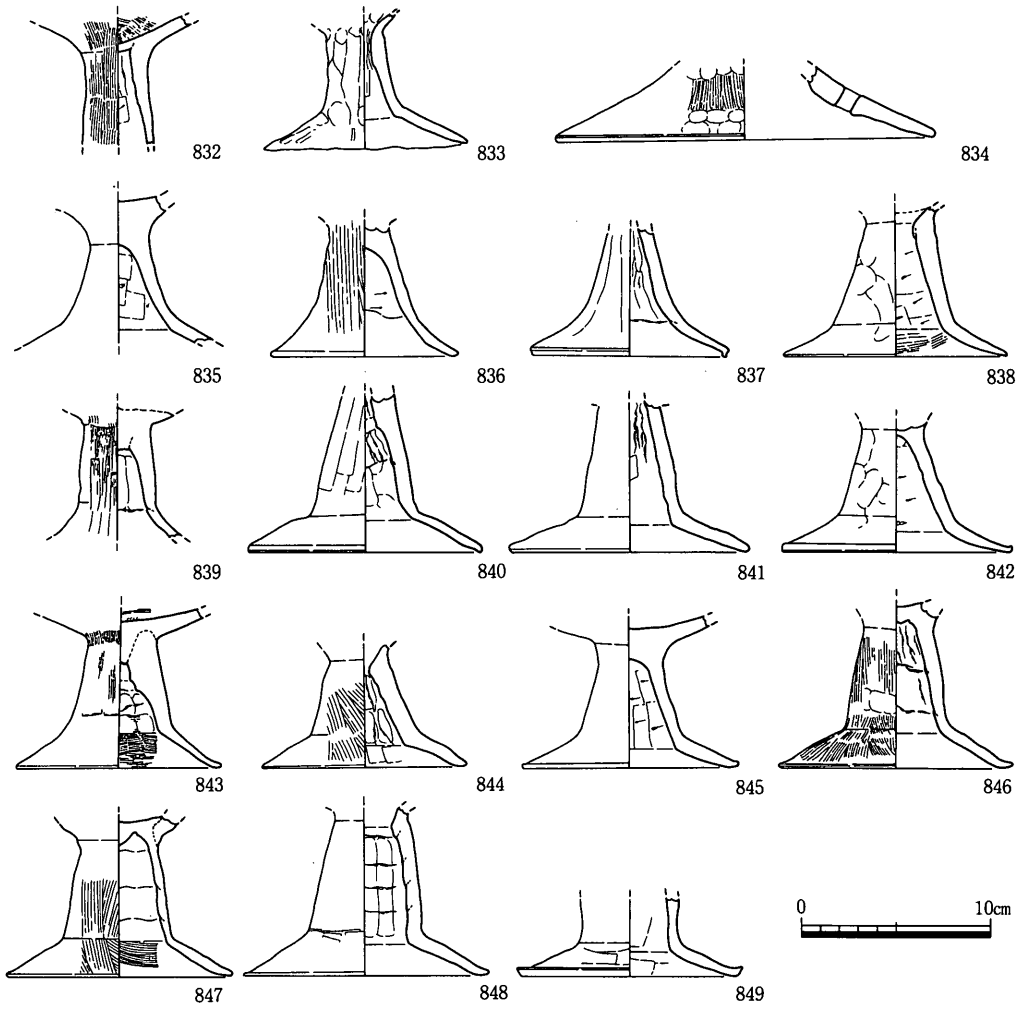
767～849は古墳時代の土師器である。767～783は甕である。外面はほとんどナデである



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
819	土・高杯	16.8	12.0	12.5	粗・普	良好	浅黄橙	ﾊｹ目→ナデ・ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ・ﾊｹ目		金雲母を含む
820	土・高杯	16.0			微・普	良好	灰白・黒褐	ナデ	ナデ		
821	土・高杯	14.9			粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ		
822	土・高杯	18.8			中・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ		
823	土・高杯	21.3			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
824	土・高杯	18.6	12.9	11.7	粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
825	土・高杯	14.0			微・普	良好	褐	ハケ目→ナデ	ナデ→ﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ		金雲母を含む
826	土・高杯	17.6			中・普	良好	灰白	板ナデ	板ナデ		
827	土・高杯	14.0			中・普	良好	鈍い褐，赤褐	ナデ	ナデ		
828	土・高杯	15.8			中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		
829	土・高杯	15.2			粗・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ		
830	土・高杯	18.9			中・普	良好	鈍い赤褐・橙	ナデ	ハケ目		
831	土・高杯	19.1			微・普	良好	浅黄橙，橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む

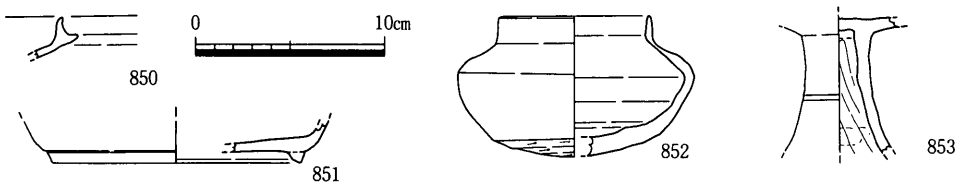
第217図　C区ＳＲ02出土遺物（12）（1／4）

が，中にはハケ目の残るものもある。内面は口縁部直下までヘラケズリをしたりつよく指でナデ上げたり横方向への板ナデを施したりする。767・770は口縁部が内湾しながら開く。口縁端部は肥厚しあるいは内傾する。768・769・772～775・777～782は口縁部が外湾しな



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
832	土・高杯				粗・普	良好	浅黄	ハケ目	ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ→ナデ		
833	土・高杯			10.8	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ		
834	土・高杯			20.0	粗・普	良好	浅黄	ミガキ	ナデ		金雲母を含む
835	土・高杯				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
836	土・高杯			10.0	粗・普	良好	にぶい黄	ハケ目・ナデ	板ナデ・ケズリ		
837	土・高杯			10.5	中・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ		
838	土・高杯			11.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ・ハケ目		
839	土・高杯				中・普	良好	明赤褐，黄褐	ハケ目・板ナデ	ナデ		
840	土・高杯			12.4	中・普	良好	浅黄橙～橙	ナデ	ナデ		
841	土・高杯			12.8	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
842	土・高杯			12.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
843	土・高杯			10.8	中・多	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		
844	土・高杯			10.8	中・多	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
845	土・高杯			11.4	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ		
846	土・高杯			12.4	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・ナデ	ナデ	渦巻状に粘土を重ねる	金雲母，胎土黒褐
847	土・高杯			11.9	粗・普	良好	赤褐	ハケ目	ナデ・ハケ目		
848	土・高杯			12.9	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
849	土・高杯			11.8	中・普	良好	鈍黄橙，灰黄	板ナデ	板ナデ		

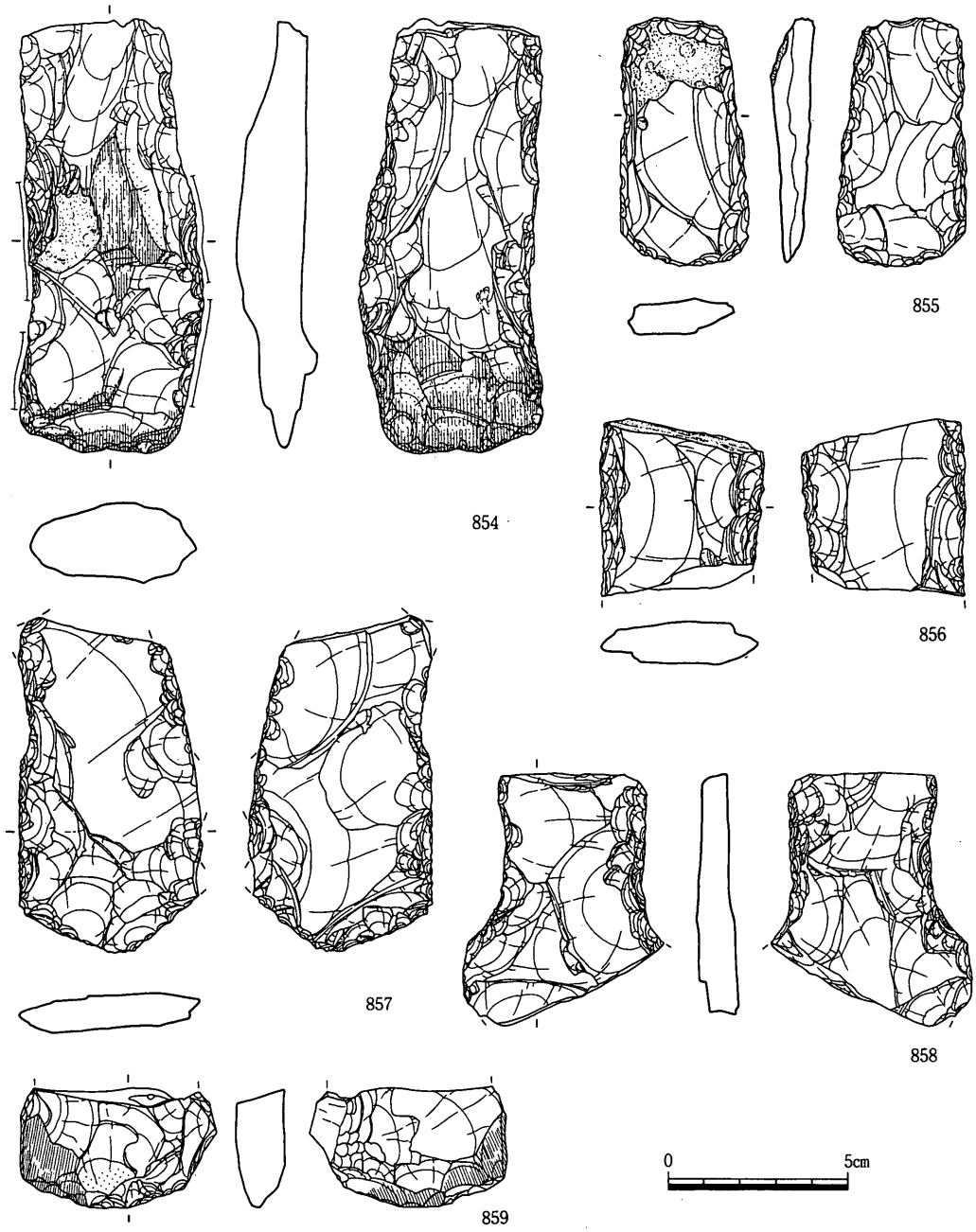
第218図　C区ＳＲ02出土遺物（13）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
850	須・杯身				細・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
851	須・高台杯			13.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
852	須・壺	8.1	7.1		中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
853	須・高杯				中・普	良好	淡黄～灰白	ナデ	ナデ	沈線	

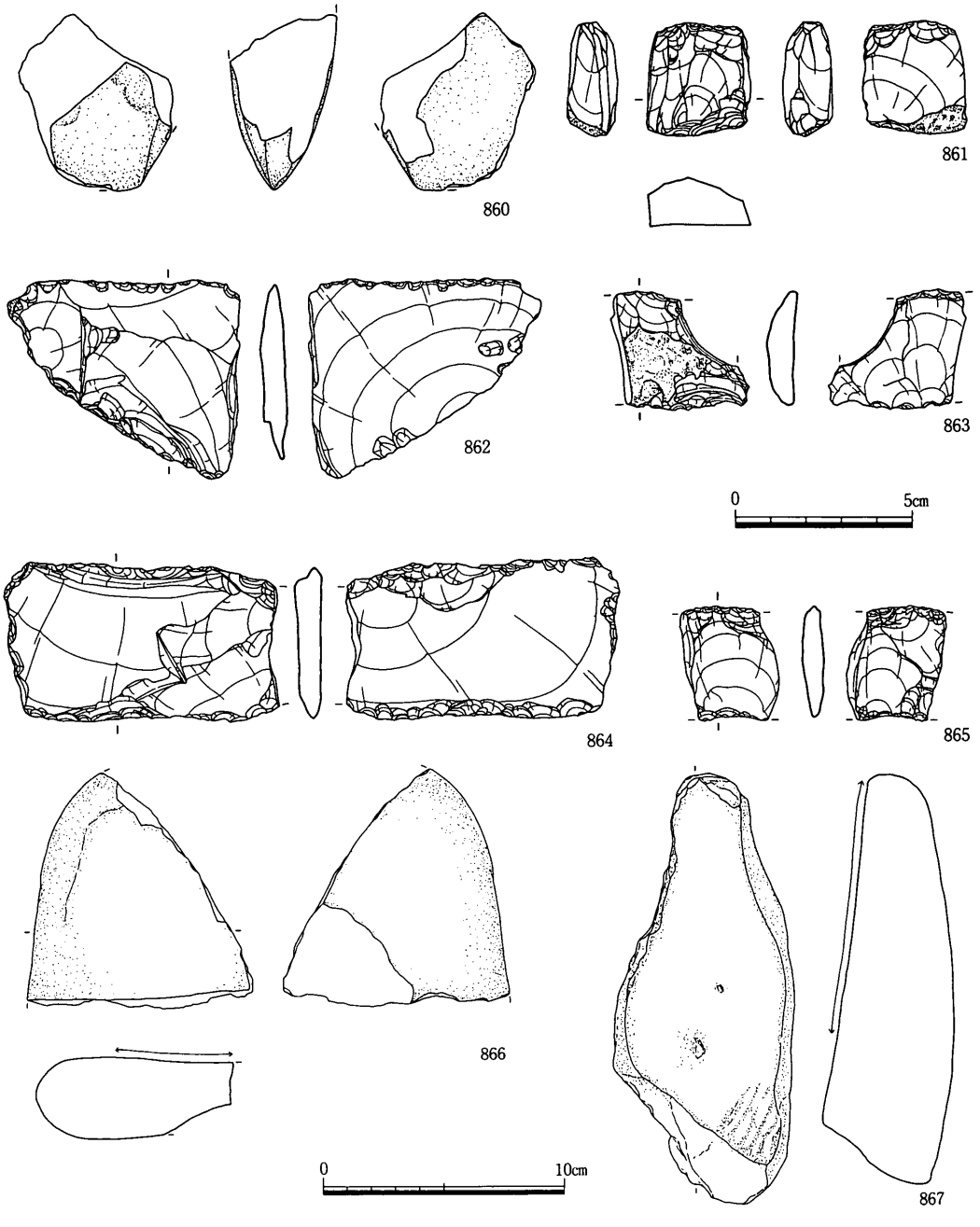
第219図　C区ＳＲ02出土遺物（14）（1／4）

がら開く。口縁端部は丸みをもつものから尖り気味のものまである。778・780は内面に粘土のつなぎ目がよく残る。778は内面底にも煤状のものが付着している。779は光沢のある漆状のものが外面に付着している。788も同様である。784～797は壷である。調整は基本的には甕と同様であるが胴外面下半をヘラミガキするもの（791）や胴内面まできれいにハケ目を施すもの（797）がある。784～786は口縁部が内湾しながら開く。口縁端部は肥厚する。791は口縁端部が横に開く。792は口縁部が直立する。793～795は二重口縁となっているが，794は突帯状になる。796・797も二重口縁になるものと考えられる。797はきれいな平底をしている。798～807は小型丸底壷である。口縁部の開きはほとんどのものが胴最大径より小さい。調整はナデが多いが胴下半にヘラケズリ痕の認められるものもある(801・805・807)。804～806はくびれ具合が鈍い。807は胴最大径部分に稜ができる。808～811は手捏ねの壷である。内外面に指頭痕が顕著に残る。812～849は高杯である。杯部は屈曲部が突帯状にはみ出すもの（812～816）とただの稜線になるもの（817～824）と丸みをもつもの（825～831）に分けられる。すべて杯部底を突起状にふくらませるなどして脚部に差し込んで両者をつなげている。屈曲部が突帯状にはみ出すものは突帯が垂れるものと垂れないものに細分できる。口縁部は端部手前で外に反りかえる。819は他のものが簡単な調整ですませる中で外面は細かいハケ目・内面はヘラミガキときれいに仕上げている。脚部は細い円筒状で裾が大きく横に開く。825は脚部外面を磨いている。脚部は筒部が細く太さがほぼ一定のもの（832・833）と下開きの太めのもの（835～849）に分かれる。裾端はほとんどが丸みをもっておわるが，849のように平坦面をもつものや837のように下に向かって尖るものがある。832は細かいハケ目を施す。833は手捏ね風の感じを残す。834は個数は不明だが透し穴をあける。裾の径が著しく大きいことから弥生時代のものである可能性がある。840・846は渦巻き状に粘土紐を重ねた痕跡が残る。以上の土器は甕の口縁



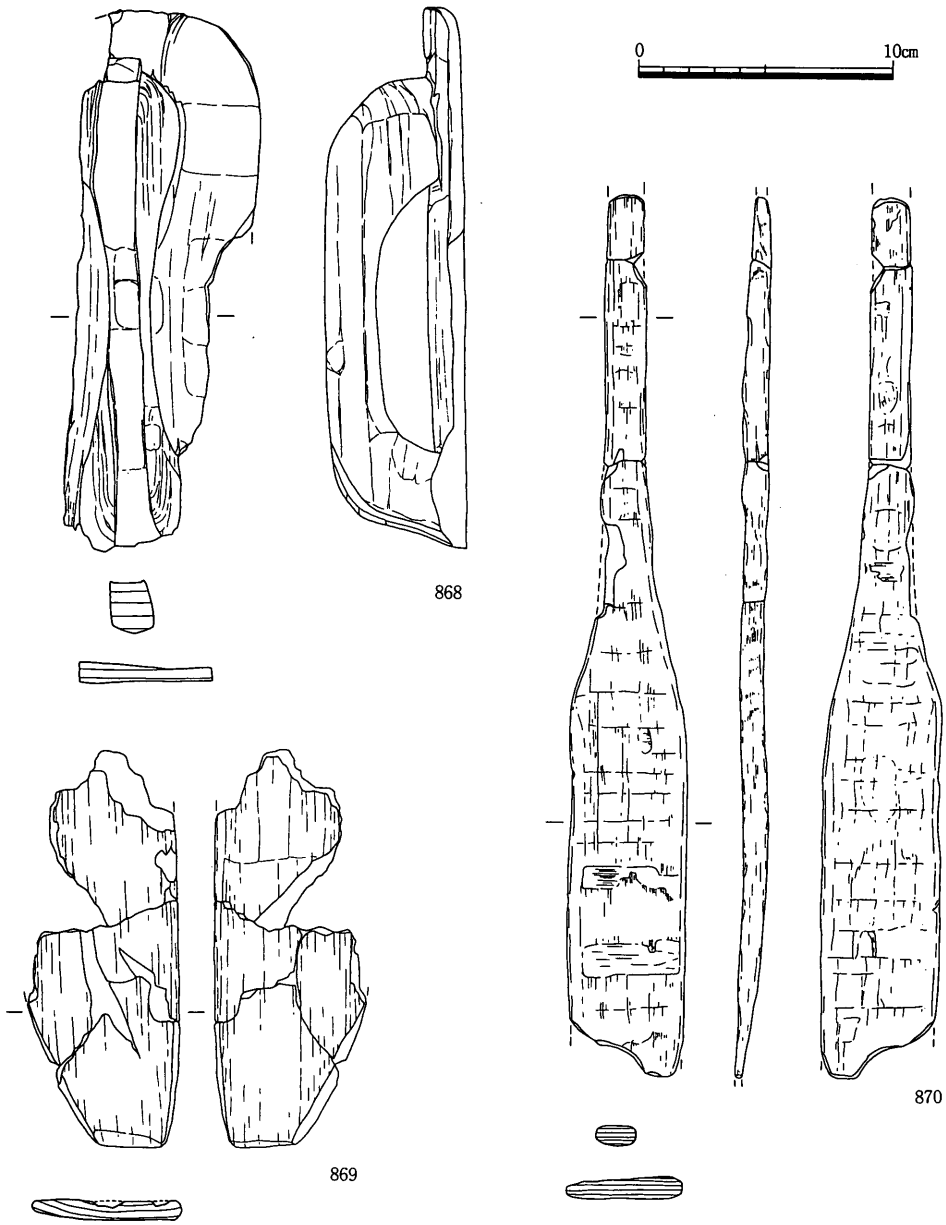
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
854	打製石斧	11.6	4.7	2.0	130	サヌカイト		
855	打製石斧	6.6	3.5	1.1	31	サヌカイト		
856	打製石斧	4.6	4.6	1.2	38	サヌカイト		
857	打製石斧	8.8	5.1	1.0	55	サヌカイト		
858	打製石斧	6.9	5.4	1.1	49	サヌカイト		
859	打製石斧	5.5	3.3	1.4	36	サヌカイト		

第220図　C区ＳＲ02出土遺物（15）（1／2）



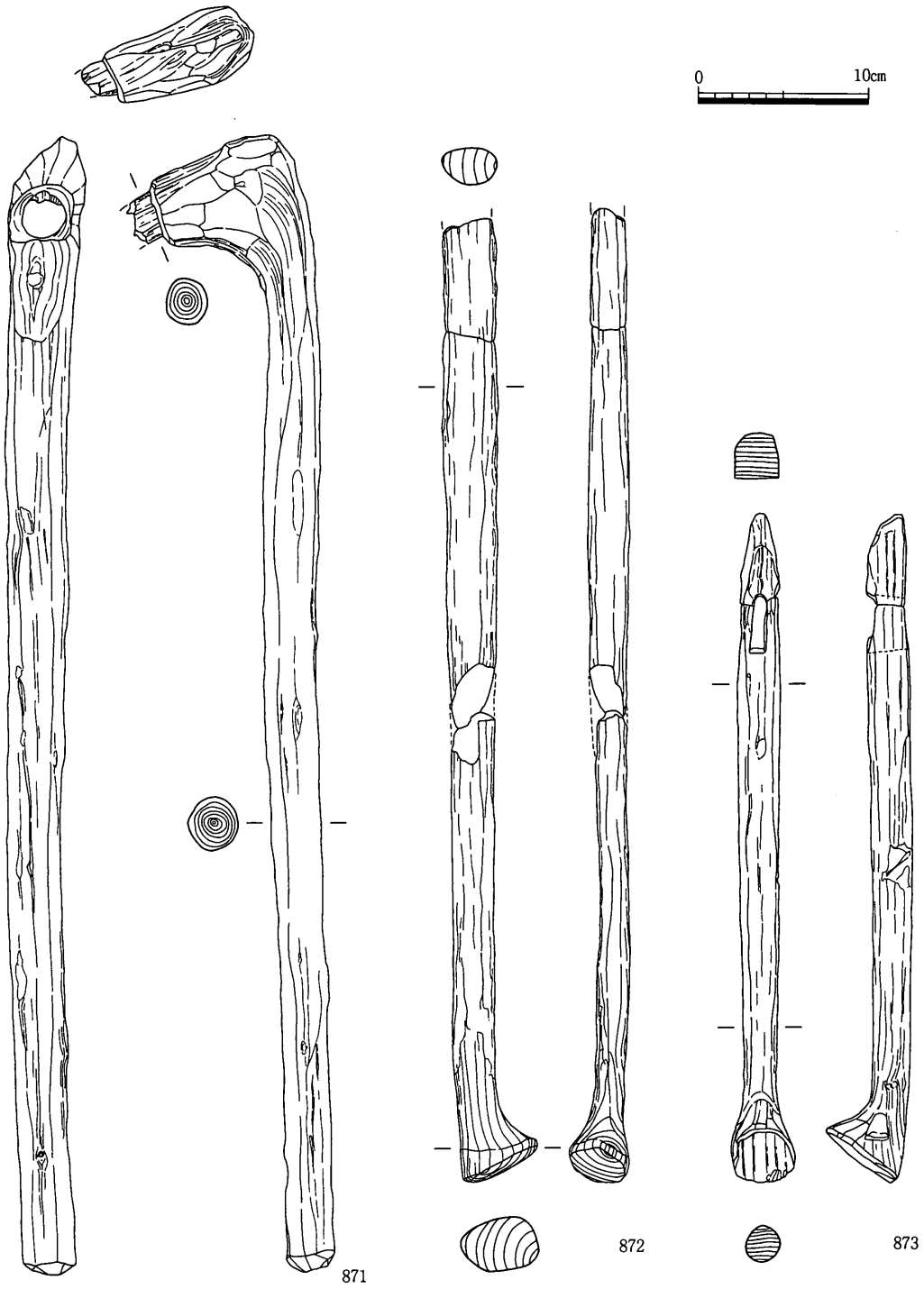
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
860	太型蛤刃磨製石斧	4.6	4.2	2.8	67	緑泥片岩		
861	楔形石器	2.9	3.1	1.3	17	サヌカイト		
862	スクレイパー	6.5	5.5	0.7	26	サヌカイト		
863	打製石包丁	3.5	3.3	0.8	10	サヌカイト		
864	打製石包丁	7.7	4.6	1.0	42	サヌカイト		
865	打製石斧	2.6	3.3	0.7	8	サヌカイト		
866	石皿	9.8	9.3	3.4	381	砂岩		
867	砥石	17.8	7.4	5.0	908	安山岩		

第221図　C区ＳＲ02出土遺物（16）（1／2，1／3）



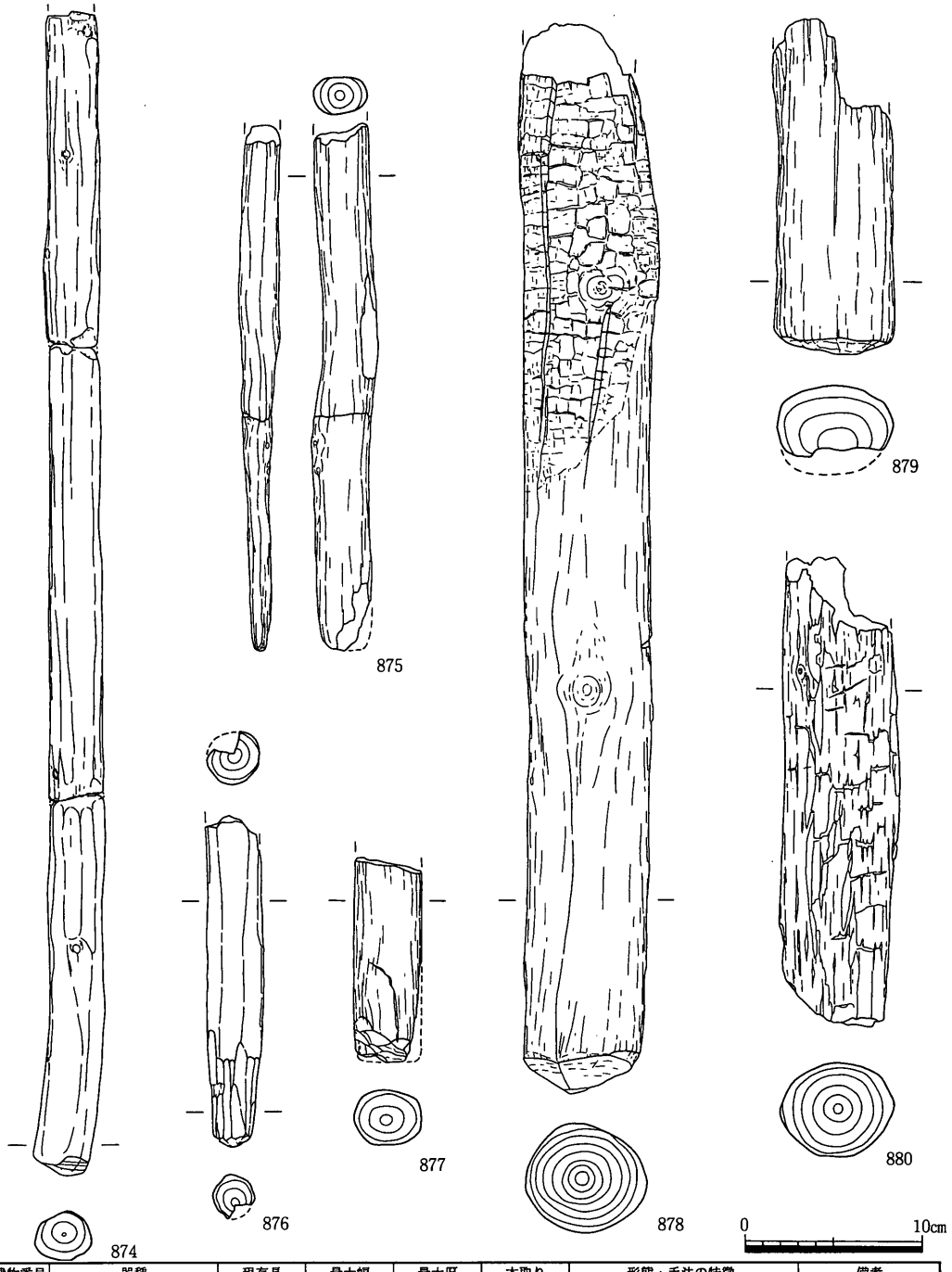
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
868	コテ状木製品	21.3	7.1	2.0	板目		
869	ヘラ状木製品	15.8	6.0	1.1	板目		
870	ヘラ状木製品	34.9	4.7	0.9	板目		

第222図　C区ＳＲ02出土遺物（17）（1／3）



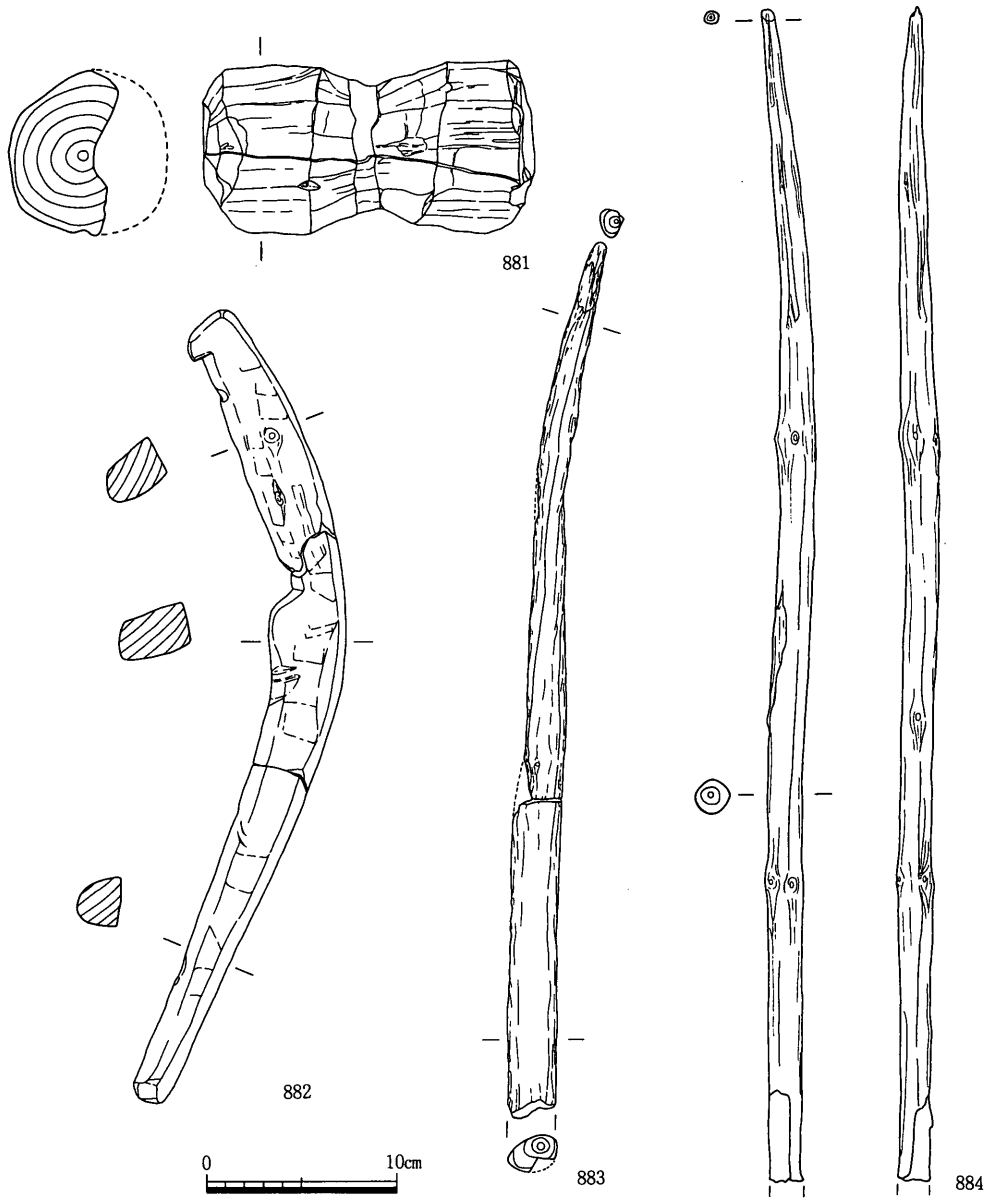
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
871	鉄斧の柄	66.3	10.5	3.5	芯持		
872	農具等の柄	56.0	3.2	2.3	柾目		
873	鎌の柄？	38.9	2.6		柾目		

第223図　C区ＳＲ02出土遺物（18）（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
874	農具等の柄	65.7	3.2	2.8	芯持		
875	農具等の柄？	29.1	3.2	2.2	芯持		
876	農具等の柄	18.7	3.2	3.1	芯持		
877	農具等の柄	11.3	3.8	3.1	芯持		
878	杵	60.5	7.2	6.1	芯持		
879	杵？	18.5	6.8	3.8	芯持		
880	杵？	26.4	6.5	5.3	芯持		

第224図　C区ＳＲ02出土遺物（19）（1／4）

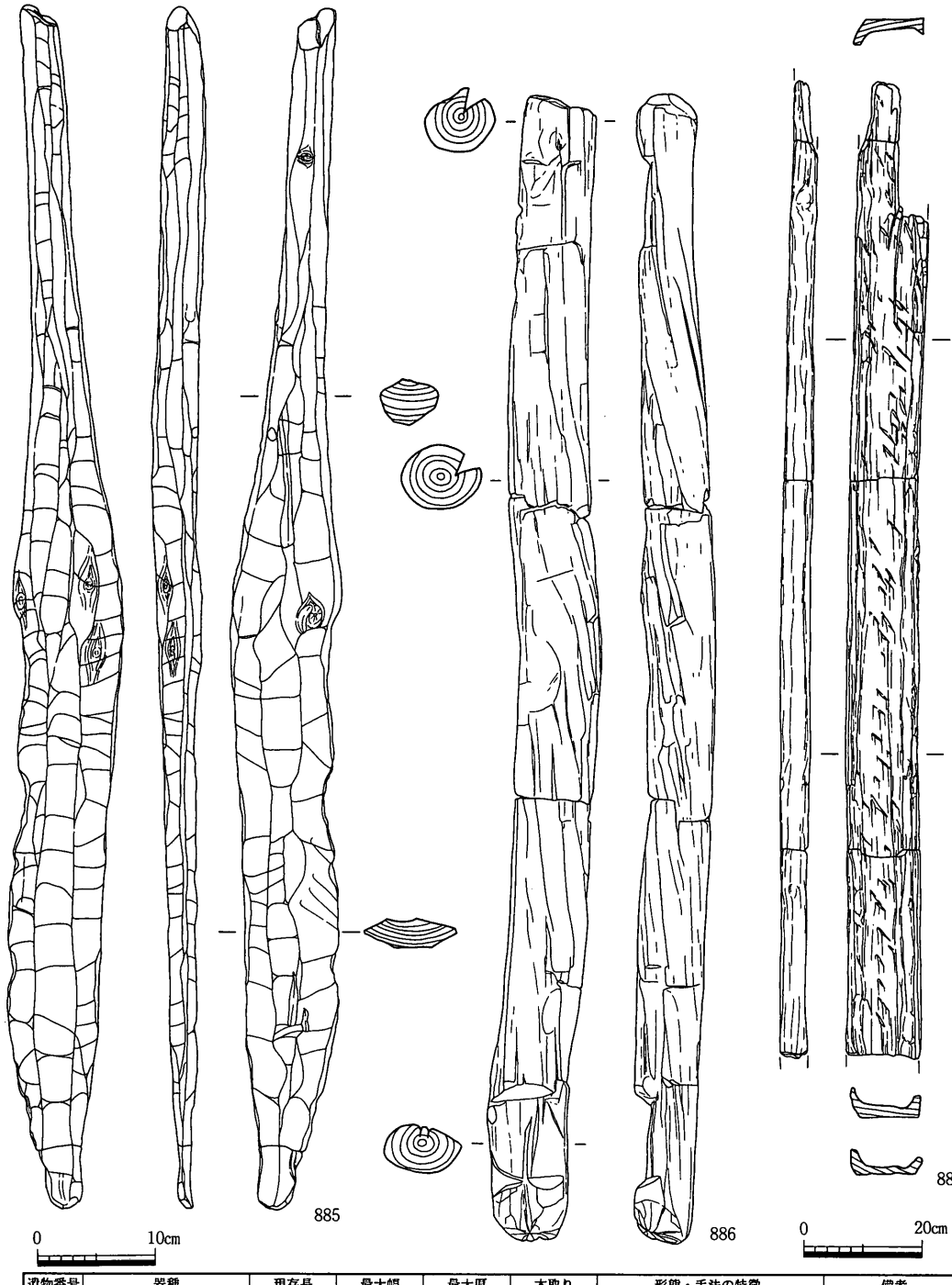


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
881	木錘	9.0	17.4		芯持		
882	用途不明品	41.5	4.1	2.4	板目		
883	弓	45.7	2.6	1.7	芯持		
884	弓	61.6	1.7	1.8	芯持		

第225図　C区ＳＲ02出土遺物（20）（1／4）

が外反するものが多いことや小型丸底壷の口縁部の開きが胴最大径より小さいことや高杯の杯部の屈曲が丸みをもつことから布留式新段階以降の時期が考えられる。

850～853は須恵器である。850の杯は浅い。852は外面下半を回転ヘラケズリする。853

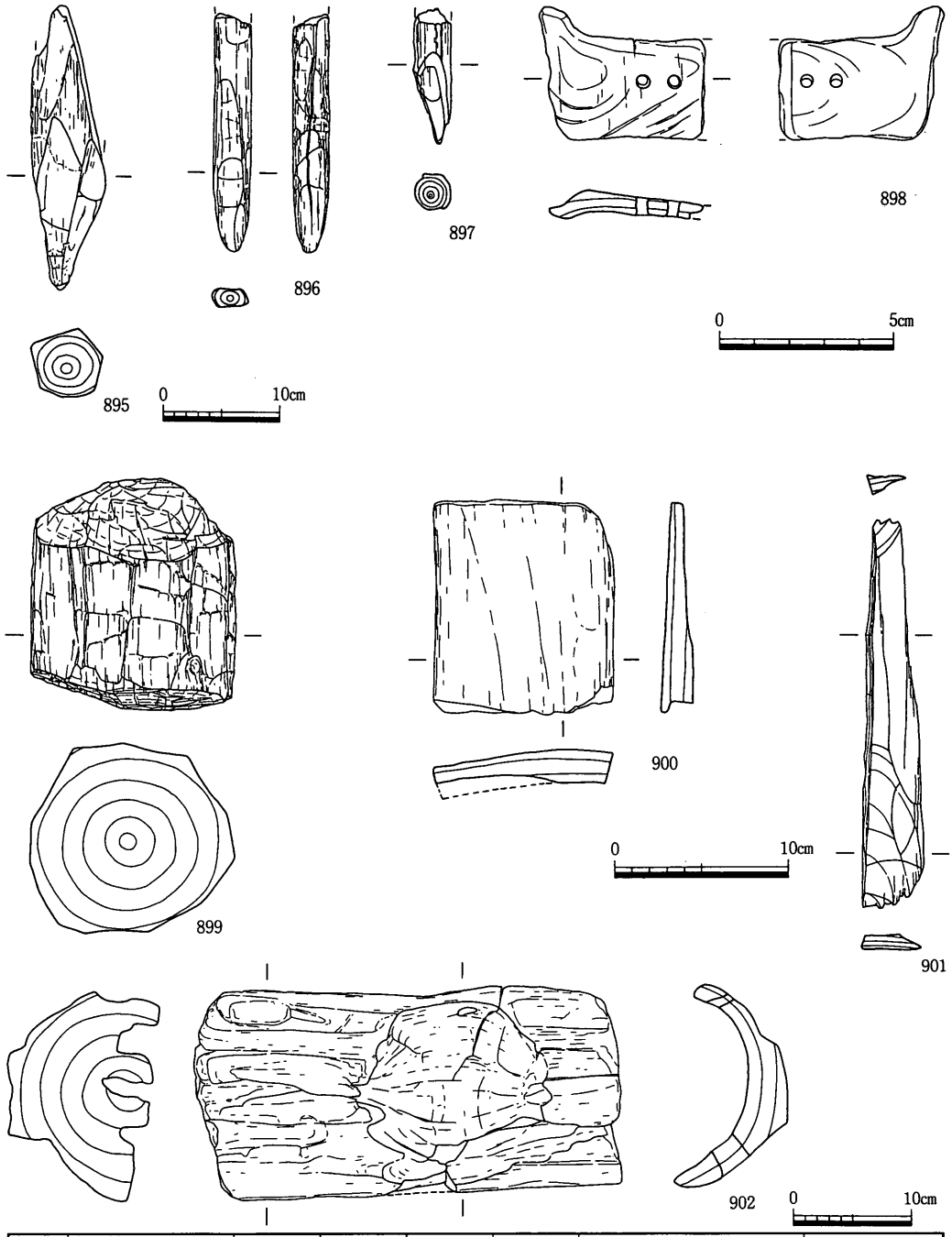


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
885	櫂	100.3	9.3	3.7	板目		
886	柱材	196.7	14.0	12.6	芯持		
887	樋	167.2	13.0	2.6	板目		

第226図　C区ＳＲ02出土遺物（21）（1／6，1／12）

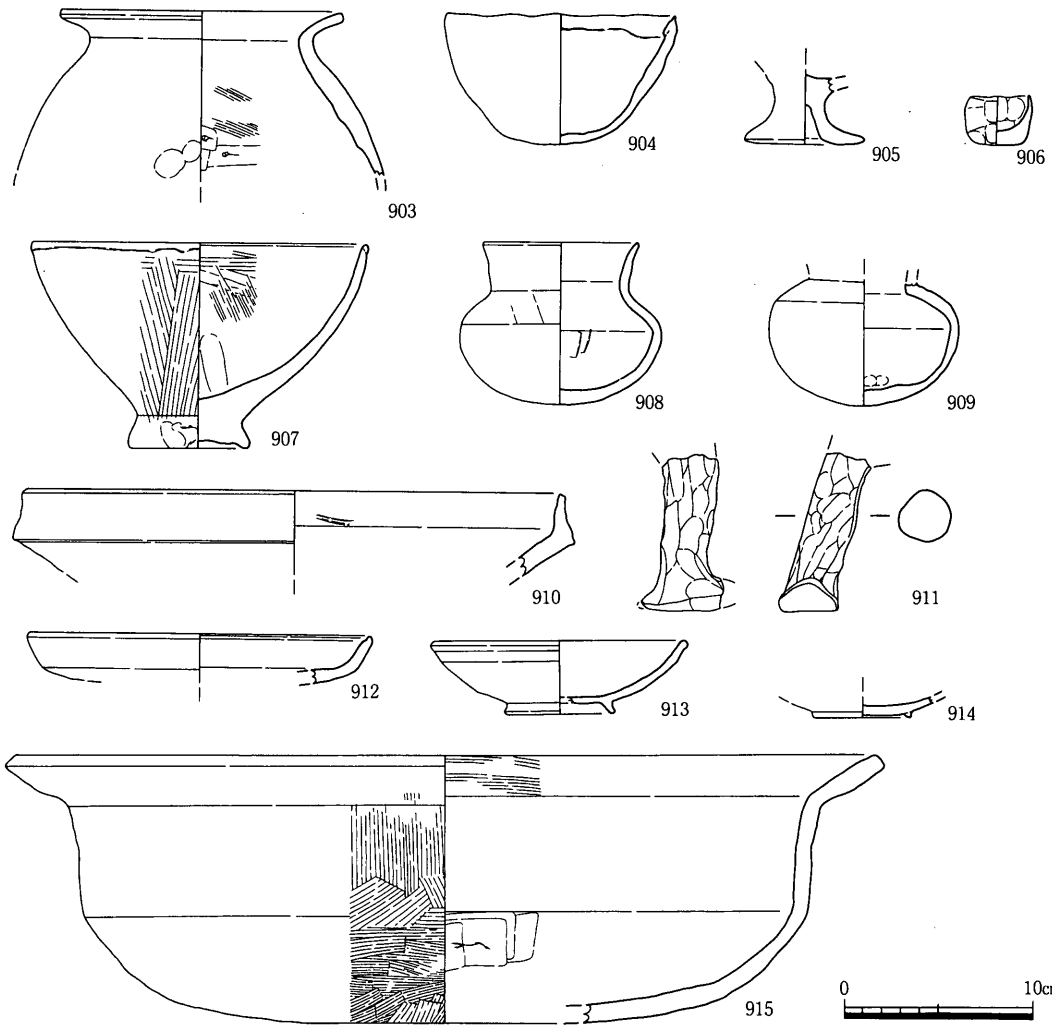
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
888	杭（板状）	90.1	4.7	2.1	柾目		
889	杭	87.6	5.3	5.3	芯持		
890	杭	67.2	5.2	4.9	芯持		
891	杭or農具の柄	62.7	3.4	3.4	芯持		
892	杭	60.8	3.2	3.8	芯持		
893	杭	57.0	4.8	4.4	芯持		
894	杭	48.5	2.6	2.6	芯持		

第227図　Ｃ区ＳＲ02出土遺物（22）（1／6）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
895	杭	23.4	6.1	5.5	芯持		
896	杭	19.3	3.2	2.6	芯持		
897	杭	11.2	3.3	3.0	芯持		
898	用途不明木製品	3.7	4.8	0.6	板目		
899	木っ端	19.5	17.5	16.1	芯持	きれいな面取り，柱材の端を切った?	
900	木っ端	12.1	10.3	1.9	板目		
901	木っ端	22.4	3.6	1.5	板目		
902	用途不明容器未製品	36.5	17.5	12.2	芯持	刳り抜き容器？でも穿孔がある	

第228図　C区ＳＲ02出土遺物（23）（1／2，1／4，1／6）

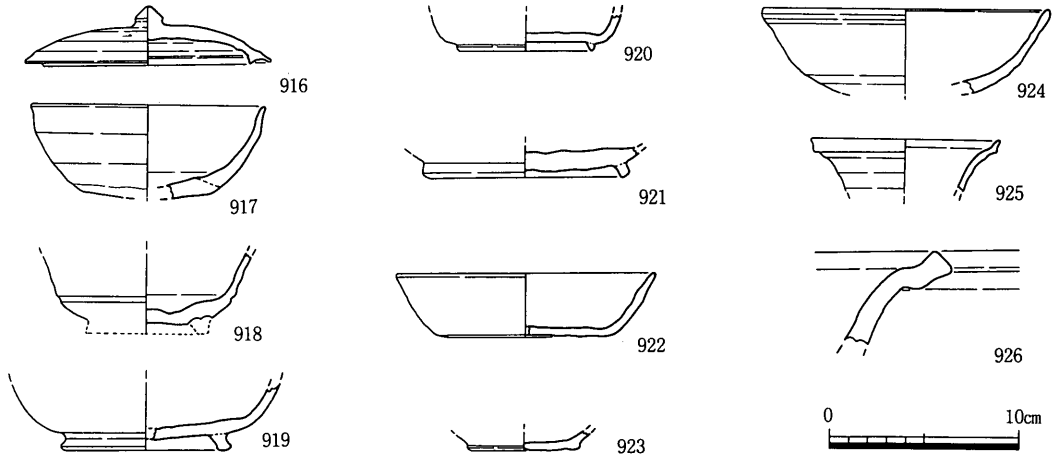


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
903	弥・甕	15.0			粗・普	良好	橙，明赤褐	ナデ	ナデ・ﾊｹ目→ｹｽﾞﾘ		
904	弥・鉢	12.0	6.9		粗・多	良好	にぶい褐	ナデ	板ナデ		
905	弥・鉢			6.4	粗・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		
906	土・手捏ね	3.2	2.6	2.2	細・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ		
907	弥・鉢	17.8	10.7	6.4	粗・多	良好	黒・鈍い黄褐	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目		
908	土・小丸壺	8.3	8.5		粗・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		
909	土・小丸壺				微・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
910	弥・器台	28.6			中・普	良好	淡黄，黄灰	ナデ	板ナデ		
911	土・盤				粗・多	良好	黄橙・明赤褐	ナデ	不明	一部に赤色顔料の痕	獣足
912	土・皿	18.1			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
913	土・椀	13.6	3.9	5.9	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
914	土・椀			3.2	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
915	土・土鍋	45.5			粗・普	良好	鈍い黄橙～灰	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		

第229図　C1区包含層出土遺物（1）（1／4）

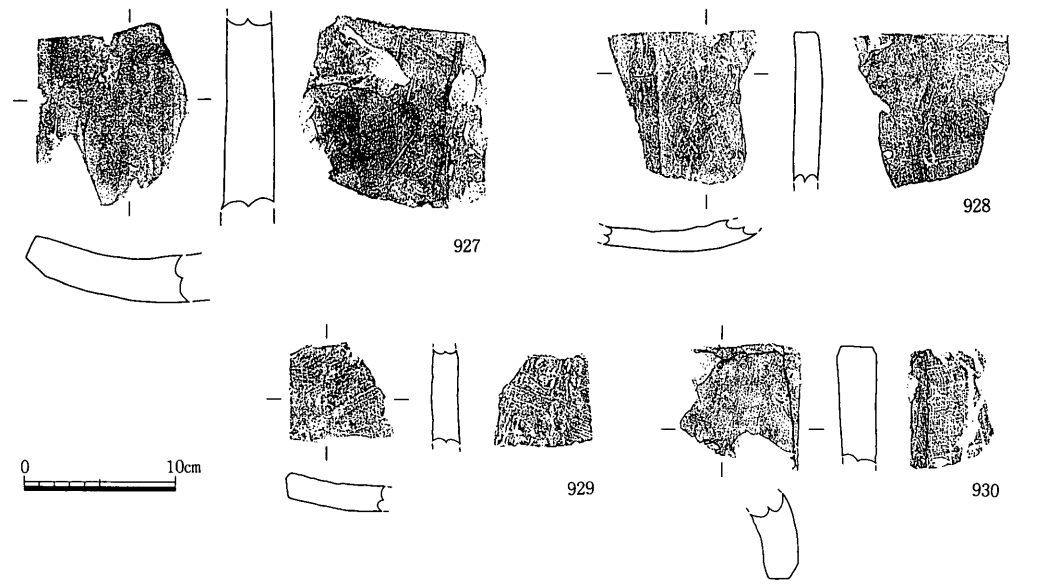
は杯部中位に沈線をめぐらす脚の長い高杯である。

854～867は石器である。854～859の打製石斧は平面形が長方形のものとばち形のものが



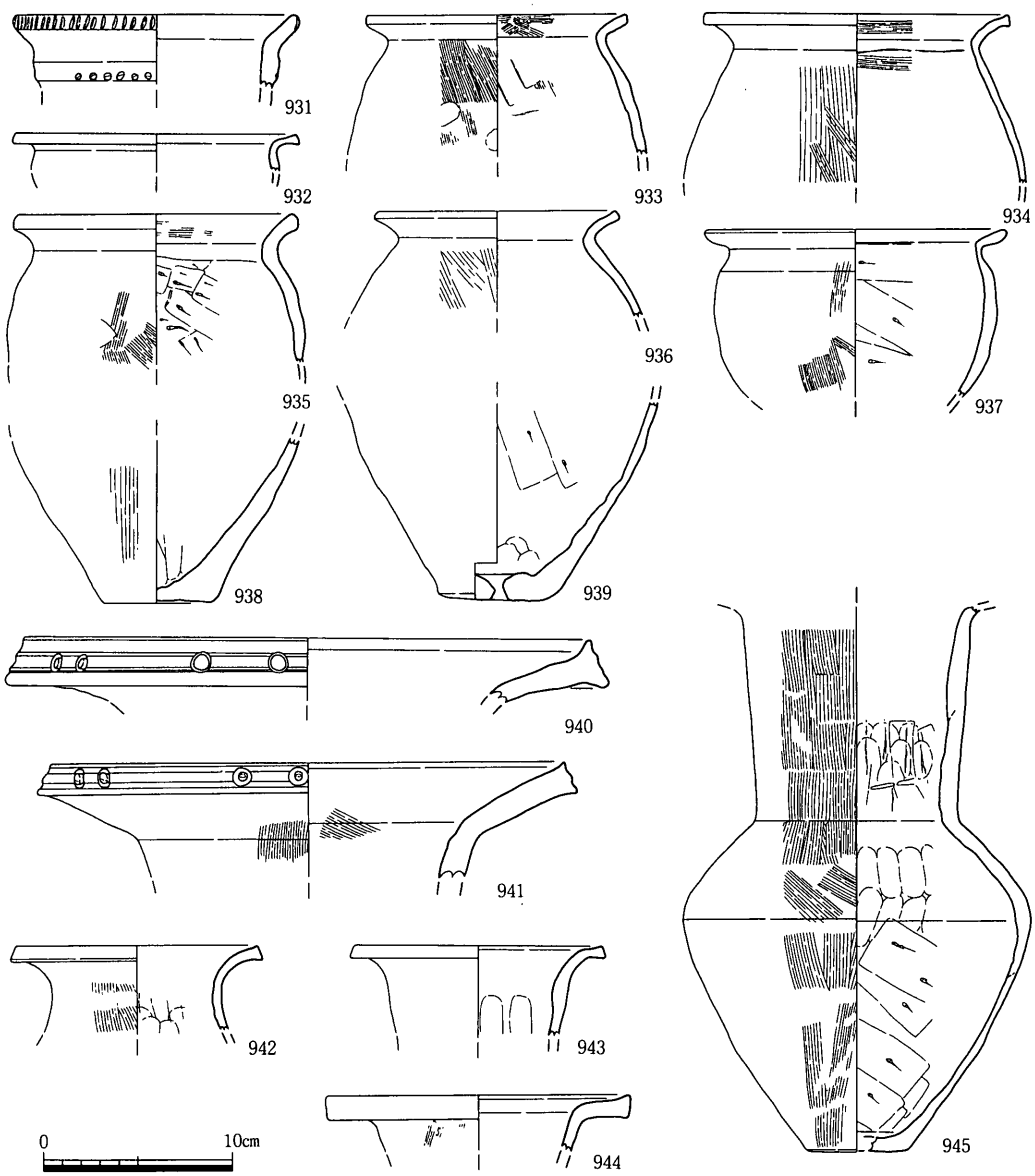
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
916	須・杯蓋	13.0	3.1		中・普	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ		
917	須・杯	12.4		6.8	中・普	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
918	須・高台杯			6.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
919	須・高台杯			9.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
920	須・高台杯			7.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
921	須・高台杯			11.0	粗・普	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ		
922	須・杯	13.7	3.3	9.2	微・普	不良	灰・にぶい黄	ナデ	ナデ		
923	須・杯			6.0	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
924	須・椀	15.1			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
925	須・ハ	9.9			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	
926	須・甕				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第230図　C1区包含層出土遺物（2）（1／4）



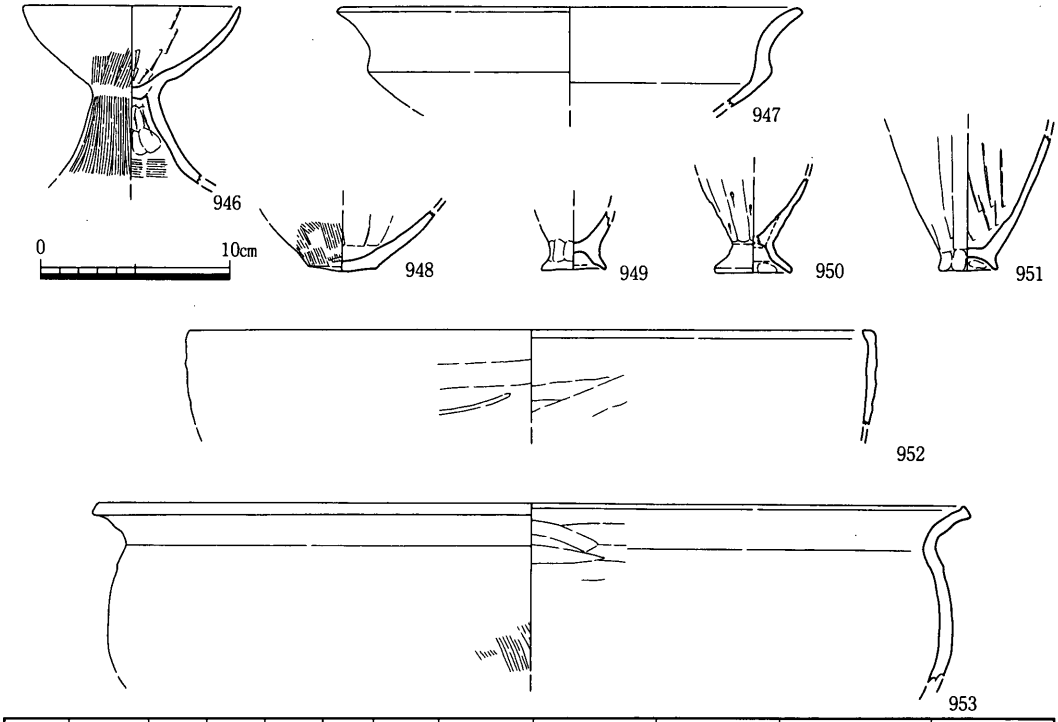
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
927	平瓦	3.1	板ナデ・ケズリ	板ナデ	6	-	粗・普	黒	良好	胎土は灰白	11.5
928	平瓦	1.8	ナデ	布目→ケズリ	-	16	粗・普	灰白	良好		10.3
929	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕	7	-	粗・普	灰白～暗褐，灰白	良好		6.2
930	丸瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	15	16	中・普	灰白～にぶい橙	良好		8.3

第231図　C1・2区包含層出土遺物（1／5）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
931	縄・壺	14.9			粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	不明	刻み目突帯，刺突文	
932	弥・甕	14.8			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
933	弥・甕	13.7			中・普	良好	鈍褐，鈍黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
934	弥・甕	16.0			中・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
935	弥・甕	15.1			粗・普	良好	鈍い黄橙，橙	ナデ・ハケ目	ﾊｹ目・ナデ・ｹｽﾞﾘ		
936	弥・甕	13.0			粗・普	良好	褐・黒，黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
937	弥・鉢	14.0			粗・普	良好	淡黄・橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
938	弥・甕			5.4	中・普	良好	にぶい黄・褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
939	弥・甑			5.6	粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ナデ	ケズリ	焼成前の穿孔	
940	弥・壺	30.0			粗・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ	竹管文・刺突文	
941	弥・壺	27.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目	沈線，竹管文	
942	弥・壺	13.3			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
943	弥・壺	13.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
944	弥・壺	16.1			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
945	弥・壺			5.4	粗・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		

第232図　C2区包含層出土遺物（1）（1／4）

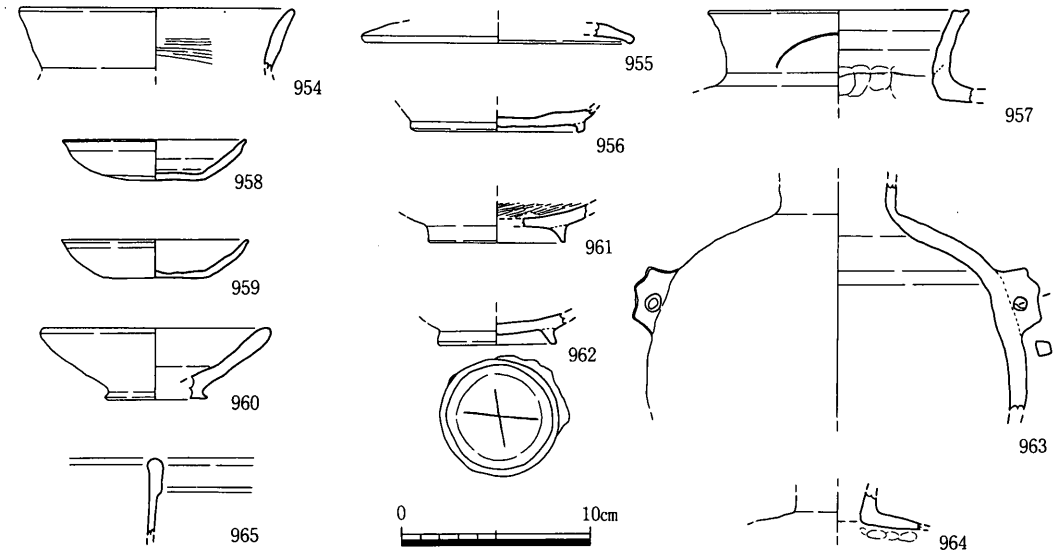


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
946	弥・高杯	11.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	板ナデ・ハケ目		
947	弥・高杯	24.6			粗・普	良好	橙	不明	不明		
948	弥・鉢			3.6	中・普	良好	淡黄，橙～褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
949	弥・製塩			3.4	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
950	弥・製塩			4.1	中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ナデ		
951	弥・製塩			3.1	中・普	良好	浅黄	板ナデ	板ナデ		
952	弥・鉢	36.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
953	弥・鉢	46.2			中・普	良好	浅黄	ハケ目→ナデ	ナデ		

第233図　C2区包含層出土遺物（2）（1／4）

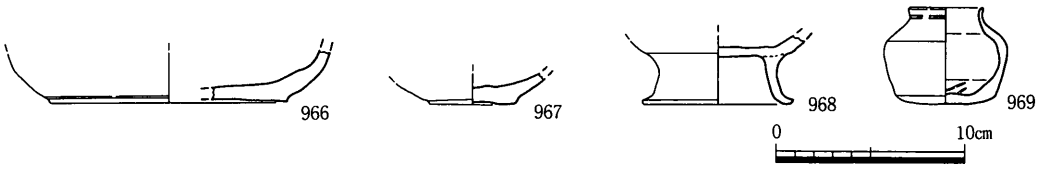
ある。854には長軸にほぼ平行の角度で両面に使用による擦痕が残る。855は小形品で一部に自然面が残る。859は長軸とやや角度をなして擦痕がつく。860は太型蛤刃石斧の刃部の破片である。861は楔形石器で上下とも刃部がつぶれている。さらに使用時の打撃のために左右が折れている。864は刃部の一部が摩滅している。866は片面のみ使用によるくぼみが残る。867も１面のみ使用している。左側の平面図の上半分を上下方向に使用している。

868～902は木器である。868はこて状をしている。木器が集中して出土した部分より数m離れた地点から出土したもので表面もかなり痛んでいる。このため他の木器と異なり時期は限定できない。１本の木から削りだしたもので，復元すると全長約26cm，幅約13cmになる。869・870はヘラ状をしている。869は平面形は左右対称ではない。端部は両面から面取りしている。870はヘラの幅が狭く，長い柄をもつ。871は袋状鉄斧用の柄である。木の枝分かれを利用して作られている。斧の装着部は削って段を作っている。挿入される部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
954	土・甕	14.6			中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ・ハケ目		
955	須・杯蓋	14.4			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
956	須・高台杯			9.1	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
957	須・壺	13.7			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		ヘラ記号
958	土・小皿	9.7	2.1	5.5	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
959	土・小皿	9.9	2.0	5.8	中・普	良好	鈍い橙～黒褐	ナデ	ナデ		
960	土・杯	12.2	3.7	5.4	中・普	良好	灰白～赤橙	ナデ	ナデ		
961	黒A・椀			7.3	精緻	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ミガキ		
962	黒A・椀			6.3	微・普	良好	褐灰，灰白	ナデ	ナデ		ヘラ記号
963	須・壺				微・普	良好	灰・白灰	ナデ	ナデ		
964	須・壺				細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
965	青・不明				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	浅黄の釉	

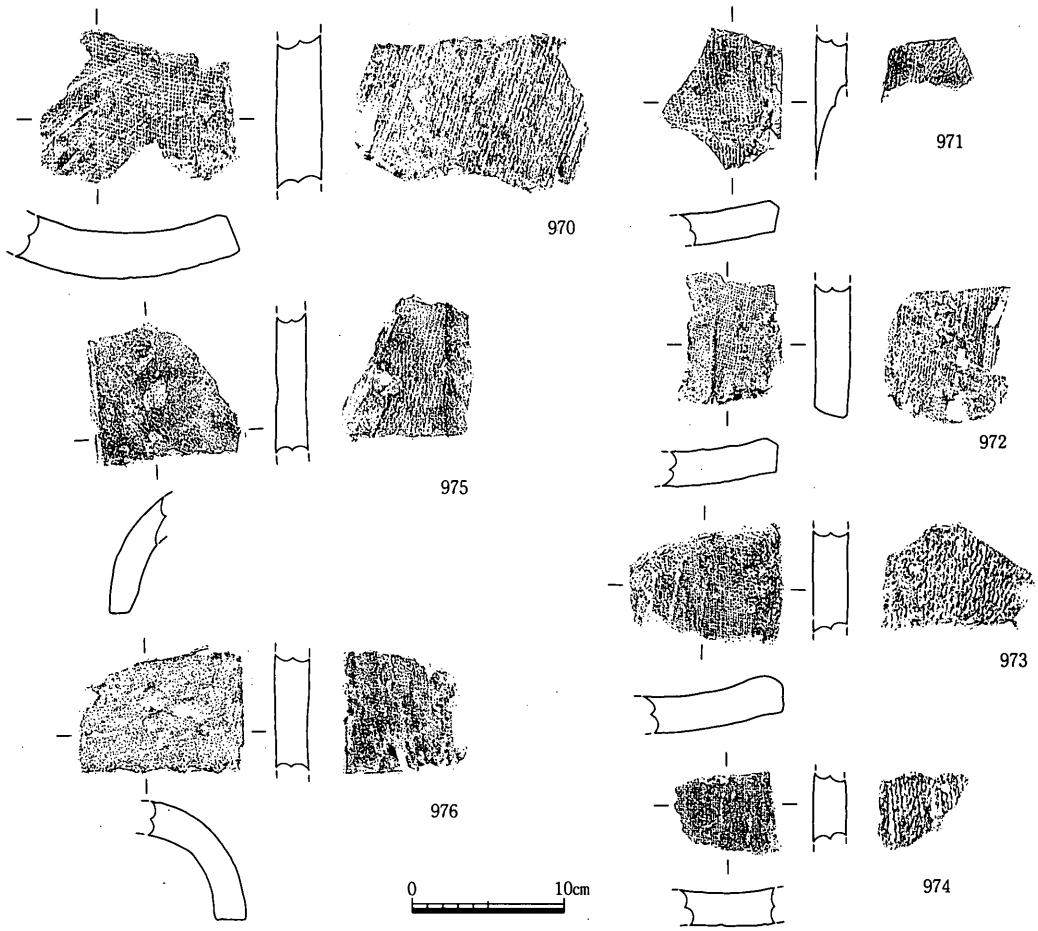
第234図　C 2 区包含層出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
966	須・皿			12.4	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
967	須・杯			4.7	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底糸切り	
968	土・椀			8.0	中・多	良好	淡赤褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
969	黒B・小皿	3.9	5.1	3.1	精緻	良好	黒	ナデ	ナデ		

第235図　C3区包含層出土遺物（1）（1／4）

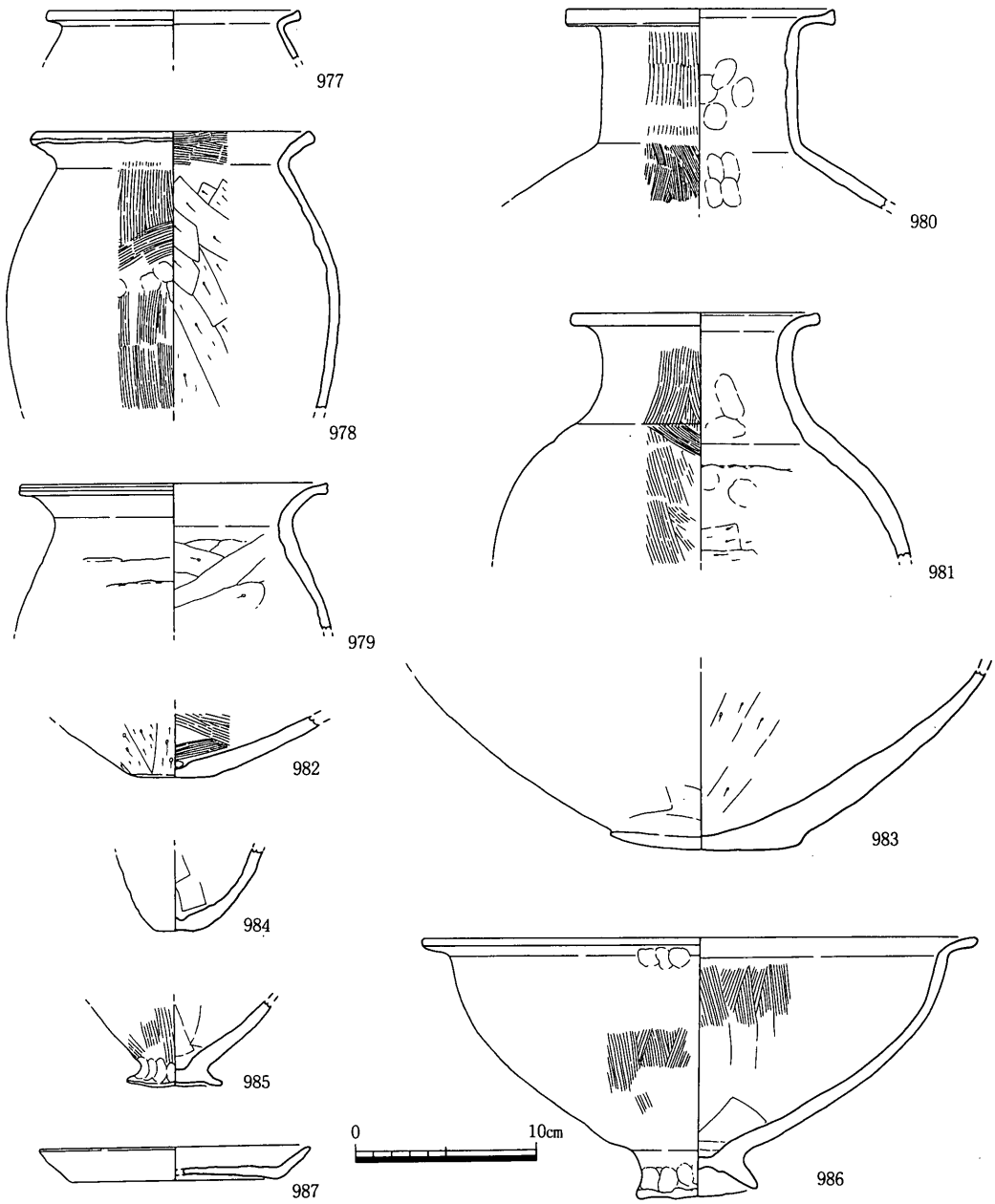
分は短く，折れている。873は鎌の柄である。握りの端部は木の枝分かれを利用している。鎌の挿入部は横幅がやや広い。872も握り端部の形状から鎌の柄であろうが873よりやや長い。874～877は柄である。いずれも欠けていて用途は特定できない。874・876は断面円形，875・877は断面楕円形をしている。878～880は杵である。878・880は焼け焦げている。881は木錘である。両端は中心にむかって削っている。882は用途不明品である。中央湾曲部



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
970	平瓦	3.0	縄目叩き	布目圧痕	1	-	粗・普	にぶい黄橙	不良	一枚作り・側面に布目圧痕あり	9.2
971	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕	6	-	微・普	灰白・暗青灰	良好		8.5
972	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕	7	16	粗・普	灰白・灰	良好		8.4
973	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕	8	-	粗・普	褐灰・にぶい黄橙	良好		5.8
974	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕	-	-	中・普	灰・ﾆﾌﾞｲ黄橙	不良		4.5
975	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰黄	良好		8.9
976	丸瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	16	-	中・普	灰白	良好		7.2

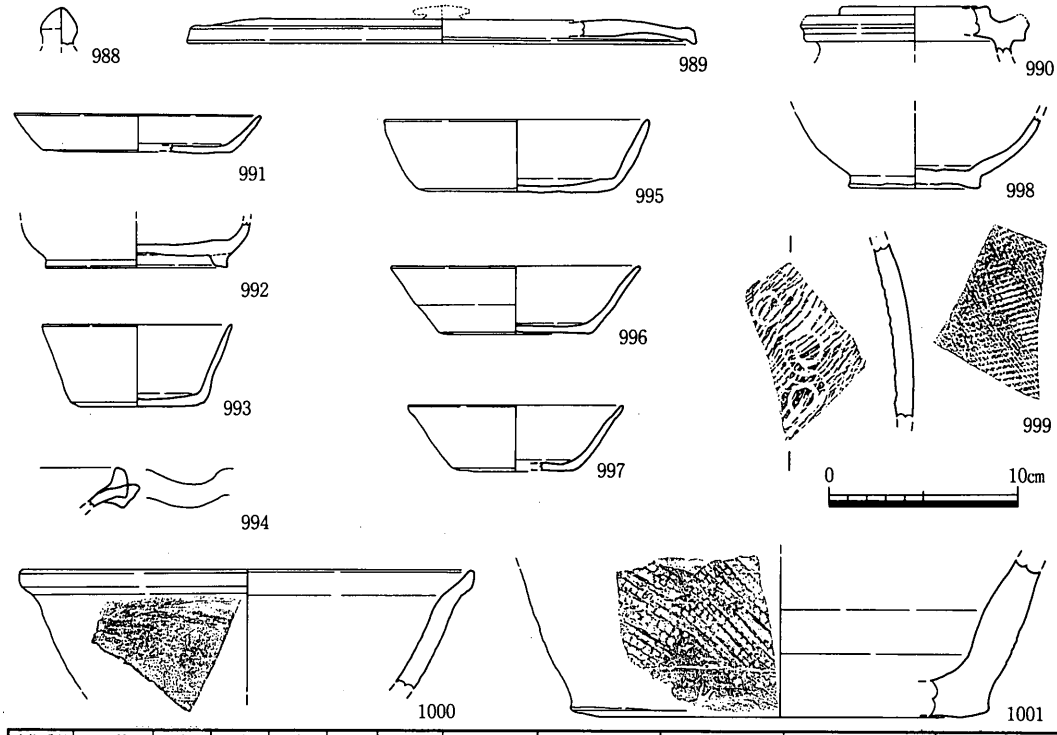
第236図　C3区包含層出土遺物（2）（1／5）

で大きく段を作りさらに上方端部で小さくえぐっている。断面蒲鉾形をしている。883・884は弓である。883は渦状にねじれている。端部を少し削っている。884は段をつけて端部を削りこみゆはずをきれいに作っている。885は櫂である。握り部分は折れている。水をかく部分は断面六角形をしている。886は建築部材である。両側に噛み合わせ用の切り込みを入れている。887は樋である。凸面は平らに削っている。深さは3㎝ほどしかなく蓋の側かもしれない。888～897は杭である。888はきれいに成形されている。他の杭とは異なる用途が考えられる。889・890は表皮が残されている。891・892は曲がっている。892



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
977	弥・甕	14.0			中・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		
978	弥・甕	15.7			粗・多	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ		
979	弥・甕	17.0			粗・普	良好	鈍い黄橙・黒	ナデ	ケズリ→ナデ	沈線	
980	弥・壺	14.7			中・普	良好	明褐	ハケ目→ナデ	ナデ		金雲母を含む
981	弥・壺	13.8			粗・普	良好	橙～黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
982	弥・鉢			4.5	粗・多	良好	にぶい黄橙	ケズリ	ハケ目→ナデ		
983	弥・壺			10.5	粗・普	良好	明赤褐	ケズリ→ナデ	ケズリ→板ナデ		
984	弥・鉢			1.9	粗・普	良好	橙	ナデ	板ナデ		
985	弥・鉢			5.3	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	板ナデ		
986	弥・鉢	30.7	14.1	6.7	粗・普	良好	黒・浅黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
987	須・皿	15.0	1.8	11.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

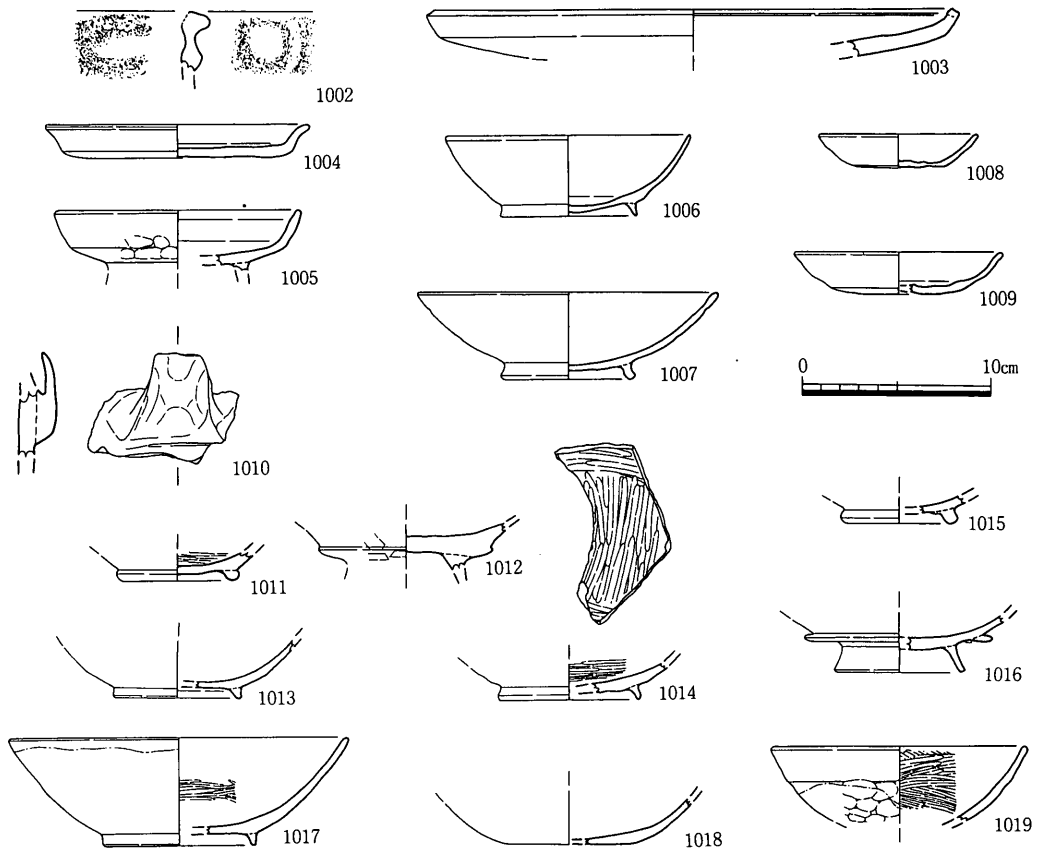
第237図　C4区包含層出土遺物（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
988	須・甕				中・普	良好	灰	ナデ	不明		
989	須・甕	27.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
990	須・硯	12.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		透かし有り？
991	須・皿	13.0	2.0	10.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
992	須・高台杯			9.6	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
993	須・杯	9.9	4.2	7.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
994	須・鉢				細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
995	須・杯	14.0	3.7	10.4	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
998	須・杯	13.2	3.5	8.2	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
997	須・杯	11.4	3.3	6.6	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
998	須・椀			6.9	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り，平高台	
999	須・甕				細・普	良好	灰～黄灰	叩き	あて具痕	大小あて具痕，小→大	
1000	須・鉢	24.0			中・普	良好	灰白～灰	ナデ・叩き	ナデ		
1001	須・甕			22.1	中・普	良好	灰	叩き・ケズリ	ナデ		

第238図　C5区包含層出土遺物（1）（1／4）

は上端近くに小さな穴があけられている。895は焦げている。902は半截した木の中央に丸いくり込みを入れている。さらにそのくり込みと外側がつながるよう２ヵ所に穴があけられている。なお，川からの取り上げ後に写真をとったもののその後不幸にも消滅してしまった木器が１点ある。写真図版181-2は長さ82cm，断面横３cm，奥行２cmの大きさをしている。形状から，片側についている突起がもう片側にもつくと考えられる。写真右側面には２ヵ所抉りがいれられているのが観察できる。大阪府鬼虎川遺跡や瓜生堂遺跡から出土した機織りの経巻具／布巻具に形が似ていることから同様の用途が考えられる。

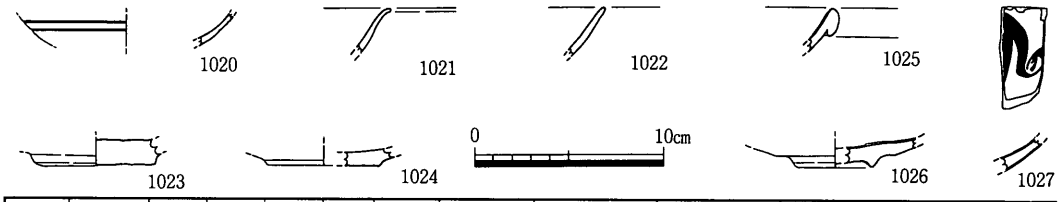


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1002	縄・鉢				粗・普	良好	にぶい橙，橙	不明	不明	渦巻文，上・内面凹み	
1003	土・皿	28.1			中・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
1004	土・皿	14.0	1.7	12.1	中・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明	外面に赤色顔料	
1005	土・高台皿	13.0			微・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
1006	土・椀	13.0	4.2	7.2	細・普	良好	黄灰	不明	不明		
1007	土・椀	16.0	4.6	7.2	粗・多	良好	灰白	ナデ	ナデ		
1008	土・小皿	8.4	1.8	5.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
1009	土・皿	11.0	2.2	7.0	精緻	良好	淡橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
1010	土・把手				粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
1011	黒A・椀			6.4	中・少	良好	灰白・黒，灰	ナデ	ミガキ		
1012	土・高杯				粗・普	良好	灰白，浅黄橙	ナデ	ナデ		
1013	黒A・椀			6.6	微・普	良好	にぶい橙，黒	不明	不明		
1014	黒A・椀			7.5	粗・普	良好	にぶい黄橙，黒	ナデ	ミガキ		
1015	黒B・椀			6.2	微・普	良好	黒	ナデ	ミガキ		
1016	黒B・椀			6.9	細・普	良好	黒	ナデ	不明		
1017	黒A・椀	17.9	5.7	8.1	微・普	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ミガキ	外面に赤色顔料	
1018	黒A・杯	6.9			中・普	良好	浅黄橙，黒褐	ナデ	ミガキ		
1019	瓦・椀	13.6			細・普	良好	黒，黒～灰白	ナデ	ミガキ		和泉産？

第239図　C5区包含層出土遺物（2）（1／4）

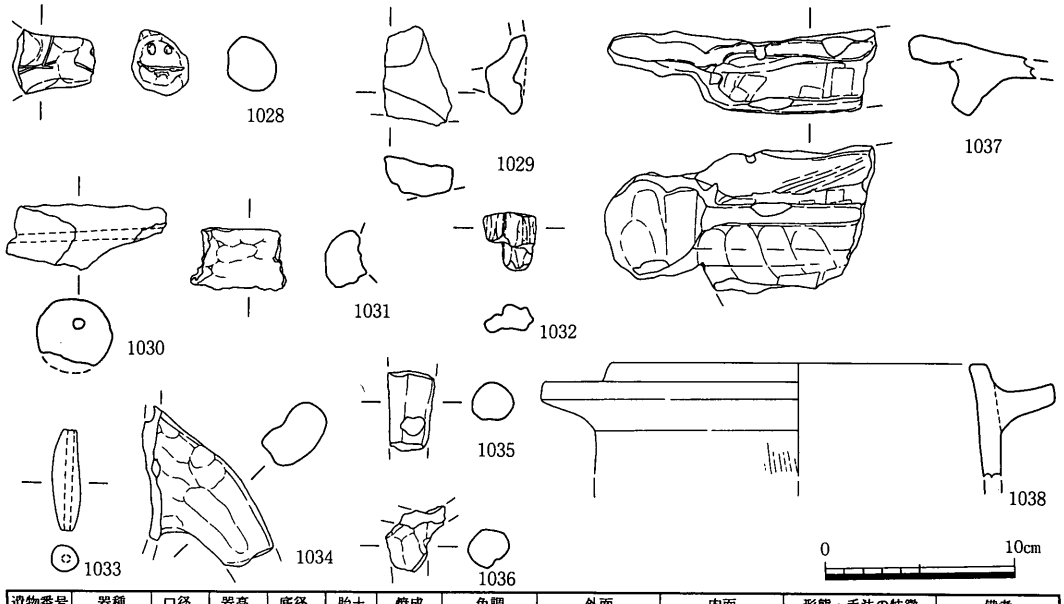
(7)包含層出土遺物（第229図～245図）

903～928はC１区で出土した。903は口縁端部が丸みをもつ。内面のヘラケズリは胴中位にまでしか及ばない。904は口縁部内面が折り返したように厚い。905は鉢の脚である。907は２種類のハケを用いるが，全体に粗雑な印象を与える作りである。910は口縁端部が



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1020	緑・椀				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ黄の釉	硬質
1021	緑・椀				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	須恵質
1022	緑・椀				微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	硬質
1023	緑・椀			6.4	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	緑灰の釉，削出輪高台	軟質
1024	緑・椀			5.9	微・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	全面釉，削出輪高台	軟質，京都産？
1025	白・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
1026	青・皿			4.0	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	内面に灰オリーブの釉	目積み痕，貫入
1027	青・碗				精緻	良好	灰白～緑灰	ナデ	ナデ		

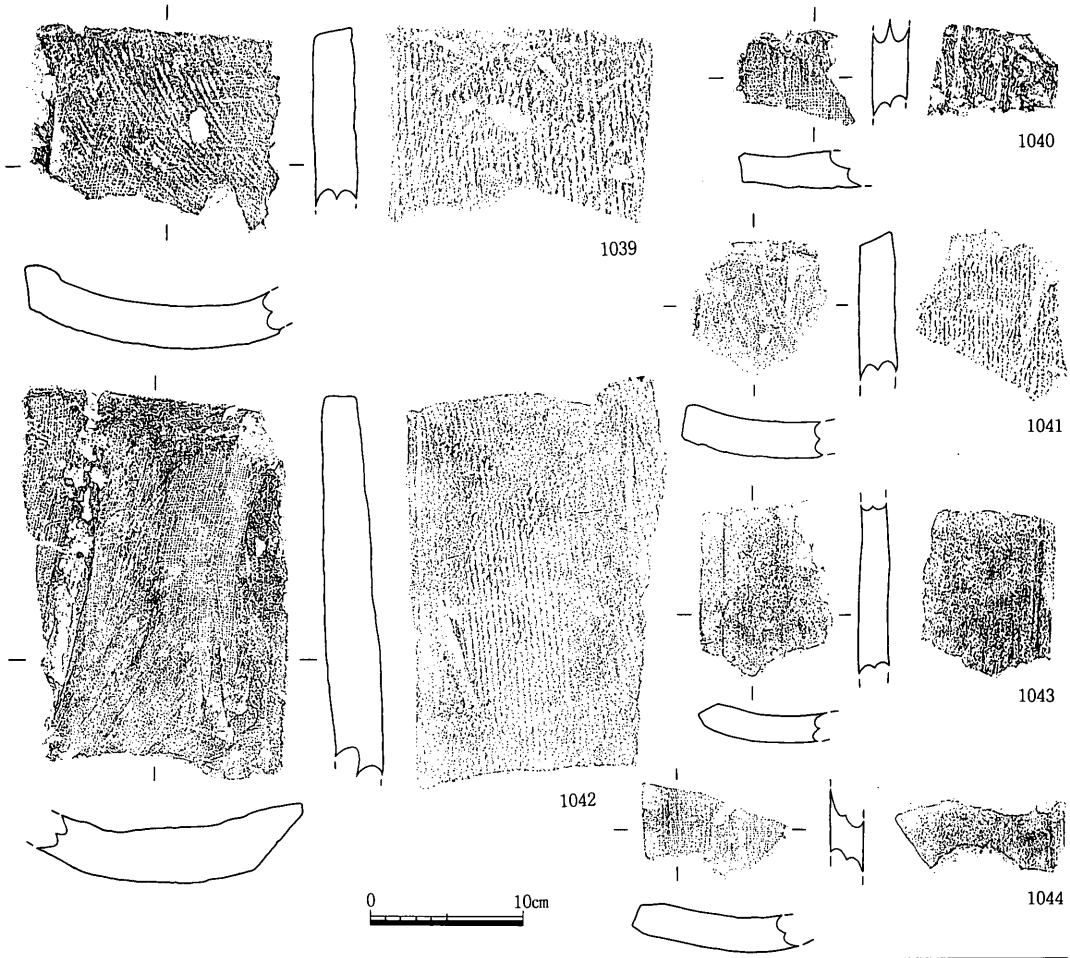
第240図　C5区包含層出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1028	土・土馬				粗・多	良好	橙	ナデ	不明		
1029	土・不明				粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
1030	土・不明				粗・多	良好	灰白～鈍い橙	ナデ	ナデ		土馬の胴体？
1031	土・不明				粗・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		
1032	土・不明				微・普	良好	黒褐～灰白	不明	不明		
1033	土・土錘	短軸1.5	長軸5.3		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		重量10.6g
1034	土・土釜				粗・普	良好	鈍い橙～赤橙	ナデ	ナデ		
1035	土・土釜				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		土馬の脚？
1036	土・土釜				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		土馬の脚？
1037	土・竈				中・普	良好	橙～浅黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
1038	土・土釜	19.8			中・普	良好	明褐，黒褐	ハケ目・ナデ	ナデ		

第241図　C5区包含層出土遺物（4）（1／4）

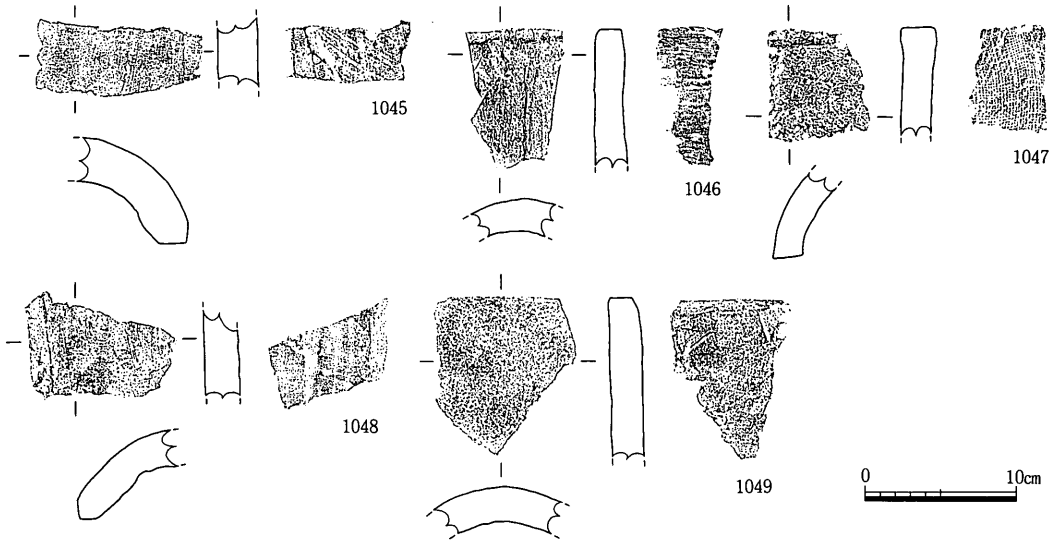
上方にのみのびる。911は盤や火舎等につく脚である。使用時に外から見える部分には赤色顔料を塗っている。912は口縁端部内面に沈線がめぐる。内外面に赤色顔料を塗ってい



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1039	平瓦	2.8	縄目叩き	ナデ・布目圧痕	5	17	粗・普	にぶい黄橙	良好		12.6
1040	平瓦	2.3	指頭圧痕・縄目叩き	布目圧痕	7	-	粗・多	灰白	良好		7.8
1041	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕	2	17	中・普	淡黄	良好	端面・側面に細い溝状工具痕有り	10.7
1042	平瓦	3.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→板ナデ	7	16	粗・普	灰	良好		25.0
1043	平瓦	1.7	ケズリ	板ナデ	6	-	中・普	灰	良好		11.2
1044	平瓦	2.2	板ナデ	布目圧痕	4	-	中・普	灰白	良好		6.3

第242図　C5区包含層出土遺物（5）（1／5）

る。913は口縁部下外面に板で強くナデたような凹みがめぐる。915はあまり類例をみない浅い土鍋である。時期は古代に属すると考えられる。916は上面を回転ヘラケズリしている。917は身が深い杯である。高台の剥がれた部分を観察すると数本の沈線が本体にそって弧状にいれられている。高台が本体からはずれにくくするための工夫の可能性もある。916～919は同時期に属すると考えられる。920・921は919にくらべ退化した高台をもつ。923は底部が平高台気味にすこし外に張り出す。924は口縁部が厚みをもつ。外面のナデは軽いヘラケズリ状になっている。

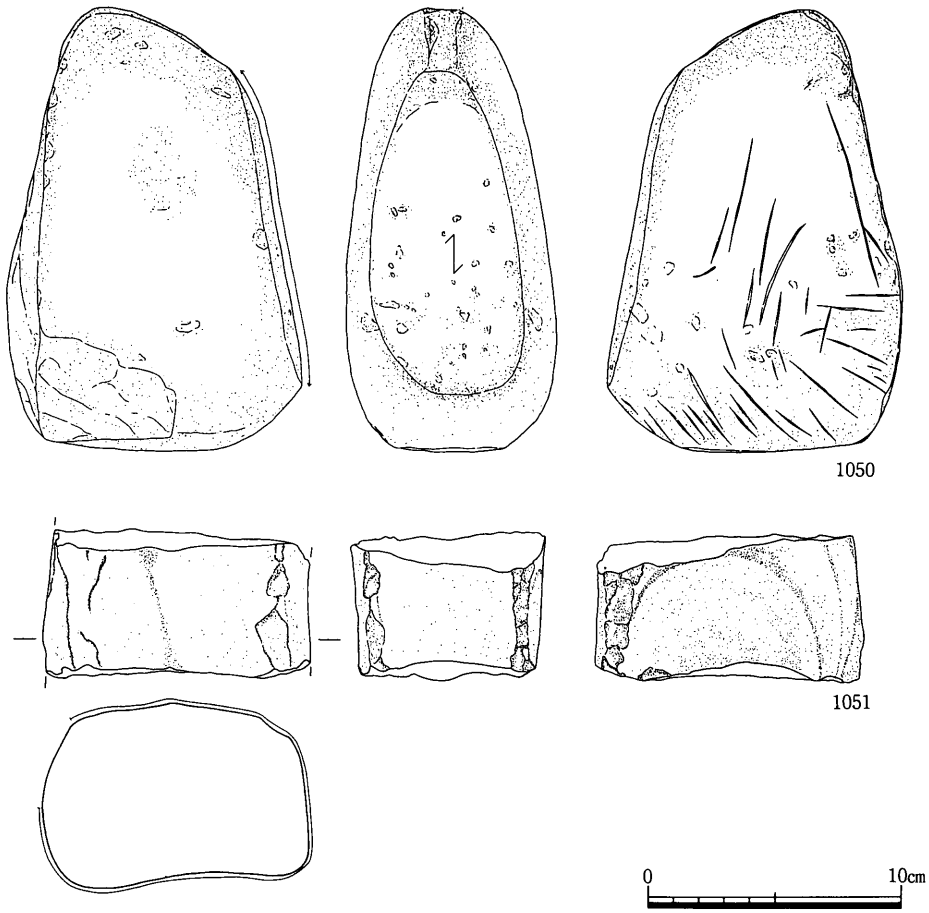


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1045	丸瓦	2.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	15	-	粗・少	灰白	良好	凹面に糸切り痕	4.6
1046	丸瓦	2.0	板ナデ	布目圧痕	-	17	微・普	灰白～浅黄	良好		9.1
1047	丸瓦	2.1	板ナデ	布目圧痕	1	16	粗・普	浅黄	良好		7.4
1048	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕・ナデ	14	-	中・多	灰	良好	胎土はにぶい橙	6.5
1049	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕→板ナデ	-	18	中・普	灰	良好		10.1

第243図　C5区包含層出土遺物（6）（1／5）

929～965はＣ２区から出土した。931は壷の口縁部と考えられる。口縁部には刻み目をいれ，頸部には上下を強くナデることによって突帯を作り出し，その上に刺突文を配している。939は焼く前に底部に穴をあけている。甕には胴内面をヘラケズリするものとしないものがみられるが，口縁部はすべて上下方向への拡張がみられない。壷も同様であり，口縁部に沈線をめぐらしていても上下への張り出しはよわい。940・941は口縁部に凹線をいれその上から刺突文を付ける。940では竹管と木の枝を交互にさし，941は竹管のみ使用している。945は口縁部の太さに比べ胴の径がそれほど大きくなく全体に寸胴な印象を与える。946は椀形の杯部に裾がなだらかに開く脚をもっている。外面には細かいハケ目がきれいに残る。948は底部が少しまるみをもつ。954は古墳時代の甕である。955はつまみのつく蓋である。口縁部の返りはかなり退化している。957は口縁部外面に半円形のヘラ記号がつく。960は底が平高台状になった杯である。体部は厚い。962は底部外面に「×」形のヘラ記号が書かれている。963は２ヵ所に把手がついている。965は釉の質が悪く中世以降の国産の磁器と考えられる。

966～976はＣ３区から出土した。966は底部が平高台状になっている。967は底部が小さく体部も湾曲気味であることから，椀形態になることも考えられる。968の高台は非常に



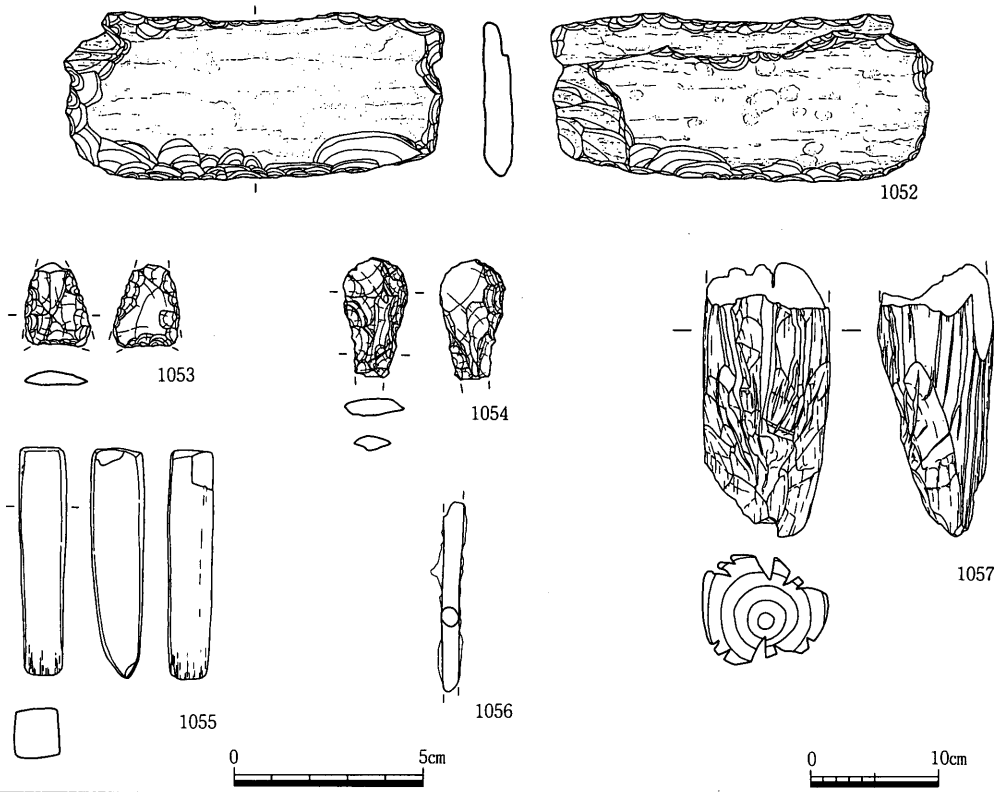
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1050	砥石	17.3	11.6	8.2	2238	砂岩		
1051	砥石	6.1	10.3	7.2	842	砂岩		

第244図　C区包含層出土遺物（1）（1／3）

高く，裾が反り返っている。通常の椀形態には含みえないものである。969は黒色土器B類と考えられる小さな壷である。口縁部下には沈線がめぐる。973は1枚作りによる結果側縁部が厚く，側面にまで布目がまわり込んでいる。

977～987はC4区から出土した。979は胴外面に粘土のつなぎ目が残る。980は2種類のハケ目が残る。982は内面にハケ目がはいるため鉢と考えた。外面はヘラケズリがなされている。全体に粗い印象を与える。983は底部が丸みを帯びている。984は底がしっかりしてなく，口縁部はあまり開かない。986は大形の鉢であるが脚がついている。

988～1049はC5区から出土した。988は蓋のつまみである。989は平たい大形の蓋である。990は脚部に透しなどがつくかはわからない。993は身の深い杯である。994は鉢の片



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1052	打製石包丁	9.8	4.3	0.7	53	結晶片岩		
1053	石鏃	2.1	1.7	0.4	1.6	サヌカイト		
1054	石錐	3.0	1.7	0.5	2.5	サヌカイト		
1055	小形方柱状片刃石斧	5.9	1.2	1.3	20	結晶片岩		

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
1056	鉄	棒状鉄製品（釘？）	4.9	0.5	0.5	2.6		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1057	杭or柱？	21.0	9.9	8.6	芯持		

第245図　C区包含層出土遺物（2）（1／2，1／6）

口の部分である。998は平高台の椀である。999の内面のあて具痕ははじめに陰刻の重弧文のあて具をあてた後次に陽刻の三重の同心円のあて具を用いることによってできている。1000は体部が丸みをもちやや浅目の鉢である。外面には叩き目が残る。1001は底部直上にヘラケズリをしている。底部は不調整である。1002は縄文時代後期と考えられる鉢の口縁部である。外面は円形の凹みのまわりに弧線を配し，内面は切れ目のある凹線をめぐらす。1003は全面に赤色顔料を塗った大形の皿である。内面に沈線がめぐるが，口縁部を折り返したためにできたようにも見える。高台がつく可能性もある。1004は外面に赤色顔料を塗っている。1005は直立する高台がつく。1012は高杯としたが，あまりみられない形態であり，大きな高台のつく杯の可能性もある。1016は椀部と高台の境に突帯がめぐる。いわゆる托

上椀である。1017は外面に赤色顔料を塗る。1019は外面下半に指痕が明瞭に残る。1020は外面に沈線が２条めぐる。1020～1022は内外面に釉がかかり胎土は硬質である。1023・1024は輪高台に削りだしている。全面に釉がかかり胎土は軟質である。1026は砂目積みの痕が残り，外面には釉がほとんどかかっていない。唐津系の陶器皿であろう。1029は内面に草花文を描いている。1028は土馬の口の部分である。沈線で手綱などが表現されている。1030は中空の筒状の土製品で左右がわずかにすぼむ。土馬の胴の可能性もあるが，沈線などによる表現は一切なされていない。1029・1031・1032も用途不明の土製品である。1028～1032は集中した部分から出土している。1034は土釜の脚のつけねの部分である。太くてしっかりした作りをしている。1035・1036は土釜の脚である。1037は竈の部分としたが，どの部分かはわからない。左側は平たい円盤状で右側は鰭状の突起がついている。1039は粘土板に切りだす際の糸切り痕がつく。また成形台の側縁からはみ出した部分が厚くなっている。1041は端面・側面ともに細い沈線状の工具痕がつく。1042は側縁を斜めに大きく削っている。1045も粘土板に切りだす際の糸切り痕がつく。

1052はＣ１区，1051はＣ２区，1050・1053～1057はＣ５区からの出土である。1050は斜めの部分を研ぎ面として利用している。 またその側面には細くて浅い溝がたくさん入っている。これも研ぎ痕であろう。1051は割れている部分をのぞいてほとんどを研ぎ面として利用している。1052は結晶片岩をもちいた石包丁である。1053は凹基の石鏃である。1054は下が尖って錐になると考えられる。1055は刃部の両面に使用痕の可能性のある筋が長辺に並行に入る。1056は用途不明だが，釘とした。

３．小結

Ｃ調査区では縄文時代から近世にわたる幅広い時期の遺構を検出した。

縄文時代では後期の土器片がＣ３区のＳＲ01から出土している。また，晩期の土器がＳＲ02から出土している。この時代は自然河川以外の遺構は存在しない。

弥生時代の遺構としては溝や井戸・柵・ピットがある。この時期の遺構はＣ２～Ｃ５区に集中するが密度は薄い。そのため評価しにくいが，住居がないことから集落の周辺部と一応いえる。井戸についても集落のはずれに設けられることが多いとすれば住居が近くにあることをその存在が示すわけでもない。ところでＳＤ05（04）・06は円形周溝墓とするには主体部もなく決め手に欠くため円形の溝とした。一周したものとしては調査できなかったが，復元すればどちらも溝中央で測って径14ｍほどになる。県内で最近調査例のふえて

きた周溝墓は大きさで２つに分けられるがその大きいほうが径12～14mであり，これと近似した大きさとなる。このことからもしこれに円形周溝墓の可能性があるとすれば，墓域は集落から離れて形成されるものであるため，これもまた集落の周辺部であることを示すことになろう。ほかにＳＲ02から後期前半の土器が出土している。ＳＲ02は前述のように縄文時代晩期のみを出土する土層が存在する。つまりこの時期も同じ地点を川が流れていたことを示している。同じ地点を数百年離れた時期の川が流れていることが偶然でないなら，おそらく弥生時代を通してさらには古墳時代中期までこの地点をＳＲ02が流れていた可能性は高い。とすれば，遺構や土器の散布がみられない弥生時代前・中期・古墳時代前期はこの付近及び上流では人間の活動が及んでなかったかあるいはその周辺部にあたっていたことを表していると考えられる。

次に遺構がみられるようになるのは，奈良～平安時代にかけてである。この時期が最も遺構がまとまって見つかっている。基本となる構図としては区画溝となるＳＤ09とその中にたてられた柵と掘立柱建物群ということになる。柵は６列，掘立柱建物は12棟を机上で復元しえた。しかし各遺構の記述でものべたようにこれらの柵・掘立柱建物・溝・井戸には切り合いや建物が重なってしまうものがあり，当然建て替えなどの変遷があったと考えられる。すべての遺構から遺物が出土しているわけではないので，この関係については完全には明らかにしえないが，つかみえた事実をもとに少し考えてみたい。

まず第１に遺構の時期のわかるものがある。出土した遺物がその遺構の時期を示すものならＳＢ02・06・13は奈良時代，ＳＡ06・ＳＢ04・ＳＤ10・ＳＥ03・04は平安時代，ＳＤ09・ＳＥ02は奈良～平安時代となる。

第２に切り合い関係からいってＳＤ10はＳＢ02・03・ＳＤ09よりも新しく，ＳＢ10はＳＥ03よりも新しい。ＳＥ03・04はＳＤ09よりも新しい。

第３にそれぞれの遺構の方向をみた場合，柵全部とＳＢ01～４・07・08・10・ＳＤ09・10，ＳＢ06・09・13，ＳＢ05の３つの群に分けることができる。

以上のことからＳＢ06・09・13は奈良時代の掘立柱建物群であり，Ｃ区で最初に出現した掘立柱建物と考えられる。これらは建物の重なり具合と柱間の距離からＳＢ06・13とＳＢ09の２時期に細分される。

ＳＢ02は出土遺物は奈良時代であるが，方位が他のほとんどの掘立柱建物やＳＤ09と同じであるため，次の平安時代に下る可能性があると考えた。さらに並びからみてＳＢ03もこの時期に相当する。

次に柵総てとＳＢ01・04・07・08を平安時代と考え，建物の重なりや配置を加味し，最低限でＳＡ02・03・ＳＢ01・07とＳＢ04とＳＡ06・ＳＢ08の３つの群に分けた。このなかでは出土遺物からみてＳＢ08はＳＢ04よりも古い。これらがおおよそＳＤ09と同じ時期と考えられるがＳＢ04についてはＳＫ01との関係が，ＳＡ03についてはＳＤ10との関係が気にかかる。ＳＡ06とＳＤ10との関係についてはＳＢ08とＳＤ10の間に大きな時期差があると考えて排除した。

このあとＳＢ05・10・ＳＥ03・04・ＳＤ10が続く。最低でＳＢ05とＳＥ03・04・ＳＤ10とＳＢ10の３群に分けうるがＳＥ03とＳＢ10の関係以外はわからない。

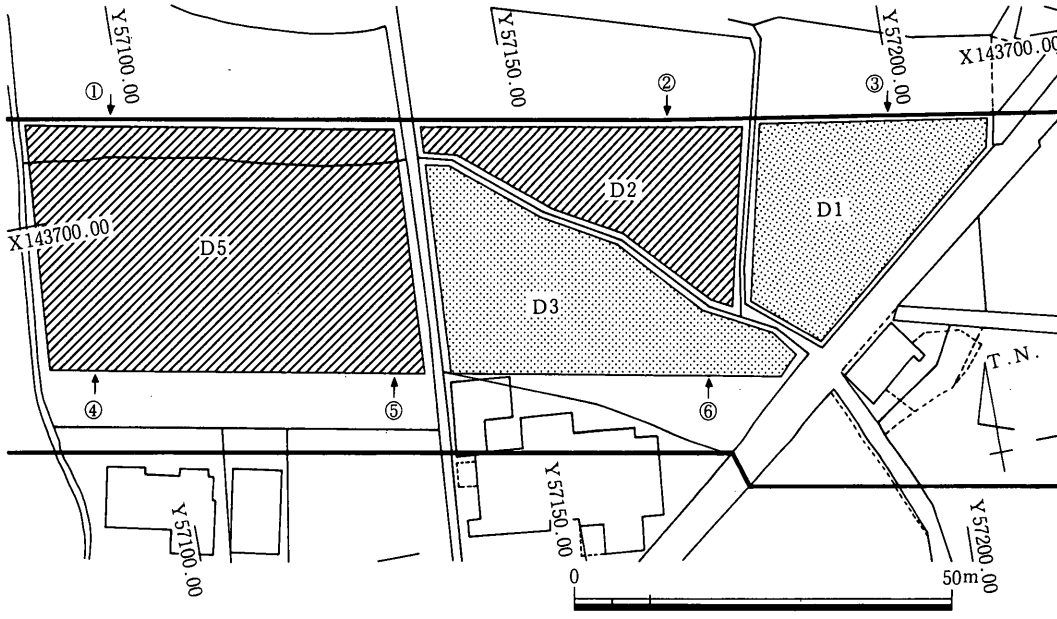
以上のように９つの時期に分けてみた。さらに考察を進めるためには調査区南の地域への遺構の広がりを確認し全体像をつかむ必要があろう。

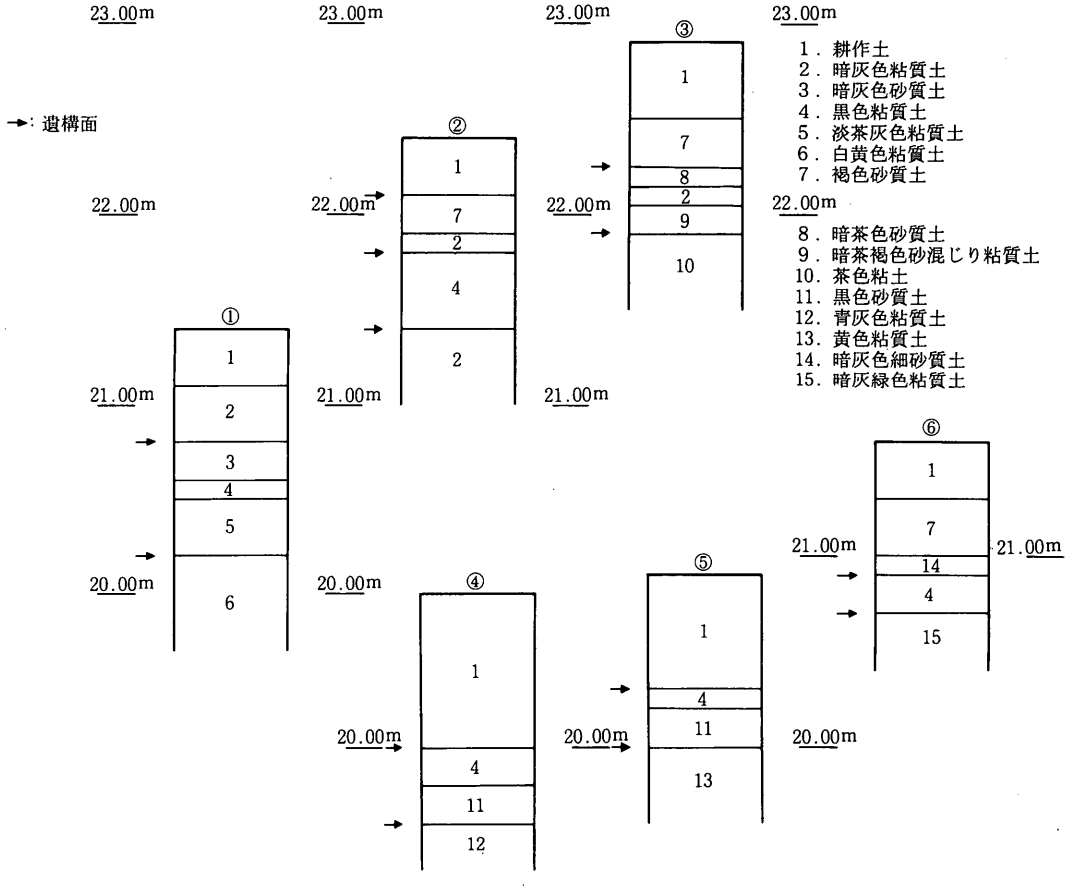
またこの遺構群の性格についても判断する決め手に欠く。出土遺物中には軒丸瓦や多量の瓦・銅製の帯金具・墨書土器・硯など一般の集落では出土しにくいものもみられるが，決定的なことについては何もいえないというのが現状であろう。

中世以降再び遺構は疎らになり，わずかに近世の掘立柱建物が２棟建てられているのみである。これらの掘立柱建物には区画溝や井戸などは付属していなかった。

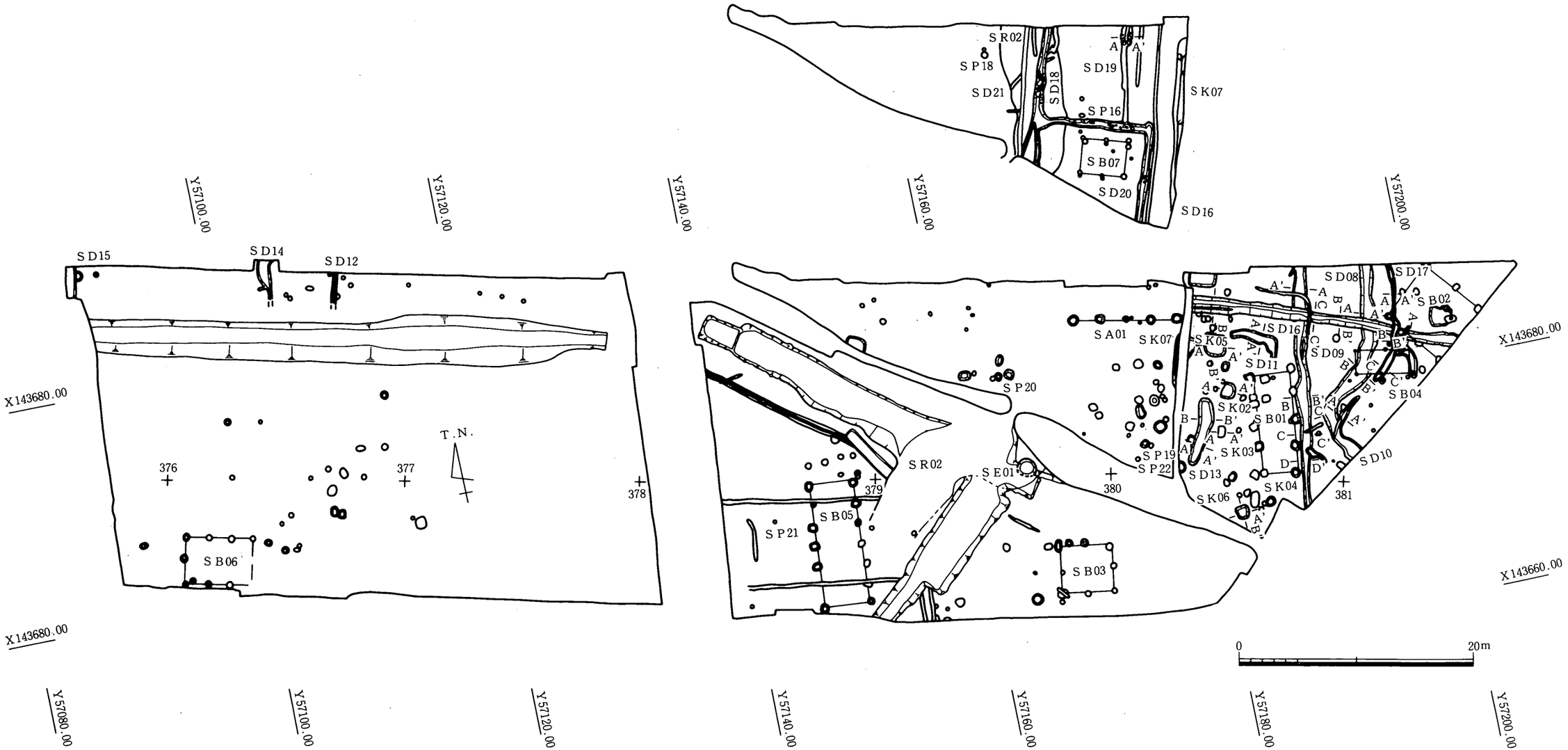
注　宇野隆夫「井戸」『弥生文化の研究７』雄山閣出版，1986など

遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
401					3.0	8	3.1	1.5	1.6	2.9	複弁・外区外縁に鋸歯文	
508	16.4	4.8	4+8	14.2	1.7	12	1.1		1.1			
702											三巴文	

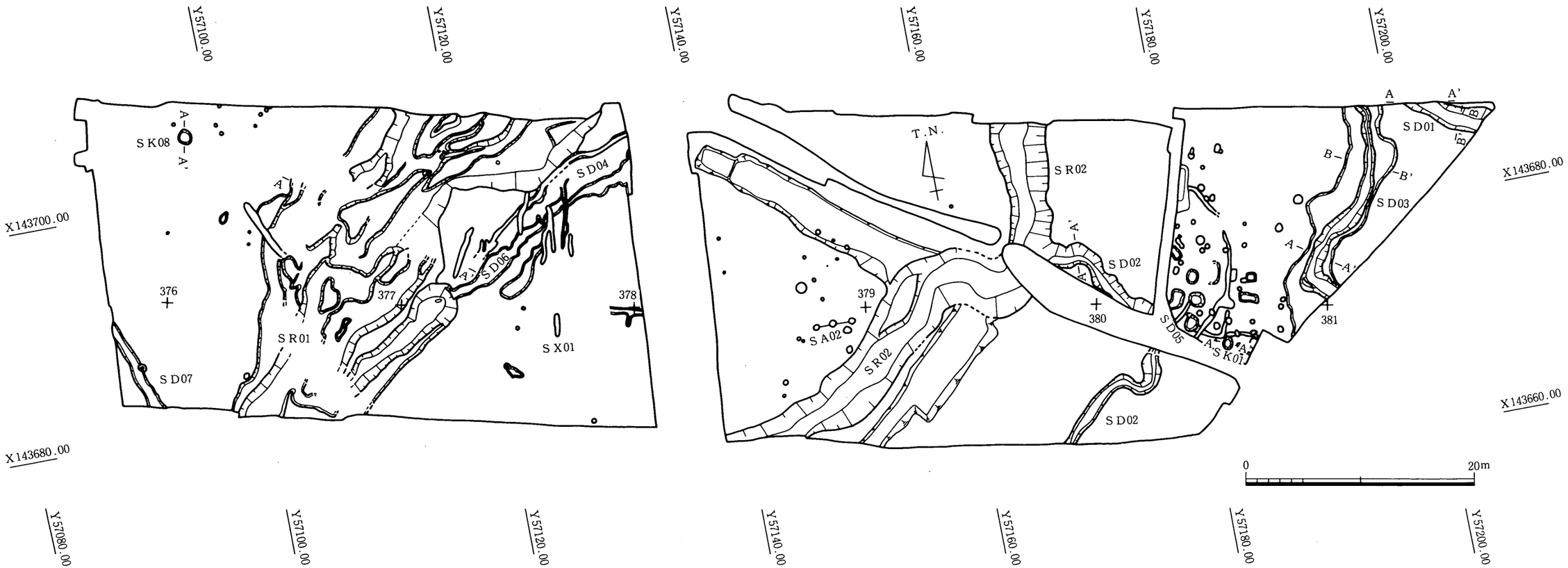




第246図　D区小調査区割図（1／1000），基本土層柱状図（1／40）



第247－1図　D区第１・２面遺構平面図（1／400）



第247－2図　D区第３面遺構平面図（1／400）

第４節　Ｄ調査区

１．調査区の概要（第246・247－１・247－２図）

南北幅40m，東西長130mの範囲を占めるＤ調査区ではＤ１・Ｄ２・Ｄ３・Ｄ５の４つの小区に分けて調査を行った。標高はおおよそ21～23mで，東と西では２mの標高差があり，Ａ～Ｃ調査区に比べてやや傾斜が急になっている。Ｆ調査区西部の高まりを頂部とする尾根からＥ調査区へはさらに傾斜がきついため，Ｄ調査区は尾根の裾部にあたるといえる。調査前には田畑や宅地に利用されていたが，傾斜が急になった分段々の平坦面を作るための削平が大きくなっていると考えられる。

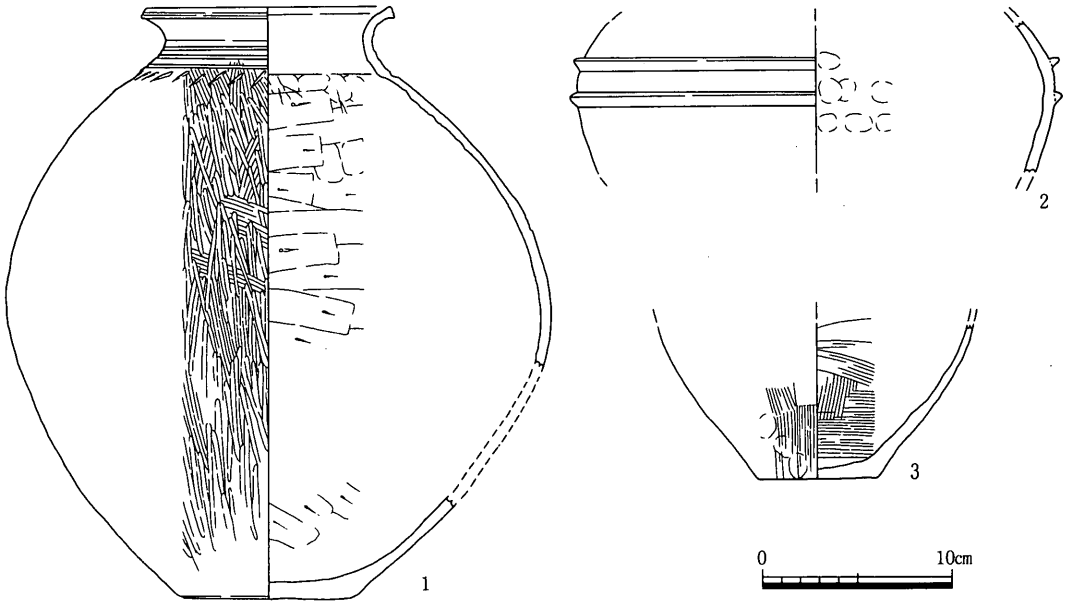
Ｄ調査区では遺構面が２ないし３面確認されている。Ｄ１区では上から第１面が古代・中世・第２面が弥生時代，Ｄ２区では第１面が中・近世・第２面が古代・第３面が弥生時代，Ｄ３区では第１面が古代以降・第２面が弥生時代以前，Ｄ５区ではぶどう畑造成のため全体に第１面が撹乱を受けているが第１面が古代・第２面が縄文・弥生時代の，それぞれ遺構面となっている。各小区の最終遺構面の下は暗灰色～青灰色の固い粘質土で構成されており，扇状地形成作用によって堆積したものとみられる。一方それによらぬ黄色粘土がＤ２区東端部にわずかにあらわれている。

２．調査の成果

(1)弥生時代の遺構・遺物

ＳＤ01（第248～252図，図版42）

Ｄ１区の北東隅で検出した北西～南東方向の溝で，幅2.05m，深さ0.6m前後である。溝の埋土は大きく３層にわかれ，上から黒褐色粘質土，暗灰色砂質土，粘性の強い黒色粘土となる。断面形は逆台形状となる。暗灰色砂質土層の最下部から弥生土器がそのまま土圧でつぶれた形で出土しており，溝が半分ほど埋没した段階で土器を一括投棄したものと考えられる。１～３は壷で，１の外面はハケ目の後に全体にヘラミガキを丁寧にほどこす。２は体部中央に２条の突帯を貼りめぐらせている。４～13は甕で，外面は主にハケ目であるが，７・11は下半にヘラミガキを施す。内面はヘラケズリで，体部上半にまで及ぶものと中央部までのものとがある。口縁部はゆるやかに外反するものとつよく外反して口縁部の短いものとがある。14・15は鉢，16・17は高杯である。16の杯部は内湾し内外面にヘラミガキを施す。脚部には６本の沈線がめぐり，下半に鋸歯文を施している。杯部と脚部は円盤充填法で接合されている。出土遺物からⅣ期～Ⅴ期の溝と考えられる。



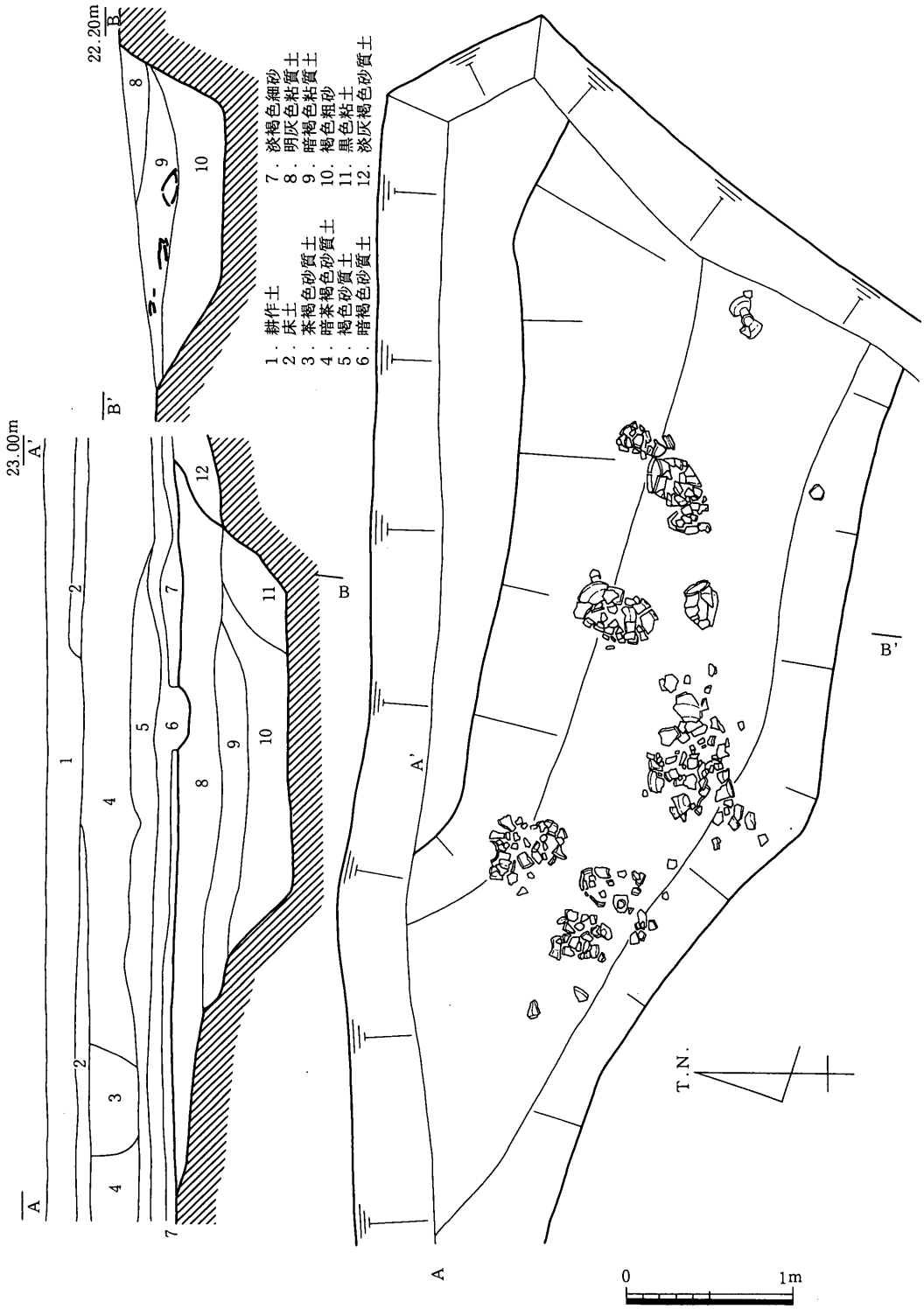
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	弥・壷	12.8	30.0	8.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ケズリ	肩部ヘラ圧痕文	
2	弥・壷				細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
3	弥・壷			6.2	細・普	良好	にぶい褐	ハケ目・ナデ	ハケ目		

第248図　D区ＳＤ01出土遺物（1）（1／4）

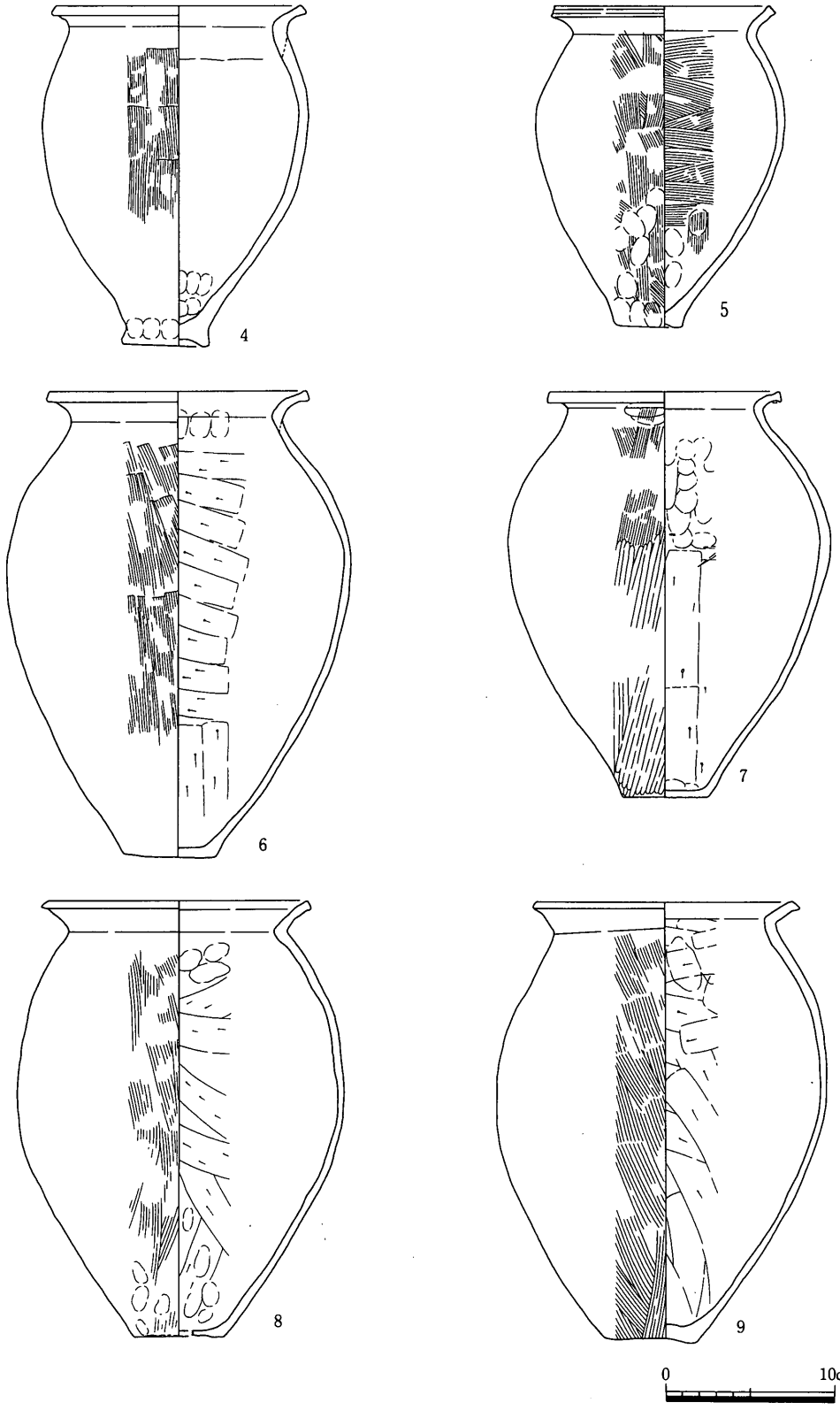
ＳＤ02（第253～261図）

Ｄ２区からＤ３区の東部にかけて検出した溝である。Ｄ２区ではＳＲ02につながり，Ｄ３区から調査区外にのびている。両地点の遺構面の標高差は70cmあり，Ｄ２区側が高い。ＳＤ02は複雑な平面形を描く。ＳＲ02からの分岐点から蛇行しながら南東に走り，やがて逆Ｓ字形に曲がり一転南西方向をむく。溝底の標高も必ずしも一定の傾斜をなさない。ＳＲ02からの分岐点で20.2mであるが，Ｄ２区とＤ３区の境では20.8mと高くなり，そこからＤ３区中央で20.4m，Ｄ３区南際で20.3mと低くなる。溝底の高さから水の流れの方向を考えることは難しいが，遺構面の標高差からみればＤ２区からＤ３区に流れていた可能性が高い。ＳＤ02のＤ３区部分では多量の土器が出土した。それらは平面的には細片が溝一面に広がる状況を示し，断面では溝内の上半部に集中していた。また出土した土器は完全な形につながるものはない。以上からこの多量の土器は溝が埋まってしまう最後の段階に捨てられたと考えられる。

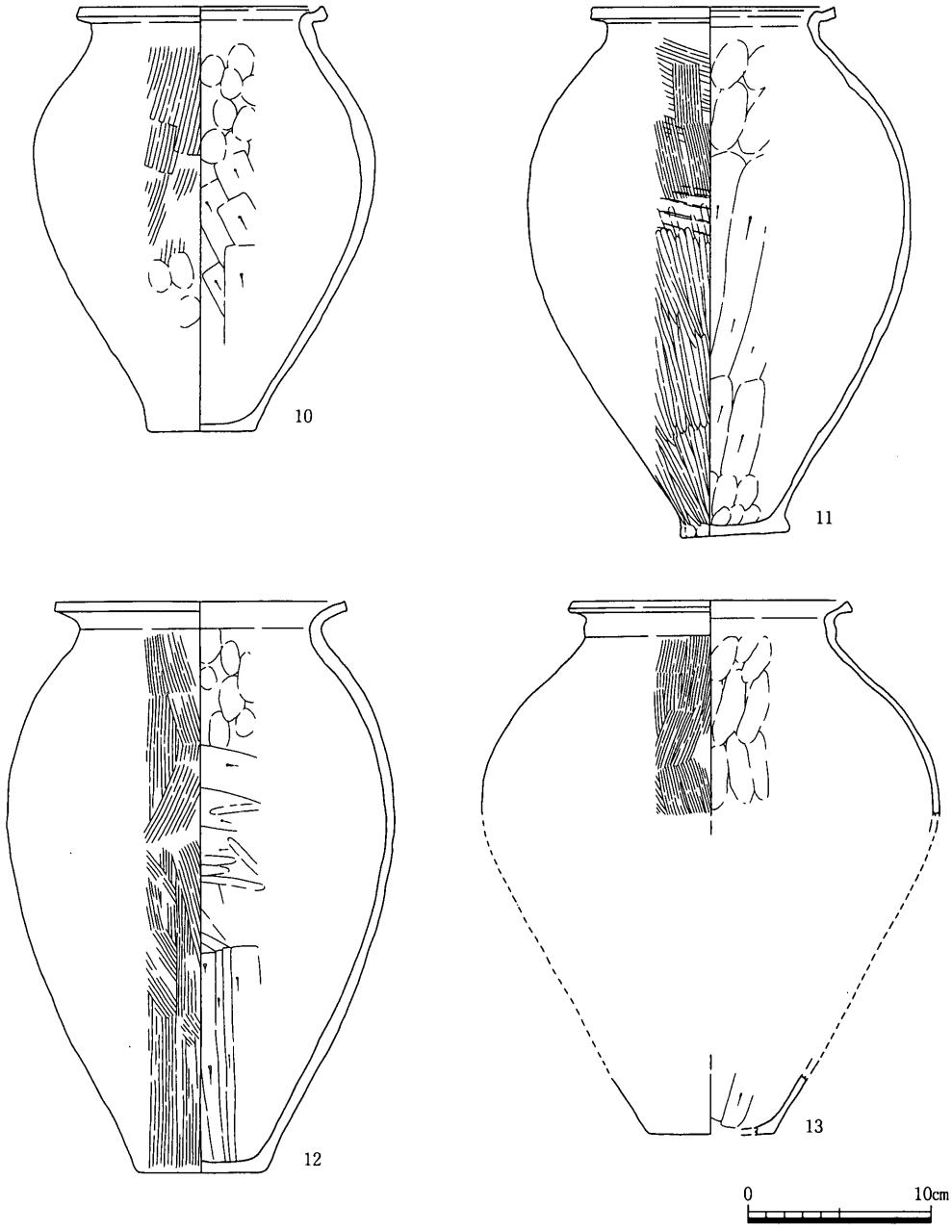
次に土器の説明に入る。18～71は溝上部で一括で取り上げたものである。18～35は甕である。外面にハケ目を施し，内面は口縁への屈曲部やや下までヘラケズリを施す。口縁に



第249図　D区ＳＤ01断面図，遺物出土状況（1／40）

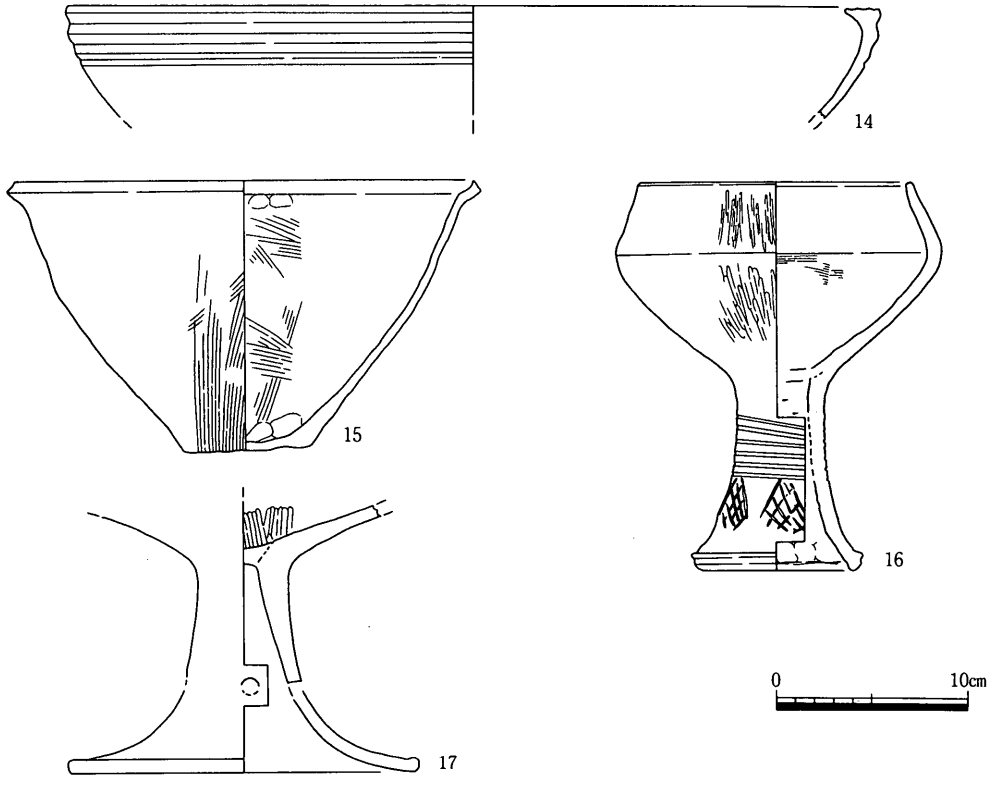


第250図　D区ＳＤ01出土遺物（2）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
4	弥・甕	14.6	19.3	5.2	中・多	良好	灰白	ハケ目	不明	底部しぼり出す	
5	弥・甕	12.6	18.4	4.1	中・普	良好	赤褐・黒	ハケ目	ハケ目	内面板ナデ状のハケ目	
6	弥・甕	15.2	27.3	5.5	中・少	良好	灰白	ハケ目	ケズリ		
7	弥・甕	13.6	23.7	5.1	中・多	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ミガキ	ケズリ		
8	弥・甕	16.1	25.9	5.3	中・普	良好	灰白	ハケ目	ケズリ	強いナデ	
9	弥・甕	15.1	26.0	5.4	中・多	良好	灰白	ハケ目	ケズリ		
10	弥・甕	13.2	22.6	6.0	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ケズリ	粗いハケ目	
11	弥・甕	13.2	28.3	5.8	粗・少	良好	淡赤褐	ハケ目→ミガキ	ケズリ	内面ナデの破	
12	弥・甕	15.8	31.1	6.8	中・多	良好	淡黄	ハケ目	ケズリ	棒状工具のナデ	
13	弥・甕	15.0		6.8	粗・多	良好	にぶい赤褐	ハケ目	ナデ	内面作り雑	

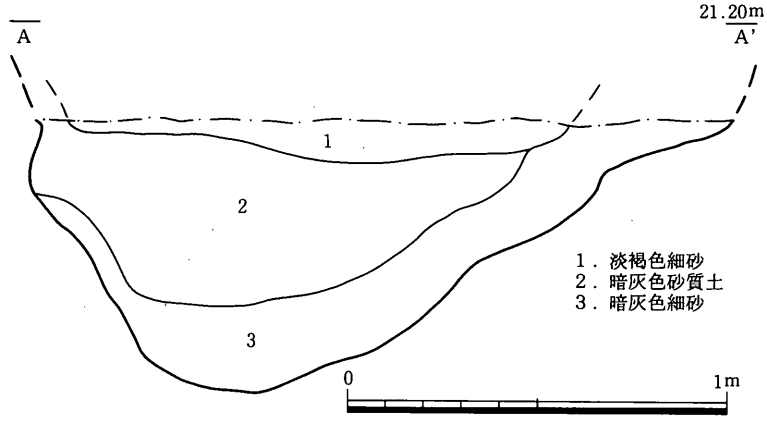
第251図　D区ＳＤ01出土遺物（3）（1／4）



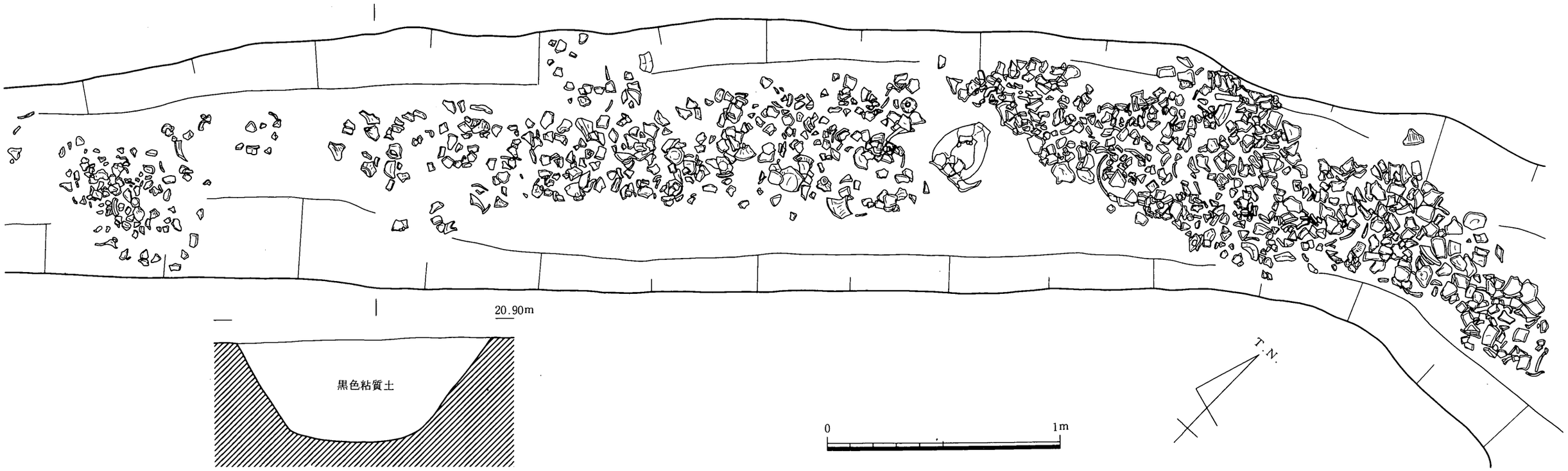
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
14	弥・鉢	42.4			細・普	良好	ﾆﾌﾞｲ黄橙	ナデ	ナデ		
15	弥・鉢	25.0	13.7	6.8	粗・普	良好	灰白	ハケ目	ハケ目		
16	弥・高杯	14.2	19.8	8.0	中・普	良好	浅黄橙	ミガキ	不明		金雲母含む
17	弥・高杯			18.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ミガキ	四方透し・円盤充塡	

第252図　Ｄ区ＳＤ01出土遺物（4）（1／4）

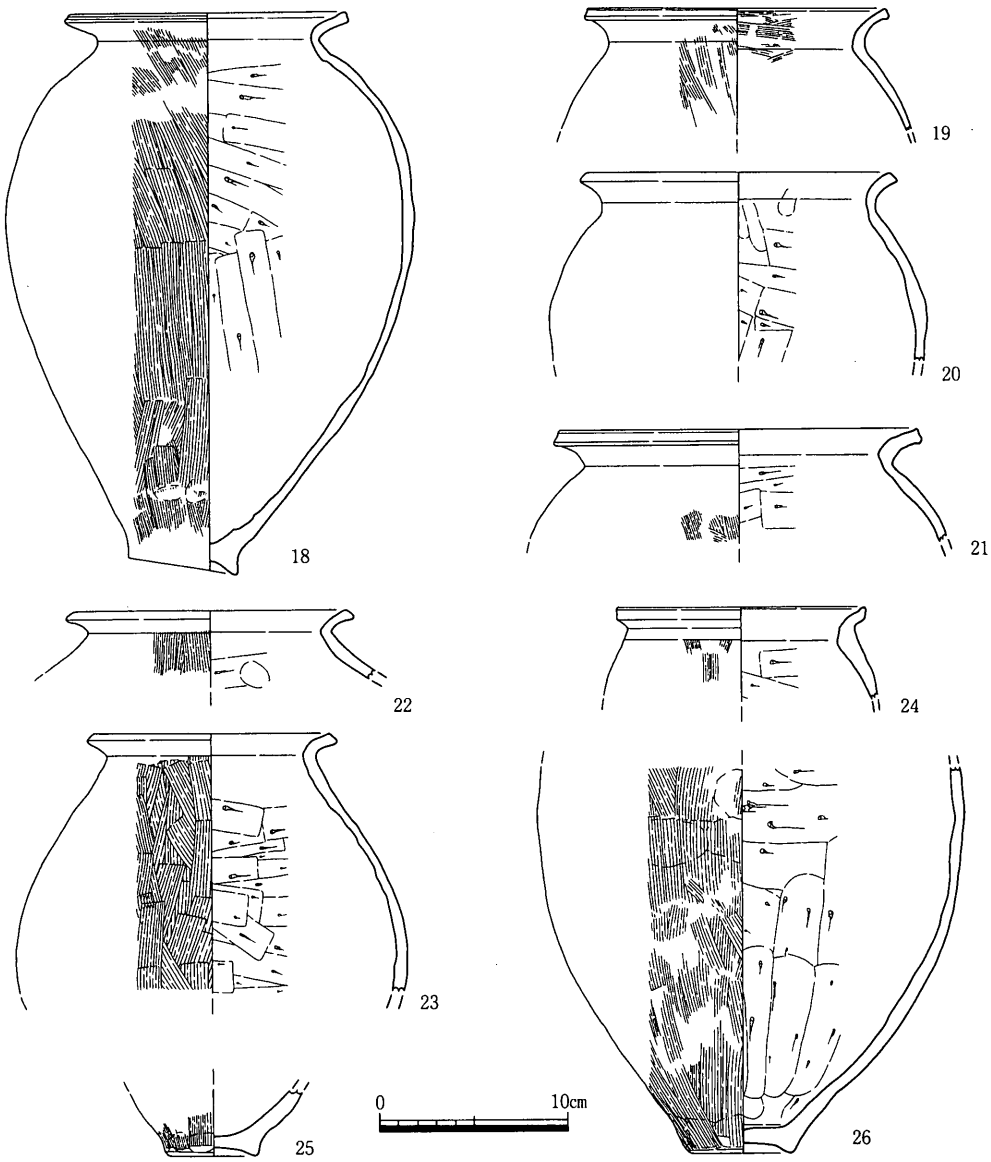
は凹線文は入らず，また沈線がめぐるものも少ない。底は少し上げ底になる。35は胴があまり張らず，口縁部は横に水平に広がる。36～43は壷である。36・39は口縁の開きが弱い。40はやや小ぶりである。



第253図　Ｄ区ＳＤ02断面図（Ｄ2区部分，1／20）

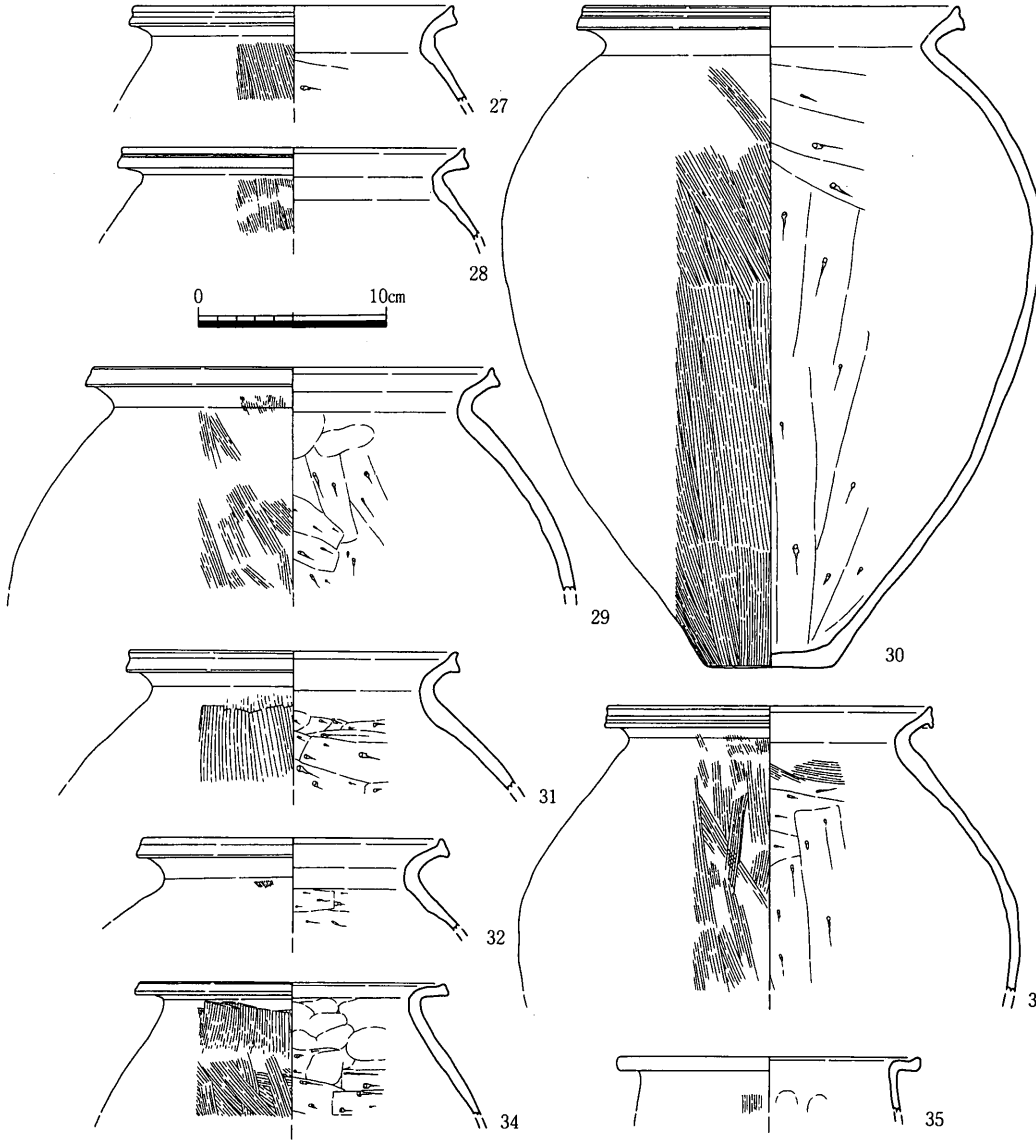


第254図　Ｄ区ＳＤ02遺物出土状況（1／20）



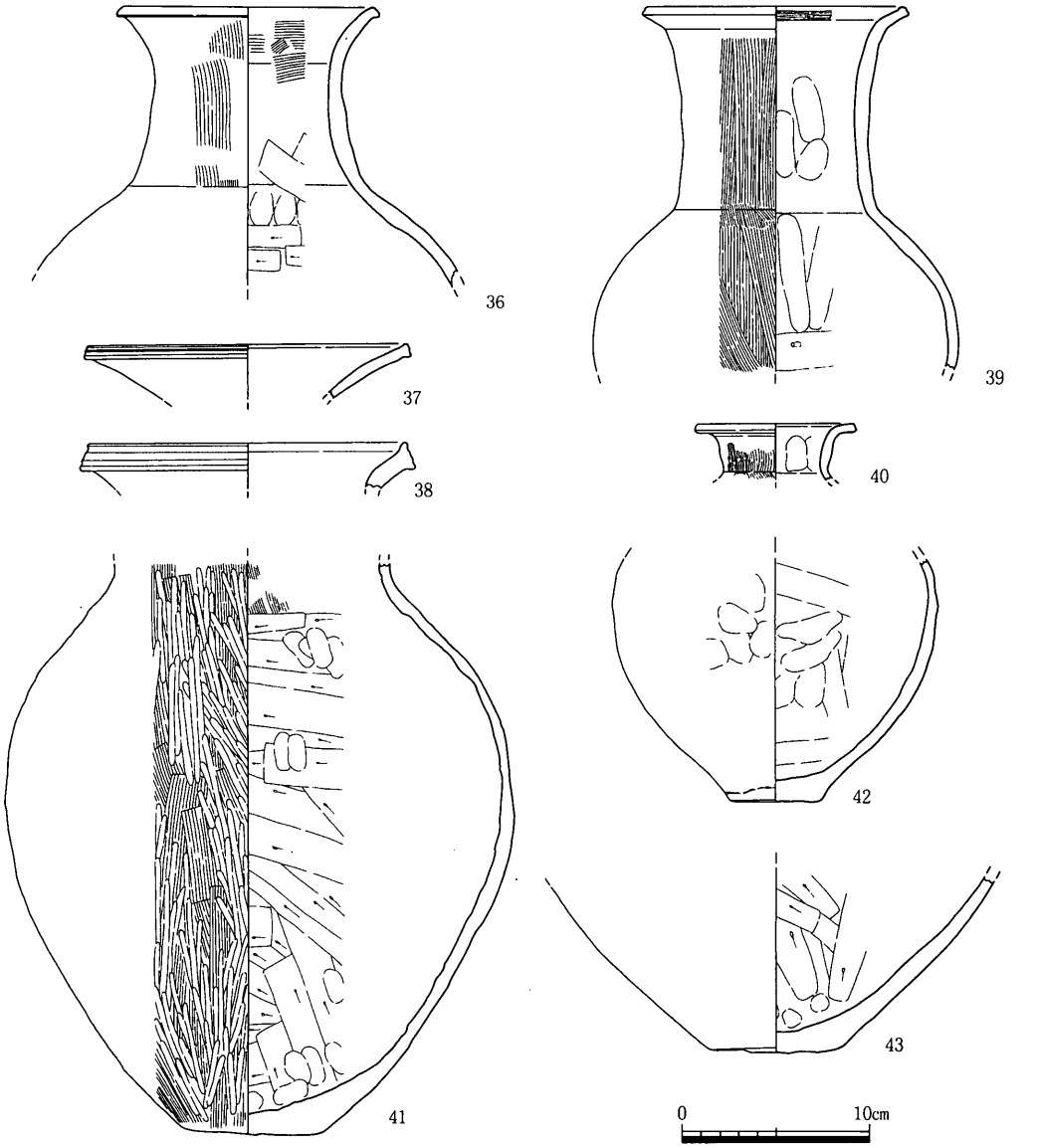
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
18	弥・甕	15.0	29.2	5.8	粗・多	良好	灰白・橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
19	弥・甕	15.8			粗・普	良好	浅橙～橙	ナデ・ハケ目	ハケ目・板ナデ		
20	弥・甕	16.8			粗・普	良好	灰白～黄灰	ナデ	ナデ・ケズリ		
21	弥・甕	19.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
22	弥・甕	14.2			粗・普	良好	黒褐～灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
23	弥・甕	13.2			粗・普	良好	淡黄～黒褐	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
24	弥・甕	13.0			中・普	良好	灰白～灰黄	ﾅﾃﾞ・ハケ目→ﾅﾃﾞ	ナデ・ケズリ		
25	弥・甕			4.9	中・普	良好	灰黄,灰白	ハケ目・ナデ	不明		
26	弥・甕			5.2	粗・普	良好	鈍黄橙～褐灰	ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	ケズリ・ナデ		

第255図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（1）（1／4）



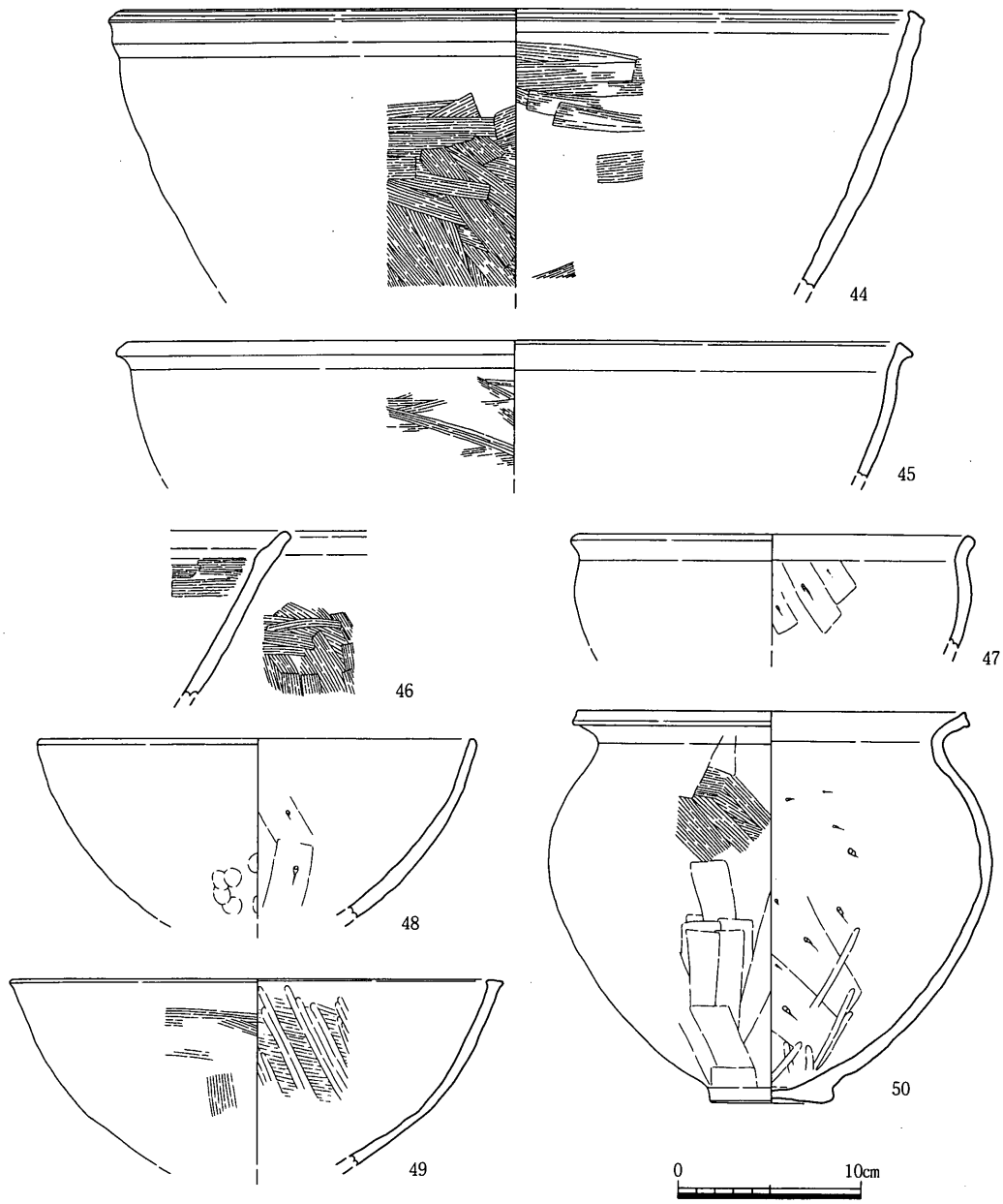
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
27	弥・甕	16.7			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
28	弥・甕	18.0			粗・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	不明		
29	弥・甕	21.1			粗・多	良好	浅黄橙～黄橙	ナデ・ハケ目	ﾅﾃﾞ・ケズリ→ﾅﾃﾞ		
30	弥・甕	19.6	34.0	6.6	粗・普	良好	淡橙～暗赤灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
31	弥・甕	17.4			粗・普	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
32	弥・甕	15.8			粗・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
33	弥・甕	17.1			粗・多	良好	橙～にぶい橙	ナデ・ハケ目	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ・ﾊｹ目	沈線	
34	弥・甕	16.0			粗・普	良好	浅黄橙,橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		
35	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

第256図　D区ＳＤ02出土遺物（2）（1／4）



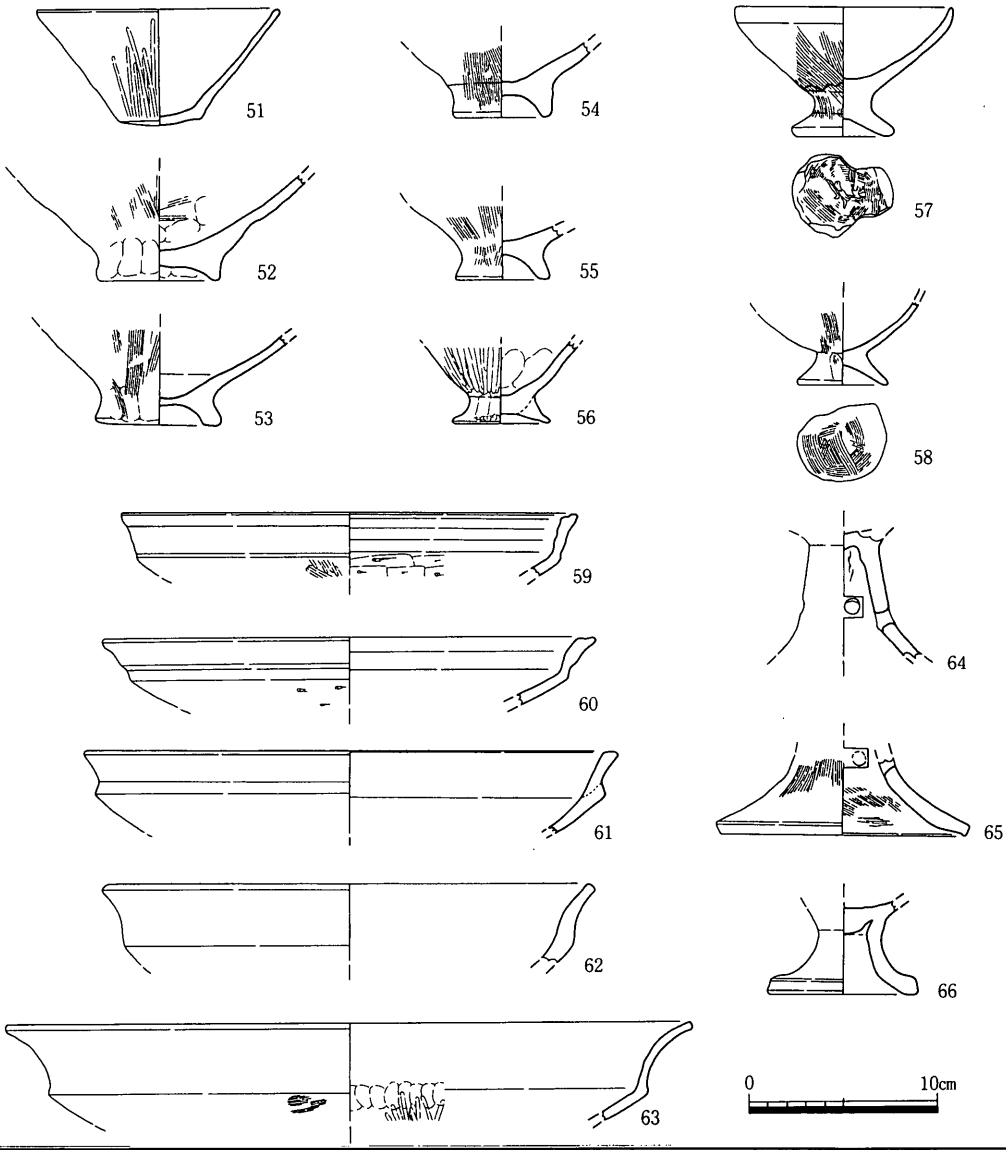
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
36	弥・壺	14.0			粗・普	良好	灰白	ハケ目→ナデ	ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ		
37	弥・壺	16.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線	
38	弥・壺	17.0			中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	沈線	
39	弥・壺	13.5			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ		
40	弥・壺	8.3			細・普	良好	にぶい黄	ハケ目→ナデ	ナデ		
41	弥・壺			7.0	粗・普	良好	灰白～黒褐	ハケ目→ミガキ	ケズリ・ナデ		
42	弥・壺			4.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・板ナデ		
43	弥・壺			6.9	粗・多	良好	橙，鈍い黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ		

第257図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（3）（1／4）



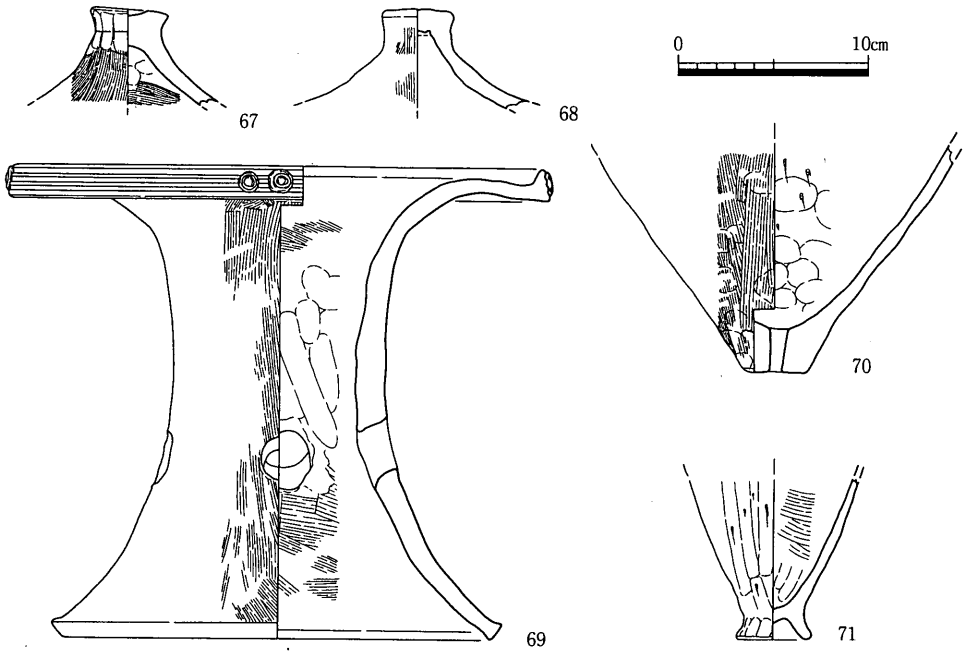
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
44	弥・鉢	43.0			粗・普	良好	灰黄～黒	ナデ・ハケ目	ナデ→ハケ目		
45	弥・鉢	43.1			粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ・ハケ目		
46	弥・鉢				粗・普	良好	灰黄～黒	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
47	弥・鉢	22.0			粗・普	良好	淡黄	ナデ	ケズリ→ナデ		
48	弥・鉢	23.8			粗・普	良好	鈍い黄橙～黒	ナデ	ナデ・ケズリ		
49	弥・鉢	27.0			粗・多	良好	橙	ﾅﾃﾞ・ハケ目→ﾅﾃﾞ	ハケ目→ミガキ		
50	弥・鉢	21.2	21.3	6.8	粗・普	良好	鈍い黄橙～黒	ナデ・ハケ目	ケズリ→ミガキ		

第258図　D区ＳＤ02出土遺物（4）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
51	弥・鉢	12.7	5.8	4.2	細・普	良好	浅黄橙	ミガキ・ナデ	ナデ		
52	弥・鉢			6.4	粗・多	良好	赤灰～黒灰褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
53	弥・鉢			6.7	粗・多	良好	淡黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ		
54	弥・鉢			5.1	粗・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
55	弥・鉢			5.0	中・普	良好	鈍黄橙～黄灰	ハケ目・ナデ	ナデ		
56	弥・鉢			5.2	細・普	良好	淡黄	ミガキ・ナデ	ナデ		
57	弥・鉢	11.3	6.5	5.4	中・普	良好	灰白・灰褐	ナデ・ハケ目	ナデ	底部外面にへら痕有り	
58	弥・鉢			4.6	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ	不明		
59	弥・高杯	24.0			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		金雲母を含む
60	弥・高杯	26.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	不明		金雲母を含む
61	弥・高杯	28.2			中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		
62	弥・高杯	26.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
63	弥・高杯	36.2			粗・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ミガキ		
64	弥・高杯				粗・多	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	外→内へ4つ穿孔	
65	弥・高杯			13.3	粗・多	良好	灰白	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目	透かし穴は5～6ヶ所	
66	弥・高杯			8.0	粗・普	良好	にぶい橙～橙	ナデ	不明		

第259図　D区ＳＤ02出土遺物（5）（1／4）

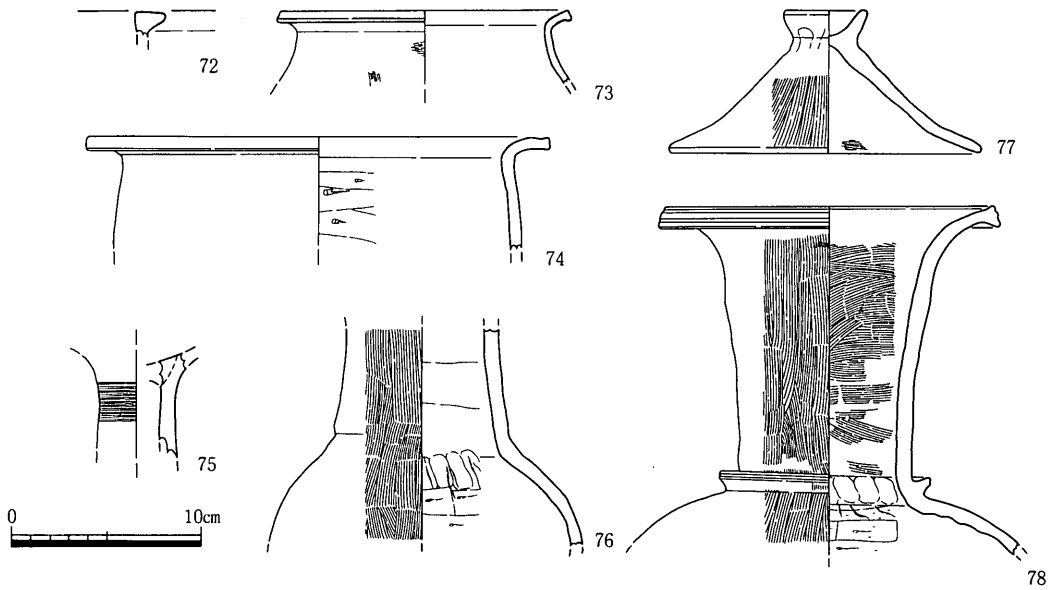


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
67	弥・蓋	4.0			中・普	良好	黄灰，浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
68	弥・蓋				粗・普	良好	灰白	ハケ目→ナデ	ナデ・板ナデ		
69	弥・器台	27.5	24.0	22.4	中・普	良好	褐灰～浅黄橙	ハケ目→ナデ	ﾐｶﾞｷ・ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	貼付文，沈線	
70	弥・甑			3.3	粗・普	良好	灰白～黒，橙	ハケ目・ナデ	ケズリ→ナデ		
71	弥・製塩			4.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ・ナデ	ハケ目・ナデ		

第260図　D区ＳＤ02出土遺物（6）（1／4）

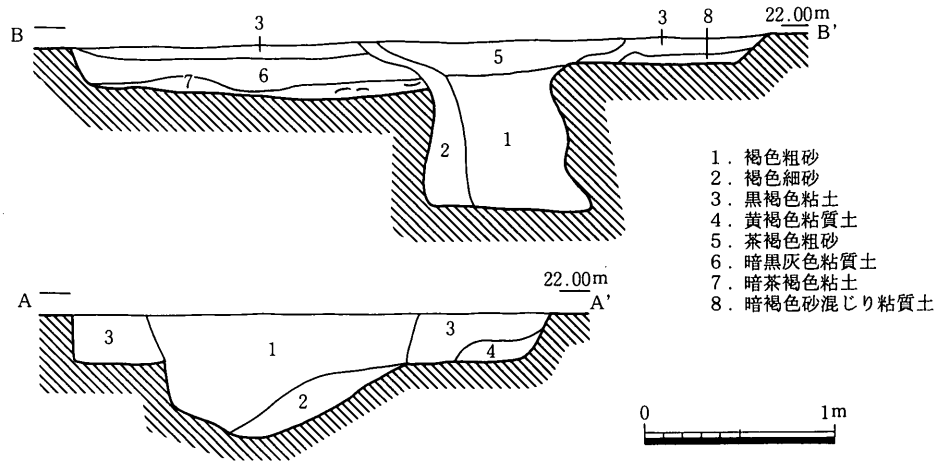
41はハケ目の上から磨いている。44～58は鉢である。44は口縁内面・端部平面・外面をつよく横にナデており，その部分が凹んでいる。46は内面に斜めの大きな平坦面ができている。49は内面を磨いている。50も内面へラケズリ後ミガキ状のものが認められる。頸部が強くくびれ壷に近い形態をしている。52～58は上げ底で脚がつく。そのうち52～55は平坦な接地面がつく。56は外面を丁寧に磨いている。57・58は脚内面にもハケ目がみられる。59～66は高杯である。59は口縁上面・内面に強い横ナデのため凹凸ができる。内面下半はへラケズリしている。60も強い横ナデのため口縁上面が凹む。外面下半をへラケズリしている。63は内面を磨いている。66は64・65に比べて脚が小さく裾が開かない。杯部底は円盤充填でふさいでいる。69は口縁が開いた部分の上面を磨いている。70は底面積が小さい。

72～75・77は溝下部で出土した。72は中期前半の土器である。75も同じ時期であると思われ，11本の櫛描き沈線をめぐらす。杯部底は円盤充填でふさいでいる。77は67・68にくらべ上面が大きく凹んでいる。76・78はＤ２区部分で出土した。78は口縁端部が上下に広がり，沈線がめぐる。頸部と胴部の境には台形の突帯がめぐる。ＳＤ02の廃絶の時期はＶ



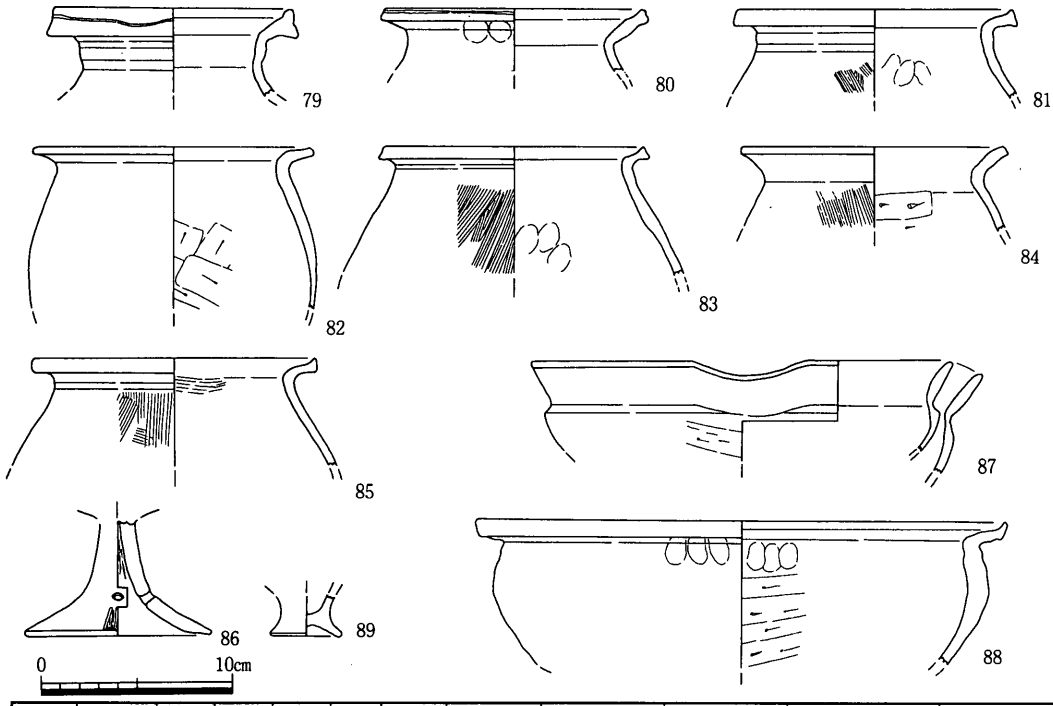
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
72	弥・甕				粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
73	弥・甕	15.7			粗・普	良好	橙～にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
74	弥・甕	24.2			粗・普	良好	明褐灰	ナデ	ナデ・ケズリ		
75	弥・高杯				中・普	良好	浅黄～橙	ナデ	ナデ	沈線10～11本	
76	弥・壺				粗・普	良好	灰黄	ハケ目	ナデ・ケズリ		
77	弥・蓋	16.3	7.3		粗・普	良好	浅黄橙～褐灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
78	弥・壺	17.9			中・普	良好	灰白	ハケ目→ナデ	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ		

第261図　D区ＳＤ02出土遺物（7）（1／4）



第262図　D区ＳＤ03断面図（1／40）

期前半と考えられる。

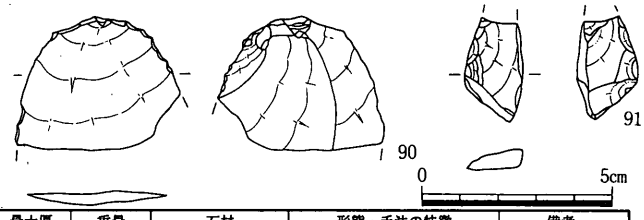


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
79	弥・壺	12.4			粗・多	良好	明褐	ナデ	ナデ		
80	弥・甕	13.6			細・少	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
81	弥・甕	14.4			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		角閃石含む
82	弥・甕	14.4			細・普	良好	赤褐	ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石
83	弥・甕	13.6			中・少	良好	橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
84	弥・甕	13.8			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		
85	弥・甕	14.8			細・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ・ハケ目		角閃石含む
86	弥・鉢	22.0			細・多	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ナデ	注ぎ口1ヶ所	
87	弥・鉢			9.8	細・普	良好	にぶい黄褐	ミガキ	ナデ	四方透し	角閃石含む
88	弥・鉢			3.8	精緻	良好	黒・暗灰黄	ナデ	ナデ		
89	弥・鉢	29.8			中・普	良好	明褐	ナデ	ケズリ		

第263図　D区ＳＤ03出土遺物（1）（1／4）

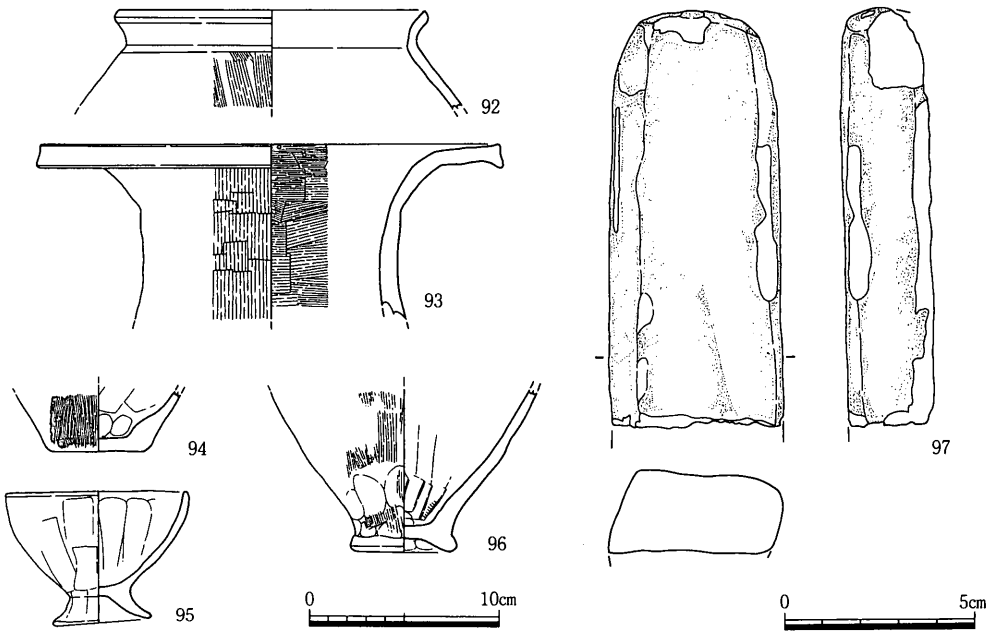
ＳＤ03（第262～264図，図版43）

Ｄ１区の中央やや東寄りを蛇行するほぼ南北方向の溝である。幅は2.3～5.0ｍで，深さは20～90cmとなっている。はじめに深さ20cmほどの溝が掘削され，それが埋没した後に溝のほぼ中央部にふたたび90cm前後の溝が形成されたもので厳密に言うと２本の溝が重なっているものである。最初の溝は溝底



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
90	剥片	3.5	4.4	0.3	7.7	サヌカイト		
91	二次加工のある剥片	2.6	1.6	0.5	2.5	サヌカイト		

第264図　D区ＳＤ03出土遺物（2）（1／2）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
92	弥・甕	16.0			粗・普	良好	鈍い橙，浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
93	弥・壺	24.1			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
94	弥・甕			4.8	中・普	良好	淡黄橙	ナデ・ハケ目	板ナデ		
95	弥・鉢	9.5	7.0	5.1	粗・普	良好	淡黄・明赤褐	ナデ	ナデ		
96	弥・鉢			5.0	中・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母，胎土黄灰

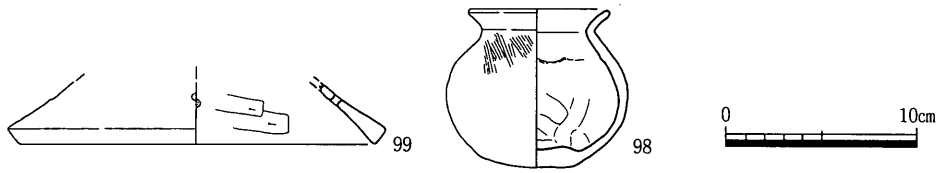
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
97	柱状片刃石斧	10.8	4.5	2.2	249	結晶片岩		

第265図　D区ＳＤ04出土遺物（1／2，1／4）

付近から出土した土器からＶ期のものと考えられるが，若干Ⅱ～Ⅳ期の土器も混じる。後の溝は埋土が砂層のみであることから洪水のようなもので一気に埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかったため正確な年代はわからないが，Ｖ期以降から上層の遺構の７世紀までの間と考えられる。Ｅ３区の南西隅で検出した溝につづくものと思われる。79は壷，81・83・85の甕は胎土に角閃石をふくみ口縁部が短く外反する。87は大形の鉢であるが注ぎ口が１ヵ所ある。90は剥片，91は側縁に二次加工のある剥片である。両者ともにサヌカイト製である。Ｖ期後半のものである。

ＳＤ04（第265図）

Ｄ５区北東角から南西にむけて走る溝である。上面が大きく撹乱されているため溝底がわずかに検出されたのみである。埋土は黒色粘質土の単一層である。溝内から弥生土器片や石器が少量だがまとまって出土した。出土した土器からＳＤ04はＶ期前半ごろのものと考えられる。

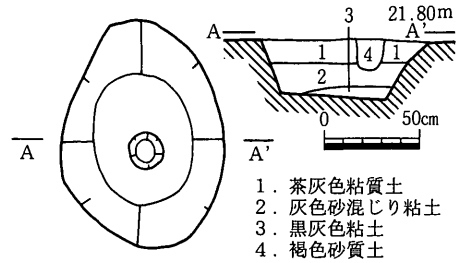


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
98	弥・壺	7.4	8.1	4.5	粗・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
99	弥・高杯			20.0	中・普	良好	明褐	ナデ	ケズリ→ナデ	穿孔の数不明	

第266図　D区ＳＤ06・07出土遺物（1／4）

ＳＤ05

Ｄ１区の南西隅に位置する北東～南西方向の溝で，調査区内で3.5ｍほど検出した。幅30cm，深さ10cmほどのものである。埋土は茶褐色粘質土の単一層である。弥生時代後期の土器の細片が少量出土したのみである。



第267図　D区ＳＫ01平・断面図（1／40）

ＳＤ06（第266図）

Ｄ５区ＳＤ04の南側を同じ方向に走る溝である。ＳＤ04同様上面が大きく撹乱されている。調査区中央付近から深さ・幅とも大きい流れにつながる。この関係についてはＳＲ01の項で検討を加えているが同じ１つの溝の可能性がある。埋土は黒色粘質土の単一層である。少量の土器が出土した。98は小型の壷である。

ＳＤ07（第266図）

Ｄ５区南西隅を北西～南東方向に走る溝である。深さ35cm，幅約１ｍで，埋土は暗灰色の細砂と灰黒色の粘土がラミナ状に堆積していた。少量の土器細片が出土した。

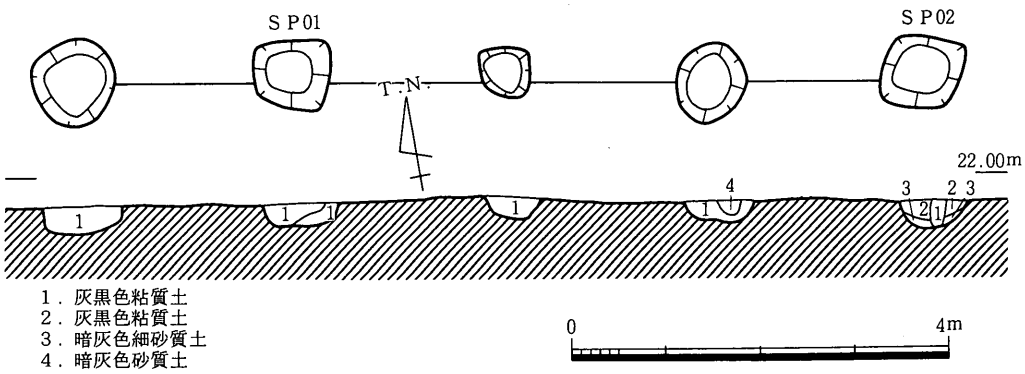
ＳＫ01（第267図）

Ｄ１区の南隅に位置する平面形が楕円形の土坑である。長径1.2ｍ，短径0.9ｍ，深さ25cmで，埋土は上から茶灰色粘質土，灰色砂混じり粘質土，黒灰色粘土の３層となっている。Ⅳ・Ⅴ期の土器が少量出土した。

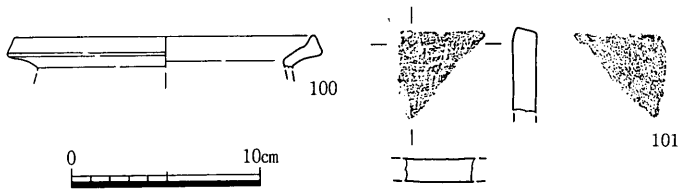
(2)古代の遺構・遺物

ＳＡ01（第268・269図）

Ｄ２区北東部で検出した。５個のピットからなる。柱間の距離は1.5ｍで，方位はＮ－81°－Ｗをとる。柱穴は径30～50cmの円形で，深さは5～25cmある。柱穴から土師器の細



第268図　D区SA01平・断面図（1／80）

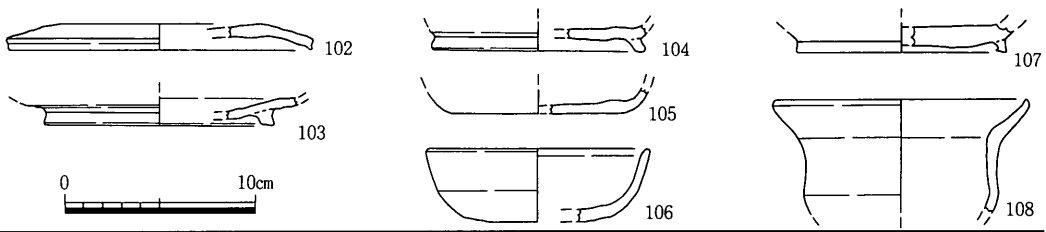


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
100	弥・甕	16.6			細・普	良好	鈍黄褐，黒褐	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
101	平瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	-	18	中・普	にぶい黄橙	良好		4.4

第269図　D区SA01出土遺物（1／4）

片や瓦が出土している。細かな時期決定はできないが，土色・方位からも古代の柵列と考える。柱穴出土土器を2点図化した。100はSP01，101はSP02からの出土である。なお100は混入した弥生時代V期の甕である。

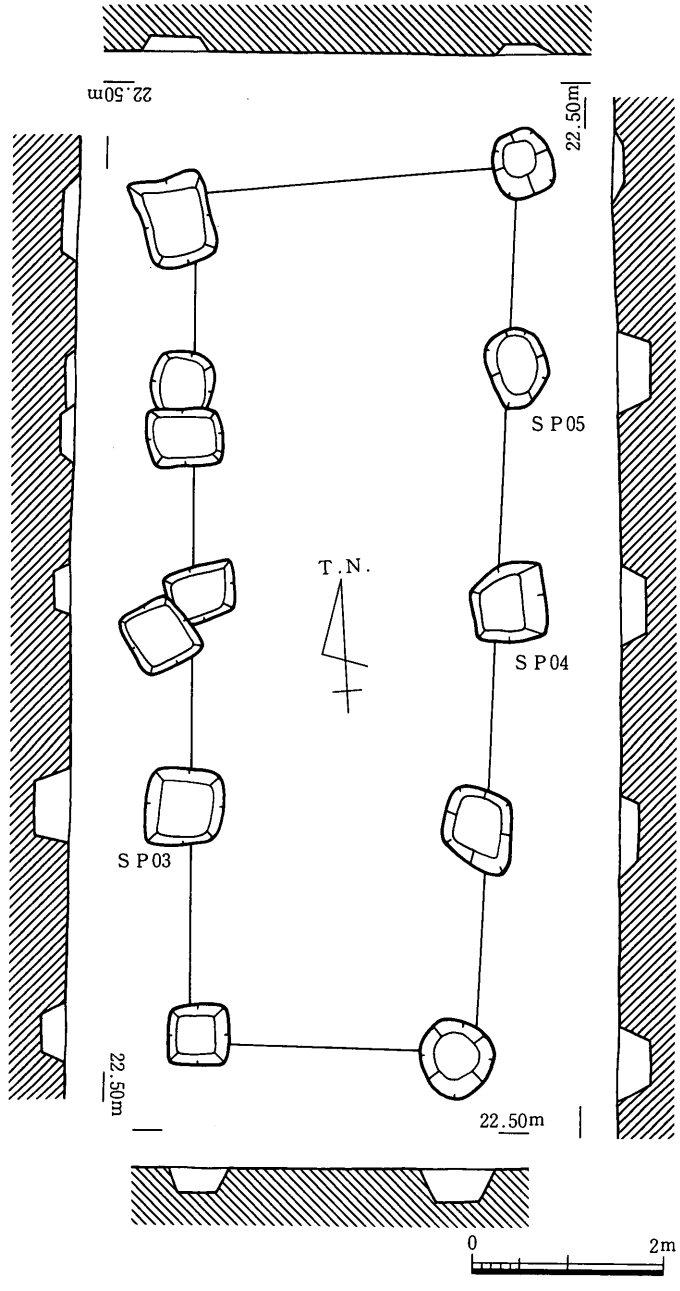


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
102	須・杯蓋	15.8	1.4		細・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
103	須・高台杯			12.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
104	須・高台杯			11.2	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
105	須・杯			9.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
106	須・杯	11.6	3.9		細・多	不良	灰白	ナデ	ナデ		
107	須・高台杯			11.1	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
108	土・甕	13.6			粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	赤色顔料	金雲母含む

第270図　D区SB01出土遺物（1／4）

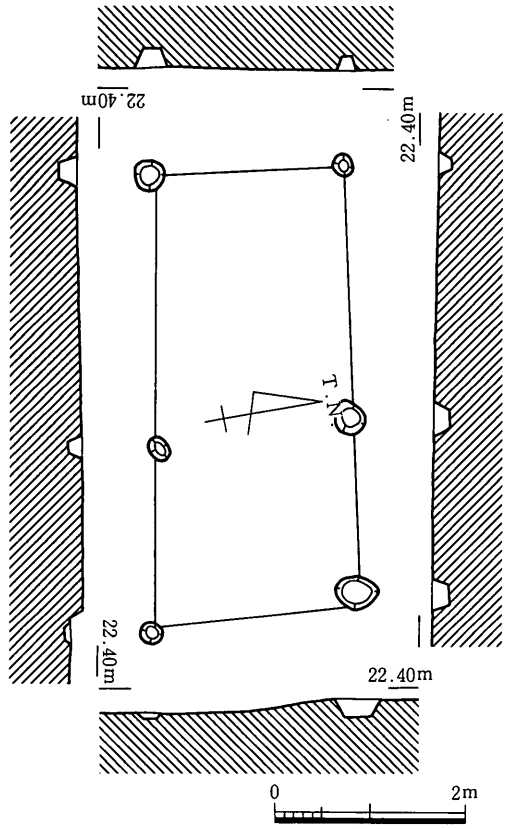
ＳＢ01（第270・271図，図版40）

Ｄ１区第１面で検出した。Ｄ１区のほぼ中央やや西側に位置する桁行１間×梁行４間の南北に長い掘立柱建物である。桁行は１間で3.3ｍ，梁行は４間で8.9ｍ，建物面積は29.37㎡≒8.9坪である。柱穴掘り方の平面形はほぼ正方形で，１辺80㎝前後となっている。柱穴の上部は削平されていて残り具合はあまりよくなく，深さ10～40㎝程度である。また建物の主軸方位はＮ－６°－Ｅとなっている。建物はすぐ東側の７世紀の溝の埋没後に建てられている。柱穴から土器が出土したが，図化できたものはＳＰ03（102・103），ＳＰ04（104～106），ＳＰ05（107・108）出土土器だけである。杯は高台をもつものともたないものがある。108は土師器の甕で口径のわりに体部が小さい。



第271図　Ｄ区ＳＢ01平・断面図（1／80）

内外面ともにナデており，体部外面の一部に赤色顔料が付着している。その他細片のため図化できなかったがＳＰ06より内外面に赤色顔料を塗った土師器の杯が出土しており，内面には暗文をほどこしている。これらの土器の年代観からＳＢ01の廃絶は８世紀中ごろと考えられる。



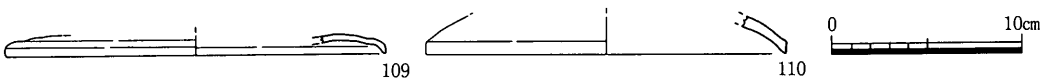
第272図　Ｄ区ＳＢ02平・断面図（1／80）

ＳＢ02（第272図，図版40）

ＳＢ01の東約６ｍのところに位置する桁行１間×梁行２間の東西に長い掘立柱建物である。桁行は2.0ｍ，梁行は２間で4.7ｍ，建物面積は9.4㎡≒2.8坪の小形の建物である。柱穴掘り方の平面形は円形で直径は30㎝前後，上部が削平されているため残り具合が悪く，深さは10～20㎝しかない。柱穴の埋土は暗灰色の単一層である。また建物の主軸方位はＮ－81°－Ｗである。柱穴の埋土から土器の細片が出土したが図化できなかった。７～８世紀の土器と思われる。ＳＢ01と建物主軸が直交しており，両者が一連の建物と考えられることと柱穴出土土器の新しいものが８世紀であることからＳＢ02の廃絶年代はＳＢ01と同じ８世紀中ごろか下っても８世紀末と推定される。

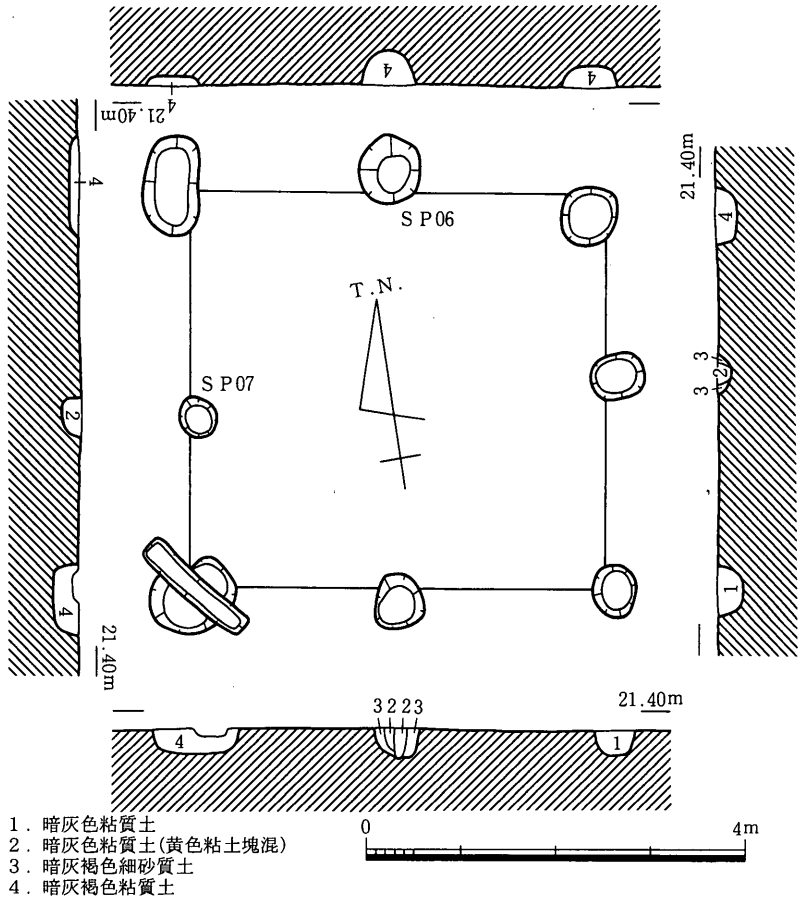
ＳＢ03（第273・274図，図版48）

Ｄ３区第１面で検出した梁行２間×桁行２間の建物である。建物の主軸はＮ－80°－Ｗを向いている。柱間の距離は梁行が平均で2.0ｍ，桁行が2.2ｍで，柱穴は円形となるものが多い。深さは10～30㎝と浅い。埋土は灰色砂質土を主とする。ＳＢ03の柱穴からは土師



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
109	須・杯蓋	20.1			中・普	良好	灰白～明赤褐	ナデ	ナデ		
110	須・杯蓋	19.0			微・普	不良	灰～灰白	ナデ	ナデ		

第273図　Ｄ区ＳＢ03出土遺物（1／4）

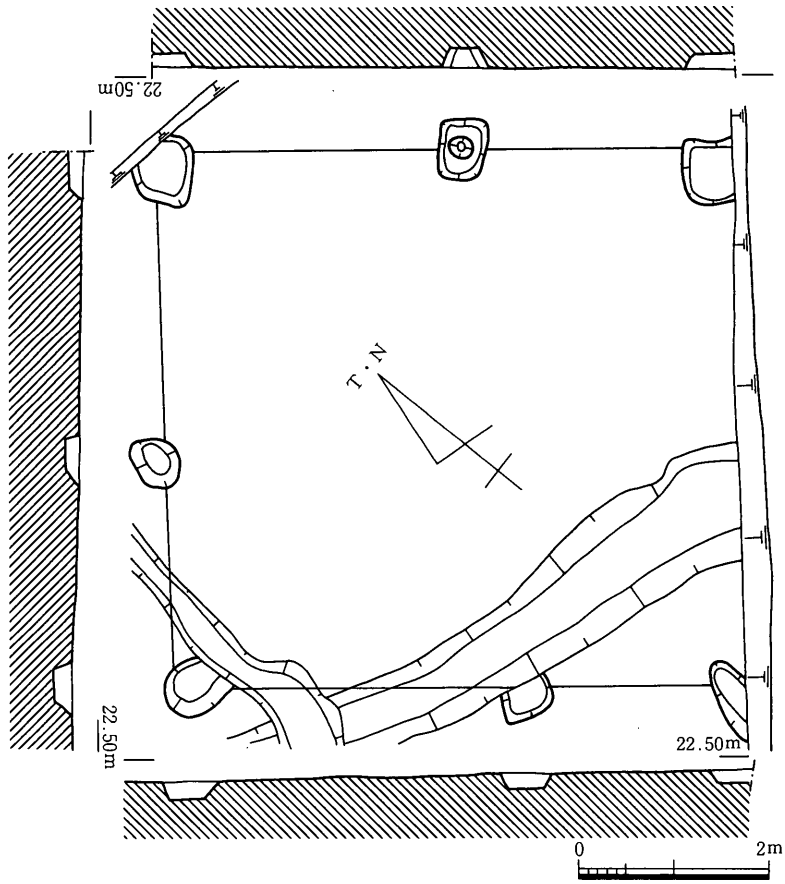


第274図　D区SB03平・断面図（1／80）

器や須恵器が出土している。このうち2点を図化した。109はSP06，110はSP07から出土しており，109・110とも須恵器の杯蓋である。109は天井部と受け部の境が丸く，110は受け部となる部分が消滅している。いずれも杯蓋の消滅する直前の形態といえる。須恵器の年代からSB03は9世紀前半のものと考えられる。

SB04（第275図，図版41）

SB02のすぐ北東に隣接して検出した掘立柱建物である。梁行が調査区外にのびるため正確な規模は不明であるが，桁行2間×梁行2間以上である。桁行は2間で5.6m，梁行は 調査区内の2間で6.0m，建物面積は33.6㎡以上である。柱穴掘り方の平面形はほぼ方形で一辺50～60cm，深さは20cmで残りは悪い。柱穴の埋土は暗灰色粘質土の単一層である。東側柱列の中央の柱穴で径25cmの柱痕が検出された。また建物の主軸方位はN－39°－Wである。柱穴埋土から土師器杯と緑釉陶器の細片が出土しており，その年代観からSB04

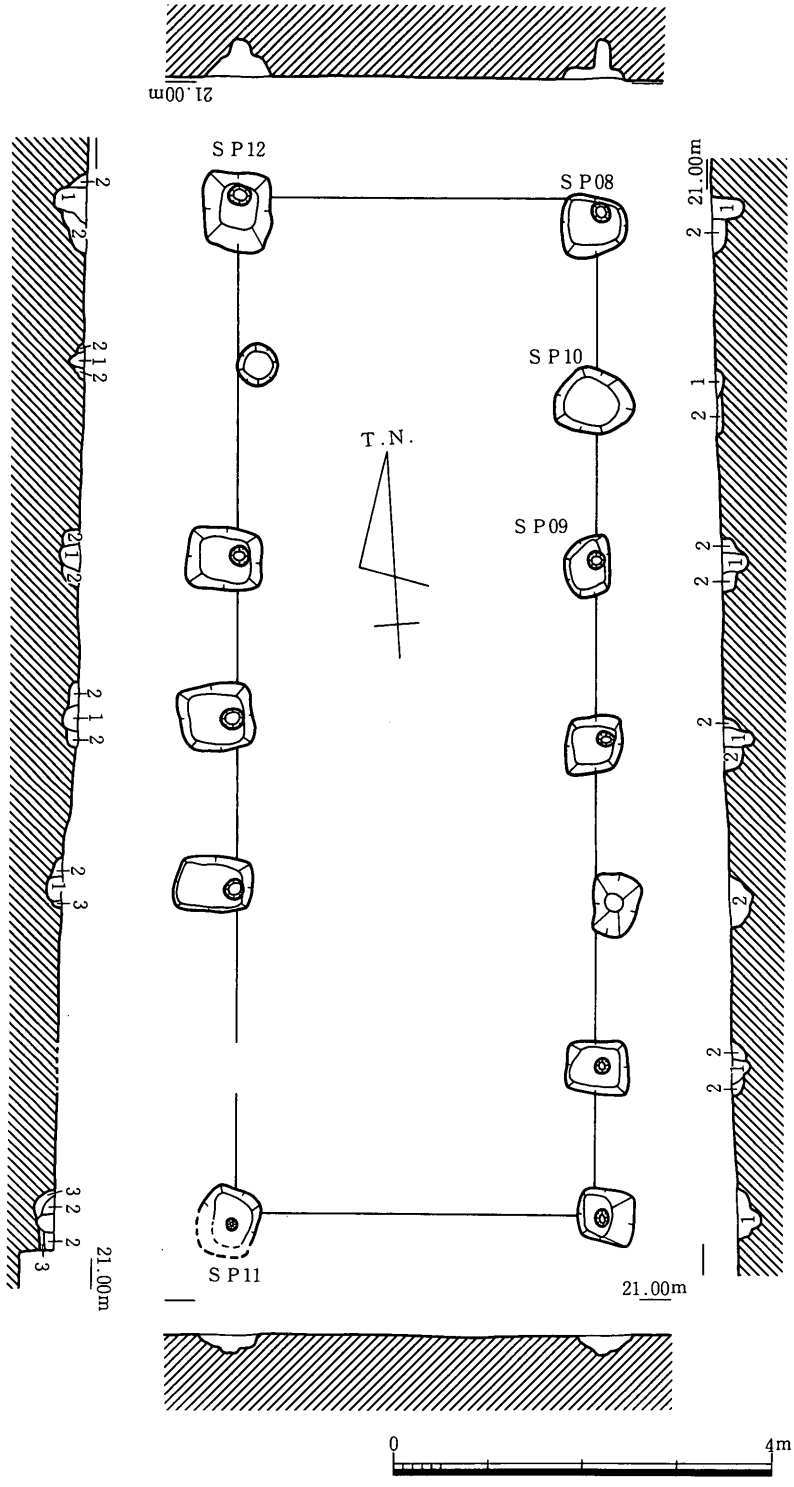


第275図　Ｄ区ＳＢ04平・断面図（1／80）

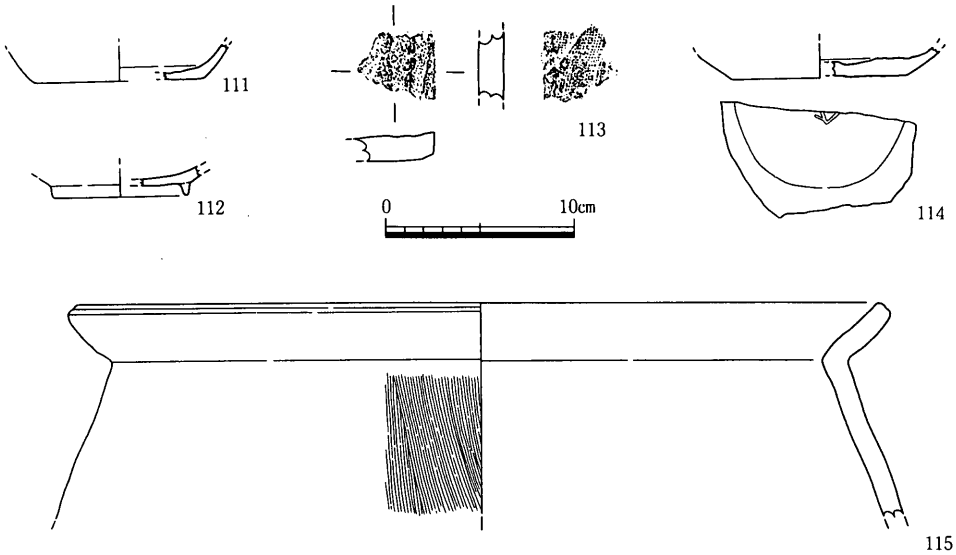
の廃絶年代は11世紀前後と考えられる。

ＳＢ05（第276・277図，図版48・49）

Ｄ３区西南部で検出した梁行１間×桁行６間の細長い建物である。建物の主軸はＮ－４°－Ｅを向いている。柱間の距離は梁行が3.8ｍ，桁行が平均で1.75ｍで，柱穴は一辺40～60㎝の隅丸方形をしている。深さは15～35㎝とやや浅い。遺構面の傾斜は本来の地形を反映しているとおもわれるが，やはり全面的に上面を削平された可能性がのこる。埋土は淡茶灰色砂質土を主体とする。柱穴からは須恵器や土師器や瓦の細片が出土した。図化した5点は111～115の順にそれぞれＳＰ08～ＳＰ12に属する。113は布目が凸面側に存在する。凹面になっている成形台をもちいて作ったものと考えられる。114は底部に鳥の足形のヘラ記号がかかれている。115は頸部がまだすぼむ段階の土鍋である。以上の土器からＳＢ05は10世紀後半から11世紀にかけてのものと考えられる。



第276図　D区ＳＢ05平・断面図（1／80）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
111	須・杯			9.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
112	黒A・椀			7.0	微・普	良好	にぶい橙，灰	ナデ	不明		金雲母を含む
114	須・杯			9.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		ヘラ記号
115	土・土鍋	42.0			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
113	平瓦	1.4	布目圧痕	ナデ	10	-	粗・普	灰白	良好	布目圧痕が凸面側にある	3.4

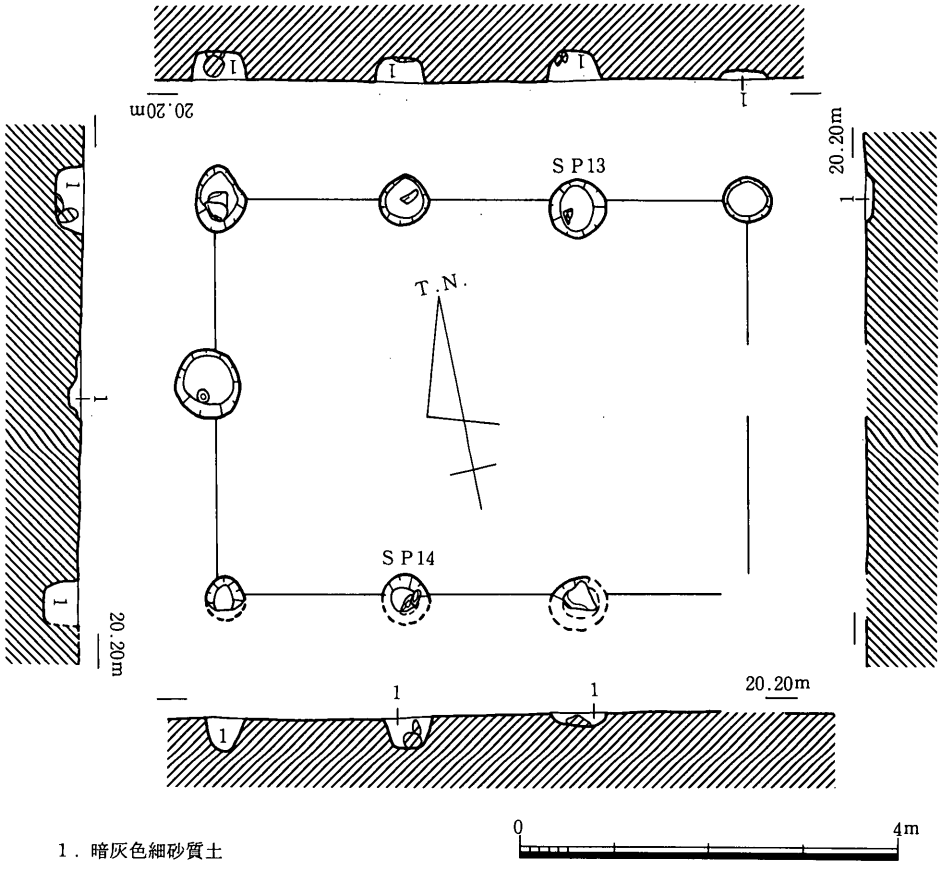
第277図　D区ＳＢ05出土遺物（1／4）

ＳＢ06（第278・279図，図版52）

Ｄ５区南西部で検出した梁行２間×桁行３間の建物である。建物の主軸はＮ－78°－Ｗを向いている。柱間の距離は梁行が2.0m，桁行が1.87mで，柱穴は径40～70cmの円形をしている。深さは10～30cmと浅い。上面はぶどう畑で深く開墾されているため削平された可能性が高い。埋土は暗灰色シルトであった。柱穴のうち５個に根石あるいは根固めの石が据えられていた。ＳＢ06の柱穴からは土師器や須恵器が出土している。図化した３点は116・117がＳＰ13に，118がＳＰ14に属する。116は杯蓋のつまみである。117は皿の可能性もあ

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
116	須・杯蓋				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土はにぶい赤褐
117	須・杯			9.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
118	黒A・椀			7.1	中・普	良好	橙～黒，黒	ナデ	不明		

第278図　D区ＳＢ06出土遺物（1／4）

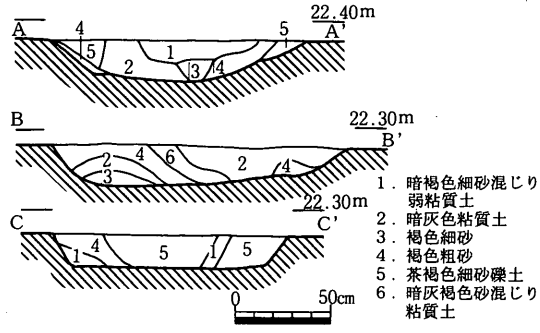


第279図　D区ＳＢ06平・断面図（1／80）

る。118は椀の開きが大きい。以上の土器からＳＢ06は10～11世紀ごろのものと考えられる。

ＳＤ08（第280図）

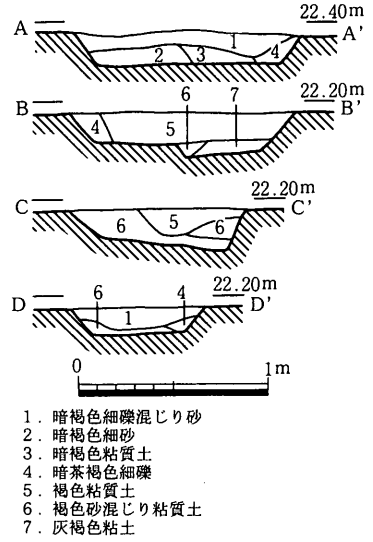
Ｄ１区の中央やや東寄りに位置する南北方向の溝であるが，中央部から南側は蛇行し，ＳＤ10に切られている。また第２遺構面のＳＤ03にほぼ重なっている。幅1.0～1.6m，深さ20cm前後で断面形は緩やかなＵ字形となっている。７～８世紀の土器の細片が出土したのみである。



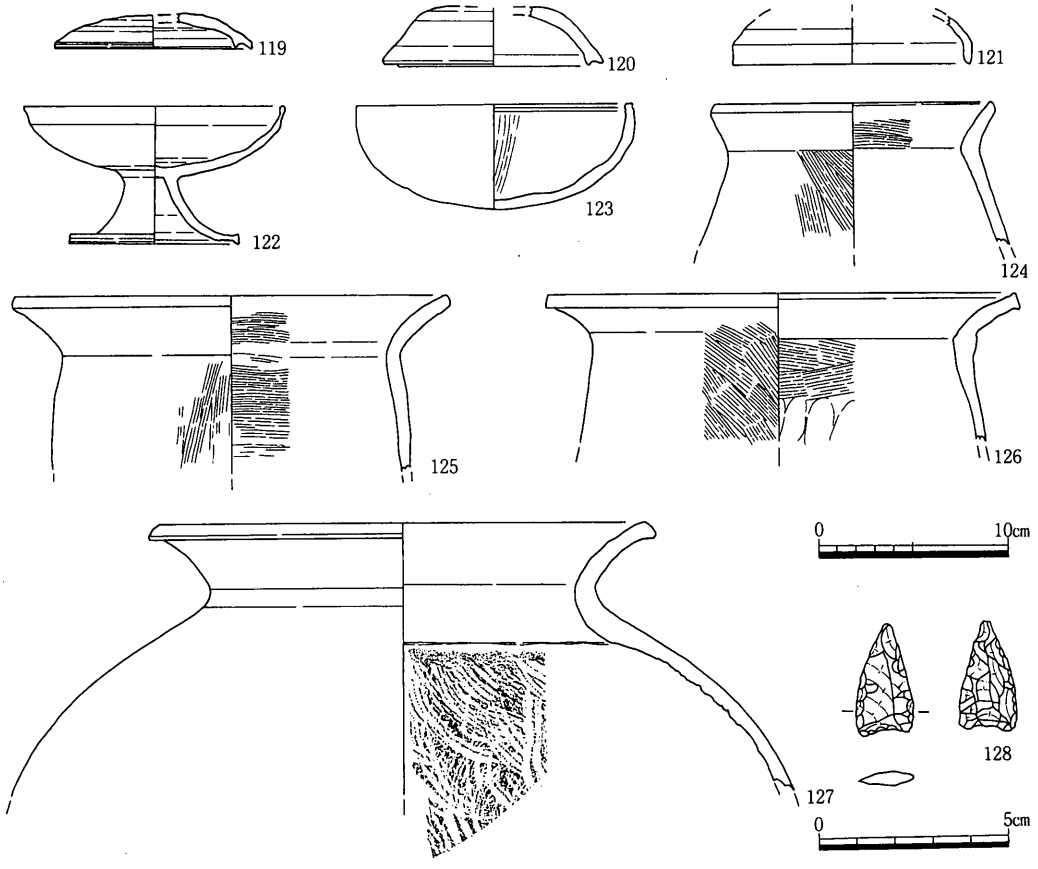
第280図　D区ＳＤ08断面図（1／40）

ＳＤ09（第281・282図）

Ｄ１区の中央部，ＳＤ08の西側約4.6ｍのところに位置し，ほぼ直線的に南北方向にのびる溝である。幅20～50㎝，深さ20㎝前後で断面形は逆台形であり，中央部で一部段掘りとなっている。このＳＤ09の埋没後にＳＢ01が建てられているのであるが，ＳＢ01とＳＤ09は同じ方向をむいているため，埋没後であってもＳＤ09の方向に規制されてＳＢ01がたてられた可能性はある。119・120は内面にかえりのつく杯蓋である。121の口縁端部は直立する。123は土師器杯で，内面は摩滅しているがわずかに暗文が残っている。また外面に一部赤色顔料が付着している。124～126は甕でハケ目



第281図　Ｄ区ＳＤ09断面図（1／40）



第282図　Ｄ区ＳＤ09出土遺物（1／2，1／4）

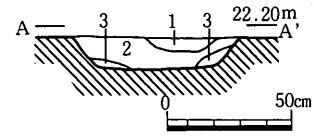
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
119	須・杯蓋	10.4			細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
120	須・杯蓋	11.6			細・少	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
121	須・杯蓋	12.6			精緻	良好	暗緑灰	ナデ	ナデ		
122	須・高杯	14.0	7.2	9.0	細・普	不良	灰白	ナデ	ナデ	口縁強いナデ	
123	土・杯	14.6	5.5		中・普	良好	浅黄橙	ナデ		外面に赤色顔料	金雲母含む
124	土・甕	14.6			中・多	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		金雲母含む
125	土・甕	22.8			中・多	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ハケ目	赤色顔料	金雲母含む
126	土・甕	24.6			中・少	良好	淡黄	ハケ目	ハケ目		
127	須・甕	25.6			細・普	良好	青灰	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
128	石鏃	2.9	1.5	0.4	1.7	サヌカイト		

調整である。7世紀中葉前後の土器群である。128はサヌカイト製の凹基の石鏃である。

ＳＤ10（第283図）

Ｄ１区の南東部に位置し，直角近く屈曲してＳＤ08に重なり調査区外にのびてゆく。ＳＤ08より新しい溝である。幅0.4～1.5m，深さ15cm前後である。断面形は逆台形に近く，埋土は主に灰色粘質土である。８～９世紀の土器が少量出土した。

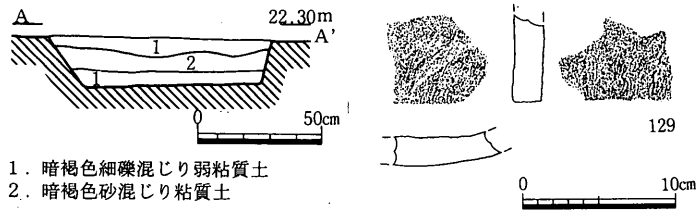


1．茶褐色砂質土
2．灰色粘質土
3．暗茶褐色粗砂

第283図　Ｄ区ＳＤ10 断面図（1／30）

ＳＤ11（第284図）

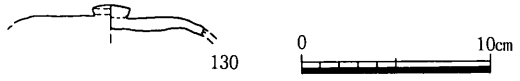
Ｄ１区のＳＢ01のすぐ北に位置する溝で，逆Ｌ字形に屈曲する。幅は0.4～1.5m，深さ15cm前後である。断面形は逆台形で，埋土は暗褐色砂混じり粘質土が主となる。全長４ｍ程で屈曲する短い溝である。８世紀後半の土器と瓦が少量出土したにとどまる。129は平瓦で，凸面に縄目叩きを施し，凹面に布目圧痕が残る。



1．暗褐色細礫混じり弱粘質土
2．暗褐色砂混じり粘質土

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
129	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕		16	中・普	浅黄橙	不良		5.6

第284図　Ｄ区ＳＤ11断面図（1／30），出土遺物（1／5）

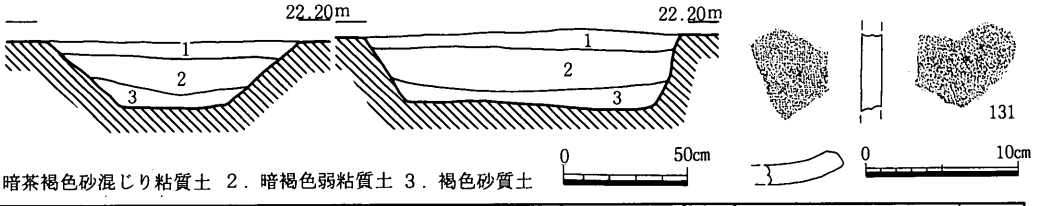


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
130	須・杯蓋				粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第285図　D区ＳＤ12出土遺物（1／4）

ＳＤ12（第285図）

Ｄ５区北部で検出したほぼ南北方向に走る幅40cmの溝である。130はつまみのつく須恵器の杯蓋である。９世紀前後のものと考えられる。



1．暗茶褐色砂混じり粘質土　2．暗褐色弱粘質土　3．褐色砂質土

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
131	平瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	6	-	中・普	浅黄	良好		5.2

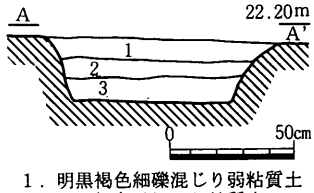
第286図　D区ＳＤ13断面図（1／30），出土遺物（1／5）

ＳＤ13（第286図）

Ｄ１区の西側で，ＳＢ01の西約４ｍのところに位置する溝である。全長5.9ｍ，幅1.0～1.3ｍ，深さ35cm前後となっている。断面形は逆台形で最下層には砂質土が堆積している。古代末と考えられる土器の細片と瓦が少量出土した。131は平瓦で凸面はナデており，凹面には布目圧痕が残る。

ＳＫ02（第287図）

Ｄ１区の西側のＳＢ01とＳＤ13の間に位置する土坑である。平面形は隅丸方形で，規模は1.2×1.4ｍ，深さ24cmである。内外面に赤色顔料を塗った土師器皿を含む８世紀の土器が出土したが細片のため図化はできなかった。

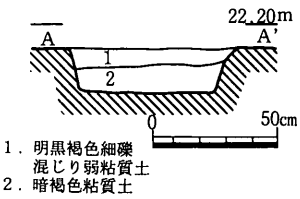


1．明黒褐色細礫混じり弱粘質土
2．明黒褐色砂混じり粘質土
3．暗褐色粘質土

第287図
D区ＳＫ02断面図（１／30）

ＳＫ03（第288図）

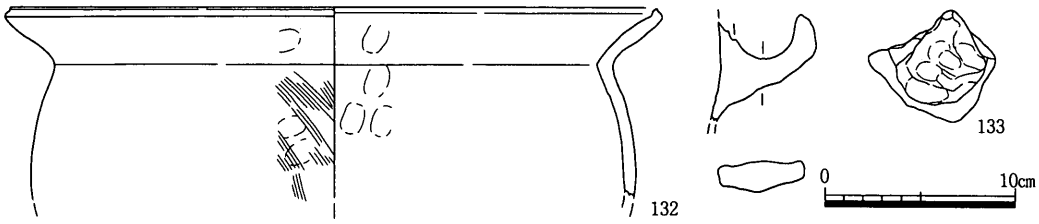
ＳＫ02の南側2.5ｍのところに位置する土坑である。平面形は長方形で長辺1.0ｍ，短辺0.7ｍ，深さ18㎝で断面形は逆台形である。８世紀後半と考えられる須恵器・土師器の細片が少量出土したのみである。



第288図
Ｄ区ＳＫ03断面図（1／30）

ＳＫ04（第289図）

Ｄ１区の南側でＳＢ01の南約１ｍ少々のところに位置する土坑である。平面形は楕円形で長径1.4ｍ，短径0.8ｍ，深さ70㎝程である。埋土は茶褐色粘質土の単一層である。132は土師器甕で口縁端部を上方へつまみあげている。133は土師器甕の把手の部分である。その他に須恵器の細片が出土したが，おおむね８世紀のものと考えられる。

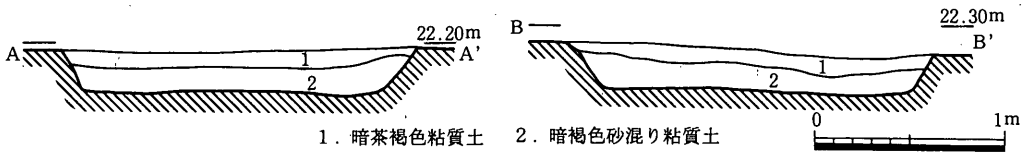


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
132	土・甕	34.0			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ	ナデ		金雲母含む
133	土・甕				粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ		

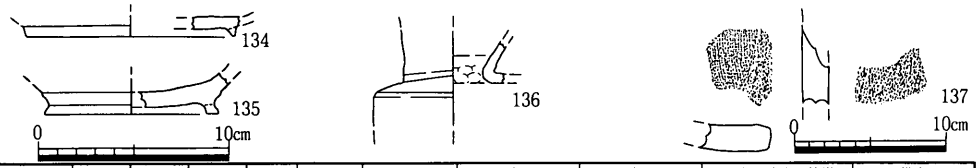
第289図　Ｄ区ＳＫ04出土遺物（1／4）

ＳＫ05（第290・291図）

Ｄ１区の西側でＳＫ02の北2.2ｍのところに位置する土坑である。平面形は隅丸の正方形で一辺2.0ｍ，深さ20㎝前後である。埋土の上層にはマンガンが多数沈着していた。134は須恵器杯で断面三角形の高台がつく。135は須恵器杯の焼成不良品である。壷の底部の可能性もある。136は平瓶で口頸部は非対象である。137は平瓦で凸面はナデている。



第290図　Ｄ区ＳＫ05断面図（1／40）



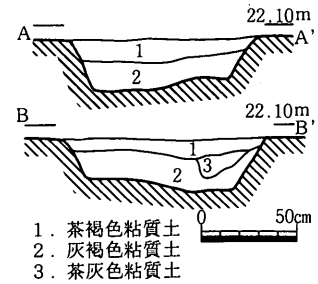
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
134	須・高台杯			11.0	中・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
135	須・高台杯			9.2	中・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
136	須・平瓶				細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
137	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	8	-	中・普	灰白	不良		4.9

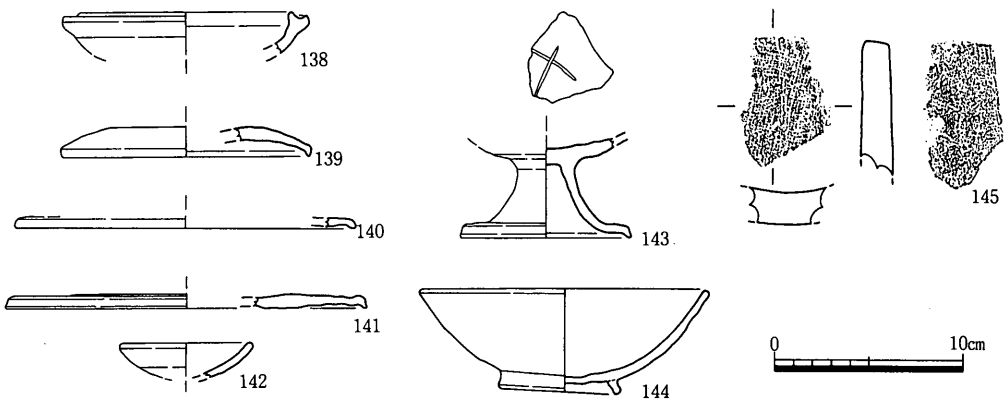
第291図　D区ＳＫ05出土遺物（1／4，1／5）

ＳＫ06（第292図）

Ｄ１区の南側でＳＫ04に隣接する土坑である。平面形は隅丸の正方形で一辺1.0m，深さ約26cmである。底面は緩やかな勾配をもっており，埋土は茶褐色粘質土と灰褐色粘質土となっている。８～９世紀と考えられる土器の細片が少量出土したにとどまる。



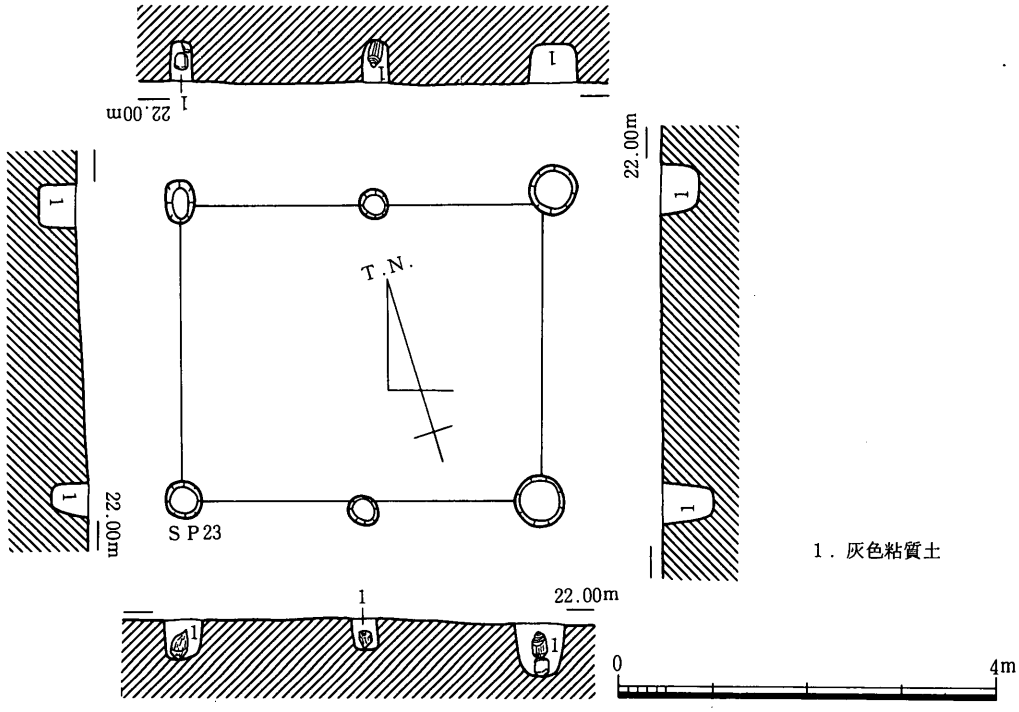
第292図　D区ＳＫ06断面図（1／40）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
138	須・杯身	13.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
139	須・杯蓋	13.2			微・普	良好	灰，灰褐	ナデ	ナデ		
140	須・杯蓋	18.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
141	須・杯蓋	19.0	0.6		中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
142	土・小皿	7.0			細・普	良好	黄橙	ナデ	不明	ヘラ切り	
143	須・高杯			9.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		ヘラ記号
144	土・椀	15.2	5.4	6.4	粗・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ	ヘラ切り	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
145	平瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	-	18	中・普	黒	良好	胎土は灰白	6.9

第293図　D区ＳＰ出土遺物（1／4）



第294図　D区SB07平・断面図（1／80）

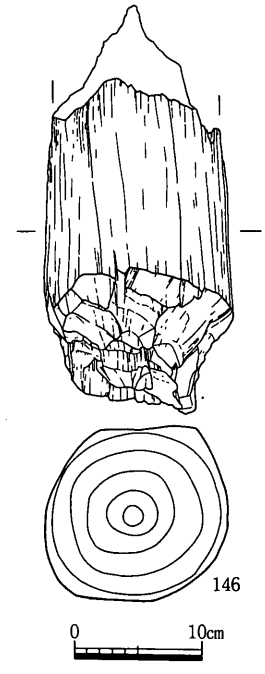
SP15～22（第293図）

138～145の順にSP15～22から出土した。138は立ち上がりのつく杯身だが，立ち上がり・受け部ともに丸く厚ぼったい。140・141は径が大きく皿の蓋になる可能性もある。142は小皿としたが標準より小さい。身は深く底面積が狭い。脚がつくかもしれない。143は杯部見込みに「×」印のヘラ記号がかかれている。144は完形の品でピット内で上向きに出土した。

(3)中・近世の遺構・遺物

SB07（第294・295図）

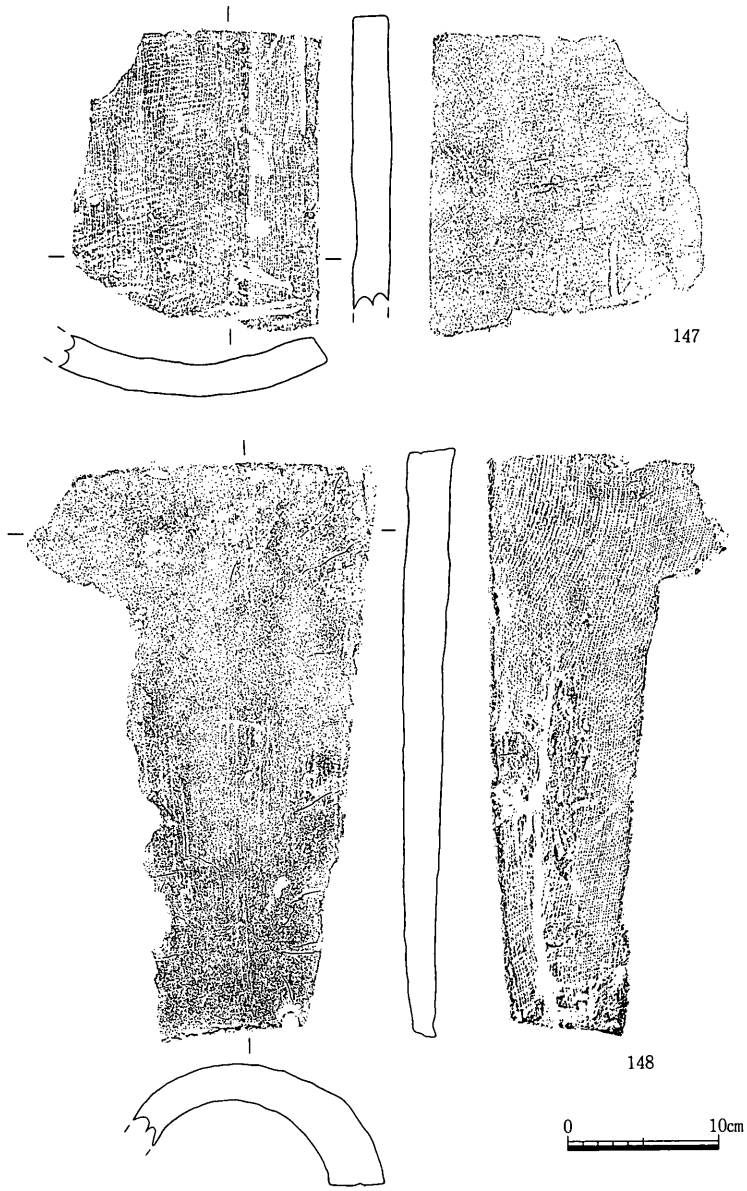
D2区南東部で検出した梁行1間×桁行2間の建物である。建物の主軸はN－73°－Wを向いている。1回建て替えが行な



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
146	柱根	31.9	14.7	13.4	芯持		

第295図　D区SB07出土遺物（1／6）

われているらしく，どのピットも南に接してもう一揃いピットが並んでいたが，柱根の残っているほうを新しく建て替えたものと考えてそれのみを図化した。柱間の距離は梁行が3.0m，桁行が1.9mで，柱穴は径30～50cmの円形をしている。深さは30～50cmであった。埋土は灰色粘質土を主とする。柱穴のうち2個には根石や根固めの石が入れられていた。また，4個には柱根の部分が残っていた。そのうち1つを図示した。ＳＰ23から出土したこの柱の太さは現存で約15cmである。根元は四方からはつられているが，特に2方向から大きくえぐり，切り倒されている。



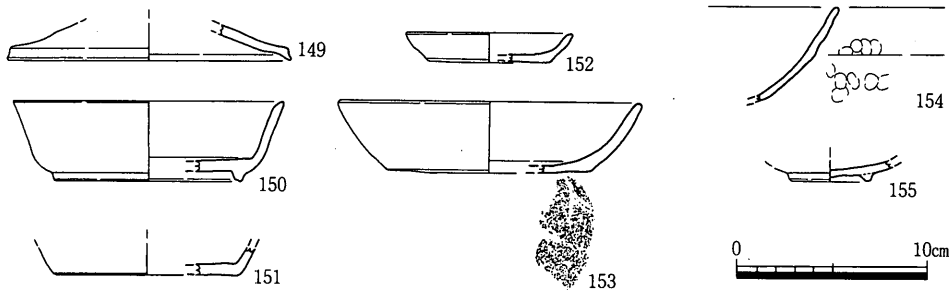
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
147	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	1	16	中・普	にぶい黄橙，淡黄	良好		19.8
148	丸瓦	3.2	板ナデ	布目圧痕	11	17	粗・普	黄灰	良好	行基狂	38.0

第296図　Ｄ区ＳＤ14出土遺物（1）（1／5）

ＳＤ14

（第296・297図）

Ｄ5区北西部の一段高い水田部で検出した。南側は削平されている。溝底の標高からみてこの溝は南から北に向けて流れ，この辺の地形に逆らったものとなっている。調査区内では深さは10cmしかないが，北の調査区境ではやや西に曲がりながら急に



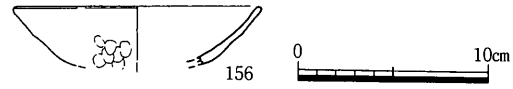
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
149	須・高杯			15.0	微・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
150	須・高台杯	14.1	4.1	9.8	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
151	須・杯			9.5	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
152	土・小皿	8.8	1.5	6.4	微・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		
153	土・杯	16.0	3.6	10.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	糸切り	
154	土・椀				微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
155	瓦・椀			4.4	微・普	良好	灰白，灰	ナデ	ナデ		

第297図　D区ＳＤ14出土遺物（2）（1／4）

深くなり深さ70cm近くに達する。ＳＤ14内からは塊石とともに土器片や瓦が出土している。147は凹面に桶型の枠木の痕跡が縦筋となって残っている。曲り具合も比較的つよく，粘土紐巻き上げの痕跡はのこってないが桶巻きづくりによってできた可能性が高い。148は全長38cmの玉縁をもたないいわゆる行基葺きの丸瓦である。凹面には布目がよれたような痕跡が残る。また長側面には沈線がまっすぐ入る。149は高杯の脚としたが杯蓋の可能性もある。153は糸切りによって成形台から切り離されている。154は外面に指押さえ痕が顕著に残っている。155は高台がかなり退化している。154の外面調整を同時期の瓦器椀からの影響と考え，また155の瓦器椀の年代観からみてＳＤ14は13世紀代の溝と考える。

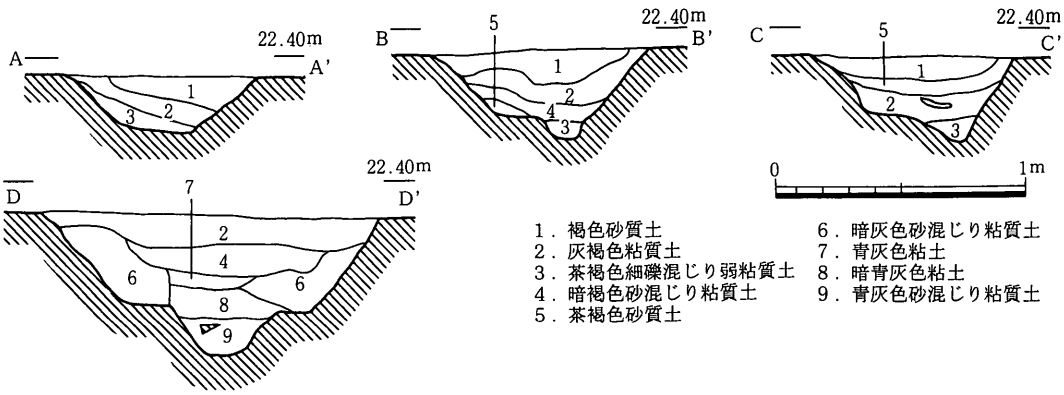
ＳＤ15（第298図）

Ｄ５区北西隅で検出したほぼ南北方向に走る幅20cmの細い溝である。深さは５cmもない。156は土師器椀で内面に磨きは認められず外面下半には顕著な指押さえ痕が残る。13世紀ごろのものと考えられる。

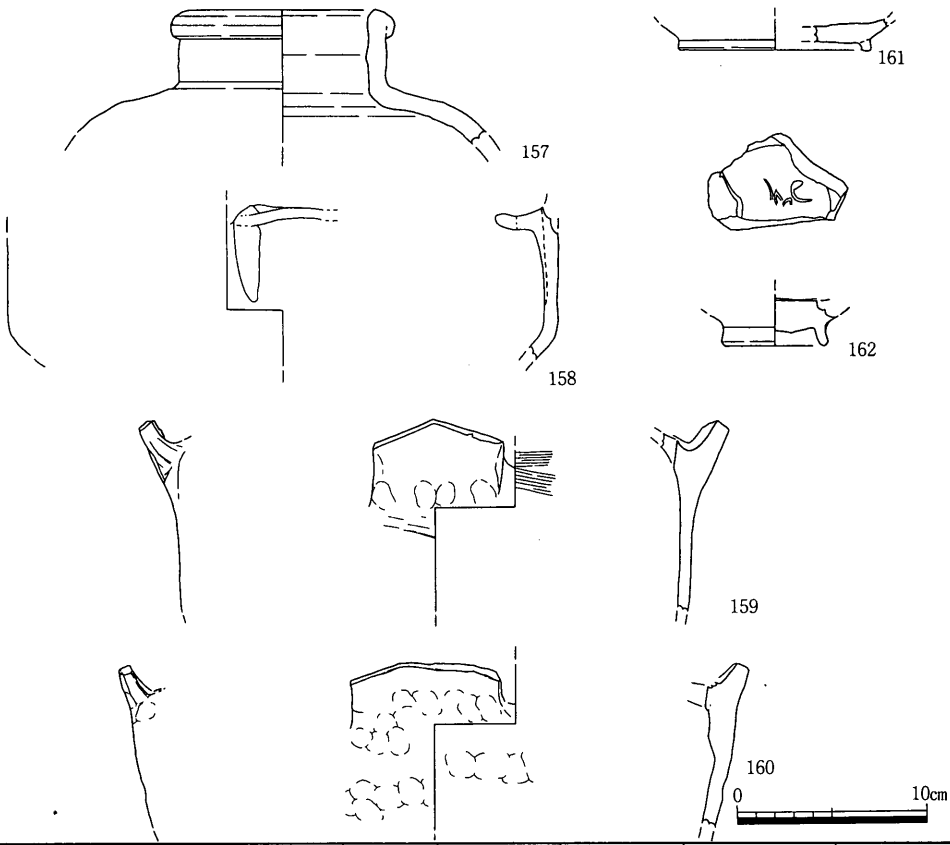


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
156	土・椀	13.0			微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第298図　D区ＳＤ15出土遺物（1／4）

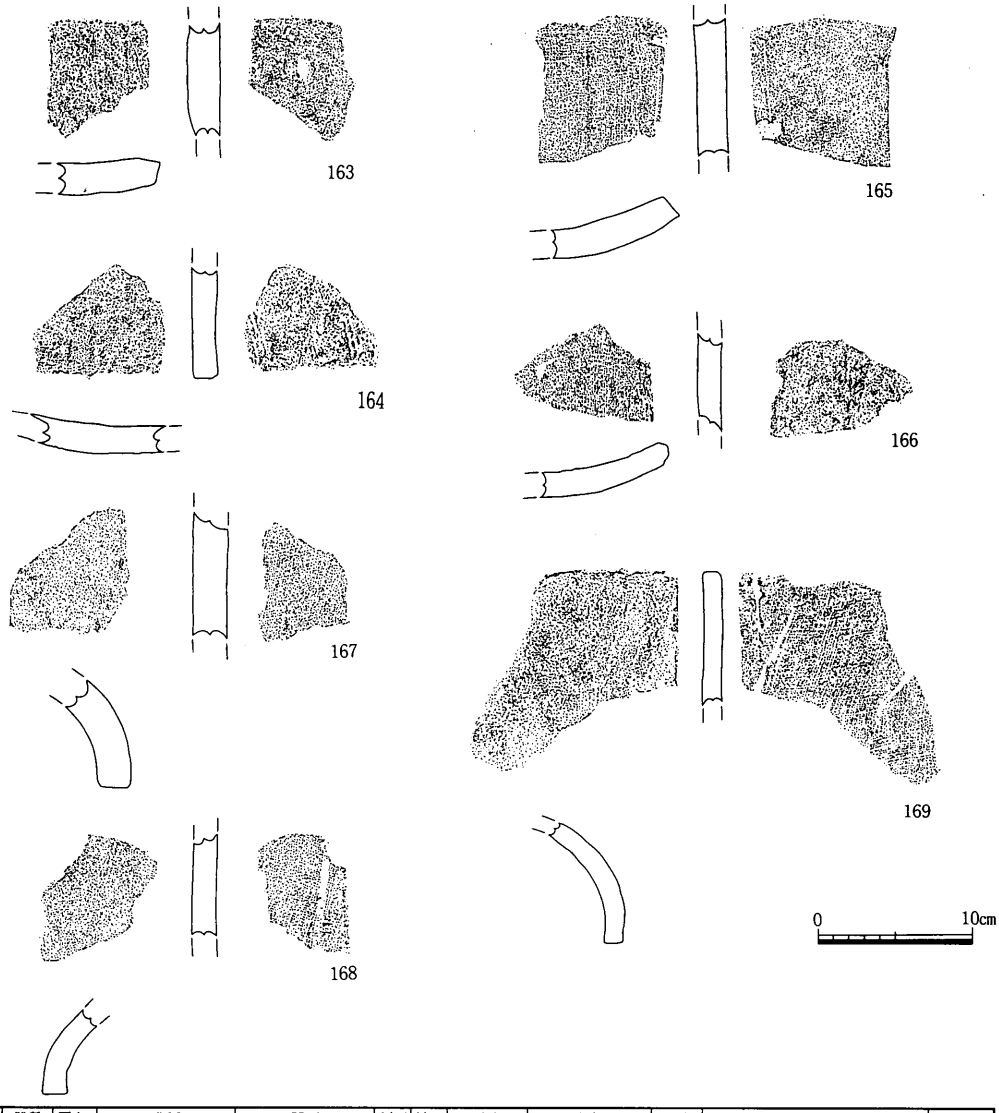


第299図　D区ＳＤ16断面図（1／30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
157	備・壷	9.7			粗・普	良好	褐灰・赤灰	ナデ	ナデ	口縁部玉縁状	
158	土・鍋				中・多	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	内面突起に穿孔	
159	土・鉢				中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目・ナデ	把手内側に孔状の窪み	
160	土・鉢				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	把手内側に孔状の窪み	
161	須・高台杯			10.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底糸切り	
162	青・碗			5.6	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	（釉）緑灰

第300図　D区ＳＤ16出土遺物（1）（1／4）

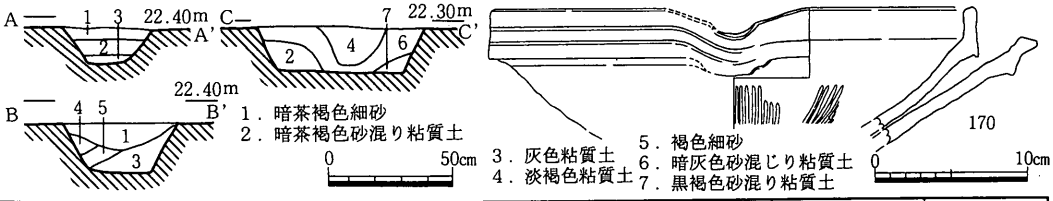


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
163	平瓦	2.0	ナデ	ナデ	8		細・普	浅黄	良好		6.9
164	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ		16	細・普	灰白	良好		7.3
165	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	1		中・普	灰白	良好		8.3
166	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	1		粗・普	灰白	良好		5.1
167	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕	11		粗・普	にぶい黄橙	良好		8.1
168	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	11		粗・普	灰白	良好		6.6
169	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	11	16	中・普	にぶい黄橙・黒	良好		8.6

第301図　D区ＳＤ16出土遺物（2）（1／5）

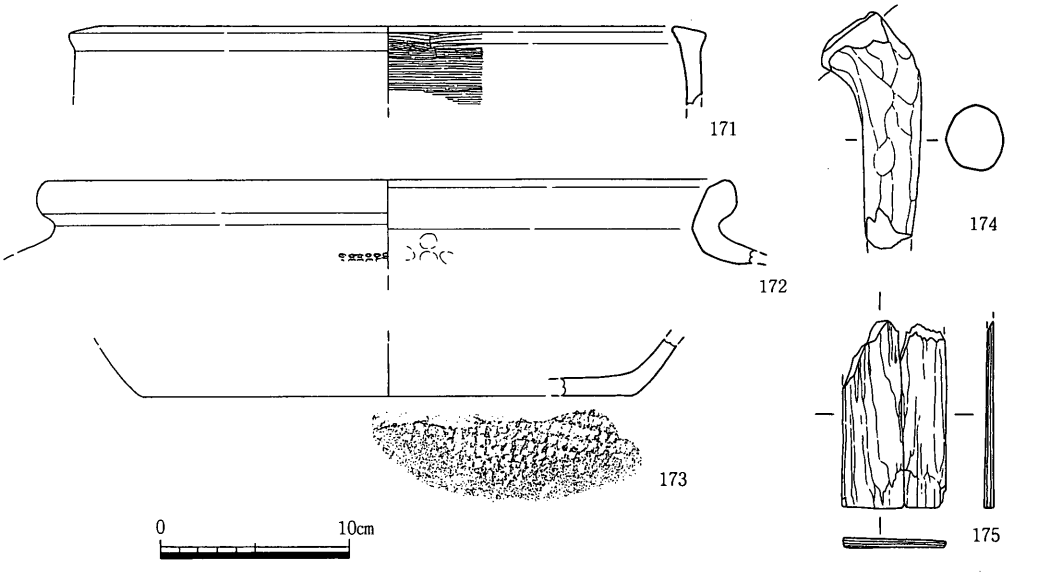
ＳＤ16（第299～301図）

Ｄ１区からＤ２区にかけて検出した。Ｄ１区北側を東西方向に直線的にのび，西端はＤ２区東端で直角に曲がり南へとのびてゆく。Ｄ１区内では幅0.8～1.5m，深さ20～40cmで，断面形はおおむね幅広のＶ字形に近いが，場所によっては段掘りになり中央部が一段深く



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
170	備・すり鉢	31.4			精緻	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		

第302図　D区ＳＤ17断面図（1／30），出土遺物（1／5）

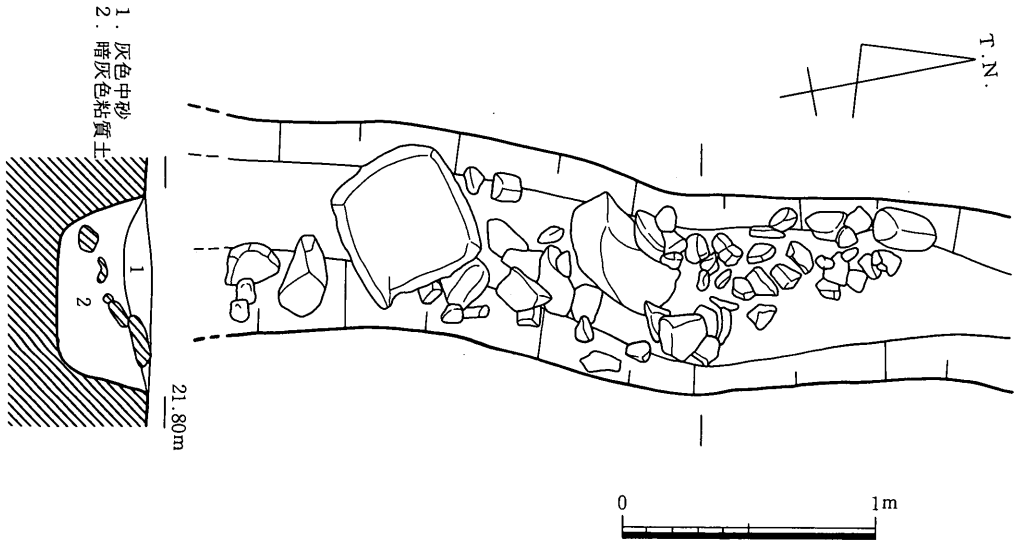


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
171	土・鉢	30.0			中・普	良好	灰	不明	ハケ目		胎土は浅黄～灰
172	土・甕	34.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・格子目叩き	ナデ		金雲母を含む
173	土・土鍋			25.6	粗・普	良好	褐	ナデ・格子目叩き	ナデ		
174	土・土釜				中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
175	板材	9.8	5.5	0.5	板目		

第303図　D区ＳＤ18出土遺物（1）（1／4）

なっている。Ｄ２区では幅が狭く，南端部で0.3ｍである。埋土は最上層は砂質土で，最下層は粘質土となっている。157は備前焼の壷で，頸部は直立し口縁端部を外側に折り曲げて玉縁としている。158は土師質の鍋で内面に穿孔された鍔状突起がある。159・160は外面に方形の鍔をはりつけ，鍔の内側の体部に穿孔している。いずれも土師質である。161は底部糸切りである。162は青磁碗で高台内面と底部内面に一部釉が付着している。163～166は平瓦で163は凹面もナデている。164の凸面は縄目叩きの後にナデている。167～169は丸瓦で凸面はいずれもナデており，凹面には布目圧痕が残る。備前焼の壷の年代観から15世紀の溝と考えられる。



第304図　D区ＳＤ18石塔部材出土状況（1／30）

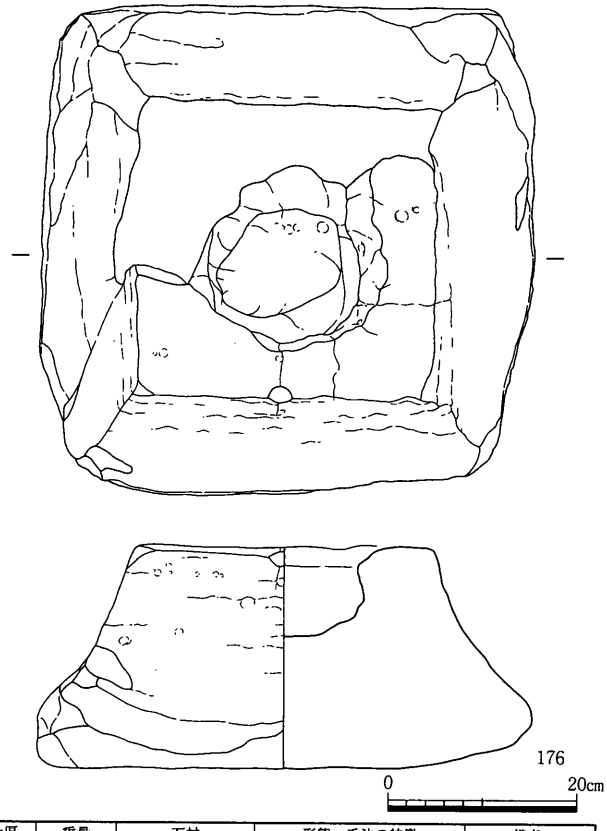
ＳＤ17（第302図）

Ｄ１区の東部で検出した。ＳＤ08の東側を並走する溝である。ＳＤ16と交わる部分で一部二股に分かれる。幅30～70cm，深さ22cm前後である。埋土の上層は砂層である。170は備前焼のすり鉢で口縁部を上方に拡張する。16世紀のものである。

ＳＤ18

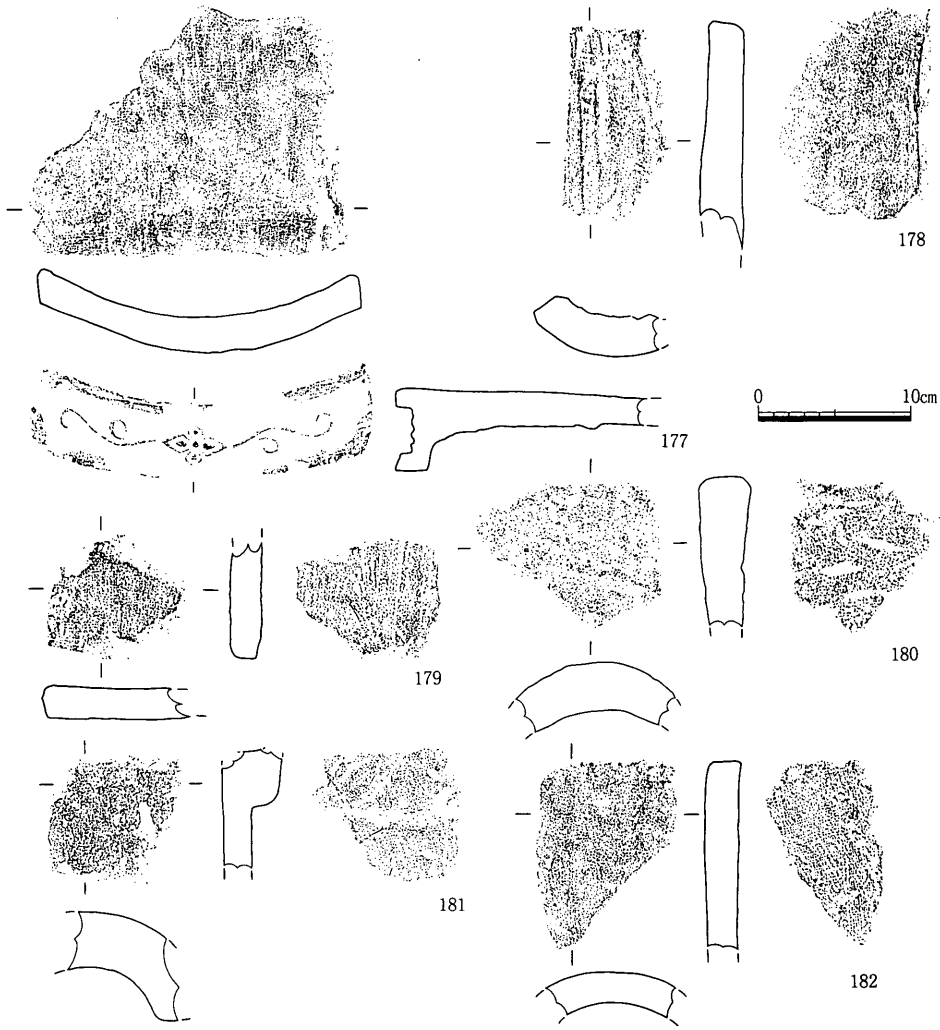
（第303～306図，図版46）

Ｄ２区中央を南北に走る溝である。南寄りでＳＤ20と接する。幅30～80cmで，深さは30cm前後である。埋土は下層の暗灰色粘質土と上層の灰色中砂から構成



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
176	石塔部材	51.5	51.3	23.3	48kg	凝灰岩		

第305図　D区ＳＤ18出土遺物（2）（1／8）

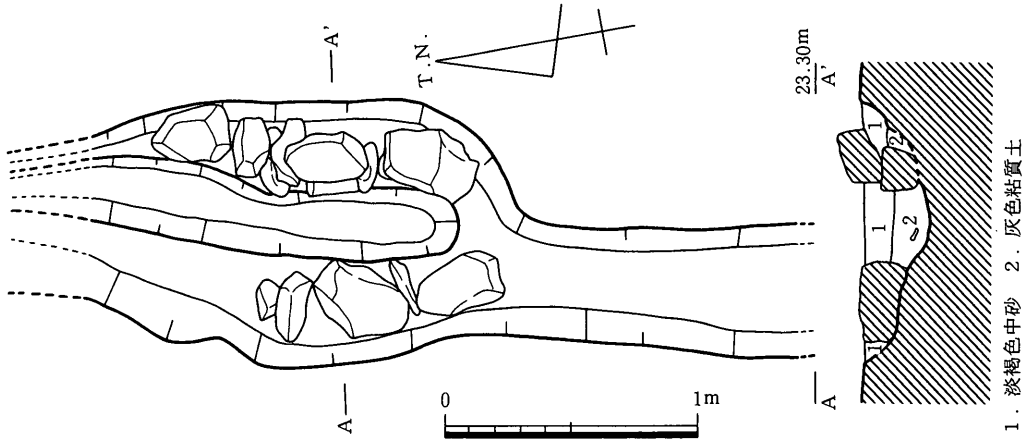


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
178	平瓦	2.5	板ナデ	布目圧痕	4	18	粗・普	浅黄	良好		14.5
179	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕	6	16	粗・普	灰白	良好		7.8
180	丸瓦	3.4	不明	布目圧痕	-	16	粗・普	明赤褐～褐灰	良好		10.4
181	丸瓦	3.8	ナデ	布目圧痕	-	-	中・普	灰	良好		8.0
182	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	-	16	中・普	淡黄	良好	内面に糸切り痕が残る	12.4

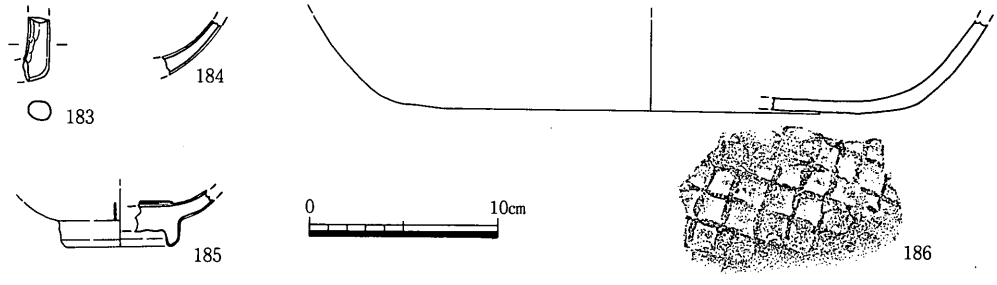
遺物番号	器種	瓦当厚	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	瓦当文様	顎部	形態・手法の特徴	残存長
177	軒平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	5		中・普	灰	良好	唐草文	段	凸面離れ砂、花菱の中心飾	16.3

第306図　D区ＳＤ18出土遺物（3）（1／5）

されている。溝底は北から南に傾いている。埋土中には塊石がおおく含まれていたが，これはこの辺りを流れたＳＲ02の上層内に含まれていたものである。遺物としてはＳＤ18内から土器や木器や瓦・石造物が出土している。171は内面が口縁部分ですぼまり，横方向にハケ目が施される。上面には外傾する平坦面が作られている。172は口縁が厚く丸みをもっている。内面は板で横にナデたのか稜ができる。外面には格子目の叩きの痕がわずか



第307図　D区ＳＤ19石組み遺構検出状況，断面図（1／30）



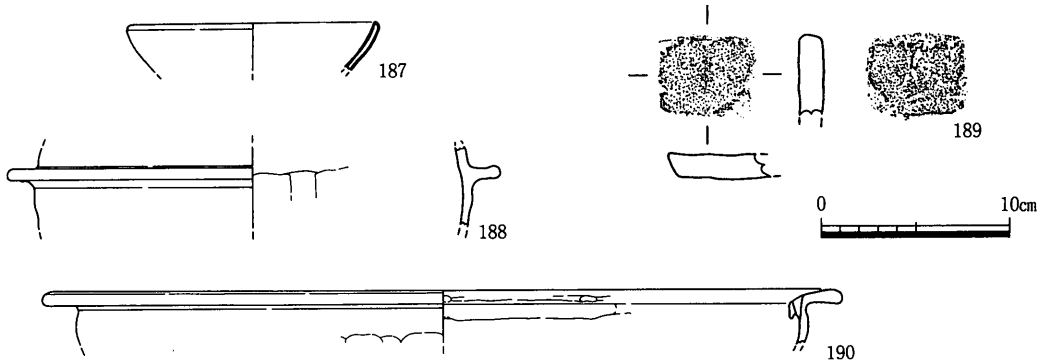
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
183	須・壺	3.2			微・普	良好	灰	板ナデ	板ナデ		角閃石を含む
184	青・碗				粗・少	良好	灰白～淡黄	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
185	青・碗			5.2	精緻	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	
186	土・土鍋			28.6	粗・普	良好	明褐～黒	ナデ・格子目叩き	ナデ		

第308図　D区ＳＤ19出土遺物（1／4）

に残る。173は土鍋の底である。174は土釜の脚である。177の瓦当文様は中央の花菱から左右に対称に唐草文がのびる。180は分厚く表面が非常に砂っぽい。181は丸瓦の玉縁の部分である。176は石塔の笠部である。上下逆になり水平の状態で溝の一部をふさぐようにして出土した。ＳＲ02の上層からほかにも屋根や基部が出土していることから，ＳＤ18の掘削に際して偶々掘り起こされ，溝を渡るための踏み石として再利用されたものと思われる。軒の反りはあまり強くない。中央には上面から部材差し込みのための円形の穴があけられている。出土した遺物は時期を限定しにくいが，15～16世紀のものであり，ＳＤ18もこの時期を下限とすると考えられる。

ＳＤ19（第307・308図，図版46）

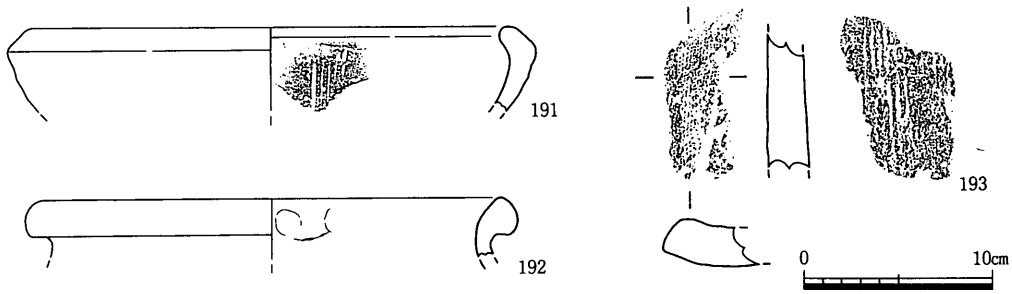
Ｄ２区東部で検出した南北に走る溝である。南側はＳＤ20に合流している。幅30～50cm，



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
187	青緑・椀	13.3			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	国産？
188	土・土釜				微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ		煤付着
190	瓦質・焙烙	42.0			細・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ	穿孔は2ヶ所有り	胎土は灰白

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
189	平瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	5	16	粗・普	黒	良好		5.1

第309図　Ｄ区ＳＤ20出土遺物（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
191	土・すり鉢	27.8			粗・普	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ナデ	ヘラによる条溝	
192	土・甕	26.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		

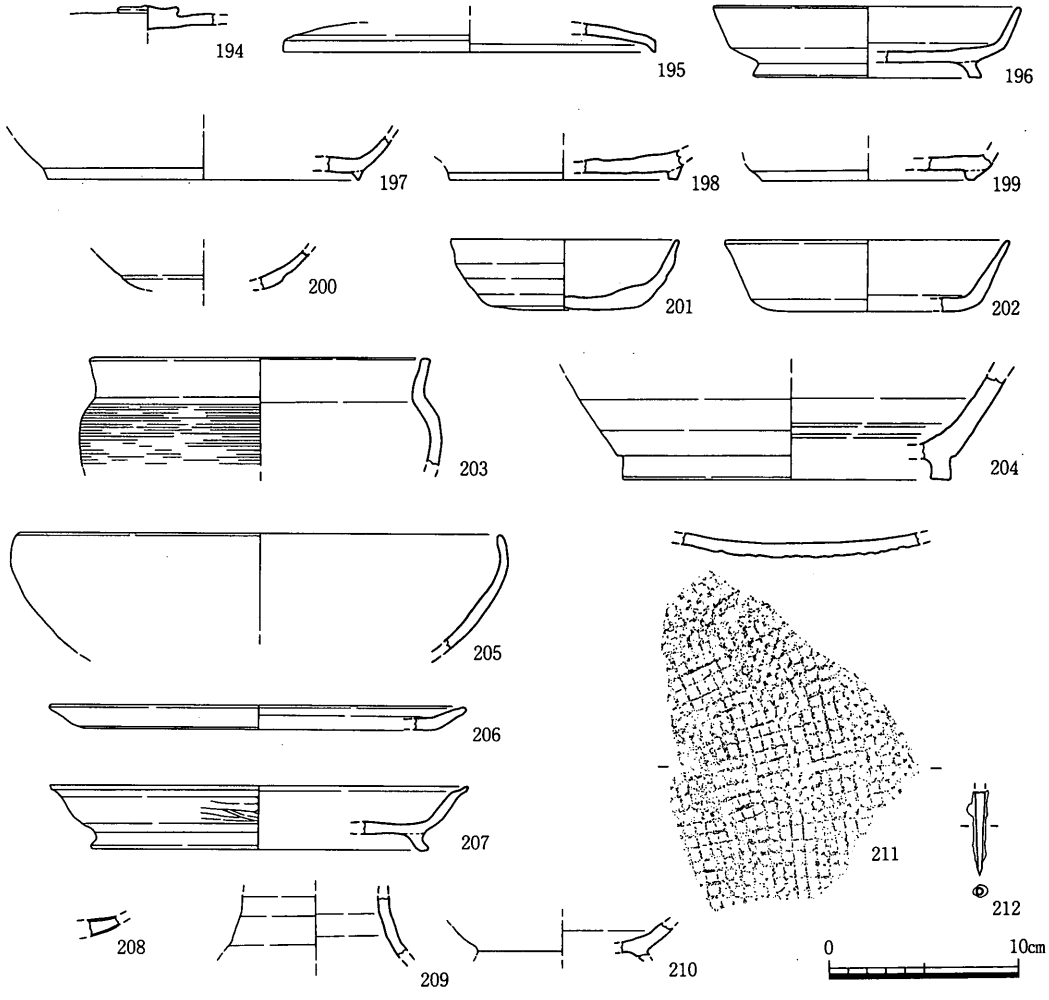
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
193	平瓦	2.1	縄目叩き	布目圧痕	2	-	粗・普	にぶい黄橙	良好		8.0

第310図　Ｄ区ＳＤ21出土遺物（1／4）

深さ20cmであるが，北側は幅・深さともに広がりここに石組みの遺構が作られている。この部分では溝は２段に掘られ，上の段に塊石が１～２段につまれている。塊石は上面に平らな面がくるようにそろえられている。ＳＤ19は全体が淡褐色中砂で埋まっているが，この石組み遺構の部分のみ中砂の下にさらに灰色粘質土が存在した。溝内からは土器が少量出土した。183は壷あるいは提瓶の把手である。やや小さめである。186は土鍋の底である。格子目の叩きの痕が残る。183～185はやや古い時期のものであるが，合流するＳＤ20の時期からＳＤ19は18世紀を下限とする時期のものと考えたい。

ＳＤ20（第309図）

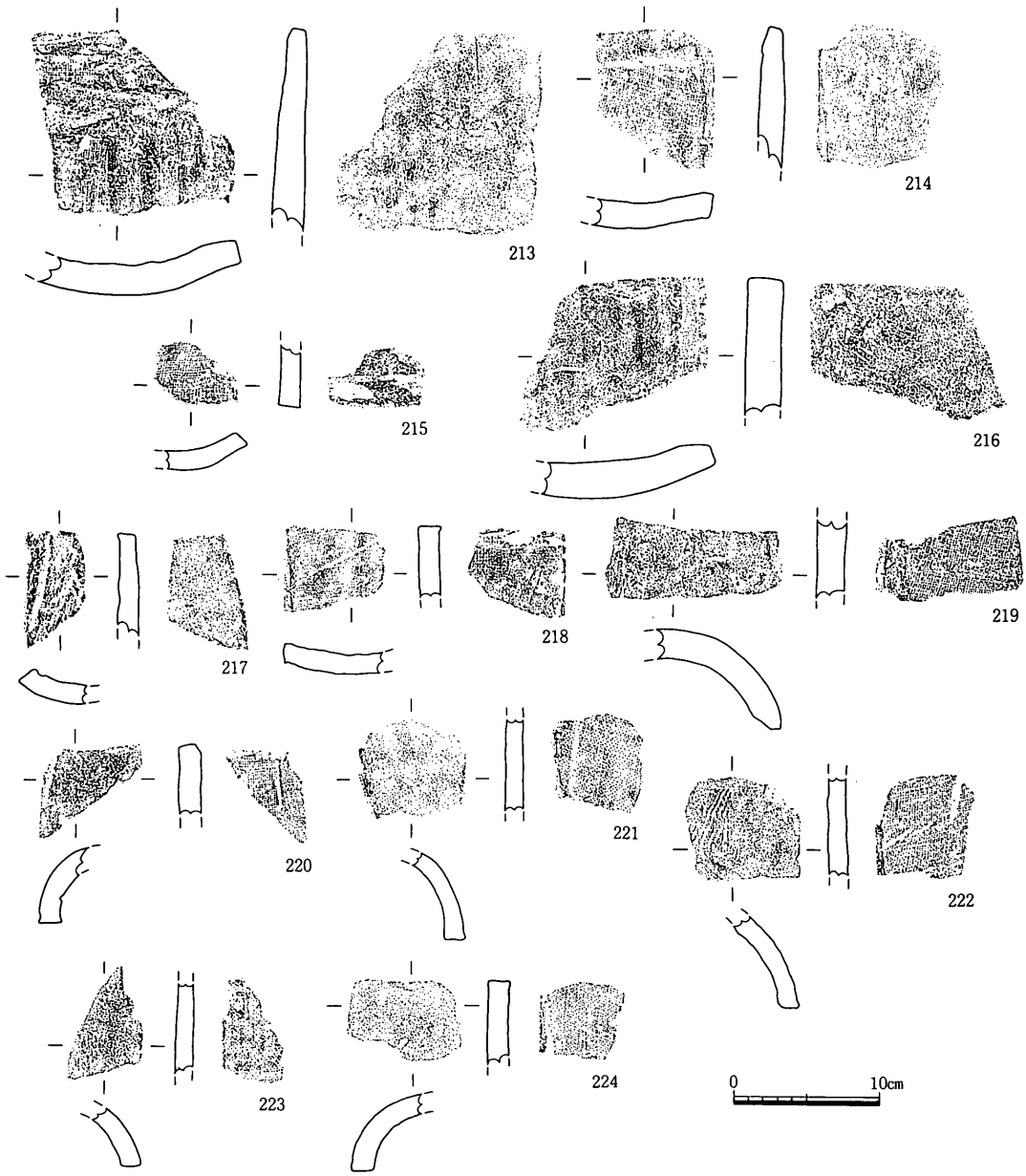
Ｄ２区で検出した。ＳＢ07を囲むように巡らされている。溝の方向と建物の方位がほぼ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
194	須・杯蓋				細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
195	須・杯蓋	19.6			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
196	須・高台杯	16.2	3.7	12.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
197	須・高台杯			16.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
198	須・高台杯			12.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
199	須・高台杯			11.2	微・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
200	須・杯				微・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
201	須・杯	12.0	3.6	8.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り	
202	須・杯	15.0	3.6	12.2	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	金雲母を含む
203	須・壺	18.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
204	須・壺			17.6	細・普	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ	体部底ヘラ切り	
205	須・鉢	25.6			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土はにぶい赤褐
206	土・皿	22.0	1.2	19.0	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
207	土・高台皿	22.0	3.4	17.6	微・少	良好	にぶい橙	ミガキ・ナデ	不明	内外面赤色顔料	
208	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	国産？
209	青・壺				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	明オリーブ灰の釉	
210	瓦質・椀				細・普	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ		角閃石を含む
211	土・土鍋				粗・普	良好	鈍い赤褐，橙	叩き	ナデ		金雲母含，煤付着

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
212	鉄	釘	4.5	1.1	0.8	2.6		

第311図　D区ＳＫ07出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
213	平瓦	2.1	板ナデ	布目圧痕→板ナデ	1	18	粗・普	灰黄，黄灰	良好		13.3
214	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	7	16	粗・普	にぶい黄橙	良好		9.1
215	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	1	16	粗・普	暗灰	良好		4.2
216	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕・ケズリ	3	17	中・普	灰白	良好		9.5
217	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	1	16	中・普	灰白	良好		8.1
218	平瓦	1.4	板ナデ	布目圧痕	7	16	粗・普	灰白	良好		6.8
219	丸瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	浅黄橙	良好		5.4
220	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	11	20	粗・普	灰	良好		6.5
221	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	灰白	良好		6.4
222	丸瓦	1.3	縄目叩き・板ナデ	布目圧痕	15	-	中・普	灰白	良好		7.0
223	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	灰白	良好		6.2
224	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	11	16	粗・普	灰白	良好		5.9

第312図　Ｄ区ＳＫ07出土遺物（2）（1／5）

一致することからも建物と同時期に存在したと考えられる。溝は東北西の３方向は確認できたが南も巡るかは南のＤ３区が１ｍほど低いため不明である。溝の北西隅はＳＤ18に接する。ＳＤ20内からは白色の精良な粘土塊がＳＤ19とつながる付近に集中して多く出土した。何かに使われていたものが捨てられたのか理由は明らかでないが中には赤く焼けたものも含まれていた。ほかに土器片も少量出土している。187は17世紀末から18世紀前半にかけて盛行した唐津系の青緑釉陶器である。190は吊し紐をかける部分が貫通している。188・190ともに外面下半に煤が付着している。187・188・190の存在からＳＤ20は18世紀を下限とする時期の溝と考えられる。

ＳＤ21（第310図）

Ｄ２区中央部で検出した。北東－南西方向に掘られた幅25cm，深さ５cmの小さな溝である。北東側は現代の暗渠のため途切れる。土器が少量出土している。191・192からＳＤ21は15～16世紀の溝と考えられる。

ＳＫ07（第311・312図）

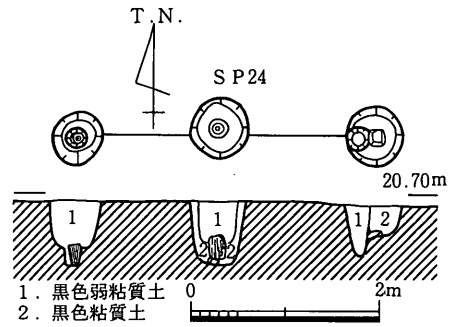
Ｄ１区からＤ２区にかけて検出した南北方向の土坑である。確認した範囲で長さ約７ｍ，幅0.8m，深さ1.1mである。埋土は３層にわかれ，上層は砂の多い灰褐色粘質土，中層は暗灰色粘質土，下層は青灰色弱粘土と中砂の互層である。主に下層から土器や瓦片を多く出土した。194は蓋のつまみである。平たい円盤状をしている。195は口縁端部がわずかに下方に突きだす。196は底と胴の境に稜ができる。高台は断面台形で大きい。197は高台が逆三角形でほとんど消えかけている。198・199も高台が小さい。200は胴中位に段が巡る。底も丸みをもち高杯の杯部の可能性が高い。201は胴が丸い。202とともに底外面不調整である。203は胴に薄いカキ目が描かれる。204は胴外面がヘラケズリされている。205はいわゆる鉄鉢形の鉢である。206・207とも内外面に赤色顔料が塗られる。208は胎土がやや粗く国産の可能性もある。209は壷の頸部と考えられる。211は土鍋類の底である。ほとんどの遺物は８世紀ごろのものであるが，208～211は時期が大きく下るものであり，とくに211の存在からＳＫ17を15世紀ごろを下限とする土坑と考えておきたい。

(4)時期不明の遺構

ＳＡ02（第313・314図，図版44・47）

Ｄ３区西南部で検出した。第２面精査時には検出できずやや掘り下げた段階で検出できた。第３面とも考えられるが，遺構面の標高から第２面から掘りこまれている可能性もあ

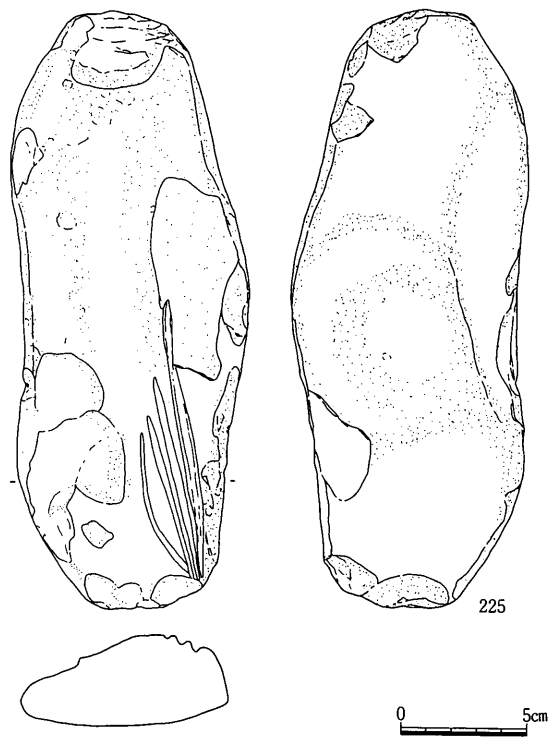
る。３個のピットからなる。柱間の距離は1.6ｍで，方位はＮ－90°－Ｅをとる。柱穴は径40～60cmの円形で，深さは50～70cmある。両端の柱穴は２段掘りで，また中央の柱穴には根石が敷かれ東側の柱穴には固定のための石を据えていた。柱根も中央と西側の柱穴に残っていた。225はＳＰ24の根石に使われていたものである。片面に人為的なものと考えられる４本の細い溝が刻まれていた。何かを研いだためにできたとみられる。



第313図　Ｄ区ＳＡ02平・断面図(1／80)

ＳＥ01（図版49）

Ｄ３区で検出した。竹を編んで円筒形を作っている。編み方は縦に小木２本一組で等間隔に配し，横に数本と１本の繰り返しですき間なく編み合わせていっている。竹篭の転用の可能性もあるが，底はない。井戸底の標高は19.9ｍで，深さは確認した分で0.87m，径は1.55mあった。掘り方の西半分がＳＲ02を掘り込んでいるため，調査時には汲んでも汲んでも水が次々に湧いてきた。ＳＥ01の北側には井戸に接するように一部は井戸内に抜けて杭が10数本打たれていた。多少湾曲しながら一列に連なっている。その状況からＳＥ01とは直接関連がないものと見られる。杭の頭は朽ちずに残っており，これらの杭が第２面から打たれている可能性を思わせるが，杭が腐っていない



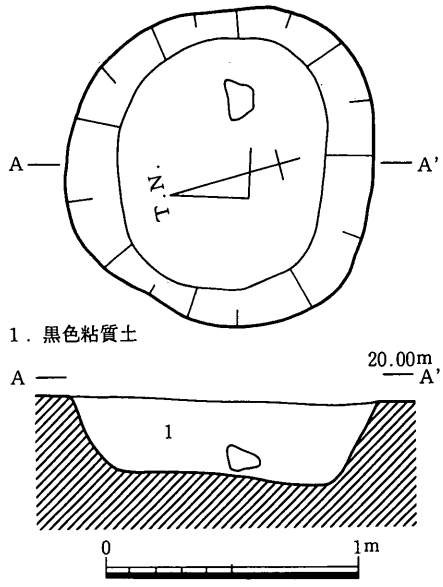
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
225	砥石？	23.7	9.0	5.2	1270	安山岩		

第314図　Ｄ区ＳＡ02出土遺物（1／3）

ことから近現代のものではないかと疑われる。井戸内からは拳大の塊石が多く出土したのみで遺物の出土はみられず，時期判断の決め手になるものはない。

ＳＫ08（第315図）

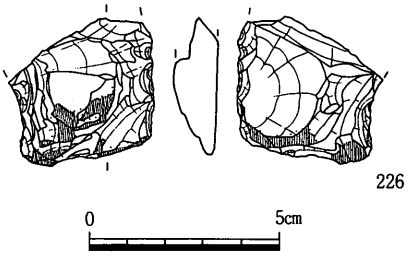
Ｄ５区北西部の第３面で検出した。径1.2m，深さ30cmの円形の土坑である。底に接して石が１個存在したが中からは土器は出土しなかった。



第315図　Ｄ区ＳＫ08平・断面図（1／30）

ＳＸ01（第316図）

Ｄ５区東部の第３面で検出した。長さ２m，幅40cm，深さ15cmの浅い長方形の土坑である。中から石器が１点だけ出土した。226は器種不明の石器である。折れている。打製石斧の可能性もある。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
226	打製石斧	3.6	3.8	1.4	21	サヌカイト		

第316図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（1／2）

(5)旧河道

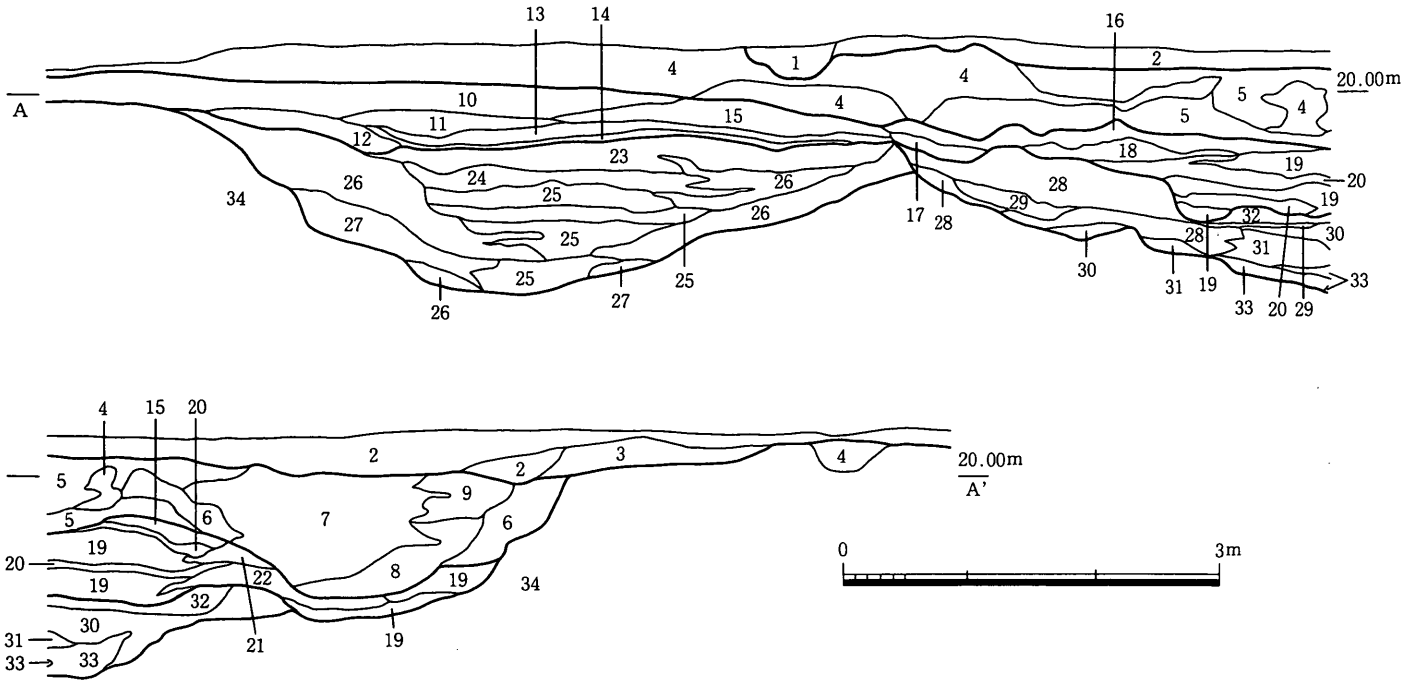
ＳＲ01（第317～342図，図版44・51）

Ｄ５区で検出した。北東から南へと流れてゆく。ＳＲ01は後述するように縄文時代後期と弥生時代Ⅱ～Ⅴ期の土器を主に出土する。この間，縄文晩期と弥生時代Ⅰ期の土器はない。縄文晩期の土器はＣ１区ＳＲ02から出土しているため，縄文晩期には流路は大きく西にふりＤ５区の流路はいったん埋没してしまっていたと考えられる。縄文後期の土器はこれのみを出土する土層が川の西側や最深部でみられ，第317図の23～27および28～33層がこれに相当する。一方弥生時代の土器は，同じ土層に縄文時代の土器を含みかつⅡ～Ⅴ期の土器が混在する。ＳＲ01は最大幅17m，深さ約２mの大きな川であるがこれが埋まってしまった後，旧流路の東肩上に幅３m前後，深さ１m弱の小さな流れが残る。この流れと

それまでの流れとの間には土層が分かれるだけでなく地山の高まりが境となっている。さらに北側は本流に続かずＳＤ06がつながっている。Ｄ５区のような地形において突然川が発生することは不自然であることや，この小さな流れが平面的にはＳＤ06と同じ方向の直線としてとらえられることから，人為的に掘削された可能性が高い。としても，途中から溝が幅広く深くなる理由は見あたらない。またこの流れから出土した土器は少なく，324・326・342・347・378・384がある。ＳＲ01およびＳＲ01埋没後の溝の可能性が高い流れの両者とも埋土は灰色の砂と黒色の粘質土またはシルトからなり，級化層理が認められる。

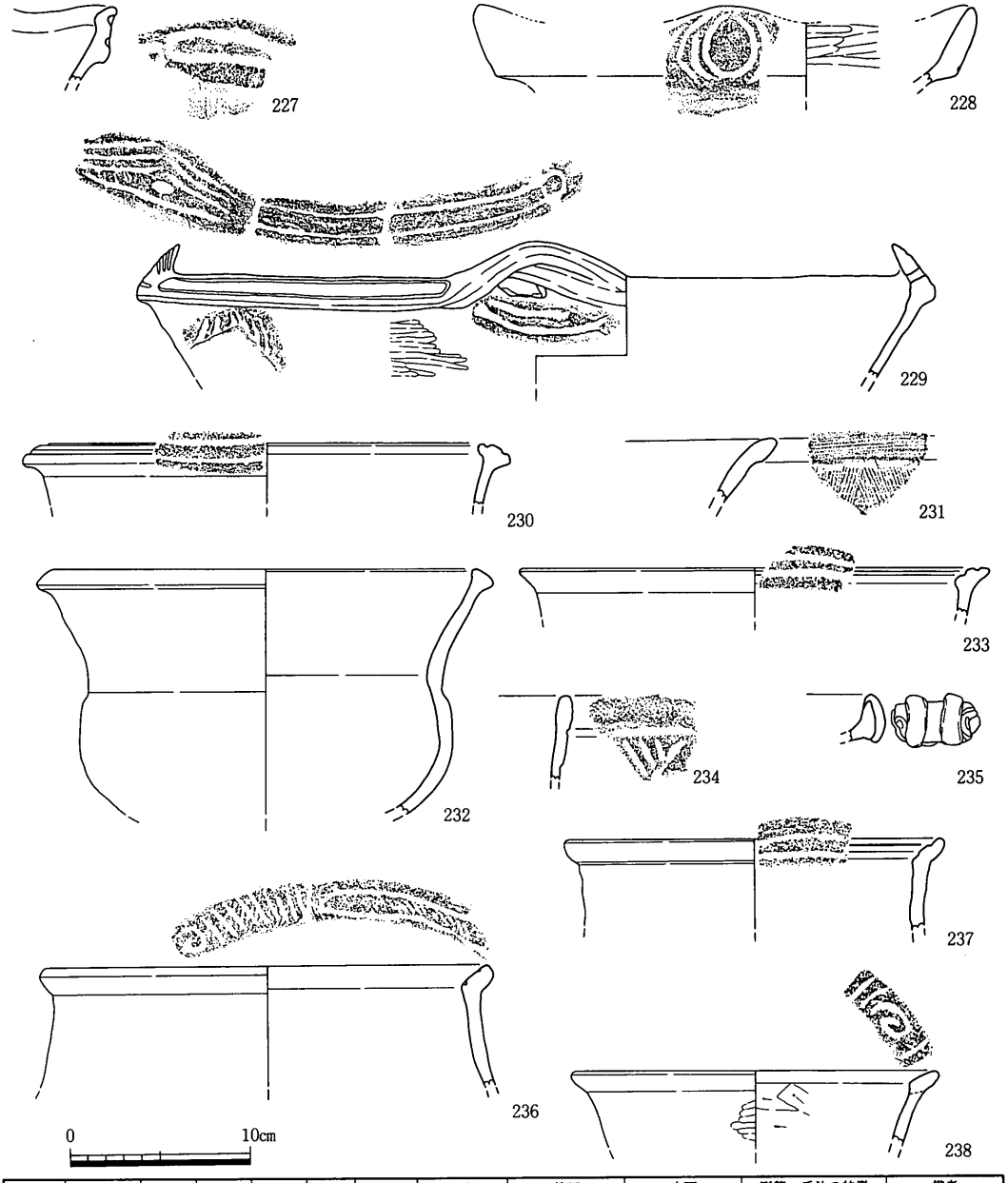
227～310は縄文後期の土器である。229・231・233・234・237・239～241・243・245・249～251・253～259・261・265～268・270～272・276～286・288・290・291・293～295・297・298・300・302・303・305～308・310が縄文後期のみからなる土層から出土した。調査時には土層ごとに取り上げるよう注意したが以下の点のみをつかみ得た。①267・276・281・285を出土した層と233・237・240・243・253・258・261・275・278・279・284・286・290・293・295・298を出土した層と229・236・238・254・256・257・265・266・277・283を出土した層は上中下層の関係にあり，前２者は32層・後者は30層に対応すると考えられる。②239・250・251・291・297・305・310は24～26層の上半部から出土した。③259・303を出土した層と231・271・303を出土した層は上下層の関係にあり，土層断面を実測した地点からはやや離れていたが川の最下層とその上の層から出土した。④245・308は28～31層から，249・268・302・306は33層から出土した。これらの土器片は表面があまり摩滅しておらず，ほぼ完形で出土した土器もある。

227～285は深鉢である。227～232は口縁が外側へと厚くなる。227は外面に連続する区画文を描く。228は円形を中心に両側に重弧文を描く。229は２本の棒がからまる波頂部と穿孔のある外面肥厚の波頂部が交互する。それぞれに沈線文を描き波頂部間は区画文をいれる。また胴部にも縦方向の太い沈線が引かれる。231は口縁が外側へと厚くなり，その上に細目の沈線が引かれる。胴部にも山形の沈線が引かれる。235は口縁外面に渦文を描いた後にその間に縦向きに粘土紐を巻きつける。233・236～249は口縁が内側へと厚くなる。236は口縁内面の厚くなった部分に渦文と平行線と区画文を配し，平行線と区画文の間にはＲＬの縄文を押印する。外面にも１ヵ所竹管を押印したような痕跡が残る。239も２本の沈線間にＲＬの縄文を押印する。内外面ともヘラミガキである。240は内外面に細目の沈線を描く。242は236に似た図案をもちいる。243は外面に疎で短い沈線と密で長い沈線を交互に配す。244は内面に太い沈線で渦文と平行線を描き，外面に細い沈線を縦に



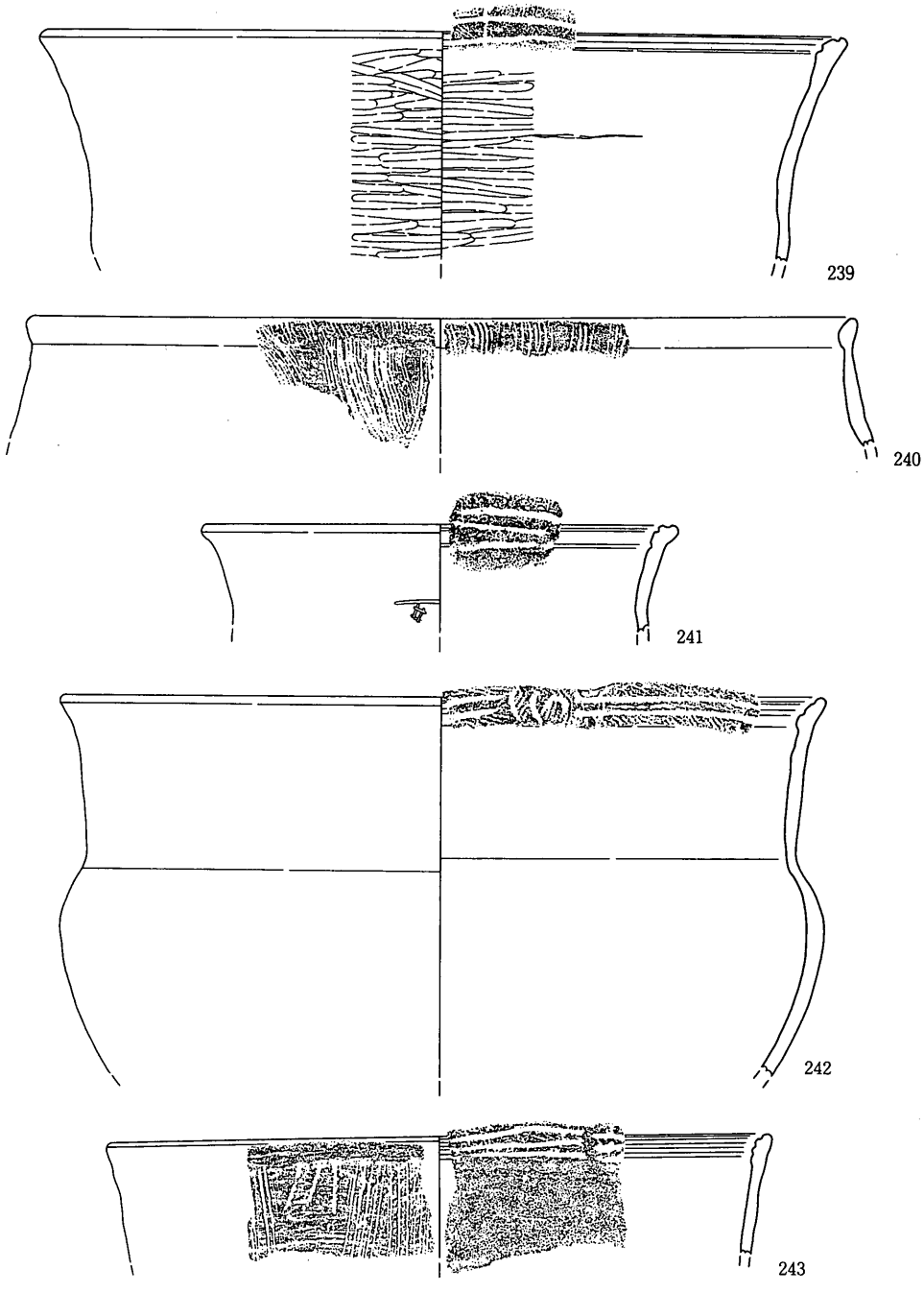
1．褐色細砂
2．黒色砂質土
3．黒褐色粘質土
4．黒色粘質土
5．黒色砂質土
6．黒色弱粘質土
7．淡褐色粗砂～中砂
8．黒色弱粘質土～淡褐色中砂
9．暗灰色微細砂
10．黒褐色粘質土
11．暗褐色粘質土
12．暗灰色砂質土
13．暗灰色細砂質土
14．青灰色弱粘質土
15．黒色砂質土
16．黒色弱粘質土～砂質土
17．黒色粘質土
18．黒色細砂
19．暗灰色中砂
20．暗灰色微細砂
21．黒色弱粘質土
22．暗灰色微細砂～黒色弱粘質土
23．灰黒色微細砂
24．暗灰色中砂
25．灰色中砂～微細砂
26．黒色粘質土
27．黒色弱粘質土
28．黒色弱粘質土～粘質土
29．暗灰色細砂
30．暗灰色中砂
31．暗灰色微細砂
32．黒色弱粘質土～暗灰色微細砂
33．黒色弱粘質土
34．青灰色粘質土～砂質土

第317図　D区SR01断面図（1／60）



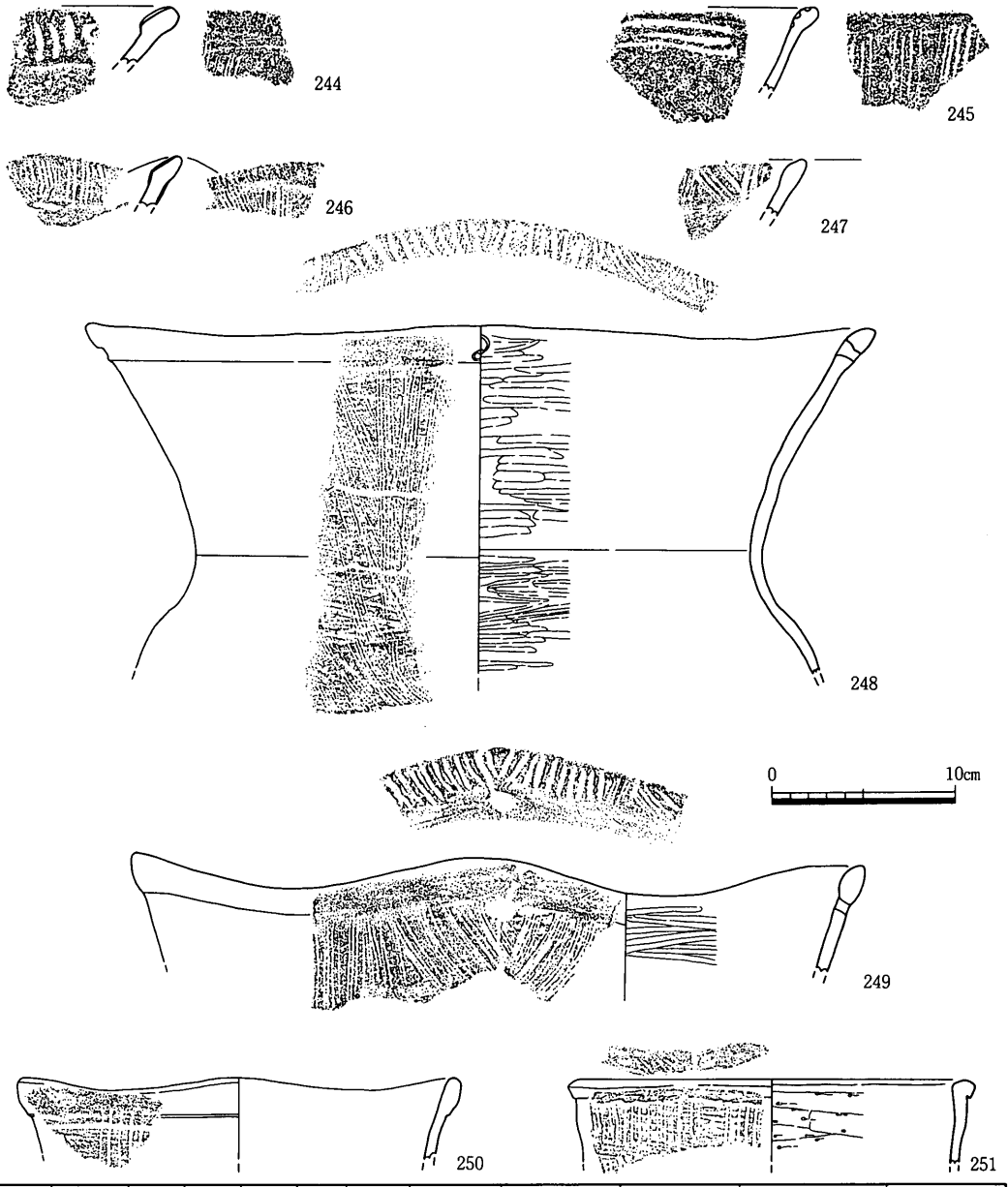
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
227	鉢・深鉢				中・普	良好	明黄褐	ナデ	ナデ	ヘラ描沈線文，波状口縁	
228	鉢・深鉢	27.8			中・普	良好	黄灰	ナデ	ミガキ	ヘラ描きによる渦文	
229	鉢・深鉢	44.0			中・普	良好	にぶい黄	ミガキ	ナデ	ヘラ描沈線文，波状口縁	
230	鉢・深鉢	27.0			中・普	良好	灰黄褐	不明	不明	沈線	角閃石を含む
231	鉢・深鉢				中・普	良好	灰オリーブ	ナデ	ナデ	櫛描き沈線文	
232	鉢・深鉢	25.1			中・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ	二枚貝条痕	
233	鉢・深鉢	26.0			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	方形区画文	
234	鉢・深鉢				中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線文	
235	鉢・深鉢				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	貼り付け文の横に渦文	
236	鉢・深鉢	24.3			粗・多	良好	灰褐～黒褐	ナデ	ナデ	渦文，区画文，縄文RL	
237	鉢・深鉢	21.0			粗・多	良好	黒褐，灰黄	ナデ	ナデ	沈線	
238	鉢・深鉢	20.3			粗・普	良好	黄褐	ナデ・ミガキ	ケズリ→ナデ	ヘラ描きによる渦文	

第318図　D区ＳＲ01出土遺物（1）（1／4）



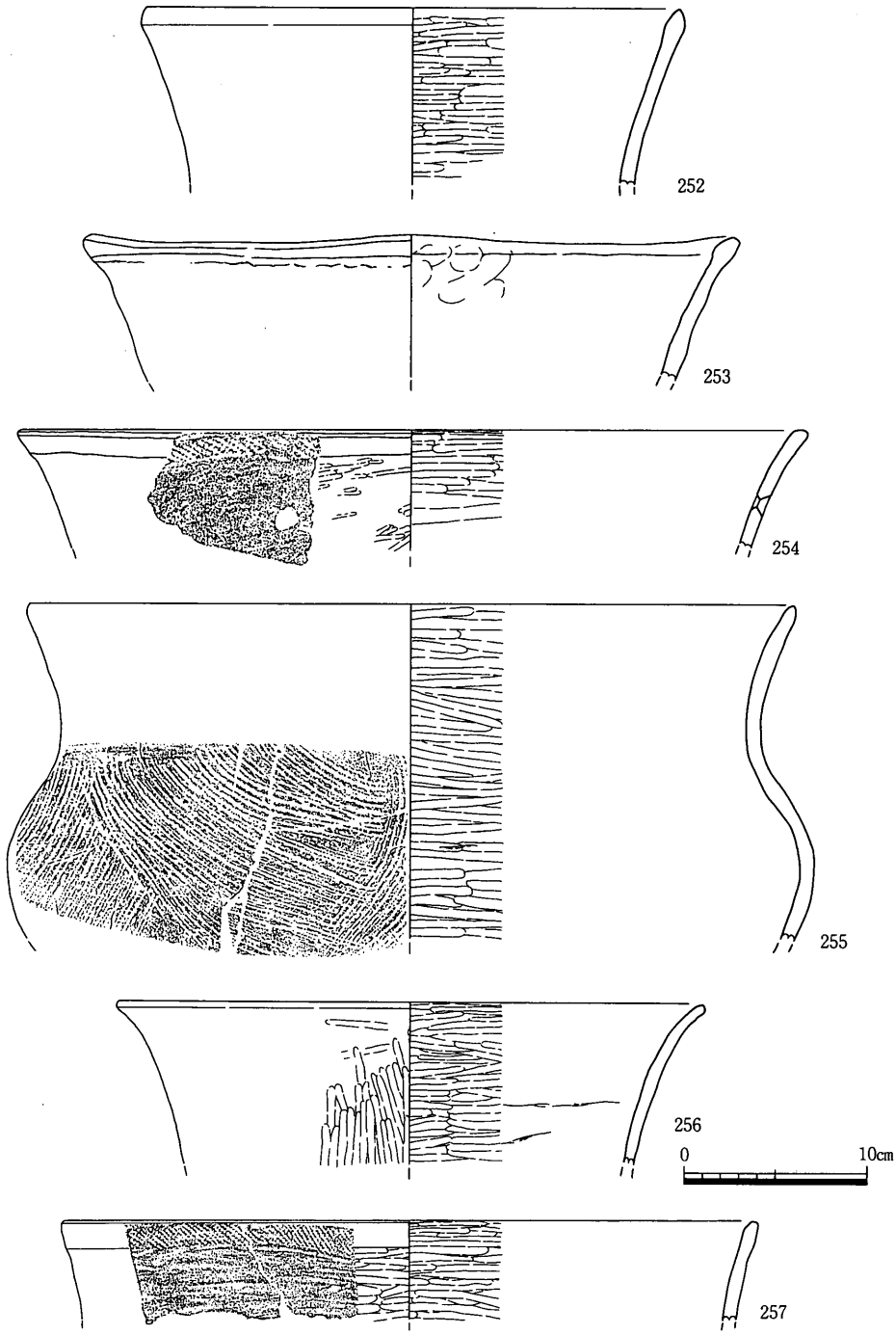
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
239	縄・深鉢	44.2			粗・普	良好	黄灰	ナデ・ミガキ	ミガキ	縄文ＲＬ，沈線文	
240	縄・深鉢	45.9			中・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	櫛描き沈線文	
241	縄・深鉢	26.2			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	櫛描文，沈線文	
242	縄・深鉢	41.9			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	磨消縄文，縄文ＲＬ	
243	縄・深鉢	25.9			粗・普	良好	灰黄褐～黄橙	ナデ	ナデ	切れ目のある沈線文	胎土は黒灰褐

第319図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（2）（1／4）



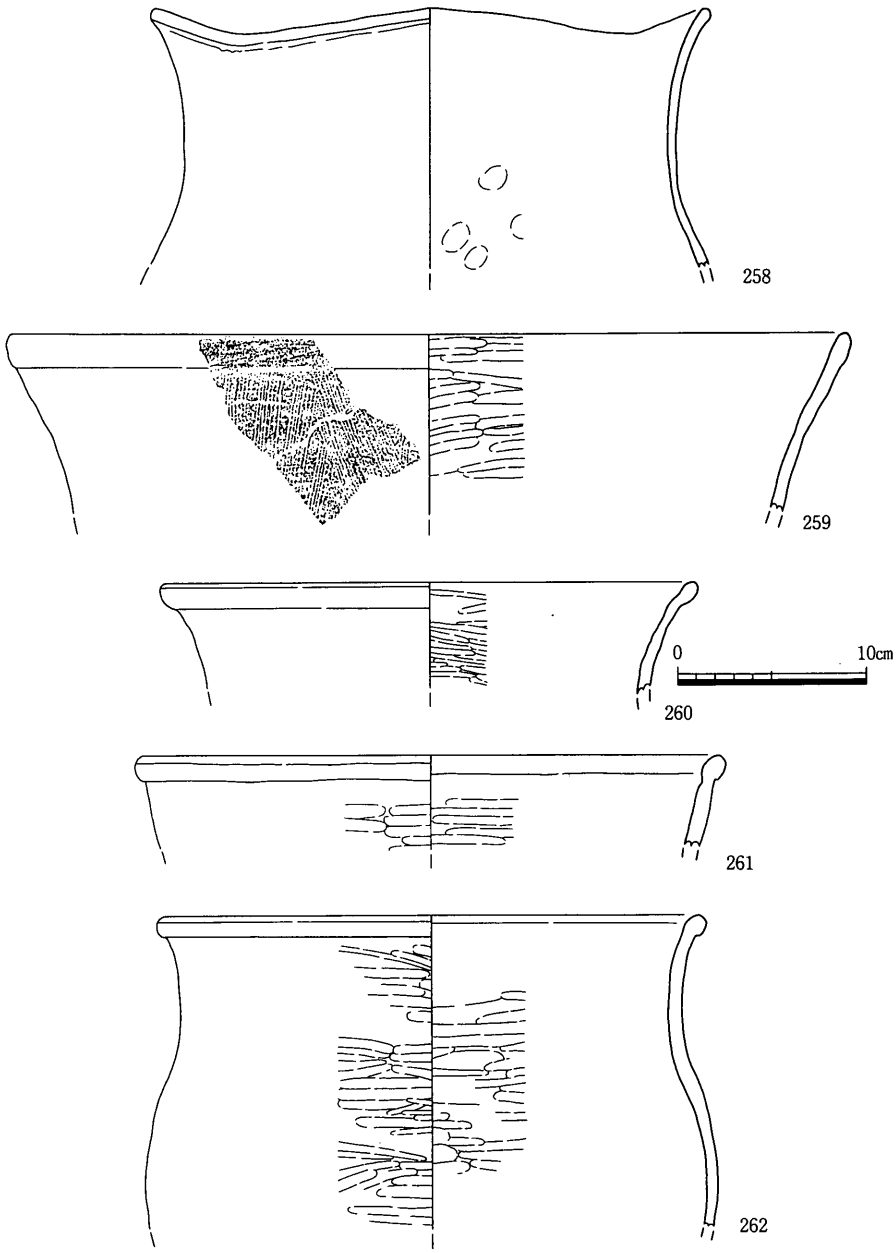
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
244	鉢・深鉢				中・普	良好	にぶい黄，黄灰	ナデ	不明	櫛描文，渦文	
245	鉢・深鉢				中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	櫛描文，沈線文	胎土は褐灰
246	鉢・深鉢				中・普	良好	褐灰～黒	ナデ	ナデ	櫛描き文，波状口縁	
247	鉢・深鉢				中・普	良好	黒褐	ナデ	ケズリ	山形沈線文	角閃石を含む
248	鉢・深鉢	42.9			粗・普	良好	黒	ナデ	ミガキ	一部縄文，波状口縁	
249	鉢・深鉢	39.8			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	櫛ﾍﾗ描沈線，波状口縁	
250	鉢・深鉢	24.0			中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	櫛描き文，波状口縁	胎土は黄灰
251	鉢・深鉢	22.0			細・普	良好	灰黄	ナデ・ケズリ	ケズリ	縄文ＲＬ，櫛描き文	胎土は黒

第320図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（3）（1／4）



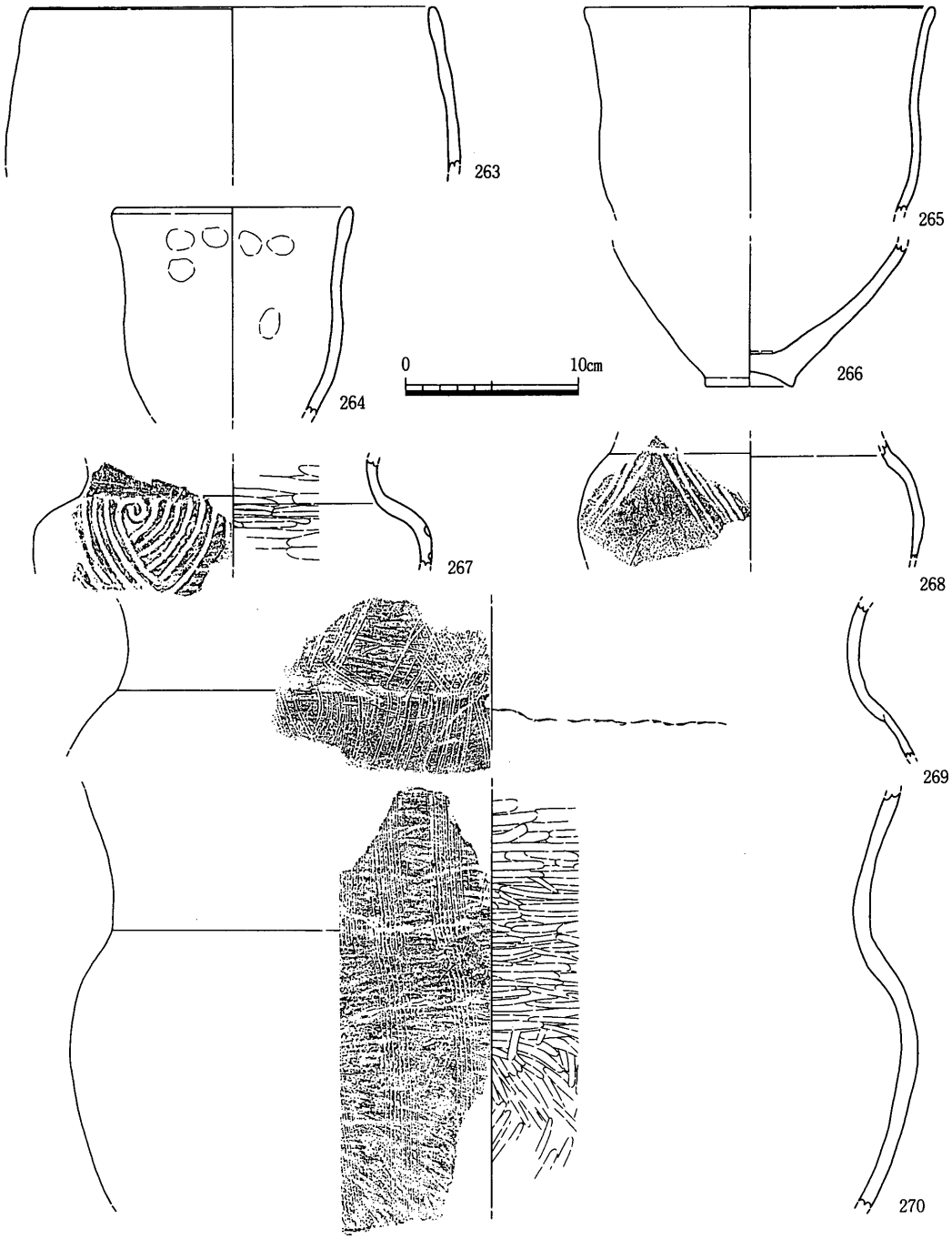
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
252	鉢・深鉢	29.2			中・普	良好	灰黄	ナデ	ミガキ		角閃石・金雲母
253	鉢・深鉢	35.1			粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ナデ	ナデ	波頂部の数不明	
254	鉢・深鉢	43.0			粗・普	良好	黒	ナデ・ミガキ	ミガキ	縄文RL，穿孔数不明	金雲母を含む
255	鉢・深鉢	40.9			粗・普	良好	灰黄	ナデ	ミガキ	櫛描き沈線文	
256	鉢・深鉢	32.3			粗・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ		
257	鉢・深鉢	38.0			中・普	良好	暗灰黄～黒	ミガキ	ミガキ	縄文RL	角閃石を含む

第321図　D区ＳＲ01出土遺物（4）（1／4）



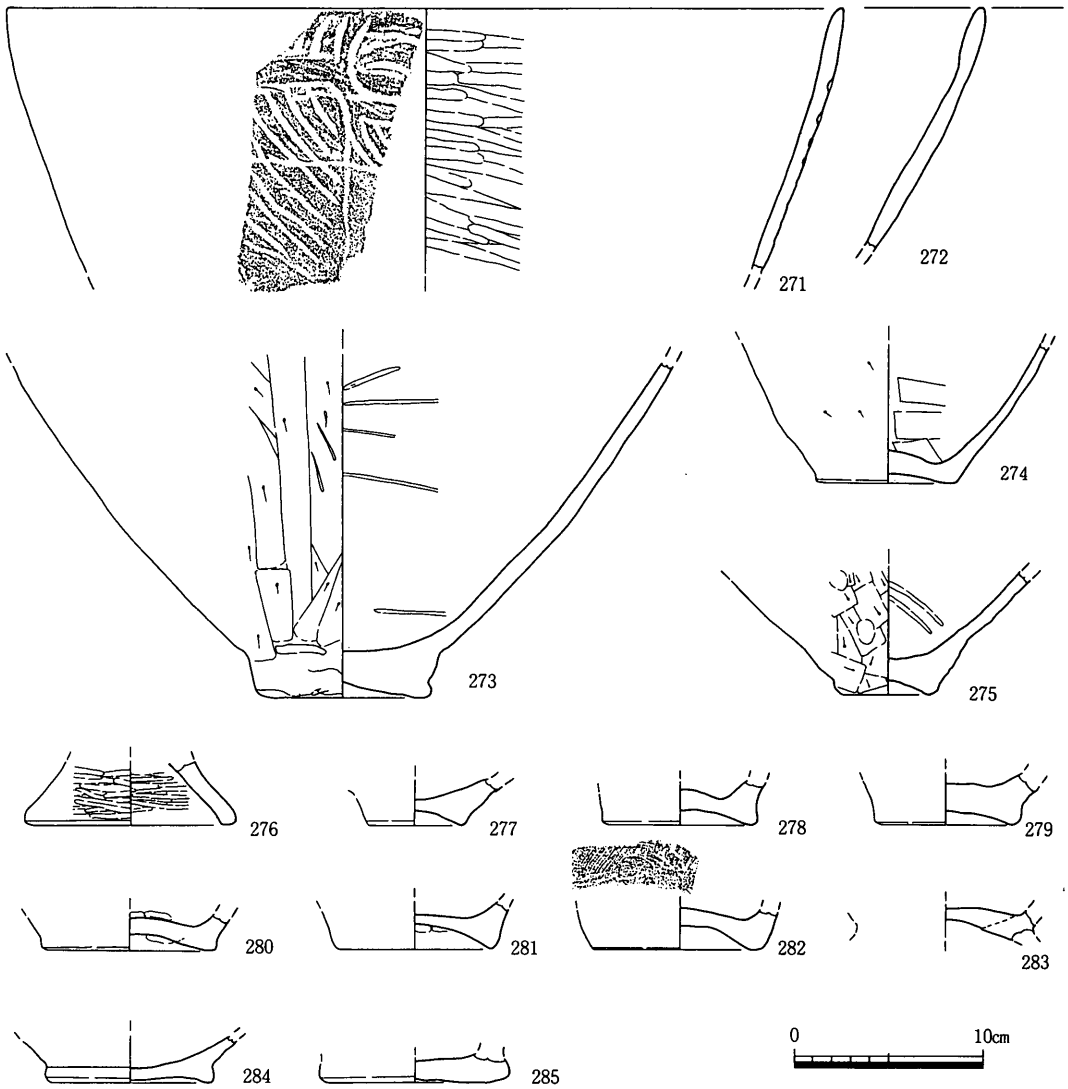
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
258	鉢・深鉢	29.6			粗・普	良好	黒褐，暗灰黄	ナデ	ナデ	波状口縁	角閃石を含む
259	鉢・深鉢	42.4			中・普	良好	黒褐	ナデ	ミガキ	櫛描き沈線文	金雲母を含む
260	鉢・深鉢	28.3			粗・普	良好	浅黄	ナデ	ミガキ		
261	鉢・深鉢	30.4			粗・普	良好	鈍い黄褐～黒	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
262	鉢・深鉢	28.2			中・普	良好	黒，褐灰	ミガキ	ナデ・ミガキ		角閃石を含む

第322図　D区ＳＲ01出土遺物（5）（1／4）



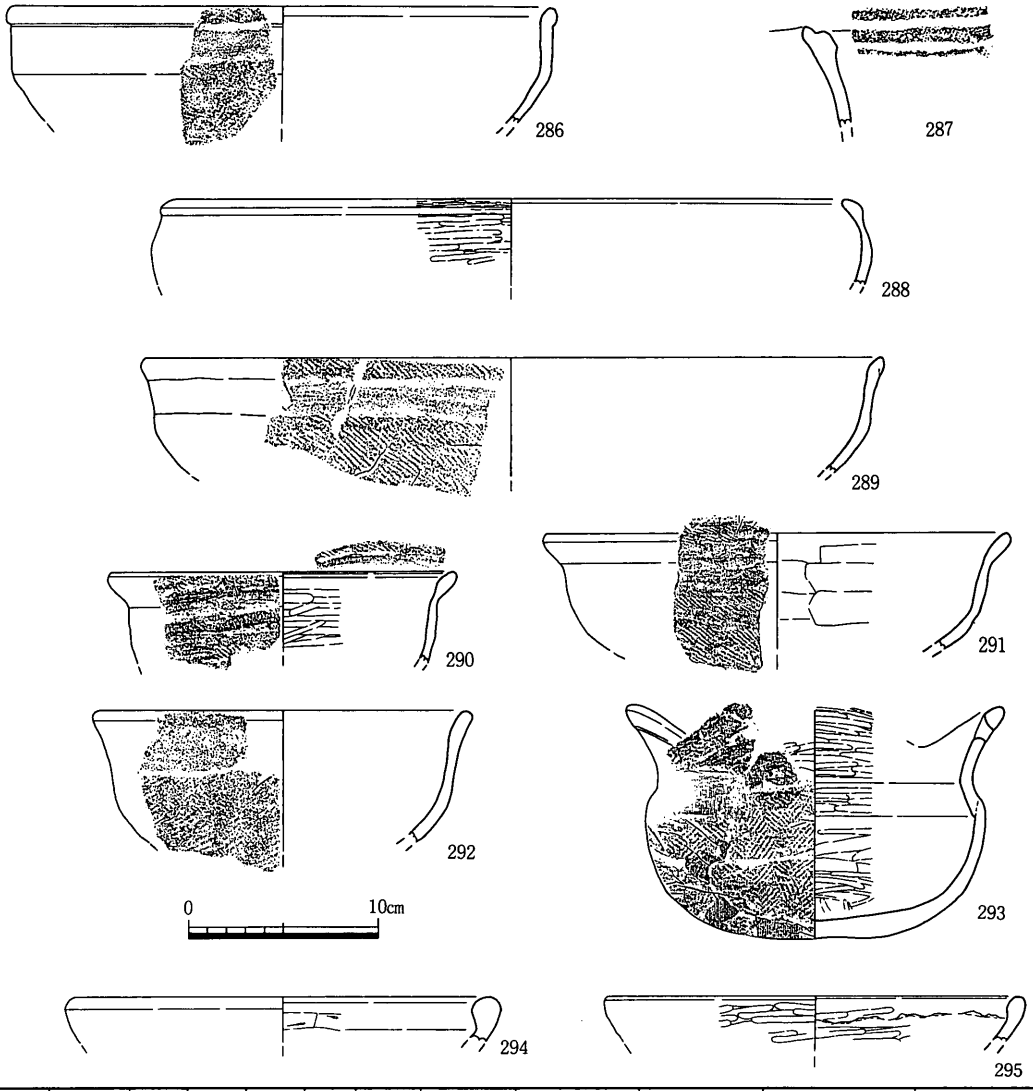
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
263	縄・深鉢	23.6			中・普	良好	灰黄，黄灰	ナデ	ナデ		
264	縄・深鉢	14.0			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
265	縄・深鉢	20.3			中・普	良好	黒	ケズリ→ナデ	ナデ		
266	縄・深鉢			4.1	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
267	縄・深鉢				中・普	良好	暗灰黄，鈍黄	ナデ	ミガキ	沈線文	
268	縄・深鉢				粗・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線文	
269	縄・深鉢				粗・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ	櫛描沈線，二枚貝条痕	
270	縄・深鉢				中・普	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ	ミガキ	櫛描文	

第323図　D区ＳＲ01出土遺物（6）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
271	鉢・深鉢	44.0			中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ・ミガキ	ヘラ描き沈線文	
272	鉢・深鉢				中・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ		
273	鉢・深鉢			9.3	中・普	良好	鈍い黄～黄灰	ケズリ・ナデ	板ナデ		
274	鉢・深鉢			7.4	粗・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ→ナデ	板ナデ		
275	鉢・深鉢			5.5	粗・普	良好	鈍黄橙～黄灰	ケズリ	板ナデ		
276	鉢・脚付鉢			11.1	中・普	良好	にぶい黄	ミガキ・ナデ	ミガキ		金雲母を含む
277	鉢・深鉢			4.9	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	巻き貝条痕	角閃石・金雲母
278	鉢・深鉢			8.2	粗・普	良好	黒～灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ		
279	鉢・深鉢			7.6	中・普	良好	浅黄，灰	ナデ	ナデ		
280	鉢・深鉢			9.2	粗・普	良好	鈍い橙，灰褐	ナデ	ナデ		
281	鉢・深鉢			8.0	中・普	良好	橙，灰白	ナデ	不明		角閃石・金雲母
282	鉢・深鉢			8.9	中・普	良好	鈍い黄褐～褐	ナデ	ナデ	櫛描き沈線文	
283	鉢・深鉢				粗・普	良好	褐灰	ナデ	ケズリ→ナデ		金雲母を含む
284	鉢・深鉢			8.8	粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
285	鉢・深鉢			10.0	粗・多	良好	灰オリーブ	ナデ	板ナデ		

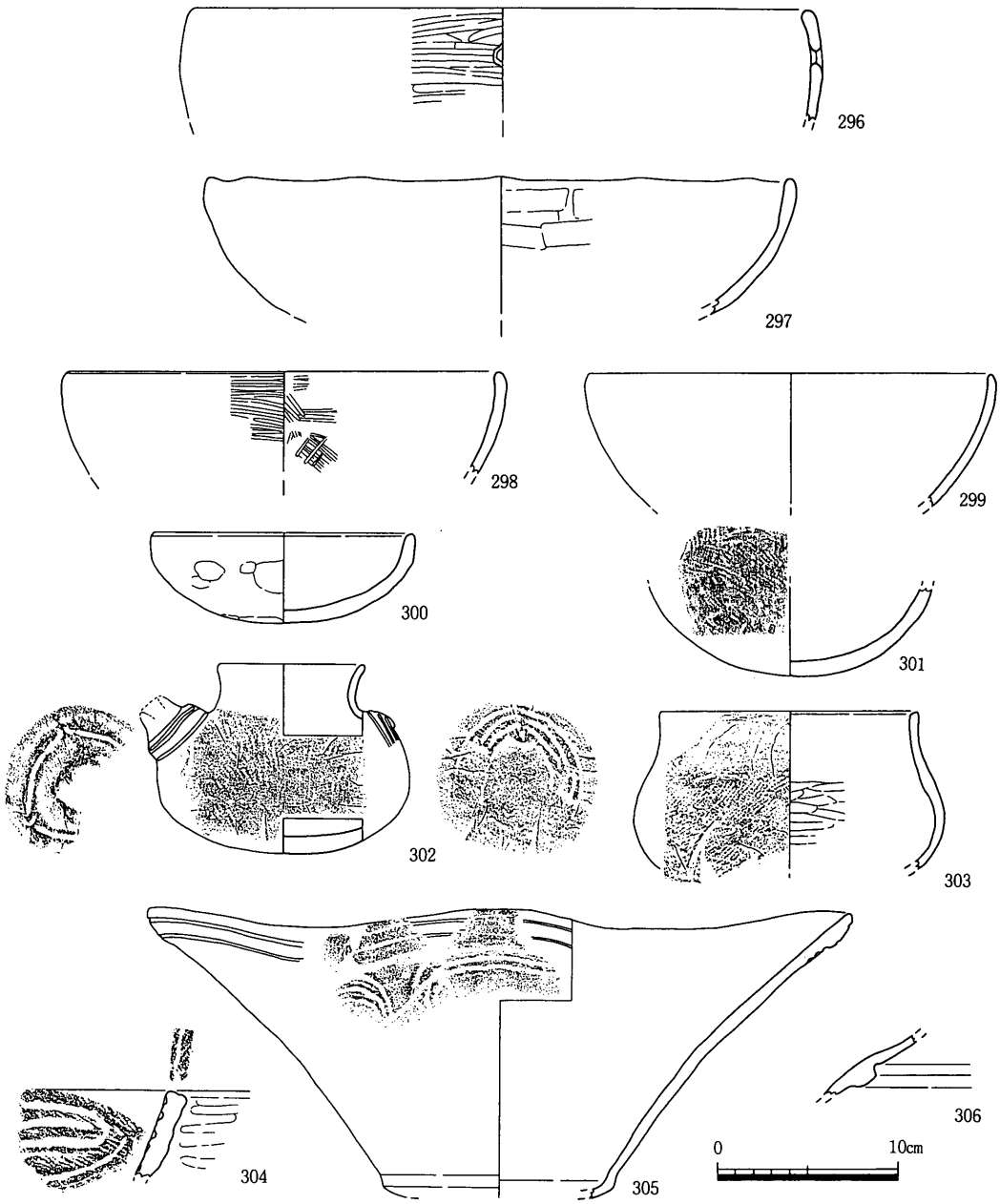
第324図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（7）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
286	縄・浅鉢	29.0			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	沈線文，縄文	角閃石を含む
287	縄・浅鉢				粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	沈線文	
288	縄・浅鉢	36.8			中・普	良好	灰黄～橙	ミガキ	ナデ		
289	縄・浅鉢	39.2			中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	縄文ＲＬ	金雲母・角閃石
290	縄・浅鉢	18.2			中・普	良好	黄灰	ナデ	ミガキ	縄文ＲＬ	
291	縄・浅鉢	24.4			粗・普	良好	黒褐，黄灰	ナデ	ナデ	縄文ＲＬ	
292	縄・浅鉢	20.0			粗・多	良好	灰黄	ナデ	ナデ	縄文ＲＬ	
293	縄・浅鉢	19.9	12.2		中・普	良好	黒	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	波状口縁，羽状縄文RL	金雲母・角閃石
294	縄・浅鉢	23.0			粗・普	良好	灰褐	ナデ	ナデ・ケズリ		
295	縄・浅鉢	22.1			中・普	良好	鈍黄橙～鈍褐	ミガキ	ミガキ		金雲母を含む

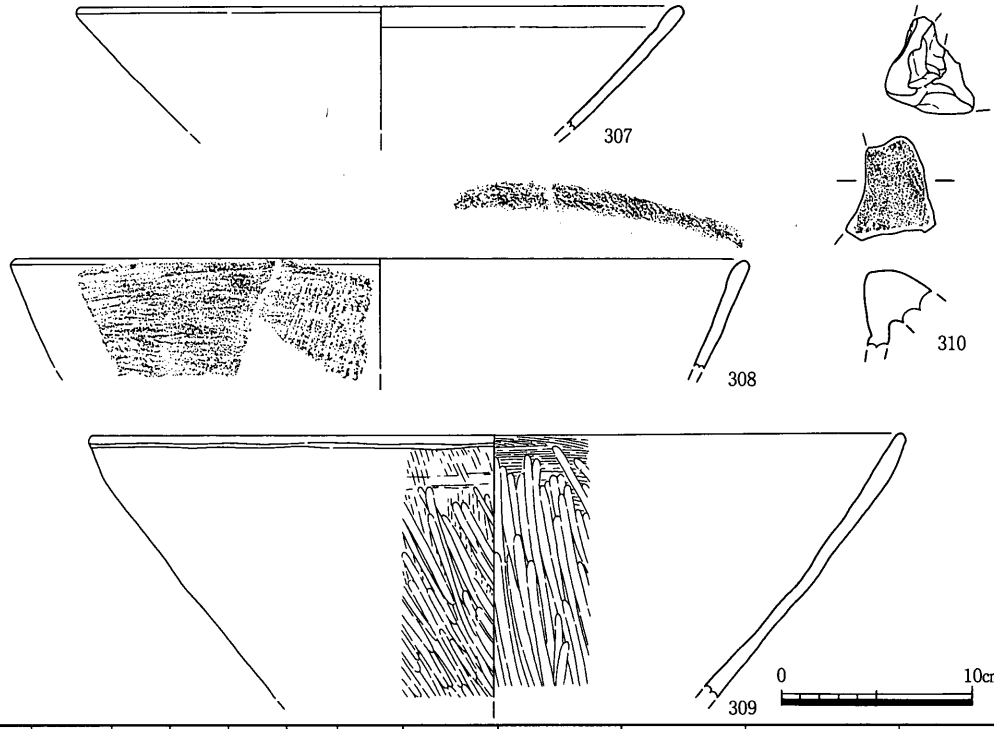
第325図　D区ＳＲ01出土遺物（8）（1／4）

引く。248は口縁内面に部分的にＲＬの縄文が押印される。波頂部の下には穿孔がなされる。251は外面に沈線をひいた後に口縁を外に折り返す。折り返した頂部にＲＬの縄文を付ける。内面はヘラケズリしている。252～265は口縁が厚くならないかわずかに厚くな



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
296	鉢・浅鉢	34.6			中・普	良好	黒褐，黄褐	ミガキ	ナデ	穿孔の数不明	角閃石を含む
297	鉢・浅鉢	32.0			中・普	良好	黄褐，黒褐	ナデ	ナデ	波頂部は12と想定	角閃石を含む
298	鉢・浅鉢	24.0			中・普	良好	黒・黄灰	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ		
299	鉢・浅鉢	22.0			粗・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		
300	鉢・浅鉢	14.2	5.0		中・普	良好	鈍い黄橙～黒	ナデ	ナデ		
301	鉢・浅鉢				粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	縄文ＲＬ	
302	鉢・注口	8.1	10.4		中・多	良好	鈍い黄・灰黒	板ナデ	不明	縄文ＲＬ	
303	鉢・注口？	14.2			粗・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ・ミガキ	縄文ＲＬ	
304	鉢・浅鉢				粗・普	良好	にぶい黄褐	ミガキ	ナデ	縄文ＲＬ	
305	鉢・浅鉢	39.0	16.0	12.8	粗・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	縄文ＲＬ，波状口縁	
306	鉢・浅鉢				粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		

第326図　Ｄ区ＳＲ01出土遺物（9）（1／4）

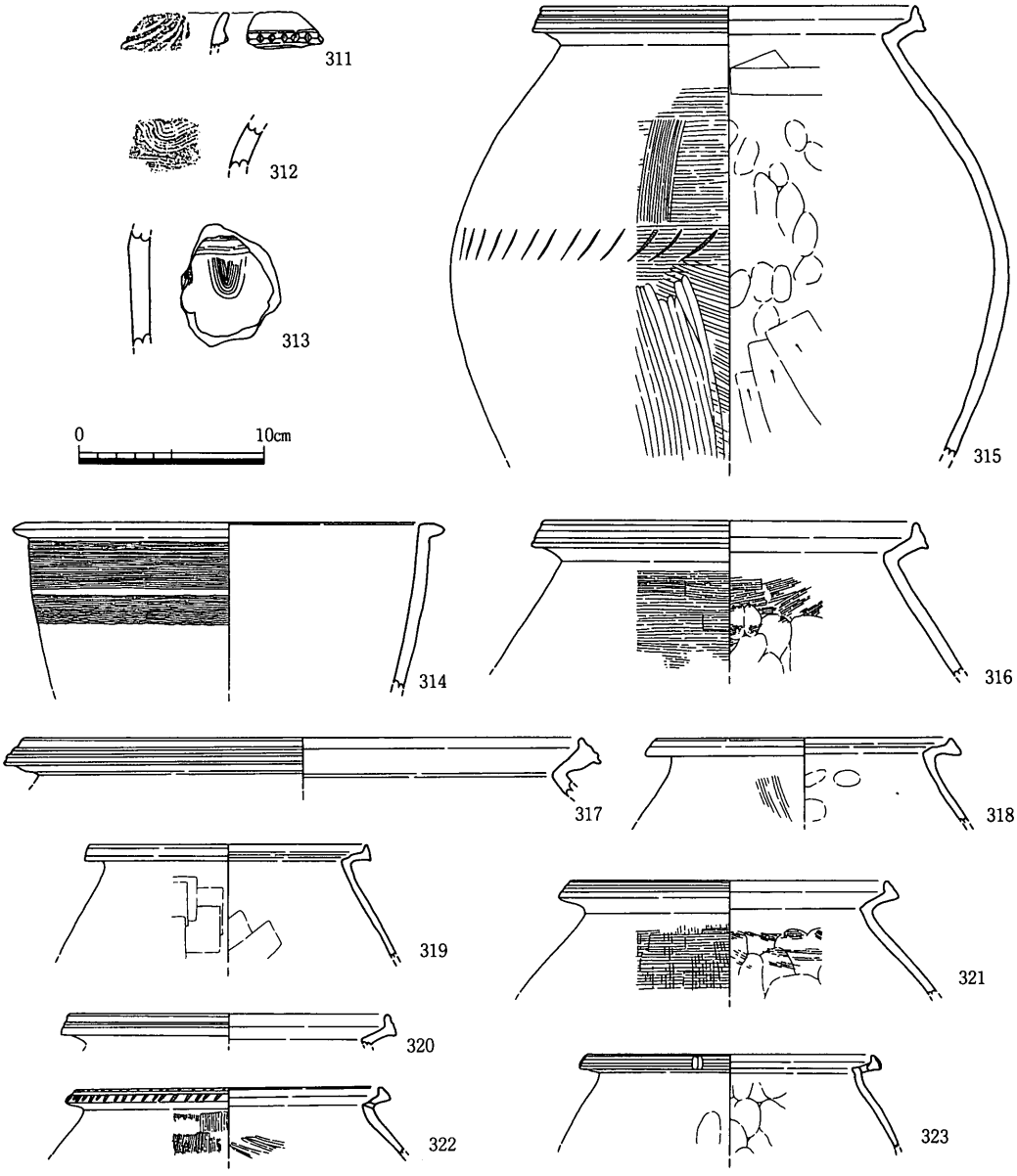


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
307	縄・浅鉢	32.0			粗・普	良好	黄灰～黒褐	ナデ	ナデ		
308	縄・浅鉢	39.0			粗・普	良好	灰黄褐，浅黄	ミガキ	ナデ	貝殻条痕，縄文RL	
309	縄・浅鉢	43.0			中・普	良好	浅黄～黒	ハケ目・ミガキ	ハケ目・ミガキ		
310	縄・不明				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	縄文RL	

第327図　D区SR01出土遺物（10）（1／4）

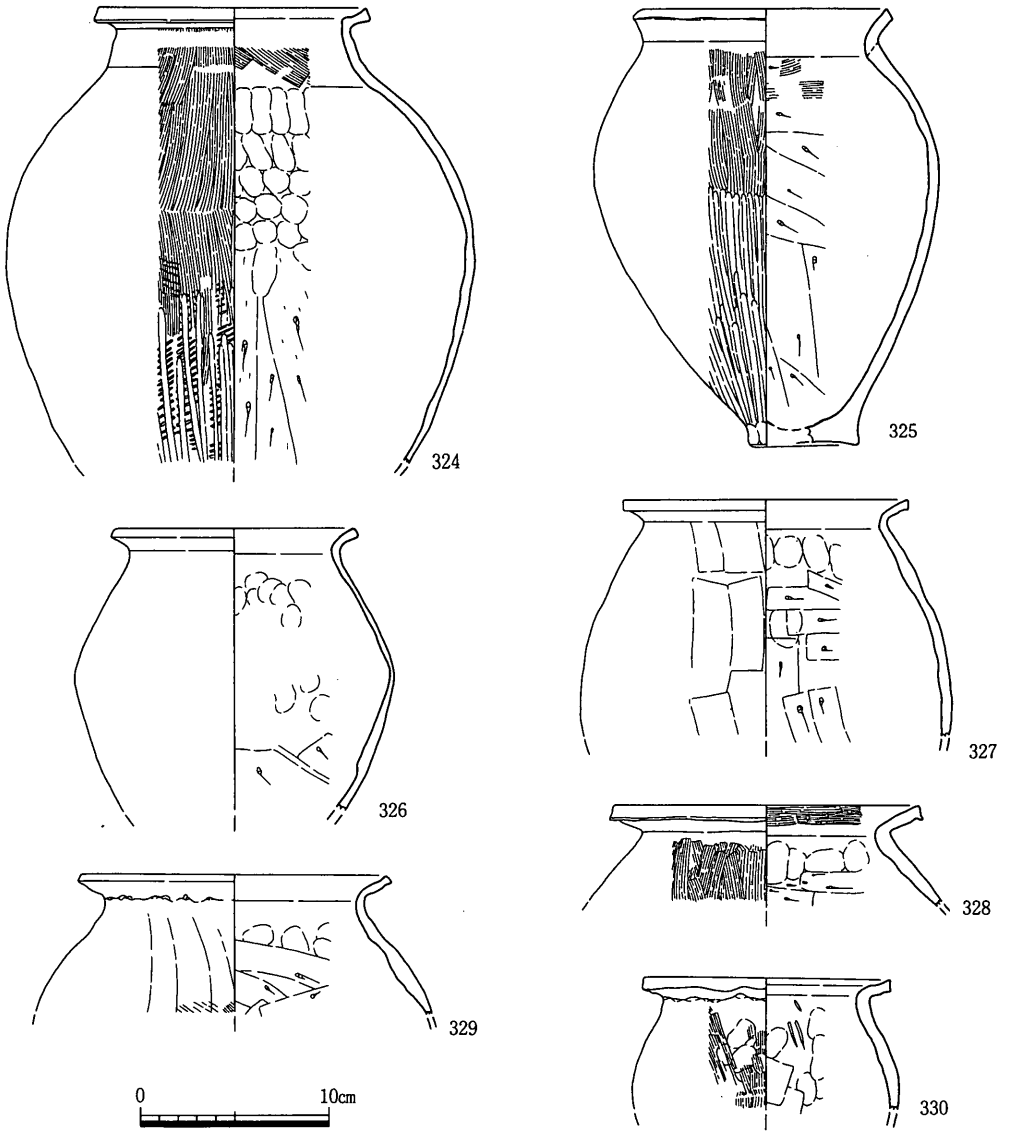
るものである。口縁は縄文（RL）帯をつくる以外にはほとんど文様が描かれない。また内面はヘラミガキが多い。254は焼成前に両面から穴があけられる。264は小型の深鉢である。調整も押さえの残る指ナデと比較的簡単なものである。267は太くてしっかりした沈線でV字状の文様を描き中心は渦となっている。269・270は胴外面に細い沈線をひく。271・272は胴が屈曲せず底まで直線的にすぼまる。271は文様を他の土器とやや異にする。しかし，弧線や渦文の系統の文様もあり，在地で作られたものと考えられる。273～285は底部である。ほとんどが上げ底で平底は少ない。273～275は胴外面をヘラケズリしている。276は内面まできれいにヘラミガキしている。底よりは脚になる可能性がある。282は外面底近くまで沈線が引かれる。285は接合部で剥離している。

286～301・304～309は鉢・浅鉢である。胴外面には多くRLの縄文が施される。286は口縁と胴の境に沈線をひく。287は外へと厚くなった口縁のうえに沈線を2本ひく。289は口縁外面と胴に縄文を押印する。290・291・293は口縁上面と胴に縄文を押印する。293は



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
311	鉢・深鉢				中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	刻み目突帯，沈線文	
312	弥・不明				粗・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ	櫛描き文	胎土は黒褐
313	弥・不明				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	櫛描き文	胎土は黒褐
314	弥・甕	23.2			中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	沈線上13条・下8条	
315	弥・甕	20.2			細・普	良好	黒褐	叩き→ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	ケズリ→ナデ	沈線，ヘラ圧痕文	煤付着
316	弥・甕	20.0			中・普	良好	黒，褐灰	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ	沈線	煤付着
317	弥・甕	34.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	沈線	
318	弥・甕	17.0			粗・普	良好	明赤褐，黒褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
319	弥・甕	15.4			中・普	良好	鈍黄褐～褐灰	ナデ	ナデ		金雲母を含む
320	弥・甕	17.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線	
321	弥・甕	17.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目→ナデ	沈線，胴外面は叩き？	胎土は黄灰
322	弥・甕	16.2			細・普	良好	明黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ミガキ	刻み目→沈線	胎土は褐灰
323	弥・甕	15.3			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線，貼付け文	金雲母を含む

第328図　D区ＳＲ01出土遺物（11）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
324	弥・甕	14.5			粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ		
325	弥・甕	13.6	22.1	5.8	粗・普	良好	灰黄	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ｹｽﾞﾘ→ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ		
326	弥・甕	13.0			中・普	良好	鈍い黄，黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母を含む
327	弥・甕	15.0			粗・普	良好	浅黄橙，黄灰	ナデ	ナデ・ケズリ		
328	弥・甕	16.0			中・普	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ		
329	弥・甕	16.6			粗・普	良好	灰白，浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
330	弥・甕	13.0			粗・普	良好	浅黄橙～赤褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

第329図　D区ＳＲ01出土遺物（12）（1／4）

高低の激しい波状口縁をもち胴の縄文はＲＬの同一原体を縦横に転がすことによって羽状にみせている。296は内外面から穿孔する。297は起伏の小さい波状口縁である。302の注口部文様は上下の点を線でつなぐものである。また反対側には下半が剥落しているが円形の粘土をはりつけ点と線で文様を描いている。303も注口土器の可能性が高い。304は口縁

内面と上面の平坦面に沈線と縄文をつけている。口縁は波状になる可能性がある。305はやや丸みのある平底をもつ。口縁の2本の沈線間には縄文を押印し，胴にも3本を単位とした横方向の沈線文様を描く。306は外面に突帯がめぐる。308は口縁上面に縄文を押印する。また外面には貝殻条痕の上から細い沈線をひく。309は内外面とも縦方向のミガキを施す。310は土製品の破片であろうが全体像はつかめない。一部に縄文を押印する。

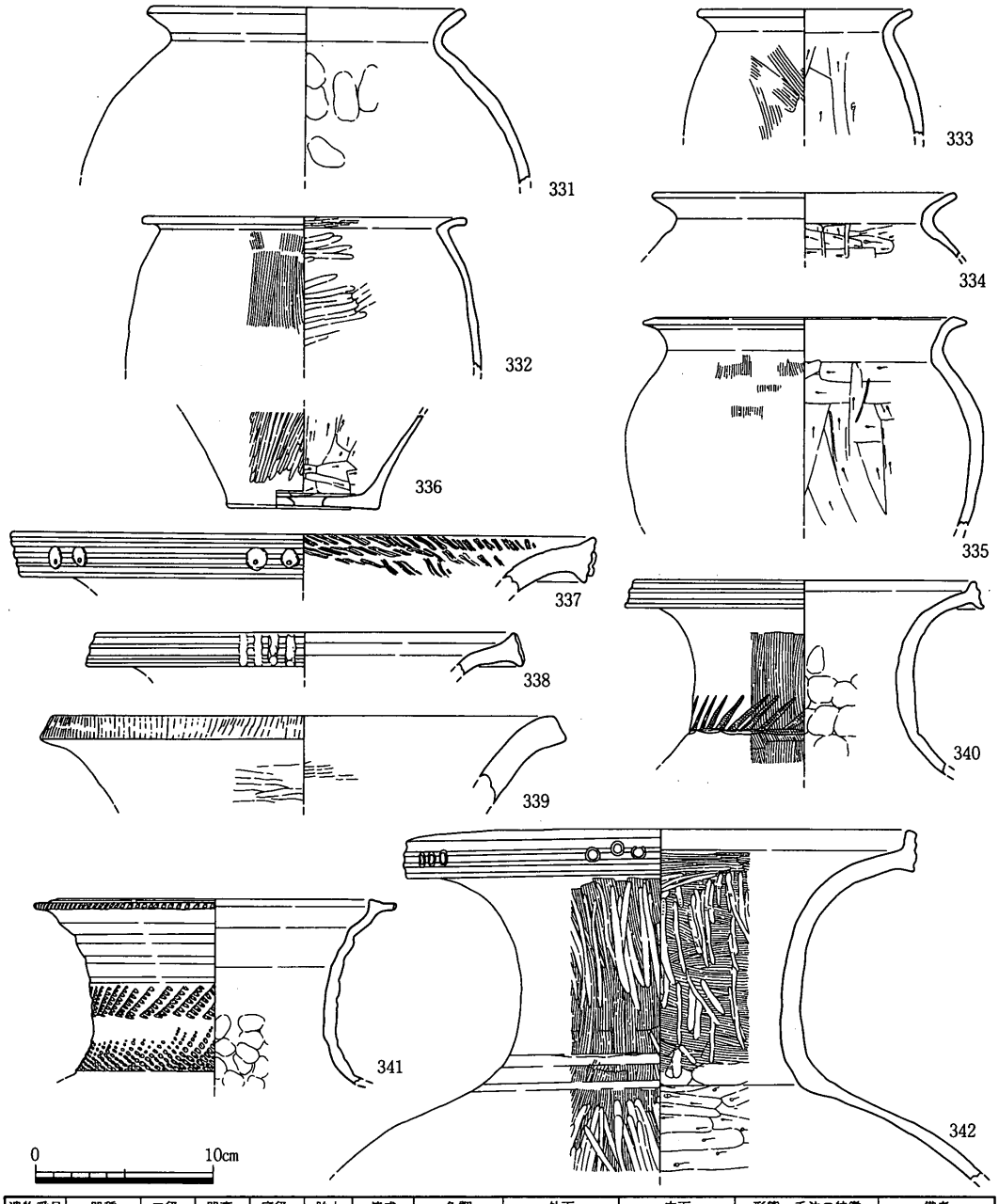
以上の土器は県内で多量の縄文後期の土器を出土した永井遺跡と比較した場合，227～229のような縁帯文土器といえるものや290・291のような口縁上端に縄文を押印するものや304など永井Ⅰ式に比定できるものも存在する。しかし深鉢の大半は口縁部が内側へと厚くなりそこに文様を施し，沈線も細いものが多くみられる。また，254・257のように口縁部が少し外にふくらみそこに縄文を施すものも含まれる。鉢・浅鉢でも294・295のように内膨らみになるもの，口縁外面に縄文を押印するもの，308のように細い沈線を引くものなどがある。これらは永井Ⅱ～Ⅲ式の様相を示している。前述したように縄文後期の土器のみを出土する土層から出土したものは表面が摩滅していないことから，これらは永井Ⅱ～Ⅲ式の一括性の高い土器群であるといえよう。

311は口縁上端にも刻み目を施した縄文晩期の刻み目突帯文土器と考えられるが，内面に重弧文ふうの文様を描き類例を知らない。312～396は弥生土器である。312は壷の肩部に櫛描き文を描いている可能性もある。313は竪櫛に似た形の文様を横に連続してつける。どちらが上下になるかは不明である。314は上に13条・下に8条の沈線をひく。最下端の5条は波打つように描かれる。また沈線は1本1本ひいている。312～314は弥生Ⅱ期初頭の土器と考えられる。

315～323は口縁端部が上に広がり，そこに2～3本の凹線がいれられる。315は頸部下に煤が付着している。胴外面下半は磨かれている。316も外面に煤が付着する。319は内面にも凹線が入る。321はハケ目のため消えかけているものの胴外面に叩きの痕がうっすらと残る。そのハケ目は315・316とともに横方向に付けられる。322の口縁は板木口による刻み目の後に凹線がめぐらされる。322・323は頸部に穿孔がなされる。以上の土器はⅣ期のものである。

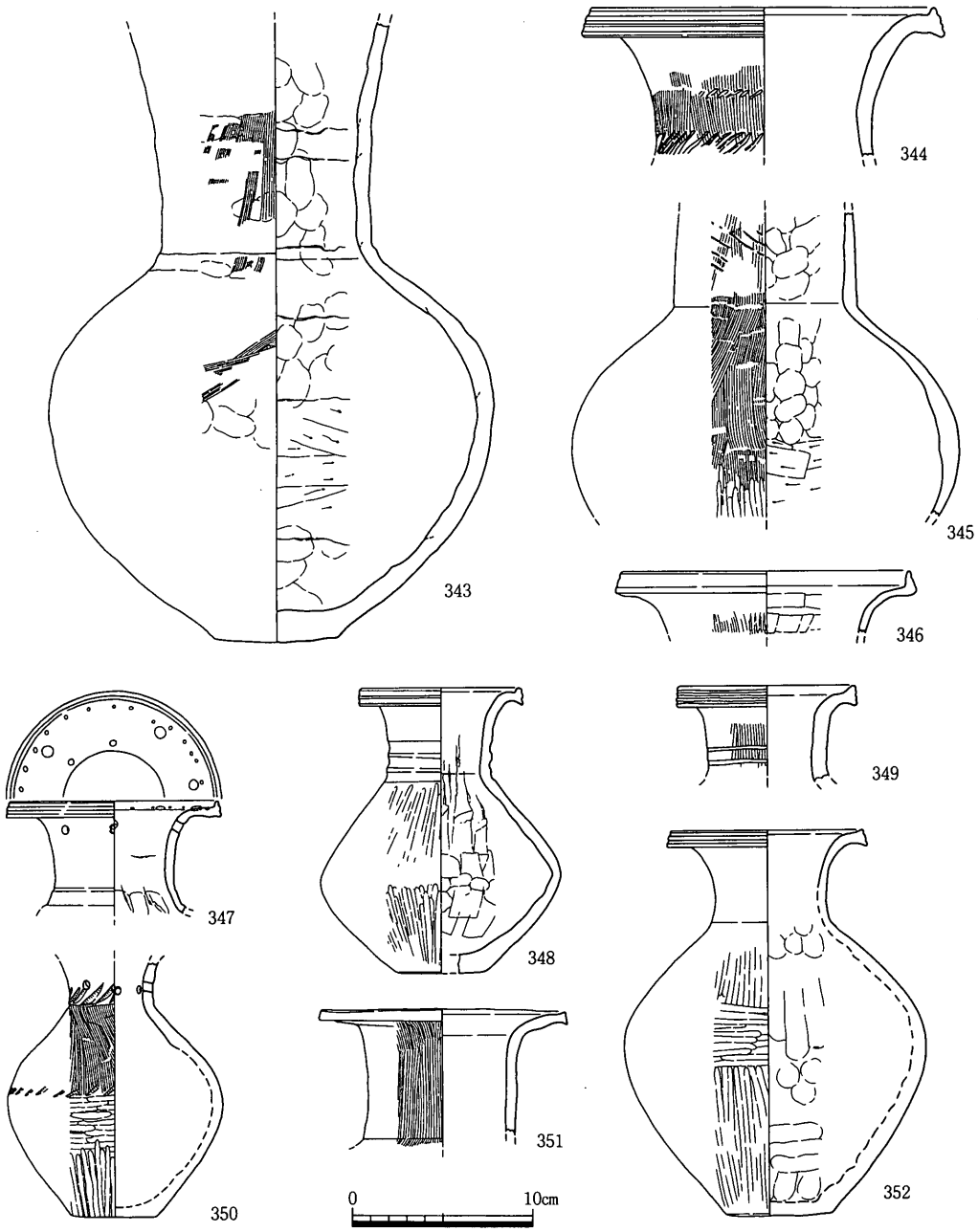
324～330は口縁端部に平坦面をもつものである。324は短いが下広がりの頸部帯が形成される。外面調整は叩き，ハケ目，ミガキの順になされる。327・329は外面が板ナデされている。以上はⅤ期前半のものと考えられる。

331～334は口縁端部が丸い。332は胴の張りが弱く，Ⅳ期ごろのものであろう。内面が



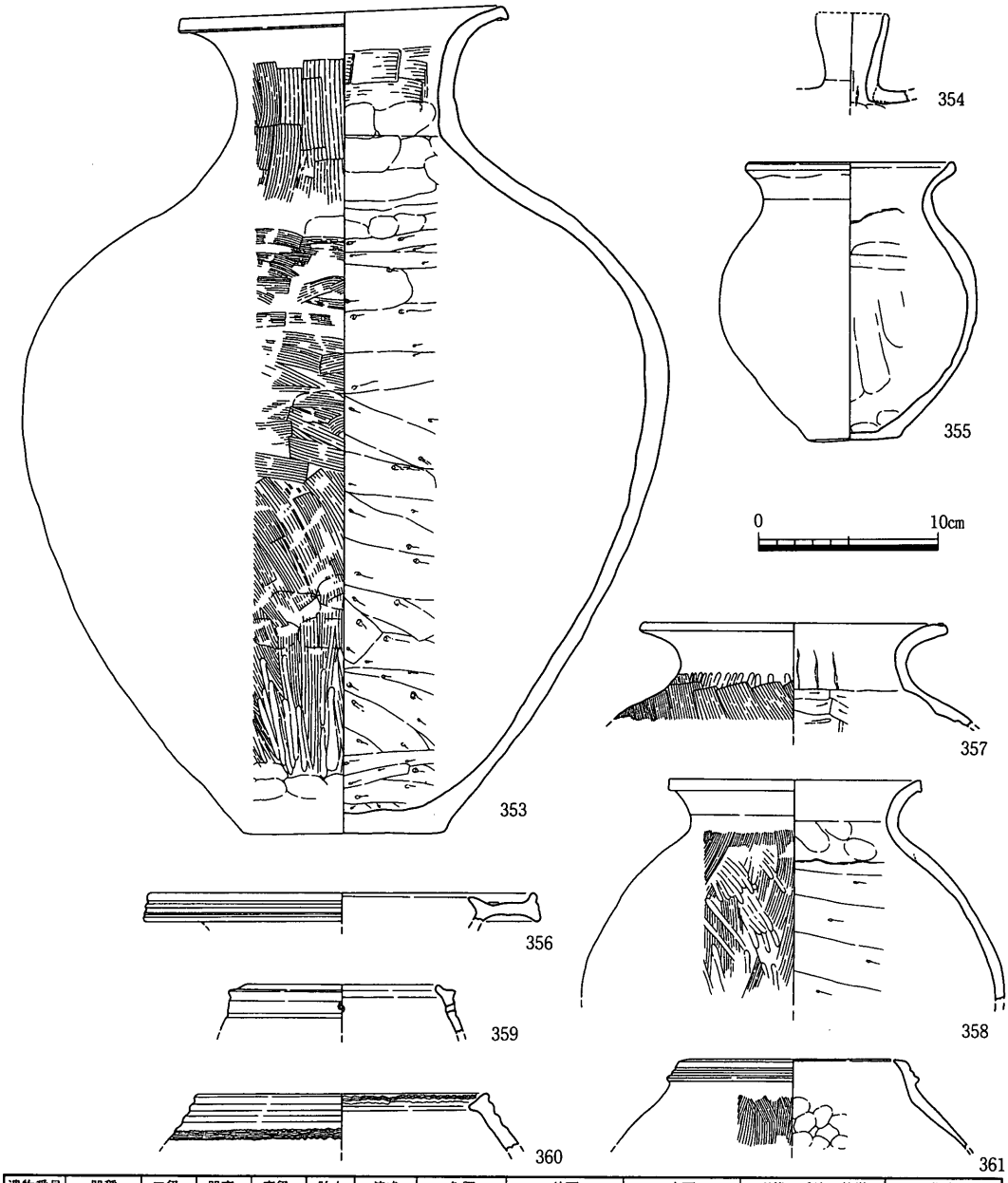
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
331	弥・甕	17.3			中・普	良好	明褐灰	ナデ	ナデ		
332	弥・甕	18.2			微・普	良好	灰黄褐～暗褐	ナデ・ハケ目	ミガキ		煤付着
333	弥・甕	12.0			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
334	弥・甕	17.0			中・普	良好	浅黄～黄灰	ナデ	ナデ・ケズリ		
335	弥・甕	18.0			粗・多	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
336	弥・甑			8.3	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ケズリ		金雲母を含む
337	弥・壺	32.7			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線，貼付文，竹管文	
338	弥・壺	23.6			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	沈線，長方形貼付け文	
339	弥・壺	29.4			粗・普	良好	灰白	ナデ・ミガキ	ナデ・ハケ目	刻み目	
340	弥・壺	19.0			中・普	良好	暗灰黄，黄橙	ハケ目	ナデ	沈線，ヘラ圧痕文	
341	弥・壺	20.2			細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	刻み目，ヘラ圧痕文	金雲母を含む
342	弥・壺	28.5			中・普	良好	浅黄	ハケ目→ミガキ	ｹｽﾞﾘ・ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	沈線，竹管文	

第330図　D区ＳＲ01出土遺物（13）（1／4）



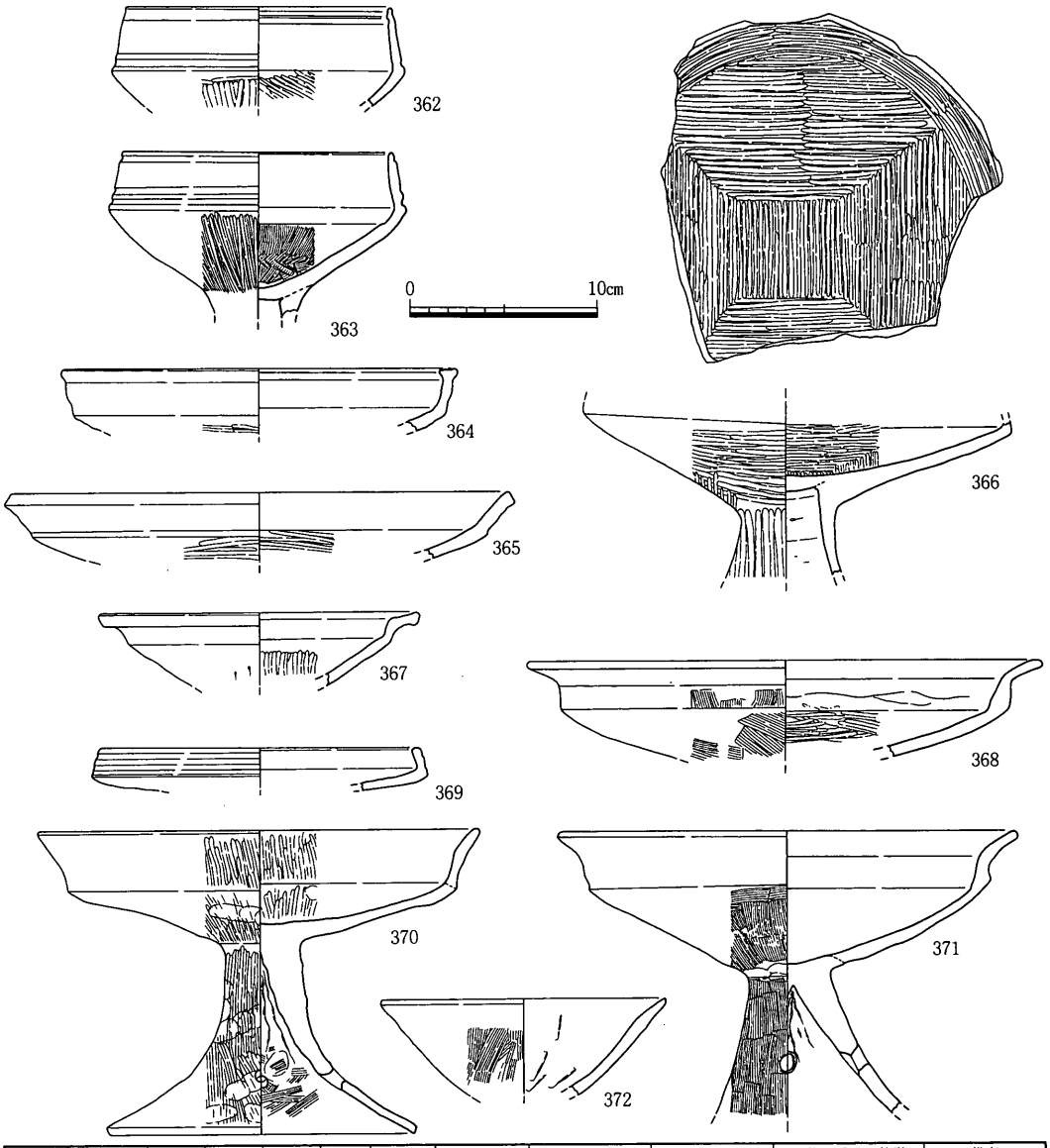
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
343	弥・壺			6.8	粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
344	弥・壺	19.0			粗・普	良好	淡黄・灰褐	ナデ・ハケ目	ナデ	沈線，ヘラ圧痕文	
345	弥・壺				中・普	良好	暗褐	ハケ目・ミガキ	ナデ→ケズリ	ヘラ圧痕文	金雲母を含む
346	弥・壺	16.5			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
347	弥・壺	11.8			中・普	良好	鈍い橙，黄灰	ナデ	ナデ	刺突文，貼付文	
348	弥・壺	8.7	15.5	4.8	細・普	良好	淡黄～黒	ミガキ	ナデ	凹線，沈線	
349	弥・壺	10.0			粗・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ	沈線	
350	弥・壺			4.8	中・普	良好	灰黄褐	ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ・ﾊｹ目	ナデ	ヘラ圧痕文，穿孔	金雲母・角閃石
351	弥・壺	13.5			細・普	良好	明赤褐～鈍橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
352	弥・壺	10.9	21.1	5.8	粗・普	良好	橙～黒，鈍褐	ナデ・ミガキ	ナデ	沈線	

第331図　D区ＳＲ01出土遺物（14）（1／4）



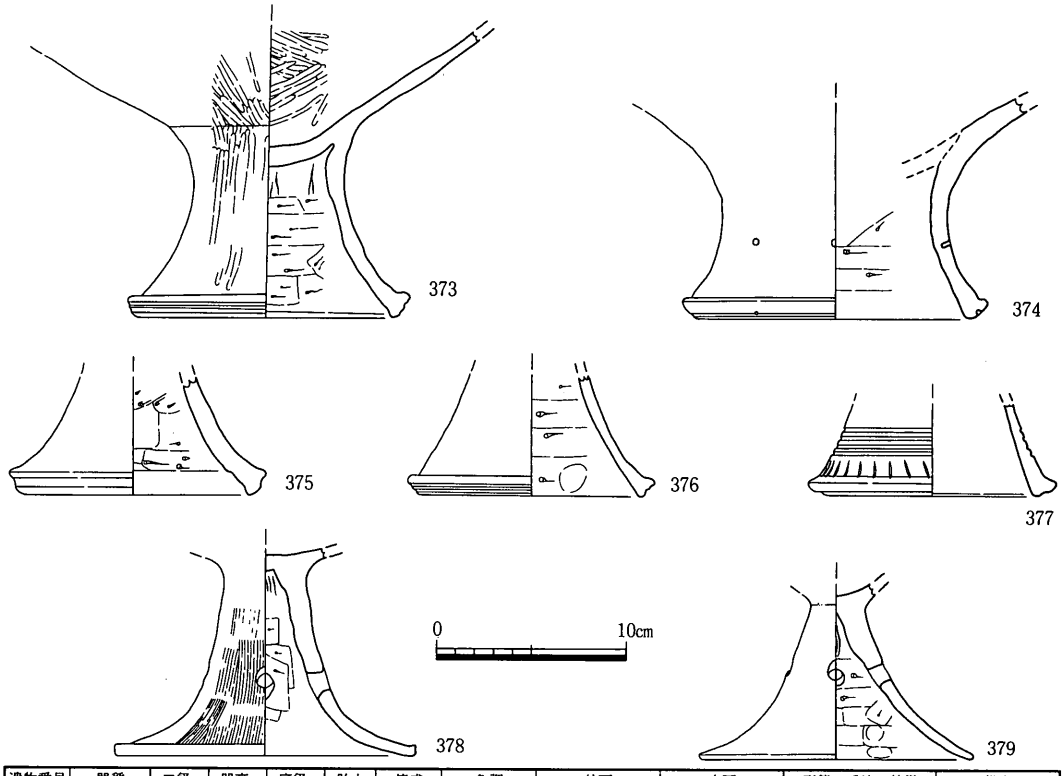
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
353	弥・壺	17.9	44.7	11.1	粗・普	良好	浅黄橙～黒	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目→ミガキ	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ		金雲母を含む
354	弥・壺				中・普	良好	橙～褐灰	ナデ	ナデ		
355	弥・壺	11.6	15.0	5.1	粗・普	良好	灰白・黒，灰	ナデ	ナデ		
356	弥・壺	22.0			中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	沈線	
357	弥・壺	16.9			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	板ナデ・ケズリ		
358	弥・壺	14.0			粗・普	良好	淡黄・黒	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		
359	弥・壺	12.6			粗・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	穿孔の数不明	
360	弥・壺	16.0			中・普	良好	黒，浅黄	ナデ	ナデ	櫛描き波状文，凹線	
361	弥・壺	12.6			細・普	良好	褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

第332図　D区ＳＲ01出土遺物（15）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
362	弥・高杯	14.0			細・普	良好	暗灰黄	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	沈線	金雲母を含む
363	弥・高杯	14.1			中・普	良好	褐灰～明褐灰	ナデ・ハケ目	ナデ→ミガキ	廉状ハケ目	
364	弥・高杯	21.0			粗・普	良好	灰ｵﾘｰﾌﾞ～黒	ミガキ	ナデ		
365	弥・高杯	26.4			中・普	良好	黄褐，明黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
366	弥・高杯				中・普	良好	にぶい黄褐	ミガキ・ケズリ	ミガキ・ケズリ	四分割ミガキ	角閃石を含む
367	弥・高杯	17.0			粗・普	良好	黄灰～灰黄	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ		
368	弥・高杯	27.4			中・普	良好	鈍い橙・褐灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ミガキ		
369	弥・高杯	17.0			粗・普	良好	橙～黒	ナデ	ナデ		
370	弥・高杯	23.5	16.2	16.5	粗・普	良好	灰，鈍い黄橙	ナデ・ミガキ	ミガキ・ハケ目		
371	弥・高杯	24.5			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ	穿孔は4ヶ所	
372	弥・高杯	15.2			細・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ		

第333図　D区ＳＲ01出土遺物（16）（1／4）

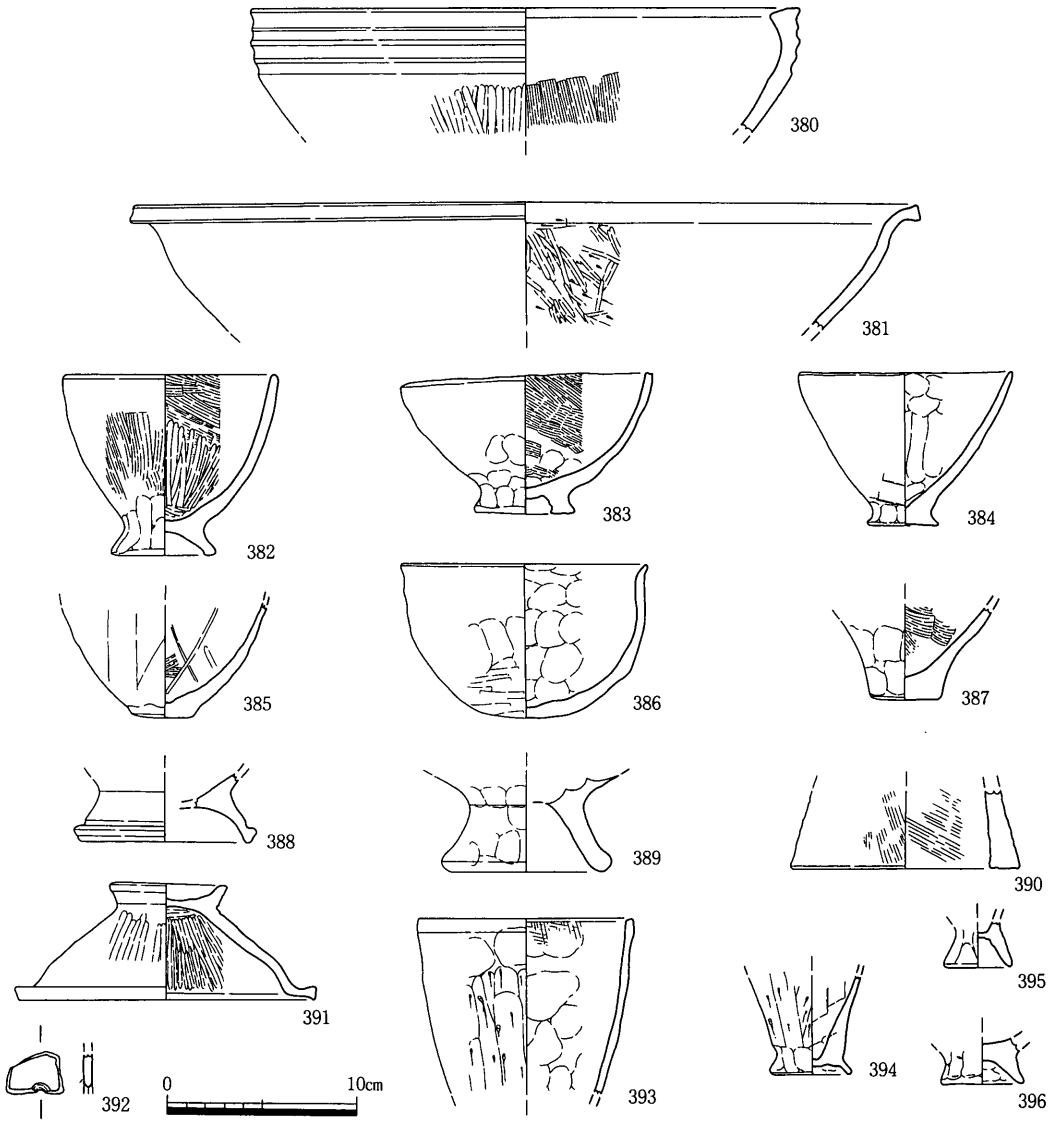


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
373	弥・高杯			13.3	粗・普	良好	にぶい褐	ミガキ・ナデ	ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	沈線	
374	弥・高杯			16.0	微・普	良好	灰黄～黄灰	ナデ	ナデ・ケズリ	穿孔は8ヶ所，沈線	
375	弥・高杯			11.6	中・普	良好	灰黄	不明	ナデ・ケズリ		
376	弥・高杯	13.0			微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ケズリ・ナデ	沈線	角閃石を含む
377	弥・高杯			13.0	細・普	良好	明褐	ナデ	ナデ	沈線，刺突文	
378	弥・高杯			15.9	中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		
379	弥・高杯			14.4	中・普	良好	灰白～浅黄橙	不明	ケズリ→ナデ	穿孔は4ヶ所	

第334図　D区ＳＲ01出土遺物（17）（1／4）

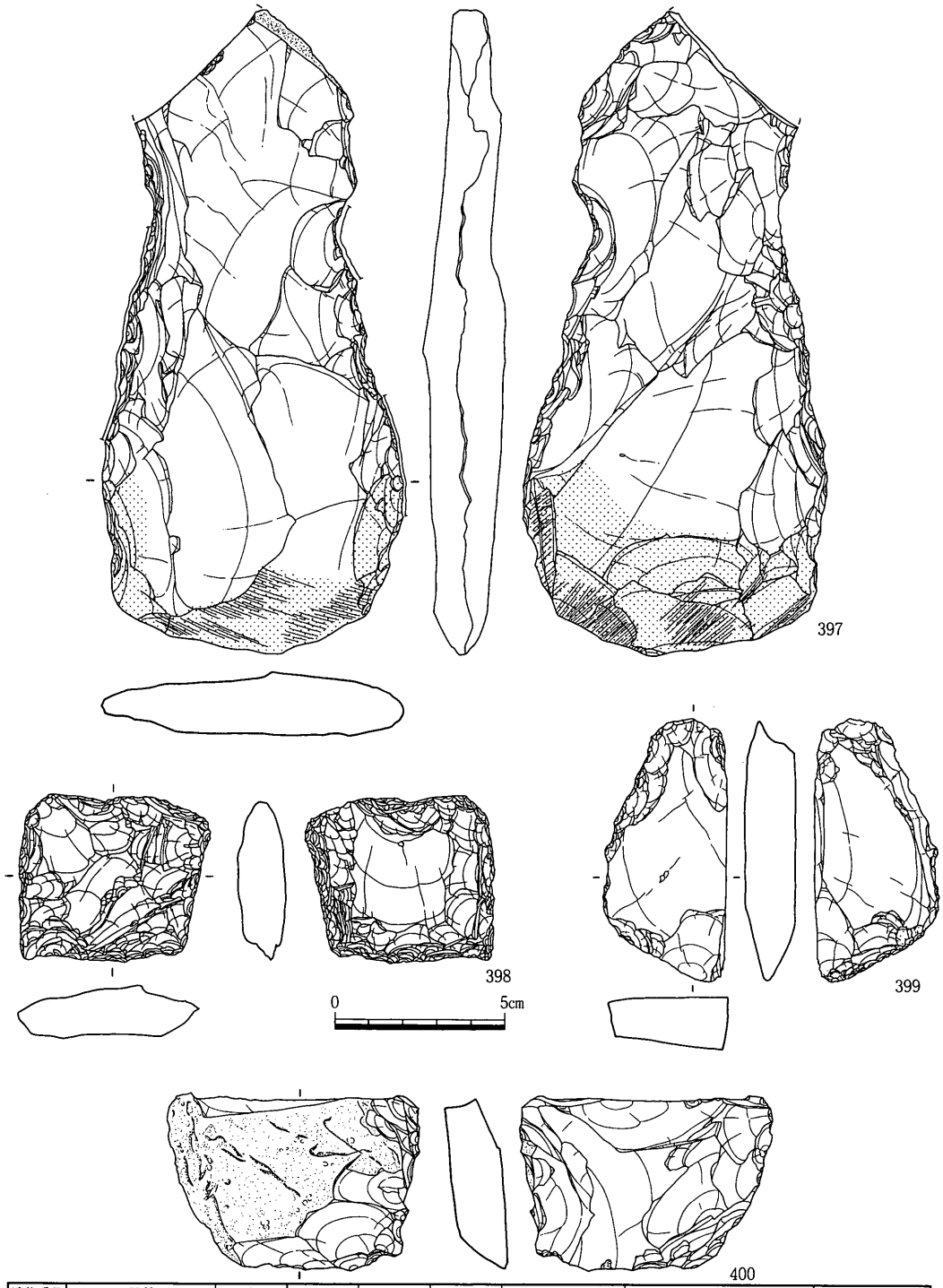
磨かれている。331・333・334・335はＶ期と考えられる。336は焼成後に内側から穿孔されている。外面は磨かれている。

337～361は壷である。337は口縁内面に半截竹管を押し引いて３重の文様を付けている。339は浅い刻み目が口縁端部に入れられる。340は胴部と頸部の境に斜め，横の順に木口で文様を押印している。341は刻み目をいれた木口を押しあて少し引いている。口縁にも刻み目が入る。342は口縁端部に竹管の先を押しあてる。頸部は内外面ともハケ目の上から疎らにヘラミガキする。344は頸部外面に木口による文様を２段つける。345も同じ部位にまとまりのない文様を木口によってつける。347は口縁上面内に貼り付け文・外に刺突文という構成で文様を飾っている。また口縁部下に穴を４ヵ所あける。348は頸部にも凹線がめぐる。350は頸部の穿孔は２つ単位で２ヵ所にあけられる。頸部と胴部に木口でヘラ



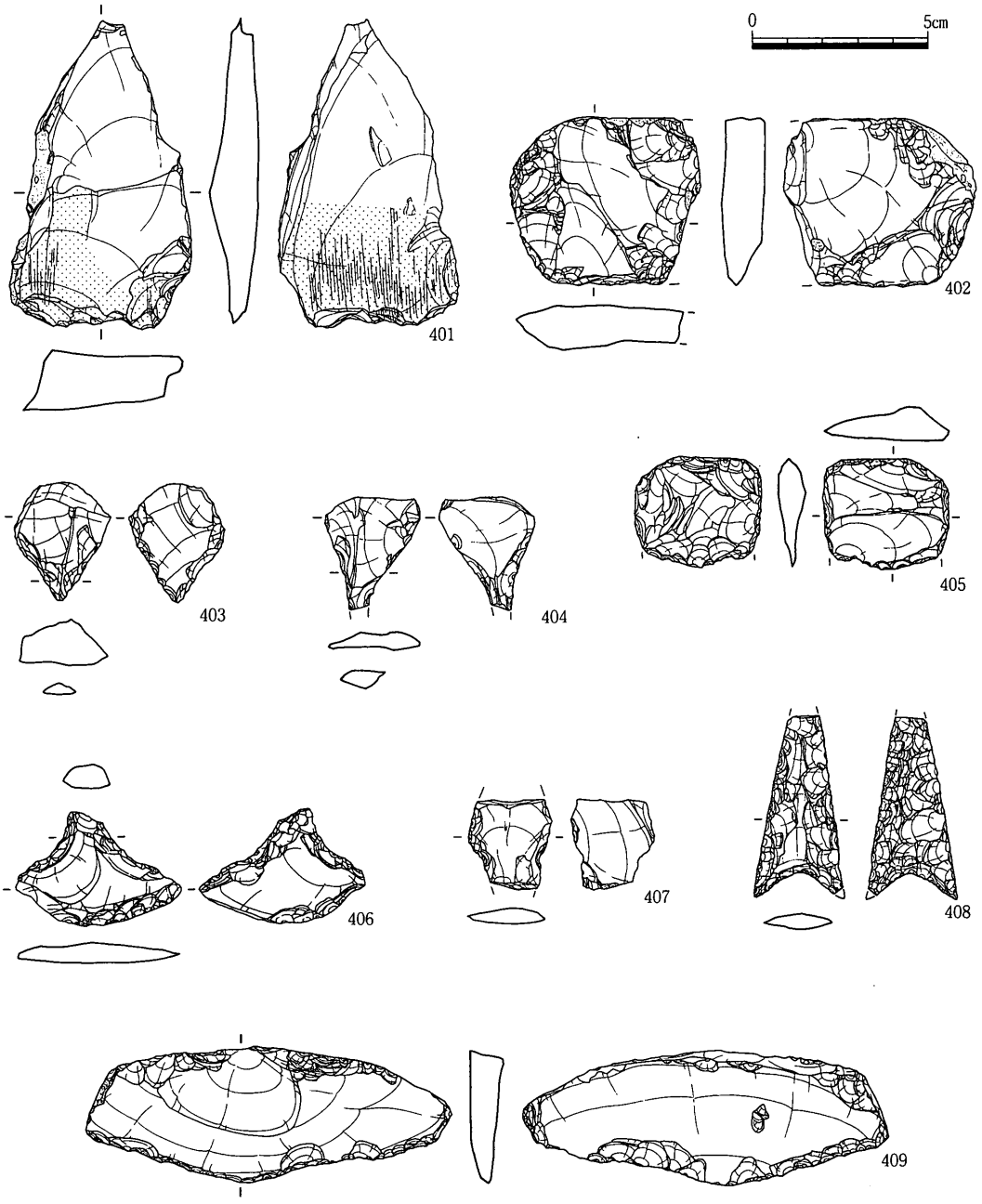
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
380	弥・鉢	29.0			中・普	良好	鈍い黄橙，黒	ナデ・ミガキ	ナデ・ハケ目	凹線	角閃石を含む
381	弥・鉢	41.2			細・普	良好	浅黄	ナデ	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ		
382	弥・鉢	11.1	9.5	5.5	中・普	良好	浅黄橙～黄灰	ハケ目→ナデ	ハケ目・ミガキ		
383	弥・鉢	13.3	7.2	5.3	粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ハケ目→ナデ		
384	弥・鉢	11.3	8.1	3.7	粗・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
385	弥・鉢			3.3	微・普	良好	橙	ナデ	ハケ目→板ナデ		
386	弥・鉢	13.0	8.2		中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
387	弥・鉢			3.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目・ナデ		
388	弥・鉢			9.6	中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		
389	弥・鉢			9.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		胎土は鈍黄～黄灰
390	弥・鉢			12.2	中・普	良好	灰黄，黄灰	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		
391	弥・蓋	15.8	6.1	6.2	中・普	良好	鈍黄橙～明褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		金雲母を含む
392	弥・紡錘車				微・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ	土器片転用？	
393	弥・製塩	11.3			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		金雲母を含む
394	弥・製塩			4.3	中・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ・ナデ	板ナデ・ナデ		
395	弥・製塩			3.6	中・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		
396	弥・製塩			4.3	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		

第335図　D区ＳＲ01出土遺物（18）（1／4）



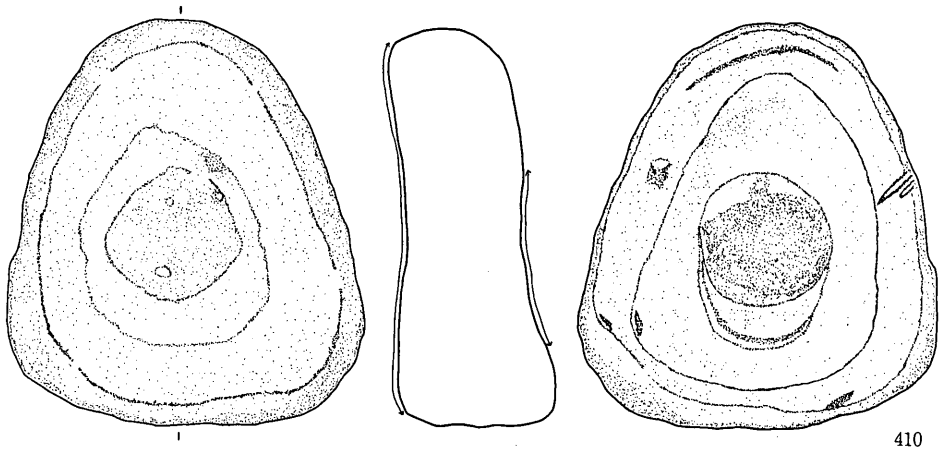
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
397	打製石斧	18.4	8.9	2.5	386	サヌカイト		
398	打製石斧	4.7	5.4	1.5	54	サヌカイト		
399	打製石斧	7.7	3.6	1.6	56	サヌカイト		
400	打製石斧	5.2	7.4	1.5	85	サヌカイト		

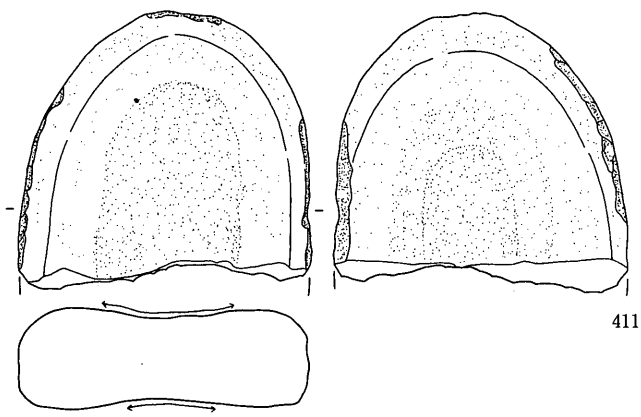
第336図　D区ＳＲ01出土遺物（19）（1／2）

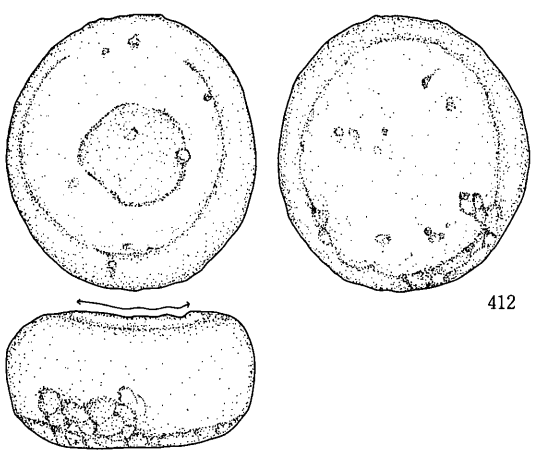


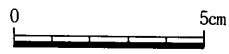
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
401	打製石斧	8.6	5.2	1.7	68	サヌカイト		
402	スクレイパー	5.4	4.7	1.4	45	サヌカイト		
403	石錐	3.3	2.6	1.5	9.8	サヌカイト		
404	石錐	2.9	2.2	0.5	3.7	サヌカイト		
405	打製石斧	3.6	3.1	0.9	10	サヌカイト		
406	石匙	4.7	3.3	0.7	9.6	サヌカイト		
407	石鏃	2.6	2.4	0.4	4.1	サヌカイト		
408	石鏃	4.5	2.4	0.4	4.4	サヌカイト		
409	スクレイパー	10.2	3.8	1.2	47	サヌカイト		

第337図　D区ＳＲ01出土遺物（20）（1／2）



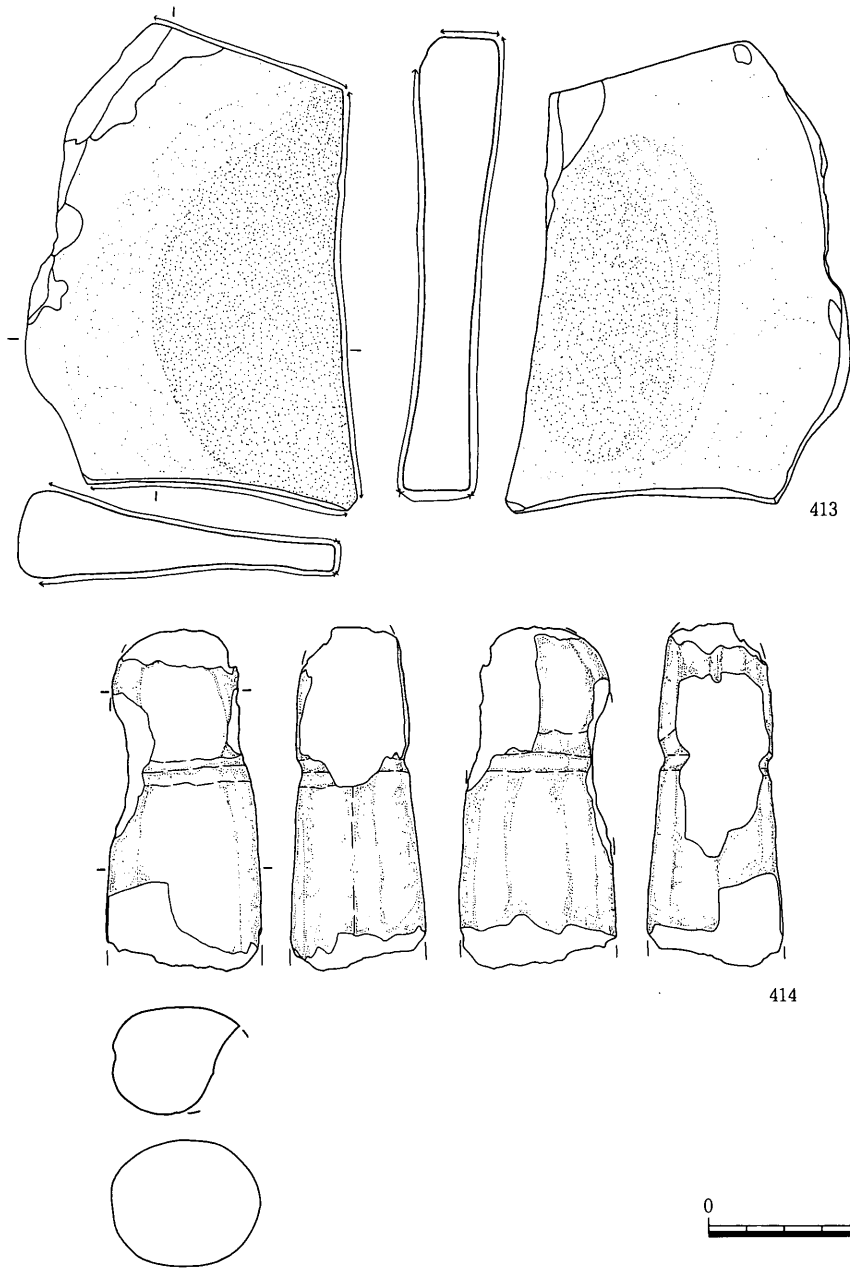






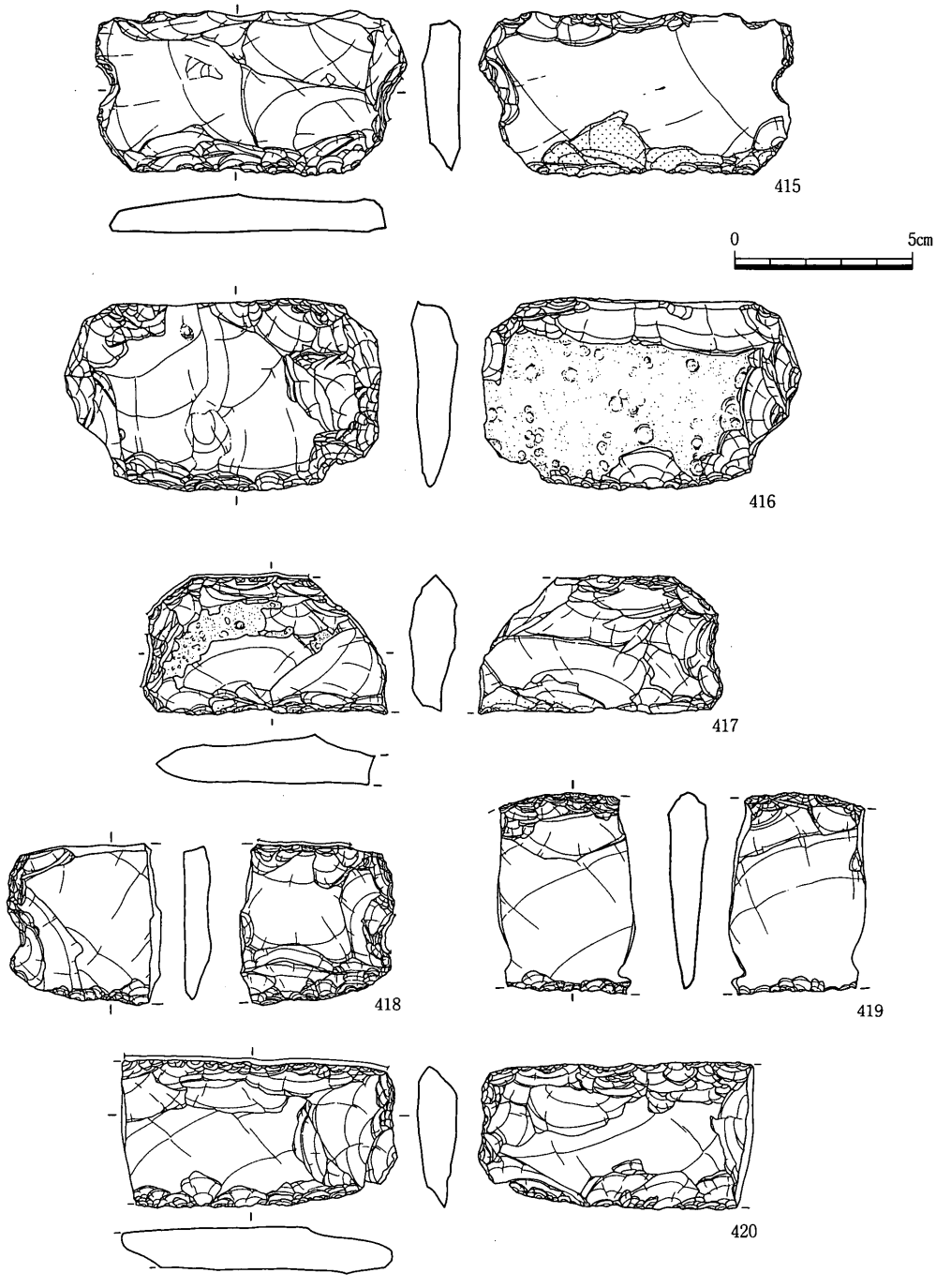
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
410	石皿	10.2	9.4	4.1	612	砂岩		
411	石皿・敲き石	7.1	7.7	2.6	247	砂岩		
412	すり石	7.2	6.6	3.6	268	砂岩		

第338図　D区ＳＲ01出土遺物（21）（1／2）



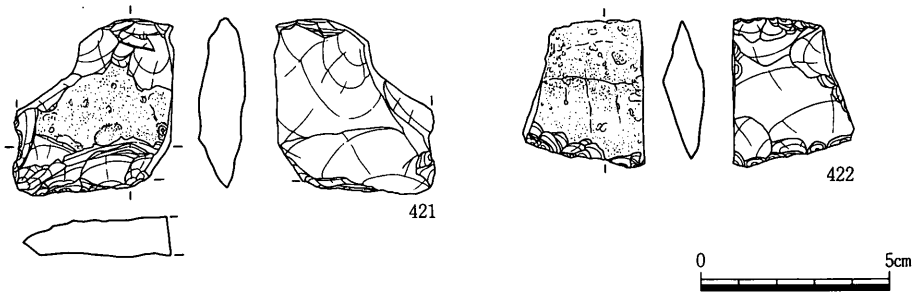
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
413	砥石	8.3	11.9	2.4	279	砂岩		
414	石棒	9.0	4.1	3.1	195	結晶片岩		

第339図　D区ＳＲ01出土遺物（22）（1／2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
415	打製石包丁	8.8	4.3	1.1	57	サヌカイト		
416	打製石包丁	8.9	5.1	1.3	73	サヌカイト		
417	打製石斧	6.9	3.9	1.5	49	サヌカイト		
418	打製石包丁	4.3	4.5	0.8	23	サヌカイト		
419	打製石包丁	3.8	5.5	1.0	33	サヌカイト		
420	打製石包丁	7.7	4.2	1.2	56	サヌカイト		

第340図　D区ＳＲ01出土遺物（23）（1／2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
421	石包丁	4.3	3.1	1.0	26	サヌカイト		
422	石包丁	3.2	3.7	1.1	14	サヌカイト		

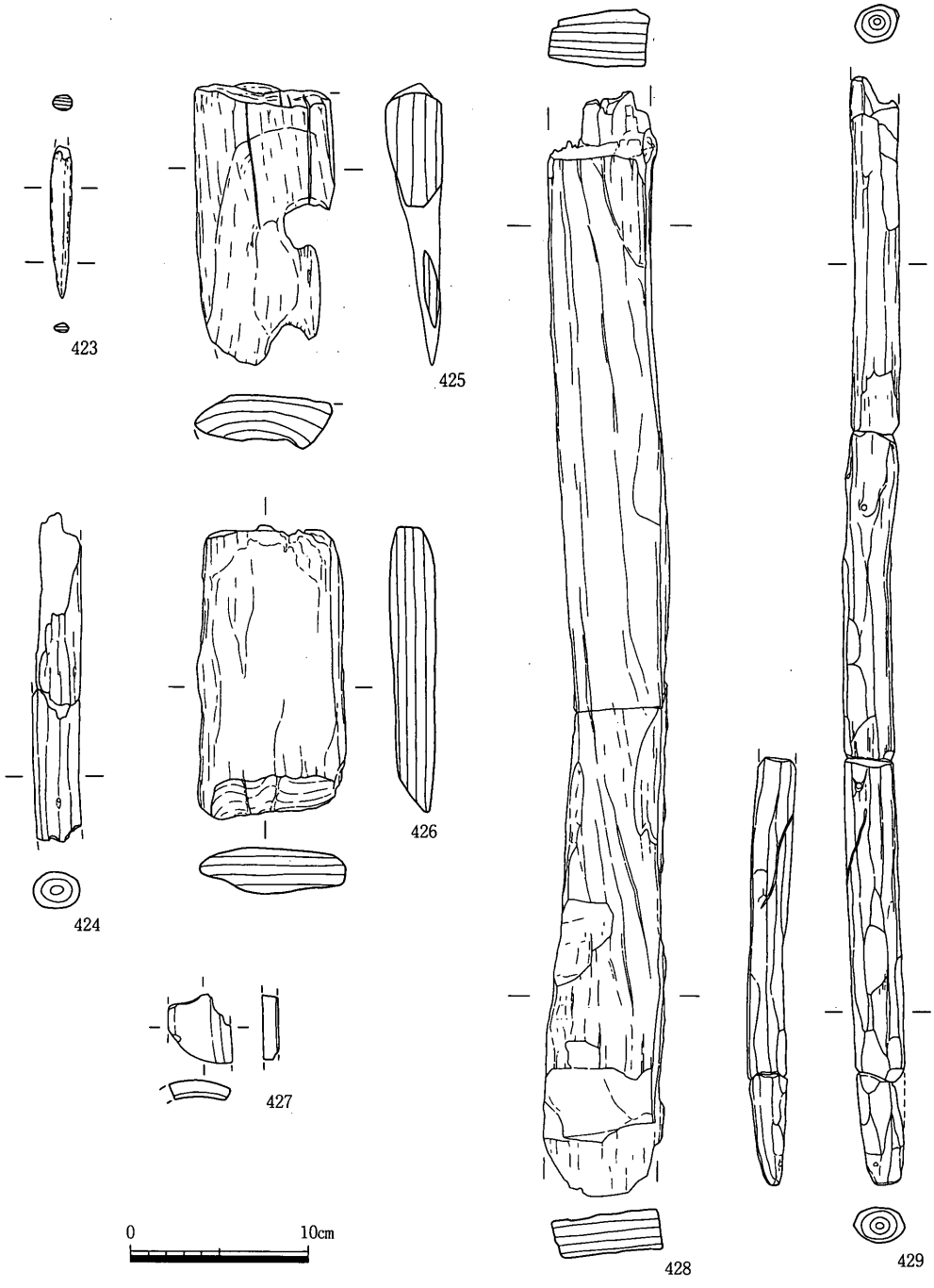
第341図　D区ＳＲ01出土遺物（24）（1／2）

圧痕文をつける。353は大型の壷である。胴最下部をヘラミガキする。354は口頸部が短く直立する。肩が上に張り頸部が少し胴にめりこんだ形になる。類例をあまりみない。355と391はともにほとんど完形で接近した位置から出土した。356は口縁内側に内上方にむかって突きだす突帯がめぐる。類例をみないが，口縁端部の形態から県内産と考えられる。359～361は無頸壷である。359は穿孔がなされる。360は口縁端部と外面に櫛描文を描く。337～339・341・342・346～348・350・356・359～361はⅣ期，343・345・351・353はⅤ期前半に属すると考えられる。

362～379は高杯である。363の内面には放射状にハケ目が引かれている。366は杯部内外面とも方形を描くようにヘラミガキされている。367は外面ヘラケズリしている。372は椀形の杯部である。373は脚部外面もヘラミガキする。362～364・369・373～377はⅣ期，365・367はⅤ期初頭まで下る可能性がある，366・368・370・371・378・379はⅤ期前半と考えられる。372は最上層から出土したが古墳時代中期のものの可能性がある。

380～390は鉢である。小型の鉢が多い。381は内面ヘラケズリの後ヘラミガキしている。390は大型の鉢の脚であろう。380・390はⅣ期，381～389はⅤ期前半に属すると考えられる。

397～422は石器である。398・400～403・405～412は縄文時代後期土器のみを出土する土層から，413・415～417はＳＤ06とつながる溝の可能性のある流れから出土した。397は基部に両側から抉りを入れる。両面に斜め方向の擦痕が残る。398は正方形で４側面とも両面から丁寧に調整が加えられる。401は両面に刃部に直角に擦痕がつく。また打撃のためか刃部が少し欠けている。405は小さいが４側面とも両面から調整を加えている。410・411は両面を摺り面として使用している。また411は側面の３ヵ所に敲打痕が残る。412は



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
423	用途不明品	8.1	1.1	0.8	板目		
424	農具等の柄	18.0	2.7	2.2	芯持		
425	鍬	15.1	7.7	3.2	板目	表面の風化著しく全体に軟かい	
426	板材	16.2	8.2	2.6	板目		
427	用途不明品	3.7	3.5	1.0	板目		
428	板材	59.9	6.4	3.3	板目		
429	杭？	60.6	2.9	2.3	芯持		

第342図　D区ＳＲ01出土遺物（25）（1／4）

片面を摺り面として使用している。413は不整な面をのぞく５面が研ぎ面として使用され，いずれも大きくすり減っている。

423～429は弥生時代の流れから出土した。424は農具等の柄であろう。425は平面図右が人為的に穿孔されている可能性がある。427は刳りものの破片の可能性がある。

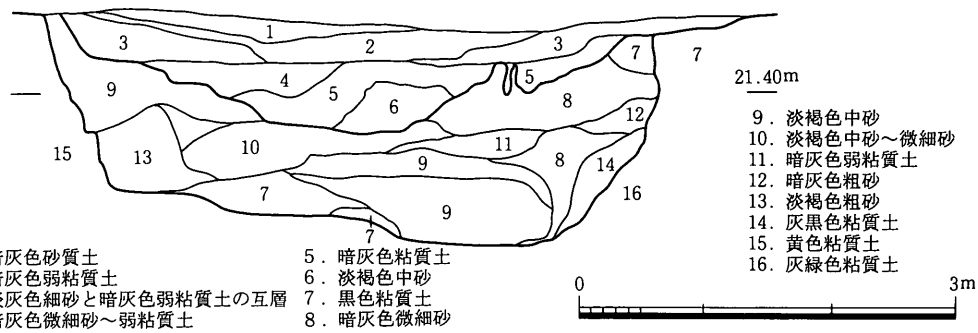
ＳＲ02（第343～366図，図版48）

Ｄ２区からＤ３区にかけて検出した。Ｄ２区内ではほぼ北から南に流れ，調査区の境で急に西に振る。その後南西に再び流れをかえ調査区外にいたる。ＳＲ02は弥生時代Ｖ期と中世以降の２つの時期の川が重なっており，埋土もそれに対応して大きく上下２層に分かれる。上層の川はＤ３区で流れを西から南西に振ったところで北西方向へ分流を派生する。深くはないが，流れが急であったため方向をかえることのできなかった水があふれていったことが考えられる。埋土は上層は粘質土が主体でその中に砂が混じる。下層は微細～中砂の級化層理がみられ黒色の粘質土系は少ない。上層は下層に比べ流れが遅かったとも考えられるが，とはいえＤ２区では上層の埋土中に一抱えもある多量の塊石とともに石塔の部材などが流れこんでおり，激流が走ることもあったことがうかがえる。川の深さはＤ３区南端で1.7mである。Ｄ２区では湧水のため深さ2.3mまでしか調査できなかった。

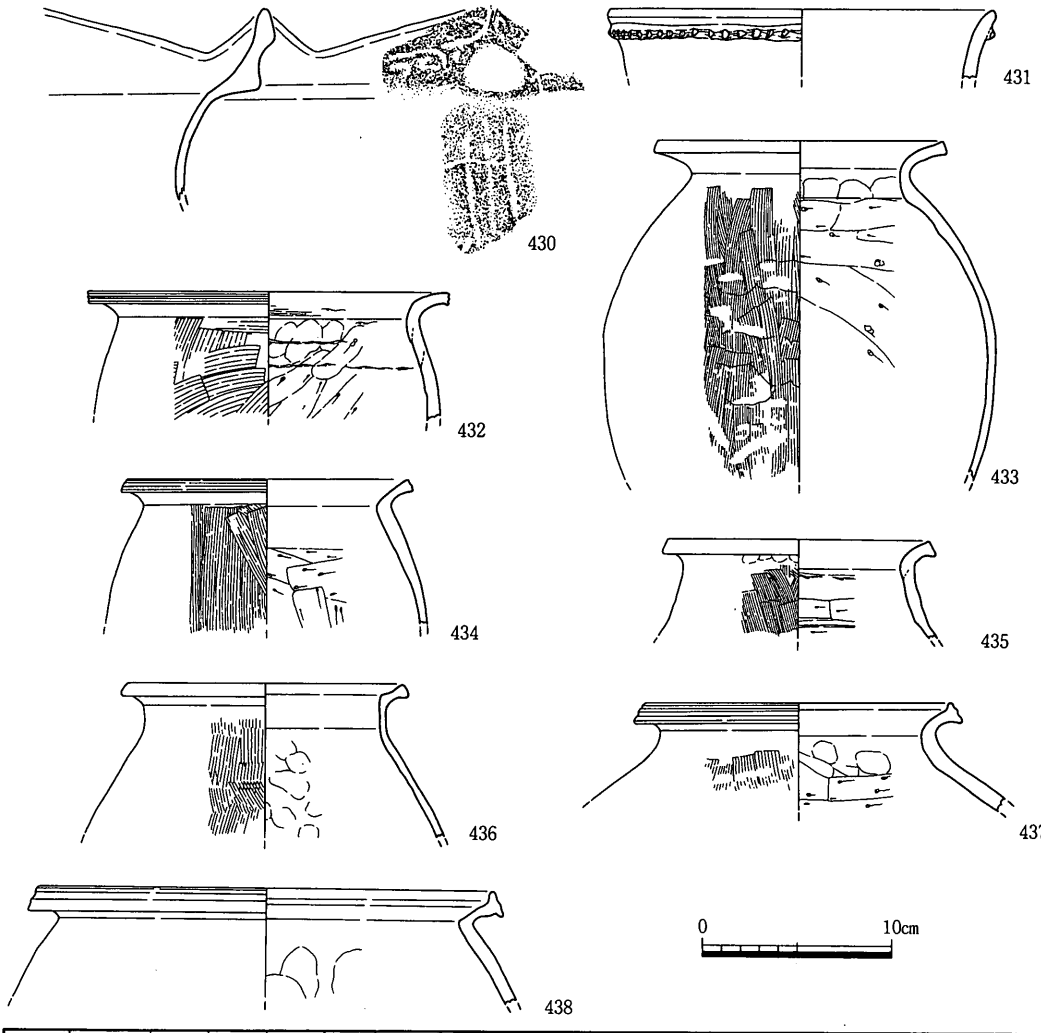
出土遺物には縄文時代～近世の土器のほか多量の瓦片や木器・石器がある。

430は縄文時代後期の土器で波状口縁の波頂部下に円形のくぼみを作り，そのまわりに渦を基調としたような文様を描いている。県内永井遺跡のＩ期に属する。431は縄文時代晩期の刻み目突帯文土器である。

432～502は弥生土器である。432～436は口縁端部に平坦面をもつ甕である。437～443は口縁端部が上に向かってのびる甕である。内面上半にはヘラケズリは認められない。441



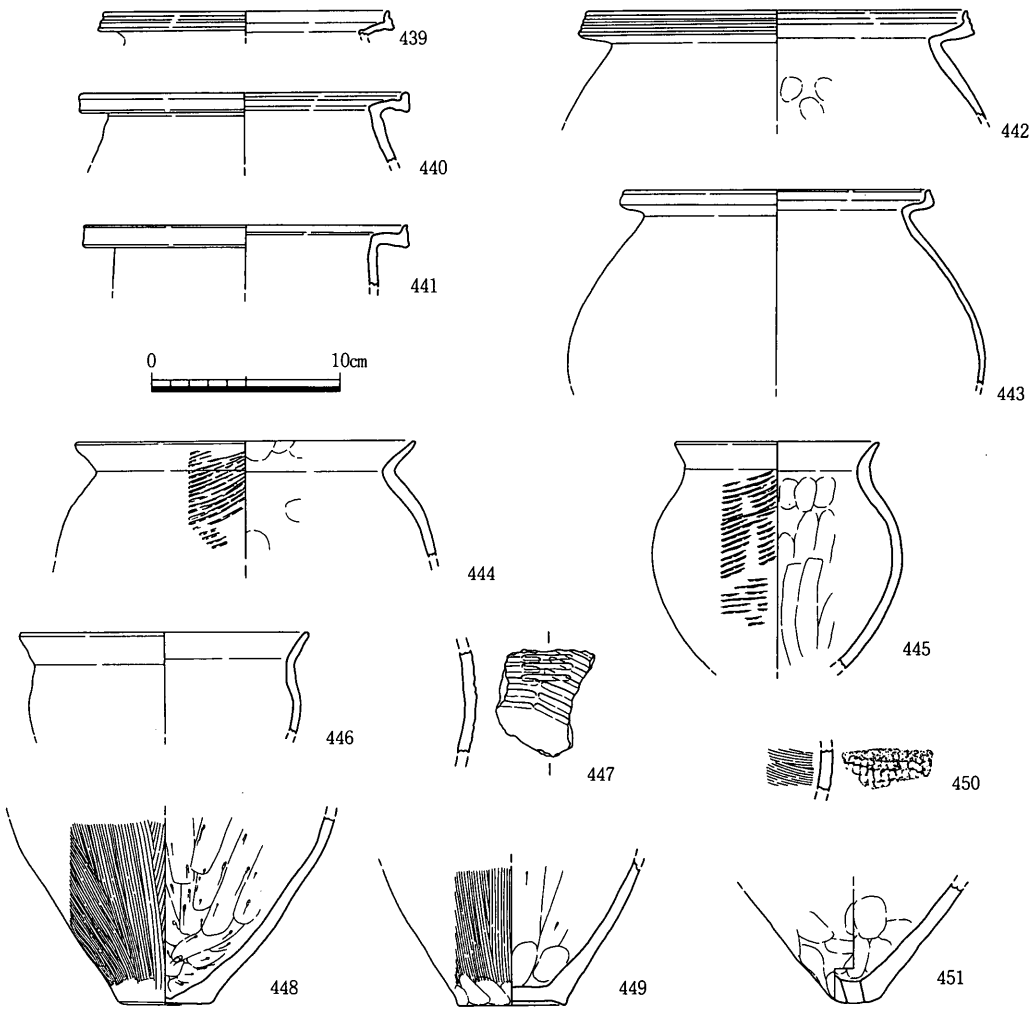
第343図　Ｄ区ＳＲ02断面図（1／60）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
430	鉢・深鉢				中・多	良好	浅黄橙～橙	ナデ	ナデ	ヘラ描沈線文，波状口縁	
431	鉢・深鉢	20.0			中・普	良好	浅黄～黒，黒	ナデ	ナデ	貼り付け突帯	
432	弥・甕	19.0			中・普	良好	橙～黒，明褐	ナデ・ハケ目	ｹｽﾞﾘ・ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ	沈線	金雲母・角閃石
433	弥・甕	15.0			粗・多	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母を含む
434	弥・甕	14.7			中・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	凹線	
435	弥・甕	14.4			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母を含む
436	弥・甕	14.6			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
437	弥・甕	16.0			中・普	良好	黄橙，褐灰	ハケ目→ナデ	ケズリ・ナデ	沈線	角閃石を含む
438	弥・甕	23.8			中・普	良好	にぶい黄橙	不明	ナデ		金雲母を含む

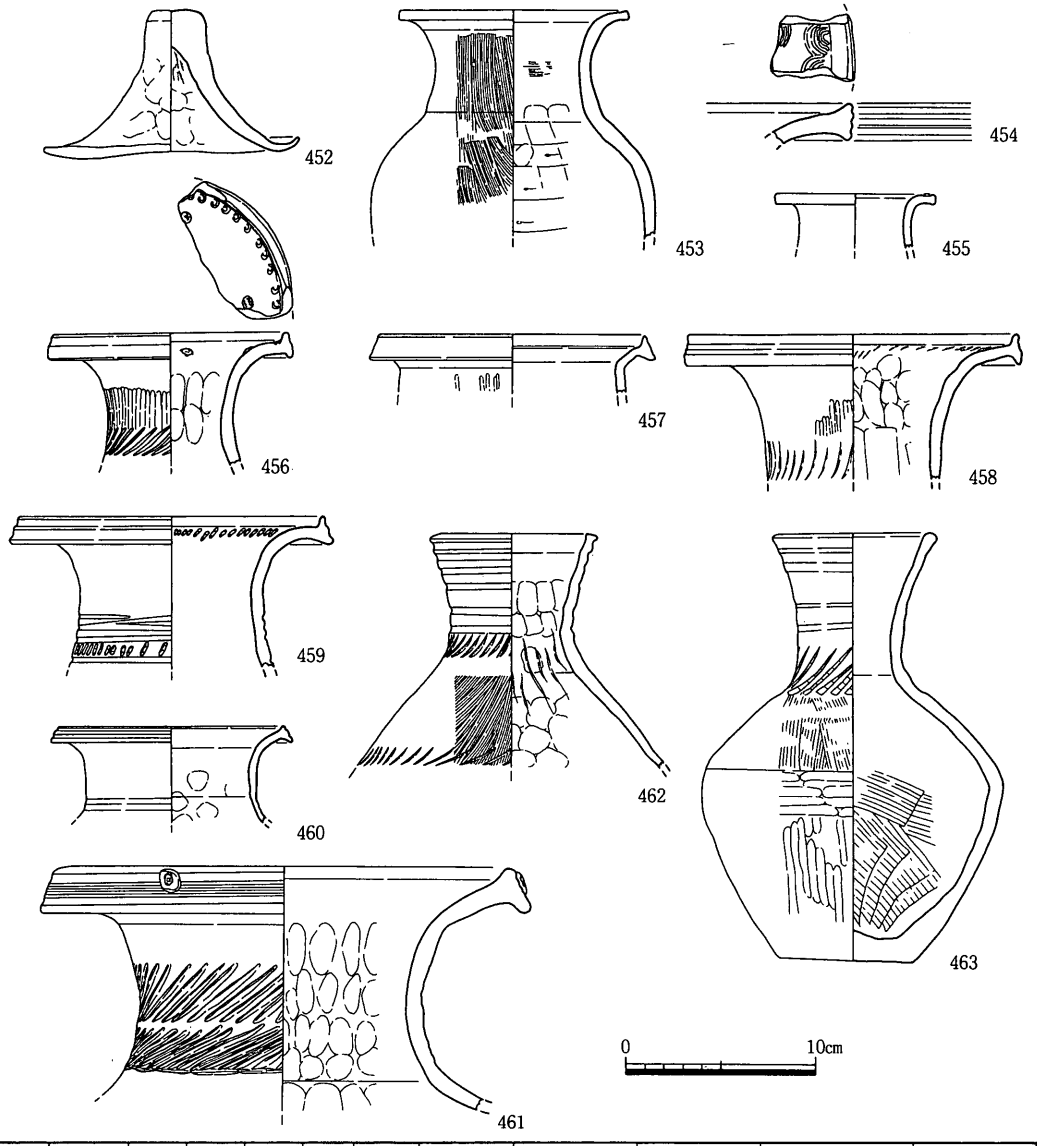
第344図　D区ＳＲ02出土遺物（1）（1／4）

は口縁から下がふくらまない。壷の頸部になる可能性がある。444～446は口縁端部が丸い甕である。444・445は外面に叩き痕が残る。445は内面をヘラケズリしてない。446は胴の張りが弱く鉢の可能性もある。447は甕の胴部の破片である。外面は叩き痕が残り，煤が付着している。450は甕の胴部と考えられる。内面に横方向へのハケ目が引かれ，外面は



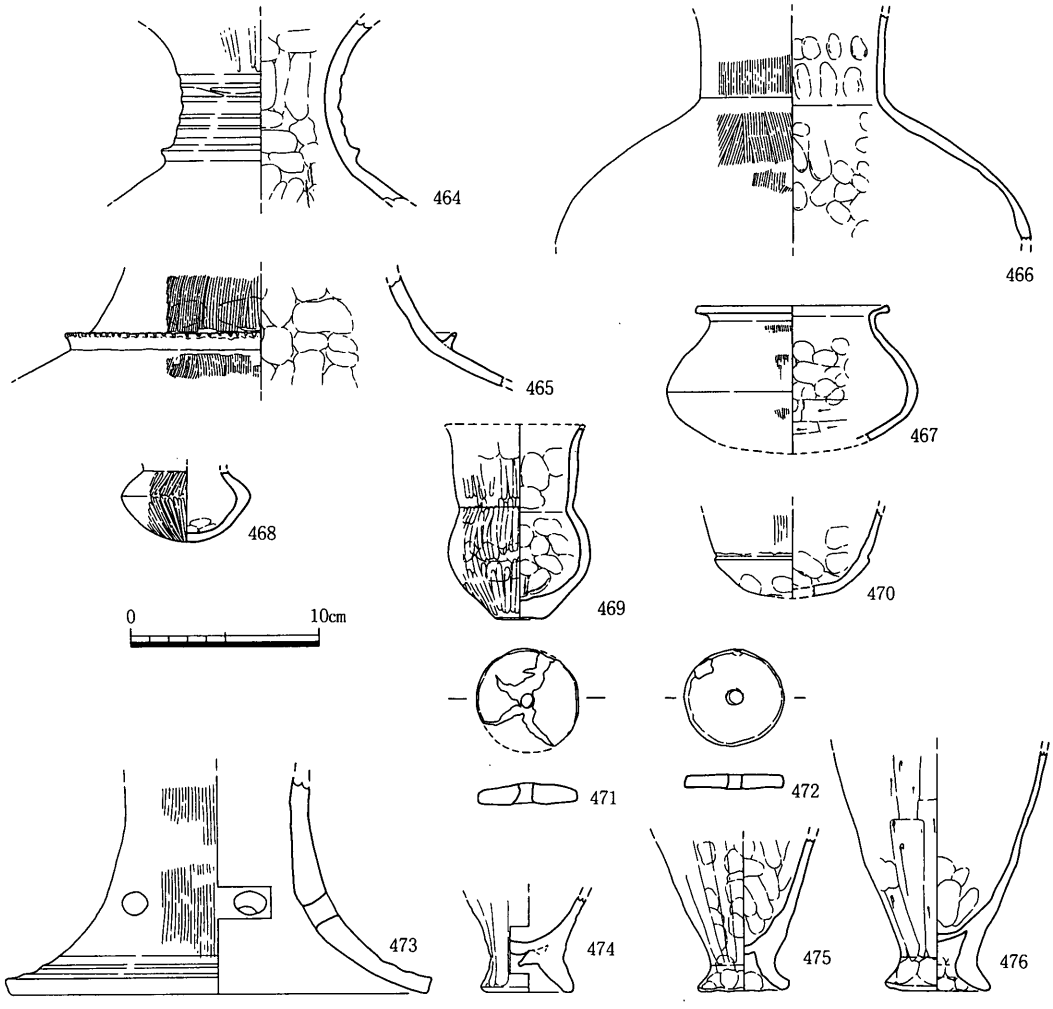
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
439	弥・甕	15.0			微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
440	弥・甕	17.0			粗・普	良好	鈍い黄橙～黒	ナデ	ナデ		
441	弥・甕	17.0			粗・普	良好	鈍い褐～赤褐	ナデ	ナデ		
442	弥・甕	20.8			中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ	沈線文	金雲母を含む
443	弥・甕	16.1			粗・普	良好	明赤褐～灰褐	ナデ	ナデ		
444	弥・甕	18.0			細・普	良好	鈍い黄褐，黒	ナデ・叩き	ナデ		金雲母・角閃石含
445	弥・甕	9.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石含
446	弥・甕	15.0			粗・普	良好	灰黄～黒	ナデ	ナデ・ケズリ		
447	弥・甕				粗・普	良好	鈍黄橙～黒褐	叩き	ナデ		煤付着
448	弥・甕			5.0	粗・普	良好	灰黄，浅黄	ハケ目・ナデ	ケズリ		
449	弥・甕			5.6	中・普	良好	明赤褐	ハケ目・ナデ	ケズリ		金雲母を含む
450	不明				細・普	良好	にぶい褐	ﾊｹ目・格子目叩き	ハケ目		韓式系土器？
451	弥・甑			2.2	中・普	良好	橙，橙～黒	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石含

第345図　D区ＳＲ02出土遺物（2）（1／4）



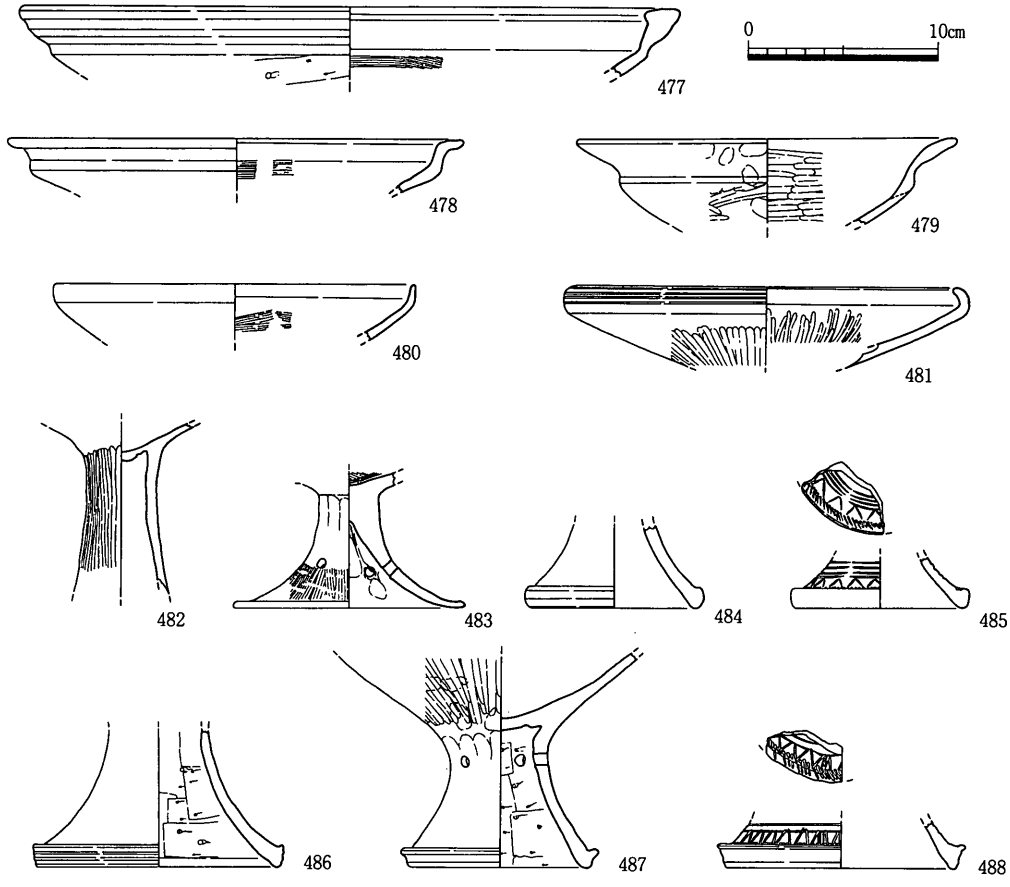
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
452	弥・甕		7.3	13.6	粗・普	良好	浅黄～灰褐	ナデ	ナデ		金雲母を含む
453	弥・壺	12.2			粗・多	良好	淡黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
454	弥・壺				中・普	良好	黒褐，褐灰	ナデ	不明	沈線，櫛描き波状文	
455	弥・壺	8.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
456	弥・壺	12.2			細・普	良好	橙，浅黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ	ヘラ圧痕，竹管，貼付	胎土褐灰，角閃石
457	弥・壺	14.0			中・普	良好	灰黄	ナデ・ミガキ	ナデ		
458	弥・壺	17.7			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ	ヘラ圧痕文	金雲母を含む
459	弥・壺	16.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線，ヘラ圧痕文	
460	弥・壺	12.8			細・普	良好	褐，褐灰	ナデ	ナデ	凹線，沈線	角閃石を含む
461	弥・壺	23.5			粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	ﾍﾗ圧痕，沈線，貼付文	金雲母・角閃石
462	弥・壺	8.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ	沈線文，ヘラ圧痕文	金雲母を含む
463	弥・壺	8.6	22.3	7.0	中・普	良好	灰白	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ナデ	ヘラ圧痕文	

第346図　D区ＳＲ02出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
464	弥・壺				粗・普	良好	橙	ミガキ・ナデ	ナデ	凹線	金雲母，胎土は灰
465	弥・壺				中・普	良好	浅黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ	刻み目突帯	胎土は灰
466	弥・壺				中・普	良好	明褐，赤褐	ハケ目	ナデ		金雲母を含む
467	弥・壺	10.2			粗・普	良好	褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母を含む
468	弥・壺				中・普	良好	にぶい橙	ミガキ	ナデ		金雲母を含む
469	弥・壺	7.8	10.2	2.8	細・普	良好	明褐	ミガキ・ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
470	弥・小丸				中・普	良好	明赤褐	ハケ目・ナデ	ナデ		角閃石を含む
471	弥・紡錘車				中・普	良好	灰白～黄灰	ナデ	ナデ		
472	弥・紡錘車				微・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ		
473	弥・器台			22.4	粗・多	良好	明黄褐，灰白	ハケ目・ナデ	ナデ	凹線文，穿孔は3ヶ所	金雲母を含む
474	弥・製塩			4.6	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ		
475	弥・製塩			4.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
476	弥・製塩			5.5	中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母を含む

第347図　D区ＳＲ02出土遺物（4）（1／4）

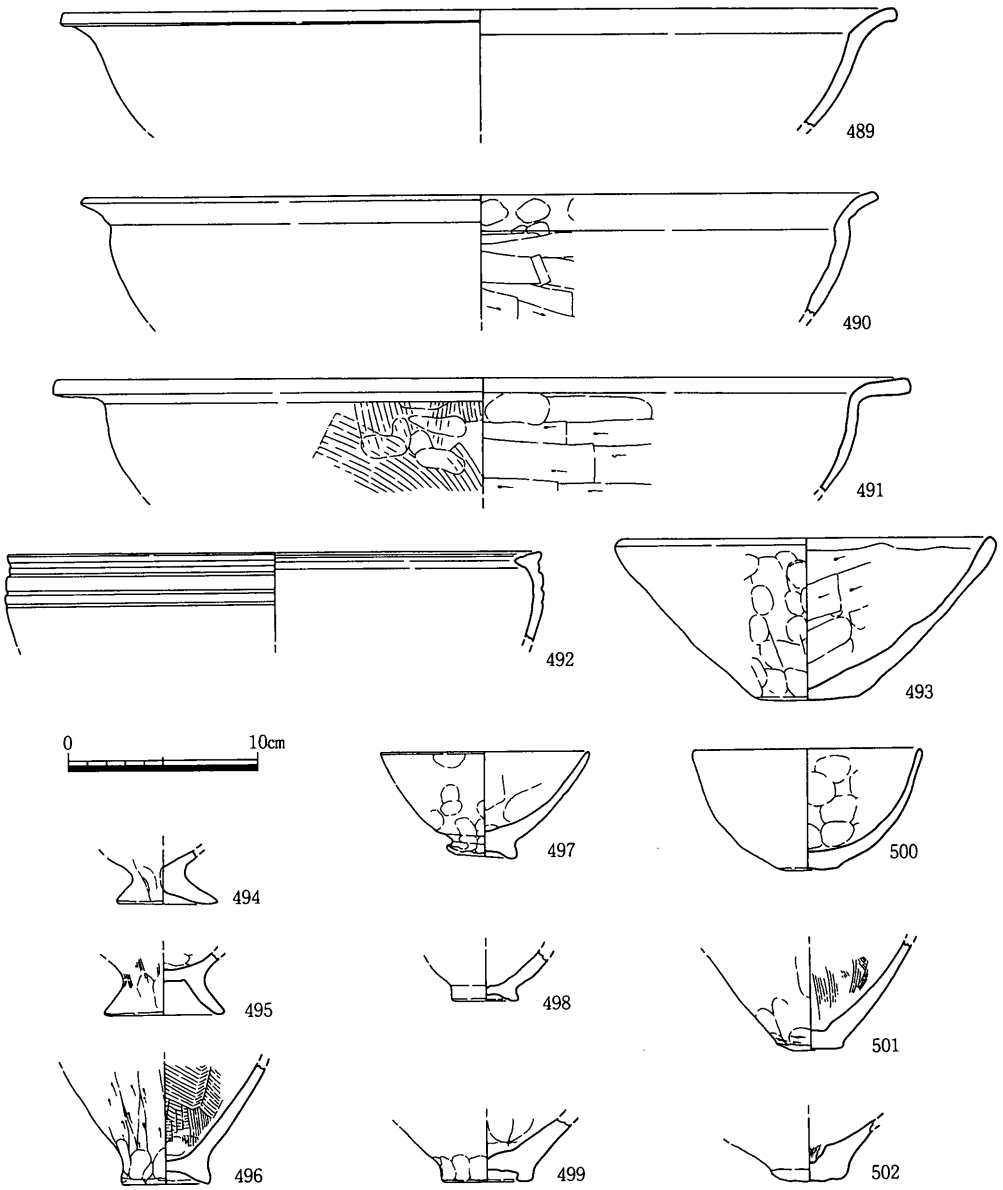


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
477	弥・高杯	34.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		
478	弥・高杯	24.0			中・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ・ハケ目		角閃石を含む
479	弥・高杯	20.0			粗・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
480	弥・高杯	19.0			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ハケ目		
481	弥・高杯	20.0			中・普	良好	明赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	凹線	
482	弥・高杯				中・普	良好	橙，暗赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ		
483	弥・高杯			12.2	中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	穿孔は6ヶ所	金雲母を含む
484	弥・高杯			8.4	粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
485	弥・高杯			9.2	中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ	沈線文，ヘラ圧痕文	
486	弥・高杯			12.6	粗・普	良好	黄褐，鈍黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ	凹線	
487	弥・高杯			9.3	粗・普	良好	黄灰，黒	ミガキ・ナデ	ナデ・ケズリ		
488	弥・高杯			13.0	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	板ナデ	鋸歯文	

第348図　D区ＳＲ02出土遺物（5）（1／4）

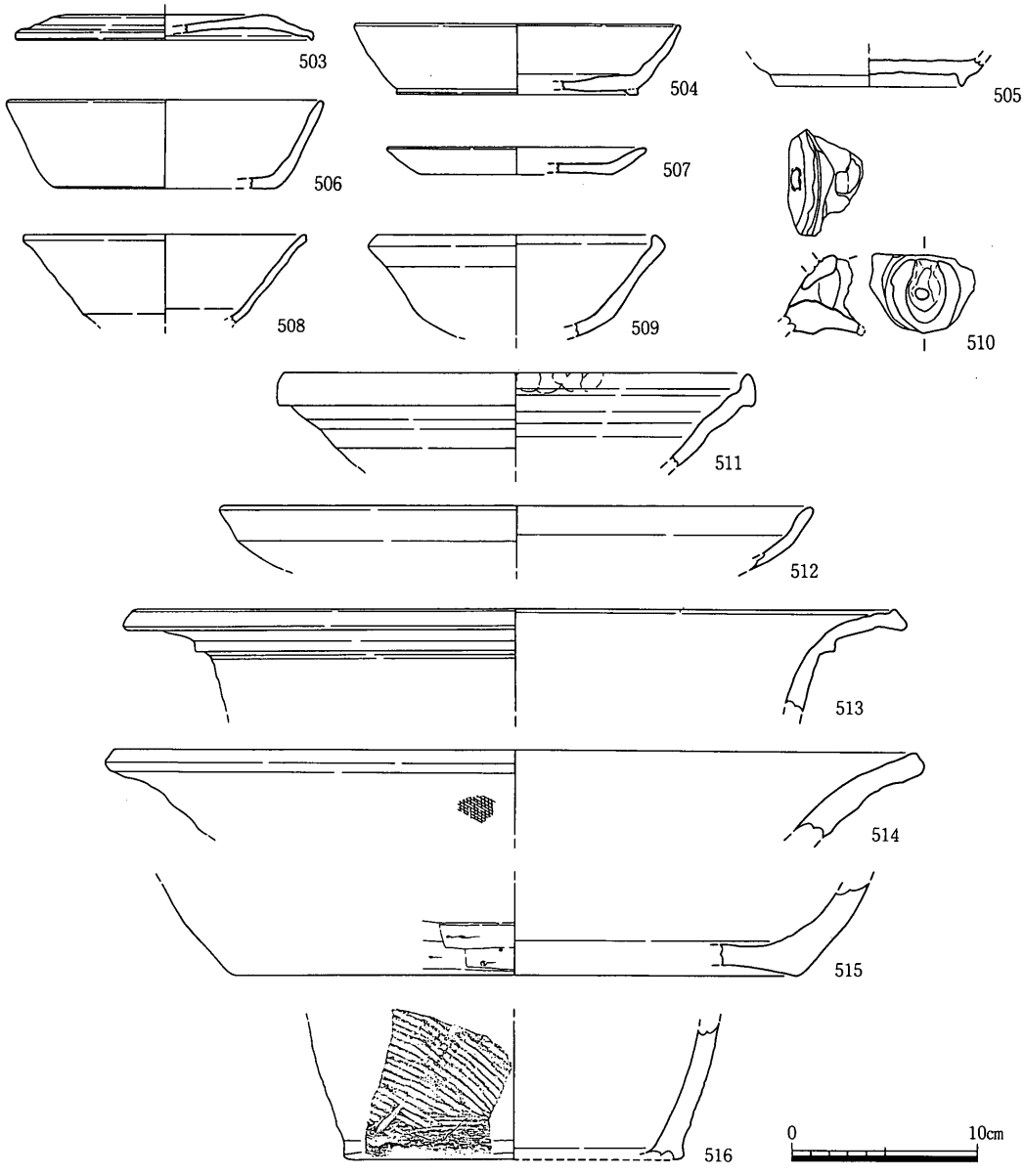
格子目の叩きが残る。また外面の叩き目のついてない部分にはハケ目の痕がみられる。弥生土器のみを出土する土層から出土したが，県内の弥生土器には格子目の叩きはつけられない。451は尖底の甑である。437～443はⅣ期，432～436はⅤ期前半，444～447はⅤ期後半に属すると考えられる。

452は上部はナデられ接合痕も認められないため，高杯の脚でなく蓋と考えた。裾は手でひねり曲げられたように見え，全体に稚拙な作りである。Ⅴ期に属する。



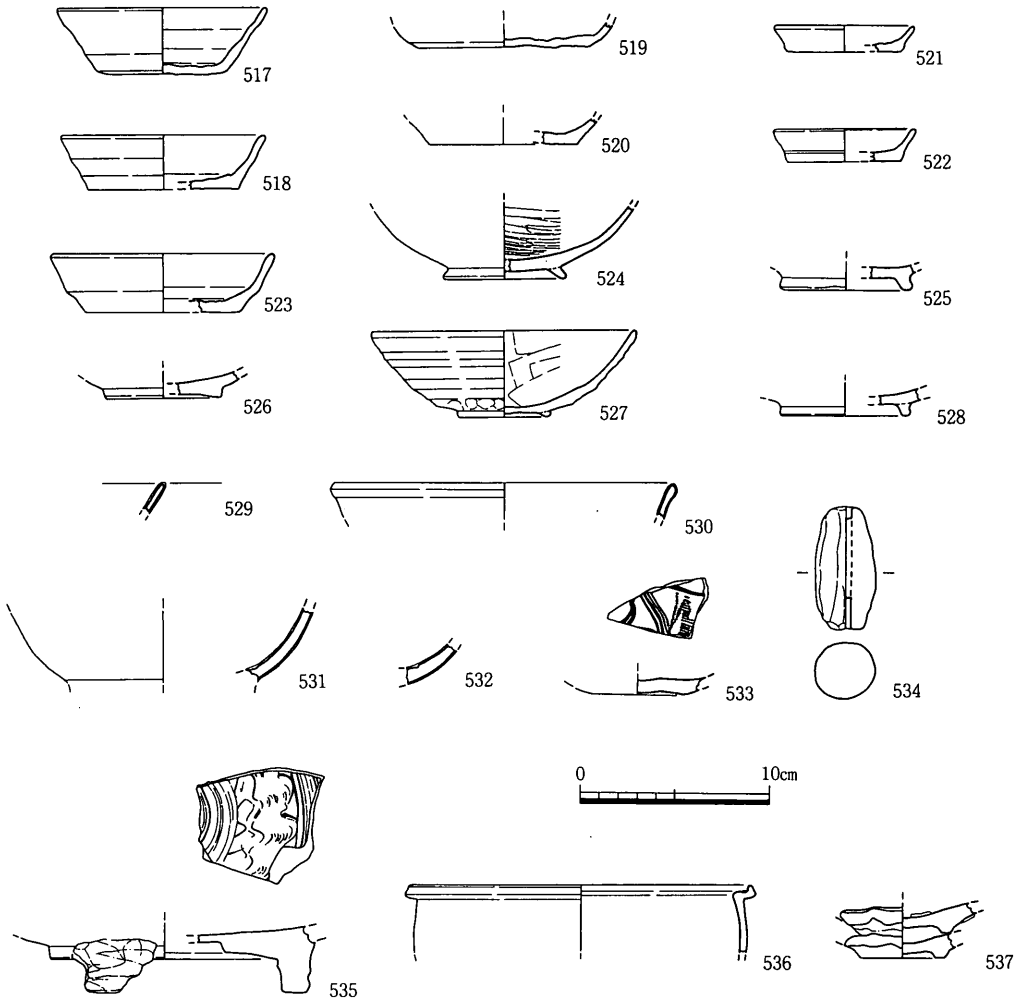
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
489	弥・鉢	44.0			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
490	弥・鉢	42.0			粗・普	良好	灰白	不明	板ナデ・ケズリ		
491	弥・鉢	45.2			粗・普	良好	灰白～黒	ハケ目→ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ケズリ・ナデ		
492	弥・鉢	28.2			中・普	良好	橙，黒褐	ナデ	ナデ		
493	弥・鉢	20.1	8.6	5.5	粗・普	良好	浅黄橙～黒	ナデ	ナデ・ケズリ		
494	弥・鉢			5.3	中・普	良好	橙～明赤褐	ナデ	ナデ		
495	弥・鉢			6.4	粗・普	良好	橙～鈍い黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		金雲母，胎土は灰
496	弥・鉢			4.6	細・普	良好	浅黄	ケズリ・ナデ	ハケ目・ナデ		
497	弥・鉢	11.0	5.5	3.7	中・普	良好	鈍い黄橙，橙	ナデ	ナデ		
498	弥・鉢			3.4	粗・普	良好	灰白，鈍黄橙	ナデ	ナデ		
499	弥・鉢			4.8	粗・普	良好	黄橙，橙	ナデ	ナデ		
500	弥・鉢	11.9	6.3	3.2	中・普	良好	にぶい黄橙	不明	ナデ		
501	弥・鉢			3.5	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ハケ目→ナデ		
502	弥・鉢			3.8	粗・普	良好	鈍い赤褐～黒	ナデ・叩き	板ナデ		金雲母を含む

第349図　D区ＳＲ02出土遺物（6）（1／4）



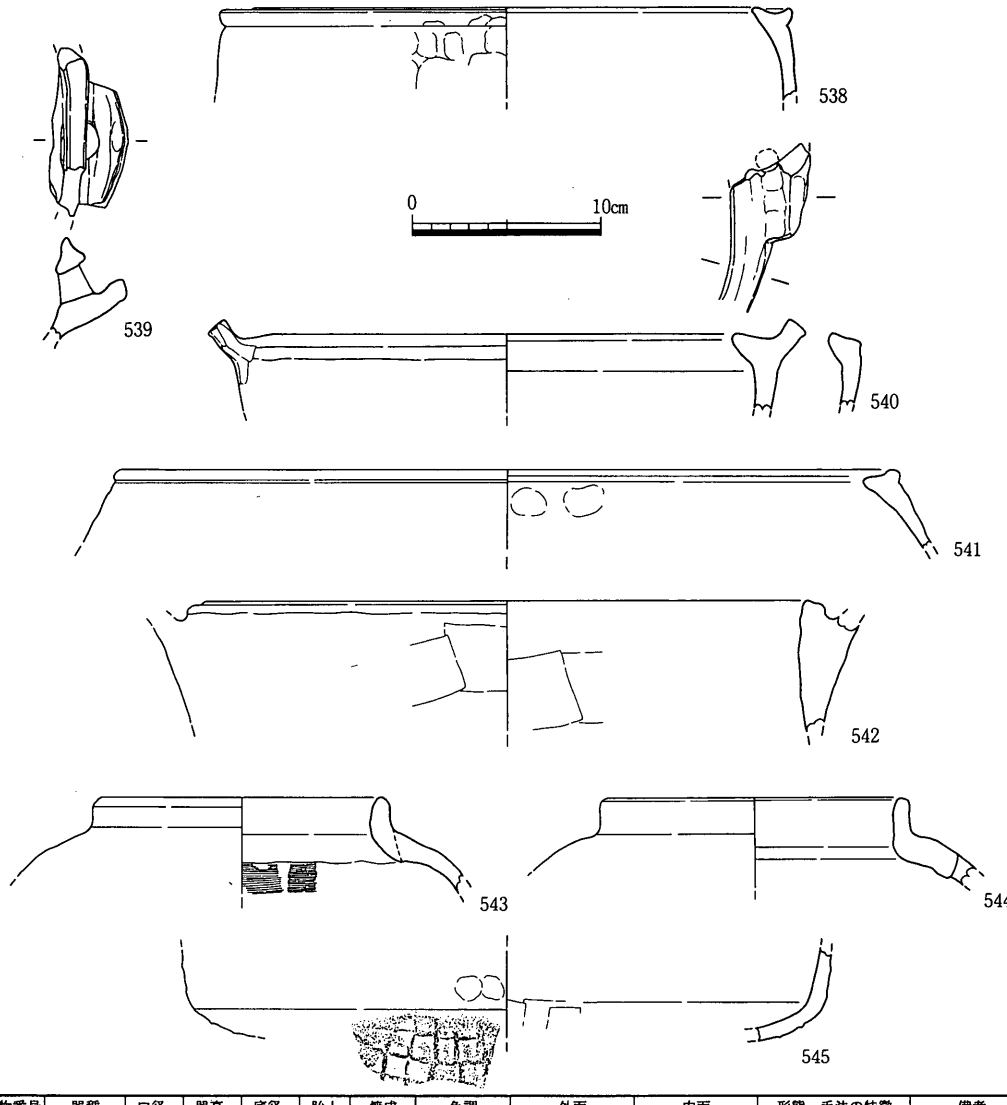
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
503	須・杯蓋	16.0			粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
504	須・高台杯	17.6	3.7	13.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
505	須・高台杯	10.5			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
506	須・杯	17.0	4.6	12.0	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		重ね焼きの痕
507	須・皿	13.8	1.4	10.3	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
508	須・椀	15.2			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
509	須・鉢	14.9			細・普	良好	ｵﾘｰﾌﾞ灰・灰	ナデ	ナデ		搬入品？
510	須・水注				中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
511	須・こね鉢	25.8			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		東播系？
512	須・鉢	32.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
513	須・甕	42.0			微・普	良好	暗青灰，灰	ナデ	ナデ		
514	須・甕	44.0			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
515	須・甕			30.2	粗・普	良好	橙，黄灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
516	須・甕			18.4	微・普	良好	暗灰，灰白	叩き・ナデ	ナデ		胎土は灰～鈍い褐

第350図　D区ＳＲ02出土遺物（7）（1／4）



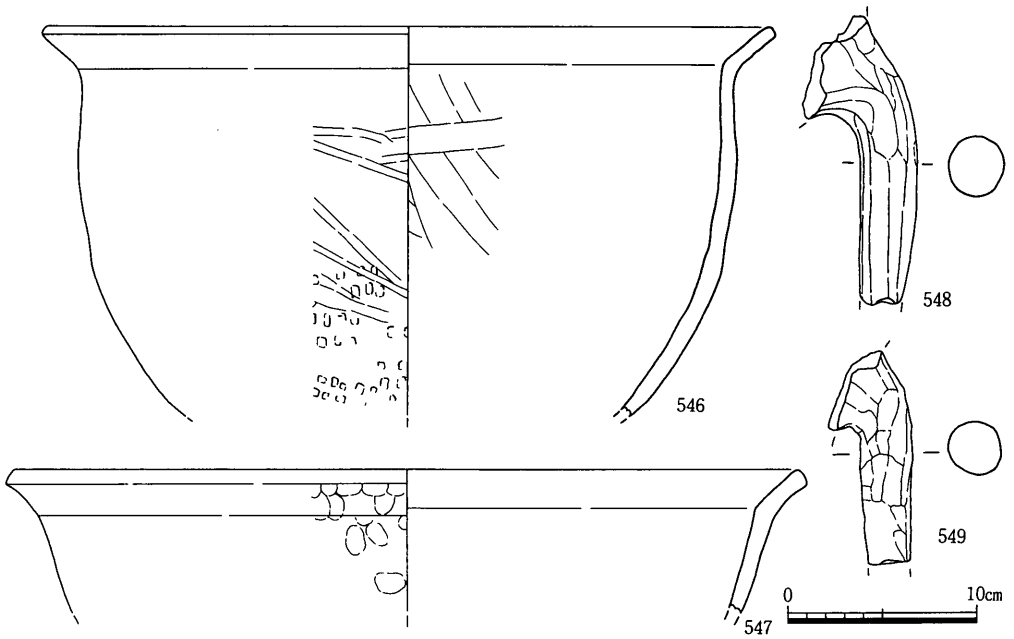
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
517	土・杯	11.0	3.5	6.7	粗・普	良好	灰黄～鈍い褐	ナデ	ナデ		ヘラ記号？
518	土・杯	10.8	2.8	8.0	微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	胎土は褐灰
519	土・杯			9.0	中・普	良好	淡橙～橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
520	土・杯			7.9	細・普	良好	橙，にぶい橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	金雲母を含む
521	土・小皿	7.5	1.4	6.3	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
522	土・小皿	7.6	1.7	6.0	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料？	
523	黒A・杯	11.5	3.1	8.2	中・普	良好	にぶい橙，黒	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
524	黒A・椀			6.5	細・普	良好	灰白，黒	ナデ	ミガキ		
525	黒A・椀			7.0	微・普	良好	灰白，黒灰褐	ナデ	ナデ		
526	緑・椀			6.2	微・普	良好	灰白	ナデ	不明	削出し輪高台，灰の釉	軟質
527	瓦質・椀	14.0	4.5	5.0	粗・普	良好	灰白	ナデ	板ナデ	ヘラ切り	
528	瓦質・椀			6.9	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白
529	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	緑灰の釉	貫入
530	青・碗	18.2			微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	明緑灰の釉	貫入
531	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	貫入
532	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
533	青・皿			4.8	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	明緑灰の釉	
534	土・土錘	短軸3.7	長軸6.6		中・普	良好	褐	ナデ	ナデ	重量60.5g	穴は貫通してない
535	陶・三足皿			11.9	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ黄の釉	
536	陶・甕	17.9			精緻	良好	明黄褐，黄褐	ナデ	ナデ		近世陶器
537	陶・皿			4.4	精緻	良好	灰白・鈍褐	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	唐津系，砂目積み

第351図　D区ＳＲ02出土遺物（8）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
538	土・土釜	30.3			中・普	良好	黒，暗灰黄	ナデ	ナデ		金雲母，煤付着
539	土・土鍋				粗・普	良好	淡橙～橙	ナデ	ナデ	外耳付	
540	土・土鍋	24.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
541	土・土釜	41.2			粗・普	良好	黒，灰	ナデ	ナデ		煤付着
542	土・土鍋				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
543	土・釜	15.6			中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ・ハケ目		煤付着
544	土・釜	16.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	穿孔	
545	土・土鍋				粗・普	良好	にぶい黄褐	格子目叩き	ナデ		

第352図　D区ＳＲ02出土遺物（9）（1／4）



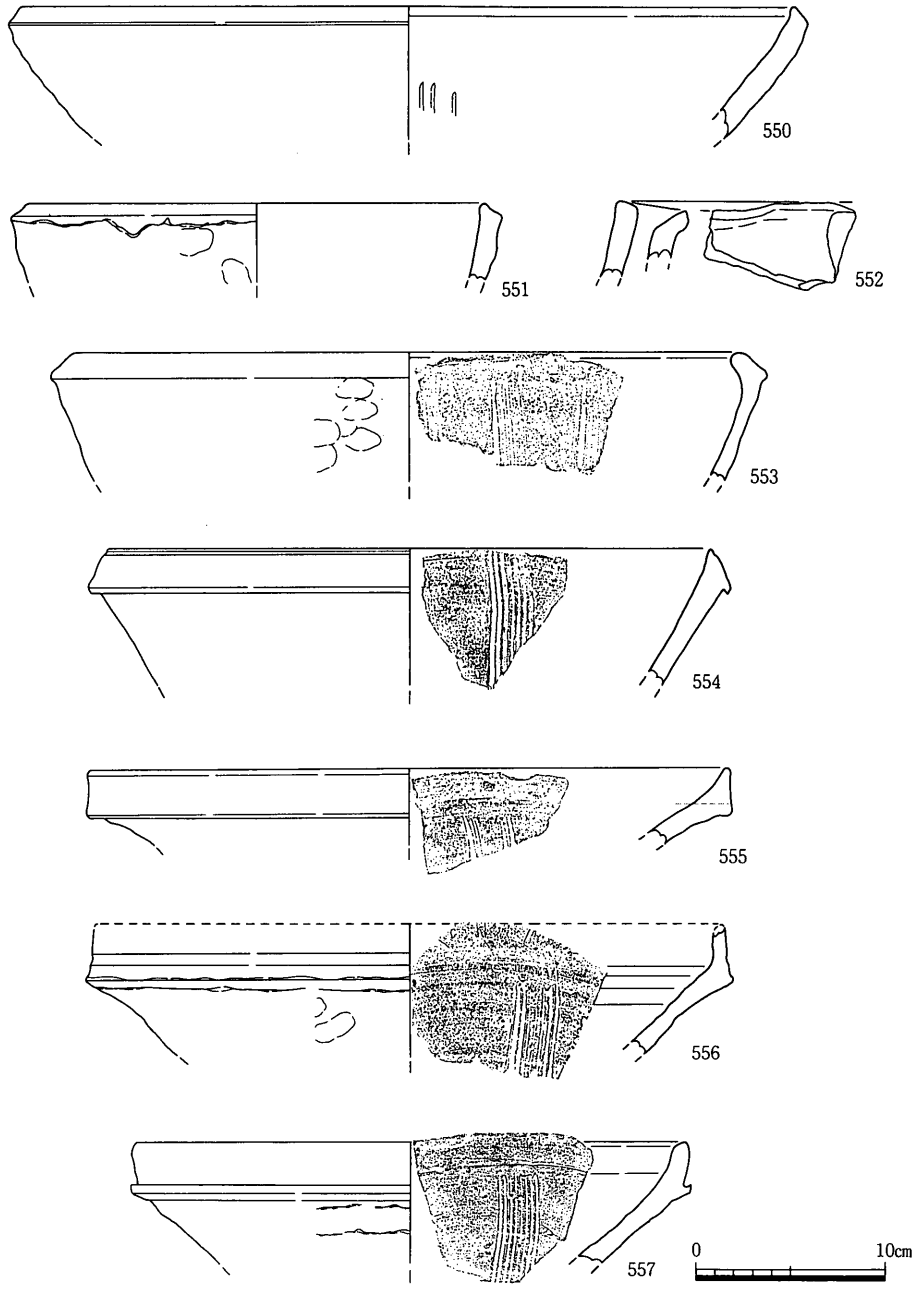
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
546	土・土鍋	38.2			粗・普	良好	鈍黄橙～浅黄	ナデ・叩き	ナデ		
547	土・土鍋	42.0			粗・普	良好	橙，浅黄橙	ナデ	ナデ		
548	土・土釜				粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
549	土・土釜				微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第353図　D区ＳＲ02出土遺物（10）（1／4）

453～470は壷である。454は上面内は内向き外は外向きの重弧文を連続して描く。456は口縁上面を刺突文と貼り付け文で，頸部外面をヘラミガキとヘラ圧痕文で飾る。458は頸部外面は456と同じ構成で，上面にもヘラ圧痕文をつける。459は頸部に凹線によって突帯を作り出す。460は頸部と胴部の境に退化した凹線状のものが残る。461は頸部の文様を横と斜めのヘラ圧痕文で構成する。462～464は頸部に凹線を４～５条めぐらす。465は刻み目の入った細い突帯を貼り付ける。467は頸部のない横広の壷である。468・469は外面を丁寧に磨いている。470は小型丸底壷であるが胴部が形骸化し１本の沈線によって胴部と頸部の境が示される。473は裾上面に凹線がめぐらされる。474は補強のための粘土が底から付けられる。454・456～459・461～464はⅣ期，468・469・473はⅤ期前半，470はⅤ期後半に属すると考えられる。

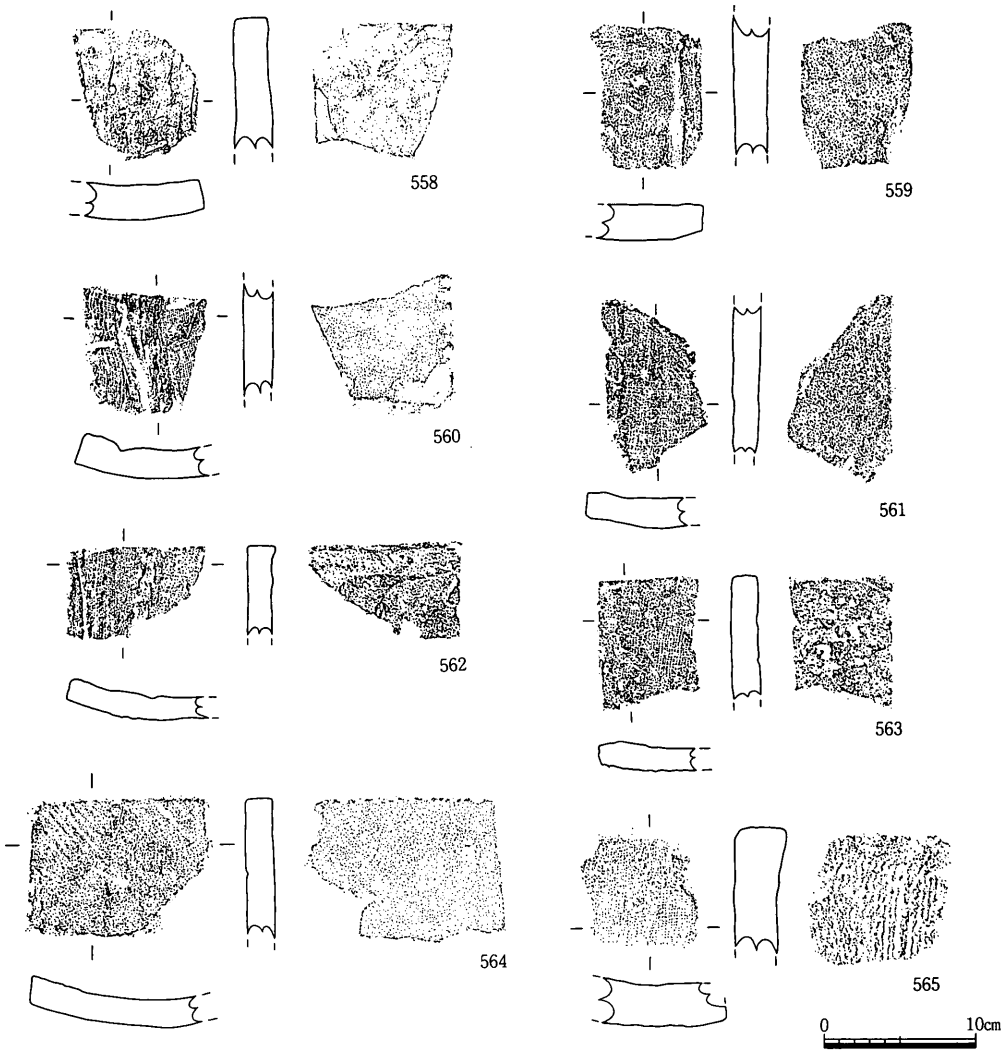
477～488は高杯である。477は杯部外面下半をヘラケズリする。482は細長い筒状の脚である。外面ヘラミガキする。485・488は平行線と鋸歯文と刺突で同じような文様を描いている。477・481・482・484～488はⅣ期，478・479・483はⅤ期前半に属すると考えられる。

489～502は鉢である。490・491・493は内面をヘラケズリしている。492は口縁上面と外



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
550	土・すり鉢	42.0			粗・普	良好	灰白～鈍黄褐	ナデ	ナデ	条溝	
551	土・こね鉢	25.9			中・普	良好	淡黄	ナデ	ナデ		
552	土・こね鉢				粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
553	土・すり鉢	37.8			粗・普	良好	明黄褐，黄橙	ナデ	ナデ	条溝	
554	備・すり鉢	33.8			粗・普	良好	灰赤・灰褐	ナデ	ナデ	ヘラによる条溝	
555	備・すり鉢	34.0			粗・普	良好	鈍赤褐・赤灰	ナデ	ナデ	条溝	
556	備・すり鉢				中・普	良好	赤灰～灰	ナデ	ナデ	金具の櫛による条溝	胎土は赤灰
557	備・すり鉢	29.3			粗・普	良好	鈍赤褐，灰赤	ナデ	ナデ	条溝	

第354図　D区ＳＲ02出土遺物（11）（1／4）

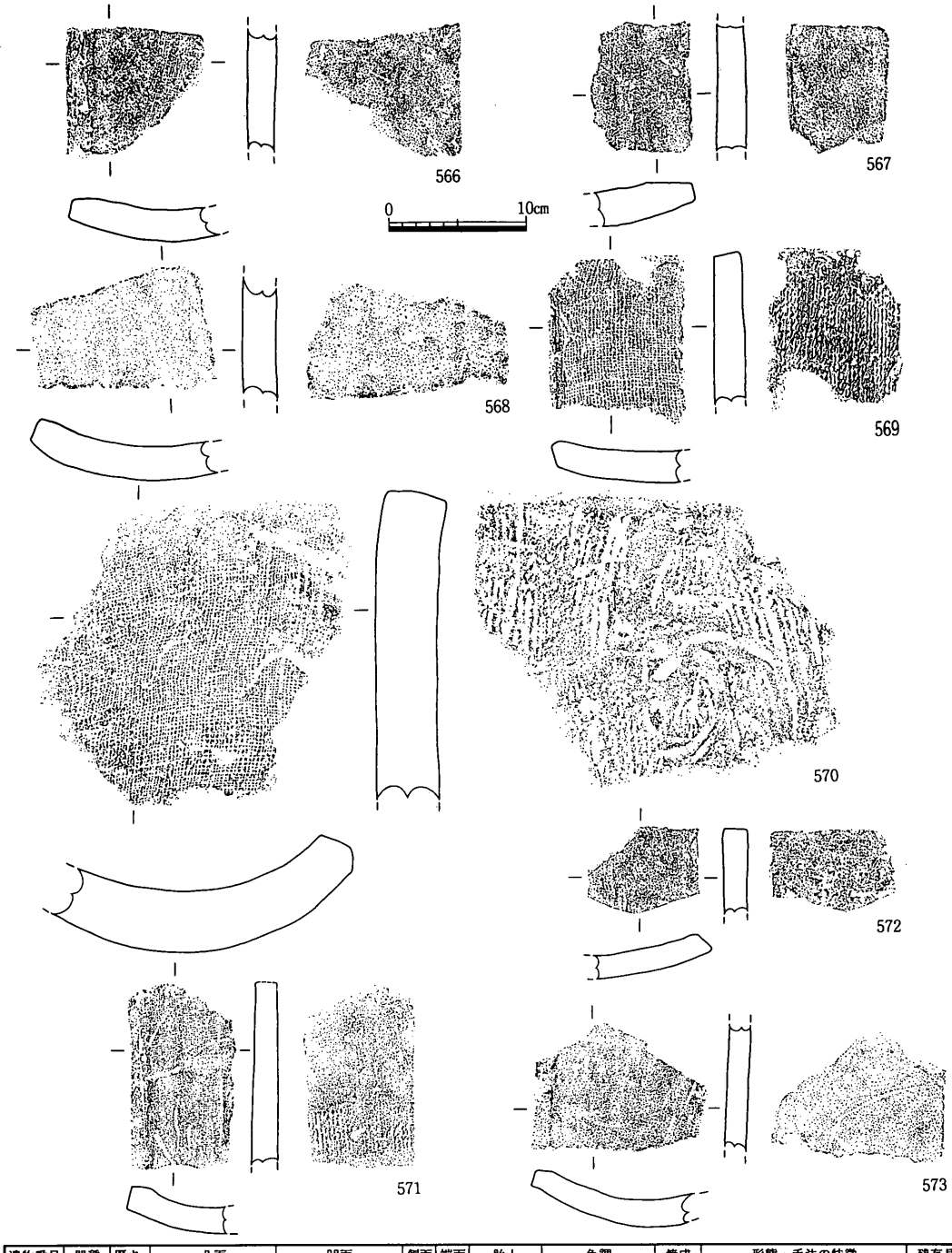


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
558	平瓦	2.5	板ナデ	板ナデ	1	16	中・普	灰	良好	須恵質	8.5
559	平瓦	2.3	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	-	粗・普	淡黄～橙	良好		9.2
560	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	1	-	中・普	灰白	良好		9.0
561	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	1	-	粗・普	暗灰黄～黒褐	良好		9.7
562	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	16	粗・多	灰白	良好		6.3
563	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	6	16	粗・普	灰白～明褐	良好		8.0
564	平瓦	1.8	ナデ	ナデ	1	16	粗・普	灰	良好	胎土灰白，凹面糸切り痕，いぶし	9.5
565	平瓦	3.5	縄目叩き	布目圧痕	-	16	粗・普	明褐	良好		8.1

第355図　D区ＳＲ02出土遺物（12）（1／5）

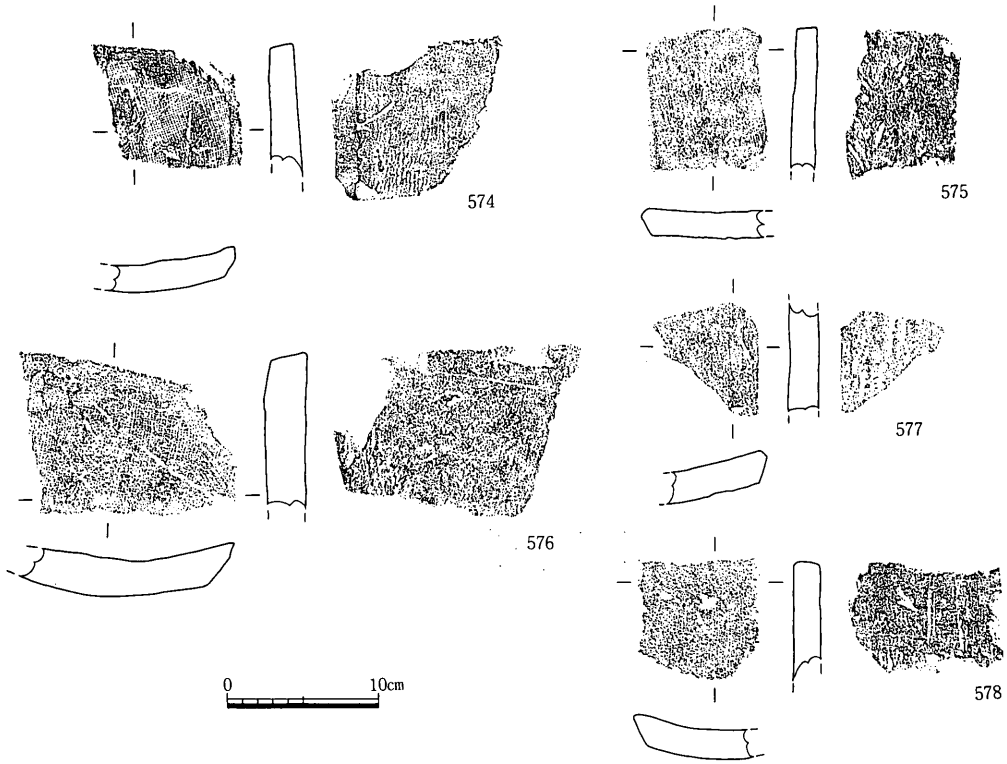
面に凹線がめぐる。494は手捏ねふうの鉢である。496は外面はヘラケズリし，内面にはきれいにハケ目を施している。502は内面中央がくぼみ絞り痕が残る。外面には叩きの可能性のある痕跡が残る。492はⅣ期，ほかはⅤ期に属する。

503～516は須恵器である。503はつまみの付く杯蓋である。504は高台が低い。505は断



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
566	平瓦	2.3	ナデ	ナデ・布目→ナデ	8	-	粗・普	淡黄	良好		10.6
567	平瓦	2.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕・板ナデ	3	-	粗・普	灰白～灰	良好		9.0
568	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	2	-	粗・普	灰白	良好		9.5
569	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕	5	17	微・普	灰	良好	胎土は灰白	11.7
570	平瓦	4.5	縄目叩き	布目圧痕	6	16	粗・普	暗灰	良好		22.0
571	平瓦	1.9	縄目叩き・ナデ	布目圧痕	8	16	粗・普	灰	良好		13.3
572	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	細・普	灰	良好		6.2
573	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	8	-	粗・普	淡黄	良好		9.3

第356図　D区ＳＲ02出土遺物（13）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
574	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	7	17	粗・普	灰黄	良好		10.5
575	平瓦	1.7	板ナデ	ナデ	5	17	粗・普	黒	良好		9.4
576	平瓦	2.6	縄目叩き・ナデ	布目圧痕	5	17	粗・普	灰白～黒褐	良好		10.3
577	平瓦	2.1	ケズリ	板ナデ	7	-	中・普	灰～灰白	良好		7.2
578	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	5	16	粗・普	にぶい黄橙	良好		8.1

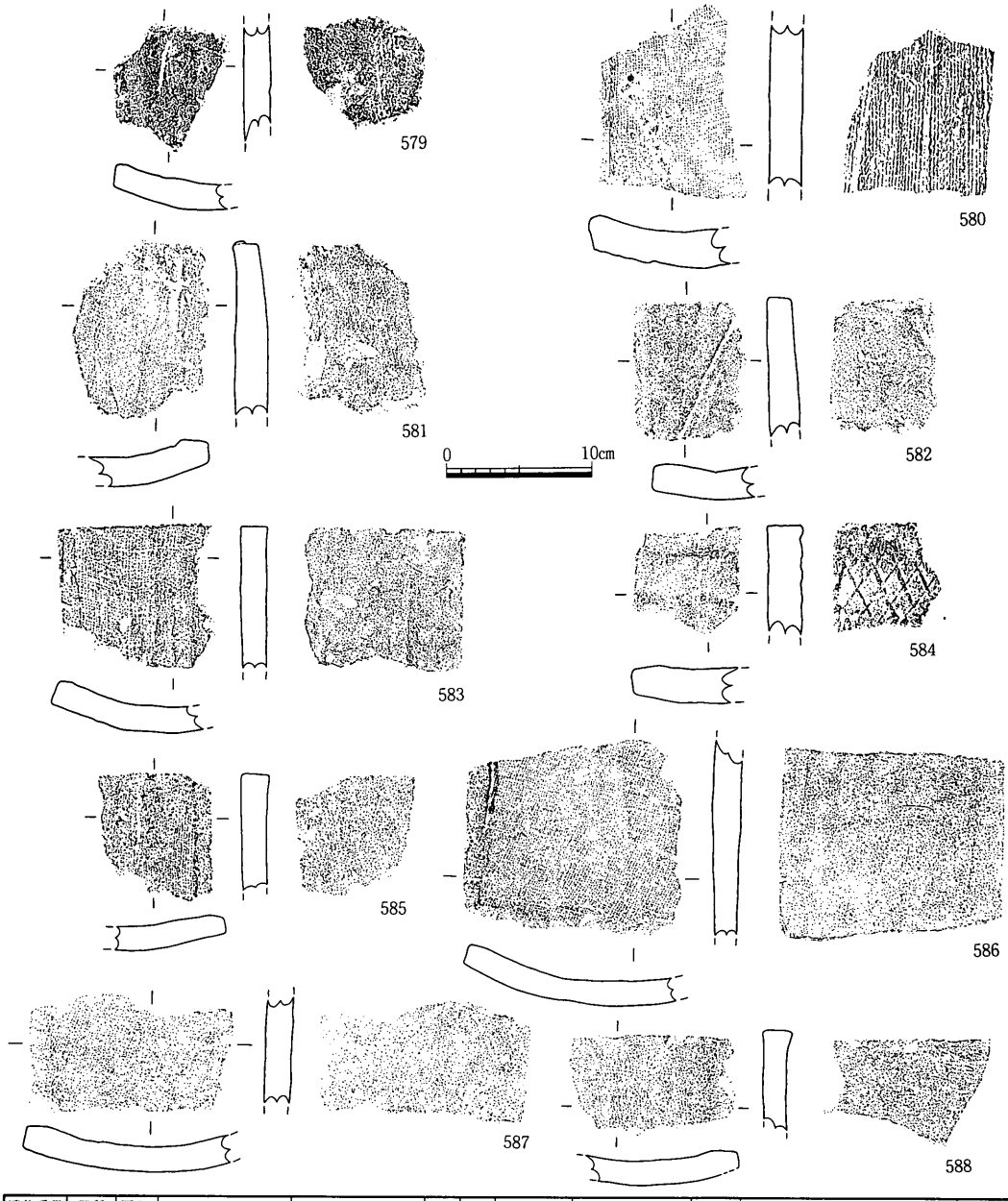
第357図　D区ＳＲ02出土遺物（14）（1／5）

面三角形の高台がつく。506は重ね焼きのため口縁のみ黒く変色している。509も重ね焼きをしており口縁外面に自然釉がかかっている。形態から東播系の可能性がある。510は水差しの注ぎ口の部分と考えられる。511も東播系とみられる。512は鉢もしくは皿であろう。515は外面下半をヘラケズリする。503～505は９世紀，508は10世紀，509・511は13世紀，516は11世紀以降に属する。

517～522は土師器杯・小皿である。517は底部外面に横１本のヘラ記号がかかれる。522は胴中央に沈線がめぐる。

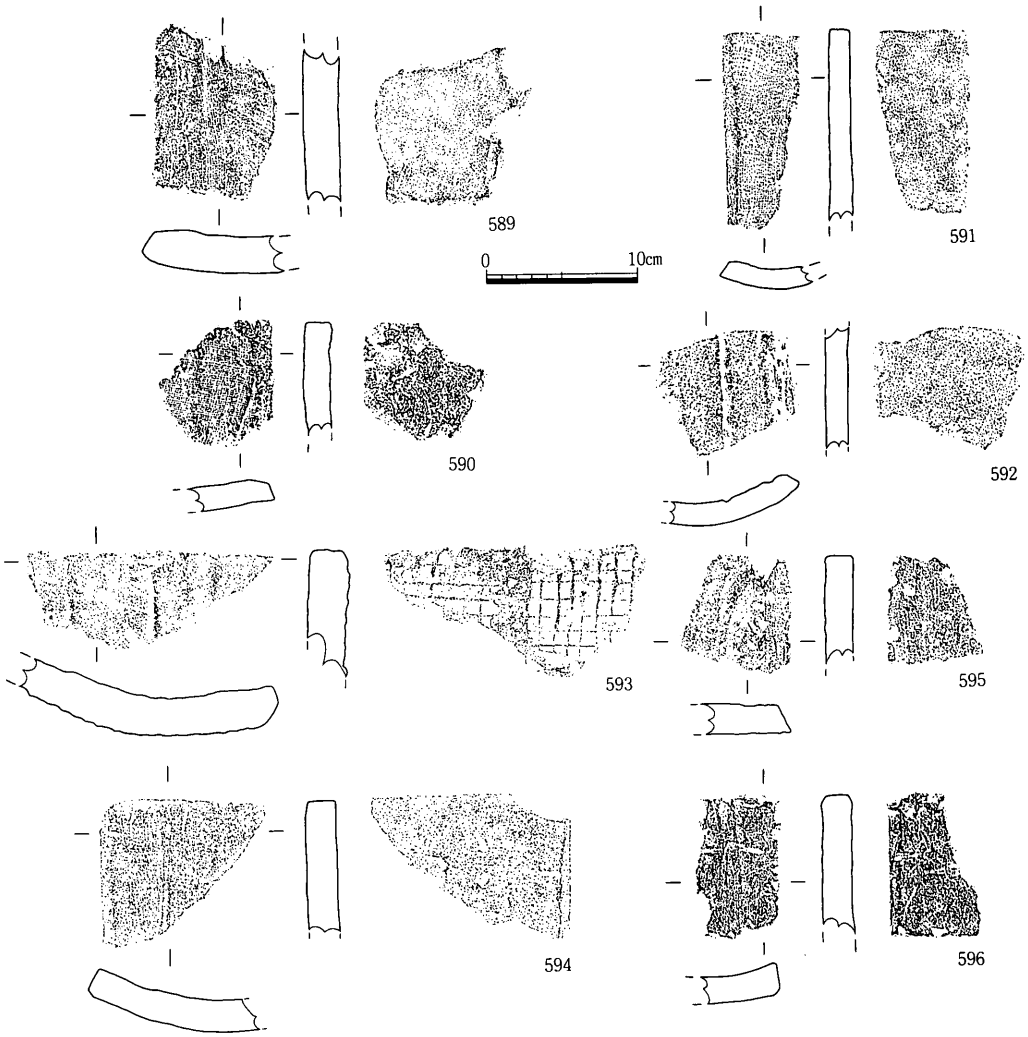
526は削りだしによって輪状高台を作っている。527は胴最下部に指押さえ痕が残る。533は櫛で文様を描く。534は鉄分の沈着のためか穴が貫通してない。

535は唐津系陶器の三足皿である。内面見込みには白化粧土をもちいたハケ目文が描かれる。獣脚外面まで施釉される。536は産地不明である。537も唐津系の陶器皿である。砂



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
579	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	-	粗・普	灰白	良好		7.8
580	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕	7	-	粗・普	灰	良好		13.1
581	平瓦	2.3	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	16	粗・普	にぶい黄橙～灰白	良好		12.0
582	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	8	16	粗・普	灰黄	良好		9.3
583	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	16	粗・多	暗灰	良好	胎土は灰白，いぶし	9.9
584	平瓦	2.4	格子目叩き・ナデ	布目圧痕→ナデ	8	16	粗・普	淡黄	良好	斜格子	7.2
585	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	8	16	中・普	灰白	良好		8.0
586	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	8	-	粗・普	灰黄～灰褐	良好		13.6
587	平瓦	1.7	板ナデ	布目圧痕	8	-	粗・普	浅黄	不良		8.0
588	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	8	16	中・普	黒，黒灰	良好	胎土は淡黄	10.3

第358図　D区ＳＲ02出土遺物（15）（1／5）

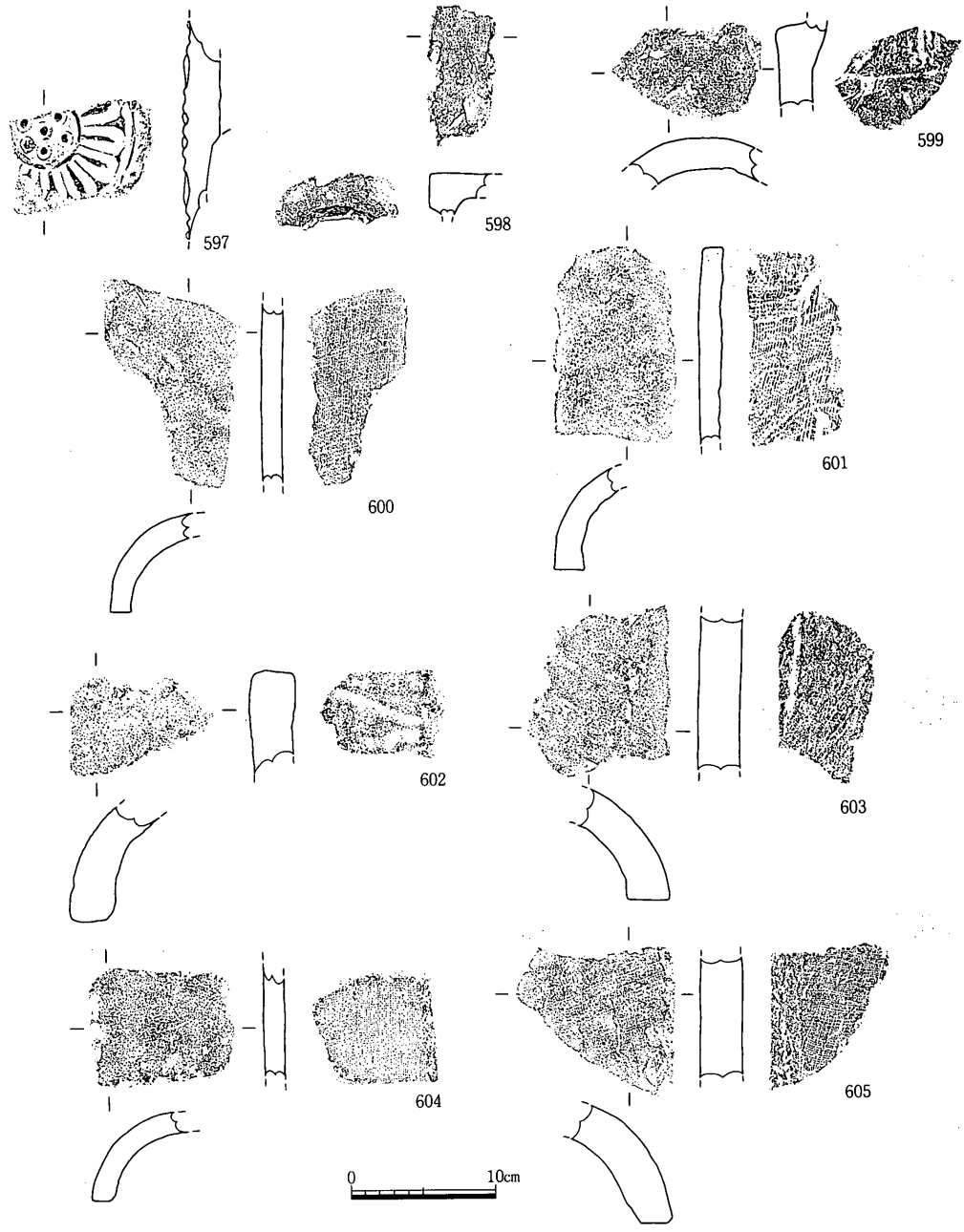


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
589	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕・ナデ	3	-	粗・普	灰黄	良好		10.8
590	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕・ナデ	3	16	粗・普	灰	良好	須恵質	8.4
591	平瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	2	16	中・普	黒褐～黒	良好		12.8
592	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	1	-	中・普	灰	良好	胎土は淡黄，いぶし気味	7.8
593	平瓦	2.6	格子目叩き	布目圧痕→板ナデ	6	16	粗・普	淡黄	良好		17.3
594	平瓦	2.1	板ナデ	布目圧痕→板ナデ	10	18	中・普	暗青灰	良好	須恵質	8.6
595	平瓦	2.1	ナデ	ナデ	1	16	粗・普	灰	良好	胎土は灰白，須恵質	8.0
596	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	10	18	粗・普	にぶい黄橙	良好		9.3

第359図　D区ＳＲ02出土遺物（16）（1／5）

目積みによって重ね焼きし，そのうち２枚が融着している。高台をのぞき内外面に釉をかけている。産地でない地域にこのような不良品が流通する理由は不明である。535・537は17～18世紀のものと考えられる。

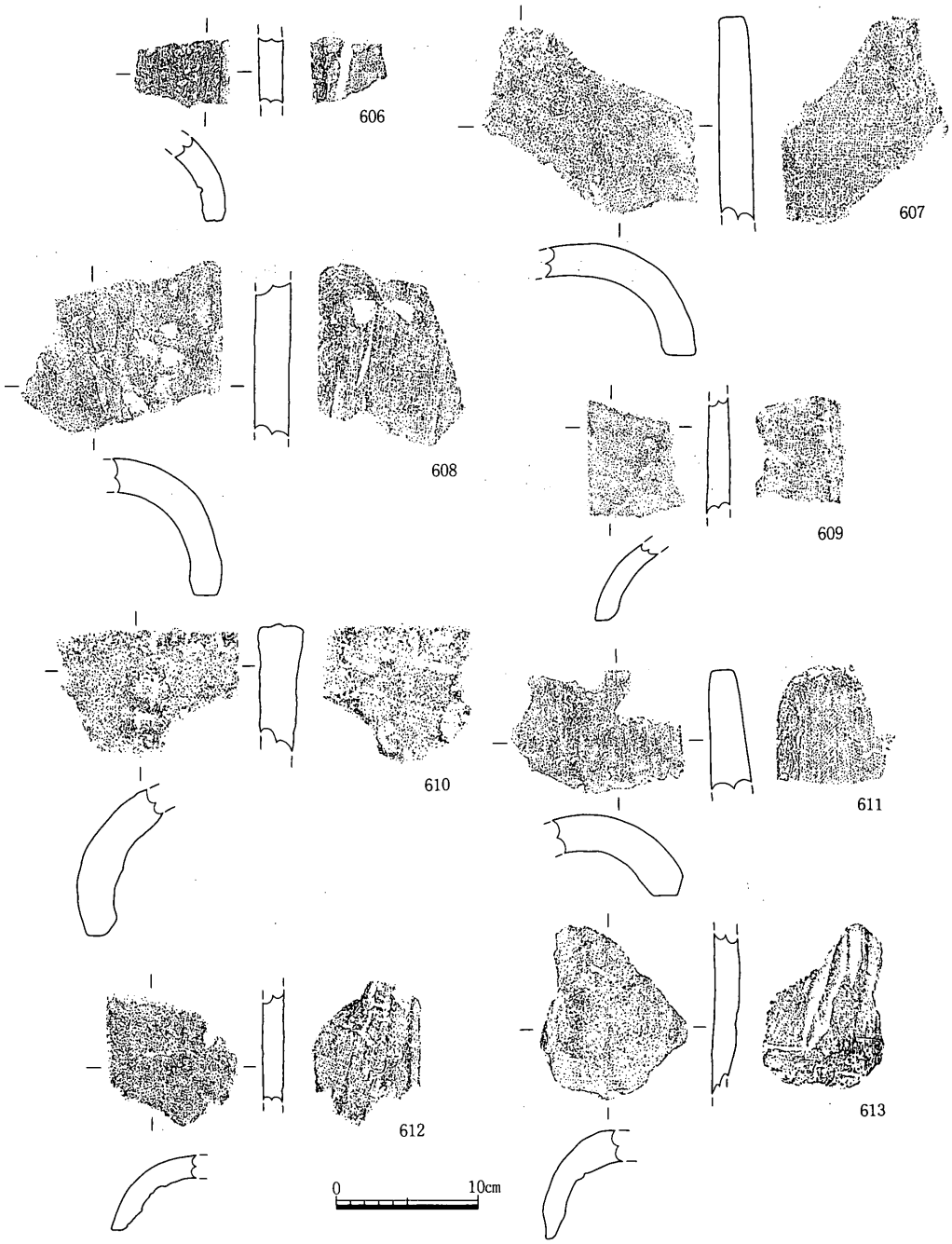
539は吊り紐をくくる部分である。538・541・543は外面に煤が付着している。548・549



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
599	丸瓦	3.4	ナデ	ナデ	-	-	中・普	灰白	良好		5.3
600	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	11	-	中・普	灰	良好	胎土は灰白	13.8
601	丸瓦	2.1	板ナデ	格子目叩き	11	16	粗・普	にぶい黄橙	不良		13.2
602	丸瓦	3.0	不明	ナデ	11	16	粗・多	淡黄～暗青灰	良好		10.0
603	丸瓦	2.9	ナデ	ナデ	11	-	中・普	淡黄～にぶい橙	良好	凹面に糸切り痕が残る	10.5
604	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰白	良好		8.2
605	丸瓦	2.9	板ナデ	布目圧痕	14	-	細・普	にぶい黄	良好		10.0

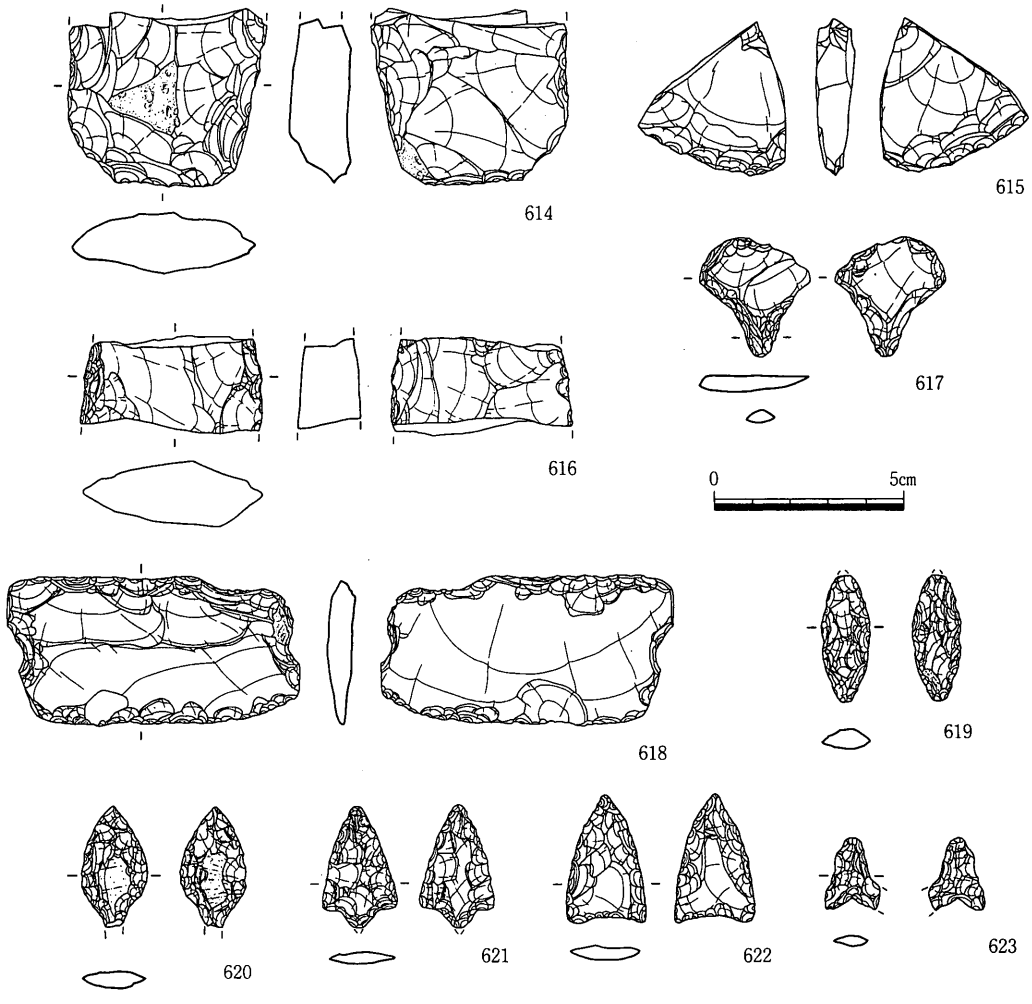
遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
597		5.2	1+6	12.3	1.1	17						
598	14.0						2.4		2.4	2.2	巴文	

第360図　D区ＳＲ02出土遺物（17）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
606	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	灰	良好		4.6
607	丸瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	12	16	中・普	にぶい黄	良好		14.2
608	丸瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	黄灰～淡黄	良好		10.8
609	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	暗灰，灰	良好	いぶし	8.3
610	丸瓦	3.1	ナデ	ナデ	12	16	粗・普	にぶい黄	良好		9.0
611	丸瓦	2.8	板ナデ	布目圧痕	15	16	中・普	浅黄	良好		8.4
612	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	13	-	粗・普	灰～灰白	良好	いぶし	11.0
613	丸瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	13	-	中・普	灰白～橙～黒	良好		11.4

第361図　D区ＳＲ02出土遺物（18）（1／5）



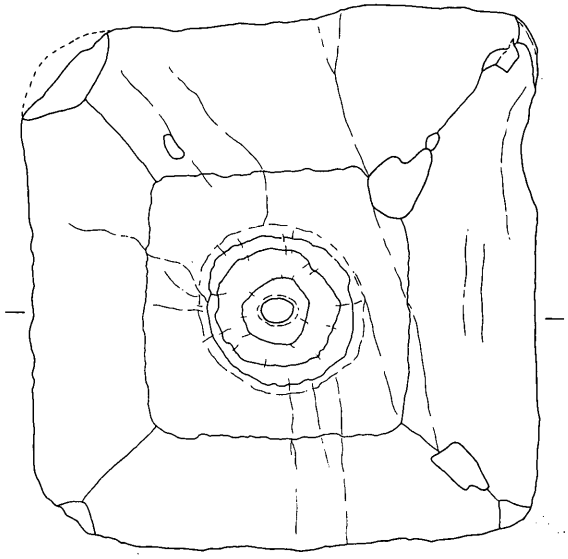
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
614	石鏃	4.4	5.2	1.6	46	サヌカイト		
615	スクレイパー	3.9	3.9	1.0	15	サヌカイト		
616	打製石斧？	2.4	4.7	1.7	26	サヌカイト		
617	石錐	2.8	2.9	0.6	3.4	サヌカイト		
618	打製石包丁	7.5	3.9	0.6	29	サヌカイト		
619	石鏃	3.3	0.7	0.6	2.3	サヌカイト		
620	石鏃	3.1	1.7	0.5	2.3	サヌカイト		
621	石鏃	3.2	2.0	0.3	1.6	サヌカイト		
622	石鏃	3.3	2.1	0.4	2.6	サヌカイト		
623	石鏃	1.6	1.4	0.3	0.6	サヌカイト		

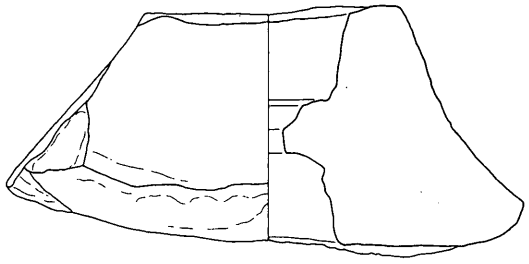
第362図　D区ＳＲ02出土遺物（19）（1／2）

は土釜の脚である。554～557は同じ備前焼のすり鉢であり，14世紀末から16世紀初頭までの間に位置付けられる。ただし，554は口縁端部を斜めの平坦面として仕上げるのに対し，555～557は口縁端部が上下に垂直な面として仕上げられ，両者には時間幅が感じられる。

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
624	石皿	11.6	11.5	6.1	1339	砂岩		
625	砥石	10.2	6.0	6.0	494	砂岩		
626	砥石	13.0	10.4	5.5	872	砂岩		
627	石皿	8.5	7.4	5.0	360	砂岩		
628	石核	6.7	6.4	5.3	338	サヌカイト		

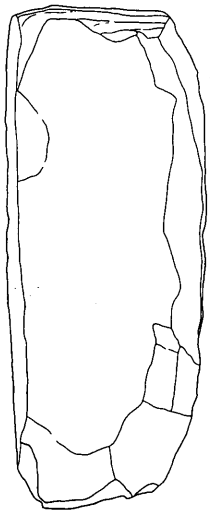
第363図　D区ＳＲ02出土遺物（20）（1／3）

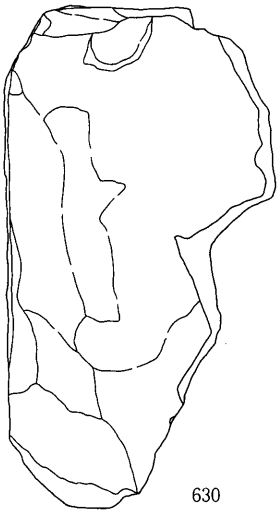




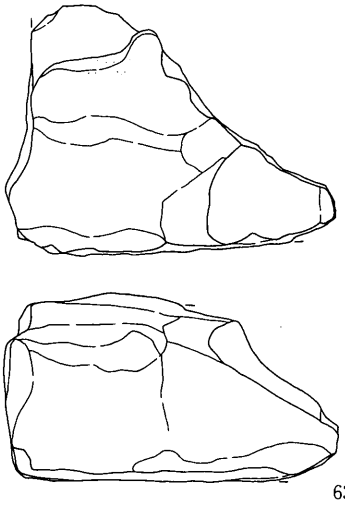
629

0 20cm





630



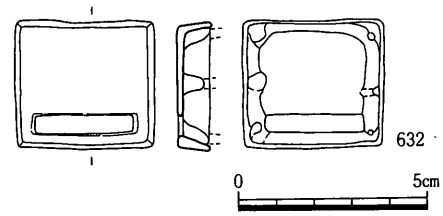
631

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
629	石塔部材	54.4	53.0	25.8	50.5kg	凝灰岩		
630	石塔部材	63.0	28.0	20.8	25.5kg	凝灰岩		
631	石塔部材	27.2	34.7	19.7	10.8kg	凝灰岩		

第364図　D区ＳＲ02出土遺物（21）（1／8）

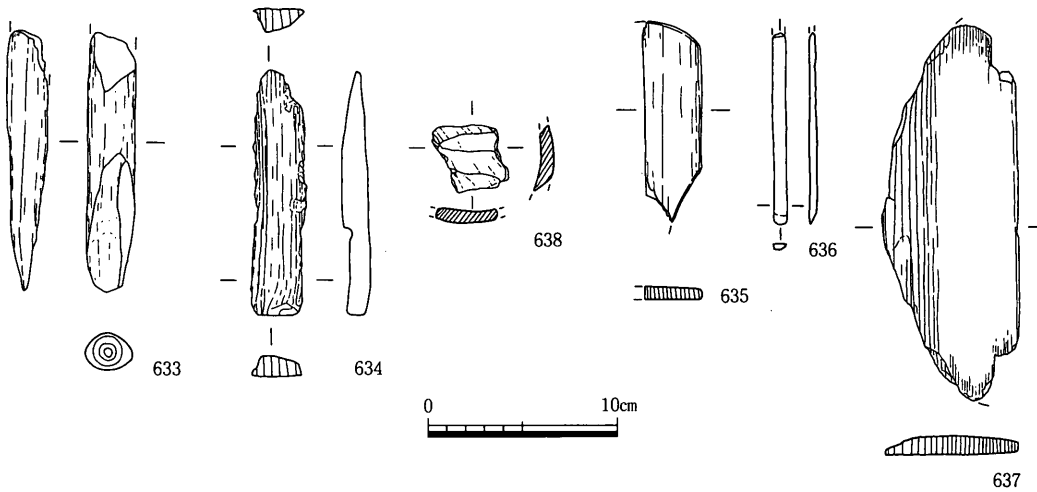
558～596は平瓦である。558～565は側面に隣接する凹凸面に斜めの面を作らないものである。558は須恵質で凹凸面とも丁寧に板ナデしている。559は成形台の側縁を示す可能性のある痕跡が残る。564は粘土板を切る際の糸切りの痕跡らしきものが残る。566～573・579～590は側面横の凹面を斜めに面取りするものである。570は一際大きくて重い瓦である。584の凸面には斜格子の叩き目が残る。590は須恵質に焼き上がっている。574～578は凸面側に大きな斜めの面がある。595は逆に斜めの面が凹面側を向いている。593・594・596は側面横の凸面を斜めに面取りする。593は正格子の叩き目が凸面に残る。594の凸面は板ナデされているが，布目が少し認められる。

597は単弁蓮華文軒丸瓦である。弁数は17と思われる。中房内の蓮子は１＋６の構成をとりそれぞれに圏線がめぐる。外区内縁は珠文をめぐらせる。瓦当と丸瓦の接合部分は残ってない。



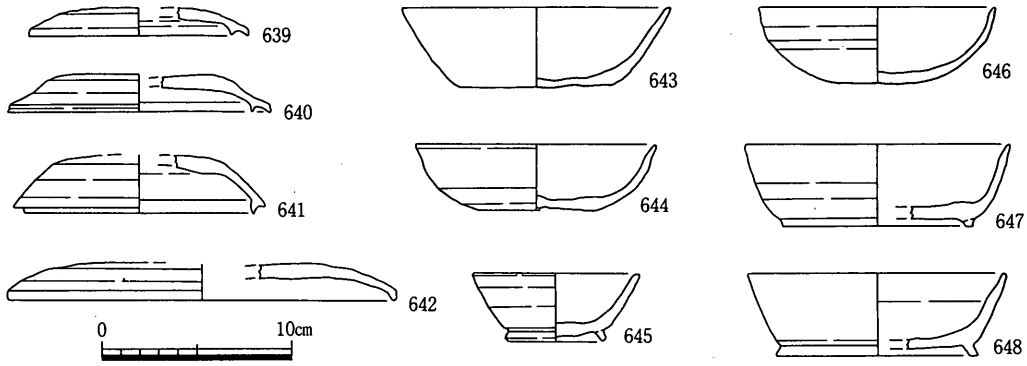
遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
632	銅	帯金具（巡方）	3.7	3.4	0.9	22.5	6(4)ヶ所に釘が付くが全部折れる	

第365図　D区ＳＲ02出土遺物（22）（1／2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
633	杭？	13.3	2.5	2.2	芯持		
634	木っ端	12.9	2.6	1.3	柾目		
635	木っ端	10.3	3.1	0.8	柾目		
636	はし？	10.0	0.7	0.4	竹		
637	板材	19.7	7.2	1.0	柾目		
638	椀（刳り物）	3.5	3.5	0.7	柾目		

第366図　D区ＳＲ02出土遺物（23）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
639	須・杯蓋	11.5	1.5		細・少	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ	内面に重ね焼き痕	
640	須・杯蓋	13.8	1.9		細・少	良好	灰白・灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
641	須・杯蓋	12.1	3.0		細・少	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ	天井部にヘラ切り痕	
642	須・杯蓋	20.4			粗・多	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
643	須・杯	14.2	4.1	8.0	粗・多	良好	にぶい赤褐	不明	ナデ	底ヘラ切り	
644	須・杯	12.6	3.4	6.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
645	須・高台杯	8.8	3.5	4.9	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
646	須・杯	12.4	3.9	6.4	細・少	不良	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
647	須・高台杯	13.8	4.2	10.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
648	須・高台杯	13.4	4.2	10.4	細・多	不良	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	ヘラ記号

第367図　D1区包含層出土遺物（1）（1／4）

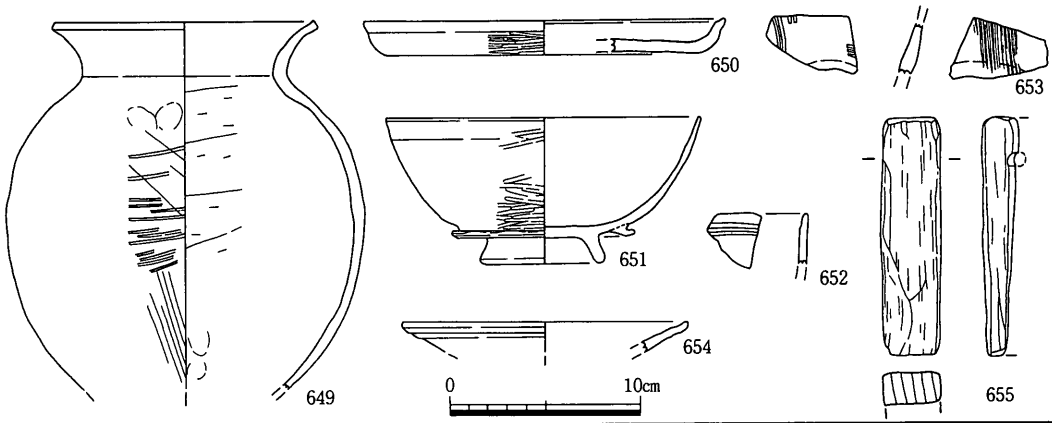
598は中世以降の軒丸瓦と考えられる。瓦当には巴文の頭と思われる文様が残る。表面は黒くいぶされている。599～613は丸瓦である。599は玉縁の部分である。613は側縁が丸く尖っている。削られた形跡がなく，この瓦は円筒を2枚に分割するのでなく1枚作りで作られた可能性がある。

614～631は石器である。624は両面を627は片面を磨り面として使用している。625・626は研ぎ面が2面ある。629は笠の部分である。中心は穴が開き，途中すぼまった部分がある。630・631は基部である。

632は裏面に6ヵ所突起がつく。

(6)包含層出土遺物（第367図～397図）

639～641は内面にかえりのある須恵器杯蓋である。641のかえりは下方に突出している。642は口縁部端部を下方に拡張している。643～648は須恵器の杯で，いずれも底部はヘラ切りとなっている。646の体部は丸味をもち椀のような形態をしている。645・647・648は底部に高台を貼りつけている。体部は直線的に立ち上がる。645は口径が8.8cmと小さいものである。648は底部外面に「井」形に印したヘラ記号がある。649は甕で外面は叩きの後に乱雑なハケ目を施している。内面はヘラケズリである。650は土師器皿で外面にヘラミ

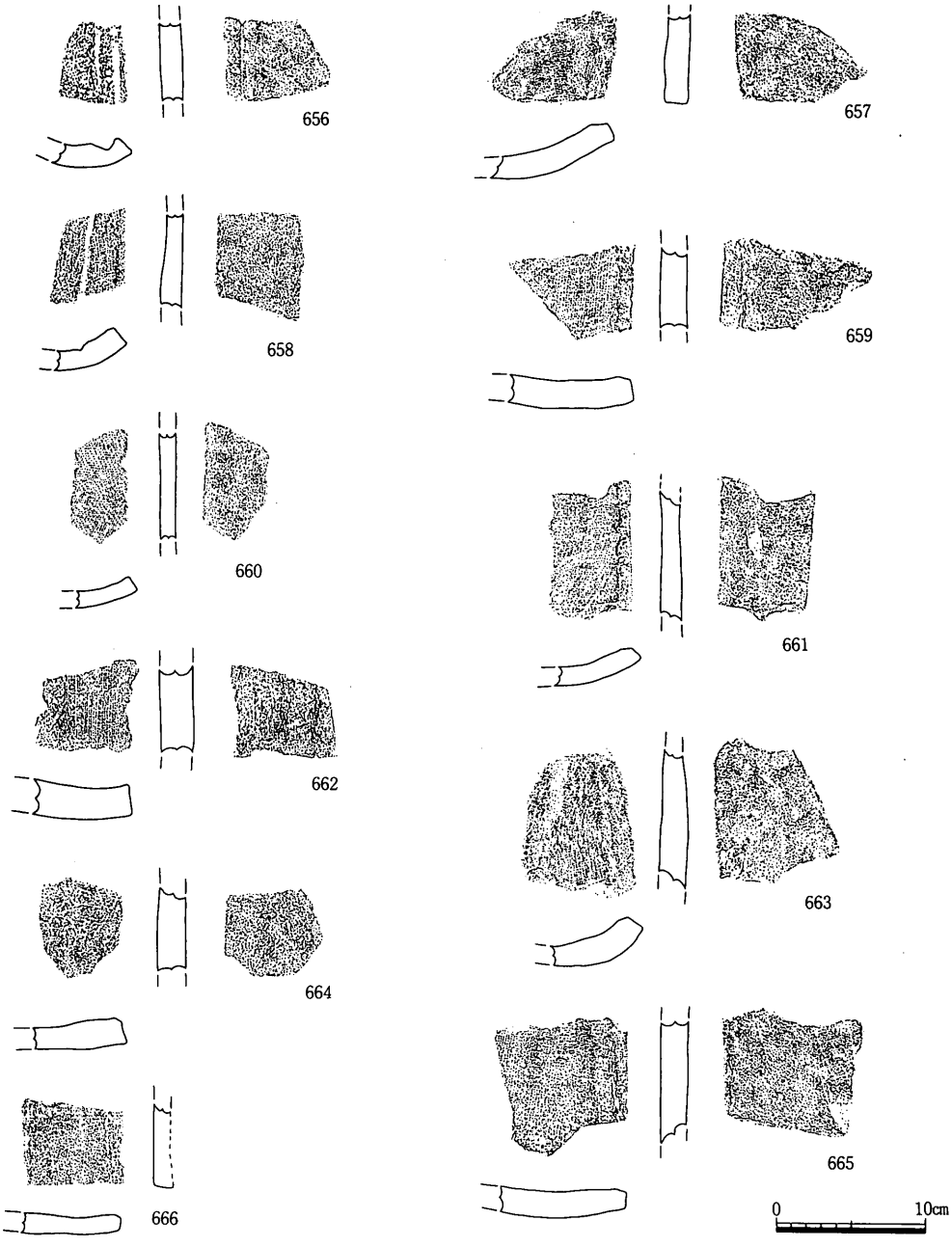


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
649	弥・甕	13.6			中・多	良好	赤褐	ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ・ﾊｹﾒ	ナデ・ケズリ		金雲母含む
650	土・皿	19.0	1.8	16.6	精緻	良好	明赤褐	ミガキ	ナデ	底部外面木の葉圧痕	
651	黒B・椀	16.5	7.5	6.0	中・少	良好	黒褐	ミガキ	ミガキ	立上がりに鍔状の突帯	
652	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰（釉）	
653	青・碗				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	オリーブ灰（釉）	
654	磁・皿	15.0			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブ（釉）	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
655	板材	12.3	3.1	1.9	柾目		

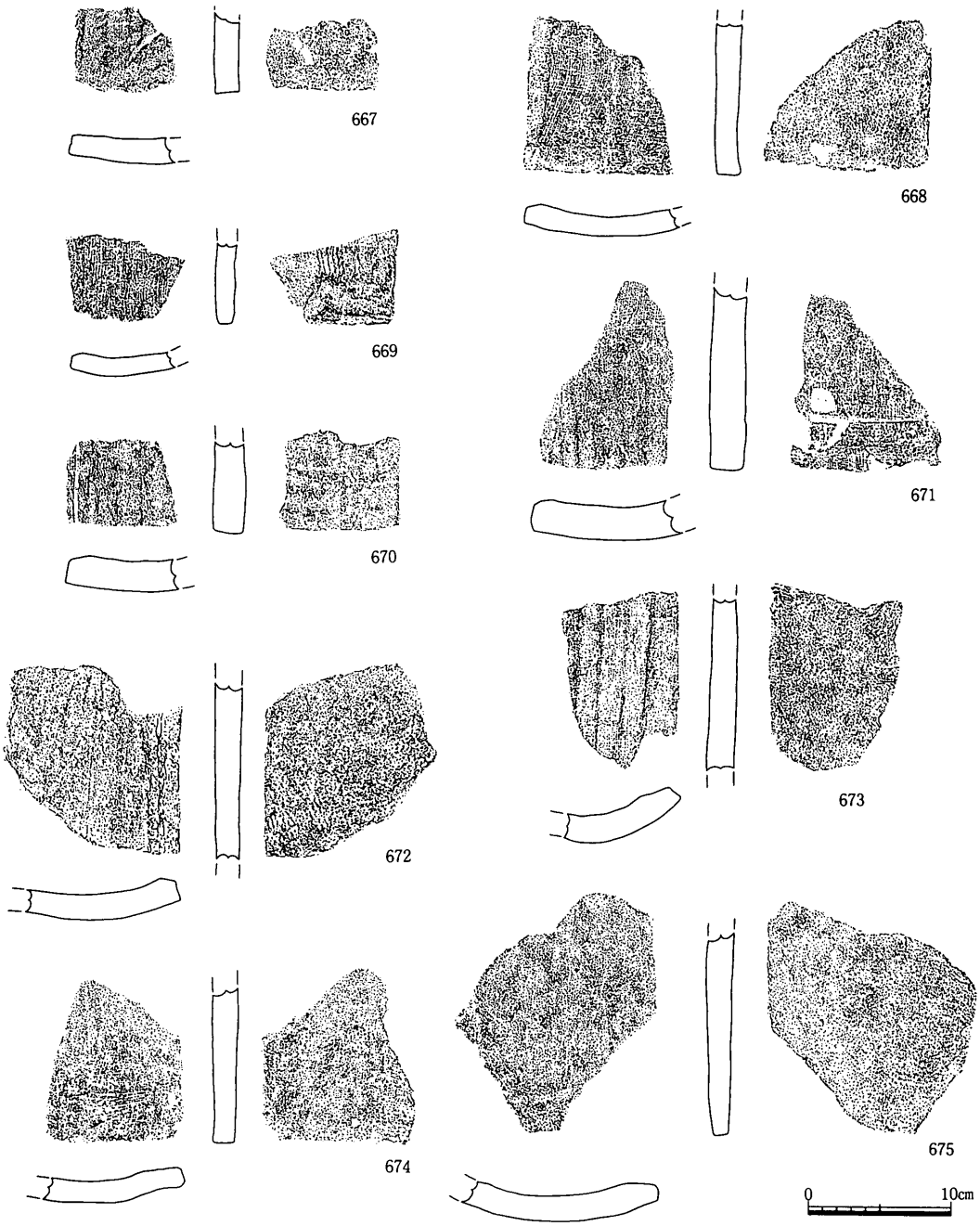
第368図　D1区包含層出土遺物（2）（1／4）

ガキを施し，底部外面には木の葉圧痕文が残る。651は内外面にカーボンを付着させた黒色土器である。内面は摩滅しているが外面にはヘラミガキが残っている。高台は高く外側に張り出している。底部から体部に立ち上がる部分に鍔状の突帯がはりめぐらされている。突帯は強くナデられ先端が上方にむいている。大分県弥勒寺遺跡G－2区SK5出土土器のなかに類似品がありそこでは10世紀末の年代観が与えられている。652・653は青磁碗，654は磁器の皿で唐津産である。655は木製品の板材で長辺に沿ってわれており，その面に穿孔の痕跡が認められる。656～679は平瓦である。658は凹面に布の綴じあわせ痕がある。669・671～673・678は凸面に縄目叩きを施したあとにナデている。また671は凸面に板状工具痕がある。672の凹面には布の端部痕がある。673の凹面には模骨痕が明瞭に残り桶巻き作りであることがわかる。673～675の凹面側の側縁部にはヘラケズリが認められる。680～688は丸瓦で凸面はいずれもナデている。691は凹基の石鏃で基部の凹みは大きい。石材は島根県玉湯町玉造産の碧玉を使用している。692はサヌカイト製の尖頭器である。両面に丁寧に調整を加えて形を整えている。旧石器時代のものと考えられる。693は滑石製紡錘車で，中央部が穿孔されている。また両面全体に擦痕が明瞭に残り，かなり使用されていたことがうかがえる。694～697は鉄器である。697は上部の窪んだ直径3.6cmの鉢状の円盤の上下に突起がつく。突起は折れていない。



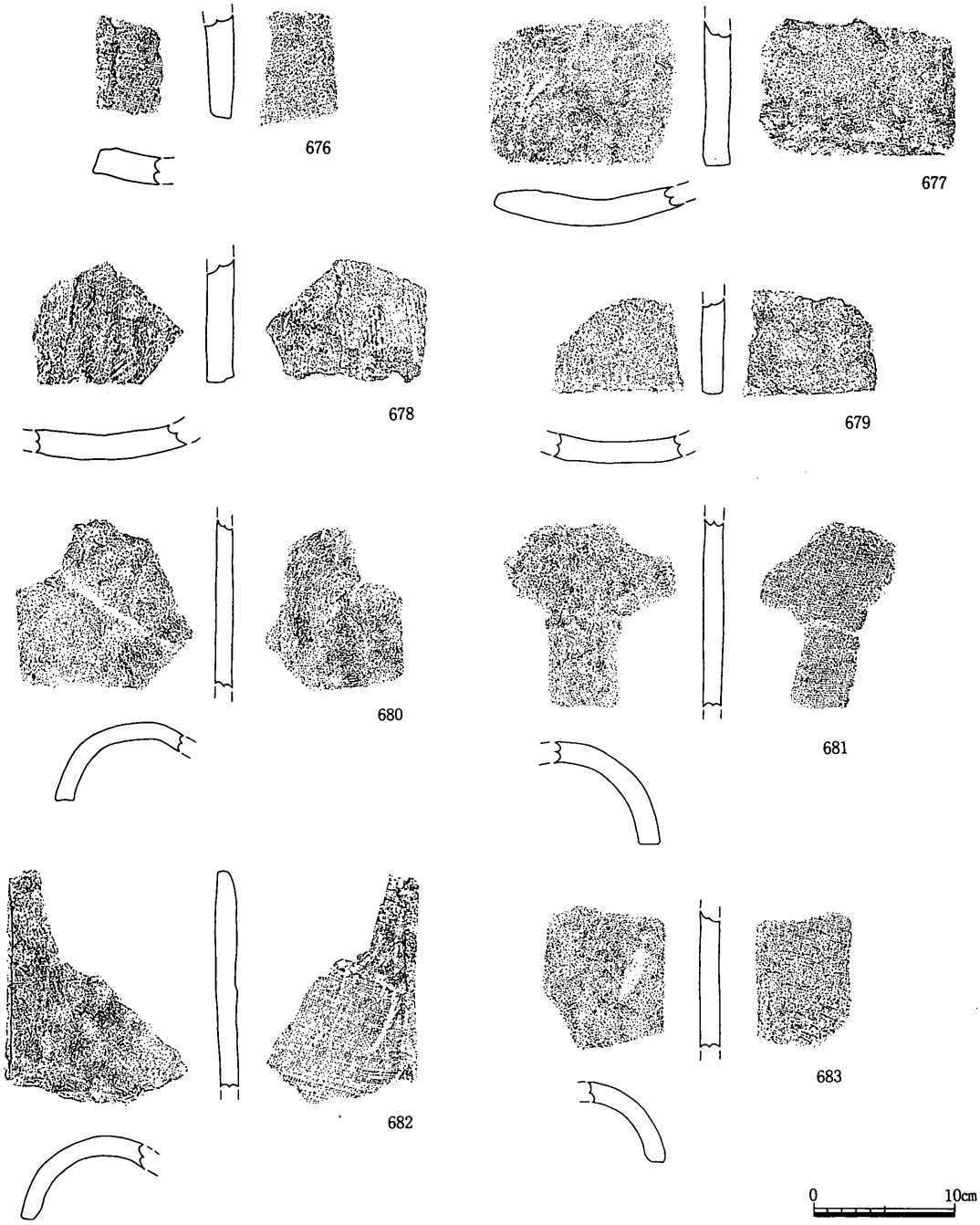
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
656	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	1		中・普	にぶい黄褐	不良	凹面側端部付近にくぼみ有り	5.2
657	平瓦	1.6	ナデ	不明	3	16	中・普	淡黄	不良		5.8
658	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	2		中・普	灰白	良好	凹面に布とじ合せ痕有り	6.2
659	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	3		中・普	灰黄	良好		5.4
660	平瓦	1.1	ナデ	布目圧痕	1		中・普	浅黄	良好		7.0
661	平瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	3		中・普	にぶい黄橙	良好		8.1
662	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		中・普	褐灰	良好		5.8
663	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	2		中・普	浅黄橙	不良		9.0
664	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	1		中・普	浅黄	良好		5.6
665	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	3		粗・普	暗灰	良好		8.3
666	平瓦	1.1	不明	布目圧痕	2	16	粗・普	灰白	不良		5.7

第369図　D1区包含層出土遺物（3）（1／5）



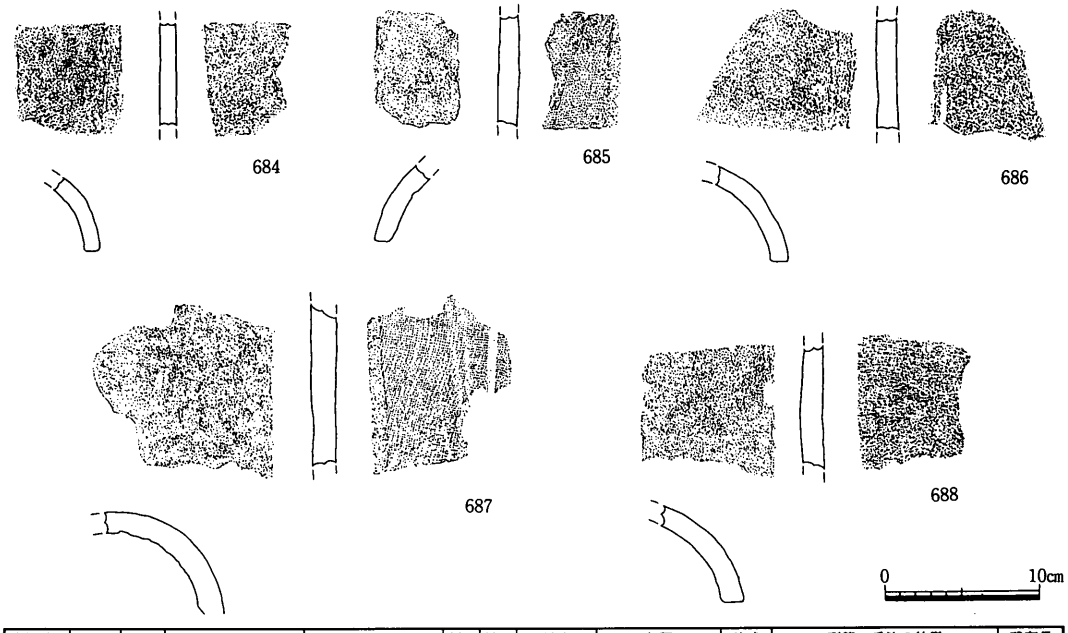
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
667	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	2	16	中・普	灰	良好		5.6
668	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	8	16	粗・普	黄灰	良好		10.6
669	平瓦	1.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	16	中・普	灰白	良好		5.7
670	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	16	粗・普	灰白	良好		6.2
671	平瓦	2.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	3	16	中・普	浅黄	良好	凸面に板状工具痕有り	13.0
672	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	3		中・普	灰	良好	凹面に布端部痕有り	12.5
673	平瓦	1.9	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕	3		粗・普	灰黄	良好		12.3
674	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	2	16	中・普	浅黄	不良		10.9
675	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	8		中・普	淡黄	良好		14.1

第370図　D1区包含層出土遺物（4）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
676	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	3		中・昔	灰白	良好		7.2
677	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	16	中・多	黒褐	不良		10.0
678	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ		16	粗・昔	浅黄	良好		7.8
679	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕		16	中・昔	灰黄	良好		6.5
680	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	11		中・多	灰白	不良		11.5
681	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	11		中・昔	灰白	良好		13.4
682	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	12	19	中・昔	灰	良好		15.4
683	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	12		中・昔	淡黄	不良		9.8

第371図　D1区包含層出土遺物（5）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
684	丸瓦	1.1	ナデ	布目圧痕	11		中・普	灰白	良好		6.6
685	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	12		中・普	灰白	不良	凹面に分割突起痕有り	7.3
686	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	11		中・多	灰白	不良		7.3
687	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	12		粗・普	灰白	良好	凹面に布とじ合せ痕有り	11.7
688	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	11		粗・普	にぶい黄橙	良好		8.0

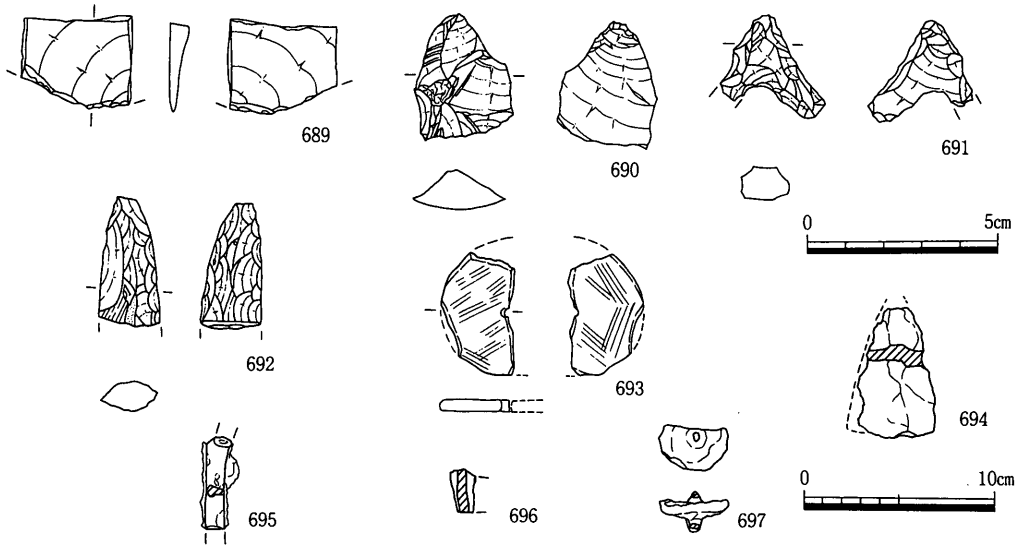
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
689	二次加工のある剥片	2.9	2.4	0.5	4.5	サヌカイト		
690	剥片	3.2	2.5	0.9	6.4	碧玉（玉造産）		
691	石鏃	2.6	2.1	0.8	4.1	碧玉（玉造産）		
692	尖頭器	3.0	1.6	0.8	4.5	サヌカイト		
693	滑石製紡錘車	3.0	1.8	0.3	3.8	滑石	内面に擦痕あり	

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
694	鉄	用途不明	5.6	4.0	1.3	37.4		
695	鉄	釘	4.8	1.2	0.6	11.7		
696	鉄	釘	2.3	1.4	0.6	2.1		
697	鉄	用途不明	2.1	3.6		15.6	円盤部直径が最大幅	

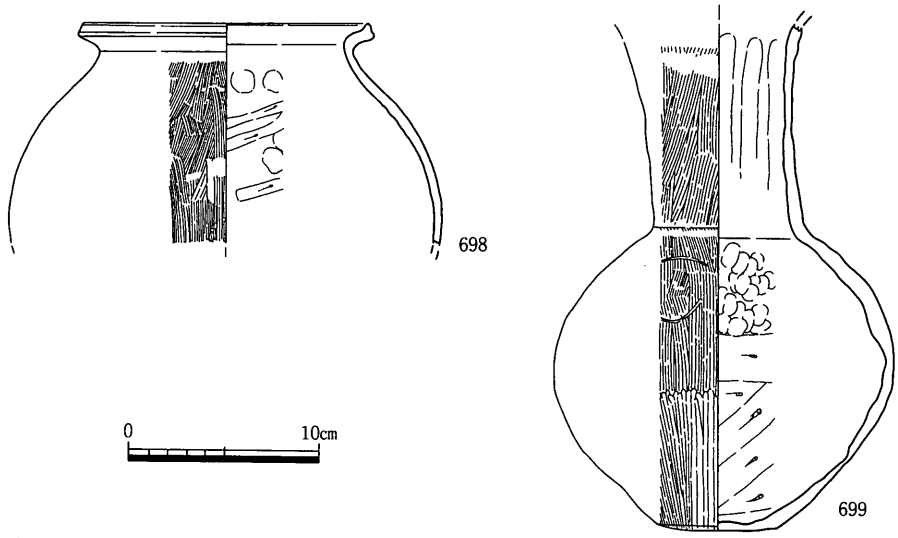
第372図　D1区包含層出土遺物（6）（1／5）

698～880はＤ２区から出土した。Ｄ２区では包含層が上下２層にわかれていたが，698・699はその内の下層から出土した。698は口縁端部を少し上につまみ上げる。胴内面はヘラケズリをするも，指押さえ痕がかいま見える。699は胴下半のみ磨く。胴上半に一種のヘラ記号なのか上下にあい対する弧線が引かれる。

700～875は上層から出土した。702はつまみのつかない蓋である。天井部は平たくヘラケズリしている。700・701はかえりのつく蓋である。かえりは小さい。702～712はかえりのつかない蓋である。712のように受け部端が明瞭に作り出されているものから711のように天井から受け部まで一直線に作られるものまである。天井部の調整は706のみヘラケズリで他は回転ナデである。711・712はⅢの蓋であろう。713は口縁端に外向きの平坦面が



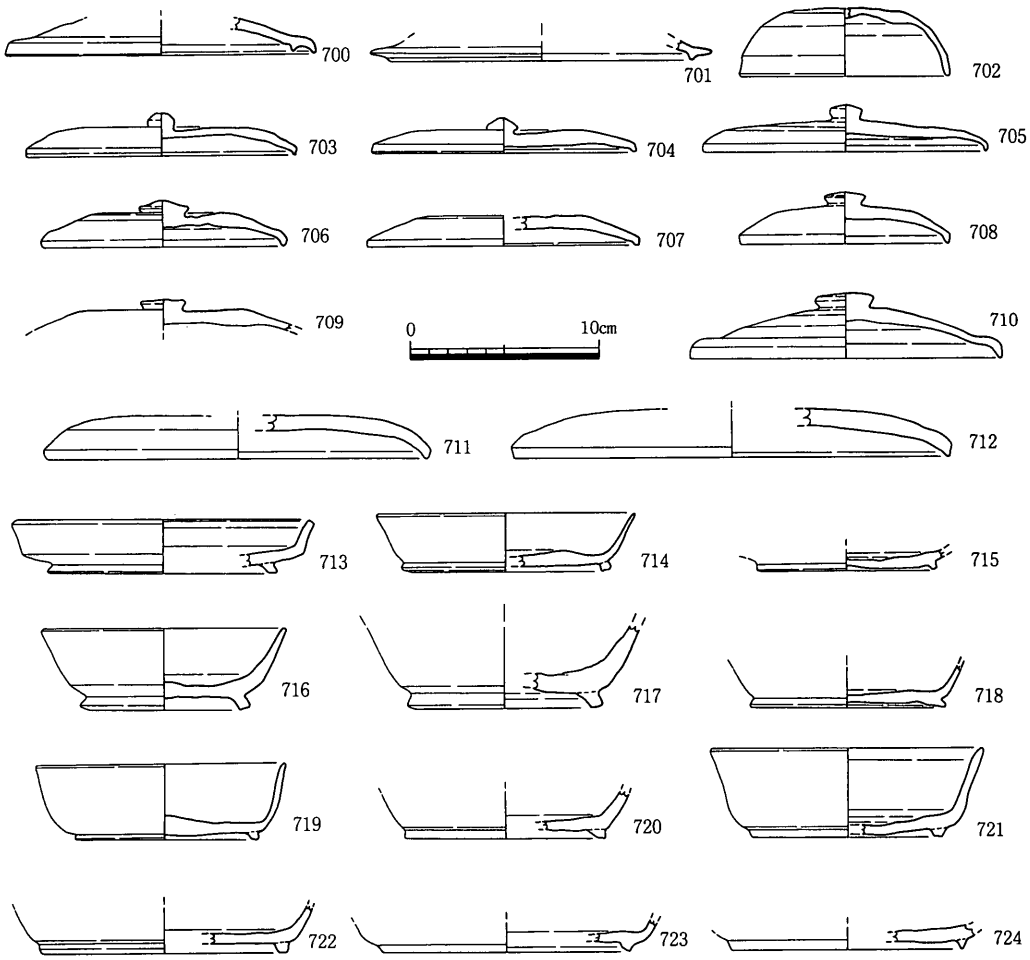
第373図　D1区包含層出土遺物（7）（1／2，1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
698	弥・甕	15.6			粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		角閃石を含む
699	弥・壺			6.2	粗・普	良好	橙	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ	ナデ・ケズリ		ヘラ記号？

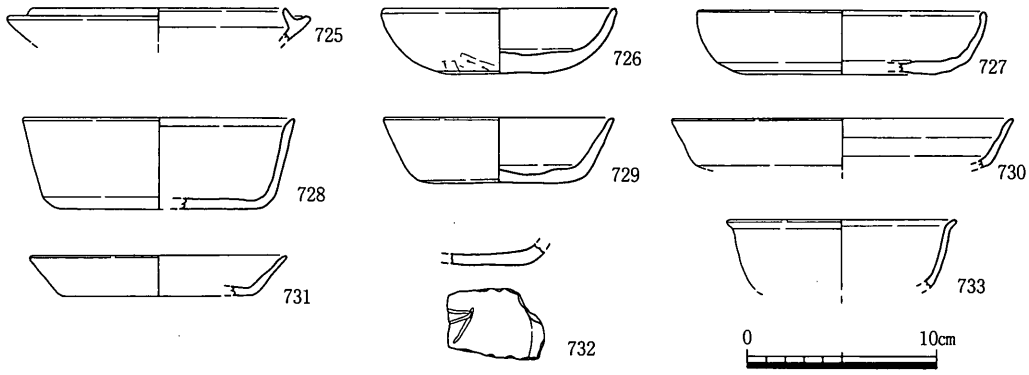
第374図　D2区包含層出土遺物（1）（1／4）

できる。また体部と底の境は鋭く折れる。高台はかなり中央よりにつく。714～724は体部が垂直に近く立ち上がるものと斜めに開くものがある。口縁端は丸い。高台は体部と底の境近くにつく。724は高台が薄い。725は立ち上がりのつく杯である。726・727は底面を静止ヘラケズリする。727は口縁端がやや厚くなり内湾する。732は底面に鳥の足跡形のヘラ



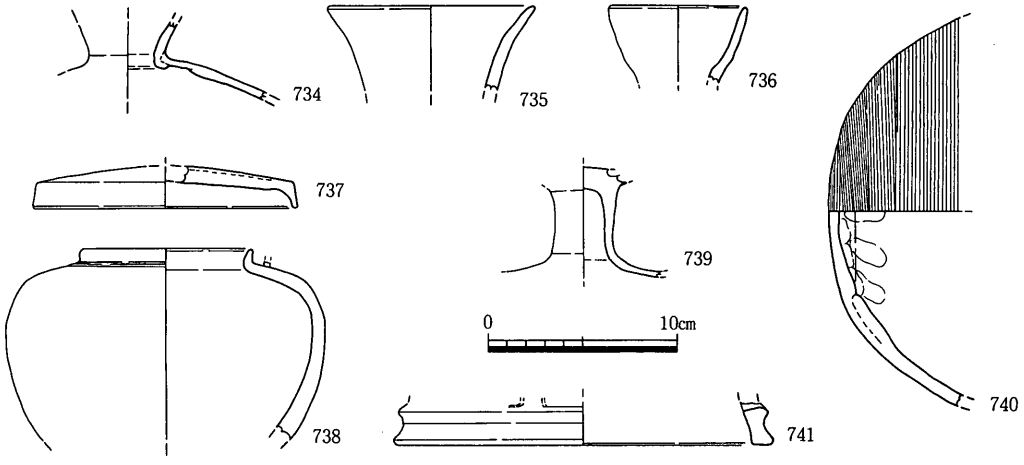
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
700	須・杯蓋	16.3			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
701	須・杯蓋	18.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
702	須・杯蓋	11.2	3.6	6.5	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	身の可能性有り
703	須・杯蓋	14.3	2.2		中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
704	須・杯蓋	14.0	1.8		微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
705	須・杯蓋	14.9	2.5		微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
706	須・杯蓋	13.0	2.4		中・普	不良	黄灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
707	須・杯蓋	14.4	1.5		中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
708	須・杯蓋	10.8	2.7		細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
709	須・杯蓋				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
710	須・杯蓋	16.5	3.4		細・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
711	須・杯蓋	20.0			微・普	良好	灰	ナデ	板ナデ		
712	須・杯蓋	23.0	2.5		微・普	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ		
713	須・高台皿	16.6	2.8	12.1	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
714	須・高台杯	13.6	3.1	11.0	細・普	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ		
715	須・高台杯			9.5	中・普	良好	灰～褐，灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
716	須・高台杯	13.0	4.3	9.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
717	須・高台杯			10.2	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
718	須・高台杯			10.3	中・普	良好	灰	ケズリ→ナデ	ナデ		
719	須・高台杯	13.1	4.0	9.7	微・普	良好	暗灰～灰，灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
720	須・高台杯			10.6	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
721	須・高台杯	14.4	4.7	10.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
722	須・高台杯			13.1	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
723	須・高台杯			13.0	微・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
724	須・高台杯			12.1	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第375図　D2区包含層出土遺物（2）（1／4）



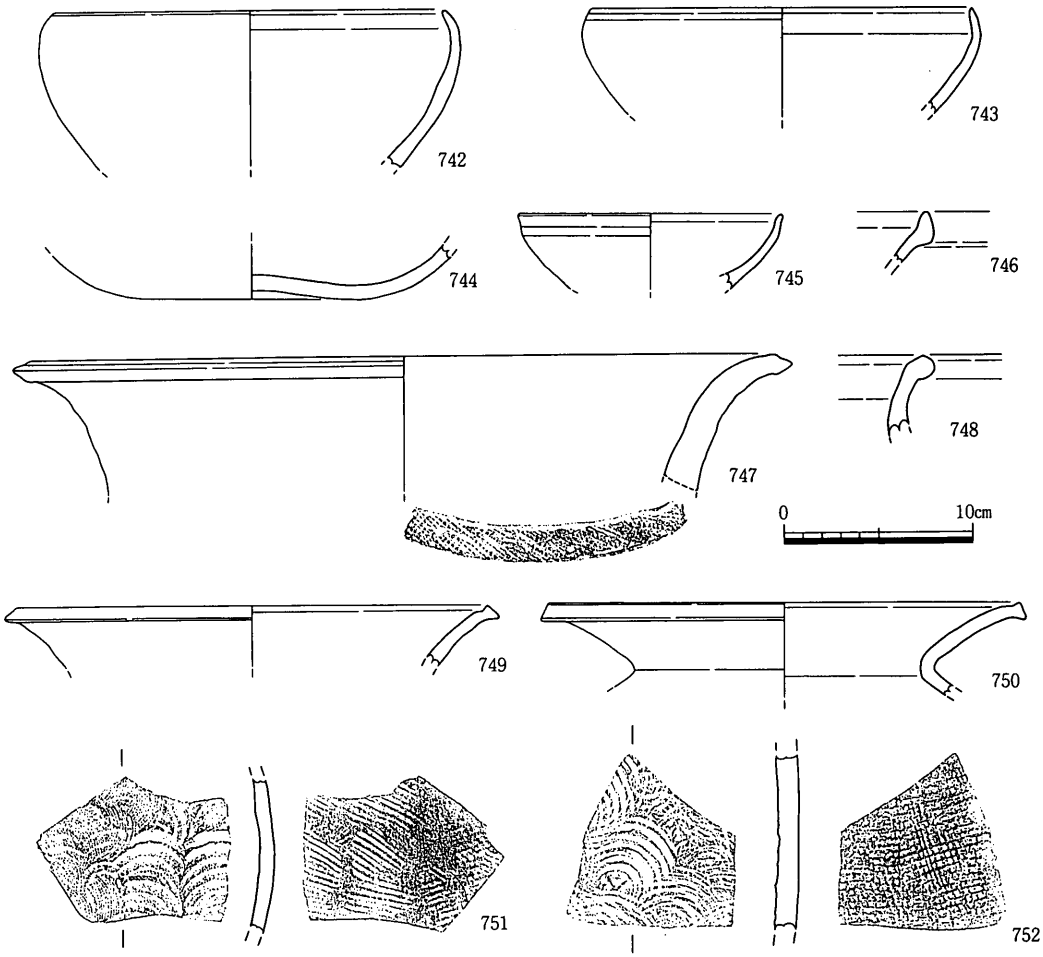
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
725	須・杯身	16.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
726	須・杯	12.4	3.4	7.0	中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
727	須・杯	15.2	3.8	11.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	蓋？
728	須・杯	14.3	4.7	11.1	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
729	須・杯	12.2	3.3	8.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
730	須・皿	18.0			中・普	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ		
731	須・皿	13.6	2.0	10.0	微・普	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ		
732	須・杯				細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		ヘラ記号
733	須・杯	12.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		重ね焼きの痕

第376図　D2区包含層出土遺物（3）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
734	須・平瓶				細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	カキ目	
735	須・壺	11.0			中・普	良好	灰オリーブ	ナデ	ナデ		
736	須・平瓶	7.1			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
737	須・壺蓋	14.0		13.4	微・普	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ		
738	須・壺	8.8			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
739	須・高杯				微・普	良好	灰，明青灰	ナデ	ナデ		
740	須・提瓶				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	カキ目	
741	須・硯			20.0	微・普	良好	暗灰	ナデ	ナデ	透かしの数不明	胎土は灰白

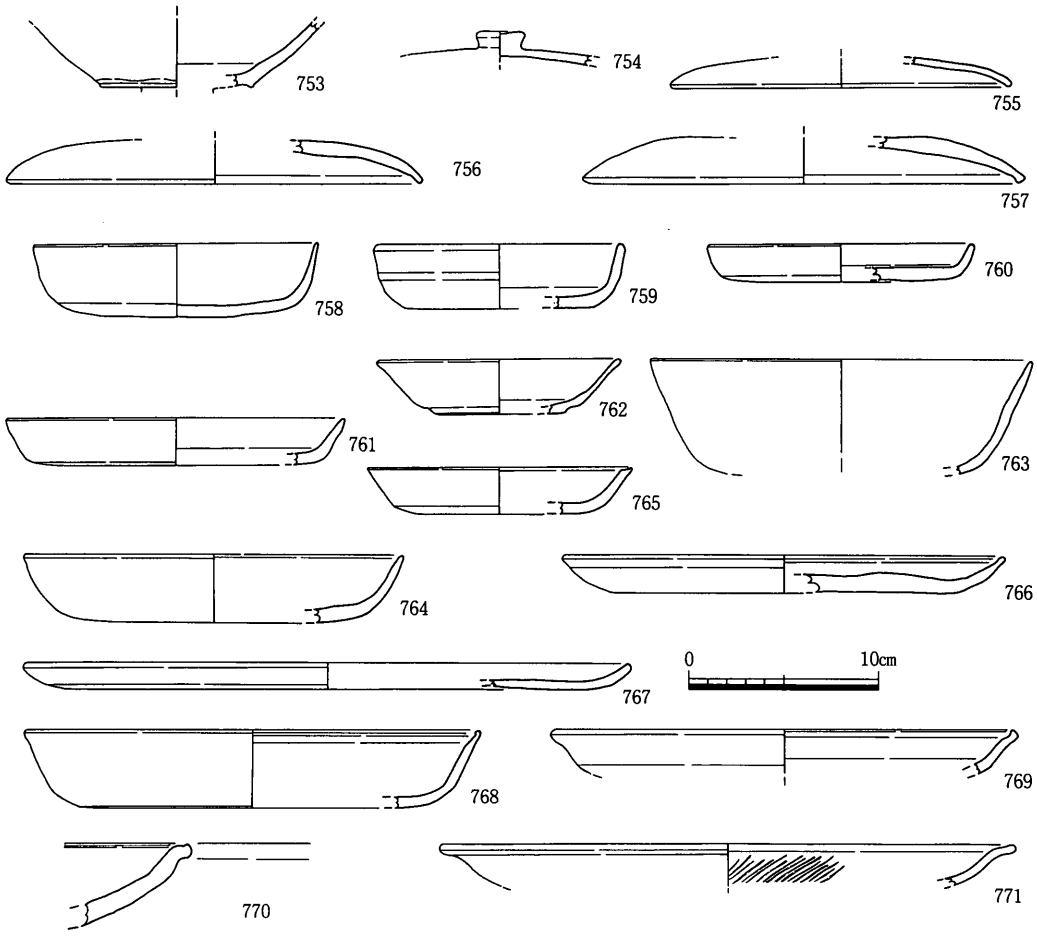
第377図　D2区包含層出土遺物（4）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
742	須・鉢	20.4			精緻	良好	青灰，灰	ナデ	ナデ		胎土は灰赤～灰
743	須・鉢	20.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		胎土は灰赤
744	須・鉢			7.9	中・普	良好	暗青灰・灰褐	ナデ	ナデ		
745	須・杯	14.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
746	須・こね鉢				細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		東播系，直ね焼き
747	須・甕	41.0			中・普	良好	灰，灰白	ナデ	ナデ	つなぎ目に格子目叩き	
748	須・甕				中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
749	須・甕	26.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
750	須・甕	24.8			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
751	須・甕				細・普	良好	灰	平行叩き	同心円文	2種の同心円文	
752	須・甕				細・普	良好	灰	格子叩き	同心円文	車輪文	

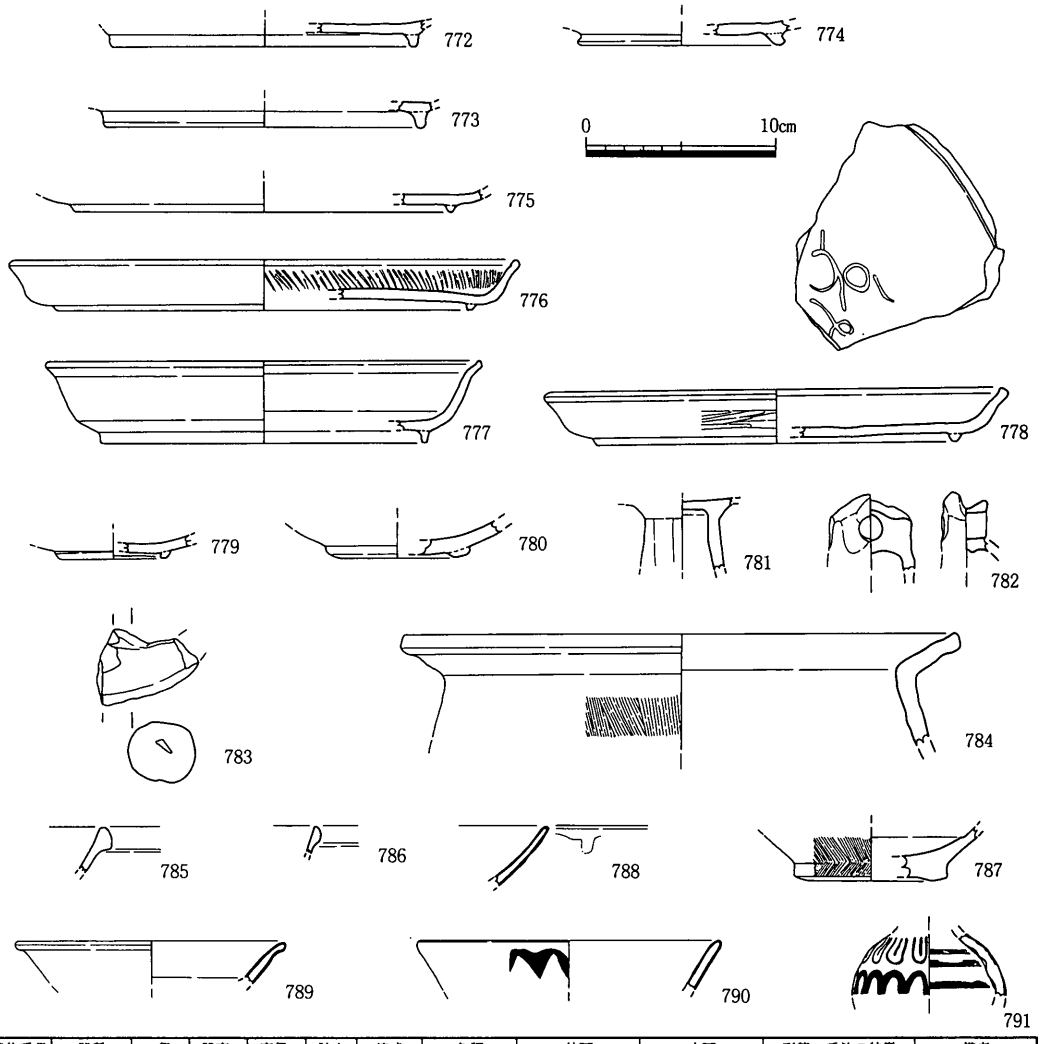
第378図　D2区包含層出土遺物（5）（1／4）

記号がかかれる。733は口縁端が大きく外湾する。734は平瓶である。体部中心にできた成形時の穴を粘土でふさぎ，あらためて少し横にずらして穴を開け，頸部を差し込みその下端を外に折り曲げて体部に接合した様子が読み取れる。735は壷の頸部である。737は壷の蓋である。738は焼成時にかぶせていた蓋が熱で融着した痕跡が残る。739は高杯にしたが



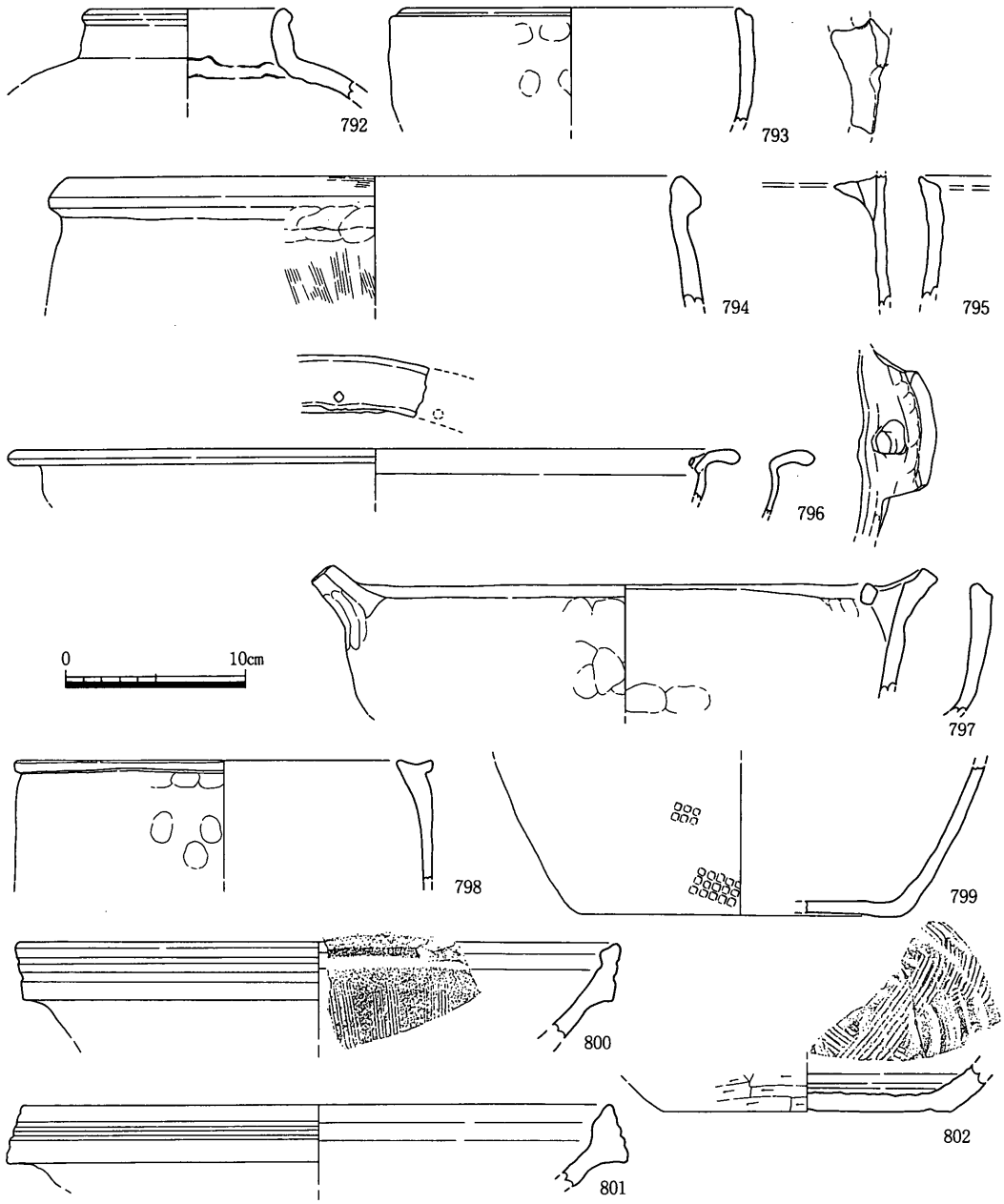
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
753	土・高杯				中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母を含む
754	土・杯蓋				微・普	良好	浅黄橙～赤褐	不明	不明	内外面に赤色顔料	
755	土・杯蓋	18.0			中・普	良好	浅黄橙～赤褐	不明	不明	内外面に赤色顔料	
756	土・杯蓋	21.9			微・普	良好	明赤褐	ナデ	ミガキ	内外面に赤色顔料	金雲母を含む
757	土・杯蓋	23.2			微・普	良好	橙～赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
758	土・杯	15.0	3.8	12.5	粗・普	良好	淡橙	ナデ	不明	内外面に赤色顔料	
759	土・杯	13.0	3.3	10.0	粗・多	良好	赤褐	ナデ	ナデ		
760	土・皿	14.0	1.9	12.6	微・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	金雲母を含む
761	土・皿	17.7	2.4	14.8	細・普	良好	橙	ナデ	不明	内外面に赤色顔料	
762	土・杯	12.8	2.8	6.8	細・普	良好	淡黄	不明	不明		
763	土・杯	20.0			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
764	土・杯	20.0	3.5	10.8	粗・普	良好	浅黄橙～赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	金雲母を含む
765	土・杯	14.0	2.4	8.0	微・普	良好	橙～浅黄橙	ナデ	ナデ	内面に赤色顔料	
766	土・皿	23.2	1.9	18.0	微・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
767	土・皿	32.0	1.4	27.6	中・普	良好	灰白～明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
768	土・杯	24.0	4.1	16.4	微・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
769	土・皿	24.5			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
770	土・杯				微・普	良好	淡橙～暗赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
771	土・皿	30.2			微・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面赤色顔料，暗文	

第379図　D2区包含層出土遺物（6）（1／4）



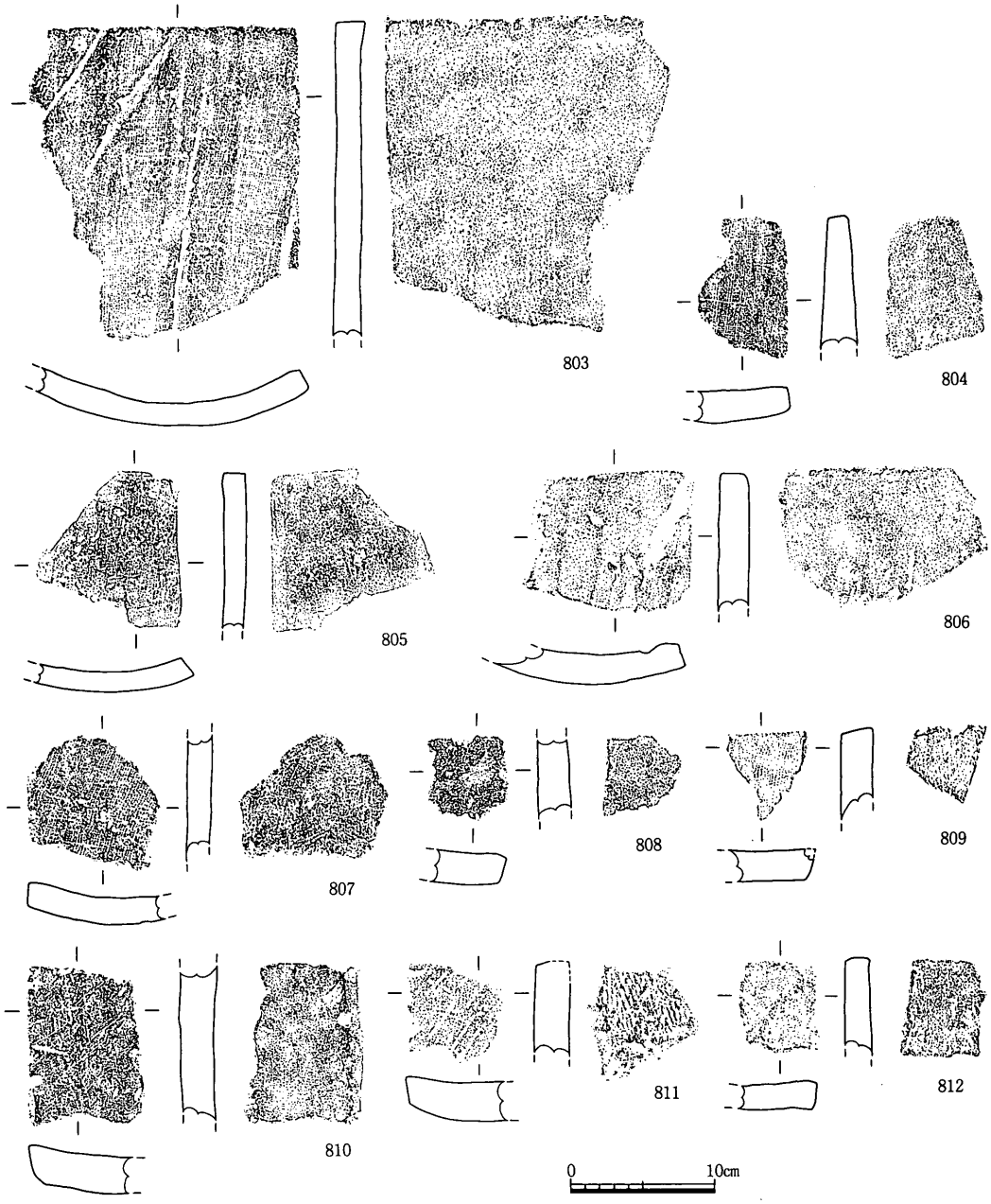
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
772	土・高台皿			16.0	微・普	良好	灰白～明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
773	土・高台皿			16.7	細・普	良好	淡黄～明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
774	土・高台皿			10.8	粗・普	良好	黄橙～明赤褐	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
775	土・高台皿			19.8	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内外面に赤色顔料	
776	土・高台皿	26.8	2.7	22.0	微・普	良好	赤褐	ナデ	ナデ	内外面赤色顔料，暗文	
777	土・高台皿	23.0	4.3	17.2	微・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ		金雲母を含む
778	土・高台皿	24.4	2.8	19.0	微・普	良好	赤褐	ミガキ・ナデ	ナデ	内外面赤色顔料，暗文	
779	土・椀			5.7	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
780	土・椀			7.7	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		瓦質土器？
781	土・高杯				微・普	良好	灰白～赤褐	ナデ	ナデ	外面赤色顔料，面取り	
782	土・蛸壺				粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
783	土・甕				粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
784	土・甕	29.0			粗・普	良好	にぶい橙～黒	ナデ・ハケ目	ナデ		
785	白・碗				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰白の釉	
786	白・碗				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰白の釉	貫入
787	白・碗			8.1	精緻	良好	灰白	ハケ目	ナデ		
788	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
789	青・碗	14.2			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	貫入
790	青・碗	16.0			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	
791	青・小壺				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	貫入

第380図　D2区包含層出土遺物（7）（1／4）



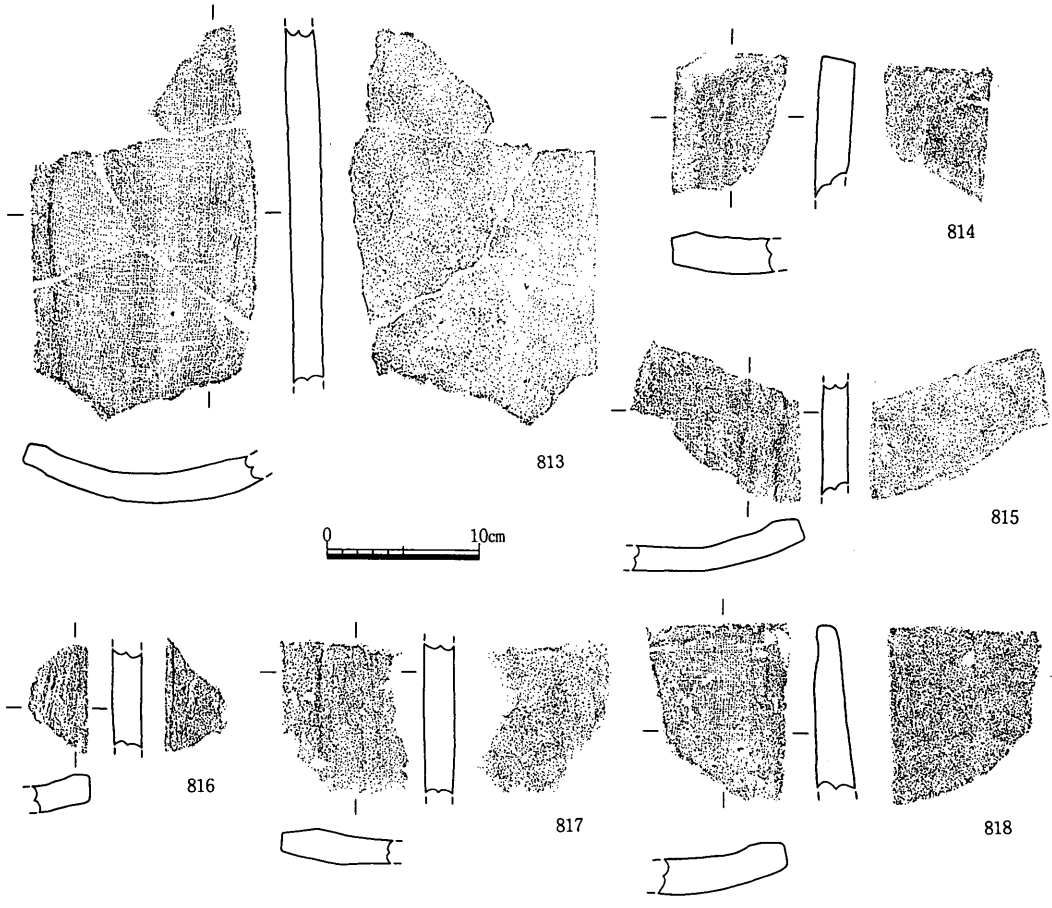
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
792	須・壺	10.7			粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
793	土・土釜	20.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	沈線	
794	土・土鍋	34.0			中・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母を含む
795	土・土鍋				中・普	良好	鈍い黄橙～黒	ナデ	ナデ		
796	土・焙烙	40.1			中・普	良好	黒褐～褐	ナデ	ナデ	穿孔の数不明	煤付着
797	土・土鍋	27.8			粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		金雲母を含む
798	土・土釜	22.8			粗・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
799	土・土鍋			17.7	中・普	良好	橙	叩き・ナデ	ナデ		
800	備・すり鉢	33.4			中・普	良好	鈍赤褐・青灰	ナデ	ナデ	条溝，沈線	備前，重ね焼き痕
801	焼・すり鉢	32.2			中・普	良好	灰白，鈍い褐	ナデ	ナデ		
802	備・すり鉢			15.8	粗・普	良好	灰～灰褐	ケズリ	ナデ	条溝	瀬焼？

第381図　D2区包含層出土遺物（8）（1／4）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
803	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	粗・普	黄灰	良好		21.5
804	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	16	粗・普	浅黄橙～橙	良好		9.8
805	平瓦	1.4	板ナデ	布目圧痕→ケズリ	1	16	粗・普	灰	良好		11.0
806	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	16	粗・普	灰白	良好		10.2
807	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	1	-	粗・普	淡黄	良好		8.5
808	平瓦	2.2	ナデ	ナデ	1	-	中・普	にぶい黄橙～灰黄	良好		6.3
809	平瓦	2.6	板ナデ	布目圧痕	-	16	粗・普	淡黄～にぶい黄橙	良好		15.9
810	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	5	-	粗・普	灰	良好		11.0
811	平瓦	2.6	縄目叩き	ナデ	5	16	粗・普	灰白	良好		6.0
812	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	-	16	中・普	灰	良好		9.5

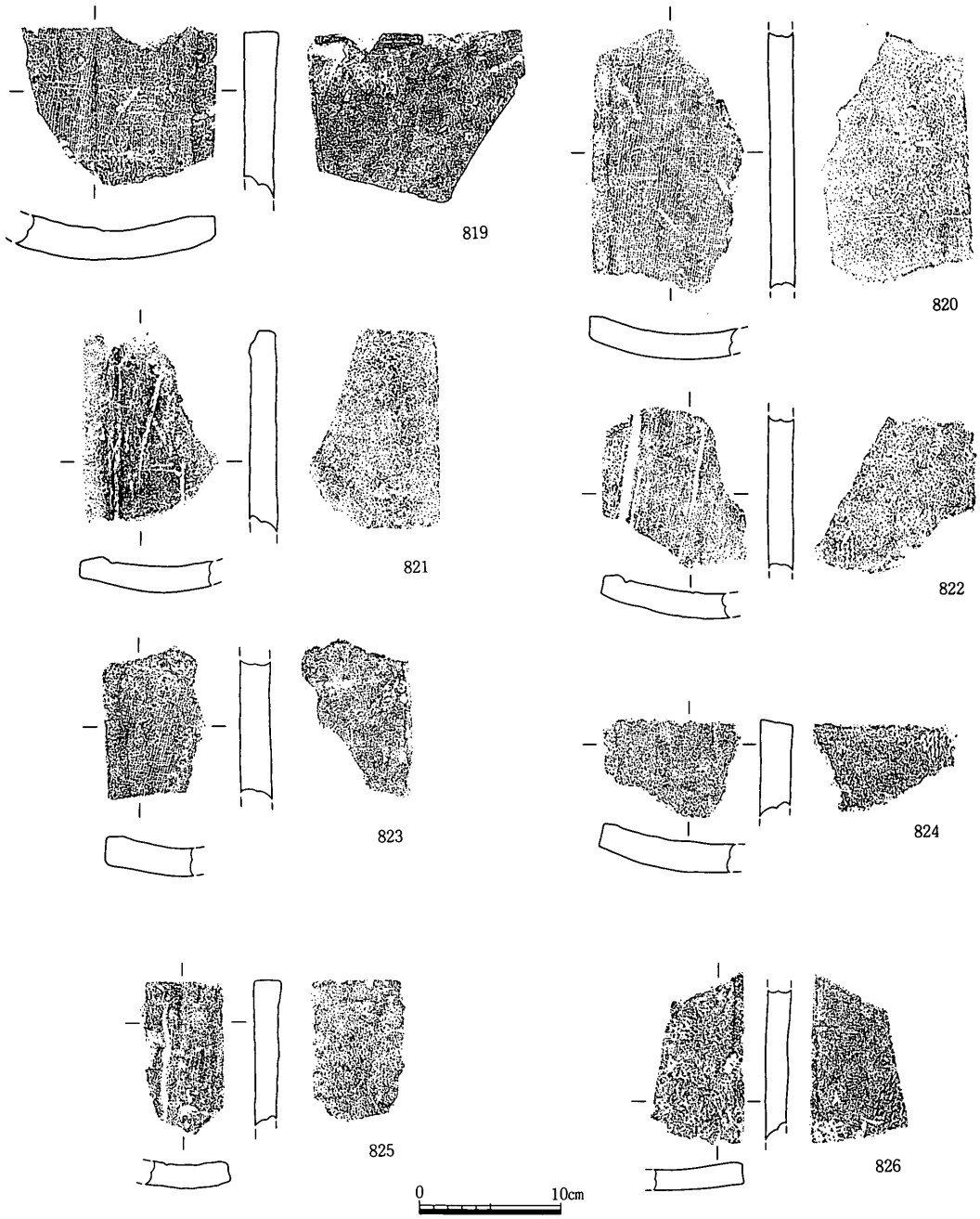
第382図　D2区包含層出土遺物（9）（1／5）



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
813	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	4	-	粗・普	ｵﾘｰﾌﾞ褐，暗灰黄	良好		22.5
814	平瓦	2.3	板ナデ	布目圧痕	6	17	粗・普	灰白～暗褐	良好		8.8
815	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	-	粗・普	黒	良好	胎土は灰白，いぶし	6.8
816	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	-	7	中・普	淡黄	良好		7.3
817	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	-	粗・普	灰黄～黒褐	良好		10.0
818	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	8	18	粗・普	灰白～淡黄	良好	成形台の外枠の痕らしきものあり	12.0

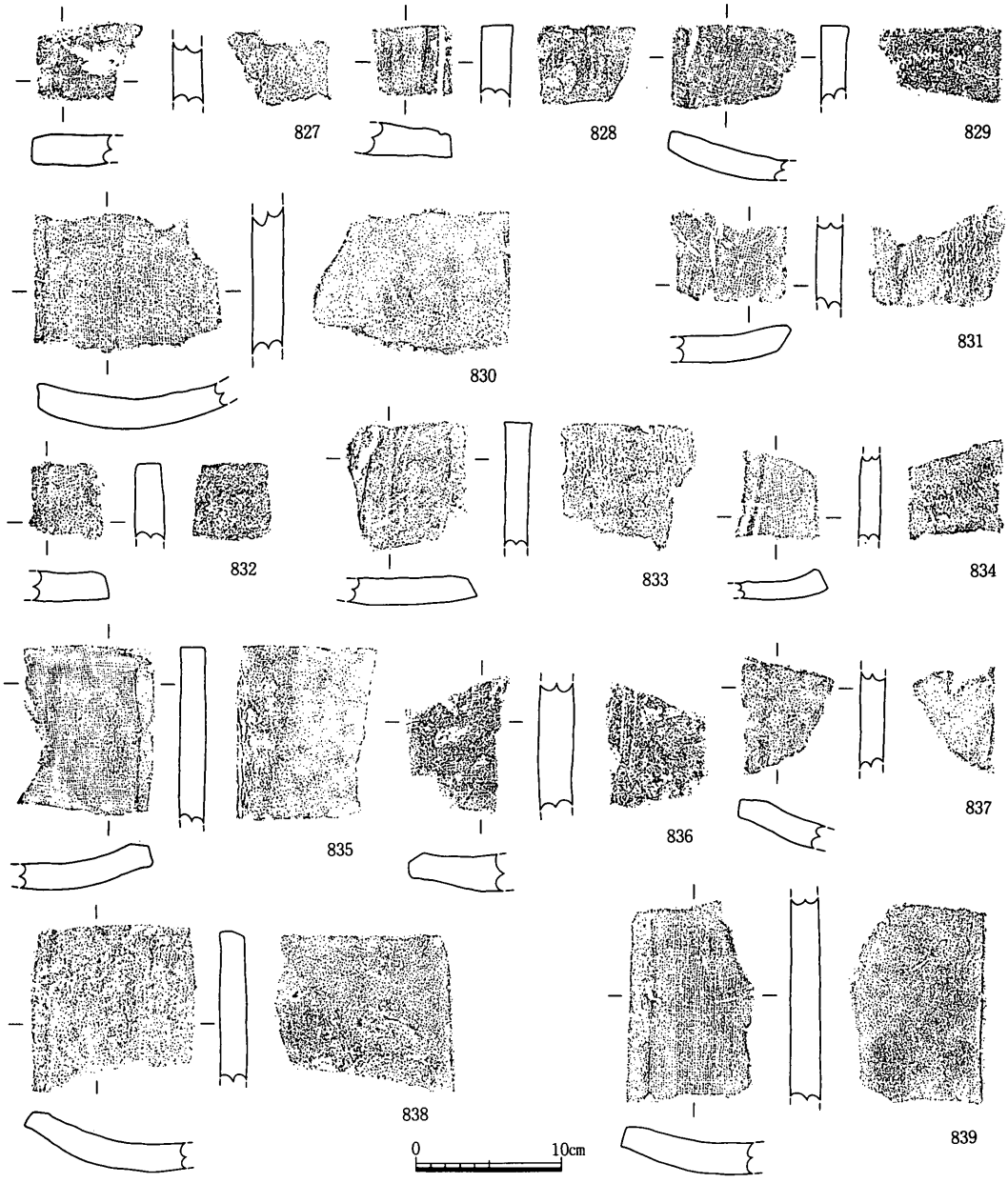
第383図　D2区包含層出土遺物（10）（1／5）

裾が平に開く。740は外面にカキ目を入れる。内面には成形時にできた穴を粘土でふさいだことが見て取れる。741は透しの数は不明である。742～744はいわゆる鉄鉢形の品である。745は断面の厚さから底部が平たくなると考えられる。口縁直下が若干すぼむことから702や725と同じ時期のものであろう。746はこね鉢である。口縁部に重ね焼きのための変色ができていることから県外からの搬入品と考えられる。747は大型の甕である。接合面で剥離し，その面には細かい格子目の叩き痕が認められる。口縁部のみを作ったときの叩き締めによってついたものであり，内面は付着した粘土の下に叩き目が潜り込んでいることから，本来あった内面の叩き目は頸部と胴部を接合した後にナデ消されたことがわか



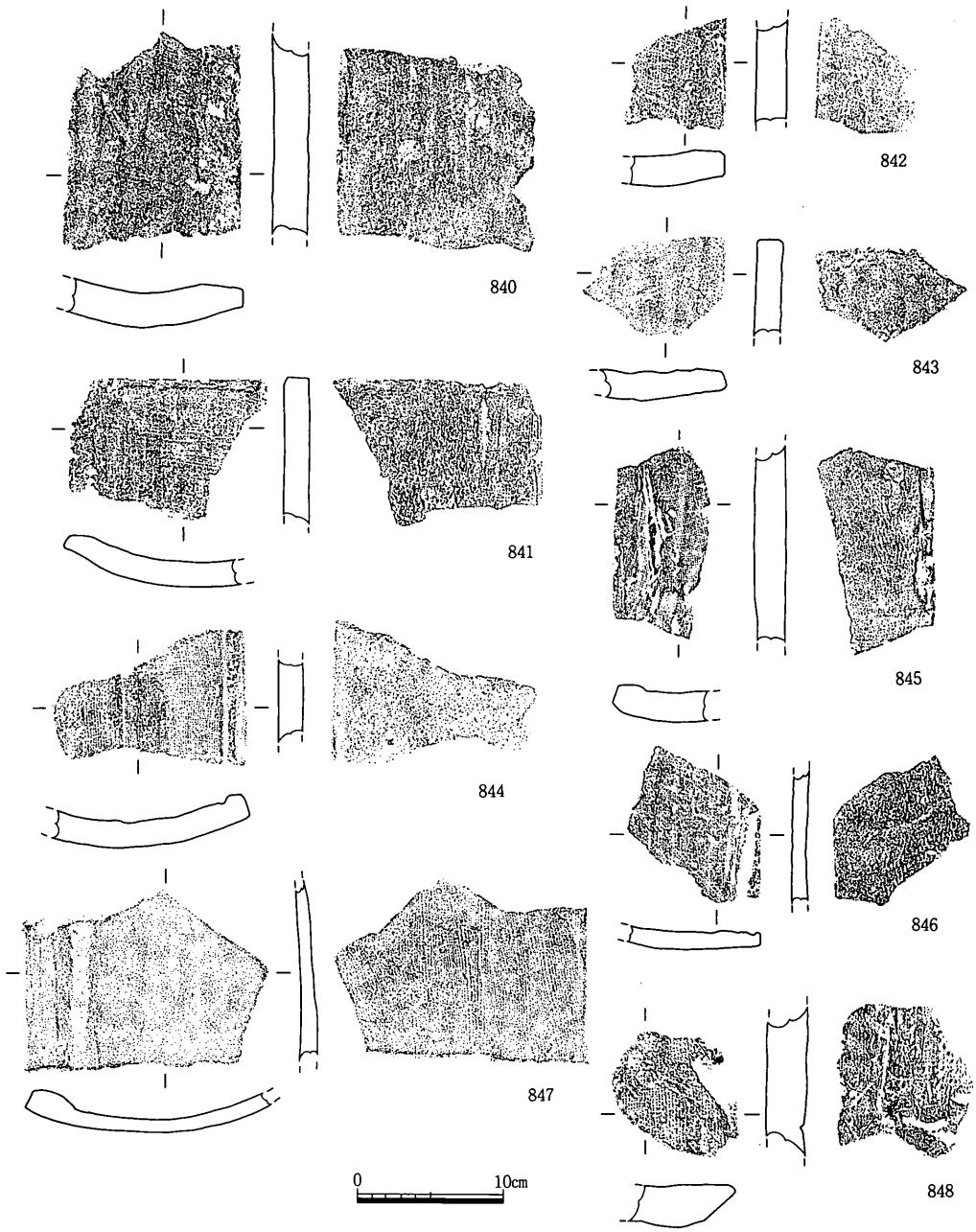
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
819	平瓦	2.3	板ナデ	布目圧痕	4	16	粗・普	灰白	良好		11.1
820	平瓦	1.7	板ナデ	布目圧痕	8	-	中・普	黒褐	良好		18.5
821	平瓦	1.9	板ナデ	布目圧痕→ナデ	8	16	粗・普	淡黄	良好		14.0
822	平瓦	1.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	8	-	粗・多	灰白	良好		11.2
823	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	4	-	粗・普	灰白～灰黄	良好		12.0
824	平瓦	2.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	16	中・普	淡黄	良好		6.0
825	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	16	粗・普	灰白	良好		10.8
826	平瓦	1.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	-	中・普	淡黄	良好		12.0

第384図　D2区包含層出土遺物（11）（1／5）



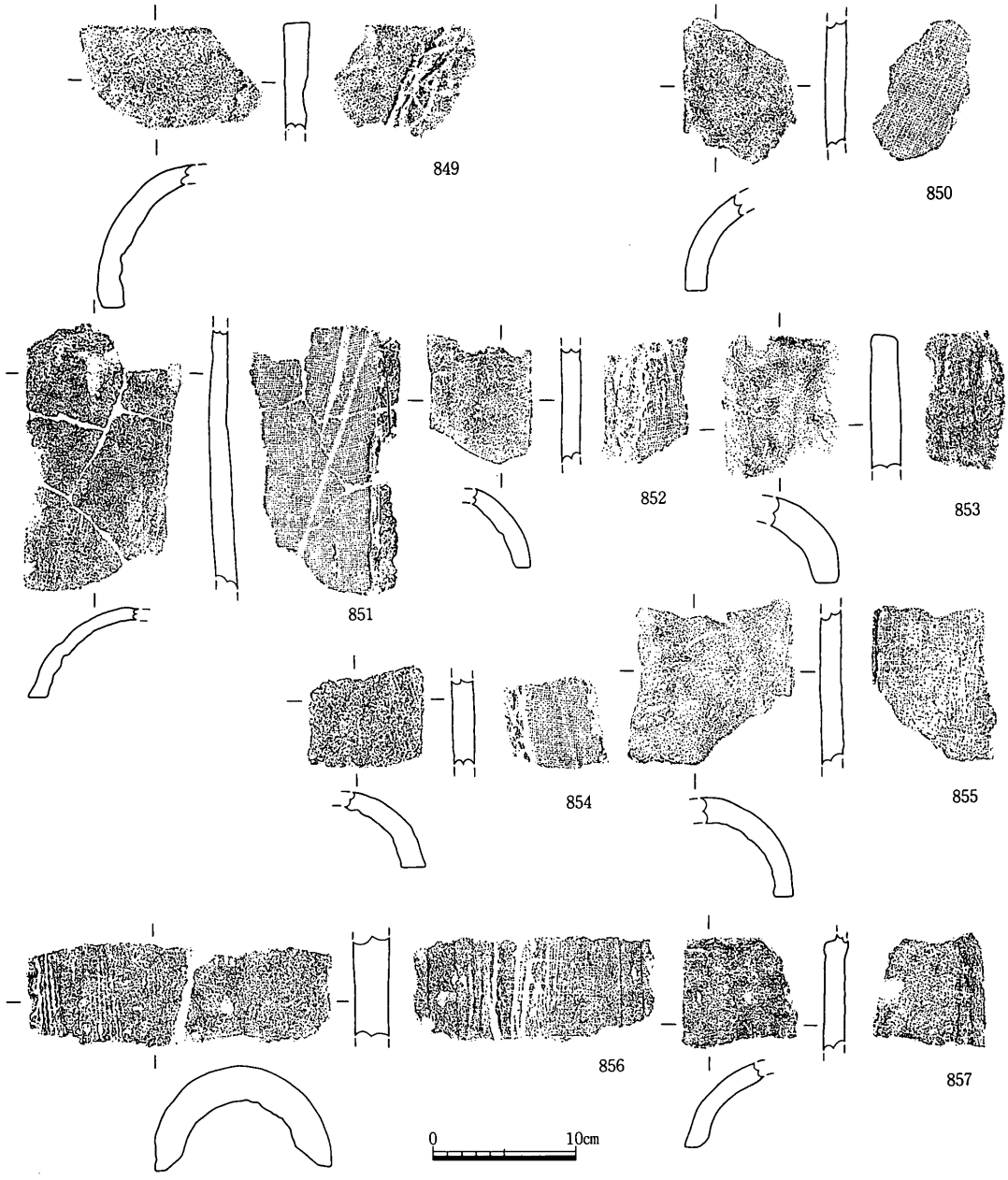
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
827	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	-	粗・普	灰白	良好		5.2
828	平瓦	2.2	板ナデ	布目圧痕・ケズリ	8	16	中・普	黒	良好	胎土は灰，いぶし	5.3
829	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	16	粗・普	灰白	良好	金雲母を含む	5.0
830	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	7	-	粗・普	暗灰黄～黒褐	良好		9.0
831	平瓦	1.7	縄目叩き	布目圧痕	5	-	中・普	淡黄橙	良好		5.5
832	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	2	16	粗・普	灰	良好	いぶし	5.3
833	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	3	16	粗・普	灰白	良好		8.5
834	平瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	2	-	粗・普	灰白	良好		6.5
835	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	6	16	中・普	明オリーブ灰	良好		11.6
836	平瓦	2.5	ナデ→縄目叩き	布目圧痕→ナデ	6	-	粗・普	にぶい黄橙褐	良好		9.8
837	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	8	-	中・普	暗灰	良好		8.0
838	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	2	17	中・普	淡黄	良好		11.0
839	平瓦	2.2	板ナデ	布目圧痕・ケズリ	8	-	粗・普	淡黄	良好		13.8

第385図　D2区包含層出土遺物（12）（1／5）



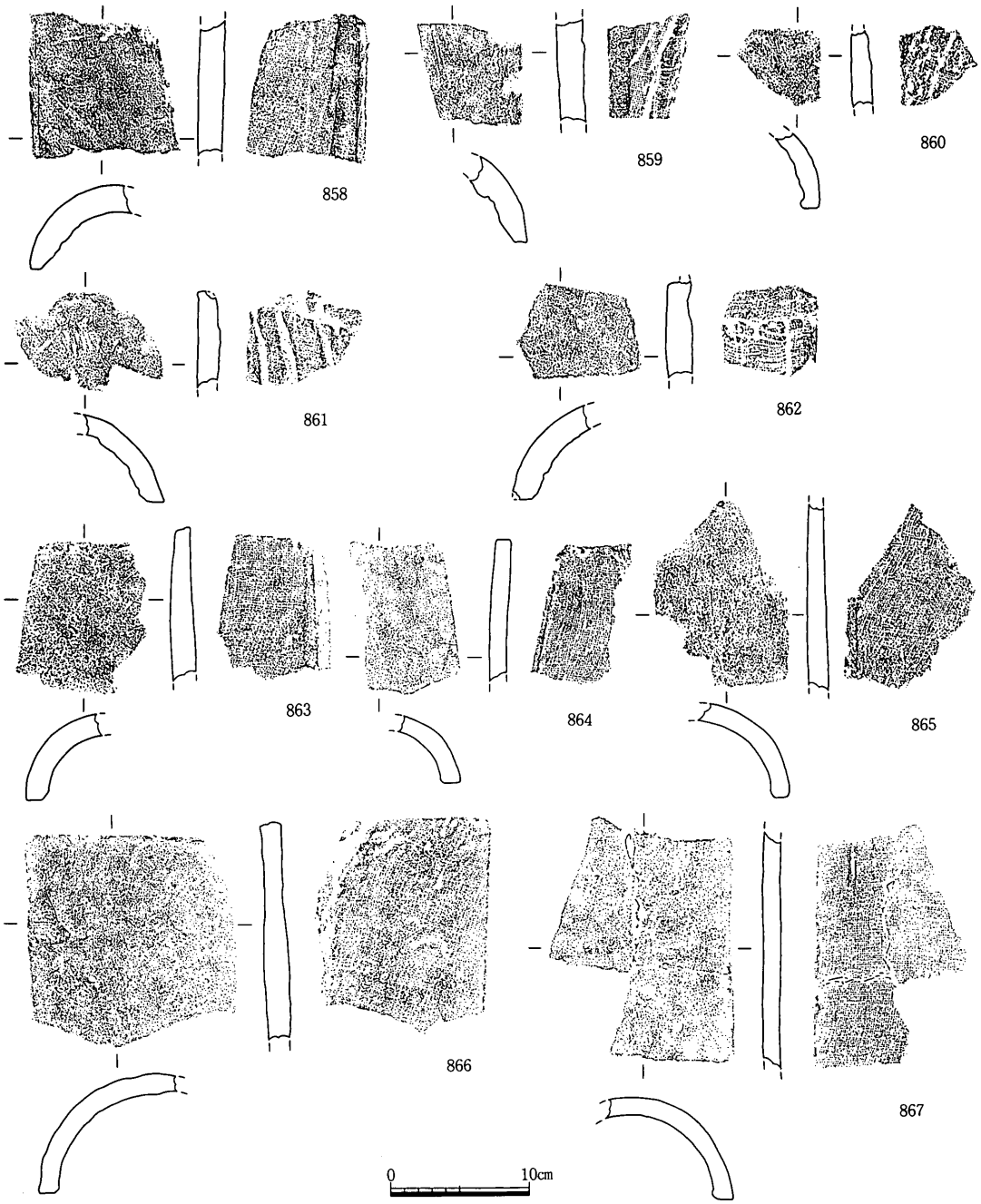
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
840	平瓦	2.4	板ナデ	布目圧痕→ナデ	3	-	粗・普	淡黄	良好		13.7
841	平瓦	1.7	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕→ナデ	3	18	中・普	灰白	良好		9.9
842	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	-	中・普	灰白	良好		6.8
843	平瓦	2.0	ナデ	ナデ	1	16	粗・普	灰白～明褐	良好		6.8
844	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	2	-	粗・普	褐	良好		9.2
845	平瓦	2.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	4	-	粗・普	淡黄	良好		14.2
846	平瓦	1.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕・ナデ	10	-	粗・普	灰白～暗灰黄	良好		8.9
847	平瓦	1.1	ハケ目	ナデ	3	-	中・普	灰白	良好		12.4
848	平瓦	2.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	5	-	粗・普	灰黄	良好		12.0

第386図　D2区包含層出土遺物（13）（1／5）



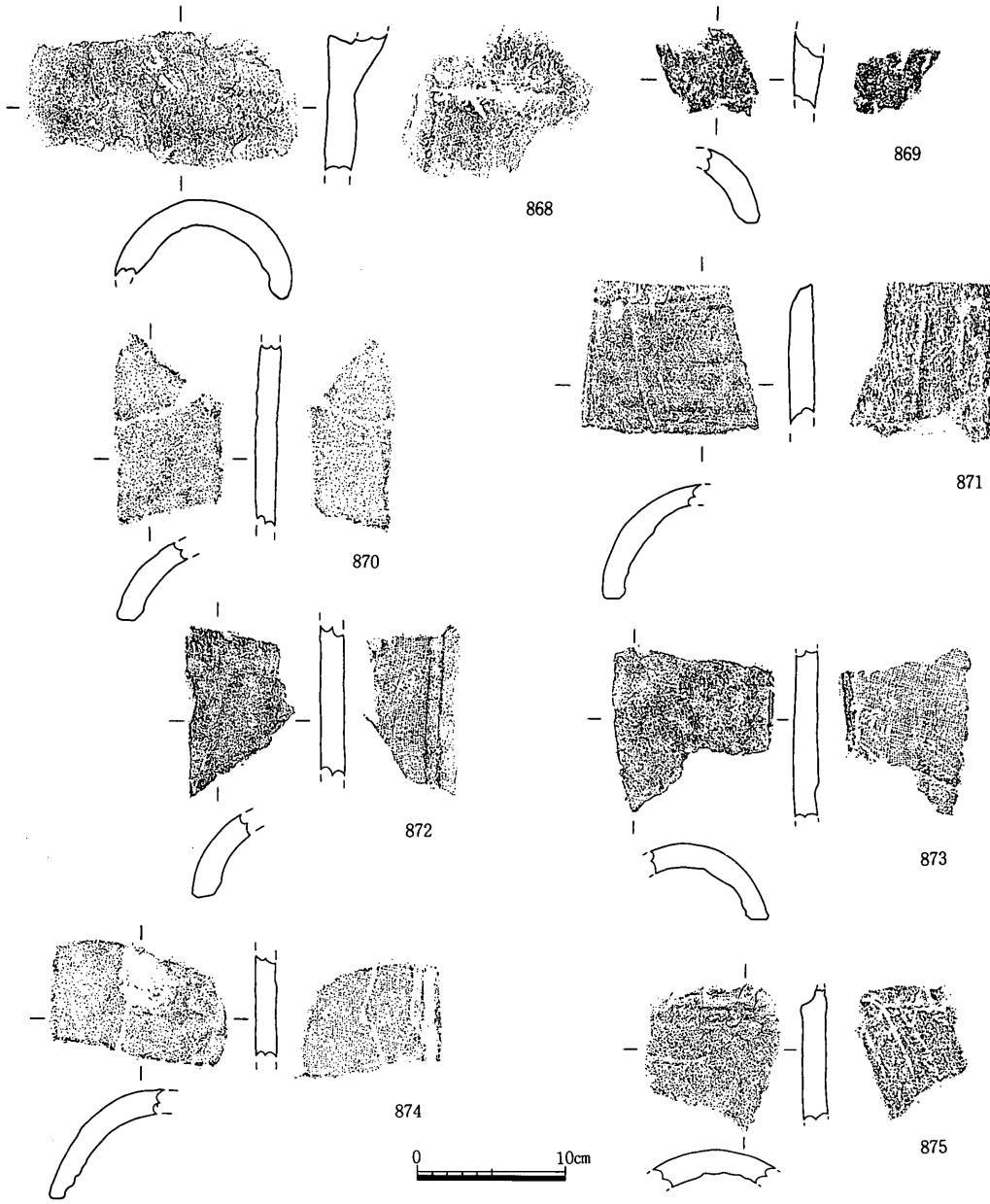
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
849	丸瓦	1.7	ナデ	ナデ	11	16	粗・普	灰白	良好		7.3
850	丸瓦	1.5	板ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	灰白～黒褐	良好		8.9
851	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・多	灰黄～にぶい黄褐	良好		14.5
852	丸瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰白	良好		7.6
853	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	11	17	粗・普	にぶい黄橙～灰	良好		10.0
854	丸瓦	1.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	11	-	粗・普	青灰	良好	須恵質	8.0
855	丸瓦	1.6	板ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	暗灰	良好	いぶし	10.7
856	丸瓦	2.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	13	-	粗・普	灰	良好		7.2
857	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰白～灰	良好	いぶし	8.3

第387図　D2区包含層出土遺物（14）（1／5）



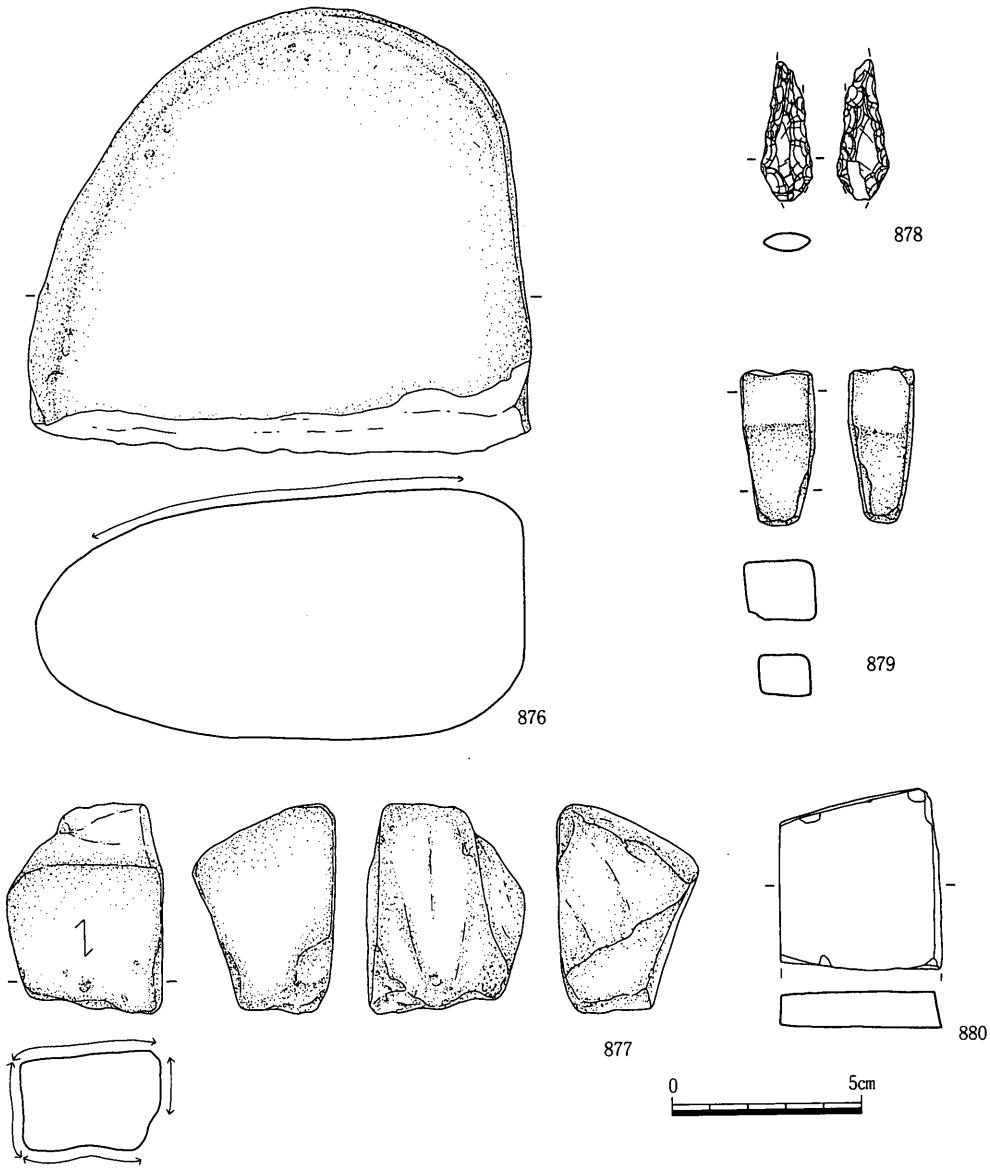
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
858	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰白	良好		10.3
859	丸瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰白	良好		7.3
860	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	12	-	粗・普	灰白	良好		5.4
861	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	12	-	中・多	灰	良好		7.0
862	丸瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰	良好		7.0
863	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	12	16	中・普	浅黄橙	良好		11.1
864	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	12	16	中・普	灰白	良好		10.4
865	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	黄橙	良好		13.1
866	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	12	16	粗・普	灰白～黒褐	良好		15.9
867	丸瓦	1.3	板ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰黄	良好		16.5

第388図　D2区包含層出土遺物（15）（1／5）



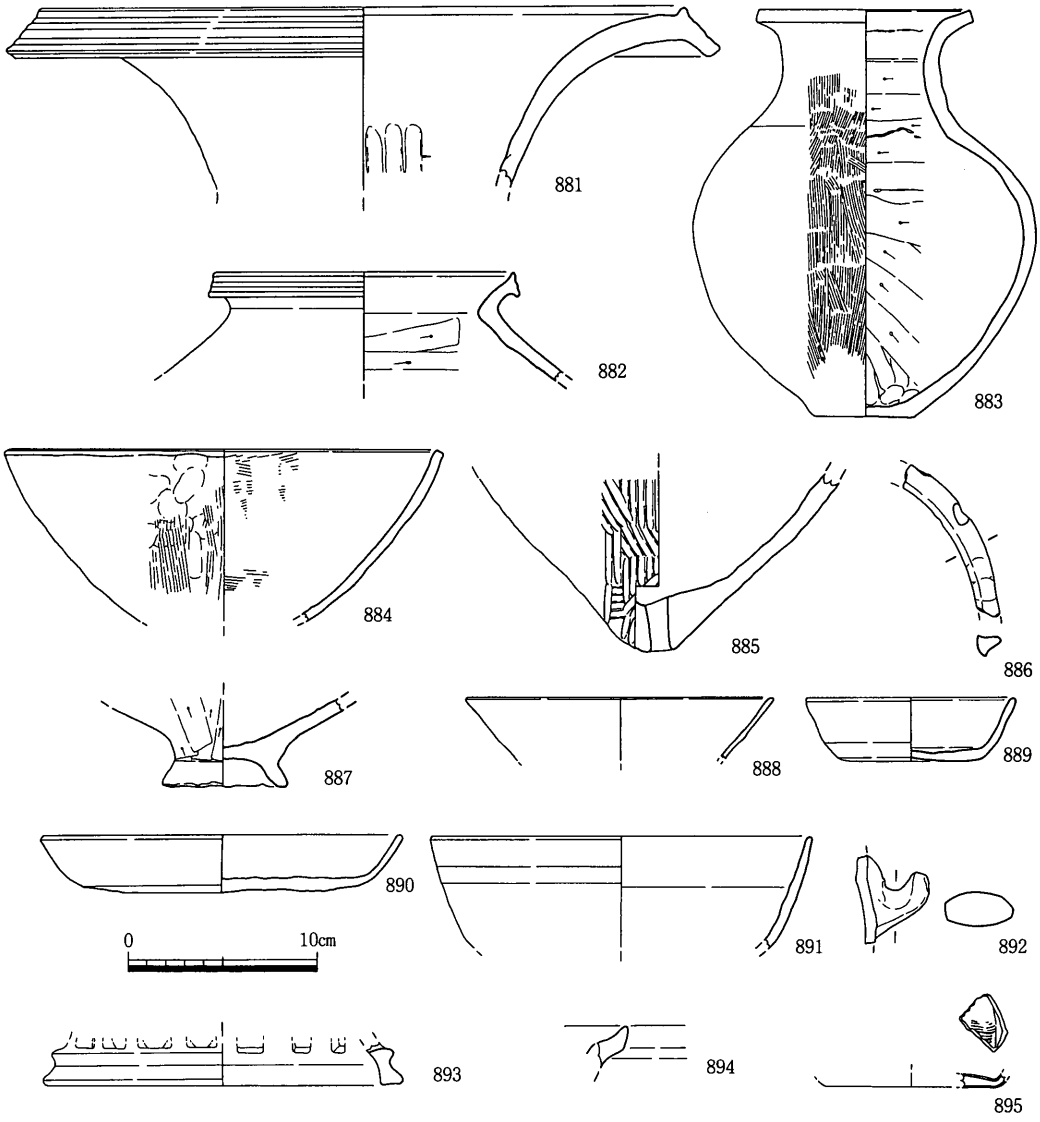
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
868	丸瓦	1.7	板ナデ	布目圧痕→板ナデ	12	-	粗・普	灰白	良好		9.3
869	丸瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	暗灰	良好		8.3
870	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	灰白	良好		9.9
871	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	12	19	粗・普	橙～浅黄橙	良好		10.3
872	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	13	-	粗・普	灰黄	良好		11.1
873	丸瓦	1.7	板ナデ	布目圧痕	12	-	中・普	黄灰～暗灰黄	良好		11.1
874	丸瓦	1.6	ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	淡黄	良好		7.0
875	丸瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	-	-	粗・普	淡黄	良好	胎土は淡黄～黄灰	8.5

第389図　D2区包含層出土遺物（16）（1／5）



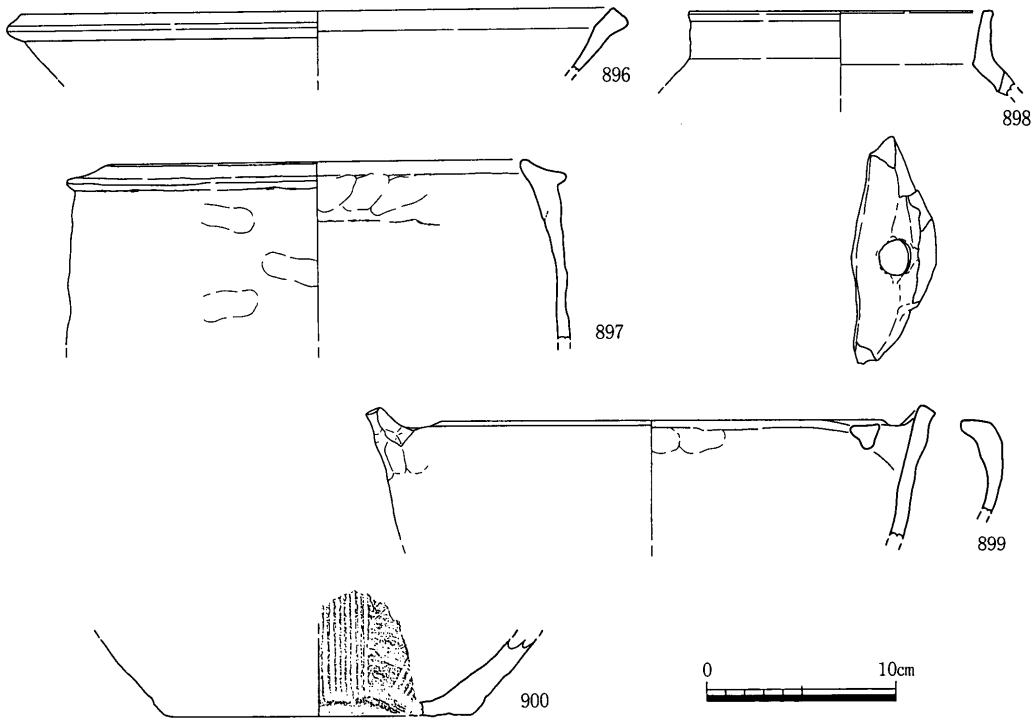
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
876	砥石	13.2	11.5	6.5	1412	砂岩		
877	砥石	5.5	4.1	3.7	87	流紋岩		
878	石鏃	3.6	1.3	0.5	2.2	サヌカイト		
879	楔	4.0	1.9	1.6	17	流紋岩		
880	用途不明品	4.8	4.1	1.0	38	流紋岩		

第390図　D2区包含層出土遺物（17）（1／2）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
881	弥・壺	33.7			微・普	良好	灰黄・鈍い褐	ナデ	ナデ		金雲母を含む
882	弥・甕	16.4			粗・多	良好	にぶい橙～橙	ナデ	ナデ・ケズリ	沈線文	
883	弥・壺	11.4	21.0	5.2	粗・多	良好	鈍黄橙～褐灰	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
884	弥・鉢	23.2			粗・普	良好	黄橙～明赤褐	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
885	弥・甑				中・普	良好	橙，黒	叩き	板ナデ		金雲母を含む
886	弥・不明	20.0			中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		壺の突帯？
887	弥・鉢			6.6	粗・多	良好	灰白	ケズリ・ナデ	板ナデ		
888	土・椀	16.2			中・普	良好	灰白	不明	不明		
889	土・杯	10.8	3.3	7.7	中・多	良好	灰白～黒褐	ナデ	ナデ		
890	須・皿	19.0	3.5	13.0	粗・普	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
891	須・鉢	20.0			粗・普	良好	暗青灰・灰	ナデ	ナデ		
892	須・甕				中・普	良好	灰ｵﾘｰﾌﾞ，灰	ナデ	ナデ		胎土は赤灰
893	須・硯			19.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	透かしは16ヶ所？	
894	須・こね鉢				精緻	不良	灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白
895	宵・皿			9.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	灰オリーブ釉，櫛描文	

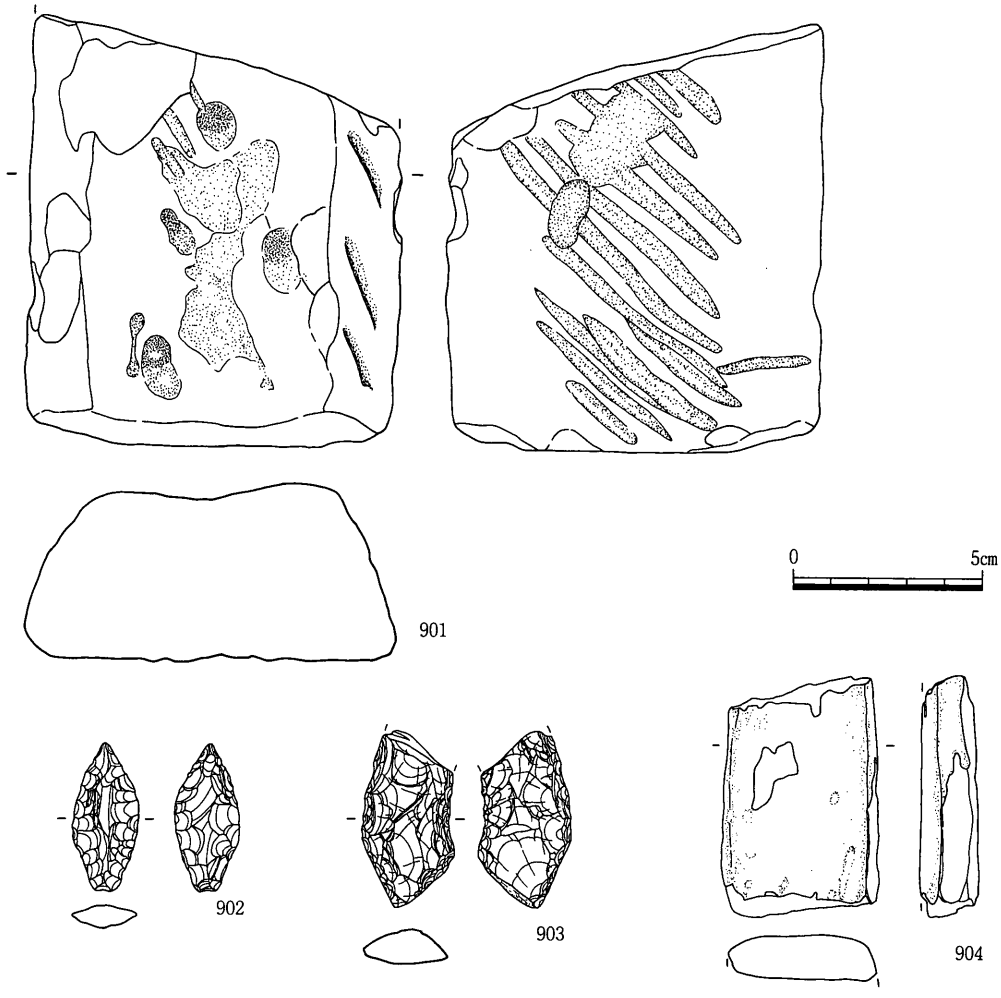
第391図　D3区包含層出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
896	瓦・焙烙	31.2			細・普	良好	黒	不明	ナデ		
897	土・土釜	22.2			中・普	良好	浅黄橙～黄橙	ナデ	ナデ		煤付着
898	土・釜	16.2			粗・多	良好	灰	ナデ	ナデ	穿孔の数不明	
899	土・土鍋	30.0			粗・普	良好	浅黄橙～黄橙	ナデ	ナデ		煤付着
900	焼・すり鉢			16.2	粗・普	良好	灰褐	ナデ	ナデ	条溝	胎土は赤橙

第392図　D3区包含層出土遺物（2）（1／4）

る。751は甕の胴部片である。内面のあて具には同心円の密度の違う2種類のあて具をもちいている。752の内面のあて具は同心円の中心に十字の切れ込みをいれている。753は古墳時代の高杯の杯部下半である。754～758・764・766～776・778は内外面に赤色顔料を塗る。また760・761・781は外面に，765は内面に赤色顔料をそれぞれ塗る。755は作りが薄い。756・757は小さな段によって受け部をつくりだしている。760は口縁端部に小さな平坦面ができる。765は口縁端部に中央のややくぼんだ内傾する平坦面がある。766・768・769は口縁内面に沈線がめぐる。770・771は口縁端部が外に水平近くまで曲げられ，770は沈線がそのうえをめぐる。771は内面に放射状の暗文が描かれる。776は内面に沈線がめぐり，放射状の暗文が体部に描かれる。777も口縁内面に沈線がめぐる。778は外面は磨かれ，内面は見込みに螺旋状暗文を描く。779・780は粘土を単に貼りつけただけの高台である。781は脚部を板ナデで面取りしている。782は蛸壷の紐とおしの部分である。783は甕類の

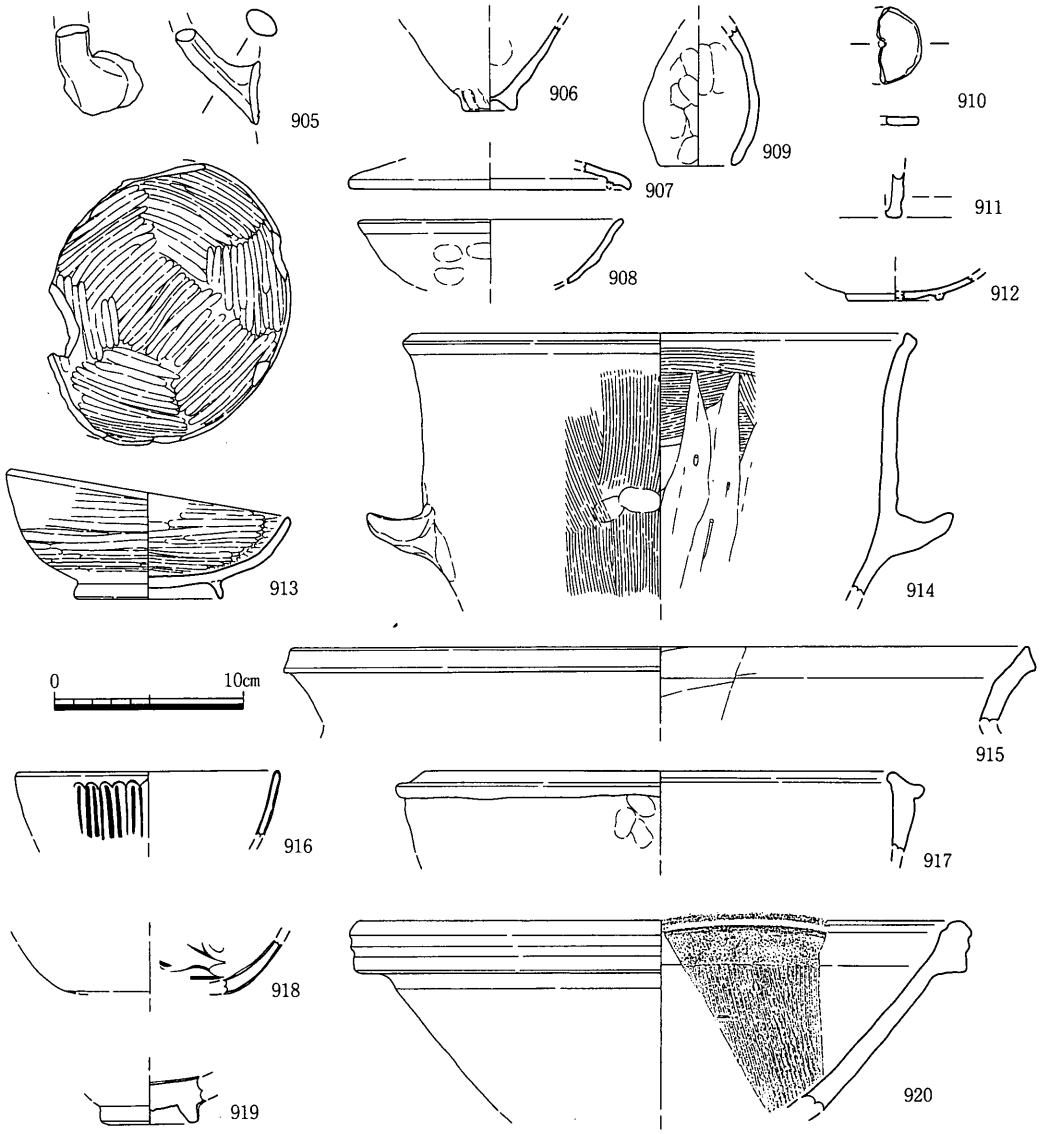


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
901	用途不明品	11.0	9.9	4.6	456	凝灰質砂岩		
902	石鏃	3.9	1.7	0.6	2.4	サヌカイト		
903	石小刀？	4.7	2.2	0.9	12	サヌカイト		
904	柱状片刃石斧	6.0	4.1	1.4	70	緑泥片岩		

第393図　D3区包含層出土遺物（3）（1／2）

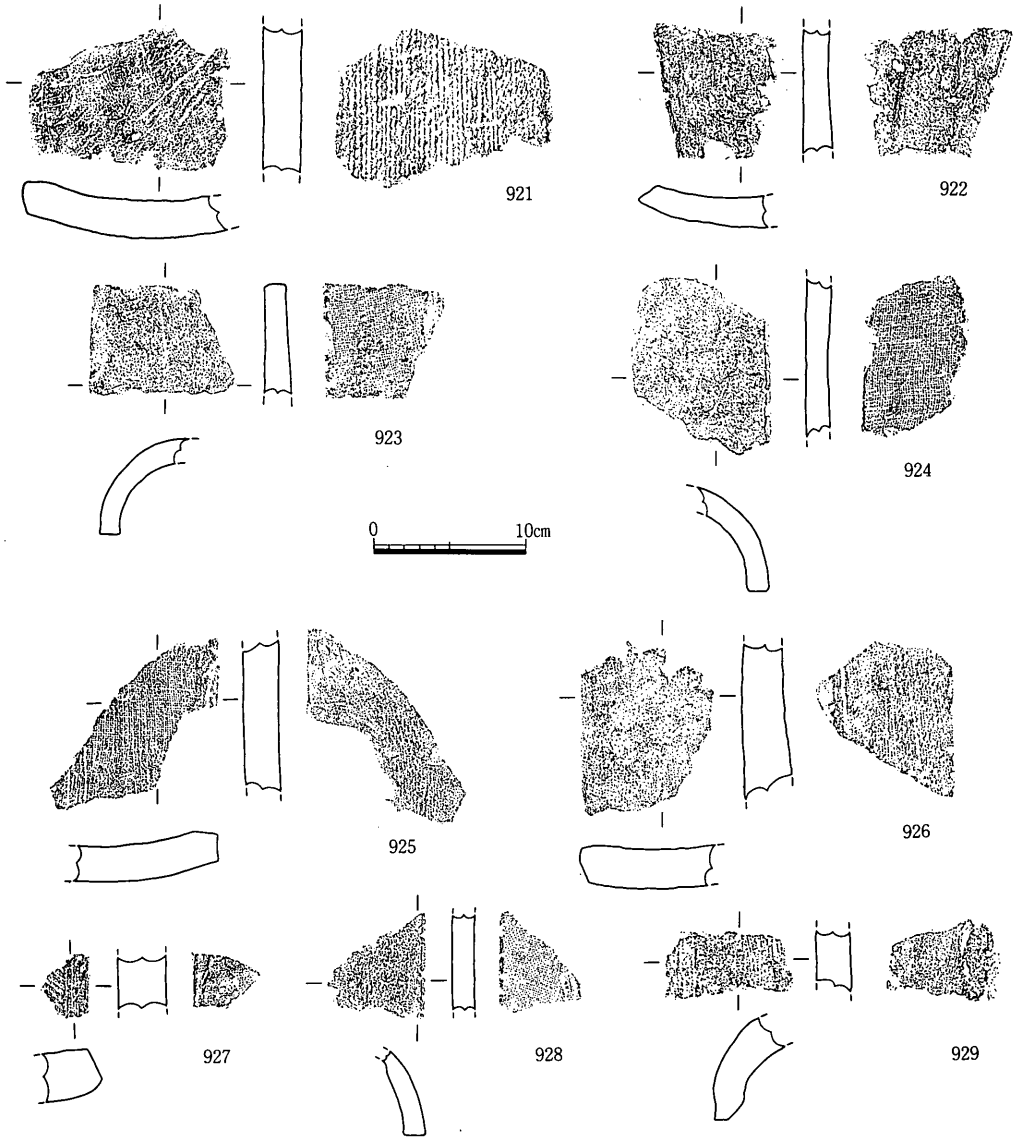
把手である。787は外面に綾杉文が描かれる。790は外面に蓮弁を描く。791は釉のかかり具合が稚拙である。近世以降の国産の青磁と考えられる。795は内耳付きである。796は18世紀の土師質焙烙である。外面と鍔上面に煤が付着する。破片のため傾きは確定できない。799は土鍋類の底である。800は口縁部外面が変色しており備前焼と考えられる。17世紀後半以降のものである。801は18世紀以降の堺または明石焼であろう。802は16世紀前半から17世紀前半の備前焼と考えられる。

803～848は平瓦である。外面に叩き痕が残るものは少なく，それもナデ消しが不完全で



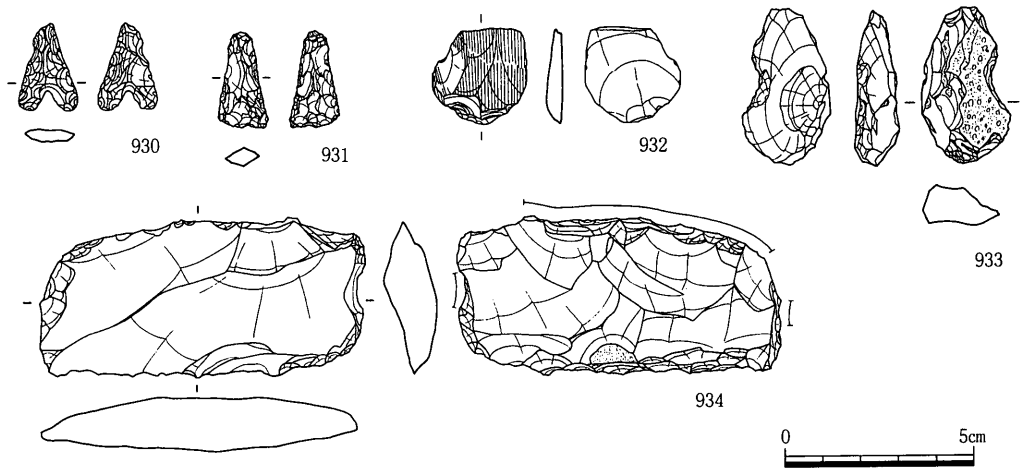
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
905	甑・不明				粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
906	弥・鉢			2.9	粗・多	良好	にぶい橙～橙	ナデ	ナデ		
907	須・杯蓋	14.8			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
908	瓦・椀	14.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
909	土・蛸壺	4.1			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
910	土・紡錘車				中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		
911	須・硯				細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨付着？
912	瓦・椀			5.0	微・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ		胎土は灰白
913	黒B・椀	15.6	6.8	7.9	細・普	良好	黒	ミガキ・ナデ	ミガキ		
914	土・甑	26.2			中・普	良好	淡橙～明赤褐	ナデ・ハケ目	ハケ目→ケズリ	外面に赤色顔料	
915	土・土鍋	39.7			粗・普	良好	にぶい褐	ナデ	板ナデ		
916	青・碗	14.0			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	ｵﾘｰﾌﾞ灰の釉，鎬蓮弁	
917	土・土釜	23.8			中・普	良好	橙褐	ナデ	板ナデ		
918	青・碗				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	灰オリーブの釉	貫入
919	青・碗			5.2	精緻	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ	オリーブ灰の釉	貫入
920	焼・すり鉢	32.8			粗・普	良好	暗赤褐	ナデ	ナデ	金具による条溝	

第394図　D5区包含層出土遺物（1）（1／4）



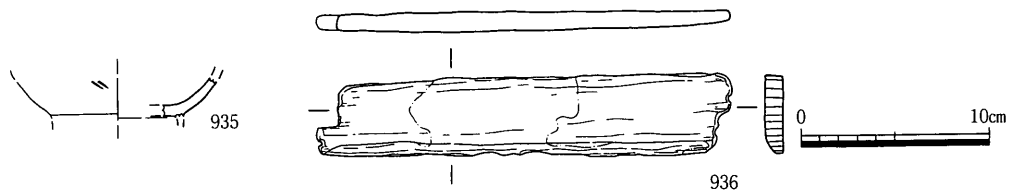
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
921	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕→板ナデ	8	-	粗・普	灰黄～灰	良好	凹面に糸切り痕有り	9.1
922	平瓦	1.7	布目圧痕→板ナデ	ナデ	9	-	粗・普	灰褐	良好	布目圧痕が凸面につく	8.8
923	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	11	16	粗・普	灰白	良好		7.5
924	丸瓦	1.4	板ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	灰白	良好		10.1
925	平瓦	2.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	6	-	中・普	灰白	良好	胎土は灰黄	10.0
926	平瓦	3.2	縄目叩き	布目圧痕	5	-	粗・普	浅黄	良好		10.5
927	平瓦	3.2	ナデ	布目圧痕	4	-	中・普	灰～暗赤灰	良好		4.0
928	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	15	-	粗・普	灰	良好		6.2
929	丸瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	12	-	粗・普	灰	良好		7.3

第395図　D3・5区包含層出土遺物（1／5）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
930	石鏃	2.2	1.6	0.4	1.0	サヌカイト		
931	石鏃	2.5	1.3	0.5	1.2	サヌカイト		
932	打製石斧	2.5	2.5	0.5	2	サヌカイト		
933	二次加工のある剥片	4.0	2.3	1.1	10.1	黒曜石（姫島産）		
934	打製石包丁	8.2	4.1	1.8	71	サヌカイト		

第396図　D5区包含層出土遺物（2）（1／2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
935	椀（刳り物）		0.6		芯持		
936	板材（用途不明）	21.1	4.2	1.0	柾目		

第397図　D区包含層出土遺物（1／4）

一枚作りのものが大半をしめる。特に835～842は側面付近が外湾し，この部分が成形台からはみ出ていたことをうかがわせる。また，844・845は成形台端部の線が残り，そこからはみ出た部分の粘土は厚い。810・811・848のように側面が極端に凸面側に傾斜するものも一枚作りの可能性が高い。847は全体にきわめて薄い作りだが側面付近のみ厚い。凹面は布目がきれいにナデ消され，凸面にはハケ目状のものが残る。美しく仕上げようという意識がうかがわれ，他の平瓦と異なり特殊な用途を想定すべきかもしれない。平瓦はすべて焼成は良好だが，胎土は粗くやや軟質である。また中には表面のみ黒くいぶされたようになっているものもある。849～875は丸瓦である。凸面は叩きがナデ消されるが完全に消えてないものもある。また平瓦同様表面のみ黒くいぶされたようになっているものがある。

849～855は側面が削られていない。856～867は凹面側を削る。868～874は凹面側と凸面側の両方を削る。854は須恵質の焼成を示す。857・862・868・875は玉縁の部分が残る。

876～880は石器である。すべて上層包含層から出土した。876は片面を研ぎ面として使用している。877は4面を研ぎ面として使用している。879は楔と考えられ，折れている。880は大きな面のひとつが剥離面であり，他はミガキ上げている。用途はわからない。

881～904はＤ３区から出土した。885は外面に叩き目がきれいに残る。886は全面をきれいにナデているため把手などの用途が考えられる。887は外面をヘラケズリしている。888は体部が直線的に開く。892は甕などの把手である。893は硯の脚部である。894は焼きがやや甘い。895は内外面とも釉を施す。見込みに櫛描きの文様を描く。896は瓦質土器である。浅いため焙烙と考えられる。外面は不調整である。898は胴上部に穴が開けられている。900のおろし目は底面にまで及ばない。922はナデ消されかけてはいるが，布目が凸面側につく。901は断面台形の棒状品である。加工品と考えられるが加工痕は認められない。本体に対して斜め方向の浅いくぼんだ筋が認められるが，使用痕と考えられる。石材は凝灰質砂岩である。黒雲母を含み，炭化物を含む火山灰が岩石粒の隙間をうめている。このためこの石は軽い。県内周辺ではあまりみられない石材である。903は平面が湾曲する石器である。両面ともきれいな調整を加えている。用途は不明である。904は柱状片刃石斧の胴部片である。

905～934はＤ５区からの出土である。905は何かの把手と考えられる。径の大きな面は剥離面である。色から縄文時代のものと考えられる。907はかえりのつく蓋である。かえりは口縁端部より下には下がらないと思われる。908は外面に顕著な指押さえ痕が残る。911は硯の脚部の可能性がある。913は口縁が大きく傾く。916は鎬蓮弁が外面に描かれる。918は内面に草花文が描かれる。920は条溝の上端がそろう。堺あるいは明石焼である。932は石斧類の剥片である。表面に使用痕とみられる筋が多くはいる。933はナイフ形石器を作ろうとしていれた２次加工のある剥片である。片面には自然面が残る。石材は大分県姫島産の黒耀石である。県内では数例しか見つかっていない。排土から出土したものだが，ＳＲ01の縄文時代後期の流路内にふくまれていたと考えられる。934は刃側の中央部が摩滅している。935・936はＤ３区から出土した。

3．小結

Ｄ調査区では縄文時代から近世にわたる幅広い時期の遺構を検出した。

順にみてゆくと縄文時代では後期に川が流れていた。県下で同時期の遺跡といえば，大量の土器を出土した永井遺跡があり，他の多くの遺跡も島嶼部や県西部に所在する。ＳＲ01出土の後期土器は県東部内陸側での数少ない資料であり，それが永井遺跡との比較が可能な良好な状態で出土したという点でも評価できるものである。ただし明らかに同時期の遺構がＳＲ01の周辺で検出されなかった点で今後北上流方向への調査が行なわれることを期待したい。

弥生時代の遺構では溝が多く見られる。これらの溝は土器の細かい比較をした場合，ＳＤ02下層から出土した土器のゆえにＳＤ02が最も古い。ＳＤ02は比較的長期間存続するがこの間ＳＤ01が掘られまた埋まってしまうようである。ＳＤ03はこれらの溝からさらに時期が下ったＶ期後半のものである。Ｂ～Ｄ調査区にかけてはＶ期前半までの遺構しかみられないためこの溝はＥ調査区から東の同時期の集落に関係するものと考えておきたい。ＳＤ02の廃絶については，平成３年度の概報[注]でＳＲ02の時期もＶ期前半までと考えたため，川の埋没との関係で考えていたが，ＳＲ02がＶ期後半まで存続することが明らかになったため撤回したい。ただしＳＤ02の使用についてはＳＲ02との関係ぬきでは考えられないであろう。この他，弥生時代のものでは川が２本みられる。土器からみて重複して流れていた時期もあったようである。またＳＤ02とＳＲ02はつながっていることからＳＲ02もこの時期までさかのぼると考えられる。

奈良時代以降Ｄ調査区にも掘立柱建物が建てられる。Ｄ調査区は前述のように尾根裾部にあたる。低地側の方が土地条件が悪くなるのか低地部が集落以外の用途に利用されていたのか明らかでないが裾部にゆくほど遺構は少なくなる。Ｄ１区の掘立柱建物群もより高いＥ区からの続きであり，評価するにはＥ区と合わせて考える必要があるが，遺構の密集度から差し当りこの付近を奈良時代～平安時代前半の集落の西縁と認めることはできよう。また，そうであるならＤ２区包含層から出土した大量の奈良時代の土器・瓦は集落の外れに捨てられたものと考えることができる。これらの土器は従来県内であまり出土例の見られなかった時期のものであり，とくに赤色顔料を塗った土師器の一群は包含層出土とはいえ良好な資料ということができよう。この後平安時代後半の掘立柱建物はＤ１区を離れ西に展開する。

中・近世の遺構はＤ２区東部にまとまっている。中世ではＳＤ16が区画溝と考えられる

が，それにともなうような他の遺構は不明である。またＳＲ02上層は中世から近世前半にかけて時期幅の広い土器を出土するが，石塔の部材や多くの瓦も含む。これらのものは一般の集落からは出土しにくいものであるため，川の上流にそれと関係するなんらかの施設があったことをを予想させる。ＳＤ18出土の軒平瓦も状況からみてＳＢ07が瓦葺きでなかったと考えられるため，本来ＳＲ02に含まれていた可能性もある。

近世ではＳＢ07とそれを取り囲むＳＤ18～20が小さいながらまとまった良好な資料である。南側が削平されているため全容がつかめず残念であるが，Ｄ３区をみてみるとＤ２区よりにＳＥ01が存在する。ＳＥ01は編み篭が出土したのみで遺物の出土はみられず，時期判断の決め手になるものはないのであるが，編み篭を井筒に使用した県内での例は高松市東山崎・水田遺跡に１例あり，それは中世以降のものである。ＳＥ01もおそらくそれ同様の時期が与えられよう。ＳＥ01はＤ２区第１面と同じ面からの掘り込みかどうか判断できないが，仮にその可能性があるとすればＳＥ01の深さは２ｍ余りとなる。さらにＳＢ07まで直線距離で７ｍしかないことからもＳＢ07に伴う屋敷地内の井戸とみることは十分可能である。しかし一般に方角が良いとされる東南や北西でなくＳＢ07の南西にあたる。かつ個人の屋敷に井戸が付属するようになるのはいつか，またその個人はどの程度の階層に属していたのかということが明らかでないため，ここではさまざまな可能性を指摘するに留めておきたい。

注　『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成３年度』
　　香川県教育委員会他，1992

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第三冊

前田東・中村遺跡

第1分冊

平成7年3月31日　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762　香川県坂出市府中町字南谷5001－4
電話　(0877) 48－2191 (代表)

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷　タナカ印刷株式会社
住所　香川県大川郡大内町三本松658－3
電話　(0879) 25－0185

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

前田東・中村遺跡

第２分冊

１９９５.３

香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

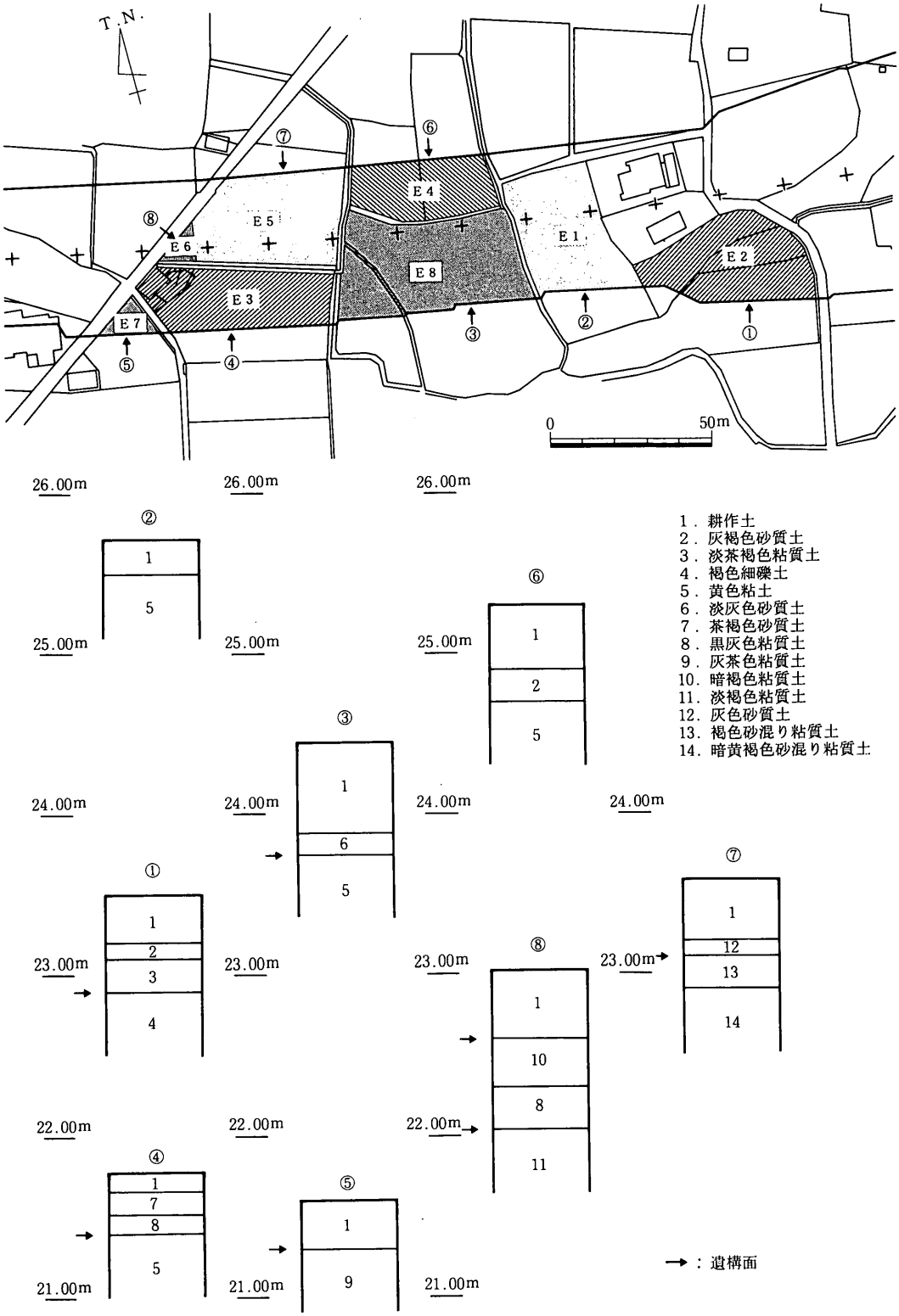
高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

前田東・中村遺跡

第２分冊

１９９５.３

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局



第398図　E区小調査区割図（1／2000），基本土層柱状図（1／40）

第399図　E区遺構平面図（1／400）

第５節　Ｅ調査区

１．調査区の概要（第398・399図）

南北幅40m，東西長200mの範囲を占めるＥ調査区は８小調査区に分けて調査を行なった。調査区の東側はＦ調査区へ続く丘陵となるが，丘陵部は後世の削平を受けており，遺構は残っていなかった。Ｅ２区はこの丘陵の南斜面に位置しており，斜面堆積の包含層を検出した。調査区はＥ１区の東側，Ｅ２区の北側が標高27.0mと最も高く，西側に緩やかに下り，調査区の西端のＥ５区は標高23.5m，Ｅ５区の南側のＥ３区はさらに一段下がり標高は21.8m前後となっている。Ｅ１区の東側は家屋による攪乱のため調査は実施しなかった。Ｅ１区とＥ４区は全体に削平されており遺構は検出されなかった。

Ｅ調査区では遺構面は１面であり，弥生時代から中世までの遺構・遺物を検出した。丘陵部の上部は後世の削平のため遺構・遺物は検出されなかったが，Ｅ５区を中心とした丘陵から派生する安定した緩やかな斜面上には，遺構は一部削平はされているものの，ほぼ良好な状態で残存していた。遺構面は概ね現地表面から40～50cm下の所が多いが，Ｅ３区では耕作土直下で遺構面となる。またＥ２区では北側の丘陵部が急激に落ちて谷部を形成するが，その谷部に堆積した褐色系の粘質土が遺構面となっている。Ｅ２区以外の遺構面は黄色粘土が基本で，これは丘陵の地山がそのまま遺構面になっているものである。

２．調査の成果

(1)弥生時代の遺構・遺物

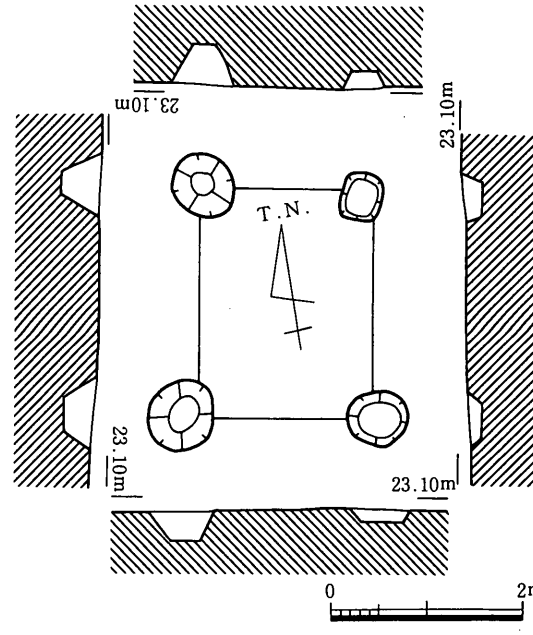
ＳＢ01（第400図，図版58）

Ｅ２区の南東部で検出した梁行１間×桁行１間の掘立柱建物である。梁行は１間で1.85m，桁行は１間で2.3m，建物面積は約4.3㎡≒1.3坪である。柱穴は北東コーナーのもの以外は直径70cmほどの円形となっている。柱穴は深さ12～40cmほどで残りは悪い。柱痕は確認出来ず，柱穴の埋土は黒褐色粘質土の単一層である。建物の主軸方位はＮ－10°－Ｅで，ＳＤ02の形成前に建てられている。柱穴から弥生時代Ｖ期の土器細片が出土した。

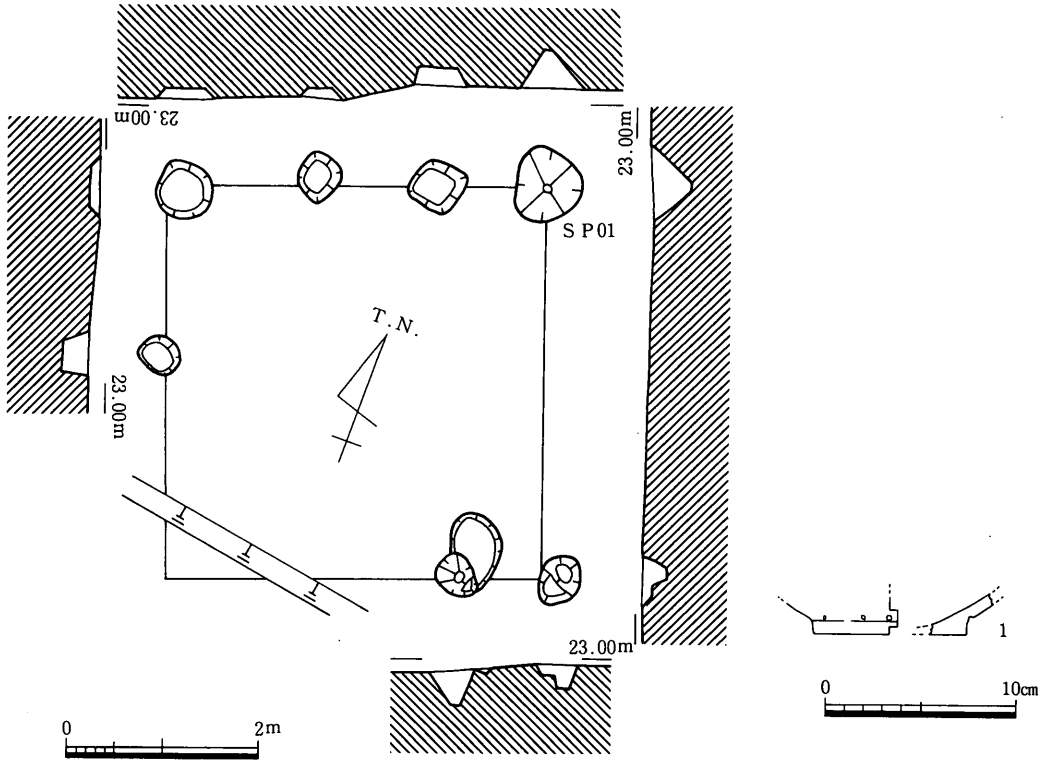
ＳＢ02（第401図，図版58）

Ｅ２区の南壁際のやや東寄りのＳＢ01の西約６mの所で検出した梁行３間×桁行３間の掘立柱建物である。平面形はほぼ正方形で梁行は３間で4.0m，桁行の全長は4.1m，建物面積は16.4㎡≒5.0坪である。柱穴は不整形であるが隅丸方形に近く柱穴の深さは10～44cm

ほどである。柱痕は確認出来ず，柱穴の埋土は黒褐色粘質土の単一層である。南側の梁行列は調査区外に延びる。また桁行は現存で西側の列の２つの柱穴しか検出されなかった。東側の桁行列の中間の柱穴は検出されなかったが，全体の形状から桁行は３間あるいは２間と考えられる。建物の主軸方位はＮ－20°－ＷでＳＤ02の埋没後に建てられている。柱穴からは弥生時代Ｖ期の土器が少量出土した。１は甕の底部で，高台状に突出している。底部立ち上がり部外面に刺突文が施されている。



第400図　Ｅ区ＳＢ01平・断面図（１／80）

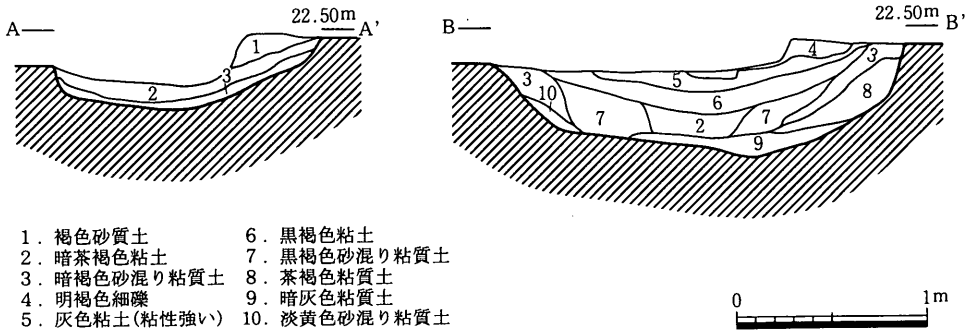


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	弥・甕			8.0	中・多	良好	浅黄・黄褐	不明	不明	立上り部外面に刺突文	

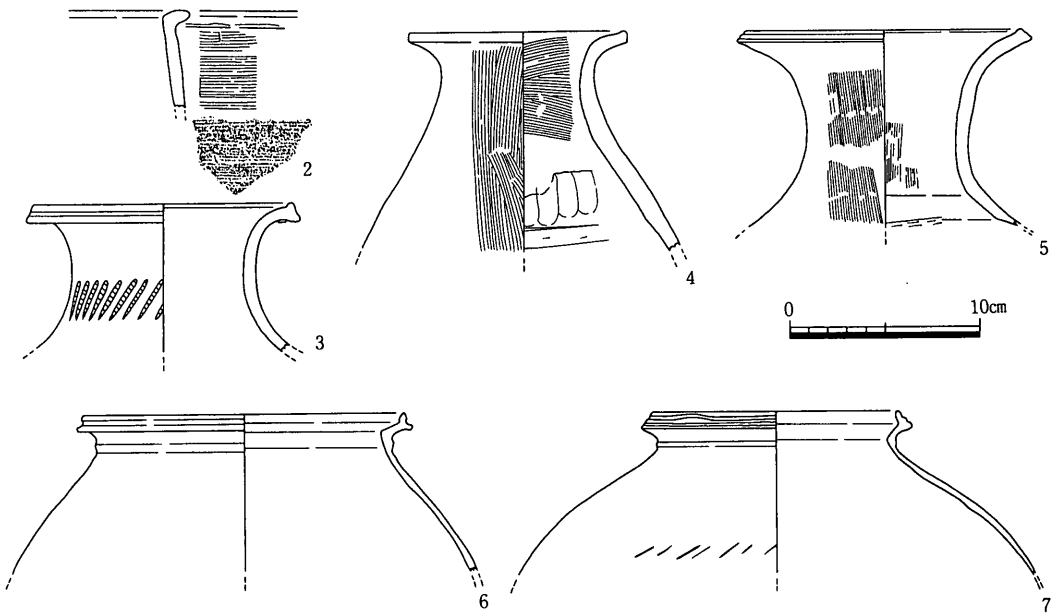
第401図　Ｅ区ＳＢ02平・断面図（１／80），ＳＰ01出土遺物（１／４）

ＳＤ01（第402～405図，図版63）

Ｅ５区の西半部で検出した溝で，調査区内で8.5ｍほどあり西側は調査区外に延びる。幅は最大で2.9ｍで，先細りとなる。深さは12～55㎝で，上部は古代以降の遺構等により削平されている。断面はＵ字形である。埋土は粘土が中心で，上層部には特に粘質の強い灰色と黒色の粘土が堆積しており，黒色粘土は西へ向うほど厚く堆積している。下層部は粘質の弱い褐色と灰色系の粘質土が中心に堆積している。溝の底部に貼り付くように弥生

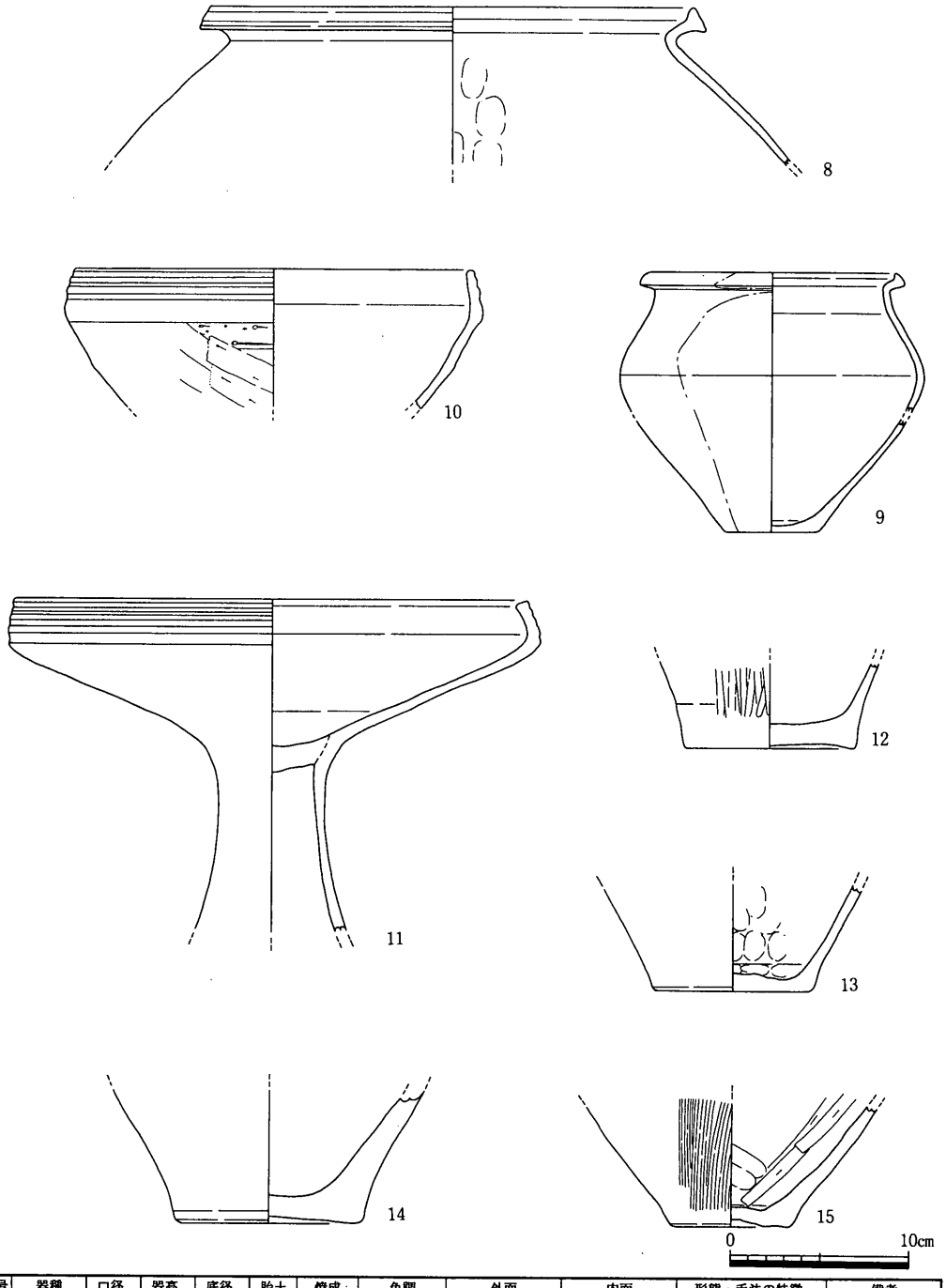


第402図　Ｅ区ＳＤ01断面図（１／40）



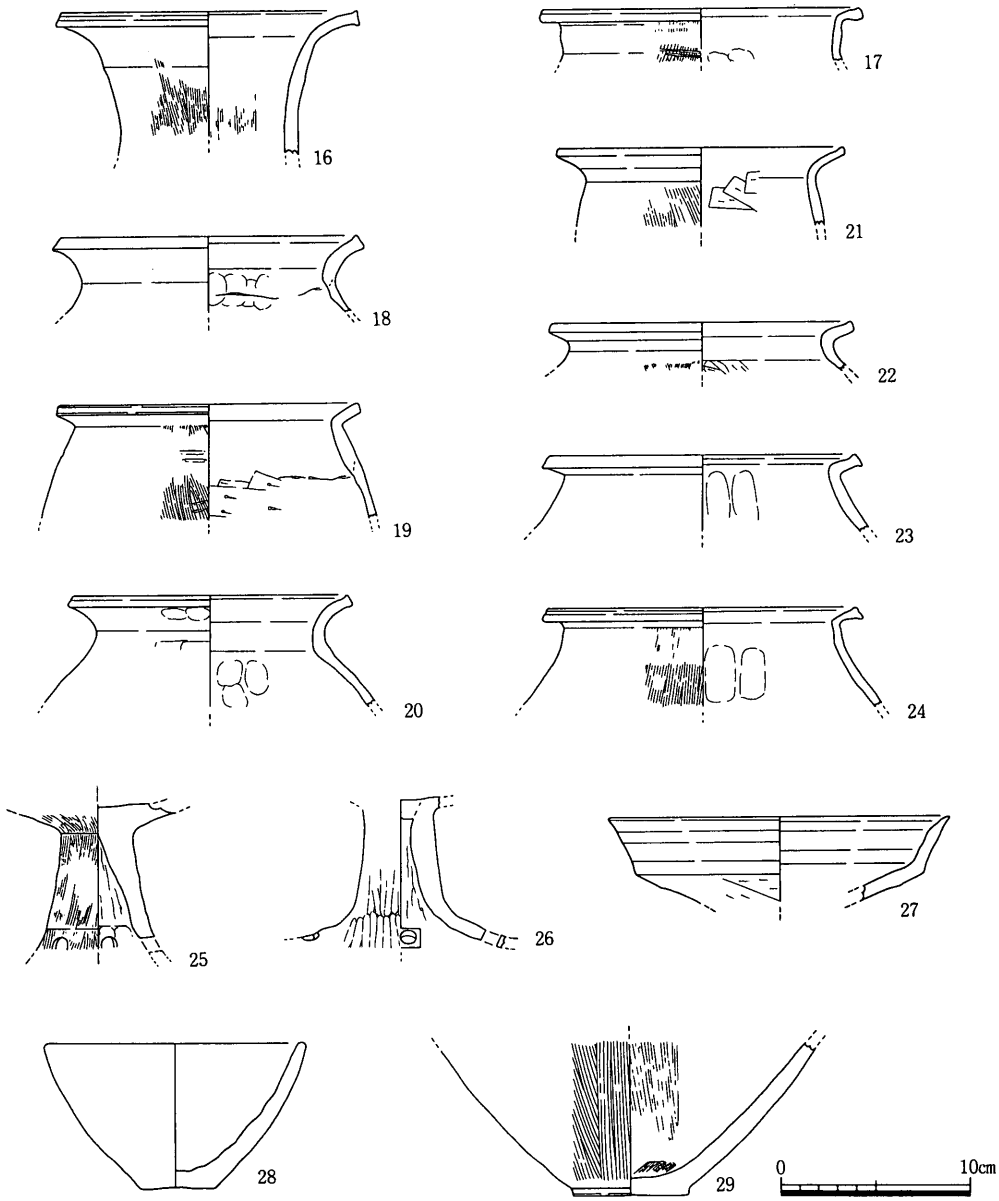
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
2	弥・甕				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	外面に櫛描文	
3	弥・壷	13.6			粗・多	良好	にぶい黄	ナデ	不明		
4	弥・壷	11.5			粗・多	良好	浅黄	ハケ目	ハケ目・ケズリ		
5	弥・壷	14.4			粗・多	良好	灰白	ハケ目・ナデ	ケズリ・ハケ目		
6	弥・甕	16.8			中・普	良好	灰褐	不明	不明		
7	弥・甕	13.0			粗・普	良好	灰・にぶい橙	不明	不明		

第403図　Ｅ区ＳＤ01下層出土遺物（１）（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
8	弥・甕	27.2			粗・多	良好	黒	不明	不明		
9	弥・甕	13.8	15.1	5.2	中・多	良好	灰白・浅黄橙	不明	不明		
10	弥・鉢	22.4			粗・多	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ	口縁部に凹線３条	
11	弥・高杯	28.8			中・普	良好	明褐	不明	不明	円盤充塡	角閃石
12	弥・甕			9.4	粗・多	良好	にぶい黄橙	ミガキ・ナデ	ナデ		
13	弥・甕			8.6	粗・多	良好	橙	不明	不明		
14	弥・甕			10.6	粗・多	良好	浅黄橙	不明	不明		
15	弥・甕			6.4	粗・多	良好	灰白	ハケ目	ケズリ		

第404図　Ｅ区ＳＤ01下層出土遺物（２）（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
16	弥・壺	15.6			中・普	良好	浅黄	ハケ目・ナデ	ハケ目→ナデ		
17	弥・壺	16.6			細・多	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ナデ	ナデ	外面に棒状工具痕有り	金雲母
18	弥・甕	15.5			粗・多	良好	浅黄橙	不明	ハケ目・ナデ		
19	弥・甕	15.6			粗・多	良好	浅黄橙	叩き→ハケ目	ナデ		
20	弥・甕	14.4			粗・多	良好	橙	不明	不明		
21	弥・甕	15.0			中・普	良好	灰白	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ		
22	弥・甕	15.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
23	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
24	弥・甕	16.2			細・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
25	弥・高杯				中・多	良好	淡橙	ハケ目	ナデ	六方透し	
26	弥・高杯				粗・普	良好	灰白	ミガキ	ナデ	円盤充塡、四方透し	
27	弥・高杯	18.0			粗・多	良好	にぶい黄橙	ケズリ・ナデ	不明		
28	弥・鉢	13.8	7.6	4.0	中・多	不良	灰白	不明	不明		
29	弥・壺			5.9	中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母

第405図　E区SD01上層出土遺物（1／4）

時代Ⅳ期の土器が出土し，上層部では弥生時代Ⅴ期の遺物が出土している。西側はＤ区のＳＤ01に続く可能性がある。

２～15は下層出土土器である。２は弥生時代Ⅱ期の甕である。逆Ｌ字形の口縁部で体部外面には櫛描き沈線を施している。３は口縁部端部を上下に拡張している。頸部は全体に外反する。頸部下半にはヘラ圧痕文が施されている。４は体部の張りが無く，頸部からそのままなだらかに体部に至る。６～８は口縁部端部を上下に拡張する甕である。９は口径の割に器高が低く，口縁部は上方に拡張している。体部は中央部やや上に最大径がある。底部は安定した平底である。鉢に近いが一応甕に分類した。10は鉢である。口縁部はやや内傾し，外面に凹線を３条巡らせている。体部外面はヘラケズリを施している。11は高杯で，杯部は斜め上方に直線的に立ち上がり，口縁部が内傾する。口縁部外面には凹線が巡っている。円盤充填になっている。12～15は甕の底部である。

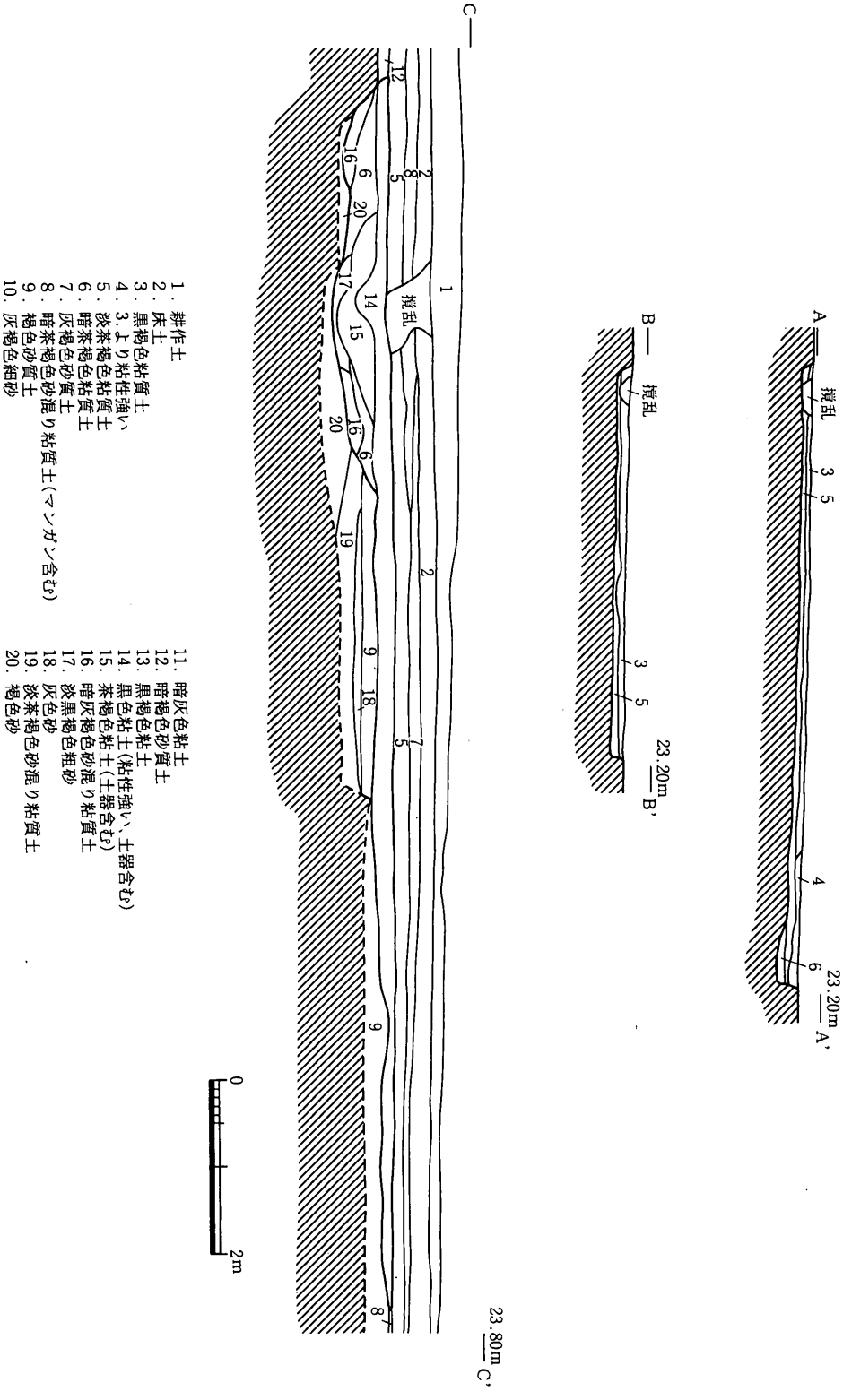
16～29は上層出土の土器である。16は頸部が長く外反する壷，17は頸部が短く直立する壷である。18～24は甕であるが，口縁部が曲線的に丸く屈曲するもの（18・20・21・22）と短めのものが鋭く屈曲するもの（19・23・24）がある。25～27は高杯で，27は杯部は口縁部立ち上り部外面に鋭い稜を形成する。口縁部端部付近を強くナデており，内面に凹線が形成されている。

ＳＤ02（第406～415図，図版63）

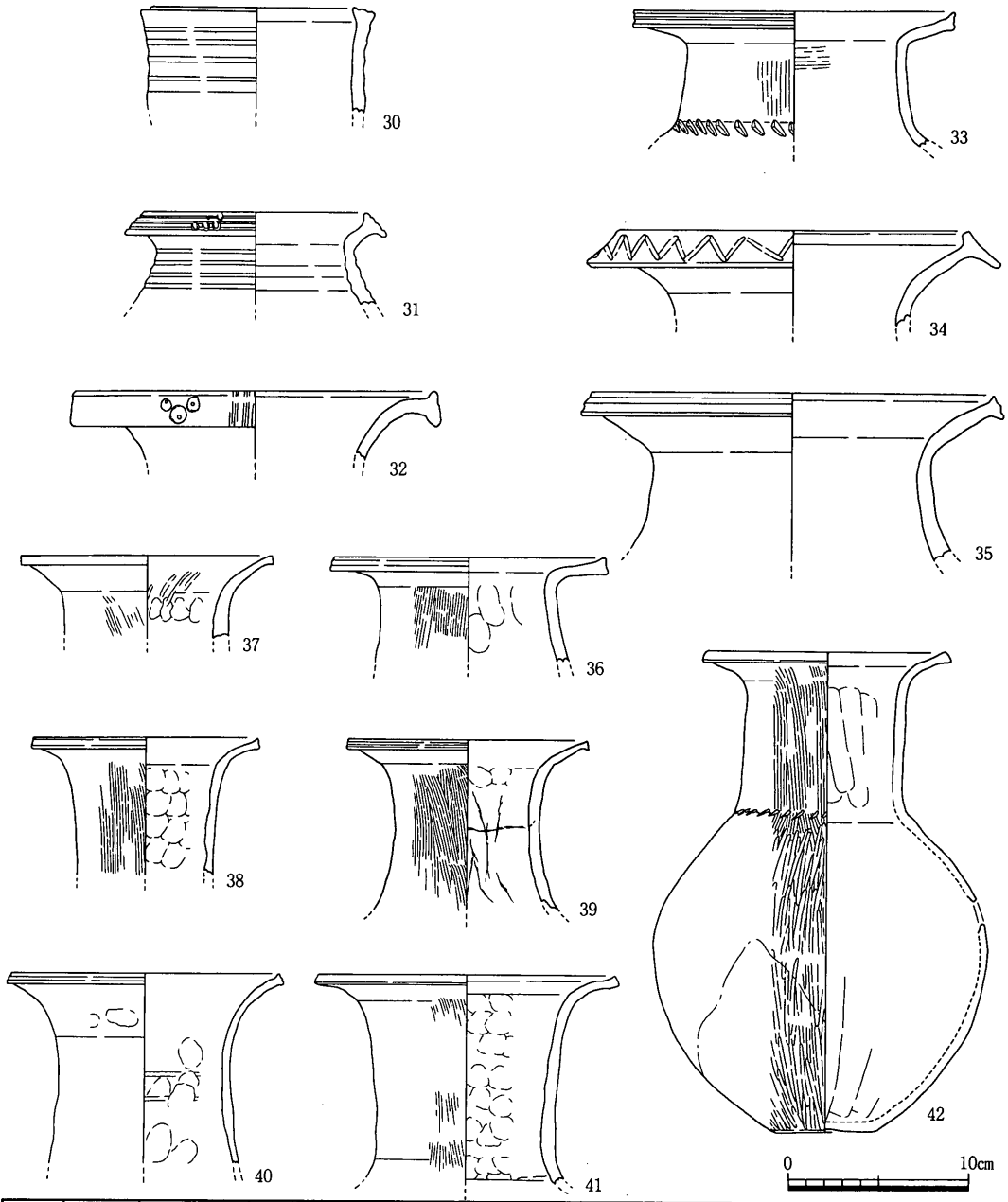
Ｅ２区の南半部で検出した溝で，東側から15ｍほど西へ行った部分で大きく屈曲して南側に向う。幅は4.5～14ｍほどで屈曲部より西側は段掘りになっている。深さは15～60cmで屈曲して南側の壁際が深くなっている。埋土は最上層が黒色粘土で，その下の茶褐色粘土層に多量の土器が含まれていた。さらに遺物は南壁際に集中していた。ＳＤ02はＳＢ01とＳＨ01を壊し，丘陵の裾部に地形に沿って形成された自然河川的な溝と思われる。

埋土中から弥生時代Ⅴ期を主体とする土器が出土した。須恵器も少量出土したが，これはＳＤ02の上方の丘陵の斜面に形成された古墳時代の遺構から転落し混入したものと考えたい。土器の他に石器，紡錘車，土錘，蛸壷が出土した。

30～51は壷である。30は直立する頸部からそのまま口縁部に至るもので，口縁部端部は上側に平坦な面を持つ。頸部には凹線が巡っている。31は口縁部端部を上下に拡張し，外側に幅広の面を作り出し竹管文を施している。頸部には凹線が巡っている。34は口縁部端部を上下に拡張するが，特に下方への拡張が強く外側に傾斜した幅広の面を作り出し，鋸



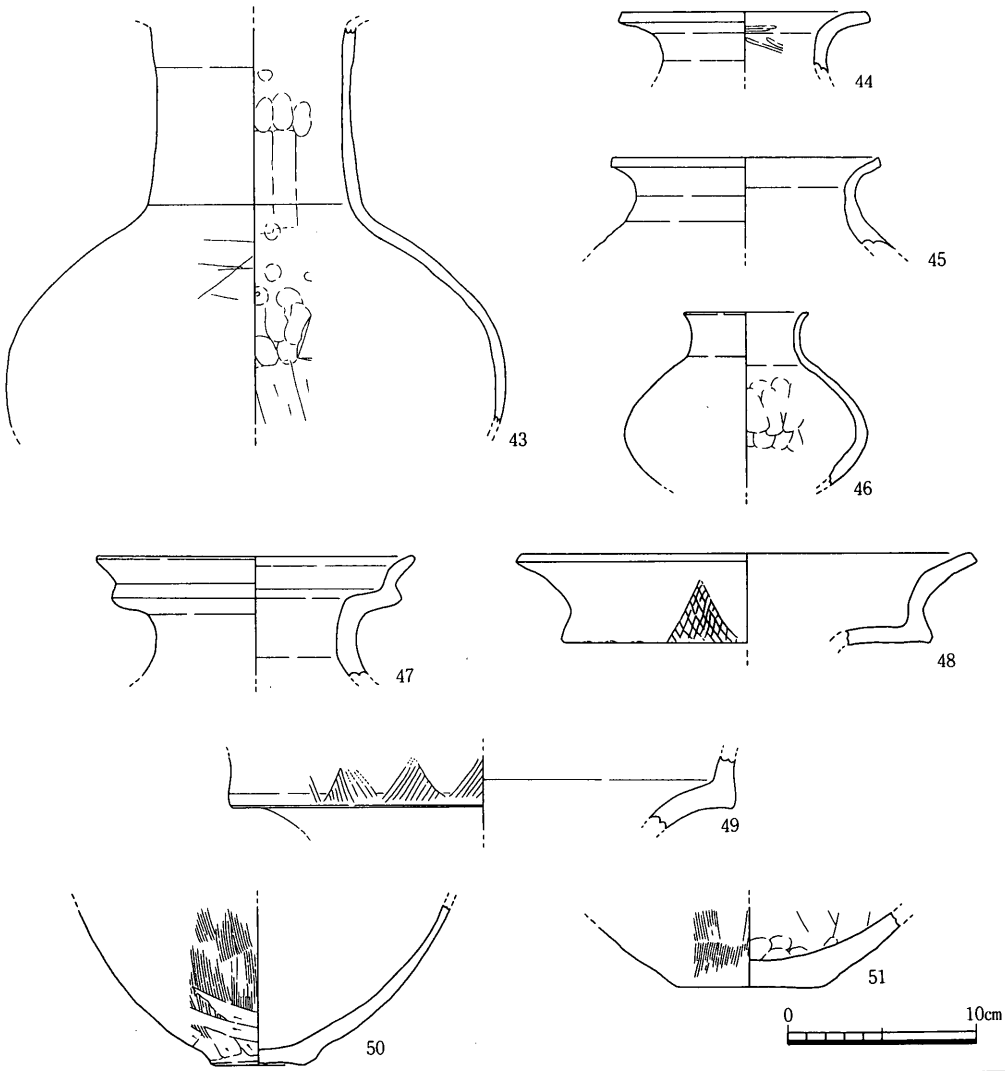
第406図　E区SD02断面図（1／80）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
30	弥・壷	13.0			細・多	良好	灰白・明赤褐	ナデ	ナデ	凹線５条	
31	弥・壷	12.4			精緻	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	口縁部に篦描円形文様	
32	弥・壷	20.1			中・多	良好	褐	ナデ	ナデ		金雲母
33	弥・壷	17.8			細・少	良好	褐	ハケ目・ナデ	ハケ目→ナデ	頸部に太い列点文	金雲母
34	弥・壷	19.4			粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明	口縁部端面に鋸歯文	
35	弥・壷	22.2			中・普	良好	明赤褐	不明	ナデ		金雲母
36	弥・壷	15.4			中・多	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		
37	弥・壷	14.0			細・少	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ		金雲母
38	弥・壷	12.5			中・多	良好	にぶい褐	ハケ目	ナデ		
39	弥・壷	13.3			細・少	良好	にぶい赤褐	ハケ目	ナデ・シボリ目		金雲母
40	弥・壷	14.8			細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	頸部内面棒状ミガキ2条	
41	弥・壷	16.4			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目	ナデ		
42	弥・壷	13.0	26.5	5.2	細・多	良好	明赤褐	ハケ目・ミガキ	ナデ	頸部に列点文	金雲母

第407図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（１）（１／４）

歯文を施している。36は長い頸部から口縁部が大きく横へ屈曲する。37〜42は長い頸部から口縁部が丸みをもって立ち上るものである。頸部外面は基本的にハケ目を施している。42は完形のもので，体部は球形で底部は平底になる。頸部と体部の境にヘラ状工具の先端での圧痕文が施され，体部外面は全体にヘラミガキを施している。また体部中央部やや上



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
43	弥・壷			6.4	細・多	良好	橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
44	弥・壷	12.9			精緻	良好	明赤褐	ナデ	ミガキ		金雲母
45	弥・壷	14.0			粗・普	良好	明褐	不明	不明		
46	弥・壷	6.6			中・多	良好	にぶい橙	不明	ナデ		角閃石
47	弥・壷	16.8			細・普	良好	灰・橙	ナデ	ナデ	口縁部強いナデ	
48	弥・壷	24.4			細・多	良好	橙	ナデ	ナデ		金雲母
49	弥・壷				中・普	良好	赤褐	不明	不明		金雲母・角閃石
50	弥・壷			4.7	中・普	良好	明赤褐	ハケ目・ケズリ	不明		金雲母
51	弥・壷			7.6	中・普	良好	橙	ハケ目	板ナデ		

第408図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（２）（１／４）

に焼成後の穿孔が１つ見られる。43は頸部は直立し口縁部は欠損している。体部下半も欠損しているが扁平な体部になるものと思われる。45は甕に近い形で，体部に至る部分は肥厚している。46は扁平な体部に外反する頸部をもつ小型の壷である。47～49は二重口縁の壷である。48は口縁部は真横へ開いた後に鋭く屈曲し，大きく外反して立ち上る。上部の立ち上り部外面には指押さえを施している。50は突出する底部である。

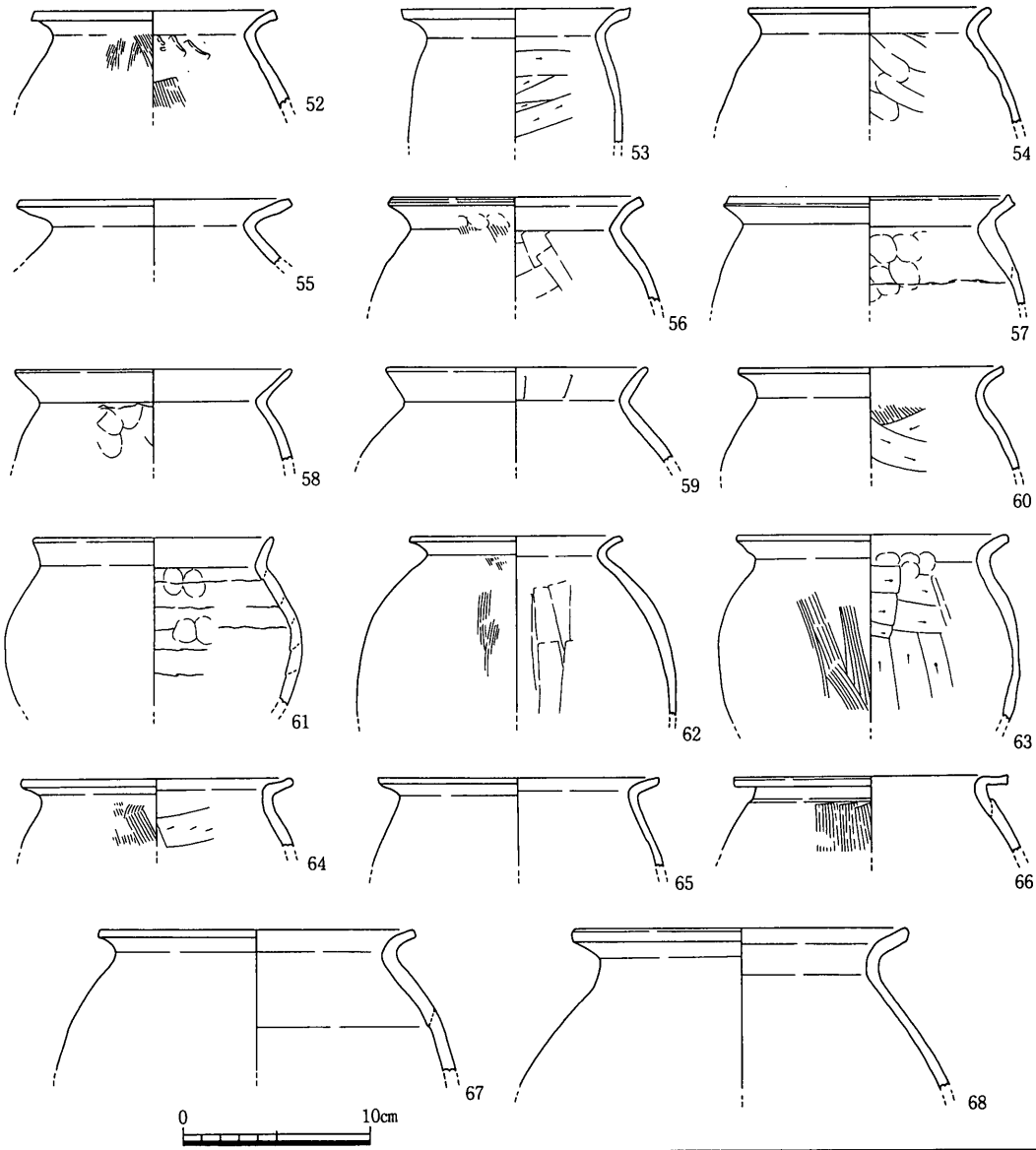
52～87は甕である。53は体部最大径より口径のほうが上回るもので，体部には張りがない。54は体部上半の内面の器壁を指で抉り取っている。58は口縁部は立ち上り部内面に鋭い稜をもって直線的に立ち上る。61は口縁部の開きは弱く，体部内面には粘土紐の接合痕が残る。66は口縁部は短く真横に開く。73は口縁部立ち上り部外面に叩き痕とハケ目が残っている。79は口縁部端部を強くナデており内側に平坦な面が形成されている。体部外面は叩きの後にハケ目を施している。80は体部最大径は上半にあり倒卵形となっている。85は口縁部は丸みをもって横へ開き，体部最大径は中央にある。外面には叩きを施している。87は口縁部のみの破片であるが，大きく長く開く口縁部である。88～103は甕の底部と考えられる。90は突出しており内面の中央部が窪んでいる。91は底部立ち上り部外面に脚状の三角形の突起を３つ貼りつけている。103は底部の外面を指で絞り出し，脚台状に突出させ，若干の上げ底となっている。底部付近は叩きの後にハケ目を施している。104～106は脚台付鉢である。106の脚は高台状で小さくやや外開きとなる。107・108は器台の可能性もある。109・111は底部は上げ底で断面三角形の高台状の短い脚が付く。110は外面に太い叩きを施している。

113～124は高杯である。114は口縁部を強くナデており凹線が形成され，端部を横へつまみ出している。115は杯部は深く口縁部は長くなっている。116は浅い皿状の杯部となっている。117は杯部内・外面に丁寧にヘラミガキを施している。また口縁部端部を強くナデている。118の脚は差し込み法によるものである。上部にヘラ状工具によるカキ目が施されている。121は脚部端部を拡張して外側に面を作り出している。外面にはヘラミガキを施している。123は脚部は中位で屈曲して直線的に開く。

125～128は甑である。125は外面に叩きが残っている。128は砲弾形で内・外面全体にハケ目を施している。外面には指押さえの痕がある。

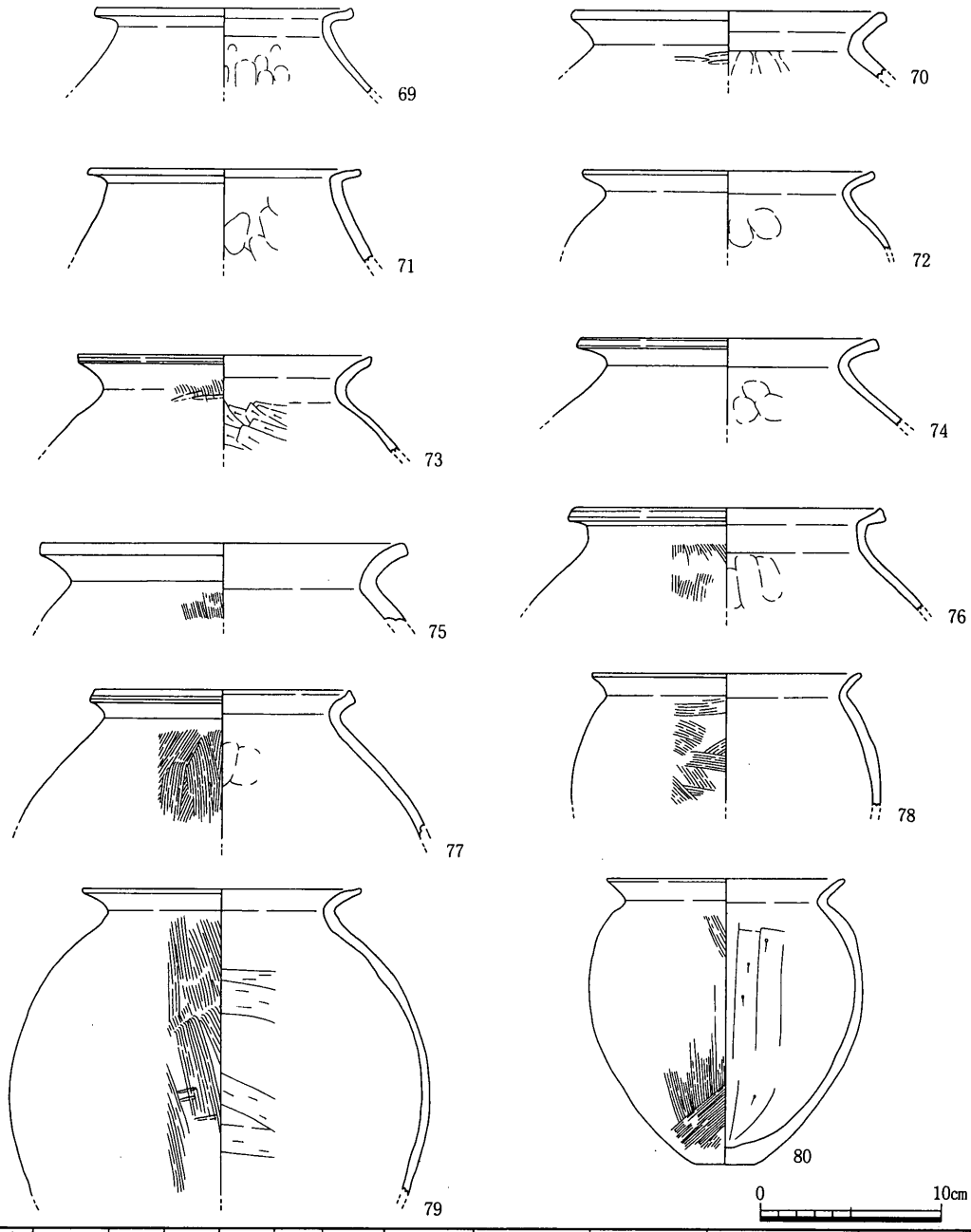
129・130は台付鉢の脚台部である。130は脚台部は緩く外反し，２箇所に穿孔が認められる。

131～133は製塩土器である。131の脚部は厚手で直線的に外開きになる。外面には煤が



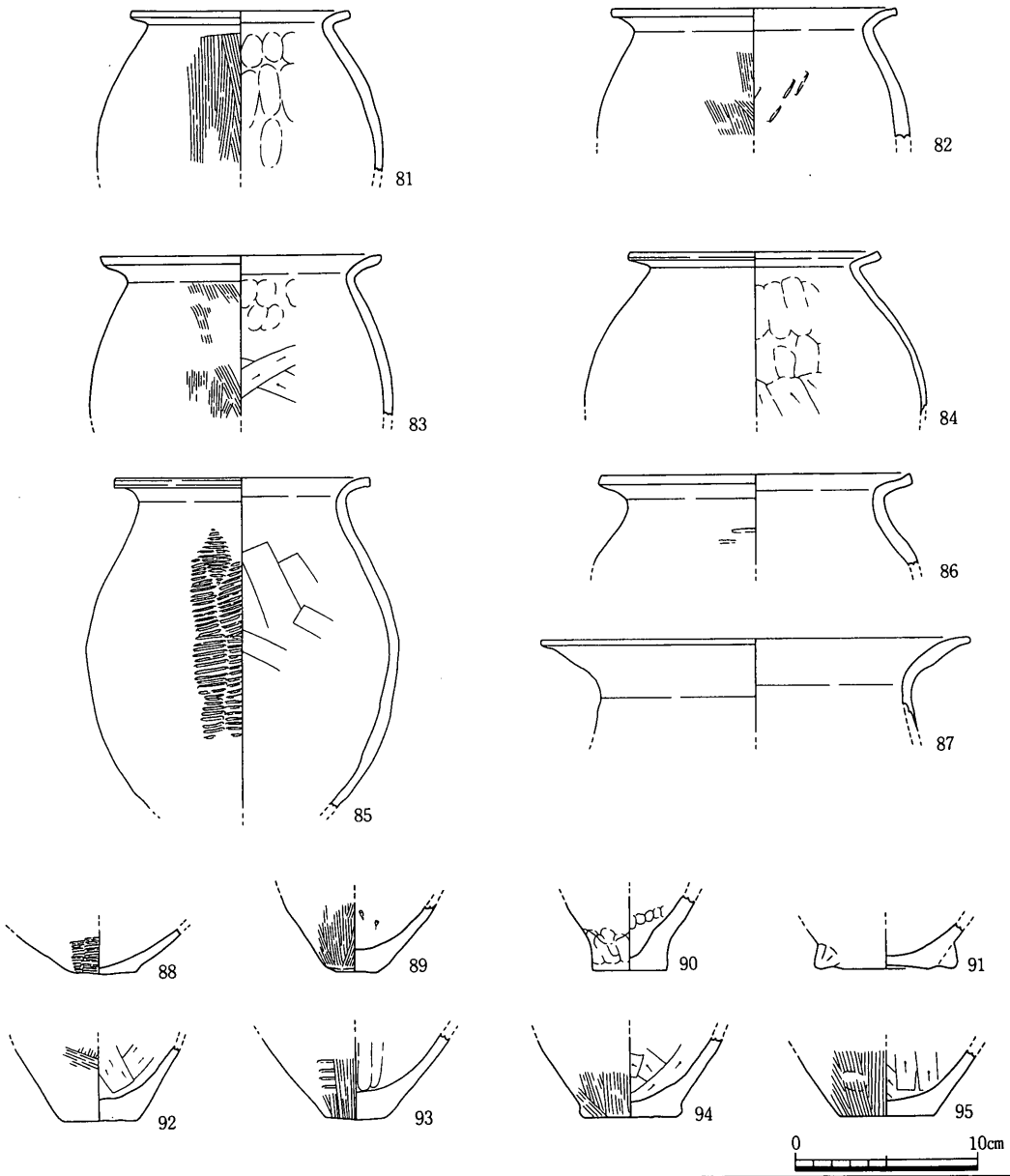
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
52	弥・甕	12.8			精緻	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		金雲母
53	弥・甕	12.2			中・多	良好	明赤褐	ナデ	ケズリ		
54	弥・甕	12.8			精緻	不良	褐灰・明赤褐	ナデ	ナデ	内面を強く指でナデる	
55	弥・甕	14.4			中・普	良好	明褐	ナデ	不明		金雲母
56	弥・甕	13.1			細・普	良好	明赤褐	ハケ目→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
57	弥・甕	15.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
58	弥・甕	14.8			中・普	良好	明褐	不明	ナデ	口縁部内面鋭い稜	
59	弥・甕	14.0			細・多	良好	橙	不明	不明		
60	弥・甕	14.0			細・少	良好	橙	不明	ハケ目→ケズリ		金雲母
61	弥・甕	12.8			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	内面に粘土紐接合痕	金雲母
62	弥・甕	11.0			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目	板ナデ		金雲母
63	弥・甕	14.3			中・多	良好	灰黄褐	ハケ目	ケズリ		
64	弥・甕	14.4			細・少	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		金雲母
65	弥・甕	15.0			粗・普	良好	にぶい褐	不明	不明		
66	弥・甕	14.6			細・多	良好	赤褐	ハケ目	不明	口縁部水平に開く	金雲母
67	弥・甕	16.8			中・多	良好	明褐	不明	不明		金雲母
68	弥・甕	17.8			粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第409図　E区SD02出土遺物（3）（1／4）



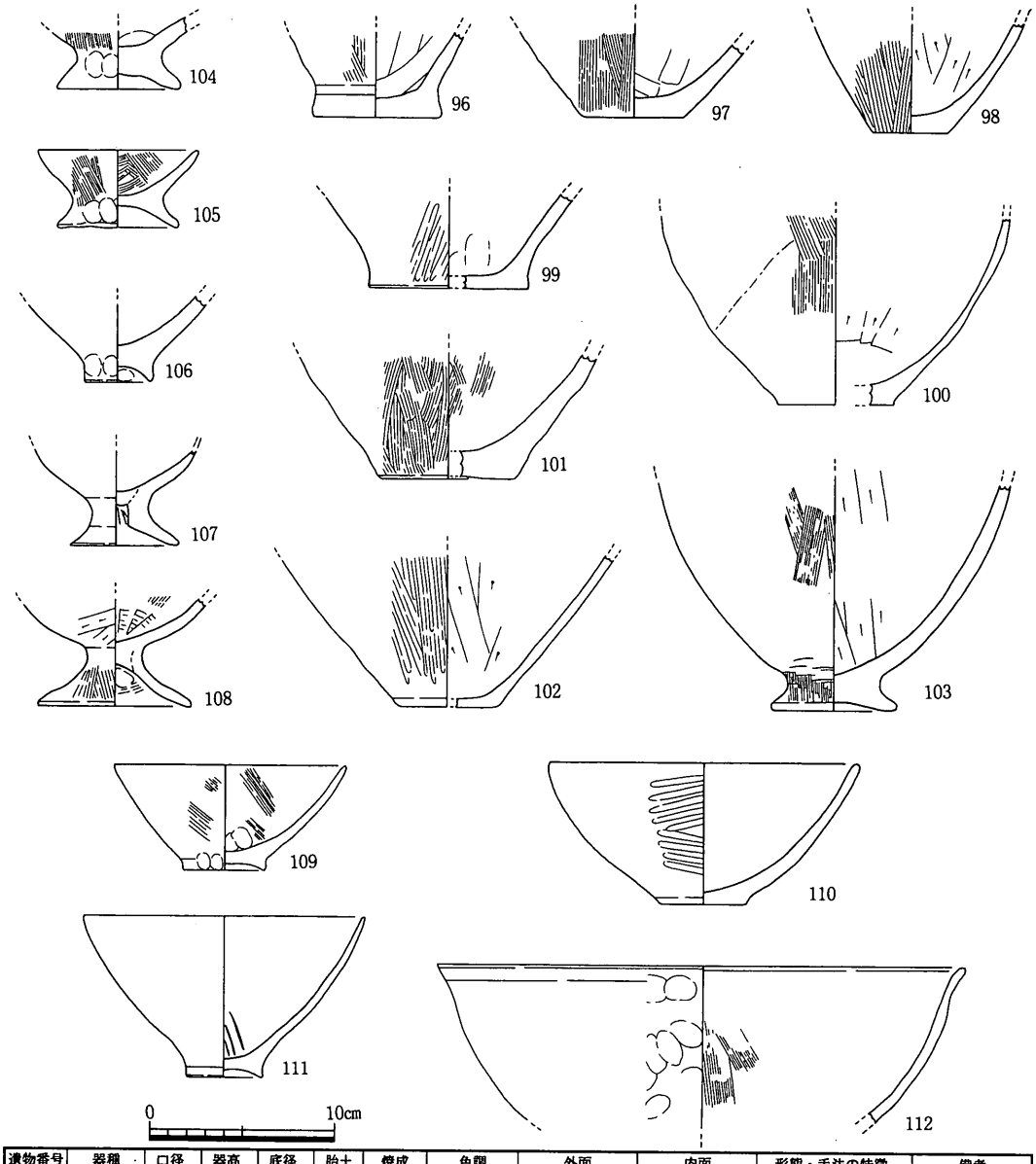
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
69	弥・甕	14.1			中・多	良好	橙	不明	不明		金雲母・角閃石
70	弥・甕	17.0			細・普	良好	明褐	叩き→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
71	弥・甕	15.2			細・少	良好	橙	不明	ナデ		角閃石
72	弥・甕	16.0			細・多	良好	橙	不明	不明		金雲母
73	弥・甕	16.2			細・少	良好	明赤褐	叩き→ハケ目	ケズリ		
74	弥・甕	16.2			細・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	不明		金雲母
75	弥・甕	20.4			粗・普	良好	橙	ハケ目	不明		
76	弥・甕	17.1			中・多	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ		
77	弥・甕	14.0			細・普	良好	褐	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
78	弥・甕	14.8			細・普	良好	橙	ハケ目	不明		金雲母
79	弥・甕	15.4			中・普	良好	灰白	叩き→ハケ目	ケズリ→ナデ		
80	弥・甕	13.0	15.8	3.2	中・普	良好	赤褐	ハケ目	ケズリ		金雲母

第410図　E区SD02出土遺物（4）（1／4）



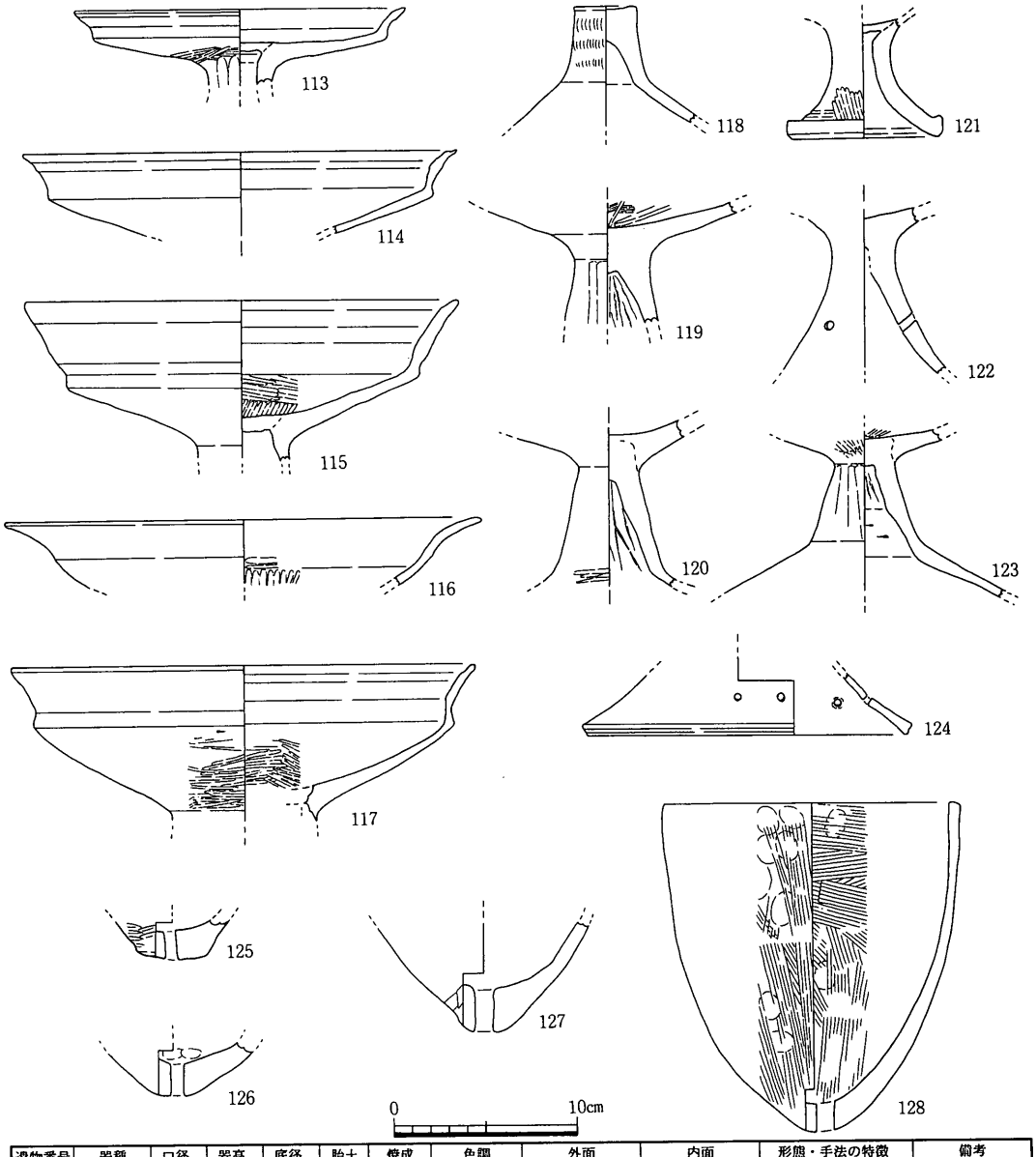
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
81	弥・甕	11.8			細・普	良好	褐	ハケ目	ナデ		金雲母
82	弥・甕	15.4			精緻	良好	橙	ハケ目・ナデ	ナデ		金雲母
83	弥・甕	15.2			精緻	良好	橙	ハケ目	ケズリ		金雲母
84	弥・甕	13.4			細・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ケズリ		金雲母
85	弥・甕	13.8			中・普	良好	にぶい橙	叩き	板ナデ・ナデ		金雲母・角閃石
86	弥・甕	16.8			粗・普	良好	橙	叩き→ナデ	不明		金雲母
87	弥・甕	23.2			粗・多	良好	橙	不明	不明		
88	弥・甕			3.2	中・普	良好	橙	叩き	ナデ		
89	弥・甕			2.8	中・普	良好	灰黄～黒褐	ハケ目	ケズリ		
90	弥・甕			4.0	中・普	良好	明褐	ナデ	ナデ	内面に棒状工具の圧痕	金雲母
91	弥・甕			4.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底やや上に脚状突起	
92	弥・甕			4.0	細・少	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		
93	弥・甕			2.8	細・普	良好	にぶい褐	叩き→ハケ目	ナデ		金雲母
94	弥・甕			5.0	中・少	良好	浅黄橙	ハケ目	ケズリ		
95	弥・甕			5.0	中・少	良好	にぶい橙	ハケ目	ケズリ	底外面にハケ目	

第411図　E区SD02出土遺物（5）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
96	弥・甕			6.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	板ナデ		
97	弥・甕			5.4	粗・多	良好	黒褐・明赤褐	ハケ目	板ナデ		
98	弥・甕			4.0	細・多	良好	明黄褐	ハケ目	ケズリ		金雲母
99	弥・甕			8.6	中・普	良好	明褐	ミガキ	ナデ		角閃石
100	弥・甕			6.2	中・普	良好	明褐	ハケ目→ナデ	ケズリ→ナデ		金雲母
101	弥・甕			7.2	粗・多	良好	褐灰	ハケ目	ハケ目		
102	弥・甕			5.6	中・多	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ケズリ		
103	弥・甕			6.8	中・普	良好	浅黄橙	ハケ目	ケズリ	底突出	
104	弥・鉢			6.7	中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		金雲母
105	弥・鉢	8.6	4.1	6.4	細・普	良好	黒褐	ハケ目	ハケ目		金雲母・角閃石
106	弥・鉢			3.8	中・少	良好	赤褐	ナデ	ナデ		
107	弥・鉢			7.0	粗・多	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
108	弥・鉢			8.2	細・普	良好	明赤褐	ケズリ・ハケ目	ハケ目	内面に放射状ハケ目	金雲母
109	弥・鉢	12.6	5.7	4.4	細・多	良好	明赤褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		金雲母・角閃石
110	弥・鉢	16.8	7.7	4.6	中・普	良好	橙・明赤褐	叩き	不明	外面に粗い叩き	金雲母
111	弥・鉢	15.3	8.7	4.1	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底上げ底	金雲母
112	弥・鉢	28.6			細・多	良好	橙	ナデ	ハケ目	外面全体に指押え	金雲母

第412図　E区SD02出土遺物　(6)(1／4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
113	弥・高杯	18.0			細・普	良好	明褐	ミガキ	不明	円盤充塡	金雲母・角閃石
114	弥・高杯	23.5			細・普	良好	橙	不明	不明		金雲母・角閃石
115	弥・高杯	23.4			中・普	良好	暗褐	ナデ	ナデ・ミガキ	円盤充塡	金雲母・角閃石
116	弥・高杯	25.8			中・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ・ミガキ		金雲母・角閃石
117	弥・高杯	25.6			中・普	良好	にぶい褐	ケズリ→ミガキ	ミガキ		角閃石
118	弥・高杯				中・普	良好	橙	不明	不明	脚柱部に筬描きカキ目	
119	弥・高杯				中・多	良好	浅黄	ミガキ・ナデ	ハケ目→ミガキ	脚内面にシボリ痕	
120	弥・高杯				粗・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ	差し込み法	
121	弥・高杯			8.5	中・普	不良	灰白	ナデ・ミガキ	ナデ	円盤充塡	
122	弥・高杯				粗・多	良好	橙	不明	不明	三方透し	
123	弥・高杯				中・普	良好	にぶい褐	ミガキ	ミガキ・ケズリ	差し込み法	角閃石
124	弥・高杯			18.4	細・普	良好	明褐	不明	不明		金雲母・角閃石
125	弥・甑			3.8	細・普	良好	明赤褐	叩き→ナデ	ナデ		金雲母
126	弥・甑			1.6	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		金雲母
127	弥・甑				細・多	良好	明赤褐	不明	不明		金雲母
128	弥・甑	16.2	17.8		粗・普	良好	明褐	ハケ目	ハケ目	口縁部付近指押え多い	金雲母・角閃石

第413図　E区SD02出土遺物（7）（1／4）

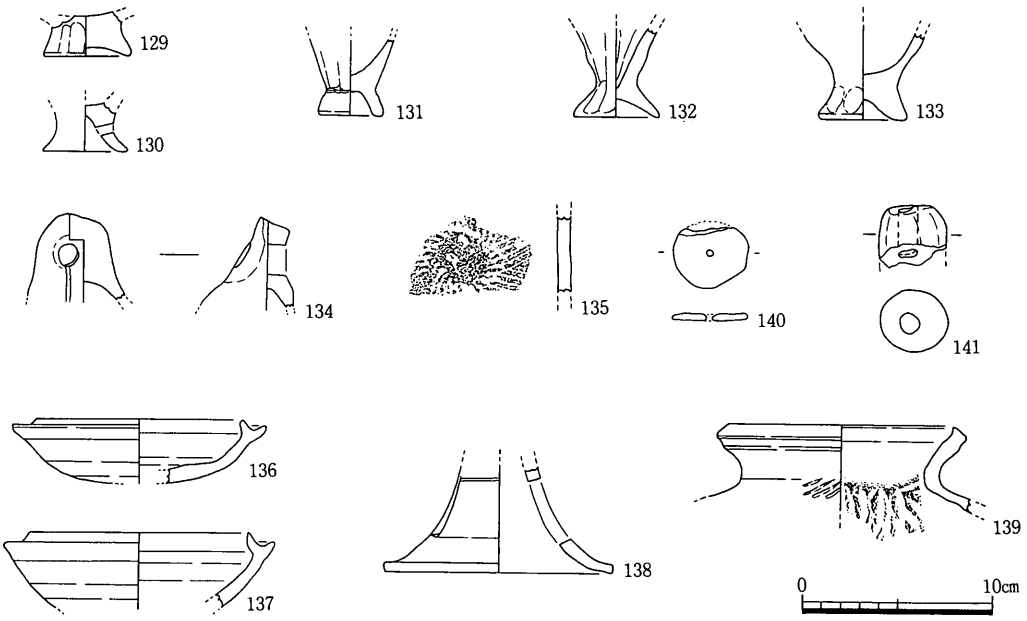
付着している。132の脚部は大きく開き，体部立ち上り部は絞って細くなっている。133は脚部は厚手で体部立ち上り部は丸味を帯びている。

134は飯蛸壷である。体部は欠損しているが釣鐘形になるものと思われる。土師質で紐穴部は片面が斜めになり，孔径は1㎝ほどである。

135は器種不明のものである。土師質で表面に5条1単位のおろし目状の掘りの深い文様が放射状に施されている。

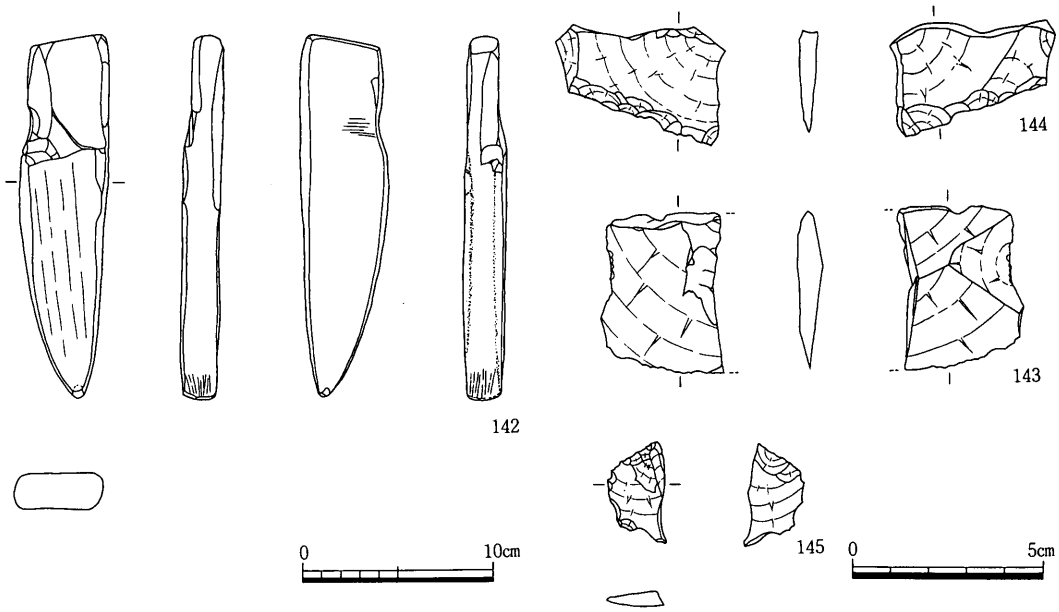
136～139は須恵器で137の杯身の立ち上りはまだ大きい。138は長方形の透し穴があり，長脚の高杯の脚部である。139は外面に叩きが施されている。

140は土製の紡錘車で直径は3.9㎝で，中央部に4㎜の孔が開いている。141は土錘で中央からややずれた場所に径1㎝ほどの孔を開けている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
129	弥・鉢			4.4	中・多	良好	橙	ナデ	不明		金雲母
130	弥・鉢			4.5	中・普	不良	にぶい黄橙	不明	不明	脚部に2箇所穿孔	
131	製塩			3.2	細・普	良好	茶褐	ナデ	ナデ		雲母
132	製塩			4.5	中・少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
133	製塩			4.6	中・多	良好	橙	ナデ	不明		
134	土・蛸壺				細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
135	土・不明				細・多	良好	橙	ナデ	不明	5条1単位のハケ状文様	
136	須・杯身	10.8			精緻	良好	灰白・灰	ケズリ	ナデ		
137	須・杯身	11.6			細・少	良好	灰	ケズリ	ナデ		
138	須・高杯			12.0	精緻	不良	灰白	ナデ	ナデ	方形透し2つ	
139	須・壺	11.9			細・少	良好	白灰	叩き→ナデ	ナデ	内面に当て具痕	ヘラ記号
140	土・紡錘車	3.9			中・多	良好	明赤褐	不明	不明		
141	土錘	短軸3.6	長軸3.2		細・普	良好	明褐	不明	不明		金雲母

第414図　E区SD02出土遺物（8）（1／4）



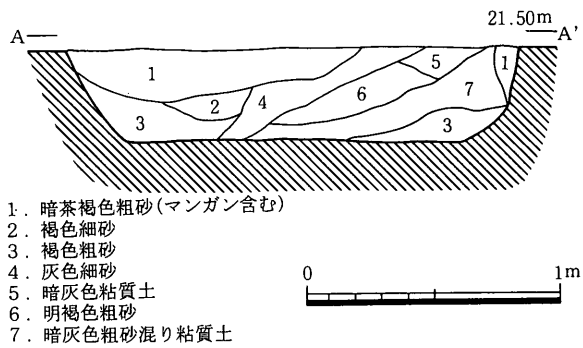
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
142	柱状片刃石斧	18.6	4.3	1.9	340.3	結晶片岩	頭部を柄状に作り出している	磨製
143	打製石庖丁	3.1	4.2	0.7	9.5	サヌカイト		
144	二次加工のある剥片	4.3	2.7	0.5	8.2	サヌカイト		
145	二次加工のある剥片	2.7	1.5	0.4	1.4	サヌカイト		

第415図　Ｅ区ＳＤ02出土遺物（９）（１／２，１／４）

142～145は石器である。142は柱状片刃石斧である。頭部を柄状にやや薄く加工し，柄との装着が容易にしている。さらに装着部分には横方向の擦痕がある。刃部は半月形で先端部には使用痕と考えられる擦痕がある。全体に研磨しており結晶片岩を使用している。143は打製石庖丁で，横に１回の大きな剥離によって抉り部を作り出している。144・145は二次加工のある剥片で，144は下面に両面から丁寧に加工を加えている。

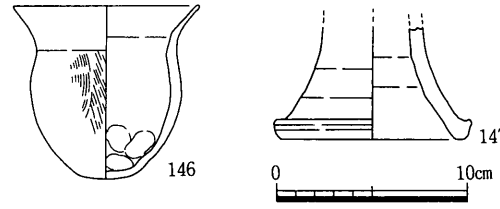
ＳＤ03（第416・417図）

Ｅ３区の南西コーナー部で検出した北西－南東方向の溝である。調査区内で全長約７ｍで幅は２ｍ前後である。深さは35cmほどで埋土は砂が主体となるが，底付近には粘質土も堆積していた。146はミニチュアの甕で口径が体部最大径を上回り，口縁部は体部に比べ



第416図　Ｅ区ＳＤ03断面図（１／30）

て薄くなっている。147は高杯の脚部で端部を拡張して外側に面を作る。その他図化出来なかったが甕の口縁部の細片が出土している。

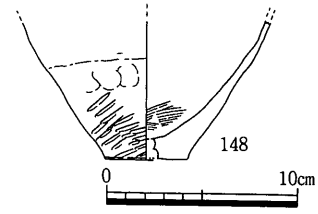


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
146	弥・ミニ	9.8	8.9	3.0	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ナデ	ナデ		
147	弥・高杯			19.8	中・普	良好	暗灰・橙	ナデ	ナデ		金雲母

第417図　E区SD03出土遺物（1／4）

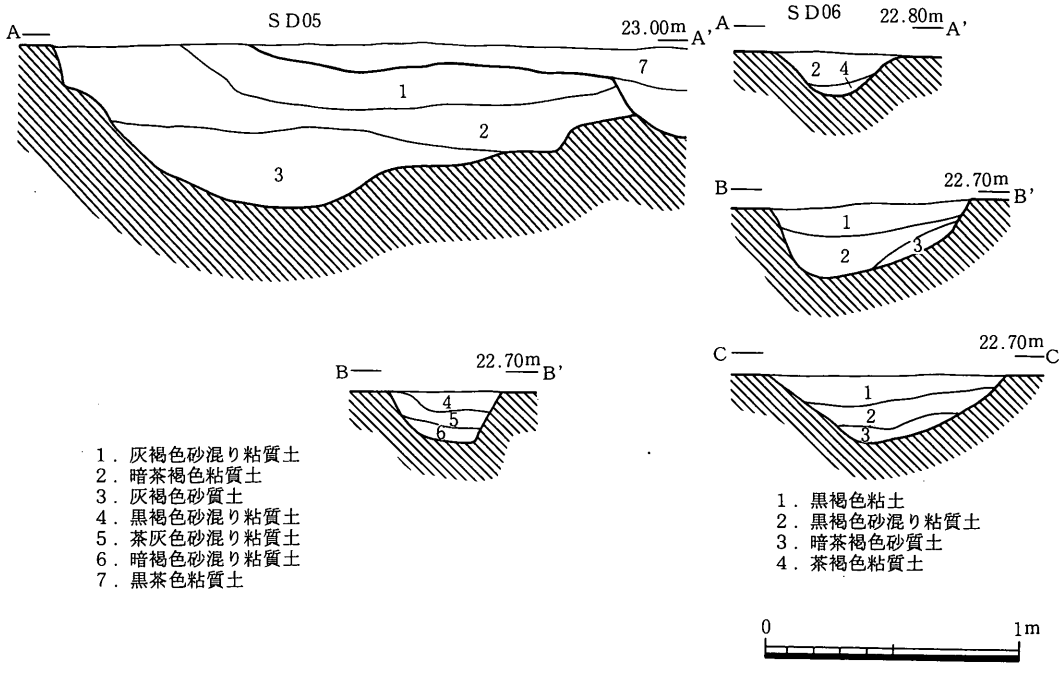
SD04（第418図）

E3区の中央部やや西寄りにかけて検出した南北方向に直線的に延びる溝である。幅は0.5～1mで深さは20cm前後である。断面はU字形で，埋土は褐色と灰色の砂である。148は甕の底部で外面は叩きの後にナデている。底部は平底で，内面にはハケ目を施している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
148	弥・甕			4.3	中・多	良好	浅黄橙・黒	叩き→ナデ	ハケ目		

第418図　E区SD04出土遺物（1／4）



第419図　E区SD05・06断面図（1／30）

ＳＤ05（第419図）

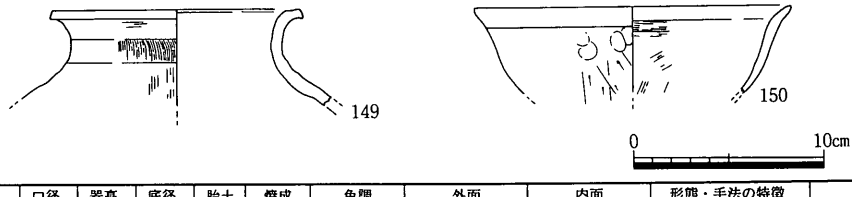
Ｅ５区の西側で検出した北東－南西方向の溝で，ＳＤ01とほぼ直交する。調査区内で長さは約17ｍで，幅は0.4～２ｍで北東側ほど広くなっているが，これは調査区の北側に段があるが本来は北側の面であったが南側が削平されて，溝の下部のみが残存しているものと考えられる。南側の先端部は急激に先細りになり収束する。断面はＵ字形に近く，埋土は砂混りの粘質土が主体となるが北に向かうほど下層には砂質土が堆積するようになる。この溝は中央部でＳＤ01を切っており，北側でＳＤ22に切られている。埋土中より弥生時代Ｖ期の土器細片が少量出土した。

ＳＤ06（第419図）

Ｅ５区のほぼ中央部の南半分で検出した蛇行する溝で，調査区内で直線距離で14ｍほどある。幅は50～90㎝で，深さは15～30㎝である。断面はＵ字形で埋土は最上層は黒褐色粘土で，最下層は砂質土が主となる。埋土中より弥生時代Ｖ期の土器細片が少量出土した。ＳＤ06の北側の一段高い部分にも弥生時代Ｖ期の溝があるが，本来はＳＤ06の続きで段部分がカットされて現存していない可能性もある。またこの溝に切られるが，ほぼ重なって蛇行する溝も検出された。この溝も埋土中より弥生時代Ｖ期の土器細片が少量出土したにとどまる。

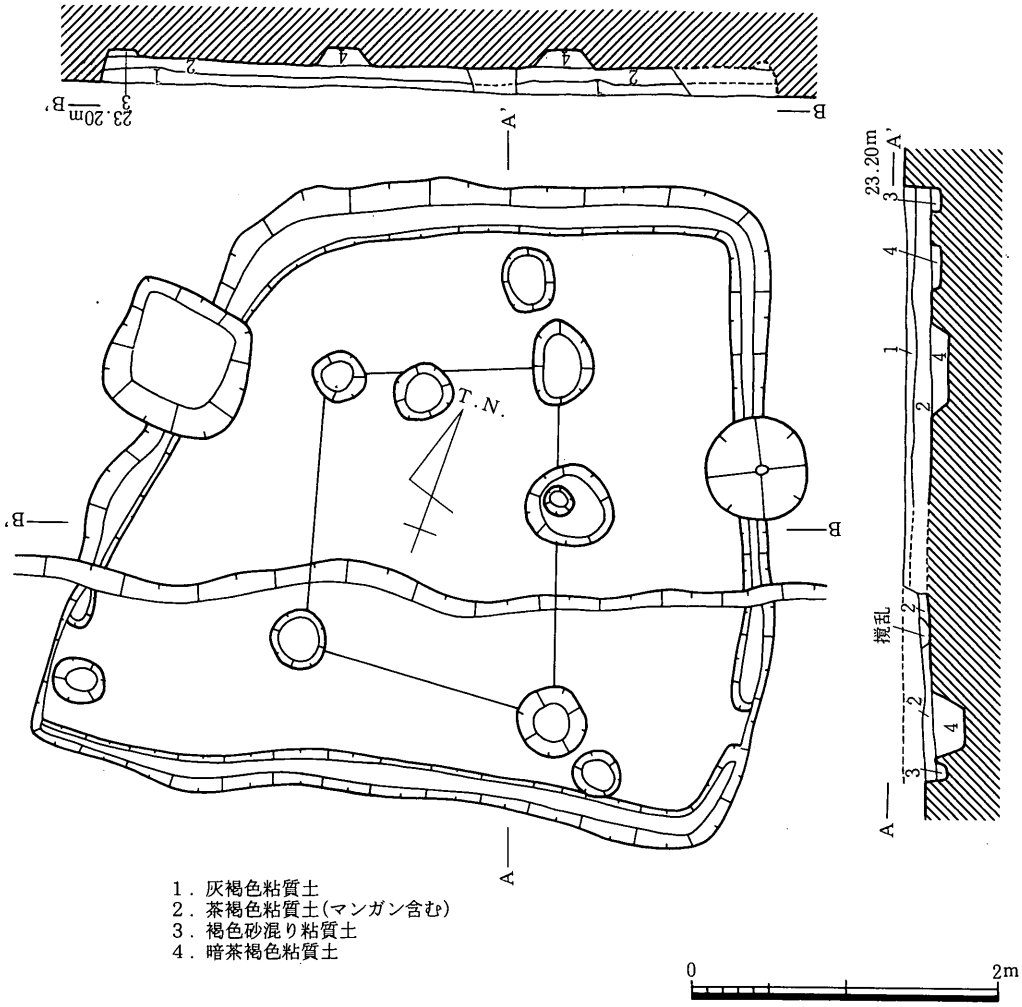
ＳＨ01（第420・421図，図版72）

Ｅ２区の東側で検出した竪穴住居である。平面形は北西側がやや不整形ながら正方形に近いものである。南北は４ｍ，東西は4.5ｍで検出面から床面までの深さは15㎝前後と残りは悪い。南半分はＳＤ02によって上半を削平されている。壁溝は南西部と南東部のコーナー付近で一部途切れるがほぼ全周する。壁溝は断面方形で埋土は褐色の砂混じり粘質土となっている。主柱穴は南側が不揃いであるが４本である。主柱穴は円形で直径40㎝前後で深さは10㎝前後と残りは非常に悪い。焼土や炭化物は認められず，炉などの施設もなか



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
149	弥・壺	13.0			細・少	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		
150	弥・鉢	16.6			精緻	良好	にぶい褐	ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母

第420図　Ｅ区ＳＨ01出土遺物（１／４）

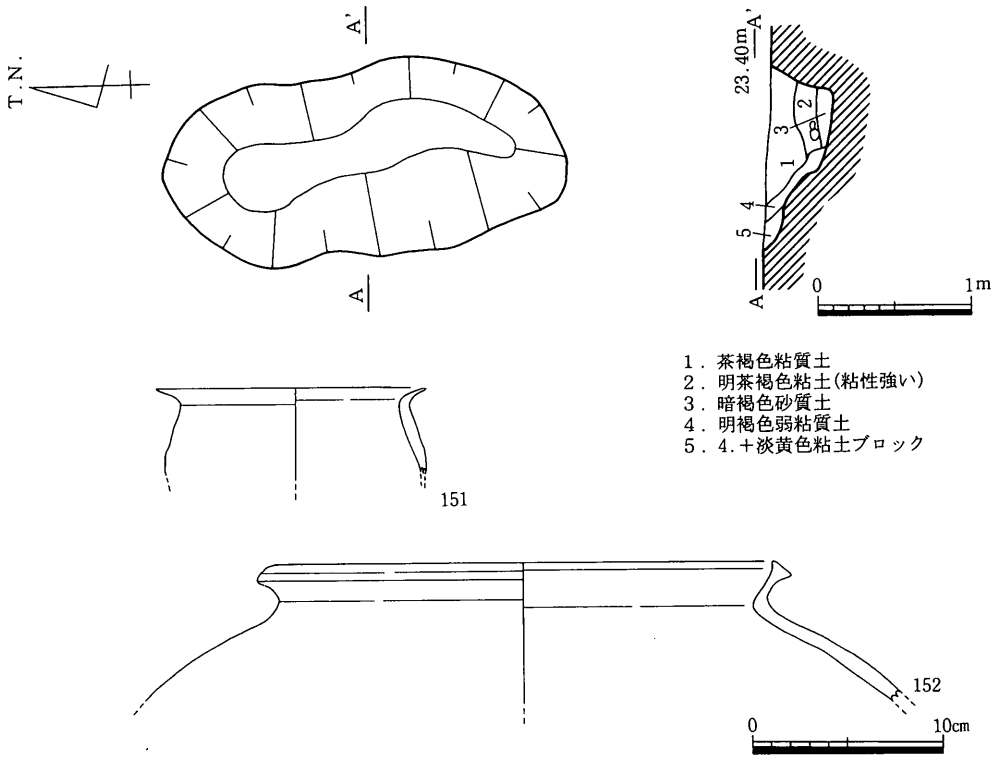


第421図　Ｅ区ＳＨ01平・断面図（１／50）

った。住居全体の埋土は褐色系の粘質土である。149は壷で頸部から口縁部は全体に外反する。外面にはハケ目を施している。150は鉢で口縁部は体部から外側へ屈曲させる。体部外面にはヘラケズリを施す。

ＳＫ01（第422図，図版64）

Ｅ２区のＳＤ02の西側約1.5ｍの所で検出した土坑である。平面形は長楕円形であるが中央部分が若干窪んでいる。長径2.6ｍ，短径1.2ｍ，深さ41㎝で断面は台形に近い。掘り込みは西側は緩やかであるが東側は急になっている。埋土は最下層が砂質土になっている他は粘質土になっている。土坑の北側のほうが南側より40㎝ほど高くなっている。151は



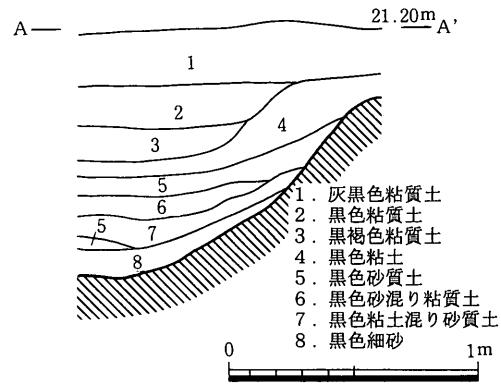
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
151	弥・甕	14.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
152	弥・甕	26.2			粗・多	良好	灰	不明	不明		

第422図　Ｅ区ＳＫ01平・断面図（１／50)、出土遺物（１／４）

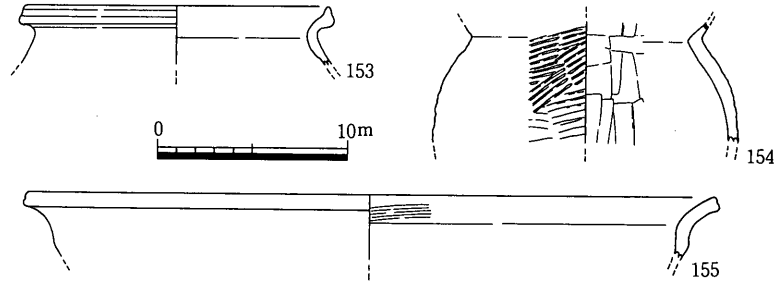
甕で体部は肥厚している。152は口縁部端部を拡張し外側に斜めの面を作り出す。その他に弥生時代Ｖ期の土器が出土した。

ＳＸ01（第423・424図）

Ｅ７区で検出した。深さ70cmの不定形の落ち込みである。南側調査区外にのびるため全形は不明である。埋土は黒色の粒径の違う土が互層に堆積していた。154は外面叩き，内面板ナデを施している。口縁部は尖るようにすぼまる形になると思われる。155は大形の鉢である。口縁部がＳ字に屈曲する。



第423図　Ｅ区ＳＸ01断面図（１／30)



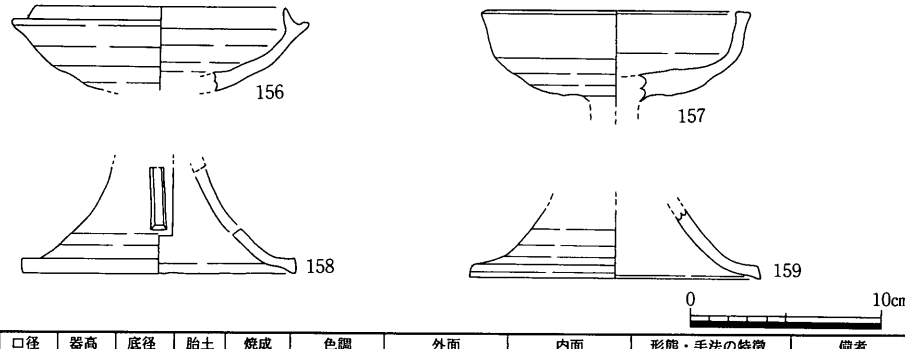
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
153	弥・甕	16.6			中・普	良好	明褐	ナデ	ナデ		金雲母含む
154	弥・甕				中・多	良好	黒褐・明赤褐	叩き	ナデ		金雲母含む
155	弥・鉢	36.4			中・普	良好	黄橙～黒・橙	ナデ	ハケ目		

第424図　E区SX01出土遺物（1／4）

(2)古墳時代の遺構・遺物

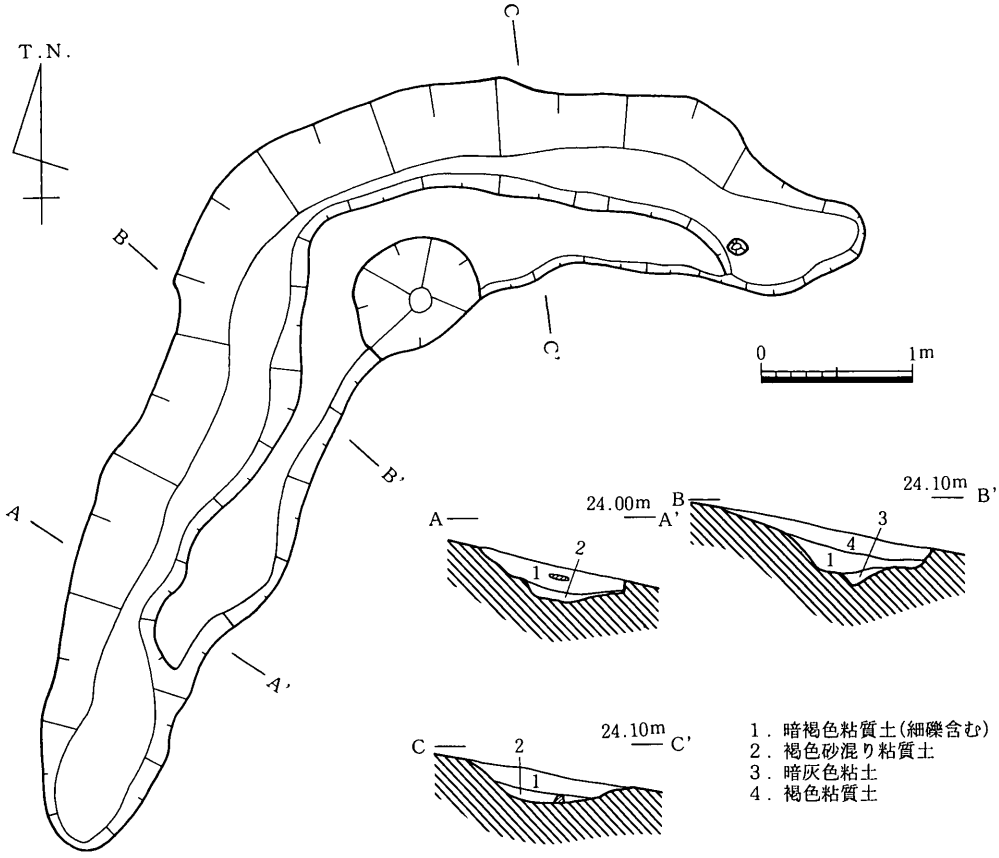
SD07（第425・426図，図版64）

E2区の西側の斜面部で検出した溝である。平面形は逆L字形で東西4m，南北4.7mで最大幅は1.6mとなっている。屈曲部分には後世のピットが切り込んでいる。深さは20cm前後で屈曲部分の断面はV字形になり，東側の大部分は2段掘りになっている。斜面に掘り込まれたため東側が低くなっており，両先端部のレベルはほぼ同じである。埋土は褐色系の粘質土が主体となっている。156は須恵器の杯身である。立ち上り部は内傾し端部は先細りになる。157～159は須恵器の高杯である。157は杯部で口縁部は上側に平坦な面をもつ。杯部の屈曲部の稜は不明瞭で底部は肥厚している。158は脚部で端部付近で外側に屈曲し，端部をやや拡張し外側に面を作る。長方形の透し穴が2つ施されている。159



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
156	須・杯身	13.0			細・少	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
157	須・高杯	12.9			細・少	良好	灰白・灰	ナデ・ケズリ	ナデ	底手持ちヘラケズリ	
158	須・高杯			14.2	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	長方形の2方透し	
159	須・高杯			15.2	細・少	良好	灰	ナデ	ナデ		

第425図　E区SD07出土遺物（1／4）



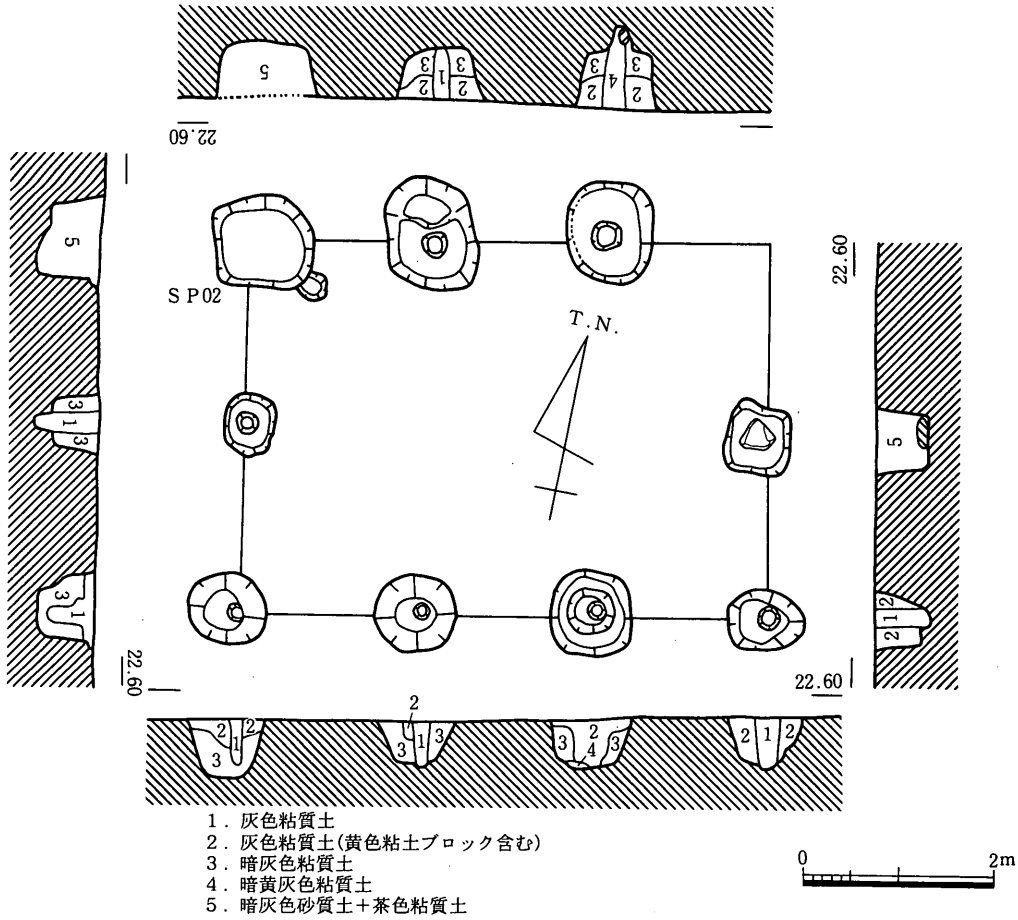
第426図　E区SD07平・断面図（1／50）

も端部付近で外側に屈曲する。その他SD07付近の包含層と下のSD02から本来はこの溝に伴っていたと考えられる須恵器が出土している。

(3)古代の遺構・遺物

SA01（第433図，図版61）

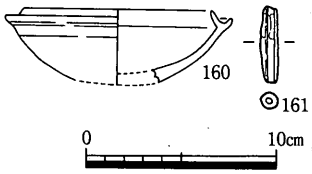
E5区の東端で検出した南北方向の柵列で，全長は5.9mで全体で3間の柵列である。柱間は約1.9mで，南から3つ目の柱穴には根石が据えられていた。柱穴は直径20cm前後の円形で，深さも20cm前後である。柱穴の埋土は黒褐色粘土の単一層である。柱穴からは10～11世紀頃と考えられる土器の細片が少量出土したにとどまる。西側のSB08に伴う柵列で，主軸方位はN－8°－Eである。



第427図　E区SB03平・断面図（1／80）

SB03（第427・428図，図版58・59）

E6区で検出した梁行2間×桁行3間の掘立柱建物である。梁行は2間で3.9m，桁行は3間で5.6m，建物面積は21.8㎡≒6.6坪となっている。建物の主軸方位はN－81°－Wである。柱穴は径60～90cmの円形をした大形のものである。深さも60～80cmと深く，また柱を差し込む穴が底に掘られているものもあった。根石は据えられていなかったが北東の柱



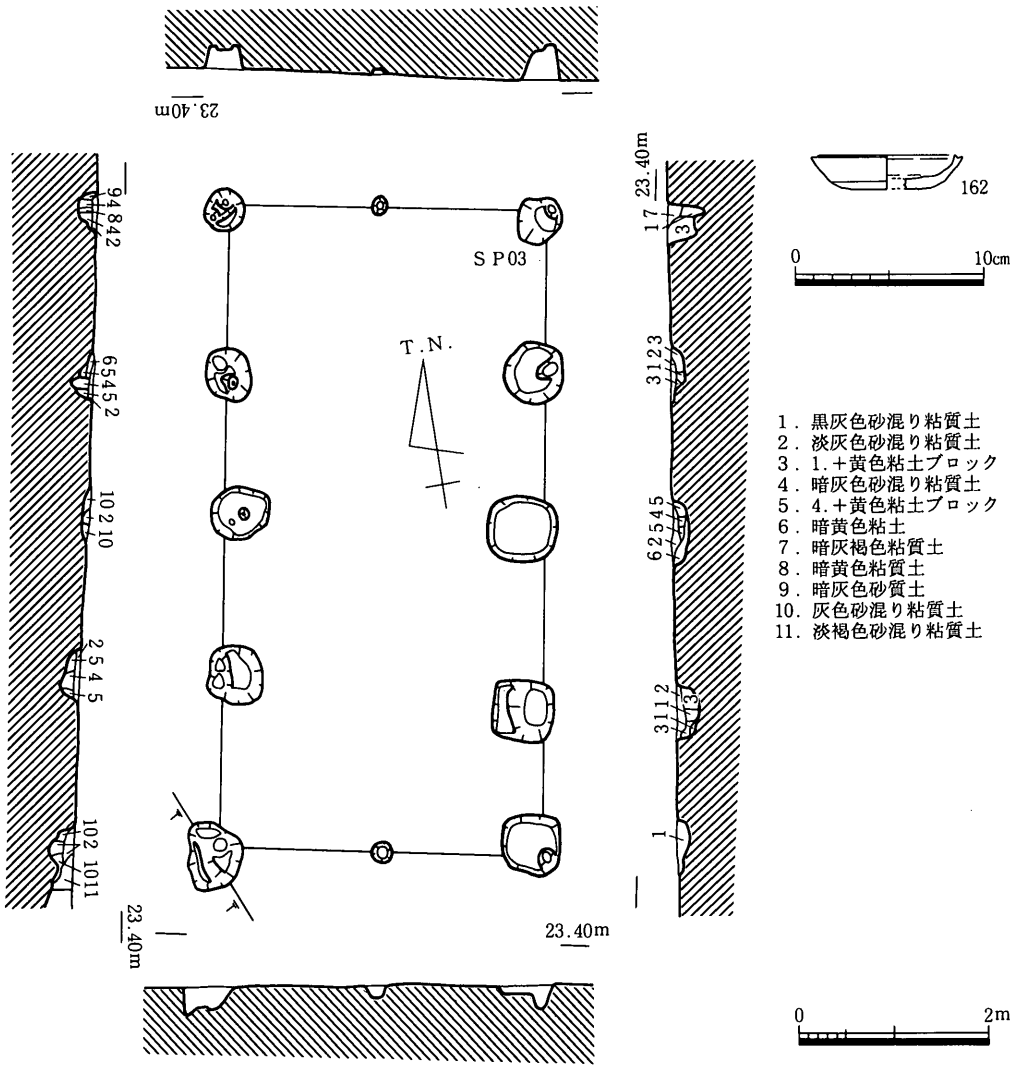
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
160	須・杯身	12.0			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
161	土錘	短軸3.9	長軸0.9		細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	不明		

第428図　E区SB03，SP02出土遺物（1／4）

穴には根固めの石がつめられていた。埋土は柱穴部分は灰色粘質土でそのまわりに暗灰色砂質土を埋めていた。柱穴の中から須恵器や土師器の細片などが出土している。その内2点のみ図示しえた。160は立ち上りのつく杯身で口径は12cmである。

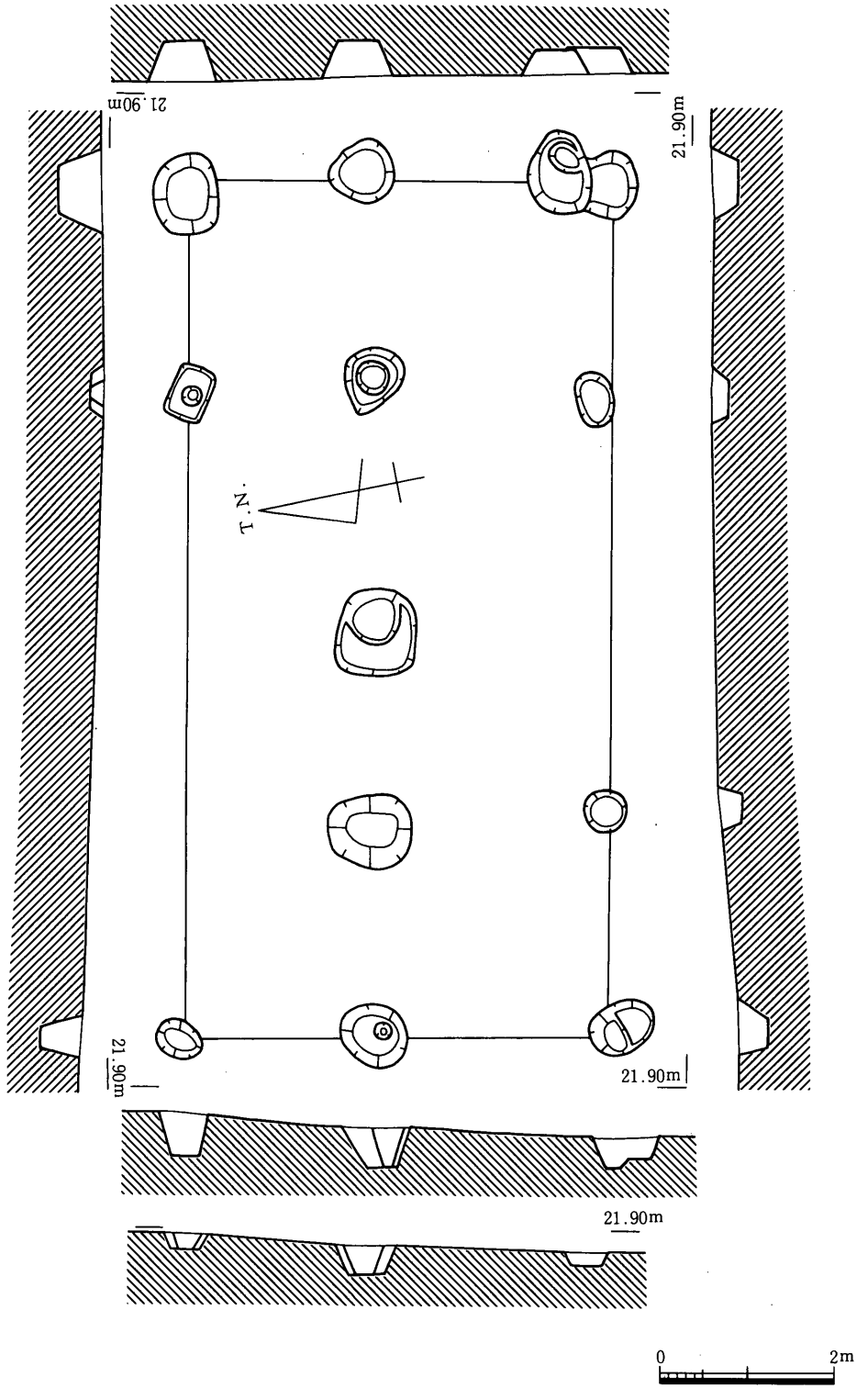
ＳＢ04（第429図，図版59）

Ｅ８区のほぼ中央部で検出した梁行２間×桁行４間の掘立柱建物である。平面形は長方形で梁行は２間で3.4m，桁行は４間で6.8m，建物面積は23.1㎡≒7.0坪となっている。柱穴は平面形が１辺50～60cm前後の隅丸方形であるが，梁行の中間の柱は径20cm前後の円形



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
162	須・杯身	8.0	1.8	6.1	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第429図　Ｅ区ＳＢ04平・断面図（１／80），ＳＰ03出土遺物（１／４）



第430図　Ｅ区ＳＢ05平・断面図（１／80）

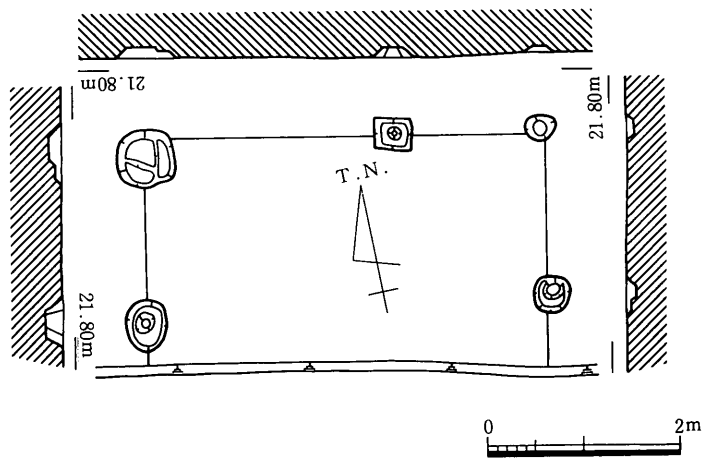
で桁行の柱穴に比べて小さくなっている。柱痕の確認出来たものもあった。建物の主軸方位はN－11°－Eとなっている。162は須恵器の杯身である。立ち上りは小さく，受け部とほぼ同じくらいである。遺物より概ね7世紀前半代の建物と考えられる。

ＳＢ05（第430図，図版60）

Ｅ３区の西側で検出した梁行２間×桁行４間の掘立柱建物である。梁行は２間で4.9m，桁行は４間で9.6m，建物面積は47.0㎡≒14.3坪である。南側と北側の桁行の柱穴は検出されなかったものもある。柱穴の平面形は隅丸方形が多く径は70cm前後となっている。柱穴の埋土は灰色系の粘質土が中心になっている。中央の桁行列の柱穴には１m近いものもあり，大型の建物である。建物の主軸方位はN－79°－Wである。柱穴の埋土より８世紀代と思われる土器の細片が少量出土した。

ＳＢ06（第431図，図版60）

Ｅ３区の南東コーナー部で検出した梁行２間×桁行１間以上の掘立柱建物である。梁行は２間で4.2m，桁行は南側が調査区外に延びるため全体は不明であるが，調査区内で2.4mである。北側の梁行列の柱穴の柱間は西側のほうが広くなっている。柱穴の平面形は隅丸方形で30～60cmほどで，埋土は黒褐色粘質土である。建物は南北棟と考えられ，主軸方位はN－11°－Eである。柱穴内より赤色顔料を塗った土師器を含んだ土器の細片が少量出土した。概ね８世紀代と考えられる。

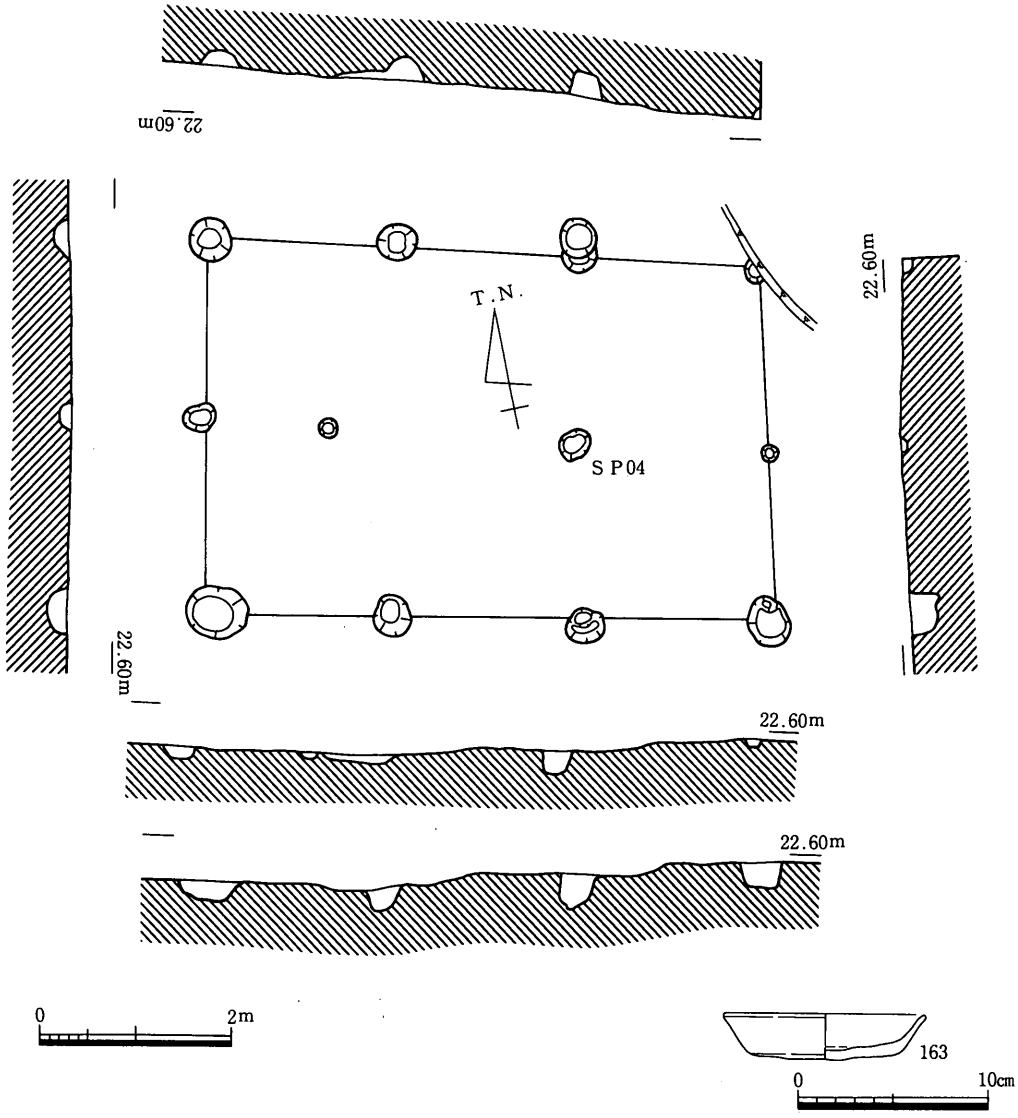


第431図　Ｅ区ＳＢ06平・断面図（１／80）

ＳＢ07（第432図，図版61）

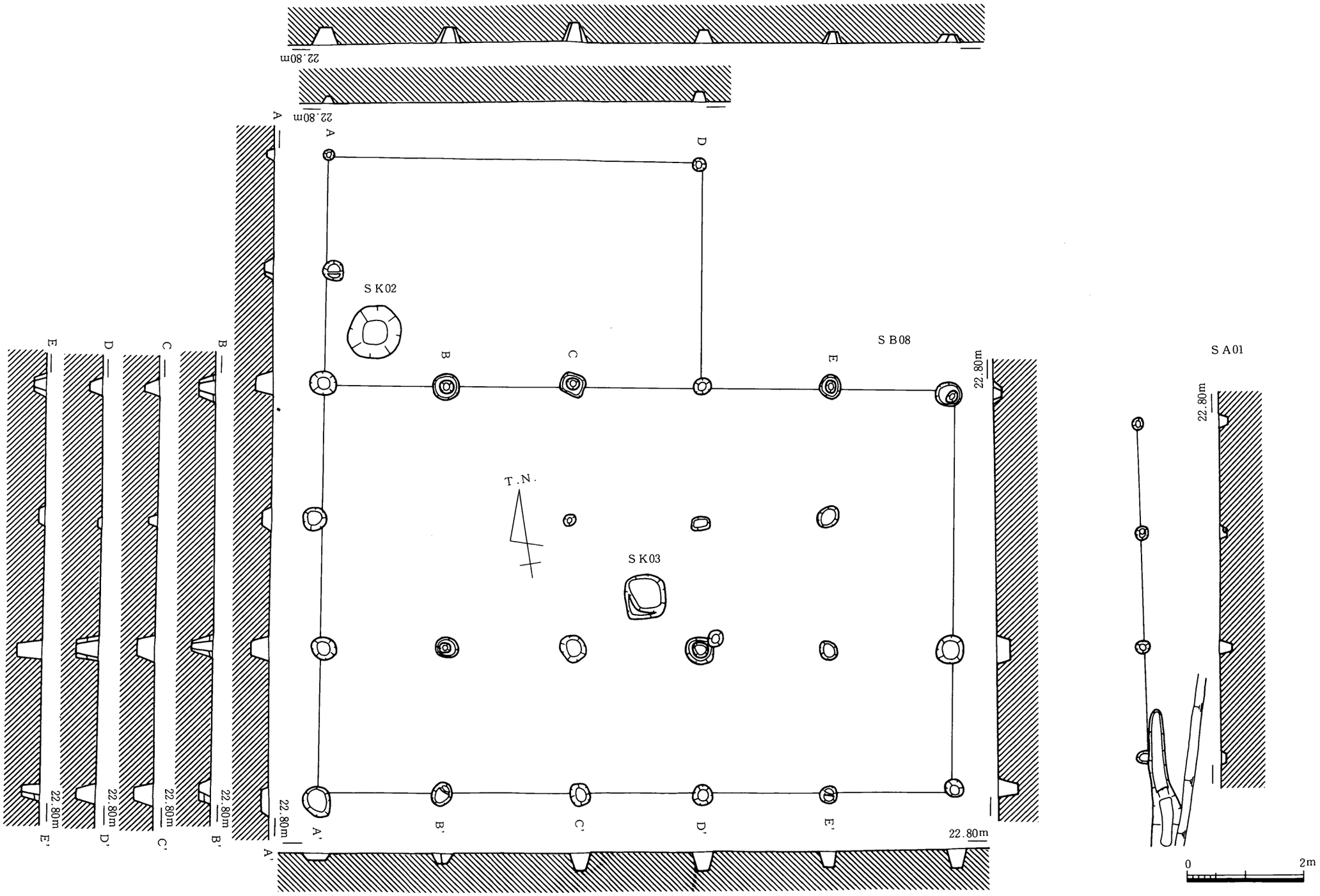
Ｅ８区の南西部で検出した梁行２間×桁行３間の掘立柱建物である。梁行は２間で3.8m前後，桁行は３間で5.9m前後，建物面積は約22.4㎡≒6.8坪である。柱穴の平面形は直径20～70cmのほぼ円形で，深さは20cm前後で１つを除いて柱痕は確認出来なかった。梁行は西側のほうがやや短くなっており，建物全体が若干歪んでいる。中央の桁行列は他の柱

穴より小さくなっており，特に西から２つ目の柱穴は南北の桁行列とずれており梁行が直線にならないことから，この建物に伴わないものとも考えられる。建物の主軸方位はＮ－79°－Ｗですぐ北東に位置しているＳＢ04と直交している。ＳＢ07は７～８世紀と考えられる溝が埋没した後にその埋土を切り込んで建てられている。163はＳＰ04から出土した土師器の杯である。体部は強くナデているがそれ以外の調整は不明である。底部はヘラ切りで口径は10.7cmである。その他土師器と須恵器の細片が柱穴内から出土している。163から10世紀後半～11世紀初頭頃の建物と考えられる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
163	土・杯	10.7	2.4	7.7	中・多	良好	明赤褐	不明	不明	底ヘラ切り	

第432図　Ｅ区ＳＢ07平・断面図（１／80），ＳＰ04出土遺物（１／４）



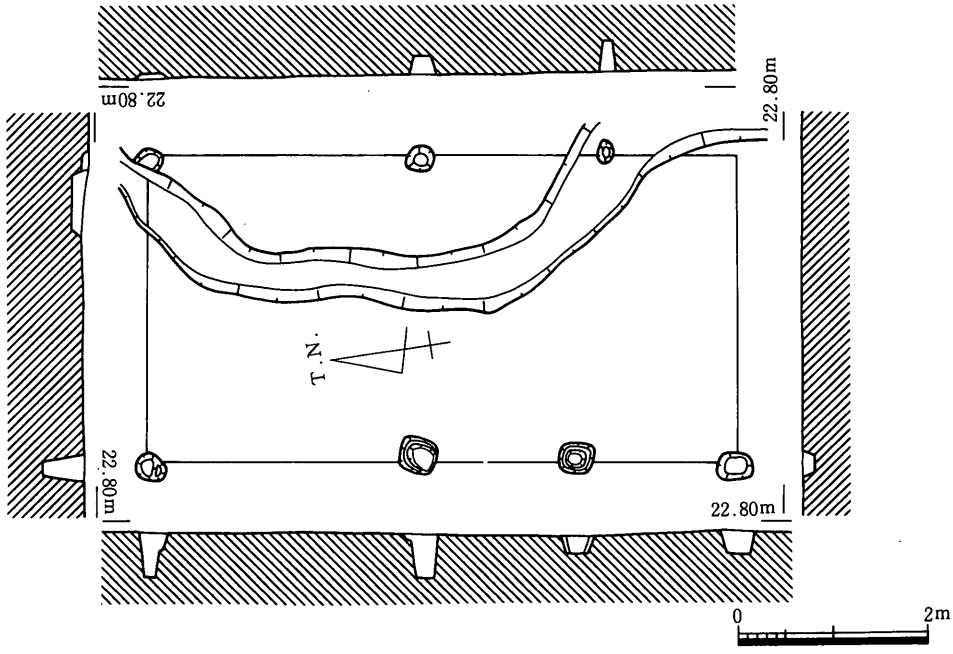
第433図　Ｅ区ＳＡ01，ＳＢ08平・断面図（１／80）

ＳＢ08（第433図，図版61）

Ｅ５区の東側で検出した掘立柱建物である。平面形は長方形の母屋部分に長方形の突出部が北側に付属している。母屋部は梁行３間×桁行５間，付属部は梁行２間×桁行３間となっている。母屋部は梁行３間で7.2m，桁行５間で11.0mで建物面積は79.2㎡≒24.0坪である。桁行列の南から３番目の列の西から２つ目と６つ目の柱穴は検出されなかった。付属部の梁行は２間で4.0m，桁行は３間で6.6mで建物面積は26.4㎡≒8.0坪である。西側の梁行列は母屋の西側の梁行列と若干ずれている。北側の桁行列の柱穴２つと東側の梁行列の柱穴１つは検出されなかった。母屋と付属部を合わせた建物全体の面積は105.6㎡≒32.0坪で大型の建物である。この建物の東側約３ｍのところには柵列ＳＡ01を伴っている。ＳＢ08の柱穴の平面形は40㎝前後の隅丸方形のものが多く，柱痕の確認されたものもある。付属部の柱穴は母屋部より小さめになっており，深さは30㎝前後のものが多く残りは良くない。柱穴の埋土は黒褐色粘土である。建物の主軸方位はＮ－81°－ＷでＳＡ01とほぼ直交する。柱穴から10世紀後半～11世紀初頭の土器細片が出土した。また付属部内の南西側と母屋の中央部で土坑を検出したが，この建物に伴う貯蔵穴かも知れない。

ＳＢ09（第434図）

Ｅ５区の東側でＳＢ08の西側に隣接して検出した梁行１間×桁行３間の掘立柱建物である。平面形は長方形で梁行は１間で3.2m，桁行は３間で6.2m，建物面積は19.8㎡≒6.0坪

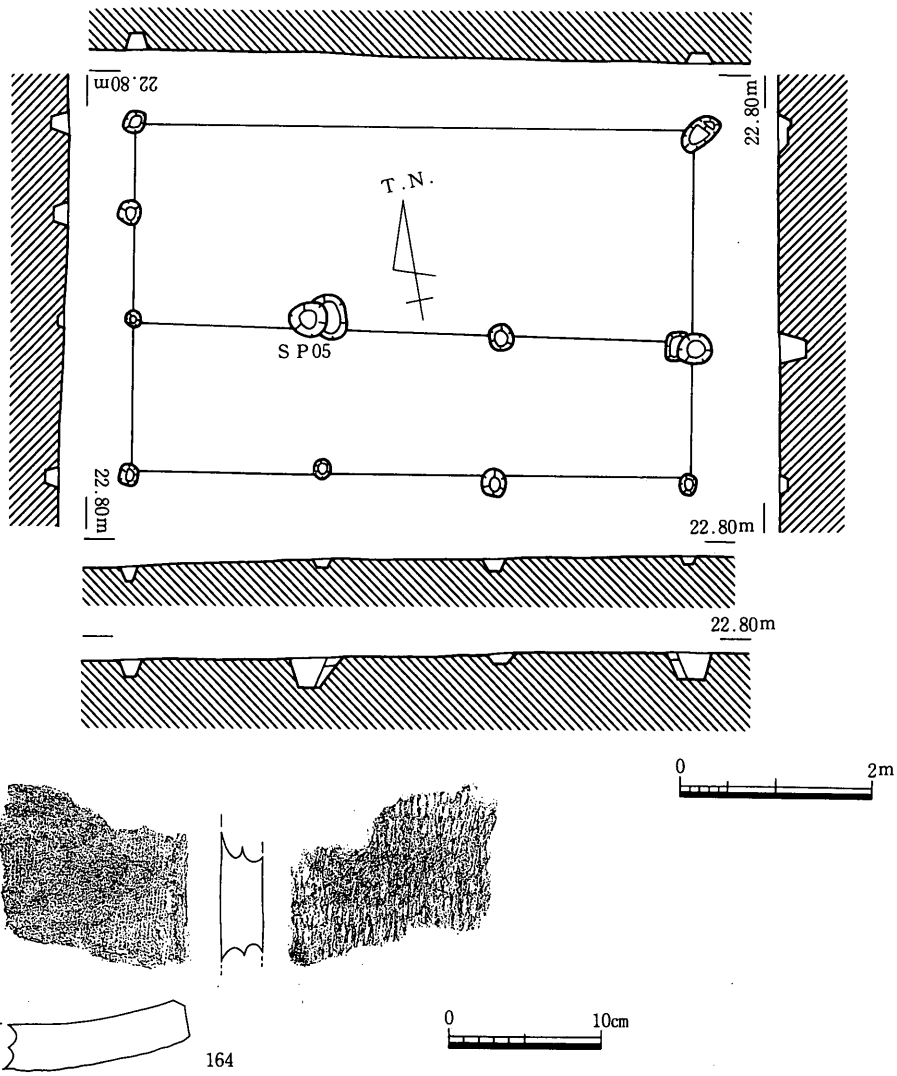


第434図　Ｅ区ＳＢ09平・断面図（１／80）

となっている。柱穴の平面形は隅丸方形で１辺30cm前後で，深さは７～50cmほどである。柱穴の埋土は黒褐色粘土で一部柱痕の確認出来たものもあった。南側梁行列の東側の柱穴は検出されなかった。また北側の桁行の柱間は他のものより長くなっている。建物の主軸方位はＮ－７°－Ｅで，柱穴内より10世紀後半～11世紀前後の土器の細片が出土した。

ＳＢ10（第435図，図版62）

Ｅ５区の西側の中央部で検出した梁行３間×桁行３間の掘立柱建物である。建物の平面形は長方形で，梁行は３間で3.6m，桁行は３間で5.9m，建物面積は21.2㎡≒6.4坪となっ



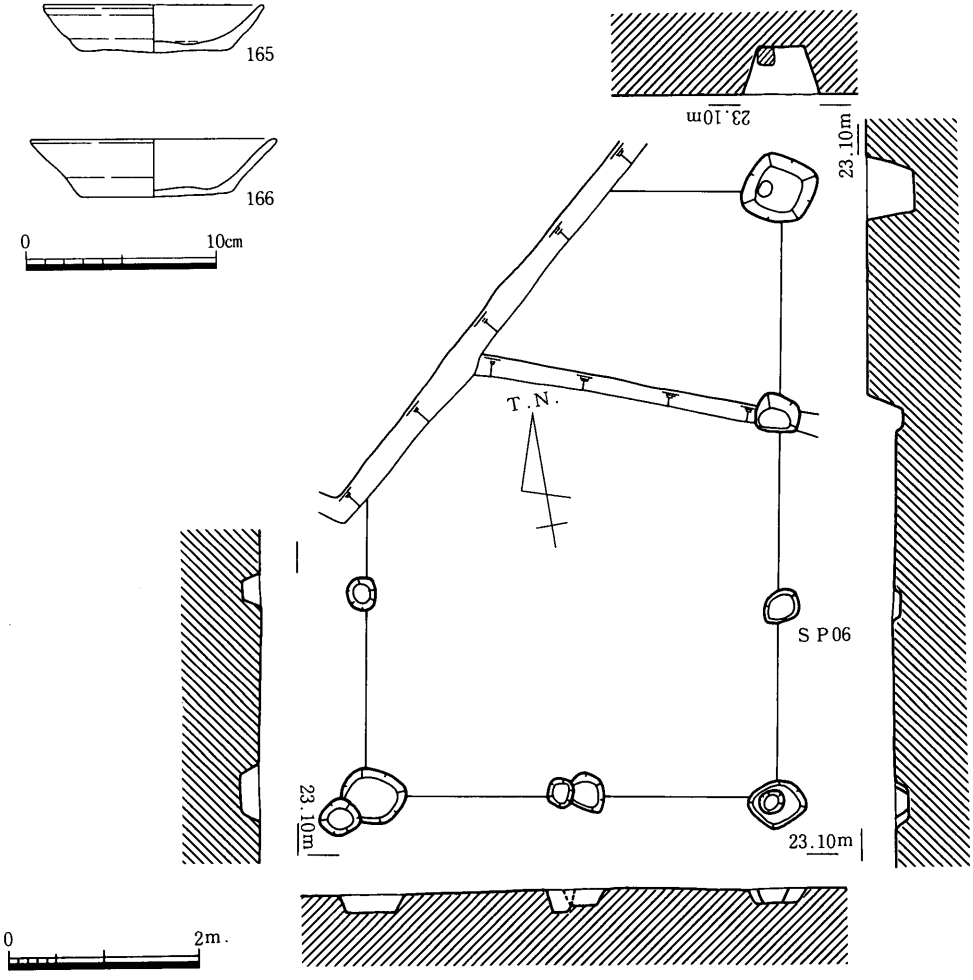
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
164	平瓦	2.9	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	2		粗・普	にぶい黄橙	不良	一枚作り	8.3

第435図　Ｅ区ＳＢ10平・断面図（１／80），ＳＰ05出土遺物（１／５）

ている。梁行の柱間は南側が他の２つに比べて広くなっており，廂の可能性もある。北側の梁行列の中間の柱穴は検出されなかった。柱穴の平面形は円形で直径は20～30cmほどである。柱穴の埋土は黒褐色粘土の単一層となっている。建物の主軸方位はＮ－80°－Ｗである。ＳＰ05から164の平瓦が出土した。凸面に縄目叩きを施している。その他の柱穴から土師器の細片が出土した。

ＳＢ11（第436図，図版62）

Ｅ５区の西側でＳＢ10の北側約３ｍのところに位置する，梁行２間×桁行３間の掘立柱



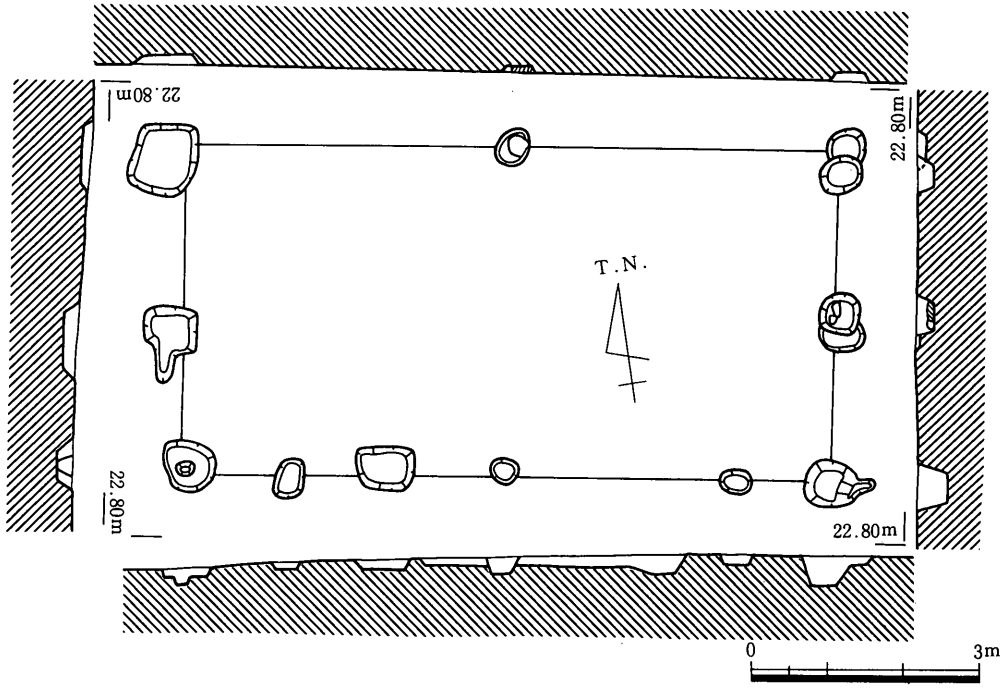
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
165	土・杯	11.6	2.5	8.0	精緻	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
166	土・杯	13.0	3.0	7.8	細・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	

第436図　Ｅ区ＳＢ11平・断面図（１／80），ＳＰ06出土遺物（１／４）

建物である。梁行は２間で4.4m，桁行は３間で6.4m，建物面積は28.2㎡≒8.5坪となっている。西側の桁行列と北側の梁行列は調査区外に延びている。また東側桁行列の北から２つ目の柱穴は丁度遺構面が削平を受けて段になっている部分に位置しているため，柱穴の掘り込み面が北側と南側では著しく異なっている。柱穴の平面形は30～70㎝の隅丸方形で，東側桁行列の一番北側の柱穴では根石が見られた。柱穴の埋土は黒褐色粘土で，柱痕の確認出来たものもあった。建物の主軸方位はＮ－10°－ＥでＳＢ10と直交している。165・166はＳＰ06から出土した土器である。165は体部を２段にナデている。166は内面立ち上り部を強くナデている。

ＳＢ12（第437図，図版62）

Ｅ５区の西側でＳＢ10と重なって検出した梁行２間×桁行現存で５間の掘立柱建物である。梁行は２間で4.3m，桁行は現存５間で8.6m，建物面積は37.0㎡≒11.2坪である。桁行の柱間の間隔は短くなっており，南側桁行列の東から３つ目の柱穴は他の遺構と重なっており検出出来なかったが本来あったと考えられ，桁行は６間の建物の可能性が高い。柱穴の平面形は30～80㎝の隅丸方形で，柱痕の確認出来たものもある。北側桁行列の中央の柱穴と東側梁行列の中央の柱穴には根石が見られた。また柱の抜き痕のある柱穴も２つある。

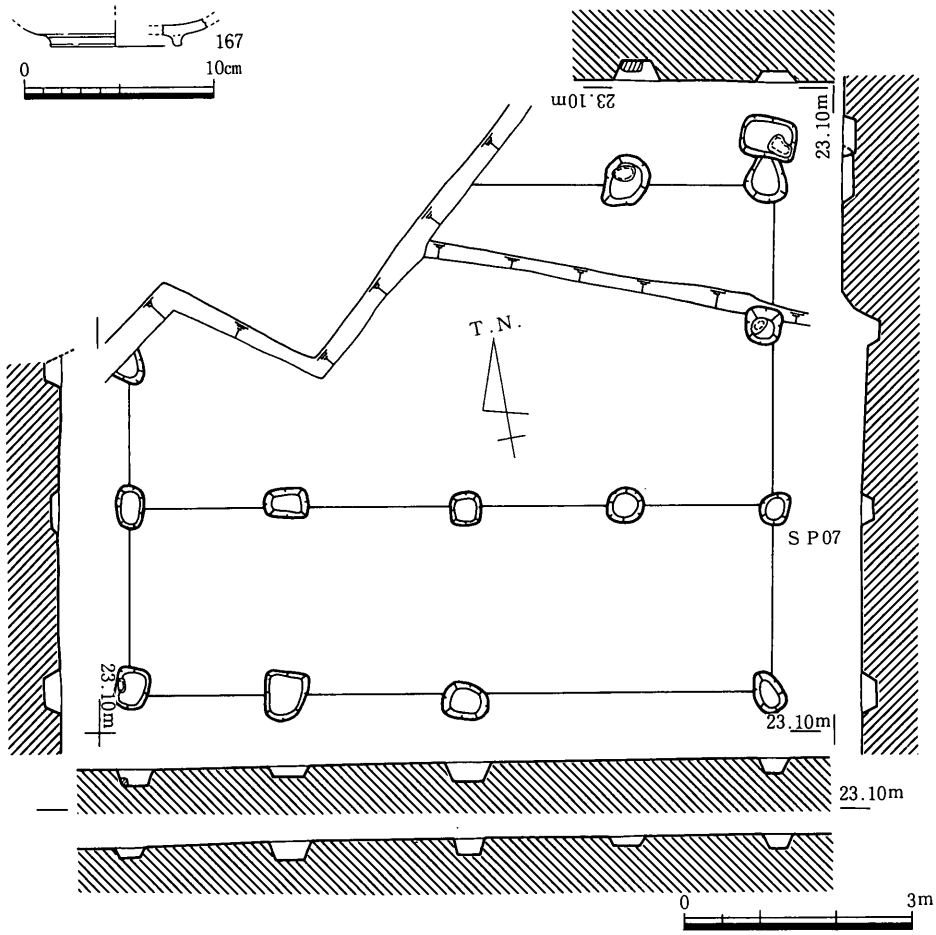


第437図　Ｅ区ＳＢ12平・断面図（１／100）

全体に柱穴の残りは悪く，柱穴の埋土は黒褐色粘土の単一層であった。建物の主軸方位はN－81°－Wである。柱穴内より10世紀後半～11世紀初頭と考えられる土器の細片が出土した。

ＳＢ13（第438図，図版62）

Ｅ５区の西側でＳＢ12の北側約３ｍのところに位置し，ＳＢ11と重なって検出した梁行３間×桁行４間の掘立柱建物である。梁行は３間で6.7ｍ，桁行は４間で8.5ｍ，建物面積は57.0㎡≒17.3坪である。西側の梁行と北側の桁行は調査区外に延びている。桁行は南から２列目は認められるが，３列目は認められないことから梁行の南側１間分は廂の可能性がある。柱穴の平面形は30～60㎝の隅丸方形である。また東側梁行列の北から２つ目の柱穴は丁度遺構面が削平を受けて段になっている部分に位置しているため，柱穴の掘り込み



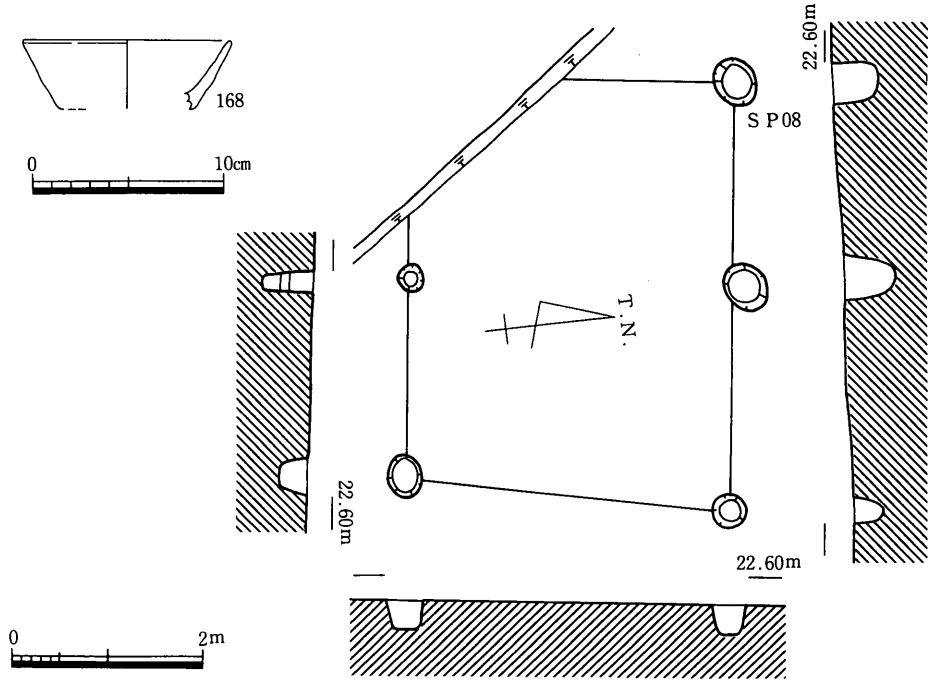
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
167	黒Ａ・椀			6.9	細・少	良好	黒・にぶい橙	ナデ	ナデ	外面に赤色顔料	

第438図　Ｅ区ＳＢ13平・断面図（１／100），ＳＰ07出土遺物（１／４）

面が北側と南側では著しく異なっている。柱穴の埋土は黒褐色粘土で，根石のある柱穴もあった。建物の主軸方位はN－81°－WでＳＢ12と同じであり，両者の建物は東西の梁行の列を揃えている。167はＳＰ07から出土した黒色土器Ａ類の椀である。断面方形のしっかりとした高台をもち，体部外面に赤色顔料が薄く付着している。

ＳＢ14（第439図）

Ｅ６区で検出した梁行１間×桁行２間の掘立柱建物である。梁行は１間で3.4m，桁行は２間で4.4m，建物面積は15.0㎡≒4.5坪である。建物の主軸方位はN－12°－Eである。柱穴は径30～60cmの円形をしている。埋土は暗灰色の粘質土で，柱痕や石は検出されなかった。柱穴内から須恵器や土師器・黒色土器Ｂ類などの細片が出土した。その内図示しえた168は土師器の杯である。体部は底から口縁にかけて直線的に開く。

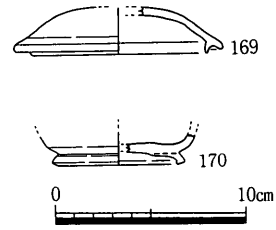


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
168	土・杯	11.0			中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		

第439図　Ｅ区ＳＢ14平・断面図（１／80），ＳＰ08出土遺物（１／４）

ＳＤ08（第440図）

Ｅ８区の南西コーナーで検出した南北方向の溝である。幅は0.3～1.1ｍで中央より南側は狭くなっている。上部はかなり削平されており下部のみが残存しており，深さは５cm前後にすぎない。断面形は逆台形に近く，埋土は淡褐色砂質土の単一層である。169は須恵器の杯蓋である。内面に口縁部端部より突出する返りを持つ。170は須恵器の杯で体部立ち上り部より内側に外側へ踏張る断面方形の高台を貼り付けている。７世紀前半代のものである。

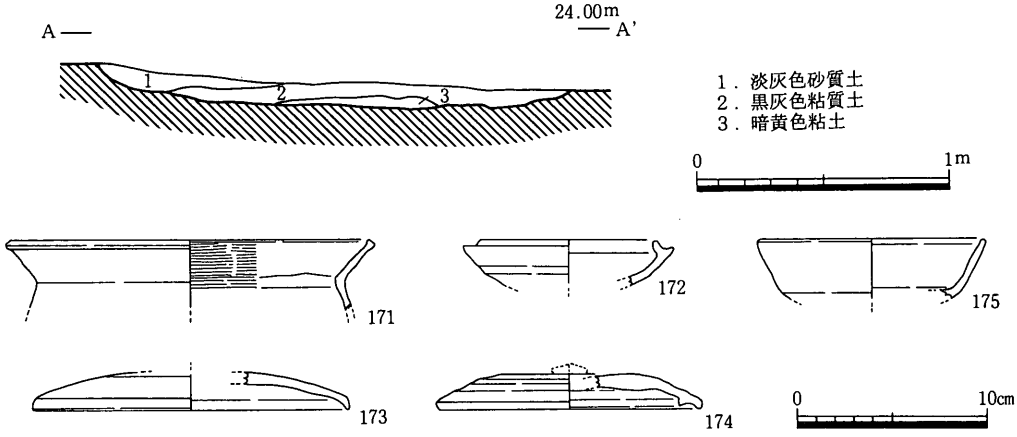


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
169	須・杯蓋	11.0			微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
170	須・杯			7.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第440図　Ｅ区ＳＤ08出土遺物（１／４）

ＳＤ09（第441図）

Ｅ８区の中央部の北寄りで検出した東西方向の溝である。西端は後世に段状に削平されている。現存で長さ５ｍ，最大幅1.9ｍである。断面形は緩やかな皿状で，深さは10cmである。埋土は北側に灰色の砂質土が堆積しているが，主体は黒灰色粘質土である。171は土師器の甕である。口縁部端部は肥厚し平坦な面をもつ。口縁部内面にはハケ目を施している。172は須恵器の杯身である。立ち上りは内傾し受け部は斜め上方を向く。174は口縁



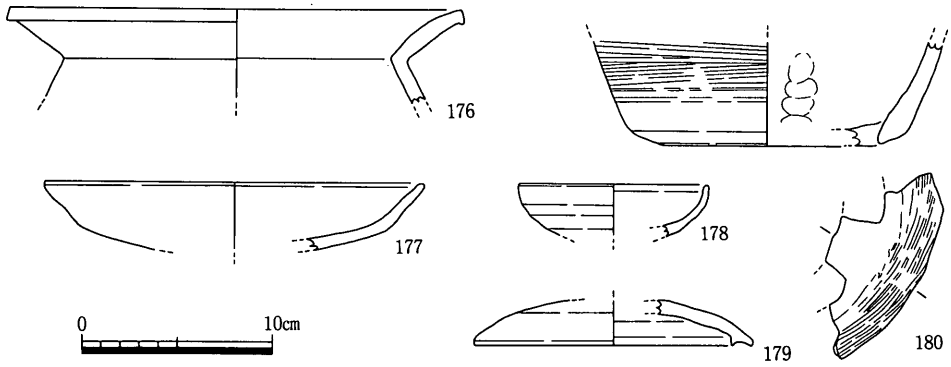
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
171	土・甕	19.4			中・普	良好	にぶい橙	不明	ハケ目		
172	須・杯身	9.3			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
173	須・杯蓋	16.7			細・普	良好	灰白	ケズリ→ナデ	ナデ		
174	須・杯蓋	14.0			細・普	良好	灰白	ケズリ→ナデ	ナデ		
175	須・杯	12.0			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第441図　Ｅ区ＳＤ09断面図（１／30），出土遺物（１／４）

部内面に返りが付くものである。175は須恵器の杯で全体にナデている。

ＳＤ10（第442図）

Ｅ８区の中央部で北寄りで検出した溝で，南北方向に緩く弧を描いており，東辺の北半分が不整形に突出している。検出長は４ｍほどで，幅は0.4～1.25m，深さは10cm前後である。断面形は不整形な皿状で，埋土は黒灰色砂質土の単一層である。北側をＳＤ09に切られている。177は土師器の皿で口縁部端部は若干内側に肥厚する。内・外面ともナデている。179は口縁部内面に小さな返りが付く。180は須恵器の甑である。大部分が欠損しているが，底部に方形の孔が２個残存している。全体に６個の孔になるものと思われる。体部外面にはカキ目が見られる。

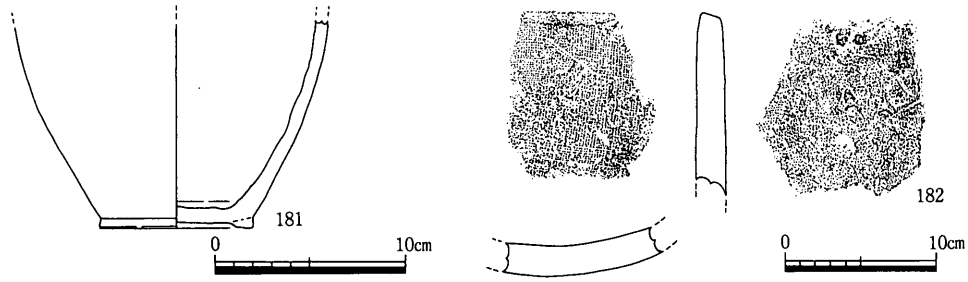


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
176	土・甕	23.7			中・多	良好	浅黄橙～橙	ナデ	ナデ	赤色顔料付着	
177	土・皿	20.0			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
178	須・杯	10.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
179	須・杯蓋	14.5			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
180	須・甑			14.4	中・普	良好	灰・灰白	カキ目	ナデ	穴の数不明（６個？）	

第442図　Ｅ区ＳＤ10出土遺物（１／４）

ＳＤ11（第443図）

Ｅ８区の西側で検出した直線的に延びる南北方向の溝である。調査区内で全長11m，幅95cm，深さ10cmほどである。断面形は浅い皿状で，埋土は暗灰色粘質土の単一層である。溝の北側は他の溝に重複して切られている。この溝の埋没後に埋土を切り込んで掘立柱建物（ＳＢ07）が建てられている。181は須恵器の壷である。体部は下半のみであるが緩く内湾して立ち上り，底部には低い扁平な高台が付いている。182は平瓦で凹面には布目圧痕が残る。端面はヘラケズリで面取りしている。その他須恵器片や丸瓦が出土したが図化出来なかった。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
181	須・壺			8.0	細・少	良好	灰	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
182	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕		12	粗・普	灰白	良好		10.9

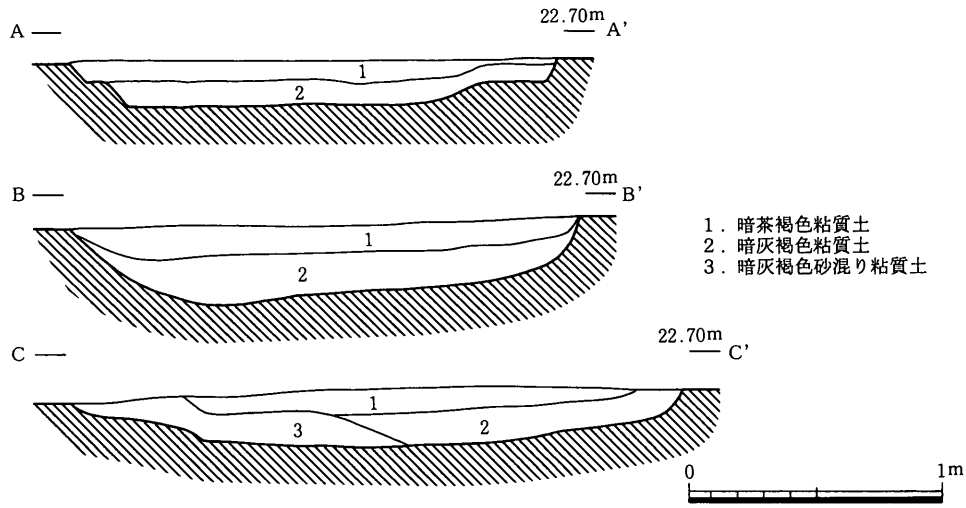
第443図　E区SD11出土遺物（1／4，1／5）

SD12

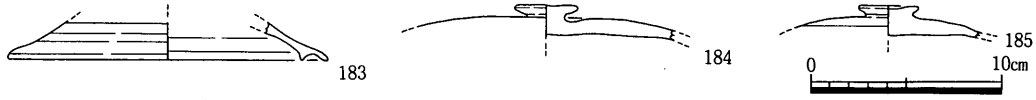
E8区の西側で，SD11の東2mのところでSD11に並走して検出した南北方向の溝である。溝は南から2.5mほど北へ行った部分が西側へ瘤状に突出している。全長は調査区内で約8m，幅は40～90cmほどで，深さは10cm前後と極めて残りは悪い。断面形は浅い皿状で，埋土は淡褐色砂質土の単一層である。埋土中から須恵器杯や壺などの細片が出土したが図化出来なかった。概ね7～8世紀頃と思われる。

SD13（第444・445図）

E5区の中央部の南壁際で検出した，直線的に延びる東西方向の溝である。全長は13.9m，幅は2m前後，深さは20cm前後となっている。溝の東端部は一段高くテラス状になっ



第444図　E区SD13断面図（1／30）



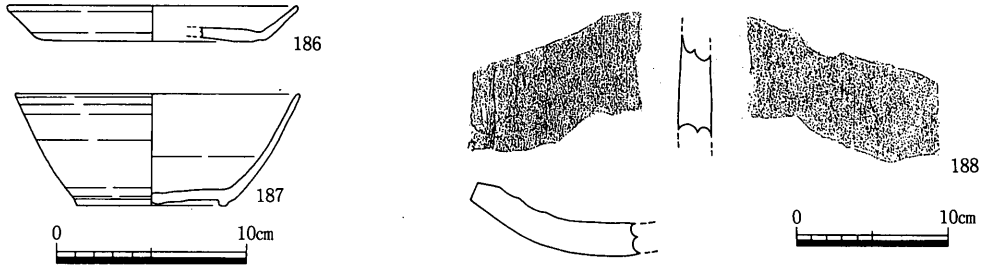
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
183	須・杯蓋	16.8			微・普	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
184	須・杯蓋				微・普	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
185	須・杯蓋				細・少	良好	灰	ケズリ・ナデ	ナデ		

第445図　E区SD13出土遺物（1／4）

ている。埋土は上層は暗茶褐色粘質土，下層は暗灰褐色粘質土に大別出来る。183～185は須恵器の杯蓋である。183は口縁部端部内面にかえりが付くもので，天井部は欠損している。

SD14（第446図）

E5区の北西コーナー部で検出した北東－南西方向の溝である。溝は調査区内で4.5mほど検出し，中央部が狭くなっている。ほぼ直線であるが，北側で若干曲がり調査区外へと続いて行く。また溝は南側で段状に削平されている。幅は0.6～1.5mで，深さは20cm程度である。断面形は逆台形に近く，埋土は茶褐色粘質土の単一層である。186は須恵器の皿で口縁部は短く直線的である。187は須恵器の杯で体部は直線的に長く，口縁部端部は先細りになっている。底部には断面方形の低い高台を立ち上り部やや内側に貼り付けている。器高は5.9cmと高くなっている。188は平瓦で凸面は縄目叩きの後にナデている。遺物は9世紀代のものである。



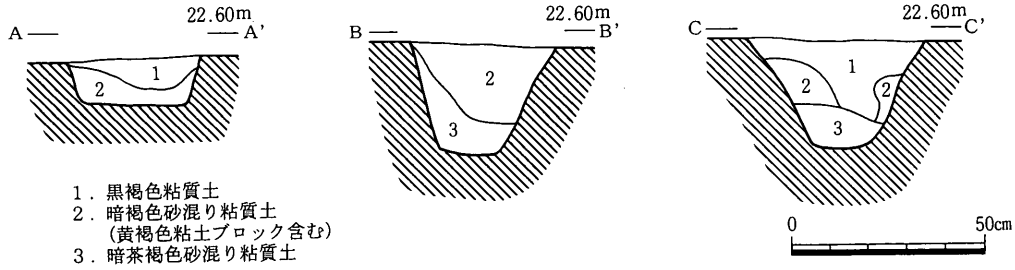
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
186	須・皿	15.2	1.8	12.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
187	須・杯	15.0	5.9	7.8	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
188	平瓦	2.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	8		中・普	灰白	良好		6.3

第446図　E区SD14出土遺物（1／4，1／5）

ＳＤ15（第447図）

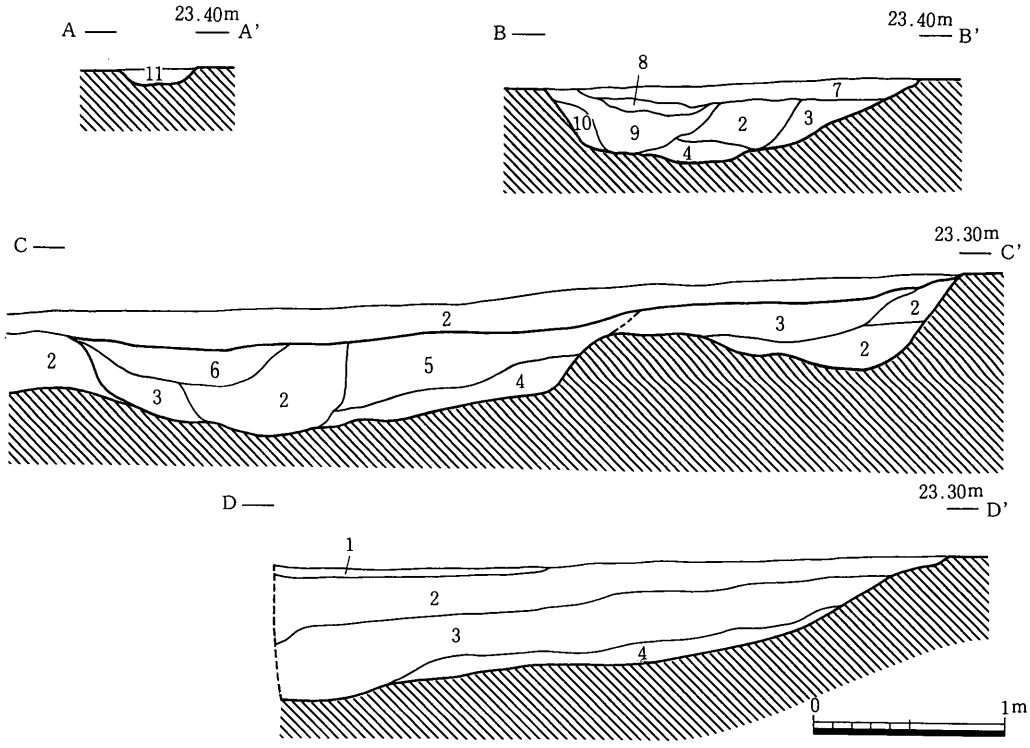
Ｅ５区の中央部の南壁際で検出した溝である。南壁から緩く西側へ向かって弧を描き，ＳＤ13を切って収束する。長さは直線距離で９ｍ弱で，幅は30～50㎝，深さは30㎝前後である。断面形はＵ字形で埋土は黒褐色～暗褐色系の粘質土が主体となっている。埋土中より８世紀後半～９世紀代と考えられる須恵器や土師器の細片が出土した。



第447図　Ｅ区ＳＤ15断面図（１／20）

ＳＤ16（第448～450図）

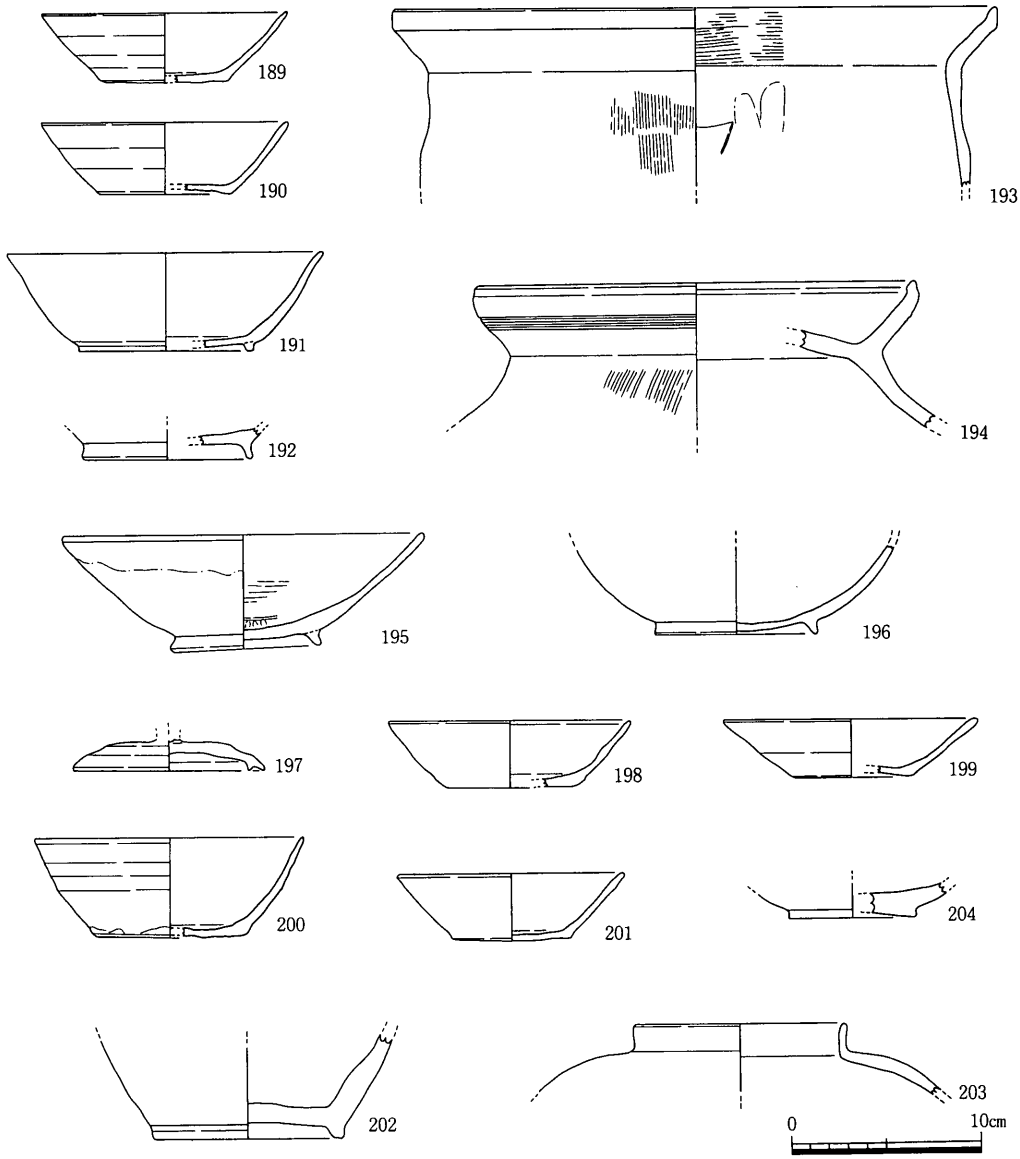
Ｅ８区の西側で検出した南北方向の溝である。調査区内で全長20ｍ程で，最大幅4.5ｍで，深さは８～70㎝である。不整形ながら全体として直線的な溝で，北側の先端部は東側が急激に狭くなり収束する。南側の先端部は全体に削平されている。この溝は本来ＳＤ11とＳＤ12の上に重なって形成されたものと考えられ南側は溝全体が削平されたため，ＳＤ11とＳＤ12のみが残存して検出されたものである。断面形はＵ字形で埋土は灰褐色系の砂質土，粘質土が中心であるが，南に行くほど暗灰色が強くなっている。また溝の最上層には淡灰褐色砂質土が見られるが，これは溝が埋没した後の窪みの部分に再堆積したものと思われる。埋土中より土器・瓦・石器が出土した。189・190は土師器杯で回転台成形のものである。体部は直線的で口縁部端部は先細りになる。191は土師器椀で口縁部をナデて緩く外反させている。立ち上り部よりやや内側に断面方形の高台を貼り付けている。193は土師器甕で口縁部端部を上側につまみ上げて外側に面を作り出している。体部上半は直線的である。194は脚台付皿と考えられ，脚部は口径より広がる。口縁部端部を上方につまみ上げている。195・196は黒色土器Ａ類椀である。195は体部は直線的に開き，中程がやや薄くなっている。底部には外開きの高台が付いている。内面は摩滅しているがヘラミガキが残る。立ち上り部のやや上に赤色顔料が付着している。196は口縁部は欠損しているが，体部は丸味をもって立ち上がる。197は須恵器杯蓋で，口縁部内面にかえりを持っ



1．淡灰色砂質土
2．暗灰色砂質土
3．2.＋暗黄色礫
4．暗灰色粘質土
5．灰褐色砂質土
6．暗灰褐色砂質土
7．淡灰褐色砂質土
8．灰褐色砂混り粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．灰褐色粘質土
11．暗褐色粘質土

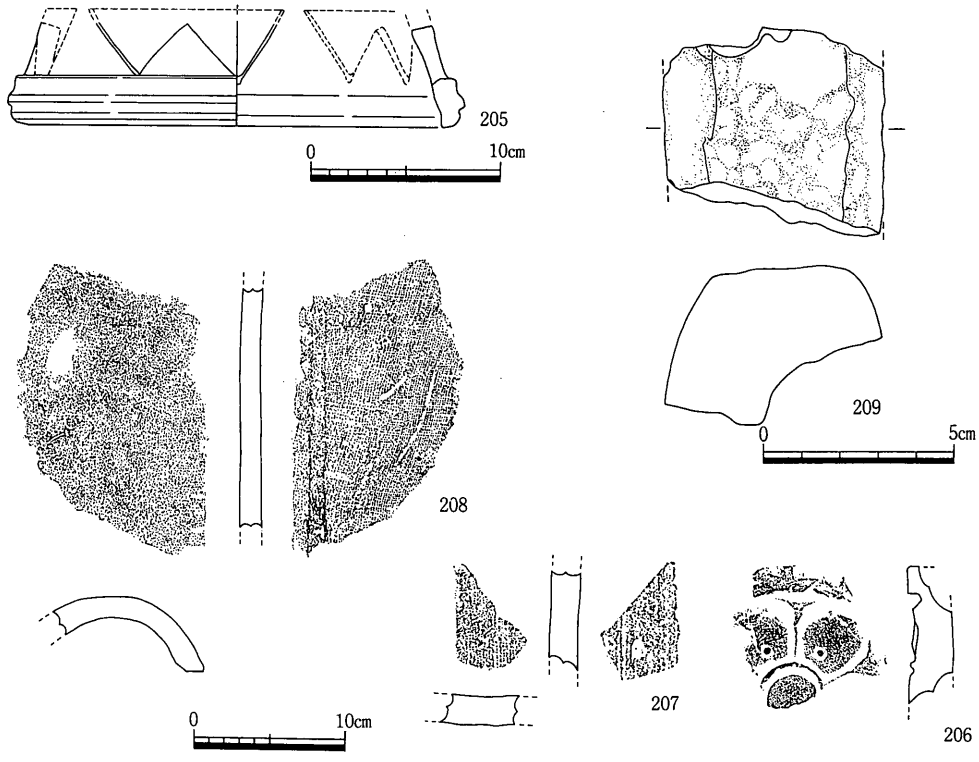
第448図　E区SD16断面図（1／40）

ている。198～201は須恵器杯である。198は口縁部内面にナデによる沈線状の窪みが見られる。200の体部はほぼ直線的であるが，回転ナデによる凹凸が顕著である。底部は突出気味で，器高は5.3cmと高くなっている。203は須恵器壷で口縁部は短く直立する。外面に自然釉が付着している。204は緑釉陶器椀である。底部は削出し高台でやや上げ底になっている。内・外面に施釉している。205は円面硯で脚部の一部分である。脚端部は外側に肥厚し凹線が2条巡る。脚部には鋸歯文状の透しが施されている。206は軒丸瓦である。瓦当部分の破片であるが，外区は素縁で，中房の周りには圏線が巡っている。間弁は中央圏線部分まで降り，幅広の単弁の蓮弁内の下部には珠文が施されている。丸瓦部との接合部は欠損し不明である。208は丸瓦で側縁の凹面側にヘラケズリによる面取りを行なっている。209は砂岩製の砥石で現存で3面使用している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
189	土・杯	12.9	3.5	6.6	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
190	土・杯	13.0	3.7	6.8	微・普	良好	灰白～浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
191	土・椀	16.6	5.2	4.6	中・普	良好	橙	不明	不明	外面に赤色顔料	
192	土・椀			9.0	細・普	良好	浅黄橙	不明	不明	外面に赤色顔料	
193	土・甕	31.8			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ		
194	土・台付皿	23.4			中・普	良好	灰白～ﾆﾌﾞｲ橙	ナデ→ハケ目	ナデ		
195	黒A・椀	19.0	6.2	8.0	中・普	良好	黒～浅黄橙	不明	ミガキ	外面に赤色顔料	
196	黒A・椀			8.5	中・普	良好	にぶい橙	不明	不明		
197	須・杯蓋	10.0			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
198	須・杯	12.7	3.5	6.5	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
199	須・杯	13.4	3.1	6.4	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
200	須・杯	14.2	5.3	8.2	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
201	須・杯	12.0	3.6	6.3	精緻	良好	灰～黒	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
202	須・瓶			10.2	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	自然釉付着	
203	須・瓶	11.2			精緻	良好	灰	不明	ナデ	自然釉付着	
204	緑・椀			6.7	精緻	良好	淡黄	ナデ	ナデ	内外面に灰黄色の釉	

第449図　E区SD16出土遺物（1）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
205	須・硯			23.4	細・普	良好	灰	ナデ	不明	透し6ヶ所	

遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
206					3.7	6	1.7		1.7		蓮子内に珠文を1個配す	

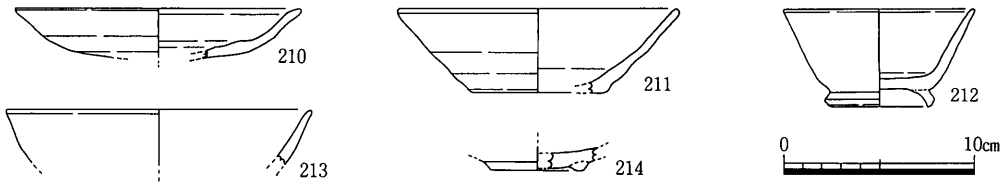
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
207	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕			細・普	橙・黒	良好		4.6
208	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	3		中・普	黒	良好		18.2

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
209	砥石	4.2	5.8	3.9	135.6	砂岩		

第450図　E区SD16出土遺物（2）（1／2，1／4，1／5）

SD17・18（第451図）

E8区の北西コーナー部分で検出した南北方向の溝である。調査区内で全長約8m，幅は1m前後，深さは15cmほどである。断面形はU字形で，埋土は黒灰色礫混じり粘質土の単一層である。南側でSD18と合流するが先後関係は確認出来ず，合流していたものと思われる。溝の交点から遺物が出土したが本来どちらの溝に伴うかは不明である。またSD18からは少量ながら遺物が出土した。210～212は交点部分出土の土器である。210は口縁部を強くナデている。211は体部は直線的で底部はやや突出する。212は須恵器杯で体部は直線的で，立ち上り部やや内側に外開きの高台が付く。213・214はSD18出土のものであ



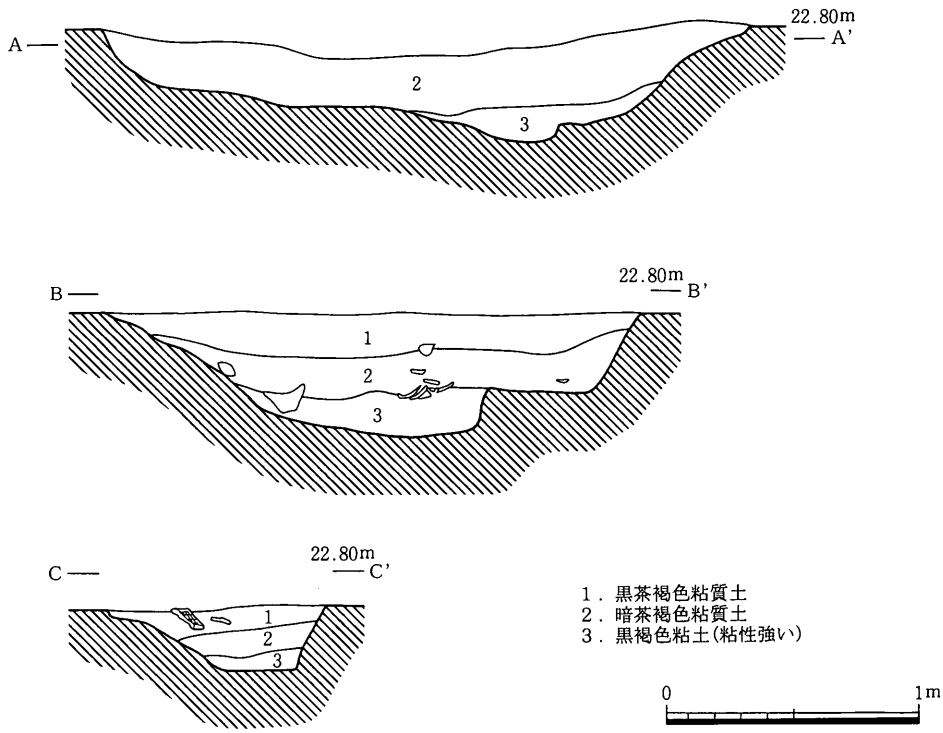
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
210	土・杯	15.0			微・普	良好	浅黄	不明	不明		
211	土・杯	14.8	4.3	7.4	中・普	良好	橙～灰	不明	不明		
212	須・杯	10.0	5.0	5.8	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
213	土・椀	16.0			細・少	良好	浅黄橙	不明	不明		
214	黒A・椀			4.8	細・普	良好	黒褐・浅黄橙	ナデ	不明		

第451図　E区SD17・18出土遺物（1／4）

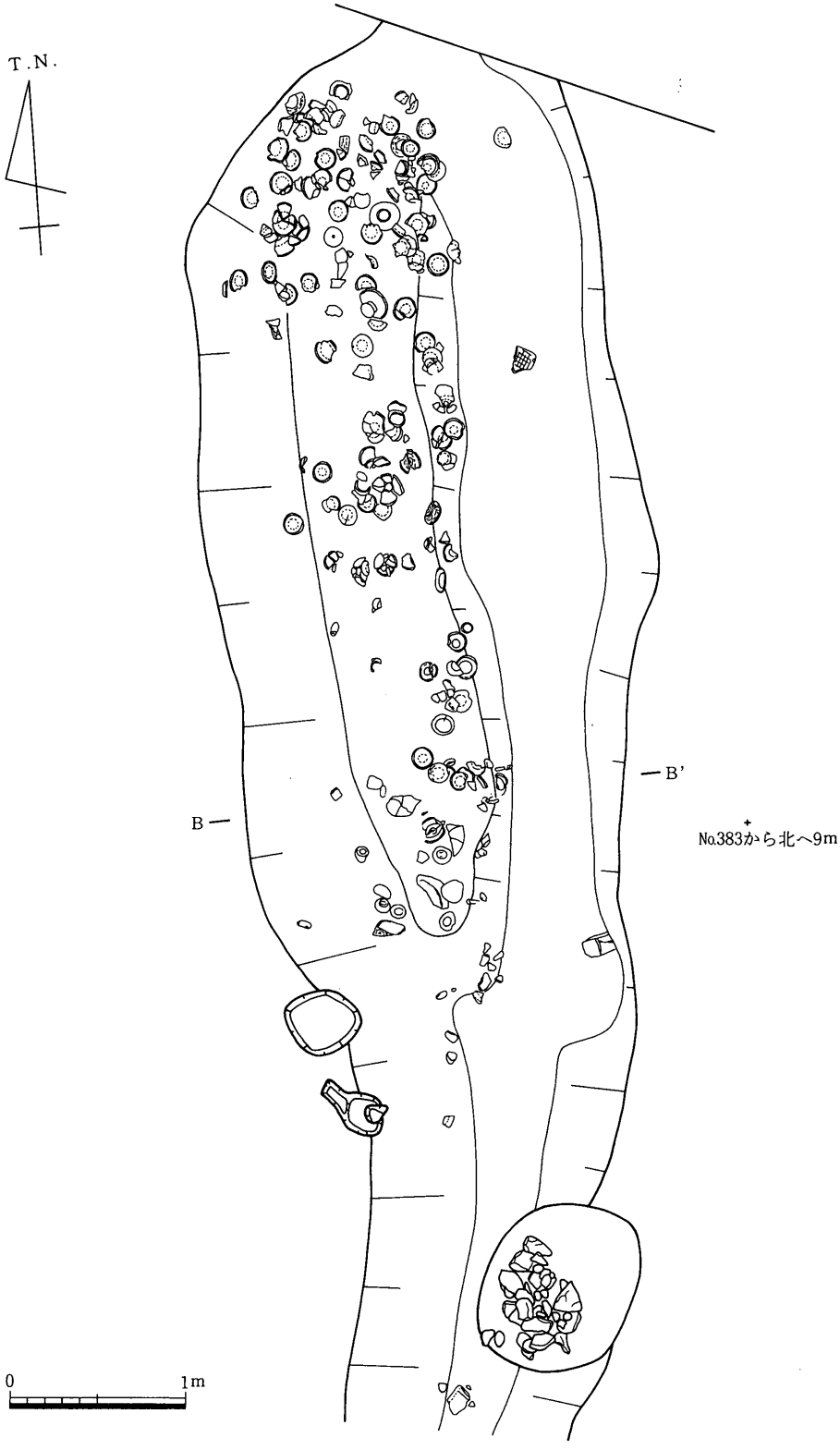
る。214は黒色土器A類の椀で断面方形に近い低くつぶれた高台を貼り付けている。

SD19（第452～466図，図版64）

E5区の中央部で検出した南北方向の溝である。調査区内で21mほど検出し，溝の南半分は同じ幅で直線的に延びるが，中央から北半分は幅が広がって緩く屈曲している。南半分は幅85cmで深さ25cm前後となっており，断面形は逆台形に近い。これに対し北半分は幅2～2.5mほどで深さは40cm前後である。溝の東側は段状に掘り込んでおり，東側がテラス状になっている。埋土の最下層には粘性の強い黒褐色粘質土が堆積している。溝の方向



第452図　E区SD19断面図（1／30）



第453図　E区SD19遺物出土状況（1／40）

はおよそN－10°－EでE５区の掘立柱建物群の主軸に一致あるいは直交する。このことからこれらの掘立柱建物群に伴う区画溝としての機能をもったものと考えられる。北半分の部分で多量の土器・瓦類が出土したが，南半分では遺物は少なかった。遺物は最下層の黒褐色粘土層の上部から土器・瓦を中心に多量に出土した。

215・216は皿で浅い体部に高台が付くものである。体部の器高と脚部の高さが等しくなっている。

217～349は土師器杯である。217～310は口径が11cm前後のものである。このうち217～242は底部から体部への立ち上り部が明瞭で，体部が直線的なものである。底部外面はヘラ切りのままのもの，ヘラ切りの後にナデを施すもの，ヘラ切りの後に板状圧痕を施すものとがある。223は体部中央に沈線が１条巡っている。240は体部内面がナデにより窪んでいる。243～257は底部から体部への立ち上り部が明瞭で，体部にはナデにより凹凸が生じているものである。245・247・248・252～257は体部にナデを２段施している。254は底部は破片で解りにくいが糸切りの可能性がある。258～296は底部から体部への立ち上り部は丸味を帯びており，体部が直線的なものである。272は器壁が全体に薄くなっている。273は体部内面がナデにより凹凸が生じている。282・283は器高が低く皿に近くなっている。277・281・286・291・292は底部が丸味をおびており安定が悪く，特に281・286・291は全体に歪んでいる。297～309は底部から体部への立ち上り部は丸味を帯びており，体部にはナデにより凹凸が生じているものである。298・300・301・302・306・309は，体部にナデを２段施している。302は口縁部端部は肥厚し外反している。304は底部から体部全体を一気に引き出しているようである。

311～332は口径が12～13cm位のものである。311・312は器高が低く皿状になっており全体に整った形をしている。313～324は底部から体部への立ち上り部が明瞭なものである。316は体部を２段にナデている。320は体部は内湾し，底部は肥厚している。325～332は底部から体部への立ち上り部が丸味を帯びているものである。330は体部下半が強いナデのため器壁が薄くなっている。332は全体に歪んでいる。

333～338は底部が削出し高台状に突出しているものである。いずれも回転台により成形している。336は高台状の底部がつぶれている。337は体部中程と立ち上り部の器壁が薄くなっている。

339～343は足高の脚部が付くものである。343は杯部は不明であるが，他は脚部高と杯部の器高が同じか，やや杯部のほうが高くなっている程度のものである。341は杯部は回